

日本學報

■ 企劃세미나 「韓國과 日本 -100年の 回顧, 100年の 展望-」 論考 및 講演

• 儒教的近代について	宮島博史	1
• 日本のナショナリズム	松本健一	17
• 国民帝国・日本の編成と統治文化の連鎖	山室信一	33
• 日露戦争史再考	稲葉千晴	49
• 朝鮮總督府官僚の任用制度と俸給制度	岡本真希子	61
• 帝国日本の植民地金融政策	多田井喜生	91
• 韓国植民地時代の教育政策と教育実態	片桐芳雄	103

• 協働学習におけるグループ編成に関する考察	倉持香	115
• 「させる」と「시키다」の意味的な関係及びその背景	金庚洙	127
• 日韓両言語における状態記述二次述部	金英淑	139
• 文化化理論を応用した日韓語の文末形式に関する対照研究	金廷珉	153
• 話しことばにおける韓日の「呼びかけ」表現の対照的考察	羅福順・長谷川香摘	165
• 平田篤胤와 『訓蒙字會』	関丙燦	183
• 要求・依頼を表す複合辞「~てほしい」の通時的研究	安志英	197
• 잉여적 선택성에 기초한 「なさる」와 「される」의 사용상의 기준	李成圭	209
• 日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について	磯野英治	227
• 비언어적 커뮤니케이션 기제로서의 이모티콘 사용 및 번역에 관한 연구	崔少榮	241
• 일본어 동경방언과 한국어 대구방언의 음조에 대한 악센트론적 고찰	辻野 裕紀	253
• 韓國人に 의한 日本 近現代文學 研究의 過去・現在・未來 照明	權赫建	263
• 일본어잡지 『조선(朝鮮)』(1908)의 역사물(歷史物)과 한국 표상	金靑均	281
• 内村鑑三의 「天然」觀	尹福姬	297
• 무라카미 하루키(村上春樹)의 『노르웨이의 숲(ノル웨이의 숲)』 연구	趙柱喜	311
• 〈記憶〉의 反轉	黄益九	323
• 芭蕉의 俳諧世界에 影響した 莊子の 「物」에 關する 考察	許 坤	339
• 에도후기 메이쇼에(名所繪)에 담긴 종교적 표상의 의미	김애경	351
• 한일문화교류와 「아시아 아이덴티티」	金弼東	367

<투고규정/논문작성요령> <한국일본학회 연구윤리규정>



韓國日本學會

2010 · 8

<http://kaja.or.kr>

日本學報

目次

第84輯

■ 企劃세미나 「韓國과 日本 -100年の 回顧, 100年の 展望-」 論考 및 講演

- 儒教的近代について 宮島博史 1
 - 日本のナショナリズム 松本健一 17
 - 国民帝国・日本の編成と統治文化の連鎖 山室信一 33
 - 日露戦争史再考 稲葉千晴 49
 - 朝鮮總督府官僚の任用制度と俸給制度 岡本真希子 61
 - 帝国日本の植民地金融政策 多田井喜生 91
 - 韓国植民地時代の教育政策と教育実態 片桐芳雄 103
-
- 協働学習におけるグループ編成に関する考察 倉持香 115
 - 「させる」と「시키다」の意味的な関係及びその背景 金庚洙 127
 - 日韓両言語における状態記述二次述部 金英淑 139
 - 文法化理論を応用した日韓語の文末形式に関する対照研究 金廷珉 153
 - 話しことばにおける韓日の「呼びかけ」表現の対照的考察 羅福順・長谷川香摘 165
 - 平田篤胤와 『訓蒙字會』 関丙燦 183
 - 要求・依頼を表す複合辞「~てほしい」の通時的研究 安志英 197
 - 잉여적 선택성에 기초한 「なさる」와 「される」의 사용상의 기준 李成圭 209
 - 日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について 磯野英治 227
 - 비언어적 커뮤니케이션 기제로서의 이모티콘 사용 및 번역에 관한 연구 崔少榮 241
 - 일본어 동경방언과 한국어 대구방언의 음조에 대한 악센트론적 고찰 辻野 裕紀 253
 - 韓國人に 의한 日本 近現代文學 研究의 過去・現在・未來 照明 權赫建 263
 - 일본어잡지 『조선(朝鮮)』(1908)의 역사물(歷史物)과 한국 표상 金青均 281
 - 内村鑑三의 「天然」 觀 尹福姬 297
 - 무라카미 하루키(村上春樹)의 『노르웨이의 숲(ノルウェイの森)』 연구 趙柱喜 311
 - 〈記憶〉의 反轉 黄益九 323
 - 芭蕉의 俳諧世界에 影響した 莊子の 「物」 に関する 考察 許 坤 339
 - 에도후기 메이쇼에(名所繪)에 담긴 종교적 표상의 의미 김애경 351
 - 한일문화교류와 「아시아 아이덴티티」 金弼東 367

企劃세미나
「韓國과 日本 -100年の回顧, 100年の展望-」
論考 및 講演

- 儒教的近代について— 21世紀東アジア研究のパラダイム— …………… 宮島博史 1
- 日本のナショナリズム— 天祐峽から韓国併合まで — …………… 松本健一 17
- 国民帝国・日本の編成と統治文化の連鎖 …………… 山室信一 33
- 日露戦争史再考— 戦争の性格・目的・責任— …………… 稲葉千晴 49
- 朝鮮総督府官僚の任用制度と俸給制度— 朝鮮・台湾・本国、交錯する法域と民族—
…………… 岡本真希子 61
- 帝国日本の植民地金融政策— 「紙でやった戦争」の1コマ — …………… 多田井喜生 91
- 韓国植民地時代の教育政策と教育実態 …………… 片桐芳雄 103

日本語學/日本語教育

- 協働学習におけるグループ編成に関する考察 倉持香 115
- 「させる」と「시키다」の意味的な関係及びその背景 金庚洙 127
- 日韓両言語における状態記述二次述部 金英淑 139
- 文法化理論を応用した日韓語の文末形式に関する対照研究 金廷珉 153
- 話しことばにおける韓日の「呼びかけ」表現の対照的考察 羅福順・長谷川香摘 165
- 平田篤胤와 『訓蒙字會』 関丙燦 183
- 要求・依頼を表す複合辞「～てほしい」の通時的研究 安志英 197
- 잉여적 선택성에 기초한 「なさる」와 「される」의 사용상의 기준 李成圭 209
- 日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について 磯野英治 227
- 비언어적 커뮤니케이션 기제로서의 이모티콘 사용 및 번역에 관한 연구..... 崔少榮 241
- 일본어 동경방언과 한국어 대구방언의 음조에 대한 악센트론적 고찰 辻野 裕紀 253

日本文學

- 韓國人에 의한 日本 近現代文學 研究의 過去・現在・未來 照明 權赫建 263
- 일본어잡지 『조선(朝鮮)』(1908)의 역사물(歷史物)과 한국 표상 金青均 281
- 内村鑑三의 「天然」觀 尹福姬 297
- 무라카미 하루키(村上春樹)의 『노르웨이의 숲(ノルウェイの森)』 연구 趙柱喜 311
- 〈記憶〉의 反轉 黃益九 323
- 芭蕉의 俳諧世界에 影響した 莊子의 「物」에 關する 考察 許 坤 339

日本學

- 에도후기 메이쇼에(名所繪)에 담긴 종교적 표상의 의미 김애경 351
- 한일문화교류와 「아시아 아이덴티티」 金弼東 367

儒教的近代について

ー 21世紀東アジア研究のパラダイムー

宮島博史*

miyajima@hanmir.com

<要旨>

本稿はこれまでの東アジア歴史研究において支配的なパラダイムであった西欧中心史観とその垂流である日本中心史観を批判し、それに代わる新たなパラダイムを模索しようとするものである。その新たなパラダイムの中心的な概念は儒教的近代というものである。儒教的近代は、朱熹の思想を近代思想としてとらえるとともに、明清時代の中国社会を儒教的近代として把握すべきことを主張するものである。そして、儒教的近代の影響を深く受けた韓国やヴェトナムなど諸地域の「伝統社会」も儒教的近代との関連の中で把握すべきことを論じる。

キーワード： 儒教的近代、朱熹思想の近代性、中国化、東アジア近世論

はじめに

「韓国併合」が強行された1910年と現在を比較すると、世界と東アジアの状況の大きな変化に驚かざるをえない。100年前は欧米の主導する世界秩序の中で、西欧的近代化の道に一步先じた日本が、東アジアの中の西欧として、東アジアの中心的な地位を固めていた時期であった。それに対して、台湾と韓国は日本の植民地となり、また中国も清朝がまさに滅亡寸前の状態にあって、列強の侵略の前に瓜分の危機に直面していた。100年後の現在は、中国がGDPで日本を追い越そうとしているだけでなく、遠からず世界第一の経済大国になることが確実視されている。韓国と台湾も経済的近代化と政治的民主化に成功して、日本を激しく追い上げている中で、日本はといえば、戦後はいじめて政権交代が実現されたとはいえ、社会的な混乱が続いている。

このような100年間の変化を前にして、これからの東アジア研究はどうあるべきであるのか、根本的な省察が必要であることは、多くの研究者が感じていることであろう。しかしパラダイム転換の必要性を認識することと、新たなパラダイムを提示することとはまったく別の次元の問題である。近年、東アジアを主題にした著書や論文集の刊行があいついでいるだけでなく、研究者あるいは市民による国際シンポジウムなどがさかんに企画、開催されている。しかしその内容といえ、従来の認識に根本的な反省をせまるようなものは稀であり、安易な時流

* 成均館大学 教授

便乗であるとしかいわざるをえないものが大部分である。

本稿は、韓国史研究者の立場から、新しい東アジア研究のパラダイムを築くための一つの仮説的提案を行うことを目的としている。その仮説的提案とは儒教的近代という概念にもとづいて、東アジアの歴史を見直そうとするものである。そこでまず、なぜ儒教的近代という概念が重要であるのかを、これまでの東アジア史研究をふり返る中で、明らかにしておきたい。

2. これまでの東アジア史研究とその批判

1) 日本中心パラダイムとその批判

これまでの東アジア史研究においては、西欧中心主義とその変形である日本中心主義が支配的なパラダイムとして存在していたといえる。歴史研究における西欧中心主義とは、19世紀における西欧の優越的な地位を前提にして、その優位性を過去にまでさかのぼらせて歴史を研究する立場である。したがって、「近代」だけでなく、古代も中世も西欧の歴史を基準として、西欧以外の歴史を把握しようとするのが、西欧中心主義であるということである。こうした西欧中心主義を前提に東アジアの歴史を研究するのが、日本中心主義である。すなわち、東アジアの中でいち早く「近代化＝西欧化」に成功した日本の歴史を基準にして、東アジアの歴史を把握する立場が、日本中心主義といえる。たとえば、西欧のfeudalismを封建制と翻訳して、封建制の有無をもって日本と中国・韓国との違いを強調する日本史研究者に根強い傾向が、典型的な日本中心主義である。また逆に、こうした歴史理解を批判して、中国や韓国にも封建制の時代が存在したとする主張も、裏返しの日本中心主義であるといわねばならない。

20世紀の後半まで、東アジアの各国、各地域で西欧的近代化の実現が歴史的課題として認識されていた時代にあっては、こうした西欧中心主義も一定の役割を果たすことが可能であった。しかし西欧的近代化という課題が基本的に達成され、中国を中心とした東アジアの占める地位が劇的に高まるであろうことが確実に展望される21世紀において、従来のような西欧中心主義が時代の要請に合わないことは自明であるが、他方で、西欧中心主義に対する批判と反省の声が多いにもかかわらず、新たなパラダイムを具体的に提示することができていないのが現状である。儒教的近代という概念は、新たなパラダイムのためのたたき台としての意味をもつものである。したがって、儒教的近代論はなお不十分な部分をたくさんもっているが、活発な議論を喚起させることができれば幸いである。

2) 東アジア近世論とその批判

20世紀の後半になって、韓国や台湾などアジアの四小竜と呼ばれる国家や地域が目覚しい

経済成長を遂げるようになって、日本をアジアの例外とみなすことで成立した日本中心パラダイムは現実性を喪失することになった。さらに1980年代に入ると、中国も改革・開放政策のもとで急速な経済発展を始めたが、こうした中で台頭してきたのが、東アジア近世論である。東アジア近世論とは、論者によって多様に主張されていて、必ずしも明確な時間帯と内容をもったものとはいえないが、その代表的研究者の一人である岸本美緒の見解を中心にそれらの議論をまとめると、次のようになる¹⁾。

① 時期的には16世紀から19世紀半ばまでの時期を中世や近代とは区別される独自の性格をもった近世ととらえる、② 市場経済の発達や都市の成長など、共通の社会現象が観察される、③ 今日東アジアの「伝統」と考えられているものの多くがこの時期に形成されたものである、④ この「伝統」が19世紀半ば以降の近代にもさまざまな影響を与えることになった、以上である。さらに岸本は、東アジアだけでなく、同時期の東南アジアも近世としてとらえることができるとするだけでなく、西欧も含めて世界史的な一つの時代として近世を理解しているが、この点に関しては論者により意見が異なっていると見られる。

周知のように、中国史研究においては早くから近世という時代区分が提唱されてきた。内藤湖南を嚆矢として、宮崎市定に代表されるいわゆる京都学派の中国史研究がその典型であり、宋代以降の中国が近世として認識されてきた。また、米国でもフェアバンクが早くから、唐代中期以降をearly modernととらえていた²⁾。しかし現在の東アジア近世論は、中国だけでなく、東アジア全体の共通性に着目して主張されており、そこにかつての中国近世論との質的な相違が存在している。こうした東アジア近世論が、日本の中世や「近世」をアジアの中の例外ととらえてきた日本中心パラダイムに対する批判であることは明白である。

東アジア近世論が従来のパラダイムを批判し、新たな東アジア史像を提出していることは高く評価されるべきであると考えられるが、しかしこの議論も大きくみると、従来の世界史像を根本的に批判したものということとはできない。そのことを象徴しているのが、「近世」という時代呼称である。近世という時代を設定する理由は、上にも指摘したごとく、中世とも近代とも区別される独自の個性をもった時代という認識のゆえである。このことは、古代、中世、近代という歴史の三分法に立脚しながらも、三分法ではうまく収まらないために、近世という時代を独自に設けた結果生み出されたのが近世論であることを物語っている。さらに、宮崎や岸本に見られるように西欧史にも近世という時代を設定する場合、近世は世界史的な時代区分であるということになるので、従来の世界史のとらえ方と基本的な差異がなくなってしまうのである。

近世論のさらに根本的な問題点は、近世は近代ではないというその前提にあると考えられる。

1) 岸本美緒「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」『岩波講座世界歴史 13』、岩波書店、1998年。

2) 内藤虎次郎『支那論』、文會堂書店、1914年、宮崎市定『東洋的近世』、教育タイムス社、1950年、John K. Fairbank “East Asia; the great tradition” Houghton Mifflin, 1960。

つまり近世東アジアにおけるさまざまな変化を積極的に評価し、それを世界史的同時性（岸本）、あるいは世界史的先進性（宮崎）の表れと理解するとしても、それは結局は前近代なのであり、近代はやはり西欧の衝撃によって始まった、とする従来の枠組みそのものは揺るがないのである。したがって東アジア近世論は現在のところ、19世紀中葉までしか射程に入っておらず、それ以降の時期については、「伝統」が西欧近代受容の受け皿になったというだけで、近代史像そのものの再検討までには至っていないといわざるをえない。本稿は、東アジア近世論の成果を受け入れながらも、以上の問題点を克服するための方法として、これまで東アジア近世ととらえられてきた時代を、近代ととらえるべきことを提唱しようとするものである。

なお私は、以前に「東アジア初期近代論」を主張したことがあるが³⁾、この点についても一言言及しておかなければならない。初期近代論は、通常いわれる東アジアの「近世」と「近代」の連続性を強調することに力点をおいたものであったが、「初期近代」という言葉も、英語で表現すれば近世と同様にearly modernとなるしかない。さらに初期近代論を提唱した時点では、その近代である根拠、内実についてきわめて不十分なところがあったと反省している。本稿はかくして、初期近代論に対する自己批判としての意味をも有するものである。

3. 儒教的近代について

1) 近代という概念とその核心的意味

従来「近世」ととらえられてきた時代をなぜ近代と理解すべきなのかを論じる前に、近代というものについて予備的な考察を行っておきたい。そのことが、以下に主張する儒教的近代という概念提唱の意味を理解するうえで、助けとなると考えるからである。

「近代」という言葉は、19世紀末から20世紀にかけて、英語のmodern等の翻訳語として作られた言葉である。英語のmodernという言葉はラテン語のmodernusを語源としているが、modernusという言葉がはじめて登場するのは西紀5世紀の最後の10年間で、その意味はかつてのローマ帝国時代と区別して、キリスト教が国教化されて以降の時代、すなわち「今の時代」を指す言葉であったという⁴⁾。つまりmodern、近代という言葉は現在、あるいは現在と直接つながる時代という意味を本来もっているのであるが、本稿の儒教的近代という概念の近代も、この意味で使っている。

周知のように、西欧ではルネサンス以降を新しい時代＝modernと認識するとともに、その近代は輝かしい古代＝古典古代の復活であるという歴史意識が生まれ、そこから古代、中世、近

3) 宮嶋博史「東アジアにおける近代化、植民地化をどう捉えるか」、宮嶋ほか『植民地近代の視座』、岩波書店、2004年。

4) H. R ヤウス（饒田収訳）『挑発としての文学史』、岩波書店、1999年。

代という、歴史を三つの時代に区分して認識しようとする時代区分が成立した。したがって古代、中世、近代という三分法は、当時の西欧の現在認識と不可分のものとして成立したのである。本稿で西欧由来の近代という概念を用いるのは、この現在に直結する時代として近代をとらえるという立場が、歴史学のもっとも根底的な存在意義を示してくれるからである。すなわち、およそ歴史という知的営みは、現在を過去からの時間ののっぺらぼうな流れの中でとらえるのではなく、現在が過去のある時点で生まれたと認識することによってはじめて成り立ちうるものである。そうでなくて、現在を過去の単なる延長ととらえるのであれば、歴史というものが存在する必要はなくなるわけである。換言すれば、歴史研究においてもっとも重要なのは、近代と近代以前を区別することであるということになる。

こうした立場に立つとき、古代、中世、近代という三分法、あるいは近世を加えた四分法を東アジアの歴史に適用するという今日の一般的な時代区分法は、根本的に再検討されなければならない。なぜならば、三分法は西欧においては現在に対する認識と不可分のものであったが、それと同じ意味で、東アジアの歴史を三つ（近世論の立場では四つ）に分けることは、どのような現在認識にもとづいているのかが改めて問われなければならないからである。しかし現在に至るまでの時代区分論は、東アジア近世論も含めて、西欧の三分法に依拠したものに過ぎないのではないのか、そうした疑問を払拭できないのである。

以下に述べる儒教的近代という概念は、単に近代と近代以前の境界に関係するだけでなく、東アジアの歴史全体をどのような現在の観点からとらえるのかという、歴史全体に関する再検討を要求する概念であることを、あらかじめ明言しておきたい。

2) 中国理解の問題

儒教的近代という概念をここで提出するもっとも大きな動機は、中国の歴史と現在をいかにとらえることができるのかという問題と関わってである。現在の中国は経済的にも、政治・軍事的にも大国への道を進んでおり、遠くない将来、世界第一の経済大国になることが確実視されている。このこと自体は、18世紀末までの事態への復帰として、それほど驚くべきことではない。問題は、こうした経済的飛躍にもかかわらず、中国の政治や社会のあり方がいわゆる先進諸国のそれとはきわめて異質なものであるというところにある。

これまでの理解（「近代化」論、「世界システム」論、マルクス主義等々による理解）では、近代化が進めば基本的にどの社会でも収斂現象＝同質化が生じるものとされてきた。もちろん収斂だけでなく、近代化自体が分岐＝異質化をも生み出すこと（複数の近代）についても注意が払われてきたが、現在の中国をこうした収斂と分岐という枠の中で理解することは不可能でないのだろうか。中国自身も「現代化」のスローガンのもとに、先進諸国の制度などを受け入れることに努めているが、容易なことではないように見える。

それどころか、いわゆるグローバリゼーションが叫ばれている今日、むしろ世界の「中国

化」という現象について云々される事態まで生じている。この現象は、グローバル・スタンダードの名のもとに、あらゆる中間団体（国民国家までも含めて）を解体しようとする動きが進行する中で、中間団体の不存在という特徴を1000年以上保持してきた中国的現象（この点に関しては後述）がむしろ普遍化しつつあることの反映であると考えられる。ある論者はこうした事態を指して、「世界がやっと中国に追いついた」とまで表現しているが⁵⁾、いずれにせよ、今日の中国を理解する枠組みとして、従来の諸理論では決定的に不十分であることだけは確かである。儒教的近代という概念は、何よりも、こうした中国の現状と、現在に至る歴史的過程をとらえ直すことに、最大の眼目を置いたものである。

3) 朱熹の思想における近代性

儒教的近代という概念において、そのもっとも基底的な部分に該当するものは、朱熹思想の近代的性格である。改めていうまでもなく、朱熹あるいは朱子学に関してはこれまで膨大な研究が蓄積されてきた。にもかかわらず率直に言って、私自身はこれまでの朱熹、朱子学研究に対して何か隔靴搔痒のような感じを抱き続けてきた。私がこれまで提唱してきた「小農社会論」やそれをふまえた「東アジア初期近代論」においても、朱子学を、小農社会にきわめて適合的なイデオロギーであるという側面で位置づけることしかできなかったのも、朱子学に対してもうひとつ「腑におちない」ところがあったためであると、今にして反省している。

思想史を専門としない私が従来の研究に対して云々できる立場にないことは十分承知しているが、この感じの原因を突きつめると、次のような研究史の問題点が浮かび上がってくる。すなわち、従来の研究のほとんどが朱熹の思想そのものの研究というより、朱子学に関する研究であったということ、換言すれば、後の時代になって朱子学という壮大な思想体系としてまとめられたものをもって、朱熹の思想をとらえ、それを分析する方法が取られてきたことが、その問題点である。しかし垣内景子や木下鉄矢が述べているように、朱熹は決して朱子学者ではなかったのであり⁶⁾、朱熹自身の思想的営みを、彼が生きた現実との関わりの中で把握するという努力は、意外なほど行われてこなかったのではないだろうか。

こうした中であって私がここで注目したいのは、木下鉄矢の研究である。木下の朱熹研究は『朱熹再読』と『朱子学の位置』の2冊にまとめられているが、その主張の核心的部分と私が考えるのは、社会運営の経験に関する分析と、それが朱熹思想の中で占める重要性に関する部分である。少し長くなるが重要であるので、木下自身の文章を引用する。

魏元履の線に沿う限り、そこに備蓄される穀実は「里の名士」が「常平使者」に掛け合

5) 與那覇潤「中国化論序説：日本近現代史への一解釈」『愛知県立大学文学部論集』57、2008年。

6) 垣内景子『「心」と「理」をめぐる朱熹思想構造の研究』、汲古書院、2005年、木下鉄矢『朱熹再読：朱子学理解への一序説』、研文出版、1999年。

って得た「官米」であり、その限り、その施設はあくまでも「国家・皇帝」という保護者からの一方的な「恵み」配分の施設として機能し、したがって民の中に自立的なその運用に応じる倫理的意志があることを前提とはしないし、またそのような意志を育てもしない。すなわち「民間」という公共空間を魏元履の施設は切り開かないのである。

ここでは古来の言説に見る如く、民は「恵み」を文字通り有り難い僥倖として消費するだけの存在である。

一方、朱熹の「社倉」では、一年単位、夏・冬のリズムで、貸し出し・償還が行われる。飢饉に備える収蔵・備蓄の施設としてではなく、それはむしろ当地の生計を底支えする「協同融資組合」システムとして機能する。朱熹の言に、「社倉」は「市井惰游の輩」ではなく、「深山長谷に力穡・遠輸するの民」にかかる施設だと云い、また「山谷の細民、蓋蔵の積む無ければ」とも云うから、まさに当地の、たびたび襲い来る凶年にも耐え、投げ出すことなく稼穡に当たり、その生計を維持しようと日々辛辛苦苦している「細民」こそが「社倉」の行う貸し出し・償還の宛てであった。「細民」の側から見ると、自分たちの借り出し、そして償還が、この施設を支え、逆に翌年の自分たちの生計を支える「もとの」にもなっていくのであるから、きちんと償還するということは、自身の生計を含む地域諸世帯の生計への相互扶助的な責務でもあると意識されるところになる。このような経路を通じて、当地の世間に、日常的な、生活現場に直結した相互信頼、その相互信頼に応えんとする倫理的意志を育て、そこに「民間」という公共空間が実をもって息づき始めるのである。（中略）

逆しまに言うならば、「社倉」が成功するのは、そのような倫理的意志が当地の世間にすでに潜在し発露する限りにおいてであろう。乾道戊子（四年。一一六八）の冬、「民、粟を以て官に償わんと願ひ、里中の民家に貯え、將に輦載して以て有司に帰さんと議す」なる事件に出会う中で、朱熹は眼前の具体として生起し示されたその「民」にある潜在的可能性に触れ、「社倉」創設の基礎となる手応えを得たのではないだろうか⁷⁾。

朱熹の社倉がもつ画期的な意義をこのようにとらえたうえで、木下はその画期性を、「物権」意識の世界に対置して現れる「債権」意識の世界の新しさである、と解釈している。そしてこうした社倉運営の中で朱熹が感じた「手応え」が、朱熹のいわゆる「定論確立」の時期と重なっていることに注目しながら、次のような理解が示される。

「債権」のセンスは、貸し方、借り方、双方に、みずからの物権のうちにある物資を他方へ「動かす」ことを義務として課す。物権のうちに取り込んで固着してしまふのではなく、その物権意識を打破して物資を双務的に他方に「動かす」という意志の励起にこそ債

7) 木下鉄矢『朱子学の位置』、知泉書館、2007年、543-544ページ。

権意識のキーポイントがある。その限り、空間的にも、時間的にも、物資の物権的所在が端的に動的である意識世界を展開していく。

「社倉」について以上の如くまとめるならば、その経営ヴィジョンが、「天理流行」を基底事実と観じ、「感応（自己感応・対他感応）」を基礎に、世界を、そして人の「心」を「変易（化）の場」として捉え切る朱熹の哲学的ヴィジョン、また「私欲」への取り込みを打破する意志を励起し続けよと説く朱熹の倫理ヴィジョンと通底することは明らかであろう。（中略）

興味深いのは、崇安県における朱熹の「社倉」創設に到る経験の進行時期が、所謂「定論確立」なる語でよく知られる朱熹の思想の画期的な転轍の時期と重なっていることである。（中略）

「旧説」では「動き」の世界は「已発」に限られ、「未発」は「動き」の世界からは隔絶した、「未だ嘗て発したことのない」、つまり「動き」の世界へと開いたことのない、こちらには窺うことが遮断されている、いわば聖別されているテリトリーである。「新説」は、この「未発」という閉ざされていた聖域を「生生流行・一動一静」という止まらざる「感応」進行の「動き」へと組み入れ、開くのである⁸⁾。

木下は、以上のような社倉創設に至る中で朱熹が感じた「手応え」と、「已発」「未発」に関する理解の変更とが密接に結びついていることを指摘しながら、「朱子学はここに胚胎したと覚しい」と述べて、この時点を「朱子学」形成へと結果する朱熹思想の画期的転換点であるとしている。それでは、朱熹のこうした思想的転換は、どのような現実認識にもとづいていたのであろうか。木下はそれを、中国の現実に対するきわめて深刻な危機意識であったと見ている。

中国の現実を「タガがはずれた」状態ととらえ、春秋・戦国時代のように「田の畦のごとく、区切りがあってそこでタガを締めてあった」状態と比較しながら、そこに危機の原因があるとしながらも、「今の天下は、静かにそっとしておくだけ、揺り動かそうとしてはいけない。夷狄とて、やはり相手が大き過ぎて手を引くしかあるまい。ここに居座るのが中国の幸福ということだ」という『河南程氏遺書』に見える言葉を引きながら、木下はこうした絶望的ともいえる状況に対して、程伊川が「家礼」を作ることでタガを立て直そうとしたこと、朱熹の「家礼」がそれを継承するものであったことを指摘している。

このような木下の理解を私なりに解釈すると、「タガを締めてあった」かつての封建制の時代が、「タガがはずれた」郡県制に変わったことが危機の根本的原因であり、それを立て直すことが、程氏兄弟や朱熹の課題であったこと、その立て直しの一步として「家礼」の編纂とその実践が位置づけられていた、ということであろう。そしてここで注意しなければならないの

8) 木下同上書、546-549 ページ。

は、朱熹のその「立て直し」の方向が、かつての封建の時代に復帰することによって果たそうとするものでは決してなかったことである。

周知のように、中国ではその体制のあり方が議論されるとき、「郡県」と「封建」という枠組みの中で議論することが永く行われてきた⁹⁾。秦漢帝国以後の「郡県制」とそれ以前の「封建制」のどちらが優れているかという議論であるが、儒教では理想的な時代とされる三代が「封建制」の時代であったにもかかわらず、朱熹も含めて、「郡県制」を肯定したうえでの議論が圧倒的に優勢であった。これは「封建」時代のように共同体を基礎とした社会編成に対する根深い拒否感にもとづくものであったと考えられる。朱熹は「家礼」を編纂して、社会秩序の根幹に家のまとまりを据えようとしたが、しかし「家礼」で想定されている家は、高祖を共有する小さな集団であり、明代以降に形成されはじめる宗族のような大規模な父系血縁集団が想定されていたわけではなかった。

朱熹が目指した方向は木下が明確に指摘しているように、「債権」的な感覚を基礎に民間に「公共空間」を生み出すことを志向するものであり、社会の動的ダイナミズムを受け入れた上で秩序形成を行おうとするものであった。そしてここにこそ、朱熹思想の近代性のポイントがあると考えられる。

4) 朱熹の思想ヴィジョンと中国社会の共鳴関係

朱熹の思想を近代的なものとする本稿の立場は、その思想ヴィジョンにある近代性によるものであるだけでなく、彼の描く社会のイメージが、明清時代中国社会の現実ときわめて相即的であることにもよる。これまで明清時代の中国について膨大な研究が蓄積されてきたが、そこで描かれているのは、西欧の近代を基準とした場合、前近代的とも近代的とも判断することのできない独特の社会と国家のあり方である。その独自性をもっとも端的に見せてくれるものとして、「法」のあり方をあげることができる。中国法制史研究者である寺田浩明は、主に清代の「法」のあり方を念頭におきながら、次のように述べている。

伝統中国の民事裁判が、当事者に「情理にかなった解決」を与えることを目的として営まれていたことは、上に述べた通りである。そこで情理の名の下に実際に行われていたことは、両当事者の主張それぞれの根拠と、彼がそう主張せざるを得ない背景事情とを、公平な立場から評価して、罵倒し合う両者の間に適切な折り合いを見つけ、互助互譲の共存関係を回復すること、とまとめることができる。そして主張の根拠の方は自ずと種類に限られるにせよ、主張の背景事情の方は事案毎に千差万別である以上、そこで示される「情理にかなった」解決の具体的内容も事案毎に無限に異なった姿をとらざるを得ない。当然それを導き出す一律のやり方が有る訳もなく、今回の事案について具体的にどう処理するの

9) 張翔・園田英弘『「封建」・「郡県」再考：東アジア社会体制論の深層』、思文閣出版、2006年。

が果たして「情理にかなっている」のかは、個々の事案が持ち込まれる度毎に、裁く主体によってその都度一つ一つ考え出され、また語られる他はない。その意味では、ここにある裁きを「個別主義的」裁きと性格付けること自体に問題はない。

ただ、伝統中国の人々も、多くの現代人がそう考えるように、そのやり方では何が正しいかは結局は判断する人次第になる。即ち、個別主義的イコール「恣意的」だと考えていたかと問えば、その答えは否に傾く。「天下の公論」という言葉が典型的に示すように、むしろ伝統中国人達は、事案毎に様々な事情を考慮に入れてする総合的判断であっても、まともな人間が、公平な立場に立って一生懸命考えれば大体同じような結論に行き着くものである、或いは言い方を換えれば、どんな個別事案についても必ず「誰もが認める一つの正しさ」=天下の公論というものがある筈である、と考えていたように見える。ちゃんとした人はそれに服する筈だし、また服するべきである。彼らが求めるのは、そうした天下の公論であり、裁定者の「恣意」ではない。(中略)

つまりここでは、なるほど対象の扱い方・判断の内容に即して言えば無限に「個別主義的」な考え方が取られるが、その判断の社会的共有の側面について言えば、今度は、個別の事案それぞれ毎に天下の誰もが認める一つの正しさ=公論が存在し、正しい裁きではそれが語られる、というとてもなく「普遍主義的」な想定が懐かれているのである。そして、こうした普遍主義的な要素こそが、現実には単なる一個人の口から無前提的に出て来る個別主義的な判断を、社会全体が共通して懐く当否正義に関する判断、即ち「法」たらしめているのだと言うこともできる。

そこでその不安定さを吸収する社会的な装置が必要になる。上述した紛争解決の展開のあり方は、まさにその為の装置なのであり、その公論願望の受け皿として地方官から皇帝にまで至る官僚制機構が存在する。民間調停主体が不公平だと考えた人々は、より高い権威=公平有徳な主体を求めて、その地に一人の科挙官僚たる州縣長官に打官司し、また打官司後も、当該地方官が不公平だと思えば上司に上控し、そしてその官僚制的な階梯の遙か先に公平無私な皇帝が座っている。役所に行けば在地の人間関係に縛られない科挙官僚が、広い世界・そこに共存して生きる民の良識を代表して天下の公論を語ってくれるに違いない。逆に言えば、民の日々の振る舞いにおいては、天命を受けた有徳の皇帝と彼が任命した官僚達の見識と権威が取り敢えずは所与視され、それが秩序と制度の枠組みを提供する。

ただこの論理に従えば、その皇帝についても、本当に彼が公論を体現しているのかは同様に疑うことに属する。そして実際、現皇帝が公論を語り損ねてばかりいると、真正の公論を体現する別の主体が現れ、彼に代わって天命を受けるという「革命」の論理までが準備されている。皇帝の地位と雖も、ここでは決して天然自明の所与とはされていない¹⁰⁾。

10) 寺田浩明「伝統中国法の全体像：‘非ルールのな法’というコンセプト」、早稲田大学比較法研究所『比較と歴史のなかの日本法学：比較法学への日本からの発信』、2008年、584-586ページ。

ここに描かれている「法」のあり方は、西欧的な「法」とは異質な、したがって西欧的な観点を基準にして前近代的とか近代的と判断すること自体が不可能なものである。したがって19世紀末以降、現在に至るまで、中国においても西欧的な法の導入がはかられてはきたが、十分な成果をいまだにあげることができていない、という状況も、ある意味では当然のことであると思われる。そして西欧的な「法」のあり方自体の限界が強く意識されるようになったポストモダンの状況の中で、むしろ中国的な「法」のあり方が注目されるようになってきているのが現状であるといえよう。

同様のことは、たとえば黒田明伸が描く中国貨幣のあり方にもよく現れている。中国の貨幣制度に作用している基本的力学を、「空間的画一性と時系列の一貫性を維持しようとする王朝側の動機と、地域的多様性と状況に依存した可変性を志向する社会の側の動機との引き合い」と見て、「自律的な個別性と他律的な統一性、この一見矛盾する二つのベクトルの妙なる統合」に中国貨幣の特質を求めようとする黒田の理解は、寺田が描く中国「法」のあり方ときわめて相即的である¹¹⁾。もう一つだけ例をあげると、「所有」の問題においても類似した問題を発見することができる。明清時代の「所有」のあり方について、岸本美緒は次のように述べている。

中国において人々が所有するのは、対象物それ自体なのか、それとも何か別の観念で表すべきものなのであろうか。この問題が特に表面に出てくるのは、土地と人の場合である。明清時代の「一田両主」慣行を中心として、この問いへの回答を試みたのが、寺田浩明の「業」論である。寺田によれば、明清時代の土地法秩序において取引の対象となっているのは、実体としての土地でなく経営収益の対象としての土地（「業」）である。ある土地をめぐる収益方法がたまたま包括的であるとき、一田一主の状態となるが、同じ土地の上に複数の単位化した収益行為が安定した形で成立し、それぞれが独自に取引されるようになれば、一田に複数の「業主」が成り立ちうる。（中略）「中国近世物権法の世界においては「主」と呼ばれる時に、対象に対する領域的専有性、包括的な支配の存在はどうやら最初から含意されていないということでもある」。土地そのものを排他的に所有する単一の所有者が存在しないことは、「王土」論のコロラリーともいえるのである。

一つの土地の上に様々な「所有」の重なり合う、こうした状態は、近代的な一元的所有権の成立する以前の封建制度下の「重層的所有権」といったものを想起させるかもしれない。固定的身分制度と結合したこうした「重層的所有権」は、上級所有権をもつ領主と下級所有権をもつ農民との双方にとって、自由な経済活動を阻害する桎梏となったと考えられているとあってよいだろう。しかし留意すべきは、中国におけるこのような所有権の重層性は、所有者の自由な経済活動に規制を加えるというよりはむしろ、「人民ハ自由ニ如何ナル内容ヲ有スル契約ト雖モ之ヲ締結スルヲ得タルガ故ニ種々ナル私法的関係ノ存在ス

11) 黒田明伸『貨幣システムの世界史：＜非対称性＞をよむ』、岩波書店、2003年。

ルヲ見ル」(『台湾私法』)と言われる如き「自由」な民間慣行の中で展開してきたものだ、ということである。土地そのものに対する排他的な所有権観念の不存在は、土地の上に成立する様々な収益行為が処分可能な単位として転々と売買される、流動的な土地市場を生み出す。そしてその流動性が特に社会問題を起こさない限りは、人々の「自由」な契約関係は政府によっておおむね容認されていたのである。(中略)

所有とは、人と物との関係であると同時に、人—物関係をどのように相互に調整するか、という人—人関係の問題であるが、中国におけるそうした人—人関係は、自己所有する平等な諸個人間の関係というよりは、開放的に広がる人倫関係の網の目のなかの人間相互の関係である。誰もがその網から自由ではありえない。あるいは強く、あるいは弱く他者からの制約を受けながら、同時にその範囲内で相当に自由な活動が行われ、その活動は「よき秩序」をめざして「全面的な視野から人間関係を調整する」官・民の営みによって支えられていた¹²⁾。

ここで描かれている「所有」のあり方は、木下が指摘する「債権」的意識と通底するものである。すなわち、所有対象を「物権」として取り込んでしまうのではなくて、土地から得られる収益をできるだけ多くの人が享有できるようにするために、一つの土地に対して複数の「業主」が存在し、それらは基本的に対等な立場に立つのである。

中国におけるこうした土地に対する権利のあり方は、19世紀末以降、日本が中国の領域内にあった地域を支配するようになり、そこで「近代的」土地所有の制度を導入する際に大きな問題となった。つまり、「近代的」土地制度が確立するためには一物一主の原則に従って、一つの土地の所有者は一人と決めなければならないわけであるが、「業」という存在がそれと抵触したのである。岸本の文章に見える『台湾私法』は、日本が台湾を植民地として支配することになったことをふまえて、台湾における旧慣、法のあり方などを調査した結果をまとめたものであるが、そこでもこうした「業」のあり方が問題とされたのである。そして以後も、「関東洲」や「満州国」など、日本の支配地域が拡大する中で、同様の問題に直面したのであるが、日本の基本的な方針は、「業」的な土地関係を前近代的で不合理なものにとらえ、一地一主の原則にもとづいて所有者を決定し、それに排他的な所有権を認めるというものであった。

こうした方針にもとづいて日本は、「近代的」土地所有制度を強引に確立しようとしたのであるが、そこではさまざまな問題が惹起された。「業」のあり方が希少な土地をできる限り多くの人々が利用できるようにすることを目的として形成されたものであったから、「近代的」土地所有制度はそれを阻害し、土地資源の利用という面ではむしろマイナスの要因として作用したからであった。

12) 岸本美緒「土地を売ること、人を売ること：‘所有’をめぐる比較の試み」、三浦徹ほか『比較史のアジア所有・契約・公正』、東京大学出版会、2004年、25-30ページ。

こうした現象は、西欧的近代というものに対する認識の再検討を要請するものである。すなわち、西欧の近代は、通常イメージされているように、共同体を解体して個人を析出する過程として理解されべきではなく、むしろ共同体を基礎にして構築されたものと理解されなければならないということである。それに対して中国は宋代以来、共同体に依拠することなしに社会をいかに構成しようかという課題に千年以上取り組んできた経験を有しており、「業」のあり方はこうした課題に対する優れた対応策だったのである。むしろ、西欧や日本においては「近代的」土地所有権がその所有権の排他性ゆえに多くの社会的問題を惹き起こす中で、所有権に対する社会的制約を課すようになる過程で形成されてくる「現代的」土地所有制度を先取りしていたものとして「業」をとらえることができるのであり、もともとポストモダンだったということになる。

5) 中国理解の新しいパラダイムと「近代」中国理解

これまで「伝統」時代と理解されてきたアヘン戦争以前の中国を、近代という概念で理解すべきであるという本稿の主張は、以上に述べたような中国社会のあり方の問題とともに、もう一つ、中国を取り巻く国際関係の面に関する問題をも含むものであるが、ここでは紙数の関係上、この問題に関しては捨象せざるをえない。私の理解の基本的な部分だけを述べておけば、南宋末における朱熹の登場、モンゴル帝国という超広域的かつ超開放的な体制の成立を経て、その超開放性に対する反動として成立する明王朝の成立を中国における近代の成立ととらえる、ということであり、国際関係においても、ポストモンゴル時代は、それ以前とは質的に異なるものになったと理解している。これらのことについては、別の機会に論じることにしたいが、中国近代に関する以上の理解を前提にして、従来の時代区分による「近代」以降の中国に対して、ひとこと言及しておきたい。

アヘン戦争以後の中国では、洋務運動にはじまって、現在の改革・開放政策に至るまで、西欧の思想や科学・技術、国家と社会の体制を受容して自身を変革しようとする動きが絶えることなく続いてきた。しかし150年に近い努力にもかかわらず、それはいまだに未完のものと認識されている。こうした認識は、アヘン戦争以前の中国を、前近代、伝統時代、封建専制時代、等々のさまざまな名称の違いこそあれ、西欧よりも遅れた社会とする認識にもとづくものであった。

しかし、本稿の立場のように、明代以降を近代ととらえ、西欧の近代と対等のものと理解するならば、「近代」中国に関してもまったく異なる像を描くことができる。中国における西欧近代の受容がかくも困難であったのは、中国が遅れていたからでは決してなく、中国には別の近代がすでに存在していたのであり、共同体等の中間団体の存在を否定した中国の近代が、共同体を基礎とした西欧近代を受け入れることができなかつたのだということになる。そして、西欧近代がグローバリゼーションの理念のもと、一切の中間団体、さらには国民国家さえもが

否定されようとする事態が進展する中で、裸の個人を基礎として社会秩序をいかに形成するかが課題として意識されるようになるにつれて、実はこの課題が、中国が千年以上格闘してきた課題であったことが気づかれるに至ったと見ることができる。もちろん、中国がこの課題を解決したということとはできないのであり、西欧起源の制度、法など、多方面にわたる西欧受容の努力が必要であることは言をまたないが、他方、欧米や日本などの諸国も中国の歴史経験から学ぶことが切実な現代的課題として提起されているわけである。そうした意味において、近年になってはじめて、中国的な近代と西欧的な近代の間に対等な議論が成り立つ状況が形成されつつあるのではないだろうか。

4. 東アジアの儒教的近代

以上のように中国を理解するとき、従来「近世」ととらえられてきた時代の東アジアについても、やはり近代という立場からとらえ直すことが必要になる。なぜならば、中国で近代が成立する明代初期は、朝鮮やヴェトナムでも朱子学を理念とする国家体制の確立が目指されたからである。東アジアの儒教的近代に関しては、これまた紙数の関係で、ここでは概略的に述べざるをえない。

東アジアの儒教的近代という問題を考える際には、二つの観点から考察する必要があると思われる。その一つは、先に木下の議論によりながら述べた朱熹の思想が、中国以外の地域でどのような思想として受容されたかという問題である。朱熹が目撃していた現実、あくまでも中国の現実であり、したがって、中国でない地域の人間が朱熹の思想、あるいは朱子学を受容しようとするとき、中国の現実との関係の中でその思想を理解することは、最初から不可能なことであった。特に、朱熹思想の根底にある「債権」的な社会関係に関する感覚が現実的なものでなかった社会に生きる人が、朱熹のこの感覚を理解しようするのは無理であったといわねばならない。

このことは、朝鮮やヴェトナムのごとく、朱子学を外來思想として受容した場合に限られる問題ではなく、もしかすると、中国においても同様の問題があった可能性がある。朱熹の思想が朱子学として体系化されていく過程において、朱熹の現実感覚が後世の人たちにどこまで共有されたのかは、別に吟味しなければならない問題であるからである。

そのことはさておき、中国のように市場経済の高度な発達という条件を欠いていた他の東アジア地域において、朱熹思想の動的側面が気づかれず、その朱子学としての体系性が主として注目されるとしたら、そこから構想される社会のイメージはまったく異なるものとなるであろう。それは過去の問題であるだけでなく、たとえば丸山眞男の朱子学理解にその典型的な例をみることができる。したがって、東アジアの儒教的近代の問題を考える際には、朱熹、あるいは朱子学のどういう側面が受容されたのかということをも基準にして、中国も含めて比較検討

することが必要であろう。「債権」的意識の問題は、その比較においてポイントとなるであろう。

この問題が、朱熹思想の受容されにくい部分であったとすれば、もう一つの問題は、それにもかかわらず朱子学が受容されることによって、近代として理解されなければならない現象が東アジア規模で生じることになった、という問題である。特に、科挙制度の導入と、科挙官僚による官僚制的国家体制をとった朝鮮やヴェトナムにおいてこうした現象が顕著に現れた。

このような二つの側面から東アジアの儒教的近代をとらえる場合にどのような歴史像を描くことができるのかに関しては別の機会に譲らざるをえないが、朝鮮時代の科挙のあり方、それと深く結びついた兩班の存在様式、さらには身分制の独特の様相などに関しては、これまでもある程度私の見解を述べたことがある¹³⁾。また、木下のいう「債権」的意識の問題と関わっては、朝鮮時代、特にその後期になって無数といいいいほどに結成された多様な「契」という組織の存在などが、とても気にかかるところである。

科挙制度や官僚制的な支配体制の受容は行われなかった日本ではあるが、やはり日本に関しても東アジアの儒教的近代という視点から検討されるべき課題が多数存在するものと思われる。つとに宮崎市定が指摘したことがあるように、「日本中世における近世的性格」、あるいは「中世的近世」などの問題がそれである¹⁴⁾。私は宮崎のように、日本の一国史的時代区分には賛成しないが、この指摘はその後の日本史研究において本格的に検討されてこなかったのではないだろうか。

5. 朝鮮史の位置

儒教的近代という概念にもとづいて、中国の明代以降を近代ととらるとすれば、朝鮮は、その儒教的近代をもっとも積極的に受容しようとした歴史を有している。それだけでなく、19世紀後半以降、日本を通して西欧的近代を経験することになったし、1945年以降は西欧的近代の変形（あるいは発展？）と叫ぶ米国的近代をも深く経験した。同様の事態は、ややその内容を異にするとはいえ、ヴェトナムと琉球＝沖縄においても生じた。

先に指摘したように、西欧的近代と儒教的中国の近代が対等に向かい合う条件が、今日をはじめ形成されつつあると理解するならば、両者を歴史的に経験したこれら諸国・地域の歴史的経験は、きわめて貴重なものであると思われる。朝鮮史研究者としての私には、こうした観点に立った研究を行うことがもっとも緊要な課題ではないか、そのように自覚したい。

13) 宮島博史「조선시대의 신분, 신분제 개념에 대해」、成均館大学校大東文化研究院『大東文化研究』42、2003年、同「조선 후기 지배계층의 재생산구조: 비교연구를 위한 초보적 탐구」、高麗史学会『韓國史學報』32、2008年。

14) 宮崎市定『アジア史概説』、中央公論社、1987年。

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

日本のナショナリズム

— 天佑侠から韓国併合まで —

松本健一*

<要 旨>

日本の右翼は大阪事件の挫折からはじまり、黒龍会を組織する道程をたどる。その中間過程で媒介する団体が天佑侠である。天佑侠は朝鮮で東学党を助けて、朝鮮を清国から独立させるという目的で朝鮮で活動した。本稿では天佑侠の会員で黒龍会の組織に関係する内田良平と吉倉汪聖の朝鮮改革運動との関わりを検討する。そして日本の初期右翼は他国のナショナリズムを正面から受け止める要素をもっていたを論証する。

キーワード： ナショナリズム、天佑侠、内田良平、初期右翼

I. 天佑侠と東学党の乱

日本の右翼が成立したのは、明治の自由民権運動の敗北というこの時代の支配的感情であった絶望と無縁なものたちが、大阪事件（朝鮮改革運動 1885年）の挫折をのりこえんとしたところに兆すのである。それが一方では、たとえば明治二十七年（1894年）の天佑侠であった。これに加わった内田良平は明治七年生まれであるから、このとき二十歳である。

明治二十七年、朝鮮に東学党の乱がおこった。東学というのは、キリスト教およびヨーロッパの科学を西教とよんだのに対する名称で、民族的宗教の意である。儒仏道を合わせたような単純な新興宗教で、その現世利益的色彩のゆえもあって、朝鮮全道に急速に広まった。ところが、特権階層の両班を中心とする支配階級は、これを弾圧したから、東学党は「斥倭洋」「階級打破、輔国安民、人権伸張」を掲げて、全羅道に反乱をおこした。天佑侠は、この東学党を助けるために、釜山に事務所をもつ大崎正吉や、かれと『二六新報』で同僚だった鈴木天眼が、頭山満らに働きかけ、玄洋社から内田良平と大原義剛を参加させ、ほかからも数人が加わって、総勢十四名で結成された。

この天佑侠の目的は、簡単にいえば、東学党を援助することによって、清国に隷属して蒙を啓くことのない韓国政府と、多年韓国に巢喰う清国政府とに、「鉄槌」を加えることにあった。とすればこれは、大井憲太郎らが朝鮮改革運動で、金玉均らの独立党を援助しようとしたのと同じ思想によっていた。のみならずそれは、内村鑑三が日清戦争を義戦と据えた論理にも通じていた。内村の義戦の論理とは、日清戦争が朝鮮の独立と清国政府に覚醒を促

* 麗澤大学 教授

す目的のものである、というものだった。むろんこれは、内村が征韓論に対して抱いている考えかたの延長上にある。内村は『日本および日本人』（『代表的日本人』の初版）に、征韓論について書いている。

「西郷の征韓論が、もし実行に移されていたら、国民は、多く血を流し、複雑な対外関係の渦に巻き込まれたことであろう。だが、この企ては同時に、多くの健全な効果を、国民にもたらしたであろうことを、私は疑わない。西郷の計画が斥けられたことにより、国民は、物を得て、精神を失った。そして、どちらの道を選ぶべきであったかは、未来が判定するであろう。」

もちろん、天佑侠が大坂事件の延長上にあり、大坂事件が征韓論を革命論において受け継いだものだからといって、天佑侠に加わった内田良平が内村鑑三と同じように征韓論を捉えていた、などと論理づけるつもりはさらさらない。それに、内田はいわば壮士といったかたちで天佑侠に加わったのであって、いまだ思想家として自立してはいない。ただ、数年後に黒龍会を組織し、西郷の精神的子孫を意識する時点での、内田の理念としての征韓論は、内村鑑三の説くようなものであったはずである。

というのは、天佑侠は朝鮮で東学党を助けて、豪傑的な活躍をし、その結果、三カ月後の明治二十七年八月に、日清戦争をひきだす一因となった。そしてその日清戦争は、内田にとって、清国政府の蒙を啓き、朝鮮を清国から独立させるという目的において、まったくの義戦であった。内田はかくして、大坂事件を実際行動によって総括したのであった。

II. 右翼の黒龍会と左翼の社会民主党

さてしかし、大坂事件の挫折の克服は、まったく別の方向からもなされようとしていた。内治改良の契機を社会主義に求めようとする幸徳秋水の動きが、これである。幸徳は明治四年生まれであるから、明治三十年に社会問題研究会に加わったとき、二十六歳である。社会問題研究会じたいは、二十五年末に設立されており、これには兆民の高弟にあたる酒井雄三郎や小島龍太郎らが加わっていた。しかし、設立はされたものの、べつだん運動といったものは何もなく、自然解消といった状態にあった。

これを復活させて、社会変革の動力にしようとしたのが、樽井藤吉や中村太八郎や西村玄道らである。樽井が『大東合邦論』（1893年）の著者であるとともに、東洋社会党（1882年）の組織者であり、過去に社会主義の日本的展開を実践しようとした人物であることが、このさい重要である。社会問題研究会の再発足が三十年四月で、会員には、さきの酒井・小島のほかに、大坂事件の稲垣示、政教社グループの陸羯南・三宅雪嶺らが加わっていた。そして

ここに、三十年代における社会主義運動の中心的推進者である幸徳と片山潜が加わっていたことに、より注目すべきであろう。

だが、幸徳と片山はこの会が雑多な思想の集合であることに満足できず、ここから社会主義研究会を独立させることになる。三十一年十月のことである。社会問題研究会がやろうとしていたことは、大井憲太郎が二十五年に発足させた東洋自由党において、労働問題・小作問題・普通選挙問題を考究したのと、さして変わりがなかった。けれど、幸徳らは新たに、それを社会主義によって解決せんとする新機軸を打ちだしたのであった。

いま、その機軸の当否は問わない。ただ、この幸徳らの動きによって、体制補完物たるの途を拒まんとして、なお体制を変革するに足る思想的契機を見出せなかった自由党左派（大井や兆民）が、ひとつの方向を与えられたことは、たしかであろう。社会主義研究会は、「社会主義の原理と之を日本に応用するの可否を研究する」こと、を目的として設立された。ここには、社会主義に関心をもつ人びとが集まった。

しかし、そのなかで社会主義的変革をめざそうとする部分は、三十三年一月に、新たに社会主義協会をつくることになる。会員は幸徳、片山、そして安部磯雄、河上清ら。これに西川光次郎や木下尚江のちに参加し、ここに明治三十四年五月の社会民主党の基盤ができあがった。つまり、内田良平らの天佑侠が、大阪事件を実際行動として追求することによって総括したのに対して、幸徳秋水らはその「内治改良」の契機を、社会主義において求めようとしていたのである。

とはいえ、このふたつの動きが時代の表面に顔をだすのは、明治三十四年、すなわち二十世紀幕開けの一九〇一年のことである。そして、まさにこのふたつの動きが出揃ったとき、日本の右翼と左翼の位置は確定されたのであった。右の黒龍会（二月三日発足）と、左の社会民主党（五月二十日発足）とが、これである。

むろんこの組織名は、黒龍会の主幹であった内田良平と、社会民主党の実質的中心人物であった幸徳秋水という、人物名に置き換えうるだろう。また、この人物名は、かれらの著書の『露西亜亡国論』（三十四年九月刊、発禁。十一月改訂のうへ『露西亜論』と改題）と、『二十世紀の怪物・帝国主義』（三十四年四月刊）とに、置き換えることもできよう。ともあれ、その組織名は人物名と思想との連想をよびおこしたうえで、右翼と左翼の対極をかたちづかったのである。

この左右の拮抗に対して、権力のリベラルがとった態度はまず右の『露西亜亡国論』を発禁にすることだった。葦津珍彦ら右翼の道統をひく思想家は、『露西亜亡国論』が発禁になり、『二十世紀の怪物・帝国主義』がその年のうちに再版三版を重ねたことをもって、当時の伊藤博文を中心とする支配階級に対して反体制的だったのは右翼のほうであった（『武士道』）、と説くことになる。

しかし、事柄はそう簡単ではない。リベラルは、ほぼ同時に、左の社会民主党に即日結社禁止を言い渡すから、である。糸屋寿雄ら左翼を自任する論理は、社会民主党の禁止をもつ

て、伊藤内閣の圧制ぶりを憤ることになる（『幸徳秋水研究』）。しかしこれも、さきの『露西亜亡国論』の発禁を頭においたうえで、考えなおさねばならぬだろう。

要するに、わたしがいいたいのは、明治三十四年の段階での支配階級は、右翼を日露主戦論の面において斬り捨て、ナショナリズムの面において認め、左翼を反戦論の面において利用し、社会主義・反国家主義の面で斬り捨てた、ということである。右翼を語るのに、ずいぶんと左翼に拘わるようだが、右翼とは何かとは、裏返せば、左翼とは何かということではなくてはならぬ。右翼の思想の何が有効であったかという問題は、そのまま左翼の思想の何が無効であったかという問題でなければならぬ。それゆえに、右翼の成立の時点における左翼との関係を、確認しているのである。

Ⅲ. 内田良平の日本ナショナリズム

さてしかし、内田良平は頭山満の何を受け継ぎ、何を否定して、右翼を成立させたか。それを論ずるには、内田の『露西亜亡国論』をみるのがいちばんよいのだが、残念ながらこれはこんにち一本も残っていないらしい。『国土内田良平伝』によれば、『露西亜論』となって刊行されたものには、ロシア革命の方法論に関する部分が削除されている、という。

とはいえ、『露西亜論』によっても、内田がロシア革命の必然性と日露戦論を主張したことは、十分よみとれる。かれはイルクーツクからペテルブルグまでを単身徒歩旅行したときの実見から、ロシアにおける権力と人民との乖離に注目した。このことが、ロシア革命が畢竟起こるとの予見の理由ともなり、「ロシア怖るゝに足らず」の主戦論の理由ともなるのである。

ロシアはたしかにツアー制のもとで、腐敗の極にあった。これを革命する可能性をもつのは、新たに勃興しつつある知識階級、つまり学生である。このロシアの学生と、日本の体制に飼い馴らされている赤門の学士様とを較べて、内田は次のように書いている。

「我赤門の没骨漢が、政府の模型のために適然錬成せらるゝ間に、彼等が独立心、健闘力の旺々として盛なるは、豈欣慕すべき所にあらずや。若し蛮的なる露国にして、尚ほ元氣と進歩の分子を有すとせば、其分子は彼れ学生の一団あるのみ。」

内田がロシアにおける学生の一団に、来たるべき革命の主体を見出したことは、このすぐあと北一輝が中国からの留学生の一群に支那革命の曙光を見出し、後年、下中弥三郎が抗日運動の推進者たちに中国の将来を托そうとしたことに通じる。

同じように、明治三十四年ごろ、岡倉天心はインドの青年たちに、革命の自覚を見出そうとして、失敗していた。天心はタゴールの甥に、「君は自分の国をどうする気なんだね」と問いかけ、「この国の革命のために組織的な計画をなすには、私たちは不利条件がある……

現下の状勢として、私たち各個人が一小部分を実行するただ一つのことは、時代の高まりくる積極的結果に委ねるほかはない」という答えを引き出した。この答えは、天心を落胆させた。天心はそのとき、「それは非常に私を悲しませる」、と長大息をもらしたそうである。

おもうに天心が長大息したのは、かれが「現下の状勢」とそれに応じた態度をきこうとしたのではなく、インドの青年の精神に革命をみようとして、失敗したことを示していた。いわば、アジアが西欧の侵略を斥けて興ってくる微光を、天心は青年の精神のなかに見出したかったのである。

それはともかく、内田はロシアの学生の一団が将来革命の主体になるだろうことを予見した。しかしそれは、まだ十分の革命的勢力となりえていない。ロシアはツァー専制と官僚制の弊のもとで、まだまだ腐敗しつづけるだろう。とすれば野蛮国ロシアはいま叩くべきである。シベリアを侵略するためにか。朝鮮をわが領土とするためにか。そうではない。「蛮的なる」ロシアを倒すことによって、そこに文明の革命を起こすために、である。内田はいう。

「吾人にして万一正義のために蛮露と戦ふて倒れたりとせん乎。後世の史家は必ずや書して曰はん。二十世紀の劈頭に日本民族なるものあり、不幸なる巨億の蛮人を救済せんがために、健気にも仁義の師を興し終に健闘して強敵の滅ぼす所となると。是れ実に名誉の敗北なり。豈にかの喪家の狗輩と日と同じふして語るべけんや。吾人は是を以て愈々文明の進軍を勧めずんばあらざるなり。」

これを、竹内好は「アジア主義の展望」（1964年）で、この時点での内田は明らかに「文明の使徒」だった、と評価することになる。ともかく、かくのごとき内田の日露開戦論は、内村の日清義戦論にも、大井らの朝鮮改革運動の論理にも通じる。むろんその源は西郷の征韓論である。たしかに『露西亜論』には、日本革命の思想がない。日本の国家目的とロシア革命の目的とが、ロマノフ王朝の打倒において一致するから、だ。

日本革命の戦略ということであれば、それは中江兆民が述べたように、日露戦に「敗るれば即ち朝野因迫して国民初めて其迷夢より醒む可し。能く此機に乗れば、以て藩閥を勦滅し内政を革新することを得ん」、というものであったろう。けれどこれはあくまでも革命戦略であって、革命思想ではない。そこに、内田良平の蔽いがたい欠陥があった。いや、それは右翼の通有的特性であって、血盟団事件の井上日召や、五・一五事件の大川周明にも適用できる批判である。

IV. 日本のアジア主義と韓国併合

内田のこの欠陥を抉るようにして登場するのが、明治三十九年に『国体論及び純正社会主

義』を書いた北一輝である。もちろんそのまえに、宮崎滔天が第二維新という漠然たる観点から、内田の批判者として現われてはいる。ただ、滔天の本来的な意思は、日本にはアジアを興して、帝国主義列強に対抗する力はない、それがあるのは支那である、それゆえ、支那人となって支那に革命の根拠地をつくろう、とするにあった。

右翼を、アジア主義という観点から語ろうとすれば、それはおそらく、この滔天の初原の意思につきるだろう。しかし、これはすでに、日本の右翼の城を脱けてでいる。そしてそのぶんだけ、滔天は右翼という範疇からはみでるのである。これは、北一輝が国体論＝革命論という発想によって右翼の範疇をはみでると、パラレルである。

とすれば、右翼の思想をその成立の時点で語るためには、内田良平においてこそ、その思想が抽出されねばならぬ。しかし、内田の思想は、すでに黒龍会設立の十数年後の時点で変革のエネルギーを喪失した、というのが、わたしの考えである。いや、変革のエネルギーを喪失しはじめたからこそ、かれの理想とした日韓合邦ではなく、韓国併合（1910年）が現実となったのである。

しかり、日本の支配階級は、右翼の日韓合邦論を利用して、韓国併合を実現した。そのことによって、みごとに右翼を体制に組みこんだのであった。内田らの黒龍会と連帯して、日韓合邦を推進した一進会（東学党の後身）の李容九は、かれらの理想を現実が裏切ったことを知って、天佑侠の一員であった武田範之に、次のように書き送った。

李容九はいう。国事成るとはこの事（韓国併合）か。一進会の目的はこれだったのか。（一進会）会員たちの生活の成就是このことか。いまじぶんはこういって部下から笑われています。なかには「売国奴」とよぶものさえいます。いっそ黄泉にいつてしまおうかともおもいますが、地下には先人の靈魂あれば、恥しくて合わす顔もないのです。いったい宋（秉峻）と李（容九）のふたりが欺かれたのか、それとも、杉山（茂丸）、内田（良平）、武田（範之）の諸公が欺かれたのか、と。

李容九にとって日韓合邦とは、朝鮮民族を亡国の悲惨から救うための賭けであった。賭けであることを知りつつ賭けたのだから、破れたとって恨みを吐くことはしていない。それゆえ、かれは部下からも日本人からも二重に疎外されるのである。それが、かれの苦渋をいっそうふかくしている。李容九が苦渋に沈淪したとき、内田良平もまた、李の苦渋を共有すべきであった。なぜなら、かれは李と日韓合邦についての盟約をしたとき、同志杉山茂丸に次のように書き送っていたからだ。

「永く彼等（日本の奴原）と交はり国家を憂へんよりは、李容九の義に同ふするの快なるを感じ候」（四十二年十二月）、と。

もし内田があくまで李容九の日韓合邦という義に殉じようとするなら、日本帝国主義によって行われた韓国併合に徹底的に抗すべきであった。それができなかつたところに、体制

に組みこまれてしまった右翼の頽廢があった。ここから、内田が関東大震災（1923年9月）に際して提出した建白書「震災善後の経綸に就て」までは、わずかに一步である。建白書に、いう。

「彼の不逞鮮人が赤化主義の徒と相策応し、わが国の不幸に乗じて或は爆弾を罹災民の家屋に投じ、或は毒薬を飲料水に入れ、或は無辜の老弱男女に対して暴行を逞ふしたことは人道に断じて恕す可からざる罪惡にして、我が官民が危急の場合、之を毆殺するの挙に出でたのは実は已むを得ざる自衛的手段に外ならぬのである。決して之を常軌を逸したる行為のみと断言することは出来ぬ。」

いま、この建白書を批判することはやめる。頽廢した右翼の思想は論ずるに足りないからだ。むしろそれは、頽廢した左翼の思想が論ずるに足りないのと、同じである。

V. 天佑侠と吉倉汪聖

二十世紀初めの明治三十四年(1901年)に創立された黒龍会こくりゅうかいは、日本右翼の中核を形づくった。頭山満とうやまみつるを代表とする玄洋社げんようしゃが明治第一世代、いいかえると帝国憲法制定に象徴される明治国家草創期のナショナリスト集団であるとするなら、内田良平を代表とする黒龍会はその第二世代、いわば革新的ナショナリスト集団であった。

吉倉汪聖よしくらおうせいは、この黒龍会の創立メンバーの一人である。しかし、かれは日本の右翼史のなかに、ほとんど名を残していない。これは、吉倉が組織行動を嫌う性質をもっていたことと、もともとかれが九州玄洋社系の人脈とはまったく別の、多摩民権運動系の、たとえば北村透谷とうこくともっとも親しかった人間関係にも関わっているかもしれない。

吉倉汪聖（金沢生まれ）と北村透谷（小田原生まれ）とは、同じ明治元年（1868年）の生まれである。夏目漱石そうせきと正岡子規しきの一歳下、『坂の上の雲』で有名になった連合艦隊参謀の秋山真之まことと同年齢である。吉倉汪聖は一時、帝国大学への予備校的性格をもっていた成立学舎で学んでおり、ここで神奈川自由党の領袖りょうしゆうだった石坂昌孝まさたかの息子、石坂公歴まさつぐと出会った。石坂公歴は、のちに北村透谷の妻となる石坂美那みなの弟である。

はじめ石坂公歴と親友になった吉倉汪聖は、その後、石坂の仲介で、透谷とも親友になった。なお、公歴は明治十九年（1886年）、亡命のようなかたちでアメリカに去っている。同じ

ころ、透谷の友人であった大矢正夫(蒼海)が大坂事件(朝鮮改革運動)に連座して投獄されてしまった。そのため、透谷と吉倉の交流が繁くなつたとおもわれる。

明治二十一年(1888年)八月十九日、透谷は東京西郊の町田(野津田)にある石阪家を訪問したが、このとき吉倉をともなっていた。二人は超俗的な傾向と文学的な関心において共通していたから、話題もおのずから合つたらしい。

かれら二人は、石阪家に四日間滞在し、二十二日になって、美那の母ヤスや妹登志子とともに百草園に遊んでいる。そのときの透谷の記録が「明治二十一年四月の旅行記概略」であるが、これは百草園に同行しなかつた美那にあてて、透谷がこの小旅行の概略を書き送つたもの(書簡草稿)らしい。そこに、透谷は「尤も高尚にして、純粹なる、友人(吉倉兄)」と書いているのだ。

吉倉と透谷との関係をくわしく記しているのは、吉倉汪聖が右翼史のなかでほとんどふれられないことがないばかりでなく、わたしが三十二年まえに「慷慨論と隱棲と一吉倉汪聖論」(『第三文明』一九七八年五月号)を書いて以後、学界や文壇で吉倉について論及されたことがほとんどないからである。黒龍会が編んだ『東亜先覚志士記伝』によれば、かれらは一時同居していた、とさえいつているのに。

北村透谷と吉倉汪聖が百草園に遊んだ二年後、吉倉は朝鮮半島に渡り、日清開戦避くべからずとの観測のもとに、視察旅行をつづけていた。いわゆる大陸浪人のはしりである。しかし、その視察旅行をつづけるうちに凍傷にかかり、両足の尾や拇指を切断している。この治療と静養のため、いちど東京に戻つたが、明治二十五年(1892年)秋に、牛込横町の大崎正吉をたずねて、渡韓をすすめている。大崎は、吉倉が帝国大学法科大学に進もうと成立学舎で学んでいたときの友人である。大崎が法政大学にすすみ、弁護士資格をとっていた。

大崎正吉はこのとき吉倉の申し出に同意し、かれら二人は仙台出身の千葉久三郎と三人で、釜山にむかった。この釜山で大崎が生計のために開いた法律事務所が、のちに天佑侠の集結所になるのである。吉倉はこの大崎事務所に入出入りしながら、「釜山貿易新聞」に筆をとり、のちその社長となつた。この大崎法律事務所の維持、および「釜山貿易新聞」の経営には、当時、釜山領事館補だった山座田次郎(後年、暗殺される)が協力していたらしい。山座は、頭山の玄洋社出身である。

明治二十七年(1894)、朝鮮全土に東学党の乱がおこつた。これは、朝鮮民族の「反倭洋」の独立運動であり、その結果として李朝への反政府運動でもあり、農民一揆でもあり、西学(西洋文明のキリスト教)に対する反対運動つまり新興宗教でもあつた。天佑侠は、これと連

携して朝鮮半島から清国勢力を排除しようとした、日本ナショナリストの集団であった。このとき吉倉は、大崎法律事務所に入出入りしていた武田範之^{たけだ ほんし}や本間九介、それに日本から駆けつけてきた内田良平や鈴木天眼^{てんがん}らとともに、天佑侠を組織したのである。総勢十四名。これがのち、黒龍会の中樞をかたちづくることになる。

改めていうが、天佑侠は朝鮮半島から清国勢力^{せい}を逐い、朝鮮の独立、ひいてはアジアの復興を画策するため、東学党と結ぼうとしたのである。むろん、この天佑侠の行為は朝鮮に日本勢力(軍)を導き入れる結果につながり、ひいては日清戦争の導火線の役目も果たすわけである。

天佑侠は通訳をやとっていたが、メンバー十四人のうちで朝鮮語を話せたのは吉倉ひとりであったらしい。そのため、ときにはかれが通訳のかわりをした。天佑侠が東学党に手渡した檄文は吉倉汪聖と武田範之と鈴木天眼が共同で起草したものであるが、その一節には、こうあった。

「天下今日の形勢、其^{その}優勝劣敗角逐^{かくちく}の状、彼の如く恐るべきものなり。朝鮮安危存亡は豈に此秋^{このとき}に非^{あら}ずや」と。

内田良平、鈴木天眼、吉倉汪聖らの天佑侠が、全琫準^{ジョンボンジュン}によって率いられた東学党と直接に接触できたかどうかについては、韓国の一部の学者たちはやや疑問を呈している。しかし、吉倉汪聖らがその天佑侠の行程の途中で、東学党と直接に交わった、という考えをわたしはとっている。そのことを、わたしは漢陽大学でおこなわれた韓国日本学会の基調講演でも述べたのだった(交わりの事実は、近年証明されるようになった。たとえば姜昌一「天佑侠と『朝鮮問題』」1988年)。

天佑侠の動きが終息し、内田良平らが帰国したのは、明治二十七年九月上旬である。このときには、日本と清国のあいだで戦争がはじまっていた(清国への宣戦布告は、八月一日である)。吉倉はひとり、ふたたび東学党との連絡をとりに雲峰にもどる途中で、日本憲兵に逮捕され、釜山に送られている。しかし、釜山領事館で山座が助力してくれて、かれは無罪放免になった。

吉倉は日清戦争が終わったあと、元山^{ウォンサン}で『元山時事』を創刊している。主筆で、漢文調の文章を得意とした。のち、清藤幸七郎^{きよふじこうしちろう}との共著のかたちをとっている『天佑侠』も、内田良平との共著である『露西亜亡国論』(明治三十四年刊)も、ほとんど吉倉の執筆になるものらしい。

吉倉の生涯は、その後、朝鮮半島およびシナ大陸で送られることになった。明治三十四年前後に、東京で黒龍会の結成ならびに日露協会の設立にたずさわったのが、例外的な日本での活動であったろう。

そして、その黒龍会の『会報』に、かれは「豊公 (秀吉) 征韓朝鮮義軍大将陳中日記の序」を書いてきた。この論文が、いまは問題なのである。

VI. 吉倉による徐樂齊の発見

吉倉汪聖の「豊公 (秀吉) 征韓朝鮮義軍大将陳中日記の序」という論文は、一言でいえば、豊臣秀吉の朝鮮出兵に抵抗したパルチザン將軍、徐樂齊の「陳中日記」を紹介する、というものだ。

とはいえ、豊臣秀吉の日本軍を海において破った李舜臣なら韓国では「救国の英雄」として知られており、日本でもかなり名が通っているが、徐樂齊なんて日本ではもちろん韓国でも知るひとがない。二十年ほどまえ、徐樂齊が抵抗の拠点とした大邱郊外の山興の禪寺・桐華寺の僧侶にきいても、誰も知らなかった。ちょうど禪寺まで登ってきた韓国の国会議員の一団にきいても、知っているひとがなかった。そのころ、一九九二年に出た貫井正之著の『秀吉と戦った朝鮮武將』(六興出版) をみても、徐樂齊の名は出てこないのである。

ところが、吉倉はこの徐樂齊を、東学党の乱の指導者であった全瑋準に重ね合わせるのだ。

「白頭山南、對馬峽北、古来極めて人なきを称す。尚お幸にして近時捧準の似て国人の氣力を代表するあり。往昔に在りては即ち當に徐樂齊を推すべし。」

そういった徐樂齊評価のために、吉倉はこの「豊公征韓朝鮮義軍……」を、タイトルとはまったく無関係の、東学党の蜂起、そしてこれに馳せ参じていった内田良平、大原義剛、そして吉倉じしん……の天佑侠の記述からはじめるのである。

「全瑋準、脚を湖南の一僻陬に挙げて、全羅一道の東学党、蜂の如く憤起し、連城連邑、師を迎えて降を容れ、五十六州又王命(李朝の命令)を奉ぜず。八路の天下、物議騒然として人

心恟々たり。是の時に方り、閔泳駿、権を廟上に握り、妖妃(閔妃)、官中より之を援け、百司百官其の一族ならざる莫く、威福、榮祿、前古又た比すべき稀なり。然るに阿房官の土木未だ成らずして陳呉の大兵既に江南より逼り、鎮討人なく、反正(平定)機を得ず、閹臣色を失い、軍議区々処する所を知らず。姑息の策乃ち此の間より生じ、終に大清の救兵を乞い、之を依り似て一時の安を偷まんと欲す。何ぞ凶らん、倭奴の国(日本)一団の侠骨児(天佑侠)あり。星夜艇を飛ばして突然馬山浦(朝鮮半島南岸)に上陸し、昌原の山中、数塊の爆薬爆裂薬のを奪い、健馬怪駆け、意気掲然として全捧準の營を敲く。……」(原文旧カナ。振りガナ、カッコ内引用者。以下同じ)

ここには、全捧準にひきいられた東学党が、民政に心を砕かず、閔妃の一族の支配するところとなり、ひたすら宗主国の清国に従っていた李朝に対して、農民一揆の軍をおこし、しだいに反清(そして反日)の民族主義的闘争に歩をすすめていったさまが、簡単に記述されている。

そしてそこに、日本のナショナリストでアジア主義的な志士の一群(天佑侠)が馳せ参じ、馬山浦から上陸して、昌原の山中に全捧準の陳營に面会を求めた、という明治二十七年当時の状況がのべられているわけだ。

この東学党の指導者で、民族主義的な「英雄」が全捧準であるが、かつては秀吉の倭軍(日本軍)と戦って民族の気概をあらわしたのが、徐樂齊だった、というのである。ともに「義軍の大將」である、と。

では、その徐樂齊とは何ものか。そうして、かれの戦いはどのようなものであったか、として、吉倉は次のようにのべる。

「徐樂齊は今を去ること三百年の生、嶺南達城(慶尙道)のひとり。彼れ始め儒を似て立ち(儒者として立身し)、人物を似て名あり。郷覚之を崇拜すること、猶お神の如し。然れども時勢其人に適わず、優然草野の間に遊んで、官の微命に応ぜず。僅かに子弟黨陶の労を取り、隠君子(草野に隠れた君子)を似て一世を終わらんと欲するものに似たり。唯夫れ何如せん、倭人(日本人)の襲来は俄かに七十二州の騷擾を惹起し、烏嶺関鎖さず、忠州城守を失い、君王蒙塵(市中に逃れ)、松都に走り、而して一人の義を唱えて国命に赴くもの莫し。

由来嶺南は義人烈士の叢淵と称する処、新羅朝の武威ま実に爰に在り。而して今や秋風
 落莫、先人の名を辱むることも亦甚し。温厚彼の如しと云えども、豈に夫れ黙して止むを得
 んや。況んや、郷党の推戴して免るゝを評さざるあり。彼乃ち起つて衆を慶尙道公山城畔の
 桐華寺に集め、血を賤いで義の爲めに誓をなし、檄を飛ばして興人を招く。太閤（豊臣秀吉）
 の偉業は必ずしも彼の爲めに破れずと云えども、其倭軍の糧路（兵糧の道）を扼し、進退の便
 を妨げ、終に寇（侵略）を斥け、家国を全うするに至りたるもの、実に徐樂齊を似て首功に推
 さざるべからず。」

徐樂齊については、百年あたりまえ、吉倉汪聖が太閤秀吉の朝鮮出兵に抵抗して日本軍と
 戦った儒者と紹介・評価しているものの、日本人はもちろん、二十年まえの韓国人にたずねて
 も、誰も知らなかった。ただ、十年ほどまえ、韓国人留学生に大人名辞書で調べてもらった
 ところ、達城の儒者と五行ほどの記述があった、と教えてくれた。

それゆえ、とりあえずは吉倉汪聖の記述に従って、その簡単な紹介をしておけば、次のよ
 うになる。一徐樂齊はもともと温厚な性格で、草野に隠れた儒者だった。秀吉が朝鮮出兵を
 おこなったときには、祖国の滅亡を座視するにたえがたく、蹶起し、郷党もまたかれを首将
 として推戴したのである。慶尙道の公山城（大邱の北郊）の桐華寺に衆を集め、ここに拠つ
 て、秀吉の日本軍に抵抗したのである、と。

ちなみに吉倉汪聖は、この徐樂齊の抵抗によって「太閤の偉業は必ずしも」「破れ」たわ
 けではないが、と註を加えつつも、かれの抵抗は日本軍の侵攻をさまたげ、祖国朝鮮を救う
 ものだった、と賞讃している。繰返すが、「終に寇を斥け、家国を全うするに至りたるも
 の、実に徐樂齊を似て首功に推さざるべからず」、と。

つまり、豊臣秀吉の偉業はこれによって破れたわけではないが、かれの朝鮮侵攻に対する
 朝鮮の民族主義的抵抗、その英雄が徐樂齊だった、というのである。

吉倉は、徐樂齊の戦いぶりを、次のように記述する。

「所謂の公山城は慶尙道の中央、大邱、漆谷兩府の間に在り。一脈の山勢、小白（山頭）よ
 り蜿蜒して此処に至り、京釜（京城と釜山）来往の大路を中断す。洛東大江之が西に流れ、達
 城の平原、其麓を繞る。誠に天下要害の形勢を占めたり。徐樂齊乃ち此好地に拠りて、軽進
 の倭軍（日本軍）に当り、其地理不案内を利とし、逸を似て労を撃ち、寡を似て衆を悩ます。

作戦能く其法を得たるものと云わずんばあらざるなり。」

ここまでは、徐樂齊が「要害」の公山城に拠って、よく日本軍を悩ませ、その作戦もみごとだった、という紹介である。

VII. 朝鮮ナショナリズムの評価

吉倉汪聖は、徐樂齊が豊臣秀吉の朝鮮侵攻に対する抵抗の指導者として、その能力を十全に発揮したとのべつつ、朝鮮民族の英雄として名が高い李舜臣の功をこえるのではないかとさえいつている。

「世に李舜臣当時の海戦を称するもの多し。然れども之を徐樂齊に比すれば、他は兵船共に始めより優勢を占めて以て其敵に向いたるもの。是は志氣沮喪の世、百敗の残卒を率いて精鋭の敵と相對せるもの。其の難易、豈に尋常の差ならんや。嗚呼徐樂齊徹りせば、李氏今日の天下なきも亦知るべからざるなり。」

李舜臣は、李朝から正式に海軍の統帥を命ぜられた将軍である。それゆえ、その正規軍は兵数、また船艦ともに倭軍（日本軍）に勝っている。これが抵抗の力を発揮するのは当然といえよう（吉倉の文章から百十年後のいま、釜山の竜頭山上に、玄界灘つまり日本のほうを向いた李舜臣の巨大な銅像が建てられている）。

しかし、徐樂齊はいわば草莽の臣で、公山城に拠った山岳パルチザン将軍のようなものである。かれは、敗色濃い、それゆえ「志氣沮喪」の「残兵」を率いて、果敢に豊臣軍に抵抗したのである。その戦いたるや、まことに困難だったといえよう。その朝鮮民族の気概を示した戦いぶりによって、今日の李氏朝鮮がある、と吉倉はいうのだ。

吉倉の考える徐樂齊の究極のメンバーは、後にふれるように「斥倭」、つまり日本軍の侵攻に対する抵抗である。これに対して、東学党の全瑋準は「安民」である。それゆえ時代的意味は若干異なるが、朝鮮民族の英雄たることにおいて共通する、という。

ナショナリストとしての吉倉汪聖は、「安民」の全瑋準を尊敬するとともに、「斥倭」の徐樂齊を評価しないわけにはいかない。これが、吉倉が三百年まえの抗日の英雄である徐樂齊の「陳中日記」を紹介しようとする、かれの真意だった。

吉倉は「豊公征韓朝鮮義軍大将陳中日記の序」の後半部分に、この「陳中日記」を発見するに至った経緯を、次のように記している（なお、この「陳中日記」はもと漢文によって書かれており、石川藩士の家に生まれた吉倉にとっては、それほど読解に苦勞するものでなかった。ちなみに、天佑侠十四人のうち朝鮮語がよくできるのは、吉倉一人であり、それゆえ天佑侠が東学党と会合するためには、別に通訳を一名帯同する必要があった）。

「我れ嘗て古人（徐樂齊）の巧業を慕い孤劍飄然、秋草を踏んで、公山の城に上る。城畔鷓鴣（キジ目キジ科の鳥。やまうずら）飛んで、断碑僅に残り、壁壘、楼門又見るべき莫し。唯桐華寺の瓦棟依然として旧様を伝うるあり。院僧迎えて当年の事を説き、且つ近時の変遷を序す。言調明晰記すべきもの多し。曰く、徐樂齊は忙中閑日月を有する人。陳中未だ嘗て手に史書を放せることなし。風采又颯爽として威嚴を存し、今日の全琫準を見るが如し。其人心を率いることも両者相同じからん。唯徐は順を似て終え、全は遂に逆の名を蒙る。資性相同じと雖も、其境遇相異なればかり。僧又曰く、弊寺に古宝あり。本と徐樂齊の手記に係ると云う。院南石庫（石の倉庫）の地、今之を嚴せり（嚴重に秘藏している）。敢えて遠来の客の爲めに其の秘を発き、待接の礼を尽さんと欲す。可ならん耶。」（カツコ内、振りガナ、句読点など引用者）

この前段をみれば、吉倉汪聖は公山城の禪寺、桐華寺が徐樂齊ら抵抗軍の立て籠った根拠地だった事実を知っていて、ここを訪ねたことがわかる（わたしが訪れた八十年まえのことだ）。ただ、そこは寺院として古格を保っていたが、壁壘や楼門などはすでに崩れ去っていた。

ところが、その寺の僧侶はここが日本軍への抵抗の拠点になっていた歴史を知っているばかりでなく、その寺の倉庫には「徐樂齊の手記」が残っている、といったのだ。その条りを、大略、現代語訳してみよう。

一桐華寺の僧侶が私（吉倉）を迎えてくれ、日本軍侵攻政当時のことをのべ、近年の変化を語ってくれました。その言葉は明晰で、心に残るものでした。その内容は……徐樂齊は忙中でも精神に余裕を持つ人でした。陳中でも史や書を放すことはありませんでした。風采もまた颯爽として威嚴をもち、今日の全琫準を見るようでした。人心を掌握する才能もまた両者同じようだったでしょう。ただ、徐樂齊は政府の命に従い、全琫準は政府に反抗して逆賊の名を与えられました。これは二人が同じ資質をもちながらも、時代的な環境を異にしたからに

ほかなりません、と。そのように語ったあ僧侶は、つづけていいました。……この寺に古い宝があります。それは、徐樂齊が書き残したものです。寺院の南の石の倉庫に、これを厳重に保管しています。遠くから来て下さったあなたに、それをお見せして、接待のしるしとしましょう。よろしいですか、と。

この条りをみると、吉倉汪聖が桐華寺を訪れた百年余のむかし、ここに徐樂齊の「陳中日記」が秘蔵されていたことがわかる。そうして、吉倉が三百年まえの徐樂齊と明治二十七年当時の東学党の指導者・全瑋準を重ね合わせたように、桐華寺の寺僧もその二人の資質や人心を掌握して民衆の戦いを指揮した能力に共通するものを見ていたのである。

「余(吉倉)は乃ち^{すな}乞うて其^{その}秘書を見るに、当時百戰惣怍(あわただしさ)の中、徐樂齊^{みづか}自ら筆を執って行陳の様を序したるもの。取って我征韓史^{けつろう}の欠漏を補うべきもの多し。顧^{おも}うに、徐樂齊一世の志は斥倭の二字に尽き、全瑋準^{うらみ}終生の憾は安民の事に帰す。古今時既に異にして人固^{もと}より同じからずと雖も、機運順環^{おうおう}の際往々偉傑を生ずるは東西皆然り。徐樂齊^{みづか}独り伝なかるべけんや。是^これ即ち^{これ}之を^{おぼ}転訳して世上に公にする所以なり。」

吉倉は徐樂齊がみづから記したこの「陳中日記」を読んで、豊臣秀吉の征韓史の反面をうかがう。そして、それとともに、「斥倭」に志を尽した徐樂齊と、「安民」に心を砕いた全瑋準との時代的違いに注目しつつ、かれらはともに朝鮮民族の気概をあらわした「偉傑」だ、とおもうのである。徐は三百年まえに抗日をこととした朝鮮民族の英雄だ、と。

そうだとしたら、天佑侠十四人の一人で、その七年後に黒龍会の創立メンバーの一人(幹事)となった吉倉汪聖というナショナリストは、百年余まえに徐樂齊を発掘することによって、朝鮮民族のナショナリズム、いや民族の気概を正当に評価しようとしていた、といえるだろう。これは、黒龍会という日本右翼を代表した組織を、たんに「膨脹的ナショナリズム」とか、「日本帝国主義の手先」などとイデオロギー的に断罪してしまうことができない、ということでもある。

黒龍会は、すくなくともその創立時にあつては、他国のナショナリズムを正面から受け止める要素をもっていた。そのことが、吉倉汪聖の徐樂齊の発見、そうして紹介の仕方によってわかるのである。

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

国民帝国・日本の編成と統治文化の連鎖

山室信一*

yamamuro@maia.eonet.ne.jp

<要旨>

本稿は「国民帝国」という作業概念を通して、東アジアにおける帝国と植民地をめぐる方法と課題を探ってみようとしたものである。そのため、本稿では、異法域結合と差異の序列化の問題を軸にし、国民帝国・日本のあり方の本質を追求し、その今日的な意味を考えてみたい。

キーワード：国民帝国、国民国家、異法域、帝国意識

1. 国民帝国という視点—国民国家と帝国の双面性

今回のシンポジウムのテーマ「帝国時代の日本と東アジア—その思想と文化の動向—」において、まず問題となるのは「帝国時代」とはいかなる時期を指すのかという時代規定であるが、ここでは日本が「帝国」として姿を現し、そこで生まれた統治文化や帝国意識の残存した時代を含めて考えるため、広く取れば現在もまた「帝国時代」の残映の時代として捉える必要がある。他方、それでは日本がいつ主権国家として独立国家となったのか、という問いに対しては幾つかの指標によって答えることができる。その際、領事裁判権や居留地・租界の撤廃を取れば 1899 年であり、関税自主権の回復を取れば 1911 年ということになる。だが、いずれを取るにせよ、その時点からは国際社会における日本国家の奇妙な歴史的位相が浮かび上がってくるはずである。なぜなら前者を取れば、その四年前の 1895 年に台湾を割譲によって、後者を取ればその一年前に大韓帝国を「併合」して、日本は植民地として領有する「帝国」となっていたからである。すなわち、日本は主権国家として独立する以前に、すでに植民地をもつ帝国という二つの相貌をもって世界史上に現れていたのである。

しかしながら、果たしてそれは日本だけの歴史的特質だったのであろうか。西欧諸国は 1648 年のウエストファリア条約によって主権国家としての原則を確認する以前、1494 年のスペインとポルトガルの間で結ばれたトルデシヤス条約によって当時の世界は二分され、植民地化が進んでいた。その後のイギリスやフランスなどの諸国家においても国民国家の形成と植民地領有帝国の形成とは、多少のタイムラグを伴いながらも並行していたはずである。さらにヨーロッパにおいても一民族一国家としてあったのはポルトガルだけであったといわれるように、国民国家形成

* 京都大学人文科学研究所 教授

においては多数の異民族を意識において一つの国民として統合する国民形成が不可欠であった。そこで取られた国語や生活様式などの画一的強制は「内国植民地」化ともいわれるように、帝国形成における文化統合とパラレルな側面をもっていたのである。日本の場合も、北海道アイヌの人々が「旧土人」として保護法の対象とされ、選挙権や徴兵制などの権利と義務の次元で「本土」の人々とは異なった法域に置かれたが、そこで取られた施策は、「日本語使用の義務」・「固有の習慣や風習の禁止」・「本土的氏名への改名による戸籍編入」といった同化政策であり、それが植民地において反復されたことは明らかであろう。ちなみに、この1899年に制定された「北海道旧土人保護法」は、1997年に廃止されるまで存続しており、日本が単一民族国家であるといった議論は、植民地領有の問題を措いても、小笠原の帰化西洋人やアイヌの人々などの存在に照らして何ら根拠のないものであった。

それでは、植民地を領有する帝国としての日本とヨーロッパそしてアメリカなどとの異同は、どこに求められるべきであり、それがそれぞれの本国と植民地のあり方にいかなる特性を与えることになったのであろうか。

こうした問題を解明するための方法的概念あるいは作業枠組みとして提起しているのが、「国民帝国 Nation Empire」という概念である。省みれば、これまでの日本の植民地研究は、台湾・朝鮮・樺太・南洋群島や満洲国、そして中国本土の淪陥地区における傀儡政権、さらには東南アジアにおける占領地域を対象として、それぞれの視点から進められてきており、それ自体が大きな成果を集積してきたことは間違いない。しかしながら、そもそもあたかも自明の前提のごとくに扱われてきた「日本帝国」を統治体制 (regime) 総体として捉えた場合、一体それはいかなる「帝国」であったとみるべきなのだろうか。

この問いに対しては、各植民地の比較研究を通してのみ、その「帝国」の実態と特性が浮かび上がってくるのであり、「帝国」の存在をアプリアリに設定することは方法的錯誤である、との批判も可能であろう。だが、言うまでもなく「帝国」とは、植民地の単なる集合概念ではない。それは何よりも帝国本国と植民地の間の関係性の束であるとともに、植民地間相互の関係性によって、その性格が規定されるはずのものである。にもかかわらず、それらが総体として成立するはずの帝国日本とはいかなる構造をもち、どのような特質をもつのかを統括するための視角や概念は必ずしも明確には提示されてこなかったように私には思われる。こうした研究状況に鑑みて、私が提示している「国民帝国」という概念は、日本を含めて多くの帝国が形成されていく過程が、国民国家（台湾では国族国家）を形成していく過程および方法とパラレルな側面をもっていたという事実に着目し、そこにおける国民国家形成と帝国形成とがいかなる相互規定性をもっていたかを考察しようという企図に発している。それは主権国家間の「国際関係」として世界秩序を捉えてきた従来の見方すなわちウエストファリア体制論に対して、主権国家のみならず植民地や従属国などの範囲を含む全ての統治体制がトータルに創り出すグローバル秩序として近代世界体系は成り立っていたという見方を対置するものであり、また国民帝国の本国（メトロ）とそ

それぞれの植民地の関係、複数の植民地間との関係などを視野に入れるという点で、本国と植民地との二極間 (bilateral) 関係の集積として捉えられてきたこれまでの帝国研究とは異なったものとなるように思料している。

それは同時に、これまでの日本史研究への批判ともなる。なぜなら、沖縄やアイヌや小笠原諸島などの問題を含め、異民族の居住空間たる植民地を領有することにおいて成り立っていた近代日本において、日本列島弧だけが日本史を構成するものではないことは、あまりにも自明の事実なはずだからである。要するに、本国と植民地との相互作用のなかにおいてしか本国としての日本が存立しえなかった以上、本来、その相互に規定しあう関係の実態を明らかにしない限り、本国・日本の歴史の実相さえ判明しえないはずなのである。それは単に法制に限らず、ヒトやモノやカネにおける植民地と本国との間の相互交渉のなかでしか、それぞれの存在態様が明らかになりえないことを意味している。

2. 作業仮説としての国民帝国概念—方法と課題

それでは、国民帝国とはいかなる特性をもつものであろうか。

ここで注意を要するのは、国民帝国とはあくまでも一つの範型(paradigm)として集約したものであるという点である。すなわち、範型あるいは理念型として提示するということは、全ての個別の帝国や植民地について、そのままは当てはまらない場合があることを前提にしているのである。逆に言えば、植民地ごとに現れてくる様々な偏差を明らかにすることによって、初めてそれぞれの帝国や植民地の固有性が明らかになるのであり、そうしない限り日本の植民地帝国を欧米のそれとの異同は明らかにされないままに、日本の植民地統治の特異性だけが強調されるという奇妙な事態から脱却することはできないはずなのである。つまり、国民帝国という範型は近代における「帝国なるもの」の通有性と固有性とを弁別していくための作業仮説でもあり、方法概念と実態とを混同することほど不毛な批判はない。

そのことを前提にして、いま必要な限りで国民帝国概念を要約しておけば、まず第1テーゼとして「国民帝国は世界帝国と国民国家の拡張でもありつつ、各々の否定として現れるという矛盾と双面性をもつ」ことが重要である。次に第2テーゼとしては「その形成・推進基盤が私的経営体からナショナルなものに転化していったといえる。ただ、日本においては、その形成・推進基盤は軍部にあり、それがナショナルなものに派生、転化していく点で異なっている」ことに注意を促したい。また第3テーゼとしては「世界体系としては“多数の帝国が同時性をもって争いつつ手を結ぶ”という競争体制とならざるをえない」ことが指摘できる。そして、第4テーゼでは「本国と支配地域(植民地)とが格差原理と統合原理に基づく異法域結合として存在する」ことが挙げられる。この異法域結合においては、植民地はけっして本国に対して単純な横並びとしてある

のではなく、ヒエラルヒー構造をなすものであり、その異法域間の関係は格差原理と統合原理の絡み合いによって、それぞれの国民帝国の個性を彩ってくるものとして捉えることができる。さらに、第5テーゼとして「国民帝国システムから被支配地域が独立するにあたっては国民国家という形式を採らざるをえなかった」ことを付け加えることができるであろう。それは国民帝国そのものが国民国家としてのあり方を否定できなかったことを逆手に取ることであったし、同時に植民地からの独立・解放が国民国家形成に向けられるしかなかったという意味で脱植民地化のあり方を規定することになったのである（国民帝国の概念と意義については、拙稿『『国民帝国』論の射程』（山本有造編『帝国の研究—原理・類型・関係』名古屋大学出版会、2003年、所収を参照戴きたい）。

なお、念のために付言しておけば研究者の間においてさえ、帝国という視点から植民地を見ること自体が、帝国支配を正当化するかのように受け取られるという事態がしばしば見られるが、帝国の実相を解明することと帝国支配を正当化することは全く別の次元の問題であることは当然であり、国民帝国概念が帝国支配に意義を見出そうとするものでないことは言うまでもない。また、異法域における格差原理や格差意識を抽出することは、それに同意するものではない。これら至極当然のはずのことが、これまでも誤解いや敢えて曲解されることが少なくなかったため、改めて注意を促しておきたい。

以上のような国民帝国として存在した日本の歴史的位相を東アジア地域世界という歴史空間の中で解明していこうとするとき、多くの探求すべき問題領域が立ち現れてくる。まず第1に国際的要因として、国民国家形成および国民帝国形成が従来の東アジア国際秩序である冊封・朝貢体制と西欧の国際法体系との間でいかなる持続と転回の関係を示したか、が問題となる。また、第2に経済システムとしては、レーニンが指摘したような「資本的には一流帝国主義国に従属しながら、自身もまた植民地従属国を支配する帝国」（『帝国主義論ノート』）として存在したような国民帝国間の相互依存ないし序列関係も無視することはできない。そして、第3に帝国内的要因として、日本が国民国家形成の過程で採られた政策や制度化の様式が、その後、国民帝国を形成していくにあたってどのように外延化していったのか、という連関性の問題がある。また、第4に国民帝国内部で形成された統治様式や身体文化、帝国意識が帝国崩壊後にいかに持続し再生産されていったかを明らかにすることによって、本国であった空間と植民地であった空間のそれぞれにおける「脱植民地化」問題の現在に焦点を当てる必要がある。この問題はまた「植民地近代化」ないし「植民地的近代」とは何であり、その遺産のプラスとマイナスとを総合的に認識していくことも繋がってくるであろう。さらに、第5に国民帝国に人々の思想や行動そして文化の全てが包摂されなかった以上、その余剰ないし反発する部分は帝国の外部へ、いかなる回路を通じて、どのように繋がっていったのか、そしてまた帝国の外部からの圧力はいかにして帝国内部を揺るがせていったのか、という問題も看過することはできない。そのことは近代における帝国統治が内部だけでは完結せず、外部との相互規定のなかで存続せざるをえなかった歴史性の意義を

問うことにもなる。

もちろん、国民帝国という作業概念を通して解明すべき帝国と植民地をめぐる方法と課題の議論は以上に尽きるものではなく、今後とも深化させていかなければならないことは言うまでもない。

3. 中華秩序と国際法秩序—ダブルスタンダードの使い分け

さて、日本がそうした国民帝国として生成していった過程で選択したのは、中華文明と欧米文明という二つの文明を利用しつつ排斥する営為でもあった。すなわち、国境という限界をもたず文明の波及によって限りなく拡張していく中華的な天下秩序に対して、国境によって境界を区切り、その内部に対しては内政不干渉を原理とし、国民が主権者となる国民国家秩序を国際体系とする欧米の脅威に直面した日本は、まず何よりも自らが植民地化される危機を脱する方法として、そして次には東アジア国際秩序におけるヘゲモニーを中国から奪取するための手段として欧米の国際法体系を摂取していったのである。

西欧世界に起源をもつ近代国際法における主体（アクター）である主権国家として認められるための最低限の要件とされたのは、文明国標準と呼ばれるものであり、それは根底にキリスト教文明を置きつつ、次第に宗教的意味合いを脱色して国内法体系における泰西主義(western principles)であり、それによって規制されるはずの服装や食文化や衛生観念など全般に生活様式の変化としての文明化であった。明治日本における文明開化や欧化主義といわれる事態は、まさにこうした国際法上の文明国標準に適合するための法制改革であるとともに生活全般におよぶ文化改革でもあった。それは断髪から始まって洋服や洋食や太陽暦という日常生活の変容を余儀なくされたため、日本国内でも多くの反発を呼び起こした。その抵抗を収め、変革を率先垂範すべく断髪・洋服姿で撮られた明治天皇の写真を「御真影」として全国に配付したように、天皇は伝統の保持者という以上に文明化の象徴とされたのである。

他方、東アジア世界における文明の根幹としての象徴的意義を孕んでいたのが曆制と服制であり、その服制のなかには蓄髪が含まれていた。そして、「正朔を奉じる」ことが服従の意味を象徴したように、服制や曆制に従うことこそ中華文明に帰服することを示す重要な基準であった。そのため日本の太陽暦や洋服への転換は、中国や朝鮮（以下は歴史的用語として使用）から見れば、明らかに伝統的中華文明への挑戦であり、文明破壊の行為を意味したものであった。日本の選択が中国では「狂うが如し」と評され、朝鮮では「洋賊の前導」や「倭洋一体」ととみなされて非難されたのも故なきことではなかったのである。

しかしながら、日本にとっては国際法体系に適合することは植民地化の危機を脱し、幕末に結ばれた不平等条約を改正して主権国家としての独立を達成するためには不可欠の要件として強要されたものであり、それを拒絶することはアヘン戦争後の清朝のように国土を蚕食される事態を

受け入れることと同義とみなされた。しかも、この国際法体系においては、その国土の広狭や人口の多寡そして国力の差異にも拘わらず、「主権国家は並立」すなわち平等であるとみなされていた。この主権国家平等という建前をとる国際法体系は、中華体制の周辺にあって文明的圧力を感じ続けてきた小国日本にとって、中国を頂点とする文化的ヒエラルヒー構造として存立する中華的天下秩序から脱却し、自立的国家としての存在意義を確立していくためには不可欠で有意性をもったものであった。

こうして日本は中国を軸として成立してきた伝統的な東アジア国際秩序を規制していた冊封・朝貢体制あるいは冊封・宗属関係を否定し、新たな東アジア国際秩序を再編成していくための手段として国際法を活用していくこととなった。具体的な事例に即していえば、琉球の尚氏や対馬の宗氏を清や朝鮮の両属体制から切断して国際交渉の権限を剥奪することによって外交主権を一元化していった。だが、そこでは国際法秩序と中華的天下秩序をダブルスタンダードとして使い分けながら、中国が支配した既存の東アジア地域秩序を崩壊させ、そこに日本が入り込んでいくという政策が採られた。琉球の尚氏に対しては宗属・朝貢体制を取って冊封詔書を与えながら、同時に国際法に基づく主権・国境確定のために琉球処分を断行したのである。また、朝鮮については日清戦争によって主権国家としての独立を国際法によって清朝に承認させながら、1910年の韓国併合をおこなうと中華帝国の様式に従って天皇は大韓帝国の皇帝を臣下の国王に冊封する詔書を出していた。韓国併合とは国際法秩序と中華的天下秩序のアマルガムとして演出されたのであり、国民帝国日本の一つの特性がそこには表れていた。すなわち、それは欧米の国民帝国に中華的序列化意識が埋め込まれたものだったのである。

しかしながら、第一次世界大戦中の対華 21 カ条要求にみられるように、日本の領土的拡張が韓国から満洲国、そして更に華北・華中へと向かうにつれて、それは三・一運動や五・四運動などにみられた民族自決主義の要求と衝突するだけでなく、そこに経済的利権をもつイギリスやアメリカ、フランス、ロシア（ソ連）などとの諸帝国との対立を引きおこすこととなり、欧米とも中国とも対峙していくための独自の帝国形成原理を必要とすることになった。とりわけ、国際連盟による承認を得られなかった満洲国においては、国際協調主義に代えて王道楽土や民族協和を標榜して多民族複合国家として統合を図ろうとしたが、実質的な軍事統治を仁徳による支配としては正当化できず、日本の帝国独自の理念としての皇道主義が次第に表面に浮き上がってくることになる。

4. 国民帝国日本＝皇国としての固有性の誇示

日本の国民国家としての固有性と独自性の強調という課題は、既に大日本帝国憲法の制定において大きな課題となっていた。それは欧米と中国という二つの文明圏に対抗していくための歴史的原理の発見として認識され、その結果として欧米や中国のように革命による王朝交代のない日

本、天皇が一貫して国民の尊崇を受けて人徳によって支配してきた日本、として自己像が描き出されることになった。大日本帝国憲法第一条にいう「万世一系の天皇これを統治す」がその集約的表現であり、ここに「万世一系の天皇」という江戸時代には殆ど使われたことのない言葉によって日本の特異性が徴表されることになった。これに対してはドイツ人法律顧問ロエスラーが、万世一系であるかどうかは歴史的にも将来的にも疑問であり、こうした神話的表現は憲法になじまないとして反対したにも拘わらず、「万世一系の天皇」による統治こそが日本の国体であり、その国体を紊乱する行為に対する処罰規定として治安維持法が1925年に制定され、朝鮮や満洲国をはじめ帝国日本において遷移・施行されていったのである。

もちろん、人徳や叡智によって統治し、国民が尊崇することによって連綿たる皇統を維持してきたはずの天皇が、威力や暴力によって国体を維持しなければならないことを示すに他ならない治安維持法は、天皇統治の正統性根拠を自ら覆すはずのものであった。そのため、万民一君の天皇制においては、国体に背く者に対しても遍く天皇の仁徳が及んでいるという一視同仁というスローガンが強調され、それは植民地の異民族に対しても及ぶものであるとして喧伝された。しかし、天皇の存在さえ意識しない異民族にとって一視同仁が現実感覚を伴わないのは当然であった。そこに帝国が帝国として存続していくための意識を醸成する必要があった。それは日本帝国の一員としての臣民意識であるとともに、欧米帝国に対抗するという帝国意識とを併せ持つものでなければならなかったが、日本帝国として提示しえたのは天皇を祭主として精神的統合を図るという方法であった。しかもそれは参拝という身体儀礼を慣習化することによって臣民意識と帝国意識を刷り込むというものであり、八紘一宇と「惟神の道（かんながらのみち）」を内面化するために帝国日本内には天照大神を元神とする5つの神宮と満洲国の建国神廟が建てられ、宮城と神宮・神社に対して帝国臣民全員が遙拝する「一億総神拝」が強制されていった。帝国崩壊までに海外神社の数は約六百に及び、祠などを含めると約千六百の「神拝」施設がアジア各地に作られていったのである。

このような精神動員のなかで、一人の天皇が平等な全ての臣民を平等に仁愛の政治を施すことになってはいたが、実際には天皇からの距離によって格差がつけられることになった。すなわち、国民帝国・日本においては韓国併合が国際法と宗属関係による冊封という二重の措置によって行われた結果として、国民国家における法の前の身分の平等という理念とは裏腹に、身分構成のうえで皇族・王族（旧韓国皇帝一族）・公族（旧韓国皇族）・華族・朝鮮貴族・士族・平民そして南洋群島における「島民」などの階層的身分関係が形作られていったのである。こうした差異の混在こそが国民国家とは異なる国民帝国のあり方の本質であった。しかも、その格差は日本の支配地域が広がれば、それまで下に置かれていた自分たちの地位があがっていくという錯覚を生むものであった。例えば、委任統治領となった南洋テニアン島では内地日本人を一等民、沖縄・朝鮮出身者を二等民、現地のチャモロ人とカロリナ人を三等民と位置づけていた。また、満洲国において朝鮮族は「亜日本人」＝二等日本人として扱われたが、満洲国政府内での位置づけと

しては台湾人が日本人と同等の処遇を与えられることになり、台湾が朝鮮よりも優位に立つことによって同じ中国語を話す在地の漢民族を牽制するという統治メカニズムが取られていた。

こうして新たな占領地に進出することによって被植民者としての境遇から脱しようとする試みは、占領地において帝国の準国民（臣国民）として処遇されることによって国民帝国の拡張を支持することにもなり、抑圧の移譲が公然と進んでいったが、そこには法的な権利そのものの格差が存在していた。いや、それぞれの植民地や占領地を異法域として格差をつけることこそが、本国さらには天皇への忠誠競争を煽り、抵抗運動にエネルギーが集中することを防ぐことにも作用したのである。

5. 異法域結合と差異の序列化

それでは、国民帝国はなぜ異なった法域の結合として構成されることになったのであろうか。

こうした形態を取るようになった理由としては、第1にそれぞれの政治社会がもつ固有の生活様式や慣習の相違を無視できなかつたことが大きな要因である。この選択は本国政府の統治意図だけから説明することはできない。むしろ、植民地側の従前の社会構造や社会意識や文化、総じて言えばその時空間によって逆に規定されている側面があったことを無視できないのである。「因時制宜」や「因地制宜」という方策を採らざるをえなかつたというのが実状であった。そのことは植民地とされた政治社会の差異こそが、実は国民帝国・日本の構造を規定していった次元を無視すべきではないことを示唆している。そして第2に、植民地と本国とを同等の権利主体として扱うことに本国の心理的抵抗があつたことも見逃せない要因である。さらに第3に、異法域として各植民地間を分断することによって植民地の人々が連帯して本国へ抵抗し、独立を図ることを未然に防ぐ効果もあつた。

このような法域の相違は、当然のことながら文化の違いを前提としていたために、法域の相違は民族の相違に基づく文化圏と相即的に捉えられていた。しかし、日本の統治空間が広がるとともに文化を区切る基準も民族を単位とするだけでは不十分となつていった。その端的な事例として植民地における帝国大学が対象とした文化圏を挙げることができる。京城帝国大学では設立当初は朝鮮文化あるいは半島文化の研究が対象とされたが、満洲事変勃発とともに満蒙文化研究会が設立され、日中事変に伴ってその研究対象の変化に応じて大陸文化研究会へと改められていった。また、台北帝国大学では台湾および南中国が研究対象として当初は想定されていたが、朝鮮総督府学政参与も務めた初代総長幣原坦が『南方文化の建設へ』（1938年）を唱導し、南方への軍事行動が進んだ1943年3月には南方人文研究所と南方資源科学研究所が附置されることになっている。

そこで次に問題になるのは、このような文化的相違に基づく法域の違いがいかなる歴史的意味をもつたのか、そしてそれがいかに現在の私たちの文化意識にまで及んでいるのかという点であ

る。言うまでもなく、差異化は単なる区別というにはとどまらない。そこには序列化というベクトルが働いてくる。何よりも法域の違い自体に、日本本国を基準とした序列化や階層化の意識が込められていたし、同じ法域内においても適用される対象の属人的差異も存在した。日本国内においてはアイヌを「旧土人」と規定し、台湾ではマレー系原住民を「蕃人」として法的にも差異化されていた。その序列化意識を示す一つの事例として、韓国併合前の『東京朝日新聞』を挙げると、朝鮮の風俗や経済がいかにも文明的に遅れたものであるかが強調され、そのことが転じて併合が韓国人自身にとってもいかに喜ばしいことであるのか、という正当化根拠とされている。しかし、同時に見逃してならないのは同じ紙面に「蕃族退治」という記事が並行して連載されていた事実である。ここでの「蕃族」とは台湾の先住民を指しているが、それが「蕃族」とされているのは非文明的で頑迷であるがゆえに日本の統治の美点を理解できず反抗を重ねており、そのため「退治」しなければならないという理論化がされていたのである。もちろん、それを韓国併合への反抗と重ね合わせて、予め警戒を与える意図までが込められていたかどうかは不明だが、朝鮮と台湾における統治とそこで起きる反抗を重ね合わせて見る視点があったことは否めないであろう。しかしながら、問題となるのは、このような本国から植民地へ向ける眼差しだけではない。むしろ、こうして作られた異法域の文明的序列化が、次の段階では植民地間の差別意識を醸成し拡大していくという側面である。この問題が象徴的に現れたのが、1903年の大阪内国勧業博覧会に際して作られた「学術人類館」である。これは1989年のパリ万博の人間の生活展示に深く感銘を受けた東京大学の人類学者・坪井正五郎が企画したもので、「内地に近き異人種を集め、その風俗、器具、生活の模様等を実地に示さんと趣向にて、北海道のアイヌ五名、台湾生蕃四名、琉球二名、朝鮮二名、支那三名、印度三名、同キリン人種七名、ジャワ三名、バルガリー一名、トルコ一名、アフリカ一名、都合三十二名の男女が、各其国の住所に模したる一定の区域内に団欒しつつ、日常の起居動作を見するにあり」（『風俗画報』269号、1903年）という趣旨のものであった。こうした可視化された異民族の「展示」は、日常的には自覚されることのない日本人にとっての帝国意識の形成を目論んだものであったことは言うまでもない。内地にあるということは、周辺に存在する「野蛮な異人種」を確認して、自らはその頂点に立っているという帝国意識を育むからである。

他方、中国人として「展示」される予定だったのがアヘン吸引の男性と纏足の女性であったことに対して、中国人留学生や清国領事館などが激しく抗議したため、中国人の「展示」は費用を理由に取りやめとなった。ただ、ここで清国留学生たちが抗議した文章を見てみると、「インドや琉球はすでに亡国であり、イギリスと日本の奴隷となっている。朝鮮はかつて我が国の藩属国であり、今やロシアと日本の保護国と成り下がっている。ジャワやアイヌ、台湾の生蕃は世界でも最低の卑しい人種であって禽獣に等しいものである。我々中国人が蔑視されるとしても、これらの民族と同列ということがあるべきであろうか」（『浙江潮』第2号、1903年）と非難しているように、抗議の中心となっているのは「野蛮」な他民族と同列に扱われることへの憤慨であっ

た。さらに、沖縄の遊女を琉球婦人として「展示」しようとしたことに対しては、「他府県に於ける異様な風俗を展陳せずして、特に台湾の生蕃、北海のアイヌ等と共に本県人を撰みたるは、是れ我を生蕃アイヌ視したるものなり。我に対するの侮辱、豈これより大なるものあらんや」(太田朝敷『琉球新報』1903年4月11日)という非難があったように、異法域の台湾の生蕃や日本にありながら共に同じ異法域として扱われていたアイヌと同一視されることへの反発が示されたのは、同じ日本国内における異法域とはいえ、沖縄こそがアイヌよりも遙かに内地化(本国化)しているとの自負があったからであった。本国から差異化されているがゆえに、より強く本国への同化という求心力が働くという、このメカニズムこそ異法域による格差原理が、そのまま逆に統合原理のバネとして作用する側面を如実に物語っている。格差原理は、ある集団や思想・文化などをスケープゴートとして否定し糾弾することを通じて、それ以外の集団の一体性を確信させるという意味で、否定的統合(negative integration)という側面においてはあれ、統合原理としても作用することになるのである。

6. 国民帝国における格差と同化の葛藤心理

そして、このような本国への心理的近さを誇るという「距たりのパトス」は朝鮮においても同様の機能を果たすことになる。その一つの現れが1929年の拓殖省設置に関して朝鮮総督府が他の法域と同格に扱われることに対して「別格」であることを強く主張して反対したものの中に、在朝日本人や朝鮮人政治団体があったことである。例えば、朝鮮人団体である国民会は「拓殖省を設置し朝鮮総督を拓殖大臣の管轄下に置くことは、明治大帝の日韓併合の詔書及大正天皇の一視同仁の詔書に反し、明に朝鮮をして植民地たらしむるものにして、かくの如きは全く内鮮同族の根本を破壊するものなり」(朝鮮総督府浅利警務局長より内閣拓殖局長宛て1929年4月18日受付電報「拓殖省設置問題ニ対スル朝鮮人ノ動静報告ノ件」)との理由に基づいて反対する決議をおこなっていた。この団体そのものは朝鮮総督府の意向を受けたものであったかと思料され、必ずし当時の一般的意識の反映とはいえないかもしれないが、朝鮮総督を拓殖大臣の監督下に置くことは朝鮮を内地の府県以下の地位におとしめることになるという危機感が働いていたことは否めないであろう。また、他の例を挙げれば、近衛文麿の東亜新秩序論に積極的に呼応した尹致昊が朝鮮人は確かに文化的に遅れてはいるとしても「近代的教育と文化と資格さえ与えらるれば、優に内地人と肩を比べて東洋指導は勿論、世界の指導の為にも、貢献し得る優秀性を持って居る」(「内鮮一体に対する所信」『東亜之光』第1巻4号、1939年)として、内地人と同じ資格さえ与えられるなら、東アジアのみならず世界の諸民族を指導する能力をもっているとの自負を表明していたことにも注意しておく必要がある。それは当然にも内地人と同じ資格が与えられないことへの批判に発するものであったが、帝国というシステムの内部で差別問題を解消しようとするれば帝国内での上昇によって指導的立場に立つしかないとの選択をすることになり、それこそが

国民帝国にとっては最も安全でコストのかからない統合システムとして機能したのである。もちろん、日本の進出地域において率先して指導的役割を果たそうとしたのは、そこにしか脱出口を求めない閉塞感の現れであったが、本国の外にあって本国と同化することで上昇が可能であると見せる点に帝国支配の心理的操作が働いていたことを看過してはならないであろう。その心理には同時にそれぞれの民族は異質であることが当然であり、同列に扱われるべきではないという批判も含まれていた。同じ尹致昊が創氏改名に対して「多様性こそ生を豊穡にさせる薬味のようなものである。日本の熱望する大帝國は当然に多民族で構成されなければならない。多民族構成員に全ての点で全く同じになれと強要することは不可能であり、愚かな政策だ」（「臨戦報國団の最高指導者尹致昊翁の横顔『三千里』第13巻11号、1941年）と弾劾したように、格差は固有性としての自己保持の意義も持っていたのである。ここにも国民帝国内部に閉鎖されてしまった人々にとって、格差が差異化として同視される統治の狡知から逃れることがいかに至難のことであったかの一端を窺い知ることができるであろう。

いずれにしても、法的な格差原理は帝国内での自己の位置づけをめぐって内面化していく側面をもっており、帝国内異民族の他者よりは自己の方が優位というセルフイメージをかき立てることによって、いわば本国への忠誠競争という機能を果たしていくのである。当然、支配する側としては意図的にその忠誠競争を煽り立てることによって統治の安定を図ろうとする。

かくして、国民帝国内においてはそれぞれの政治社会における文化的差異が文明という基準によって階層化、序列化されていったといえるが、それが法域の違いとして現れたのは何よりもその法文化こそが泰西主義の法そして文明国標準主義の国際法に準拠していたためであったといえるであろう。しかし、同時に異法域として区別されたことには、当該社会の慣習や伝統を無視しえなかったという植民地側からの規制要因があったことも無視できない。さらに異法域を巡っては、全く相反する立場からそれを正当化することも可能である。すなわち、異なったものを異なったように扱うという立場と、異なったものも等しく扱うという立場である。そして、それ自体、いずれを取るべきかはアプリアリには決まらない。ただ、アベ・シェイエスが摘示したように、「国民とは何か。共通の法の下に生活し、同じ立法機関によって代表される生活共同体である」（『第三身分とは何か』1789年）ことが国民国家の要請であるとするならば、本来的に国民帝国においても同一の要求が出てきてもおかしくはない。しかし、実際の国民帝国においては異法域が存在し、異なった法的権利の人々が臣民、所属民といった種々の身分で共存することとなり、国民帝国・日本でも「臣民」として統合される対象となる一方で、日本「国民」とは区別された他者として排除されるダブルバインドの状態に置かれることになったのである。

帝国とは国境外に向かって拡張するシステムであると同時に国内的には内政不干涉原則に沿った閉鎖な政治システムであった以上、国内の統治支配を安定させなければ植民地統治も安定しない。それは国内構成員を抑圧するシステムではあるがゆえに、植民地の人々よりも「優遇」されているという意識を抱かせることによって抵抗を少なくする必要があった。ただし、それは意識

だけでは不十分であり、権利としての優越性を保障する必要がある。ここに日本の植民地拡張のイデオロギーとして「内に立憲主義、外に帝国主義」というスローガンが唱えられた理由があった。本国人への普通選挙権付与などの権利確立の要求と植民地人の無権利状態の放任とは表裏一体をなすものだったのである。そして確かに、日本の植民地においては議会が設置されることもなく、台湾や朝鮮では総督に立法権はじめとする統治権が委任されるという非立憲主義による支配が進められた。これに対し、台湾議会設置運動などにみられるように植民地の人々も参政権の要求をするなど異法域の人々が本国人の人々と同じ法的権利状態を要求することとなった。だがそれは、他面から見れば異物を抱え込んだ帝国への反発や嫌悪感を本国人に与えることにもなった。

戦前・戦中を通じて日本の戦争遂行や帝国的拡張に反対し続けた政治学者で戦後は東大総長にもなった南原繁が、1946年に「外地異種族の離れ去った純粋日本」の民主的再建を国民に訴えたのも、そうした違和感から解き放たれた正直な感慨だったのかも知れない。しかし、「外地異種族」の人々が、ただ空気の如くに「離れ去って純粋日本」が残ったわけではなかった。「離れ去れる」だけの財政的支援がなされることはなかったし、「離れ去れない旧植民地」の人々に対しては「かつては日本人であった」がゆえに戦争犯罪などの責任が問われ、他方で「もはや日本人ではない」がゆえに国民に与えられるべき権利や各種の保障の対象とされることはなかったのである。

だが、占領という事態によって、自分の意志ではなく、強制的に植民地を喪失したことによって、日本人の殆どが肉を削ぐようにして帝国意識から脱却することはなかったし、今なおできていないのかも知れないのである。

7. 帝国意識の再生産と脱却—無意識過剰と自意識過剰

もちろん、事実として国民帝国の遺産ないし植民地性なりがどのように持続したのか、あるいは切断されたのかについては、更なる検証が必要であり、即断は避けなければならない。だとしても、異法域結合という国民帝国の構成が法的秩序として機能したというだけでなく、文化的で心理的な次元を内包していたために、それが帝国としての秩序維持機能をもっていたのではないか、という視点から実証的な研究を進める必要があるという問題点の析出だけは確認できたのではないだろうか。

しかしながら、日本の帝国形成は、他の欧米の帝国とは違い、植民地化によって教育を普及し、産業設備や社会的インフラ整備をおこなったものであり、感謝こそされ批判されるべき筋合いはないという帝国意識の再生産が現在でもなお続いている現実がある。他方で、「一億総懺悔」をして日本は戦後に再出発したのであり、贖罪は終わったという言説もある。だが、その総懺悔した一億人とは一体誰なのか、ということについても無意識であるという事実がある。

「一億総云々」という表現は、先に挙げたように植民地領有期において「一億総神拝」などで使用されたものであり、その一億とは例えば1940年時点での、本土7140万人、朝鮮2433万人、台湾587万人などを想定した用語であった。だとすれば戦後の「一億総懺悔」にも、もはや帝国臣民でなかった朝鮮や台湾の人々が含まれていたことになる。これは敗戦の責任は朝鮮や台湾の人々にもあるということ意識してのスローガンだったのであろうか。おそらく、そうしたことは意識さえされなかったというのが実態であろう。それは、全ての人の責任は誰の責任でもない、という無責任体制の事実を示しただけだったのである。

しかし、問題の根源は日本人の帝国との係わり方についての意識のあり方に係わっている。敗戦直後の1946年9月、大蔵省は日本人の在外財産の処理と連合国の賠償支払問題への対応のため、省内に「在外財産調査会」を発足させた。調査会は満洲・朝鮮・台湾・北支（中国北部）・中南支（中国中南部）・樺太・欧米・南方（第1・第2）・南洋群島の各地域分会に分かれて在外財産評価推定の作業を行った。そして、この調査をもとに猪間驥一（元東亜研究所所員・満洲商工会常務理事）・鈴木武雄（京城帝大教授）・北山富久二郎（台北帝大教授）・金子滋男（台湾銀行）らの手によって編纂された『日本人の海外活動に関する歴史的調査』全11篇37冊が1947年12月頃に作成を終え、1950年までに大蔵省管理局より刊行されている。その「序」には「日本及び日本人の在外財産の生成過程は、言われるような帝国主義的發展史ではなく…日本人固有の経済行為であり、商取引であり、文化活動であった」とあるように、日本の帝國的拡張を経済行為であり文化活動であったと見なしたが、そこでは軍事行動や憲兵・警察による統治であった事実は一切無視されていた。さらに総論の第3章「日本およびその植民地域に於ける人口の発達」では「獲得された新植民地は、その持主からは遺棄されたに等しいところの経済的に開発されざる、社会文物の備わざる状態にあったのであるが、日本はこれを近代的な産業組織の上に、文化高き社会に改造することに努力して余力を残さなかった。その努力の途上に、日本の知的水準の高い移民のこれら植民地への流入が起こった」として、あたかも無主地に知的水準の高い自発的移民が入ったことによって植民地は「近代化」されたと謳われている。

ここには帝國的無意識と帝國的自意識とが共に過剰に現れている。帝國的無意識過剰とは、自らの植民地支配によって他民族に災厄やトラウマを与えたことへの不感症を指し、帝國的自意識過剰とは植民地統治によって優れた成果を与えたのであり感謝されてしかるべきだということ恩恵意識の過剰を指す。もちろん、その背景には帝国内の外地から引き揚げた660万の人々がアジア建設に献身的努力を行いながら全てを失ったにも拘わらず、その心身・財産すべてについて何らの保障もないという被害者意識があり、内地の人々にとっては引き揚げ者を食糧や職業を奪う「厄介者」を引き受けなければならないという被害者意識がある。そこから植民地形成が戦争の結果ではなく、平和的な経済活動の成果である以上、在外資産は敗戦の賠償に使われるべきではなく、国内の被害者補償が優先されるべきだと主張が生まれるのであり、そのなかで「自らが喪失し剥奪されたものへの執着」として植民地投資の問題がまず浮上し、それが次には植民地支配

へのノスタルジーとして現れていったのである。他方、同時に「軍国主義ファシストの被害者としての国民」という意識は、自らが加害者であることを否定するものであり、そのまま被害者意識の増幅と加害意識の欠如につながった。そうした意識を育んだ温床となったのが、本国と植民地そして植民地間の序列的格差を前提として構成された異法域結合としての国民帝国・日本のシステムにあったのではないかというのが、以上の考察を通じての一つの小括となる。

8. 文明化圧力と存在根拠としての文化—世界化と固有化の狭間で

もちろん、国民帝国が歴史的に果たした意義とその遺産の問題に関しては、今後とも更なる事実の発掘を重ねていく必要がある。ただ、異法域として植民地の分離と離間を図る中で生まれた差異化の問題をなぜ帝国文化や帝国意識の問題として取り上げるかといえば、それが帝国の本国とかつて植民地であった空間における意識としての脱植民地化問題と無縁ではないように思われるからである。それを最も見やすい次元で言えば、台湾は日本の植民地統治の意義を理解しているがゆえに親日的であるのに対して、朝鮮（韓国）は植民地統治がもたらした成果を理解できないがゆえに反日的である—という言説が日本の一部では繰り返されることによって台湾と韓国とを差異化して見る視線が再生産されている。もちろん、それだけが台湾と朝鮮の日本へのスタンスの違いを生んでいる要因ではないとしても、それは日本から見ればどちらがより一層内地に近いかという心理的距離によって植民地の序列化を図っていた帝国時代の心理的機制がいまなお働いていることの現れではないのだろうか。

さらにまた、ここで敢えて文化の差異の問題には深入りせず、その文化的差異を貫いて平準化する機能をもつ文明を取り上げたのは、国民国家形成にしろ国民帝国形成にしろ、それが文明国標準という名の資本主義化と国際法の世界的普及の過程としてあったことは間違いないからである。それが選択不可能な必然であったのか、取捨可能な選択肢の一つに過ぎなかったのかについては議論の余地があろう。ただ、いずれにしても、その文明という基準が帝国内の多数の異文化を横断し序列化していったことは間違いない。そして、文明化過程においては、人の心身の規律化や産業構造における効率化・機械化、あるいは都市風俗としての「モダン」など、時代の局面によって様々な現れ方をしてきた。それを植民地に照らした場合、そこに植民地的近代性や植民地近代化などの問題群が浮かび上がってくることになる。同時に、それが国民帝国・日本の場合には本国を経由してもたらされる場合と、欧米から直接に継受される場合とがあった。そのため、本国への同化としての文明化を拒絶しようとするれば、固有の伝統文化に依拠するか、欧米と直接に結びつくかの選択に迫られることになる。このことが、国民帝国の時代にとどまらず、戦後の東アジアにおける文化受容のあり方、とりわけ日本・韓国・台湾におけるアメリカとの関係をも規定する要因になったのではないか。その意味で国民帝国の時代に生まれた差異化の意識とその「鉄の檻」とでも呼べる閉塞空間からいかに脱却していくという課題は、植民地空間に全て

が包摂されなかったという局面を直視し、その余剰ないし反発する部分が帝国の外部へ、いかなる回路を通じて、どのように繋がっていったのか、という次なる問題を喚起することになる。その課題は、まさにグローバル化のなかで固有文化の消滅という事態に直面している現代の私たちに真っ直ぐに繋がっているのではないだろうか。

文明は外部からその正統性根拠を与えられるものであり、抗し得ない圧力を確かにもってきた。文明化が文化破壊として機能してきた事実は否定できない。だが、同時に文化はそれを受け入れる根拠となるとともに、それに対抗する砦ともなりうることもまた否定できないはずなのである。

■ 투 고 : 2010. 5. 31.

■ 심 사 : 2010. 6. 12.

■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

日露戦争史再考

—戦争の性格・目的・責任—

稲葉千晴*

chiharu@urban.meijo-u.ac.jp

<要旨>

1、日露戦争の性格は「祖国防衛戦争」ではなく、韓国の保護国化を狙った「植民地戦争」である。2、戦争責任は、ロシア側でなく日本側にある。3、日露戦争の戦略目標は満州（ハルビン）にあるロシア軍の打倒であり韓国制圧ではない。4、日露戦争終結後、日本の韓国駐劄軍が韓国人弾圧のための軍隊に変貌した。

キーワード：「植民地侵略戦争」、保護国化、ハルビン

1. 問題の所在：日露戦争百周年(2004-5年)の成果

2004年から05年にかけて、世界各国で日露戦争百周年の式典が開かれ、大小含めて多くの会議が開かれた。会議の成果である報告書も、以下のように多数出版されている。

防衛研究所戦史部編では、外国人研究者による招待論文が多いせいか、国際関係に焦点を当ててはいるものの、会議の狙いがはっきりあられていない。東アジアに直接関係する論文も抜け落ちていた¹⁾。軍事史学会編第1巻には、国際的視点として、中国の中立に関する論考や、中国代表団のポーツマス講和会議への派遣に焦点を当てた論文も含まれている。ただし第2巻は軍事に関する論文が多く、しかも戦略というよりは、きわめて限定された戦闘や戦術に関して言及されている²⁾。ロシアにおいては、敗北したからであろうか、日露戦争への関心が薄かった。唯一のロシア語報告書であるアイラペトフ編でも、外国からの投稿が多く、ロシア人の研究は限られていた³⁾。日露戦争研究会編には、オーソドックスな政治外交史だけでなく、経済や社会、ジェンダーやエスニスティ、表象や文学など、種々の視点が織り込まれている。さらに、近年における内外の研究史にまでまとめているものは、日露戦争を総合的にとらえた研究書

* 名城大学 教授

1) 防衛庁防衛研究所編『日露戦争と世界——百年後の視点から』(平成16年度戦争史研究国際フォーラム報告書、2004年)

2) 軍事史学会編『日露戦争(1): 国際的文脈、(2): 戦いの諸相と遺産』(錦正社、2004、2005年)

3) Айрапетов, О.Р. ред., *Русско-японская война 1904-1905: взгляд через столетие*, (Москва: Три квадрата, 2004).

と言うにはほど遠い⁴⁾。英語版のほうでは、当時の英・仏・独の外交に注目した論文も含まれるが、日本語論文の翻訳も多く、新味に欠ける⁵⁾。山梨学院大学編では、著名な研究者の論考や、目新しいロシア側史料の発掘なども含まれるが、日露戦争の時期を専門としていない研究者による論文も目につく⁶⁾。慶応大学で開かれたシンポジウムの英文報告書 2 巻本は、「第ゼロ次世界大戦」というセンセーショナルな謳い文句で、しかも最大のボリュームを誇る。ロシア軍事史を専門とするアメリカ研究者が編集しているが、「第ゼロ次」が受け入れられた形跡はなく、権威主義的な臭いの論文集という印象を受ける⁷⁾。韓国政治外交史学会のシンポジウムの報告書もある。ただし、そこでは日露戦争だけに限定せず、「日本の脅威」というトーンを強調した報告がいくつか含まれていた⁸⁾。20 世紀初頭のユダヤ民族主義を鼓舞した事象が日露戦争だという位置づけから、イスラエルでもシンポジウムが開かれた。ユダヤ人学者の層の厚さを期待したが、東アジア地域の分析では、充分な力を発揮できているとは言い難い⁹⁾。ロシア研究で言えば、ロシア史研究会やユーラシア研究所でも、年次大会の一部で日露戦争を取り上げ、その特集号を出している。後述するが、ロシア史研究会編の中では、これまでの研究を覆すほどの特筆に値する論文が含まれていた¹⁰⁾。出版の最後を飾る東アジア近代史学会編においても、アジアと日露戦争に絞って論文を集めたことになっているが、アジアにおける日露戦争の位置づけを十分に解明できていない¹¹⁾。

とにかく日露戦争百周年では、いくつもの学会や研究グループがさまざまなシンポジウムを開き、研究に取り組んだ。だがその研究成果は、どれも全領域を満遍なくカバーするものではなく、内容も限定的なものが多く、けっして満足いかなかった。百周年の成果としては、これまでの研究の問題点がおぼろげながら浮かび上がったという程度にとどまる。本稿では、浮か

4) 日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』(成文社、2005 年)

5) Chapman, J. & Inaba, C. eds., *Rethinking the Russo-Japanese War, 1904-05, Vol.II: The Nichinan Papers*, (Kent: Global Oriental, 2007).

6) 山梨学院大学ポーツマス講和百周年記念プロジェクト編『日露戦争とポーツマス講和』(山梨学院大学、2006 年)

7) Steinberg, J.W., Menning, B.W., Schimmelpenninck van der Oye, D., Wolff, D., Yokote, S. eds., *The Russo-Japanese War in Global Perspective: World War Zero*, Vol. I, (Leiden: Brill, 2005). Wolff, D., Marks, S.T., Menning, B.W., Schimmelpenninck van der Oye, D., Steinberg, J.W., Yokote, S. eds., Vol. II, (2007).

8) Korean Association for Political and Diplomatic History ed., *The Russo-Japanese War and the International Order in East Asia: Historical Characteristics and Modern Meaning*, (Seoul, 2004).

9) Kowner, Rotem, ed., *Rethinking the Russo-Japanese War, 1904-05, Vol.I: Centennial Perspectives*, (Kent: Global Oriental, 2007).

10) ロシア史研究会編『ロシア史研究』第 78 号 (2006 年)、ユーラシア研究所編『ユーラシア研究』第 33 号 (2005 年)

11) 東アジア近代史学会編『日露戦争と東アジア世界』(ゆまに書房、2008 年)

び上がった研究の問題点、すなわち戦争の性格・目的・責任に注目し、韓国との関係で新たな切り口を示してみたい。

2. 「祖国防衛戦争」か「植民地侵略戦争」か？：日露戦争の位置づけ論争

日露戦争百周年で特に不満だったのが、日露戦争の位置づけ論争に決着がつかなかったことである。

十巻本の公刊戦史である参謀本部編『明治三十七八年日露戦史』を素直に読めば、次のようになる。1903年春、ロシアが満洲から朝鮮半島に触手を伸ばしてきた。大国ロシアが極東で軍事力を拡大し、朝鮮半島を占領すれば、日本の安全保障にとっても脅威となる。手をこまねいているとシベリア鉄道が完成し、ロシア軍が極東で増強され、朝鮮半島はロシアの手に落ちてしまう。早急にロシアの機先を制さないかぎり、日本の勝機はない。現状の極東での軍事力は、日本に分がある。政府は、戦うなら今しかない、と決断し、1904年2月に開戦した。ロシアの侵略から祖国を防衛するために、日本は、やむをえず戦争を始めたことになる¹²⁾。「祖国防衛戦争」という神話が誕生した。

一方で、日露戦争の結果をみれば、日本は朝鮮半島を軍事占領し、満洲南部からロシア軍を追い払った。日露講和条約（1905年9月5日調印）と第二次日韓協約（同年10月17日）、満洲に関する日清条約（12月22日）において、日本は朝鮮半島の保護国化を達成し、旅順・大連を租借して南満洲のロシア利権を引き継いだ。日本の朝鮮半島支配を確立し、中国進出の橋頭堡も構築した。1910年の韓国併合と1931年の満洲事変という、日本の大陸進出が、日露戦争の結果として可能となった。まさに日露戦争は、日本にとって最初の「植民地侵略戦争」だったのである¹³⁾。

もちろん近代の戦争は、多様な側面を有しており、その一面だけを強調するのは本質を見失った議論になりやすい。とはいえ「祖国防衛戦争」とは、やむをえず日本が戦争を開始したのは誤りではない、すなわち戦争肯定論であり、「植民地侵略戦争」とは、日本による開戦はアジアへの侵略であり正しくないという戦争否定論につながる。一つの戦争の性格が、いまだに真っ向から対立している状況は解消されなければならない。

ところが日本では長い間「祖国防衛戦争」が支持されてきた。たとえば1960年代に発表され

12) 参謀本部編『明治三十七八年日露戦史』第1巻（東京偕行社、1912年）。

13) 井口和起『日露戦争：世界史から見た「坂の途上」』（ユーラシア・ブックレット71号、東洋書店、2005年）、井口和起「東アジア世界の中の日露戦争：韓国・朝鮮からの視点を中心に」『朝鮮史研究会論文集』第43号（2005年）：19-30頁。稲葉千晴「世界から見た日露戦争」『歴史評論』No.711（2009年7月号）：37-43頁。アンドルー・ゴードン『日本の200年：徳川時代から現代まで』上巻（みすず書房、2006年）、原田敬一『日本近代史③：日清・日露戦争』（岩波新書、2007年）。

た国民的な人気小説、司馬遼太郎『坂の上の雲』において、愛国主義が鼓舞され、日露戦争は祖国を防衛するために不可欠の戦争だった、という側面が強調された¹⁴⁾。この小説は、視聴率の高いNHKのスペシャル大河ドラマでテレビ化され、2009年から11年にかけて放映されている。百周年の際にそれを支持したのが、『産経新聞』と『読売新聞』であり、両紙はそれぞれ特集を組んで出版している。特に読売新聞は、アメリカのロシア研究者で作る日露戦争グループと共同で国際シンポジウムまで開催し、自説の正当性を強調しようと試みた¹⁵⁾。

日中や日韓の外交関係を複雑化させた、東アジアにおける日本の歴史認識をめぐる問題でも、日露戦争が取り上げられた。「新しい歴史教科書を作る会」は、その中学の歴史教科書の中で、祖国防衛という側面を強調している。百周年にあわせて日露戦争を正当化しようとする著書も多数出版されている¹⁶⁾。残念なことであるが、「祖国防衛戦争」という見方は、今日でも一定の層に支持されていると言わざるをえない。

日露戦争を肯定的にとらえる、もう一つの見方にも紹介してみたい。イランやトルコが、日露戦争における日本の勝利を、アジアによるヨーロッパへの勝利としてとらえ、歓迎した。フィリピン、ヴェトナム、ミャンマーの民族主義者も、やはり日露戦争を民族覚醒の契機とみなした¹⁷⁾。アジアから日本への留学生の数も日露戦争を契機として増大した。中国で科挙試験が廃止されたという事情があるものの、中国の若者たちが、日本の勝利は立憲制（日本）の専制（ロシア）への勝利だとみなし、その雰囲気を感じたいと考えていた¹⁸⁾。インドでも日本の勝利が民族独立に新たな弾みを与えた、というのだ。孫文やネルーまでもが、アジア民族の勝利だと高く評価したことを強調している。もちろん、この史実は間違いではない。ただしその後欧米列強と同様に東アジアで搾取を始めると、インド政界のエリートたちは日本に幻滅した、とも付け加えられている¹⁹⁾。たしかに日露戦争は、アジア民族主義の観点からは高く評価されているが、日露戦争後の日本の大陸進出によって、勝利の主体である日本の評価はアジアの中で否定的なものに変化していく。

14) 司馬遼太郎『坂の上の雲』1-6巻（文藝春秋、1969-72年）

15) 産経新聞取材班『日露戦争：その百年目の真実』（産経新聞社、2004年）、読売新聞取材班『検証：日露戦争』（中央公論新社、2005年）、読売新聞東京本社調査研究本部編『いま問われる日露戦争：日本の決断と国家戦略』（読売ぶっくれっと、2004年）

16) 『中学社会、新しい歴史教科書』（扶桑社、2006年）、加来耕三『真説日露戦争』（出版芸術社、2005年）、半藤一利・戸高一成『日本海海戦かく勝てり』（PHP研究所、2004年）、平間洋一『日露戦争が変えた世界史』（芙蓉書房、2004年）、松村劭『教科書が教えない日露戦争』（文春ネスコ、2004）

17) メーア・ミハイル「アジア的展望の中での日露戦争」『日露戦争とポーツマス講和』（2006年）:297-309頁。
Westermann, Gesa, "Japan's Victory in Philippine, Vietnamese, and Burmese Perspectives", *Rethinking I*(2007): pp.413-429.

18) 古澤誠一郎「日露戦争と中国：その知的刻印を考える」『日露戦争と東アジア世界』（2008年）:221-43頁。

19) サリーン、ティラク・ラージ「インドと日露戦争」『日露戦争研究の新視点』、292-302頁。

日露戦争は「植民地侵略戦争」だったという考え方が、結果として明白であることは言うまでもない。しかし、「祖国防衛戦争」を支持する勢力が現在も存在し、その論調が堂々と語られている。それを支えているのが『明治三十七八年日露戦史』である。日本中で広く普及しており、実質上の政府の公刊戦史という性格を持つ。だが、開戦の際の政府の公式見解というのは、自国民に向けて自らの立場を正当化し、相手国の不当な行為を非難するのが通例であろう。その内容がプロパガンダ的要素を多分に含んでいると観るのが妥当である。それを鵜呑みにするのは、あまりに軽薄ではなかろうか。

とはいえ、いまだに「祖国防衛戦争」を否定する決定版がでていない。なぜならば、愛国主義のオブラートに包まれた日本の対外進出戦略に、現在残されている限られた日本側史料からでは、容易にメスが入れられないからである。ところが、最近のロシア史からのアプローチで、「祖国防衛戦争」に反駁する研究が発表された。これまでは、朝鮮半島がロシアの南下政策の脅威にさらされ、ひいては日本の独立までもがロシアによって脅かされるという理由で、日本はやむをえず戦争を始めたことになっている。ロシアが朝鮮半島を侵略し、日本にも牙を向けてきた、というのが前提の議論である。だが日露戦争前夜、ロシアは日本との戦争を回避するため、朝鮮半島の利権を放棄する提案をしたことが明らかとなった。ロシアは、日本との戦争というリスクを冒してまで朝鮮半島に進出する考えを有していなかった、というのだ²⁰⁾。日本はロシアの意図を見誤り、あるいは無視して、戦争への道を突き進んでいった。開戦時の日本の戦略目標は、朝鮮半島からのロシア軍の排除、および東シナ海における制海権の確保である。朝鮮半島の軍事占領を目標としていたのと言うまでもない。「祖国防衛戦争」の前提が崩れた。

しかし、これだけでは十分ではない。日本が積極的にロシアと戦争を始めたと証明されないかぎり、防衛ではなく侵略だ、と一般読者を説得できないからである。

3. 日露戦争の戦争責任

日露戦争では、日本は戦勝国となったため、戦争責任を問われることはなかった。ロシアにしても、戦場で降伏した陸海軍将官が本国の軍事法廷で裁かれただけで、戦争責任はだれも追及されていない。だが、日露戦争は偶発的に起きた戦争ではなく、半年以上の外交交渉が決裂して戦争に突入している。日露どちらかが、あるいはどちらも相応に戦争責任を負っているはずである。まずは、日露両政府の開戦の詔勅を比較してみる。

1904年2月10日、日本は、宣戦の詔勅の中で、次のようにロシアの非を論じている。すな

20) 加納格「ロシア帝国と日露戦争への道：一九〇三年から開戦前夜を中心に」『法政大学文学部紀要』第53号(2006)19-44頁。和田春樹「日露戦争——会戦にいたるロシアの動き」『ロシア史研究』第78号(2006)4-12頁。和田春樹『日露戦争：起源と開戦』上下(岩波書店、2009-10年)

わち、ロシアは、列強と交わした満州からの撤兵条約を履行しないばかりか、満州を併合しようとしている。これは、国境を接する韓国の安全を脅かすだけでなく、極東地域全体の平和を危うくする。日本は、話し合いによって事態を解決したいと願っていたが、ロシアは歩み寄る姿勢を見せず、いたずらに交渉を長引かせた。ロシアは、表面的には平和を訴えながら、裏で極東での軍備を増強するために時間稼ぎをしていたのである。こうしたロシアの態度に対して、日本は極東における将来の平和と安定を確保するため、やむをえず武力を持って対抗することにした、というのである²¹⁾。開戦の責任は、当然のことながらロシア側にある、と主張されている。

一方でロシアも2月9日、日本に宣戦を布告した。ロシアは極東の平和を維持するため、韓国に関する日露協定を改訂しようという日本の提案を受け入れた。しかし日本はロシア側の回答を待たず、かつてに交渉を中止して2月6日に外交関係を断絶してしまった。しかも日本は、外交関係の断絶が軍事行動の即時開始であると警告せずに、2月8日突然ロシア極東艦隊に攻撃を開始した。ロシアは日本の挑戦に対して、断固武力を持って応じるというのだ²²⁾。戦争する意図のないロシアに向けて、宣戦布告なしに軍事行動をはじめた日本こそが戦争の全責任を負うべきだ、と非難されている。

ロシアは、日本の宣戦布告前の先制攻撃に対して非常に憤慨し、欧米において外交攻勢にでた。2月22日、ハーグの常設仲裁裁判所で、別件の仲裁判決を下した後、突然上級裁判官を務めていたロシア法相が日本の奇襲を非難し、自国の立場を擁護する演説を行った。くわえて在外公館を通じて、各国外務省に通牒を送りつけ、日本の非を訴えた²³⁾。さらに、欧米のマスコミを使って、日本が国際法に違反して軍事行動を行ったという論を展開した。それに対して日本は、アメリカに金子堅太郎を、ヨーロッパに末松謙澄を派遣し、同じくマスコミを使ってロシア寄りの論評に反駁させている²⁴⁾。両国が自国の立場を正当化するため、戦場以外でも鏖迫り合いを繰り広げていたことが窺えよう。

二国間で戦争が勃発するには、双方に必ず重大な要因が存在するものである。一方だけが悪いなどということはない。ただしこうした要因の中にも、長期的および短期的な視野に立ったものが存在する。日本は、これまでのロシアの極東進出の経緯と今後のロシア勢力拡大予測に基づき、すなわち長期的視野に立ってロシアを非難している。ロシア側の日本非難は、日本が国際法を破ってロシアに戦争を仕掛けたという、非常に短期的視野に基づくものである。はっきり言って、議論がかみ合っていない。日本側の言うロシアの脅威と、ロシア側による日

21) 『明治三十七八年日露戦史』第1巻、71-73頁。

22) 同上、73-74頁。

23) 外務省編『日本外交文書：日露戦争』I（日本国際連合協会、1958年）、44-47頁、74-77頁。

24) 松村正義『日露戦争と金子堅太郎：広報外交の研究』（新有堂、1980年）、33-37頁。松村正義『ポーツマスへの道：黄禍論とヨーロッパの末松謙澄』（原書房、1987年）、79-89頁。

本の国際法違反は、まったく次元が違う。

日露戦争の直接の要因を作ったのは日本なのか、それともロシアなのか。残念ながら、これまでのところ研究史を振り返っても、両者の溝は埋まっていない。ロシアにおける日露戦争研究でも、日本における研究でも、議論は平行線をたどっている。より客観的にみられるはずの第三国の研究者にしても、その利用している史料によって、日ロのどちらかに偏る傾向が強い。

従来の日本における日露戦争研究では、たとえば古屋哲夫や大江志乃夫の研究でも、開戦時の日本側の主張をあまり批判せずに、ロシア側に戦争責任を負わせていた²⁵⁾。ロシア側の研究では、もちろん全面的に日本側に戦争責任がある²⁶⁾。最近の日本側の日露戦争研究では、伊藤之雄や千葉功のもので、日露の相互誤解が開戦に発展したとして、双方に開戦責任があると強調される²⁷⁾。最近のロシア側研究では、ルコヤノフが、当時のロシアの極東政策に重大な欠陥が存在したとして、ロシア側にも責任の一端があると吐露している²⁸⁾。

千葉やルコヤノフの研究を取り入れた最新の日本側の研究も披瀝しておかねばならない。加藤陽子は、日本側の責任論とロシア側の極東政策の問題点を理解した上で、「(日露)戦争を避けようとしていたのはむしろ日本で、戦争を、より積極的に訴えたのはロシアだという結論」を導き出している²⁹⁾。

筆者の立場は、こうした研究とは一線を画する。日本陸海軍は、戦争の半年以上前からロシアとの戦争に向けて周到な準備を始めた。軍人たちの根底にあるのはロシア脅威論であり、アジアにおけるロシアの軍勢力が日本を上回る前に、ロシアの機先を制しようと考えた。ロシア側に内在する交渉中の回答遅延などの問題点を認めながらも、主に日本側の積極的な軍事戦略の結果が開戦につながった、とみなしている³⁰⁾。

和田春樹は、ロシア側が極東政策で日本の攻撃的な態度を十分理解しておらず、日本の対応を見誤ったと断言する。とはいえ、基本的にロシア側には朝鮮半島侵略の意図はなく、日本との戦争回避に向けて努力していた、と強調する。ロシア側に戦争責任はない³¹⁾。ロシア側史料を丹念に読み解き、こうした結論を導き出した和田の功績は非常に大きい。

25) 古屋哲夫『日露戦争』(中公新書、1966年)、大江志乃夫『日露戦争の軍事史的研究』(岩波書店、1976年)など。

26) ロストーノフ編『ソ連から見た日露戦争』(原書房、1980年)

27) 伊藤之雄『立憲国家と日露戦争』(木鐸社、2000年)、伊藤之雄『山県有朋: 愚直な権力者の生涯』(文春新書、2009年)、伊藤之雄『伊藤博文: 近代日本を創った男』(講談社、2009年)、千葉功『旧外交の形成: 日本外交1900-1919』(勁草書房、2008年)

28) イーゴリ・ルコヤノフ「ベゾブラゾフ一派: ロシアの日露戦争への道」『日露戦争研究の新視点』(2005年)、63-72頁。

29) 加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』(朝日出版社、2009年)

30) 稲葉千晴「日露戦争の準備: 軍事的視点から」『都市情報学研究』Vol.7 (2001年)、41-52頁。稲葉千晴『暴かれた開戦の真実: 日露戦争』(東洋書店、2002年)。

31) 和田春樹『日露戦争: 起源と開戦』上下、(岩波書店、2010年)。

日露戦争の戦争責任に関しては、日本において 1980 年代までのロシア責任論から、日露戦争百周年を経て、徐々に日本責任論に移行しつつあるのではなかろうか。和田春樹説が全面的に支持されるかどうかは議論の分かれるところだが、すくなくとも日本側の戦争責任がロシア側より大きいことだけは間違いない。

戦争責任に関する韓国の立場も紹介しておこう。韓国は、日露間の紛争で中立を標榜していたにもかかわらず、開戦直後に日本軍によって強制的に占領されてしまった。強引に日韓議定書を結ばされ、日本の保護国にされてしまう。そのため韓国は日露戦争の純粋な被害者だ、という研究が圧倒的である³²⁾。もちろん、これに異を唱える者はいない。ただし、日本とロシアに挟まれて、韓国の選択肢は限られていたものの、中立を維持することも可能だったのではなか、という研究は存在する³³⁾。

4. 日本の戦争目的

「祖国防衛戦争」が正しくないとする、日本はいかなる目的を持って日露戦争を始めたのだろうか。「植民地侵略戦争」からすると、当初から日本は朝鮮半島と満洲の侵略を目的としていた、と単純に結論を出すこともできよう。ちなみに 50 年前の研究では、レーニンと帝国主義論の必然として、日本は朝鮮半島と満洲の市場を必要としていた、と説明されている。戦争目的を主導した勢力がブルジョアジーなのは当然の帰結である。さらに、戦争目的は満洲だったのか、あるいは朝鮮半島だったのか、それとも双方の獲得が目的だったのか、議論が戦わされた³⁴⁾。

唯物論の呪縛から解放された今日、日露戦争の目的を説明する際に独占資本主義を用いたりはしない。和田春樹の言葉を借りれば次のようになる。

日本は宣戦布告で「韓国ノ保全」のためにロシアと戦うと宣言したが、その実は、日本が朝鮮を自らの支配下に置き保護国とした上で、それをロシアに認めさせることを目的とする戦争を進めた³⁵⁾。

32) 井口「東アジア世界の中の日露戦争：韓国・朝鮮からの視点を中心に」、海野福寿『韓国併合』（岩波新書、1995 年）、海野福寿『韓国併合史の研究』（岩波書店、2000 年）、崔文衡『日露戦争の世界史』朴菫熙訳（藤原書店、2004 年）。

33) 李盛煥「韓国の中立政策と日露戦争」『日露戦争研究の新視点』、278-291 頁。

34) 信夫清三郎・中山治一編『日露戦争史の研究』新版（河出書房新社、1972 年）

35) 和田『日露戦争』下、373 頁。

日本の戦争目的は朝鮮の保護国化だ、という点で多くの研究者が一致している³⁶⁾。しかし、そうすると日本が満洲に兵を進め、ロシアと戦った説明がつかない。日本軍が朝鮮半島を軍事占領した段階で、目的は達成されたとして戦闘を止めることも可能だったからである。

日本が朝鮮だけではなく南満洲に軍隊を進出させたことを説明するため、「満韓不可分論」や「満韓交換論」という議論が必要となった。「満韓不可分論」とは、ロシアが満洲を占領して韓国の中立を提案したのに対して、日本が満洲と韓国の問題は不可分であるとして、韓国だけでなく満洲の確保も必要だと主張した議論である。この論理によれば、日露戦争は最初から不可避だという結論になる。一方「満韓交換論」とは、満洲はロシアの利益範囲と日本が認める代わりに、韓国は日本の利益範囲とロシアが認めるという論法である。これがロシアに受け入れられれば戦争は回避できるはずだったが、現実には交渉が不調に終わったため戦争が始まった、と説明される。千葉功は、この2つは対立する概念ではなく、前者が満洲と韓国は不可分であるという現状認識であり、後者がその対処法である、と説明している³⁷⁾。ただしロシア側は、満洲占領はロシアと清国の二国間の問題であり、日本には無関係だと認識していた。韓国にも利害を有するロシアが、日本による「満韓交換論」を受け入れる余地がないのは、当然である。逆に言えば、坂野潤治が指摘しているとおおり、日本が「満韓交換論」をロシアとの交渉で使うと決めた段階で、日露間の開戦は必然となった。この論法は開戦回避論者に開戦を納得させるための国内的ポーズだった、と坂野は強調している³⁸⁾。とにかくこの論法では、自らの利益範囲である韓国を占領し、満洲を不法に占領するロシアを同地から排除するため、日本は朝鮮半島と満洲に派兵したことになる。

この論法にも疑問が残る。1903年8月以降、日本はロシアと「満韓交換論」で交渉をした際に、満洲利権の放棄を提案した。日本にとって朝鮮半島こそが目的であり、満洲はその交換条件に過ぎなかった。その交換条件のために、危険を冒してまで、満洲に踏み込むのだろうか。日本の満洲進軍には、それ以外の論理が必要であろう。そのヒントは、日本陸軍の対露作戦計画にあった。

陸軍参謀本部の作成した1903年12月の対露作戦計画では、第1期が朝鮮半島の軍事占領となっている。1ヶ師団を投入して作戦が完了し、黄海および日本海の制海権を確保でき次第、第2期の満洲における作戦を開始する³⁹⁾。満洲における作戦とは、1904年2月に策定されたものであるが、第一に、満洲において日本陸軍主力をもって、ロシア野戦軍の主力を撃破する。当面の攻撃目標は満洲南部の都市遼陽である。第二に、ロシア沿海州のウスリー地方（満洲と

36) 井口和起『日露戦争の時代』（吉川弘文館、1998年）、66-67頁。海野『韓国併合』125-26頁。千葉、前掲書、65頁。原田、前掲書など。

37) 千葉、前掲書、61-64頁。

38) 坂野潤治『近代日本の出発』（新人物往来社、2010年）352頁。

39) 参謀本部編『明治三十七・八年秘密日露戦史』（巖南堂書店、1977年）第1、92-95頁。

の国境地帯)に1師団を送り、敵を牽制する⁴⁰⁾。当面というならば、最終の軍事目標も存在するはずだが、どこにも書かれていない。ヒントは、1900年に作られた対露作戦計画の研究案である。その第2案において、約10ヶ師団を投入して、満洲の中央に位置するハルビンを占領する、と記されている。ハルビンは、ロシア東清鉄道本線(満洲里ーウスリースク)の中央に位置し、しかも南部支線(ハルビンー旅順)の起点となっている。同地を占領すれば、ウラジオストクと旅順という太平洋岸のロシア二大海軍基地と本国との連絡を絶ちきることができる⁴¹⁾。

陸軍の総師団数が13であり、また国土防衛にも数師団は国内に残しておかなければならないため、10ヶ師団といえれば日本が海外に派遣できる最大兵力である。逆に決して小さくない朝鮮半島を占領するのに1師団だけというのならば、陸軍は韓国において大規模な戦闘を予想していなかったことになる。ロシアと決戦することなしに、朝鮮半島は占領できると考えていた。もちろん韓国を敵とみなしていない。陸軍が想定するロシアとの決戦は、満洲のハルビンにおいてであり、そこには自らの有する全兵力を投入する覚悟であった。

結果をみてみよう。1905年3月10日、陸軍はロシア軍を駆逐して奉天を占領した。この奉天会戦直後の同月23日、山県有朋参謀総長は政府に「政戦両略概論」を提出する。陸軍は消耗が激しいため満洲におけるこれ以上戦闘を続けられない、以後政府がロシアとの講和を画策してほしい、という内容であった⁴²⁾。陸軍首脳は主力をそれ以上北上させ、ハルビンに温存されているロシア軍主力との決戦を断念した。陸軍は作戦目標を達成できなかった。陸軍が主導した作戦は失敗に帰したことになる。

5. 日露戦争の外交目的と戦略目標：結びに代えて

日露戦争の目的は韓国の保護国化であった。明治時代の東アジアにおける日本外交の究極の目的が、朝鮮半島を日本の支配下に置くことだったからである。そうした外交目標を達成するためには、韓国におけるロシアの影響力を排除する必要がある。その手段として、1903年6月23日の御前会議で、まずはロシアと外交交渉をはじめめることを決定した。ただし、その際に、外交交渉がうまくいかなかった場合、軍事力を行使してまでも、韓国からのロシア勢力の一扫が決められた。「満韓交換論」という外交交渉における日本政府の基本方針が定まったが、これは政府内にも存在する戦争反対派を説得するための便法であった。

1903年8月12日、日本は御前会議の方針に従い、満韓交換を提案した。10月3日、ロシアは日本の満韓交換という提案を無視して、韓国問題だけに限定した第一次回答を日本側に示し

40) 同第1、111-112頁。

41) 同第1、81-82頁。

42) 『山県有朋意見書』大山梓編(原書房、1966年)。

た。北緯 39 度以北の朝鮮半島を中立化するという文面が入っていることから、朝鮮半島南部における一定程度の日本による支配は認められたことになる。もちろん、それで日本側が満足するはずはない。12 月 11 日、ロシアが外交交渉の第二次回答において、日本による韓国の保護国化を認めないという返事を繰り返した。その時点で、日本の軍部は対ロシア戦争に向けた最終の準備を開始した。1904 年 1 月 6 日の第三次回答でも、ロシアは基本的に態度を変えなかったため、日本政府は 1 月 12 日の御前会議で、開戦を決定した⁴³⁾。以後の日露交渉は、日本が開戦準備を完了するまでの時間稼ぎと見てよい。

日本政府が外交交渉で外交目的が達成できないと判断する以前の 1903 年 12 月、陸軍は具体的な軍事作戦を策定した。それは、第一期の作戦で、日本軍が朝鮮半島からロシア勢力を排除して、軍事的に占領するという内容だった。陸軍参謀本部は、第一期の作戦はロシア軍部隊が朝鮮半島およびその周辺にほとんど駐屯していないため、容易に達成できると考えていた。それゆえ、1ヶ師団の派遣で十分だと判断した。その判断は間違っていなかった。現実に 1904 年 2 月に軍事行動を開始すると、日本はロシア軍の抵抗なくして、朝鮮半島を占領することができた。ただし軍事力を行使すれば、ロシア側の反撃も考慮しなければならない。ロシア陸軍の主力は満洲にある。それを軍事的に粉碎しないかぎり、朝鮮半島へのロシアの脅威が消えることはない。東アジアにおけるロシアの軍事的な脅威を排除するため、1904 年 5 月、日本陸軍は第二期の作戦である満洲進攻を決行した。戦略目標は、満洲に駐留するロシア野戦軍主力を打破して、ハルビンを占領することであった。そうすれば、シベリア鉄道が完成しても、ロシアは極東に大部隊を派遣できなくなる。日本による朝鮮半島の保護国化に対する最大の脅威、ロシア軍による韓国侵攻が不可能となるはずだった。日本の韓国支配が安泰となるはずであった。

ところが陸軍の第二期作戦は失敗した。1905 年 3 月、陸軍は満洲南部の軍事拠点である奉天を占領し、満洲南部からロシア軍を排除できたものの、ハルビンにあるロシア野戦軍主力の打破を断念したのである。朝鮮半島を占領する日本軍にとって、ロシアの軍事的脅威は解消されていない。占領した韓国を確保するため、日本は別の方法を考えなければならなくなった。ロシアとの和解と、朝鮮半島への日本陸軍部隊の恒久的な駐留である。日露戦争後に日本が満洲南部におけるロシア利権の引き継いだのは、満洲進出への足掛かりを得たのは、当初からの目的ではなく戦争の副次的な産物に過ぎない。

ロシアも、国内で革命が起きたために戦争継続を望んでおらず、1905 年 9 月 5 日にポーツマスで日本と講和条約を締結した。そこでロシアは日本が韓国を保護国とすることを承認している。すでに 8 月 12 日に第二次日英同盟が締結されており、日本は韓国の保護国化をイギリスにも認めさせていた。一方で日本は、日露戦争勃発時に送り込んだ韓国臨時派遣隊を韓国駐劄軍と編成変えて、朝鮮半島に駐留させた。日露戦争終結時には、約 2 万 8 千人の陸軍部隊が朝

43) 和田『日露戦争』下、119-296 頁。稲葉「日露戦争の準備」41-52 頁。

鮮半島に留まっていたことになる⁴⁴⁾。韓国保護国化に必要な外国からの承認と、保護国化を陰で支える軍事力の維持が確保された。同年 11 月 18 日、第二次日韓協約が締結され、韓国の保護国化が確定する。日露戦争の外交目的が達成された。

本稿で強調したいことは 3 つある。第 1 に日露戦争は韓国の保護国化を狙った「植民地侵略戦争」であった。第 2 に日露戦争の戦争責任はロシア側でなく日本側にある。第 3 に日露戦争における日本陸軍の戦略目標はロシア軍の打倒であり、韓国制圧ではなかった。第 3 の論点に若干の補足説明を加えると、当初朝鮮半島に上陸した日本陸軍部隊は、韓国からのロシア軍排除を狙っており、その後駐留した日本軍は、満洲でのロシアとの決戦に向けた兵站部隊であった。日本の韓国駐劄軍が韓国保護国化、すなわち韓国人弾圧のための軍隊と変貌するのは、日露戦争終結後から第二次日韓協約までの時期ではなかろうか。

■ 투 고 : 2010. 5. 31.

■ 심 사 : 2010. 6. 12.

■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

44) 海野『韓国併合史の研究』117 頁。

朝鮮総督府官僚の任用制度と俸給制度*

—朝鮮・台湾・本国、交錯する法域と民族—

岡本真希子**

okamotom@mti.biglobe.ne.jp

<要旨>

本稿は、内地人・朝鮮人官僚の両者の存在に着目しながら、朝鮮総督府のなかに刻み込まれた民族矛盾に焦点を当てて検討する。第1章で官僚組織を貫く身分秩序と民族構成、第2章で任用制度について文官任用令と朝鮮人特別任用令、第3章で俸給制度について本俸と植民地在勤加俸を分析対象とする。その際には、「内地延長主義」型制度と「特別統治主義」型の制度とに分類しながら、その適用法域・民族に着目して検討し、両者の併用がもたらす作用を考察する。また、本国および台湾との関連をも視野に入れながら検討することで、他地域との共通点と朝鮮固有の問題点を照射する。

キーワード：朝鮮総督府、任用制度、俸給制度、法域と民族、台湾・本国

はじめに

朝鮮総督府は、支配民族である内地人官僚のみならず、その官僚組織内部に一定程度の朝鮮人官僚を包容しており、複数の民族から構成される組織であった。しかしながら、内地人官僚と朝鮮人官僚の間には、対等平等の関係ではなく、両者の間には、さまざまな溝が横たわっていた。本稿の目的は、朝鮮総督府の制度のなかに埋め込まれた民族矛盾の諸相を浮かび上がらせることにある。

朝鮮総督府官僚に関する研究は、近年注目を集めつつあり、研究も蓄積されつつある。しかし、従来の研究においては、その分析対象は概して内地人官僚と朝鮮人官僚は個別に進められてきたといえる。

内地人官僚に関しては、総督・政務総監・局長クラスなど一部のトップ官僚や政策史のキーパーソンなどの構想や思想を検証するものや¹⁾、高級官僚の人事を人脈や派閥・人間関係や「人

* 本稿は、岡本真希子『植民地官僚の政治史—朝鮮・台湾総督府と帝国日本』（三元社、2008年）を下敷きとし、韓国日本学会の企画セミナー「韓国と日本—100年の回顧、100年の展望—」第4回セミナー（2010年3月20日、ソウル）で筆者が報告した「朝鮮総督府官僚の任用制度と高級官僚の異動動態」をもととし、さらに当日の議論を踏まえ、報告の前半部分を中心に筆者が整理・再構成して本稿を執筆した。コメンテーターの李盛煥先生・趙容来先生・李明賛先生・保坂祐二先生より貴重なコメントをいただいたことに対して、ここに謝意を表する。

** 台湾国立成功大学 研究員

1) 個別の官僚の政策構想や人脈などに着目したものとして、松田利彦・やまだあつし編著『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』（思文閣出版、2009年）、参照。

的ネットワーク」に着目し分析する手法²⁾、あるいは、複数の植民地を「周流」する人材への着目するものなど³⁾がある。しかし、人脈論から抜けおちる平凡な官僚たち、本国や他の植民地との「周流」もなく朝鮮内部に“固着”するようにして官僚生活を送る膨大な官僚たちの存在は看過されてきたといえる。そして、これらの官僚たちを植民地朝鮮に引き寄せ留め、続けることを可能とした、植民地官僚制度に関する究明は十分ではない。

朝鮮人官僚に関する研究も進展しつつあり、「支配政策史対民族運動」という二項対立図式に回収しきれない「植民地認識の「グレーゾーン」」⁴⁾というべき領域にスポットがあてられつつある。これらは、植民地期の朝鮮人の多様な経験を照らし出す上で貴重な成果を生み出しつつあるが、他方で、朝鮮人官僚のみを対象とすることで内地人官僚との相関関係が見えにくく、また、「植民地公共性」や「植民地近代性」などに議論が収斂しがちで⁵⁾、植民地という固有の磁場の作用が背景に遠のくきらいがある。

異なる民族集団を内包した巨大な官僚組織である朝鮮総督府は、そのなかに民族矛盾をいかに刻み込んでいたのか。本稿では、こうした点を明らかにするために、朝鮮総督府を貫く身分秩序とその民族構成を概観したのち(第1章)、任用制度(第2章)と俸給制度(第3章)を中心に検討を行う。その際には、本国と同様に適用された「内地延長主義」型制度と、本国とは異なり植民地に固有に制定された「特別統治主義」型の制度とに分類しながら⁶⁾、その適用法域と適用民族に着目しながら検討してゆく。

なお、朝鮮総督府の諸制度は、1895年に日本の植民地とされた台湾の諸制度が関連することがある。したがって以下では、朝鮮総督府と関連する限りにおいて、適宜、台湾総督府について言及する。このことは、朝鮮と台湾を単純に比較して植民地支配を相対化するという意図からではない。いかなる点が他地域と共通し、いかなる点が朝鮮に固有の問題であるかを明らかにすることは、一方で帝国日本の植民地支配の特色を浮き上がらせ、他方で、より朝鮮に即し

- 2) 加藤聖文「植民地統治における官僚人事－伊澤多喜男と植民地」(大西比呂志編『伊澤多喜男と近代日本』芙蓉書房、2003年)。
- 3) 山室信一「植民地帝国・日本の構成と満州国－統治様式の遷移と人材の周流」(ピーター・ドウス・小林英夫編『帝国という幻想』青木書店、1998年)・「『国民帝国』論の射程」(山本有造編『帝国の研究』名古屋大学出版会、2003年)・「出版・検閲の態様とその遷移－日本から満州国へ」(『東洋文化』第86号、東京大学東洋文化研究所、2006年)、参照。
- 4) 尹海東「植民地認識の「グレーゾーン」」(『現代思想』2002年5月号、青土社)。
- 5) 例えば、並木真人「植民地期朝鮮における「公共性」の検討」(三谷博編『東アジアの公論形成』東京大学出版会、2004年)、同「「植民地公共性」と朝鮮社会－植民地期後半期を中心に」(朴忠錫・渡辺浩編著『「文明」「開化」「平和」』慶應義塾出版会、2006年)、松本武祝『朝鮮農村の〈植民地近代〉経験』社会評論社、2005年)。これらの研究状況と問題点については、趙景達『植民地期朝鮮の知識人と民衆－植民地近代性論批判』(有志社、2008年)、岡本真希子「植民地期の政治史を描く視角について－体制の内と外、そして「帝国日本」」(『思想』No.1029 [「韓国併合」100年を問う』特集号)、岩波書店、2010年1月号)、参照。
- 6) 植民地統治政策における「内地延長主義」と「特別統治主義」については、春山明哲「近代日本の植民地統治と原敬」(春山明哲・若林正文『日本植民地主義の政治的展開－1895～1934』アジア政経学会、1980年〔春山明哲『近代日本と台湾』藤原書店、2008年に収録)、参照。

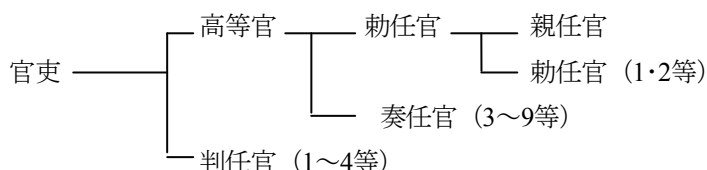
た理解を深めることに役立つと考えるからである。

1. 身分秩序と民族構成

(1) 官吏の身分秩序⁷⁾

植民地官僚制度の形成は、台湾総督府の設置（1895年）を嚆矢とし、朝鮮には朝鮮総督府、樺太には樺太庁というように、地域ごとに支配機構たる植民地官庁を設置しながら膨張していった。これらの植民地の官僚制度は、基本的にはすでに本国（「内地」）で形成されていた官僚制度の体系が持ち込まれていった。

朝鮮総督府も含めて、帝国日本の植民地官僚制度は、本国の官僚制度の身分秩序を持ち込んだもので、官等により天皇からの身分的距離が厳密に区分されていた。官吏は、下記に示すように、大きくは、高等官と判任官に分かれていた（上段ほど身分が高い）。それぞれが、高等官×等、判任官×等、などというように、官等に厳然と区分され、身分秩序が明確にされていた。高等官は、親任官を除く高等官が1等から9等に分けられ、1・2等は勅任官、3～9等は奏任官とされた。判任官は奏任官の下に位置し、一般的には、高等官・判任官を合わせて、官吏と呼ぶ。そしてこの下に、正規の官吏とはいえない雇員・傭人などが存在した。

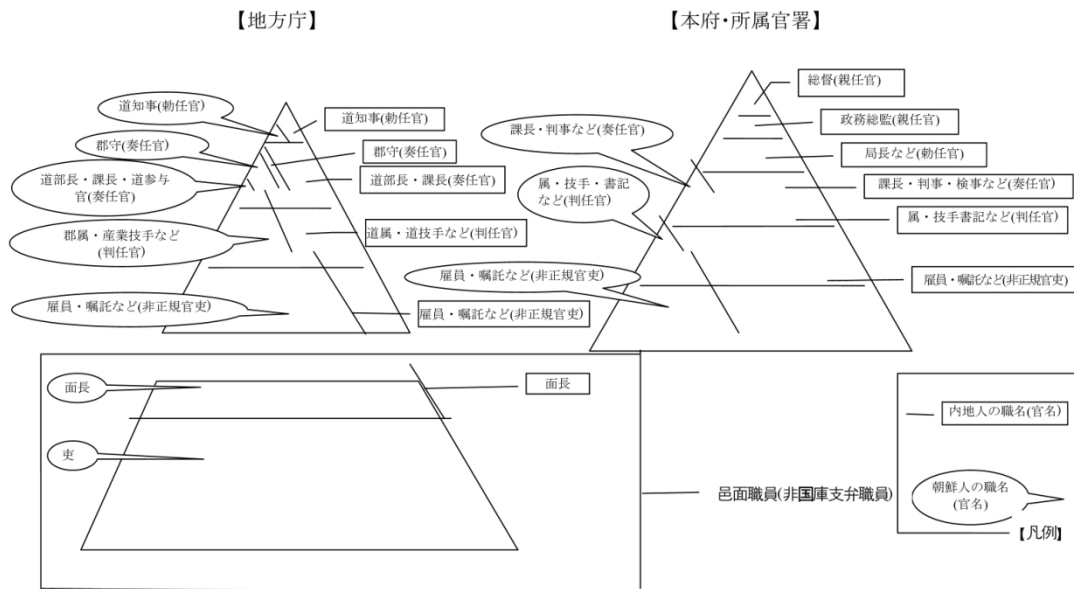


朝鮮総督府における階級別民族構成を、1929年を例に作図したものが【資料1】である。最高位の親任官は、全朝鮮を通じて朝鮮総督・政務総監の2人だけである⁸⁾。本府においては、親任官の下にある勅任官（高等官1・2等）は局長クラスに該当し、奏任官（高等官3～9等）は各局内に設けられた課長や裁判所の判事・検事など、判任官は属・技手・書記などが該当した。地方庁では、勅任官は朝鮮全土13道の道長官が該当し、奏任官は全朝鮮で218あった郡の郡守のほか、各道に設置された道庁の各部・課長、および各道の道参与官が該当した。その下には、道や郡の各地方官庁の属や技手などが判任官として勤務していた。一見しただけでは、複雑かつ無味乾燥に見えるこの官等は、官僚世界においては絶対的な意味を持つものであった。

7) 本節は、前掲『植民地官僚の政治史』第1章をもとにしている。

8) 台湾総督府の場合は、親任官は台湾総督のみ。政務総監（朝鮮）にあたる総務長官（台湾）は、親任官ではなく勅任官。台湾の各局長も高等官1等ではなく2等。道知事（朝鮮）に該当する州知事（台湾）も同様に高等官2等。概して、朝鮮より一段低く設定されていたといえる。

【資料1】朝鮮総督府の本府・地方庁職員の民族別階層図(1929 年頃)



注 本図は、『旧植民地人事総覧』朝鮮編(日本図書センター、1997年)、岡本真希子『植民地官僚の政治史』(三元社、2008年)671~676頁をもとに、岡本作成。

(2) 階級別の民族構成⁹⁾

朝鮮総督府は、帝国日本の官僚機構のなかでも第一の規模を誇る巨大官庁であった。例えば1926年末日現在の時点では、本国・植民地の全官庁の官僚数(国費支弁職員)の総計148,014名のうち、朝鮮総督府は28,657名で、全体の約19.4%もの比率を占めた¹⁰⁾。

このような巨大官庁であった朝鮮総督府の全職員数は、嘱託・雇員まで把握できる1913年には2万3千名強、1942年には10万名を超える規模となり、官僚組織の膨張が確認しえる。ただし、官僚組織の肥大化や官僚数の膨張は、植民地に固有の現象ではない。水谷三公の指摘によれば、日本の官僚総数(勅・奏・任官の合計)は、台湾領有の年である1895年には36,393名であったが、敗戦の年の1945年には373,238名と約10倍にまで膨張している。官僚数は明治期後半からは次第に漸増を重ね、途中で「大正末から昭和初年には、いわゆる昭和恐慌や憲政会・民政党系内閣による行革もあって、政府規模は停滞に入る」が、その後に軍部が台頭するなかで、軍部に「理解と同調を示す官僚が勢いを得る」につれて、「昭和十年代には政府規模も急激な膨張」に転じ、戦時期には統制経済が国生活をおおってゆくなかで官僚数も急膨張し、「一八八五年の内閣発足から一九三〇年までの四五年間に、文官総数は三倍強(三・三倍)に増えたが、それから敗戦までの僅か一五年で、それがまたほぼ三倍(二・九倍)に増えている」という状況

9) 本節は、前掲『植民地官僚の政治史』第1章、岡本真希子「朝鮮総督府官僚の民族構成に関する基礎的研究—民族問題と民族格差の内包—」(日韓歴史共同委員会編『日韓歴史共同委員会 第2期報告書』第3分科会編(近現代史)、2010年3月)、をもとにしている。

10) 内閣統計局編纂『第四十六回日本帝国統計年鑑』(内閣統計局、1927年)598~599頁。

であった¹¹⁾。こうした変遷は、さきにもみた朝鮮総督府の増加傾向とも軌を一にしている。

しかしながら、朝鮮総督府の場合は、その膨張部分の一端を朝鮮人官僚が占めていたことから、本国とは異なり官僚組織内部に民族問題を包含することとなった。とりわけ1930年代以降には、朝鮮人官僚や下級職員の増大が顕著なため、従来の研究でこの時期が注目が集めてきたことは、一面では首肯できる。ただしこの時期の官僚組織の膨張は、内地人官僚によっても担われており、このことは、両者の関係を見る上でも注意を要する。したがって、以下では、両民族の量的格差に注意して概観してゆく。

各階級における民族構成は、親任官・勅任官は、朝鮮人は1913年39名から1942年は38名でほぼ横ばい状態であったが、内地人は1913年44名から1942年129名へと約3倍に増加し、内地人優位のまま両者の量的格差は時代とともに大きく拡大した。奏任官では、朝鮮人は1913年は305名、1942年には404名で約100名の増加、内地人は1913年は700名、1942年には1883名と1,200名弱の増加で、内地人優位の両者の量的格差もやはり大きく拡大していった。判任官では、朝鮮人は1913年は4,048名、1942年には15,479名へと約11,400名の増加を見た。しかし内地人は、1913年は7,708名、1942年には32,627名となり、約24,900名も増加し、ここでも内地人優位の両者の量的格差は次第に広がった。これらとは逆に、雇員の場合では、内地人は1913年は5,709名、1942年には21,749名、朝鮮人は1913年の4,651名から1942年の29,162名へと増加し、朝鮮人雇員が内地人雇員を凌駕していった。

総数を見る限りでは、朝鮮人職員数は1930年代後半の総力戦体制期には内地人職員数に迫る勢いを見せ、内地人・朝鮮人の関係は拮抗してゆくかのようにも見える。しかし、階級別に見ると、朝鮮人職員数の増大部分は主に雇員が担っており、上層部の増大部分は内地人数の優位が維持されたまま、朝鮮人との格差はむしろ拡大していったといえる。

朝鮮総督府の本府と地方庁の民族構成を概観すると、朝鮮総督が勤務し各局が設置されていた支配機構の本丸たる本府では、どの階級でも一貫して内地人が大部分を占有していた。次に、全朝鮮規模で支局や分署を有する鉄道・通信・専売・税務など現業職員を多く抱える所属官署では、高等官・判任官では内地人の量的優位が保持された一方で、特に戦時下では現業部門における朝鮮人嘱託・雇員の増大が確認できる。道・郡などの地方庁では、内地人高等官数の増大と朝鮮人高等官数の横ばい状態、判任官における朝鮮人・内地人の増大、および内地人に対して朝鮮人が戦時下においても3分の2強の比率を保持していたこと、嘱託・雇員においてはつねに朝鮮人が多数であったことがわかる。

本府における内地人の占有、および地方庁においても内地人高等官の増大、現業機関・地方庁における朝鮮人下級職員の増大、地方庁における朝鮮人官僚群の存在というように、本府・地方庁という勤務地によって、また官吏の階級によって、民族構成は異なっていた。

11) 水谷三公『官僚の風貌』（中央公論新社、1999年）46～47頁。

2. 任用制度

朝鮮総督府官僚の任用制度は、大別すれば、①本国同様の制度が適用された「内地延長主義」型のもの、②本国とは異なり植民地に固有の制度が制定された「特別統治主義」型のものがあり、この両者が混在した制度になっていた。以下では、(1)「内地延長主義」型のものとして、文官任用令を、(2)「特別統治主義」型のものとして、朝鮮人に対象を限定して制定された朝鮮人特別任用令について、検討する。

なお、文官任用令も特別任用令もともに勅令で制定されたが、文官試験・文官任用・文官分限に関する勅令は、植民地官庁には独自に制定する権限がなく、内閣・枢密院と植民地官庁などの複数のアクターが介在する仕組みとなっていた¹²⁾。

(1) 文官任用令¹³⁾—「内地延長主義」型制度

① 適用法域の拡大

植民地領有以前、本国においてはすでに官吏任用制度の基本原則が制定されていた。1889年に制定・公布された「大日本帝国憲法」では、「日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ応シ均ク文武官ニ任セラレ及其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ得」（第19条）として、「日本臣民」に官吏となり得る機会を均等に与えるとしていた。その任用制度は主として、試験に合格し資格を有するものから任用する「試験任用」、特殊な技術を持つものに関して任用資格を設ける「特別任用」が用いられていた。

そして、1893年の「文官任用令」（勅令第183号）制定により、奏任官と判任官の任用資格は体系化された。すなわち、奏任官は文官高等試験（略称は高文）の合格者（有資格者とも言う）、判任官は文官普通試験（略称は普文）と高等試験の合格者より任用する「試験任用」が基本とされたのである（ただし判任官の場合は、学歴・勤務経験などにより採用される方法もあり、任用方法は比較的多岐にわたる¹⁴⁾）。このように、既に台湾領有以前の本国において、「試験任用」を原則とする官吏任用制度がほぼ確立されていた。ただし、文官任用令は台湾領有以前に制定されたため、その適用法域は明記されていなかった。

植民地官僚の任用制度は、台湾総督府が嚆矢となった。日清戦争の結果領有した台湾にいかなる官吏任用制度を導入するのか、あらかじめ何らかの準備がなされていたわけではなく、文官任用令の適用可否も明確ではなかった。領有当初の台湾総督府は、台湾人を官僚として任命

12) 岡本真希子「枢密院と植民地問題」（由井正臣編著『枢密院の研究』吉川弘文館、2003年）、前掲『植民地官僚の政治史』第2章、参照。このほか、大蔵省・内務省・拓務省などが介在する場合もあった。

13) 本節は、前掲『植民地官僚の政治史』第5章をもとにしている。

14) 日本公務員制度研究会編著『官吏・公務員制度の変遷』（第一法規、1989年）55～57頁。戦前期官僚制研究会編・秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』（1981年、東京大学出版会）664～665頁。

せず、本国から急ごしらえで内地人官僚をかき集めた。そのため、当初は文官任用令に依らず試験任用制度も適用されず、確たる基準を欠きながら移行した。その結果、台湾官界の疑獄事件や腐敗ぶりが本国で政治問題化し、また、台湾官界のポストが本国の獵官熱の対象となったりした。こうした過渡期をへて、児玉源太郎総督のもと、1898年8月13日に本国同様に文官任用令に依る官吏任用が原則とされた¹⁵⁾。

なお、本国でも勅任官に関しては、当初は明確な任用資格がなく政党の獵官行動の背景となり政治問題化していたが、1899年に文官任用令が改正され、これ以後の勅任官の任用資格も、やはり高文合格者もしくは勅任官経験者に限定された¹⁶⁾。文官任用令の適用地たる台湾においても同様の措置が取られることとなった。

このように、「韓国併合」以前に台湾において、植民地にも文官任用令を適用し、「試験任用」制度による官吏任用という方針が採用されており、以後、台湾以外の植民地においても同様に、文官任用令が植民地官僚制度の基本とされていった。1915年の内閣法制局の文書では、文官任用令の適用範囲につき、「文官任用令ハ固ヨリ其ノ法域ニ制限ナク朝鮮ト内地其ノ他トヲ問ハス遍ク其ノ効力ヲ有スルモノ」といい¹⁷⁾、植民地・本国を問わず官僚任用制度の原則は、同一の体系たる文官任用令の下におかれていった¹⁸⁾。

② 適用民族の拡大

では、文官任用令は、民族を問わずに適用され得るのか。植民地領有以前に制定された文官任用令には、適用法域のみならず、適用対象とする民族も明記していなかった。適用対象民族が問題化するのには、管見の限り、植民地出身者の本国官庁への採用可否が浮上した大正期以後のことである。1915年に法制局書記官長から内閣書記官に宛てた文書¹⁹⁾では、「文官任用令ヲ始メトシテ凡ソ内地ノ各官ニ付テ存スル各種ノ特別任用規程ヲ見ルニ特ニ朝鮮人又ハ台湾島人ノ任用ヲ禁スルノ趣旨ヲ明定シ乃至ハ之ヲ推測スルニ足ルヘキ規定ナキ」ため、植民地出身者の「内地」における任官を禁じる根拠を見いだし得ないと述べている。また、「政策上ノ当否得失ハ且ク之ヲ措キ我カ官吏任用制度ノ正面ノ理論トシテハ朝鮮人又ハ台湾島人ト雖日本

15) 「台湾総督府文官特別任用令及明治二十九年勅令第二百二十九号廃止」(明治31年勅令第190号)。ただし、判任官は、属を除いて文官任用令に拘わらず任用可能とする規定を暫定的に設置。その範囲を縮小し次第に「試験任用」の原則を拡大するという過渡的措置をとった。

16) 前掲『官吏・公務員制度の変遷』55～57頁、『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』664～665頁。

17) 大正4年7月23日法制局書記官長発・内閣書記官宛回答「朝鮮人又ハ台湾島人ハ判事検事其ノ他ノ内地官吏ニ任用スルコトヲ得ルモノトス」(国立公文書館〔日本〕所蔵『公文類聚』第39編・大正4年・巻7巻)。

18) 文官任用令は幾度か改正され、官吏の任用資格は微修正されたが、改正の争点は、本国における官僚一政党間における「自由任用」ポストをめぐる争争が中心(前掲『官吏・公務員制度の変遷』55～66・171～178・219～230頁、『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』664～665頁)。管見の限り、植民地問題や植民地関係のポストが争点となった形跡はなく、植民地官僚の任用制度には根本的な改変はない。

19) 前注18と同じ。

臣民トシテ内地人ト均シク各種ノ任用規程ニ依リ之ヲ内地官吏ニ任用シ得ルモノト解釈セサルヲ得サルカ如シ」として、「理論」上からいえば、「内地」官庁の官吏に任用可能との解釈を取らざるを得ないとしていた。

また、従来の植民地における官吏任用制度との整合性も問題とされていた。すなわち、朝鮮では「併合」時より特別任用令・文官任用令などに依り「朝鮮ノ官吏トシテ朝鮮人ヲ任用シ得ル以上ハ内地等ノ官吏トシテモ亦均シク之ニ依リテ任用シ得ルモノト謂ハサルヲ得ス」・「朝鮮人又ハ台湾島人ヲ文官任用令ニ依リテ内地官吏等ニ任用シ得ルノ結論ヲ生スルモノト謂ハサルヲ得ス」として、「内地」においてだけ朝鮮人・台湾人を官吏任用から排除するのは不可能としていた。植民地における植民地出身者の官吏任用という実態がある以上、本国においても植民地出身者の任用を排除することはできないというジレンマが生じていたのである。そして、結論として、「政策ノ見地ヲ離レ単ニ現行任用法規ノ法理上ノ解釈乃至ハ従来任用令適用上ノ権衡ヨリ謂ヘハ朝鮮人又ハ台湾島人ト雖尚内地官吏ニ之ヲ任用シ得ルモノト解スルヲ妥当トスヘキカ如シ」とし、「法理」上から解釈した場合、また、従来の植民地における任用制度との権衡からしても、「内地」での植民地出身者の任官は可能と結論づけていた。

こうして、本国の官庁における植民地出身者の任用を法理上は排除できないという解釈が1915年には明確にされた。翻って見れば、法理上は、植民地出身者にも本国の諸官庁の門戸は開かれていたこととなる。従って、朝鮮人・台湾人が本国官庁に就職するか否かは、それを彼等が志望するか否かという問題であるとともに、最終的には、彼等を採用するか否かという権限を持つ本国官庁側の判断—「政策ノ見地」—の領域であった。

③ 植民地出身者と高文試験²⁰⁾

文官任用令による試験任用の原則は、近代以降の日本において、近代以前（江戸時代）の士農工商による封建的身分制度からの解放と、試験による機会均等をもたらすものといわれる。資格試験たる高文は、受験資格を満たした者であれば受験可能であったため、一見すると“機会均等”の装いをこらし、“平等”原則が貫徹されていたように見える。しかし、この制度を植民地に「内地延長主義」的に適用する際には異なる意味が生じる。

高文受験には一定の学歴もしくは資格が必要であり、内地人と植民地出身者ともに民族を問わず同じ要件が要求された。高文試験は予備試験と本試験から成ったが、第一関門たる予備試験を免除される者と、予備試験を受けねばならない者がある。予備試験免除のためには、高等学校高等科卒・大学予科卒などの学歴が必要であった。さらに、予備試験を受ける場合にも、その受験資格は中等学校卒業程度程度の学歴を基本とし、小学校卒業のみの学歴者の場合は、専門学校入学者検定試験（略称「専検」。植民地でも実施）もしくは高等資格試験（略称「高資」）

20) 本節は、前掲『植民地官僚の政治史』第6章をもとにしている。

で7科目合格などの資格が要求された²¹⁾。

しかし、植民地では義務教育制度も基本的には導入されず、初等教育ですらその就学率は本国とは著しく異なっていたため²²⁾、受験資格を満たすこと自体が困難を伴った。その上、試験はすべて「国語」たる日本語で行われた。植民地教育制度における「国語中心主義」について駒込武は、「比喩的にいえば、台湾人や朝鮮人はようやく日本人との競争の場に立つことを許されたものの、はるか後方からスタートすることを迫られた」もので、「“不自由な競争”」である上に、「そもそもこうした“競争”のルールを定めるのがもっぱら日本人」と指摘しているが²³⁾、高文試験においても、この指摘はあてはまる。植民地における大学の設置は極めて抑制され、そのうえ、高文の試験会場は本国の東京―「帝都」―のみであり、受験機会も均等に開かれていたとは言い難かった。このように、母語を「国語」とする内地人に比して、スタートラインにつくまでの長い距離、植民地の教育制度や進学課程における高い幾重ものハードルを乗り越えて、ようやく受験資格をクリアした者に対してのみ、高文受験＝“資格を獲得する機会”が与えられたのである。

就職への道のりも平坦ではない。高文は資格試験にすぎないため、合格したからといって、必ずしも官庁に就職する／できるとはかぎらなかつた。有資格者の採否は各官庁の裁量次第であり、この点は内地人・植民地出身者の有資格者とも同様である。しかし、採用する官庁側は、その殆どが内地人から構成されていた。本国の諸官庁・台湾総督府はもちろん、朝鮮の場合でも本府はほぼ内地人が占有する世界であり、次第に輩出されてゆく植民地出身の有資格者に対して、採用段階で生殺与奪権を握っているのは、すでに官僚制度を形成していた内地人の領域であった。

こうした制度を踏まえたうえで、朝鮮人の有資格者数を見てみる。最初に朝鮮人が高文に合格したのは1923年、それから戦前期最後の1943年の高文試験までに、合計133名が合格した。この133名という数字は、高文行政科の全合格者数＝合計9,565名（1894～1947年）のなかに占める割合はわずかに約1.4%にとどまる²⁴⁾。このうち、朝鮮総督府に就職したものは98名で、朝鮮人有資格者中74%に該当した。朝鮮人有資格者の大部分は朝鮮総督府に就職しており、本国官

21) 高文の予備試験免除者は、1918年「高等試験令」（勅令第7号）により、帝国大学法科大学卒業者のみから、官立私立を問わずに大学予科又はこれと同等以上と認められた学校の卒業生まで拡大された（第8条）。予備試験の受験資格については同令第7条に規定され、中等学校卒業生もしくはそれと同等の学力を保持する者とされ、後者（中等学校と同等の学力）については、「高等試験令第七条及第八条ニ関スル件」（文部省令第3号）で規定（前掲『官吏・公務員制度の変遷』178～179頁。山門學人「高等試験の総合的受験案内（一）」『受験界』1939年5月号、58～63頁）。

22) 義務教育制度は、台湾では1943年4月1日実施。朝鮮では1946年度より実施の旨が発表されたが、未実施のまま。初等教育については、本国の小学校の就学率は1900年代には約100%。しかし、台湾の「公学校」では男女平均で1920年＝25.1%、1930＝32.6%。朝鮮の「普通学校」は、男女平均で1920年＝4.4%、1930年＝17.3%。しかも男子と女子とでは大きな開きがあった（駒込武「植民地支配と教育」辻本雅史・沖田行司編『新体系日本史 16 教育社会史』山川出版、2002年、403・409～410頁）。

23) 前掲駒込「植民地支配と教育」419頁。

24) 台湾人の有資格者は1923年～1943年で合計32名。全有資格者に占める割合はわずかに約0.3%のみ。

庁の就職者は1940年代に増加はしたが大勢を占めるとはいえない²⁵⁾。「内地延長主義」的に適用された文官任用令は、法理上は可能としていた朝鮮人の本国官庁への就職のためには十分には機能しておらず、いわば朝鮮内のみの“地域限定”的な効果にとどまっていたといえよう。

(2) 朝鮮人特別任用令²⁶⁾—「特別統治主義」型制度

① 適用民族・法域の限定

官吏の任用制度のうち、試験による任用になじまないもの—教官・技術官など—や、特別な学術技芸を要するものの任用について、特別任用制度を採る場合があるが²⁷⁾、これに加えて、植民地官僚制度に固有の「特別統治主義」型制度として、朝鮮人・台湾人に適用対象に限定した特別任用令があった（以下、朝鮮人特別任用令、台湾人特別任用令と呼ぶ）。

1910年8月に「韓国併合」を断行した日本政府は、日本の国籍法（1899年法律第66号）を朝鮮に施行しないまま強制的に朝鮮人を日本国籍保持者＝「日本国臣民」とした²⁸⁾。そのため、朝鮮人を日本の官吏に任命することは、法理上可能となった。そして、「韓国併合に関する条約」において、「日本国政府ハ誠意忠実ニ新制度ヲ尊重スル韓人ニシテ相当ノ資格アル者ヲ事情ノ許ス限り韓国ニ於ケル帝国官吏ニ登用スヘシ」（第7条。傍点筆者）とし、従来の大韓帝国の官吏を、新たに日本帝国の官吏として登用する方針を明確にした。

ただし、その任用可能な法域は、条文に「韓国ニ於ケル帝国官吏ニ登用」とあるように、旧「韓国」に限定していた。朝鮮総督府設置以降に施行されてゆく各種の朝鮮人特別任用令においても（後述）、任用可能な官庁を「朝鮮総督府及其ノ所属官署」と明記し、その適用法域を朝鮮に限定しており、本国や台湾などの他法域での任官は対象外であった。台湾では台湾人特別任用制が未制定だったため²⁹⁾、朝鮮で朝鮮人特別任用令が制定されたことは、帝国日本の官

25) 前掲『植民地官僚の政治史』第6章、通堂あゆみ「植民地出身者の官界進出—京城帝国大学法文学部を中心に」（松田利彦・やまだあつし編著『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』思文閣出版、2009年）。

26) 本節は、拙稿「解説 朝鮮総督府・組織と人」（『東洋文化研究』第4号、学習院大学東洋文化研究所、2002年）、岡本真希子「枢密院と植民地問題」（由井正臣編『枢密院の研究』吉川弘文館、2003年）、前掲『植民地官僚の政治史』第5章をもとにしている。

27) 前掲『官吏・公務員制度の変遷』73頁。文官任用令第3条と第4条による。

28) 水野直樹「国籍をめぐる東アジア関係—植民地期朝鮮人国籍問題の位相」（古屋哲夫・山室信一編『近代日本における東アジア』（吉川弘文館、2001年）。

29) 台湾総督府の論理としては、台湾領有以前に台湾に赴任・勤務していた清国官吏は日本の領有時に台湾外へ去ったため、日本が引き継ぐべき官僚群は不在として、土着の台湾人の官吏登用を忌避した。また、「韓国併合」時には大韓帝国から引き継ぐべき官僚群があり、台湾と朝鮮とは日本領有時の歴史的経緯が異なるとして、両者の比較自体も忌避した。基本的に台湾人に対しては、本国同様の資格任用制度の原則を掲げ、台湾人特別任用令制定を拒絶していたが、1920年代に台湾人の政治・社会運動が活発化し、朝鮮との格差や内地人との差別待遇を批判する声が高まると、1922年に朝鮮人特別任用令の制度にならうとして、台湾にも台湾人特別任用制を初めて制定した。ただし、制定後も台湾人の任官は極めて抑制され、有名無実の制度となっていた（前掲『植民地官僚の政治史』第5章第4節（2）、参照）。

僚制度の中に、異なる文化・言語を持つ異民族の官僚群が、初めて大規模に現れることを意味していた。

「韓国併合」後、9月30日に「朝鮮総督府官制」（明治43年勅令第354号）が公布され、翌日に朝鮮総督府が設置された。前述の「条約」の方針に基づいて「併合」以前からの任官者を用いる方針が採られ、新たに官吏登用のための特別な資格試験を導入するような方策は採られなかった。朝鮮人の任用については、「朝鮮人タル官吏ノ特別任用ニ関スル件」（明治43年勅令第396号）が制定され、「朝鮮人」を適用民族としながら、韓国政府での任官者を引き続き朝鮮総督府及び所属官署の文官として任用できる制度を制定した。朝鮮総督府の官僚数は、基本的には朝鮮総督府官制で定められていたが、朝鮮人官僚の数については、「朝鮮人タル奏任官及判任官ノ増置ニ関スル件」（明治43年勅令第374号）で、予算の許容範囲内で、また奏任官は天皇の勅裁を経た上で、朝鮮総督が増置できることとなっていた。

また、地方庁の高等官については、道長官・郡守・道参与については、「朝鮮人タル朝鮮総督府道長官参与官及郡守ノ任用及官等ニ関スル件」（明治43年勅令第383号。以下、「朝鮮人高等官任用令」と略す）で、文官任用令を適用せず一試験任用を原則とせず一、「学識経験」者より銓衡任用する制度を制定した。朝鮮総督府は本府では朝鮮人を殆ど登用しなかったが、地方庁には特別任用令によって高等官にも朝鮮人を任官する制度を制定したのである。

ただし、朝鮮人官僚と内地人官僚は、対等平等の待遇にあつたわけではない。朝鮮人官僚の身分保障については、「朝鮮人タル文官ノ分限及給与ニ関スル件」（明治43年勅令第403号）で、「朝鮮人タル文官ニ関シテハ文官分限令及朝鮮台湾滿洲及樺太在勤文官加俸令ヲ適用セズ」（第1条）と定められた。文官分限令とは、1899年に山県有朋内閣により制定され（勅令第62号）、官吏の免官に対する身分保障を定めたものである³⁰⁾。併合当初から数年間、文官分限令の適用対象から朝鮮人官僚を除外したことは、内地人官僚と同等の身分保障がなされずに、民族格差があつたことを意味する³¹⁾。

このほか、判任官の場合、1910年代に朝鮮人を適用民族とした資格試験が設けられたことも、朝鮮における一つの特色といえよう。1911年に「朝鮮人判任文官試験規則」（明治44年朝鮮総督府令第79号）が出され、「朝鮮人ニシテ本令ニ定ムル試験ニ合格シタル者ハ朝鮮総督府及所属官署ノ判任官タルノ資格ヲ有ス」（第1条）として、朝鮮人を適用民族とし、任用官庁を朝鮮総督府・所属官署に限定した資格試験制度を制定した。適用民族を特定した試験制度は、ほかでは見られない。同試験では、受験資格は定めておらず、受験志望者は履歴書とともに職業・年齢に関する警察署の証明書を添付する必要があつた（第4条）。同試験は1911～1918年までに

30) 文官分限令の規程によれば、文官は、刑の宣告や懲戒処分を受け、または分限令に規定する場合以外は免官されず（第2条）、また、免官する場合でも文官懲戒委員会の審査を事前に必要とし（第3条）、官吏はその意に反して同等官以下に転換されない（第6条）などの保障があつた（前掲『官吏・公務員制度の変遷』151～154頁）。

31) ただし、1915年には、文官分限令は朝鮮人にも適用されることとなった（大正4年勅令第93号）。

5回実施された³²⁾。1919年以降には、内地人・朝鮮人合同の普文が主流となったため、朝鮮人に特定した資格試験は実施されなくなった。

② 任用範囲の拡大

1920年代の「文化政治」期になると、朝鮮人特別任用令は幾度か改正され、その任用可能な職が微増した。1919年の三・一独立運動を転機として、日本の植民地統治方針は、原敬首相がかねてから主張する「内地延長主義」へと転換されたが、原首相が作成した新たな指針「朝鮮統治私見」³³⁾では、実施すべき一項目に朝鮮人の官吏登用を挙げていた。これを受けて、朝鮮に赴任した齋藤実総督は「文化政治」を展開し、「韓国併合」当初に制定された「朝鮮人高等官任用令」（前述）を改正していった。

「朝鮮人高等官任用令」は、まず1921年に、法令名から「朝鮮人タル」という呼称を削り、法文から「朝鮮人」という特定の対象を指す用語を取り除いた上で³⁴⁾、新たに「朝鮮総督府事務官等ノ特別任用ニ関スル件」（勅令第26号）として公布され、本府の事務官と各道の理事官も適用対象に追加した³⁵⁾。さらに1924年には道事務官も適用対象にすることで、道庁の内務部長・財務部長に朝鮮人を任用可能とする改正を行った³⁶⁾。齋藤実は朝鮮総督に2度就任したが、「朝鮮人高等官任用令」改正は第1回目の任期中（1919～27年）に集中している。改正の重要性について、本国の内閣法制局との折衝過程で作成された政務総監の電報文³⁷⁾で以下のように説く。すなわち、この改正は「今般総督府ノ行政改革ノ一大眼目」で「朝鮮統治ノ大局ヨリ見テ最必要ノ改正」である、なぜなら朝鮮の現状とは、

「鮮人一般ノ感想ニ依レハ過去ノ総督政治ハ口ニ一視同仁ヲ説クモ事實ハ常ニ彼等ヲ抑圧シテ内地人ノ利益ヲ図ルニ垂ントシ殊ニ官吏ノ任用ニ関シ著シク差別待遇ヲ為シ彼等ヲ失望セシムルコト甚シト為シ親日派ト雖絶エズ怨嗟ノ声ヲ放ツノ現状ナリ」

32) 安龍植「日帝下韓国人判任文官に関する研究」（『社会科学論集』第30号、延世大学校社会科学研究所、1999年）。

33) 「朝鮮統治私見」（国立国会図書館憲政資料室所蔵「齋藤実関係文書」104-19）。

34) 新たに「朝鮮人」を指す代替語として「朝鮮語ニ熟達シ朝鮮ノ事情ニ精通シ且相当ノ学識アル者」と言い換えられた。これは、朝鮮総督府の提案による改正ではなく、枢密院の意向による修正であった。

35) 『枢密院会議議事録』第23巻（東京大学出版会、1985年）25頁。

36) ただし、「道事務官」のなかでも警察部長は任用対象から除外することとなっていた。この改正を審議した枢密院本会議では「当局〔朝鮮総督府〕ニ於テハ此ノ規定ニ依リ朝鮮人ヲ道事務官ニ任用スルコトアルモ差当リ各道ノ警察部長ニハ之ヲ補セサルノ意向ナル旨ヲ言明シタリ」という（前掲『枢密院会議議事録』第35巻、1986年、208頁）。

37) 「〔朝鮮総督府政務総監ヨリ法制局長官宛電報〕」（「大正十年勅令第二十六号朝鮮総督府事務官等ノ特別任用ニ関スル件中ヲ改正ス」所収〔『公文類聚』第48編・大正13年・第13巻〕）。同文書は日付不詳だが、改正内容と前後に編綴された文書からは、1924年11月頃に下岡忠治政務総監から加藤高明内閣の法制局長官塚本清治宛てのもの推測される。

というものであり、また、文官任用令に基づく資格任用の持つ問題性について、

「現行制ニ於テモ固ヨリ有資格者ハ内鮮人ノ間ニ区別的待遇ナキカ故ニ此ノ点ヨリ見レハ
機会均等ノ主義ニ支障ナキ筈ナレトモ彼等ノ常識ヨリ見レハ資格制限ハ畢竟スルニ鮮人
ノ任用ハ拒否スル好箇ノ口実タルニ過キスト思考セリ」〔傍点筆者〕

として、本国の学歴・教育を基準とした資格任用という制度自体が、朝鮮人側からは朝鮮人の登用を拒否するための方便と見なされていると指摘する。前述のように、朝鮮人初の高文合格者が出たのは1923年であり、資格任用が高等官の実質的な任用システムとして機能するには程遠い状況にあった。これに対して、朝鮮総督府側としては、

「総督府ハ此ノ機会ニ於テ鮮人中才幹力量アル者ヲ総督ノ局課長ニモ重用シ且地方ノ内務
部長財務部長等ニモ採用シ彼等多年ノ希望ヲ満足セシメ以テ鮮人ノ安定ヲ図ルハ所謂寸
ヲ与ヘテ尺ヲ取ルノ良策ナリト認ム」〔傍点筆者〕

という。文官任用令に基づく資格任用制度を差別待遇の具現とみなして不満を抱く朝鮮人側に対して、特別任用令の改正により朝鮮人を任用可能な職種を増加することは、「寸ヲ与ヘテ尺ヲ取ル」との文言が表すように、まさに懐柔政策としてのこの制度の存在意義を表すものといえよう。

実際、この改正の直前の1924年12月、総督府では初めて朝鮮人を局長に任用したが（学務局長李軫鎬）、総督府の御用新聞たる『京城日報』では、こうした一連の政策を「鮮人重用の先驅たる新学務局長李軫鎬氏」との見出しのもとに、「総督及総監の大英断に鑑み切に鮮人諸君の奮起を望む」として、以下のように朝鮮人側の努力を促すのである。

「これ〔局長登用〕ばかりでなく今や総督、総監は道事務官をも特別任用の官制を設けて、
今、将に有為の鮮人を其職に抜擢せんとして居る、制度は著々として理想通りに拓かれて行く……これ実に痛快であるが若しこれに伴ふに著々として事業が理想通りに進まぬとすれば、その時こそ真に統治の方針の欠陥ではなく、当事者の欠陥であって、徒らに文句は云へぬ事となるのだ」（〔 〕内は筆者補充）³⁸⁾

以上のように、「文化政治」期以後、統治方針に「内地延長主義」を掲げ朝鮮人の官吏登用を喧伝したものの、「内地延長主義」型の文官任用令では対処できず、「特別統治主義」型の朝鮮人特別任用令を拡大適用せざるを得ないという矛盾した状況が浮かび上がる。

3. 俸給制度³⁹⁾

朝鮮総督府官僚の俸給制度は、本俸と諸手当から構成された。俸給制度も、任用制度と同様

38) 「鮮人重用の先驅たる新学務局長李軫鎬氏」（『京城日報』1924年12月12日）。

39) 本節は、前掲『植民地官僚の政治史』第4章をもとにしている。

に、大別すれば、①本国同様の制度が適用された「内地延長主義」型のもの、②植民地に固有の制度が制定された「特別統治主義」型のものがあり、この両者が混在した制度になっていた。以下では、(1)「内地延長主義」型のものとして本俸を、(2)「特別統治主義」型のものとして、内地人を適用対象として制定された諸手当のなかから、植民地在勤加俸について検討する。

(1) 本俸—「特別統治主義」型から「内地延長主義」型へ

① 法域別・民族別制度からの出発

植民地領有以前に本国では、高等官と判任官を区別しながら官吏の俸給を勅令で定める制度が、1885年の「高等官官等俸給令」（勅令第6号）・「判任官官等俸給令」（勅令第36号）により定められていた。俸給額は、官吏の身分（親任・奏任・判任官）と官等（高等官1等・2等など）に応じて定められ⁴⁰⁾、身分と俸給は整然とした秩序のなかにあった。

この10年後に創設された台湾総督府官僚の本俸は、本国で導入済みのこの俸給システムを移植したものであった。ただし、本国の俸給令は基本的にはすべての諸官庁の本俸を1つの勅令で一本化していたのに対し、台湾総督府の俸給制度は本国とは統合せず、別個に新たな勅令で定められ⁴¹⁾、また、本国の同じ官等の官吏よりも増給（優遇）する配慮が施された。台湾総督府の俸給令は本国とは異なり、高等官・判任官を別個にせず、植民地台湾を一つの法域として一つの勅令で本俸が定められたが、この方式は、その後の植民地拡大の過程で、韓国統監府（1905年）・関東都督府（1906年）・樺太庁（1907年）などの俸給令制定の際に踏襲された。すなわち、本国の俸給制度の身分秩序を踏襲しながらも若干の優遇措置を設け、また、本国の俸給令と一本化せずに、「特別統治主義」型の制度として植民地ごとに個別の俸給令が次々と制定されていったのである。

朝鮮においては、1905年12月21日に統監府・理事庁官制が公布されると同時に、「統監府及理事庁高等官官等令」が公布され、台湾と同様に本国の官僚制度を移植する形で、統監以下の官吏の官等と俸給の秩序が整然と定められた。年俸は、台湾総督の6,000円と同様に韓国統監も6,000円、それを補佐する総務長官（韓国）も民政局長（台湾）同様に1級俸4,500円・2級俸4,000円とされた。これ以下の統監府の高等官の俸給の上限・下限も、台湾とほぼ同様の金額に設定されており、1897年の俸給令改正では台湾で人材確保のために導入された2級程度の増給というやり方も、統監府で踏襲されていた。

一方、朝鮮人官僚の俸給の場合だが、前史として「韓国併合」以前にすでに統監府に任用された韓国人官僚の存在があった。日本は1909年7月、司法権と監獄事務を掌握する覚書を韓国政府に調印させ、同年10月に統監府裁判所・監獄を設置したが、この際、韓国人を統監府の判事

40) 前掲『官吏・公務員制度の変遷』75～108頁。

41) 「台湾総督府職員官等俸給令」（1896年勅令第99号。3月31日公布）。

・検事に任用することとした。同年の勅令第259号「統監府裁判所及統監府監獄ノ職員タル韓国人ノ任用分限及給与ニ関スル件」（11月1日施行）では、官吏の身分保障のための勅令である文官分限令を韓国人官僚には適用しないこととし（第3条）、また、在韓日本人官僚に支給されていた手当である在勤加俸（後述）の支給対象からも韓国人官僚は除外し（第5条）、本俸も日本人とは別立ての俸給体系にされた（第4条）。本俸の金額は、統監府の日本人判事・検事が最高4,000円から最低800円までの間で支給されるのに対し、韓国人の場合は最高でも2000円、最低500円までの支給額であり、年俸は約半分近くまで抑制されていた。韓国人官僚に対するこうした措置は、「文化ノ程度ト生活ノ状態トヲ異ニスル韓国人ニ対シテ事情已ヲ得サルモノ」⁴²⁾との理由から設けられたが、官吏として同一官庁に勤務するにもかかわらず給与体系を別個にし、その官吏の能力の如何にかかわらず、「文化ノ程度」・「生活ノ状態」などを基準としたのは、日本の官僚制度のなかでもほかでは見られない極めて特異な状況を作り出したといえる。こうした民族別本俸という方式は、裁判所や監獄だけでなく、統監府警察官署などにも適用され⁴³⁾、さらに、「韓国併合」後にも踏襲されていった。

1910年8月、「韓国併合」後に朝鮮総督府を設置すると、朝鮮人官僚の本俸は内地人官僚とは別個に定められた。朝鮮に固有の「特別統治主義」型の制度として、「朝鮮人タル文官ノ分限及給与ニ関スル件」（明治43年勅令第403号。以下、「朝鮮人官吏俸給令」と略す）が制定され、朝鮮人官僚の俸給は内地人とは歴然たる格差が設けられた。この「朝鮮人官吏俸給令」を審議した枢密院では、朝鮮人の「俸給ヲ内地人ノ俸給ニ比シ小額ナラシメ」ることは「適当ノ措置」としたように⁴⁴⁾、この民族別の本俸格差は本国においても承認されていた。この後、本俸の支給額における民族格差は縮小方向で微調整されたが、別立て俸給制度は内地人と朝鮮人の間に明確な差別として存在していた。

② 俸給令の統合

植民地別に「特別統治主義」型の制度として成立した本俸は、1910年3月に全面的に改正された。日露戦争後の物価騰貴と貨幣法改正による貨幣価格下落を理由として、1910年3月、高等官・判任官とも俸給令が改正され約25%のベースアップが行われるとともに、「高等官官等俸給令」の改正（勅令第134号）により、本国の高等官の俸給制度が整理統合されたのである⁴⁵⁾。改正された「高等官官等俸給令」では、例えば親任官の俸給を規定した7条を見ると、「内閣総理大臣 年俸一万二千元」・「各省大臣 統監 年俸八千元」・「鉄道院総裁 台湾総督 閣

42) 「統監府裁判所及統監府監獄ノ職員タル韓国人ノ任用分限及給与ニ関スル件外一件審査報告」1909年10月9日（国立公文書館所蔵「枢密院文書」所収、枢密院文書「決議」綴）。

43) 「統監府警察官署ノ職員タル韓国人官吏ノ任用分限及給与ニ関スル件ヲ定ム」（明治43年勅令第303号、1910年6月30日公布）。

44) 前掲『枢密院会議議事録』第12巻（東京大学出版会、1985年）537頁。

45) 前掲『官吏・公務員制度の変遷』91～104、107～108頁。

東都督府「年俸七千五百円」というように、俸給が高い順に列挙され、そのなかに植民地官僚の俸給も組み込まれた。これ以後は植民地別の俸給令は姿を消し、「内地延長主義」型の制度として本国と統合された俸給令で規定された。

他方で、朝鮮総督府に固有の「朝鮮人官吏俸給令」は、3・1運動後の「文化政治」期に改正されていった。斎藤総督は「朝鮮人の任用待遇等考慮を加へんとす」ることを朝鮮着任当初からかけ⁴⁶⁾、この一環として、1919年10月に「朝鮮人官吏俸給令」を廃止して、内地人官僚同様に朝鮮人官僚も前述の「高等官官等俸給令」・「判任官俸給令」の適用を受けることとし⁴⁷⁾、内地人官僚の俸給制度に組み込んだ。この改正は、新聞紙上では「朝鮮人に対する差別的待遇撤廃を具体化する最も注目すべき法令の改正」として宣伝された⁴⁸⁾。こうして本俸に限って言えば、法域・民族を問わない「内地延長主義」型の制度となり、民族別俸給は、制度上は姿を消した。

しかし実態面においては、この後も民族格差は払拭されなかったようである。たとえば1935年の時点を見ると、俸給予算定額において、内地人・朝鮮人への俸給の同額支給は1919年以後も「財政上之〔同一の俸給支給〕ヲ実行セラレザリシモノ」（〔 〕内は筆者補充）となっており、「今日ニ至ル迄朝鮮人郡守百九十五人中僅ニ二十人分ニ限り内地人郡守俸給予算定額ト同額ト為セルニ過ギズ」といい、道理事官・府理事官の場合は内地人の2,170円に対し朝鮮人は1,830円、郡守の場合は内地人の2,170円に対し朝鮮人郡守（175名）は1,670円という民族格差が生じていた。このため「俸給経理上支障少カラズ」「毎年度判任俸給ヨリ流用セザルベカラザル状態」で「累ヲ判任官ノ定員及俸給経理ニ及ボシ」、増俸や定年が「著シク遅延」して「士気ニ影響シ能率ヲ阻害スルコト少ナカラズ」、また、「朝鮮人高等官ノミナラズ判任官ノ俸給予算定率モ内地人ニ対スルモノト異ナレル」状態にあった⁴⁹⁾。このように本俸は、制度上は民族格差の解消が喧伝されたものの、実際の予算編成と支給給与額においては、民族格差が残存していたといえよう。

(2) 植民地在勤加俸—「特別統治主義」型制度

① 適用法域・民族の限定

植民地官僚の俸給には、本俸のほかに旅費や宿舍手当など種々の民族別手当が存在したが、

46) 「朝鮮総督府及所属官署に対する総督訓示」1919年9月3日（水野直樹編『朝鮮総督府諭告・訓示集成』第2巻、緑蔭書房、2001年、2頁）。

47) 大正8年勅令第447号「高等官官等俸給令改正」の附則で「明治四十三年勅令第四百三号〔朝鮮人官吏俸給令のこと：岡本〕ハ之ヲ廃止ス」と規定。

^[77]
48) 「鮮人俸給令改正」大塚総督府参事官の談話（『京城日報』1919年10月21日）。

49) 「朝鮮人道理事官府理事官及郡守ノ俸給定額ノ増額ニ要スル経費ノ増加」（1936年7月27日、内務局長発財務局長宛「昭和十二年度歳出計画書ノ件」〔地方課『昭和十二年度歳出計画』韓国国家記録院所蔵「日政文書」文書番号87-763、所収〕）。

なかでも植民地在勤加俸は、民族差別の象徴的制度として長く批判の対象とされた。

植民地在勤加俸は、植民地在勤の内地人官僚に支給するもので、その適用法域・民族を限定していた。その嚆矢は台湾総督府であり、1896年4月1日、「台湾総督府職員加俸支給規則」（勅令第100号。以下、「台湾加俸支給規則」と略す）が公布され、月給の3割相当の金額を台湾総督府職員に加俸として支給することを規定した。その制定理由は、台湾の「風俗慣習ハ総テ内地ト同シカラス隋テ内地人ニ在リテハ衣食住日常ノ需用不便ヲ感スルハ一般ノ状態ナリ況ンヤ物価昂貴生計易カラス気候不良健康ニ適セス自然本島ニ就職ヲ希望スル者少ナキ」⁵⁰⁾ためという。そのねらいは、本国在勤者に比して加俸を支給して優遇することで内地人官僚を確保することにあった。

台湾総督府は成立当初、台湾人を官僚に任命しなかったため、加俸制度もあくまで内地人官僚の勤務地手当という性格から出発しており、台湾人官僚への加俸支給の可否という点は想定外であった。しかし、1898年に台湾総督府法院条例が改正されると、法院通訳に台湾人を任命するという事態が生じた。ここで初めて加俸の支給対象に台湾人が含まれるか否かという問題が浮上した。翌1899年5月、台湾総督府は本国の内務大臣に対して、加俸支給対象から台湾人を除外することを要請した。その理由は、台湾人の「生活ノ程度低キト其土着ナルカ故ニ内地人カ内地ニ在職スルト其間徑庭ノ存スルナク随テ加俸支給ノ必要無之」というものであった⁵¹⁾。ただし、この「生活程度低キ」という文言は翌月の閣議決定の際にはなくなり、単に「遠ク郷里ヲ離レテ職ニ台湾ニ在ル者ノ為ニ設ケタル規定ヲ其事由ノ存セサル同島人〔台湾人〕ニ適用スルノ必要ヲ認メス」（〔 〕内は筆者補充）とされた⁵²⁾。同年6月の「台湾総督府職員加俸支給規則中改正」（勅令第312号）には、その第1条に「台湾人ニ係ルトキハ此限ニアラス」という文言が加えられ、台湾人を加俸支給対象から除外することが明文化された。こうして植民地在勤加俸は植民地台湾において、まずは法域限定の優遇手当として創設され、のちに台湾人を除外することで民族別手当としての性格を帯びていった。

朝鮮については、統監府設置以前には、外国たる大韓帝国に在勤する日本人に対し、在外公館費条例などにより在勤俸が支給されていたが⁵³⁾、1905年の統監府設置以後は、「統監府及理事庁職員給与令」（勅令第273号）により、本俸と「在勤俸」の支給が規定された。「在勤俸」については、高等官では本俸比率の10割の加俸という優遇ぶりであり、本国政府内でも問題視するむきがあった。1906年に内閣は大蔵省に命じ「満韓在勤文官加俸令」を発議した。その理由は、「満洲韓国及樺太ハ内地ト生活状態ヲ異ニスルカ故ニ此等ノ地方ノ在勤者ニハ本俸以外ニ相当

50) 「台湾総督府職員官等俸給令中ヲ改正シ〇台湾総督府判任文官特別俸支給ノ件ヲ定ム」（『公文類聚』第21編、明治30年、第13巻）。

51) 「台湾総督府職員加俸支給規則中改正」（国史館台湾文献館〔台湾〕所蔵『台湾総督府公文類纂』明治32年・甲種・永久保存・第1巻）。

52) 「台湾総督府職員加俸支給規則中改正ス」（『公文類聚』第23編、明治32年、第13巻）。

53) 布村政次郎「総督府設置以前に於ける朝鮮在勤官吏の加俸」（『朝鮮地方行政』1928年1月号、35頁）。

ノ給与ヲ為シ以テ内顧ノ憂ナカラシムル」〔傍点筆者〕必要があるが、植民地の拡大に伴い各地域で別個に導入された加俸制度には不統一と不均衡が生じてきたために、整理・統合を行うというものであった⁵⁴⁾。同年12月には「満韓在勤文官加俸令」（明治39年勅令第306号）が制定され、統監府と関東都督の在勤者への加俸を定めた。統監府在勤者の本俸比率の上限は、従前の10割から引き下げられ、統監5割・その他の高等官5割内・判任官8割以内とされた。また、ほぼ同時期に、台湾における加俸令も改正され、加俸支給の上限が従来は3割だったのが、統監府・関東都督府と同率にまで引き上げられ⁵⁵⁾、各植民地の加俸率が横並びにされていった。この「満韓在勤文官加俸令」は、1910年4月に台湾と樺太の加俸令とも統合・一本化され、「台湾満韓及樺太在勤文官加俸令」（勅令第137号）となった。前述のように、本俸も同時期に各法域別の俸給体系から一つの勅令に統合されており、これと軌を一にしたものと考えられる。

一本化された「台湾満韓及樺太在勤文官加俸令」の条文は、「第一条 台湾満韓及樺太在勤ノ日本人タル文官ニハ本令ニ依リ加俸ヲ給ス 但シ台湾島人ハ此ノ限ニ在ラス」（傍点筆者）というように、条文中に「日本人タル文官」の文言が明記され、また、前述の台湾人除外規定が混み込まれた形となった（加俸比率の上限は従来通り）。同令は「韓国併合」に伴い、1910年10月1日に「朝鮮台湾満洲及樺太在勤文官加俸令」（明治43年勅令第384号。以下、「植民地在勤加俸令」と略す）となった。翌年の改正では、条文中の「日本人タル文官」との文言が「内地人タル文官」と変更された（明治44年勅令第269号。傍点筆者）。

ところで、「植民地在勤加俸令」には、台湾人とは異なり、朝鮮人に関する文言はない。しかし、朝鮮人官僚の待遇は別に規定されていた。前述のように、「韓国併合」以前から韓国入官僚を統監府に任用する制度が制定されたが、その待遇を定めた嚆矢でもある「統監府裁判所及統監府監獄ノ職員タル韓国人ノ任用分限及給与ニ関スル件」では、「韓国人タル官吏ニ関シテハ文官分限令及満韓在勤文官加俸令ヲ適用セス」（第3条）と規定し、韓国人官僚は加俸制度の適用対象外と明記していた。そして「韓国併合」時に施行された「朝鮮人タル文官ノ分限及給与ニ関スル件」では、「朝鮮人タル文官ニ関シテハ文官分限令及朝鮮台湾満洲及樺太在勤文官加俸令ヲ適用セス」（第1条。傍点筆者）として、朝鮮人官僚に「植民地在勤加俸令」を適用しないことを明記していた。

こうして「植民地在勤加俸令」は、本国の生活を基準とし植民地勤務の“不便”や“労苦”に報いるためとして、本国から内地人官僚を呼び寄せ定着させるための優遇策として成立し、本国を除いた全植民地を覆う形で内地人官僚のみを対象として、適用法域と適用民族を限定した制度として確立した。

なお、「植民地在勤加俸令」が定めていたのは支給率の上限のみであり、実際の支給率は「其ノ額ハ本属長官之ヲ定ム」（第2条）として、別途に各植民地長官が府令・訓令などで上限内で

54) 「満韓在勤文官加俸令ヲ定ム」（『公文類聚』第30編、明治39年、第6巻）。

55) 1907年5月15日公布「台湾総督府職員加俸支給規則中改正」（勅令第192号）。

定めた。朝鮮では、府令第15号「朝鮮総督府及所属官署職員ノ加俸ニ関スル件」で、高等官は本俸の4割、判任官は5級俸以上は本俸の6割という支給率とされた。加俸支給率は、1931年時点では【資料2】に示したようである。表中の「勅令」の部分が「植民地加俸令」で定められた上限率を示し、「規則」の部分が、各植民地長官が定めた実際の加俸支給率の上限である。朝鮮・台湾・樺太・台湾では、高等官では本俸比4～5割、判任官では本俸比6～8割くらいで支給され、各植民地間で極端な差異は設けられなかった⁵⁶⁾。

【資料2】植民地在勤加俸の対本俸支給比率（1931年5月20日現在）

	総督・長官	高等官・同待遇官		判任官・同待遇官	
	勅令	勅令 (上限を規定)	規則 (実際の支給率)	勅令 (上限を規定)	規則 (実際の支給率)
朝鮮	50%増	50%増以内	40%増 (ただし、指定地域の在勤者には10%を加給)	80%増以内	60%増 (ただし、指定地域の在勤者には10%～16.6%を加給)
台湾	50%増	50%増以内	50%増	80%増以内	60%増
関東州	50%増	50%増以内	①州内在勤者 45%増 ②州外在勤者 50%増	80%増以内	①州内在勤者 75%増 ②州外在勤者 80%増
樺太庁	50%増	50%増以内	50%増	80%増以内	①2級俸以上=50%増 ②3級俸以上=55%増 ③4級俸以上=60%増 ④5級俸～本俸(月)76円以上=70%増 ⑤6級俸以下=80%増
南洋群島	90%増	120%増以内	①本俸(月)2,400円以上の者=90%増 ②本俸(月)2,000円以上の者=100%増 ③本俸(月)2,000円未満の者=110%増	150%増以内	①2級俸以上=110%増 ②3級俸以下=110%増に10円を加給

註1 本表は、大蔵省大臣官房会計課調査係「在勤加俸ニ関スル件」1931年5月20日（外務省外交史料館所蔵若荷谷研修所旧蔵記録「植民地在勤俸関係雑件」目録番号O15、所収）より作成。

註2 在勤加俸の実際の支給率は、総督・長官については「朝鮮、台湾、満洲樺太及南洋群島在勤文官加俸令」（明治43年勅令第137号）による。ただし朝鮮では、勅任官のうち政務総監の支給率は50%増。その他は、以下の規則による。①「朝鮮総督府及所属官署職員ノ加俸ニ関スル件」（大正2年府令第36号〔大正9年府令第141号で改正〕）。②「台湾総督府職員加俸支給規則」（大正10年訓令第52号）。③「関東州及所属官署職員加俸額」（大正10年訓令第23号）。④「樺太庁ノ高等文官ノ加俸ニ関スル件」（大正14年内閣訓令第1号）。⑤「樺太庁ノ判任官及見習ノ加俸ニ関スル件」（大正11年庁訓令第86号）。⑥「南洋庁ノ高等官ノ加俸ニ関スル件」（大正11年内閣訓令第156号）。⑦「南洋庁ノ判任官ノ加俸ニ関スル件」（大正11年5月訓令第10号）。

② 給与格差の実態

植民地在勤加俸制度は、第一に内地人官僚のなかにおける勤務地格差、第二に同じ官庁内部

56) ただし、1922年に日本の委任統治領とされた南洋群島だけは、本俸に対して9～11割と突出していた（大正11年勅令第188号で「朝鮮台湾満洲樺太及南洋群島在勤文官加俸令」へと改正）。

における民族別格差という、二重の格差を帯びた構造のなかにあった。では、実際の給与にはどれくらいの差が生じたのだろうか。

第一に、内地人官僚の勤務地格差だが、1931年の時点为例に見ると【資料3】に示した通りである。内地人官僚でも、本国在勤者は本俸のみを支給され、一方の植民地官僚の場合、本俸プラス植民地在勤加俸が支給されていたため、朝鮮・台湾に赴任することによって、同じ内地人官僚でも大きな給与格差が生じていた。

【資料3】勤務地別の内地官僚の俸給比較(1931年6月1日俸給令改正以前)

勤務地	官職	親任官(年俸)		勅任官(年俸)			奏任官(年俸)											判任官(月俸)								
		各省大臣	枢密院副議長	各省次官	各省局長	府県知事			1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級	8級	9級	10級	11級	12級	特別俸	1級	2級	3級	4級	
本国	官職																									
	俸給(円)	8,000	7,000	6,500	5,200	1級 6,000	2級 5,500	3級 5,200	4,500	4,100	3,800	3,400	3,100	2,700	2,400	2,000	1,800	1,600	1,400	1,200	200	160	135	115	100	
朝鮮	官職	総督	政務総監	各局長																						
	本俸(円)	8,000	7,000	6,500	5,700	5,200	4,500	4,100	3,800	3,400	3,100	2,700	2,400	2,000	1,800	1,600	1,400	1,200	200	160	135	115	100			
	加俸(円)	4,000	3,500	2,600	2,280	2,080	1,800	1,640	1,520	1,360	1,240	1,080	960	800	720	640	560	480	120	96	81	69	60			
	俸給合計(円)	12,000	10,500	9,100	7,980	7,280	6,300	5,740	5,320	4,760	4,340	3,780	3,360	2,800	2,520	2,240	1,960	1,680	320	256	216	184	160			
台湾	官職	総督	總務長官	各局長																						
	本俸(円)	7,500	6,500	5,200	4,500	4,100	3,800	3,400	3,100	2,700	2,400	2,000	1,800	1,600	1,400	1,200	200	160	135	115	100					
	加俸(円)	3,750	3,250	2,600	2,250	2,050	1,900	1,700	1,550	1,350	1,200	1,000	900	800	700	600	120	96	81	69	60					
	俸給合計(円)	11,250	9,750	7,800	6,750	6,150	5,700	5,100	4,650	4,050	3,600	3,000	2,700	2,400	2,100	1,800	320	256	216	184	160					

註1 本表は、大蔵省大臣官房会計課調査係「俸給令改正ニ依ル内地ト朝鮮トノ収入比較」・「俸給令改正ニ依ル内地ト台湾トノ収入比較」(外務省外交史料館所蔵茗荷谷研修所旧蔵記録「植民地在勤俸関係雑件」目録番号O15、所収)より作成。

註2 勅任官・奏任官の官職は比較のために任意に例示し、奏任官は、「高等官官等俸給令」別表中最も俸給の高いもの(第二表第二号)によった。

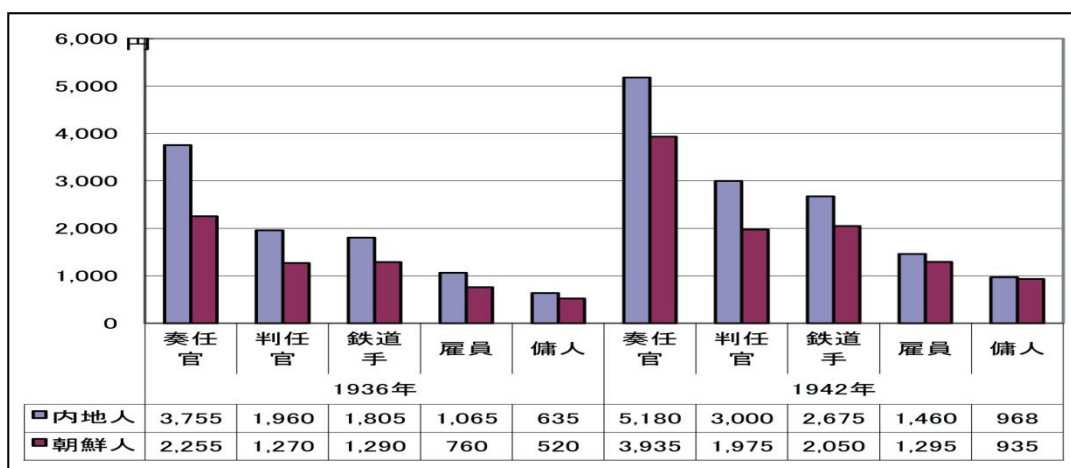
ここで、本俸のみが支給されるという点から見れば、朝鮮在勤の朝鮮人官僚と、本国在勤の内地人官僚とは給与に格差がないことに気付く。民族格差は植民地在勤加俸から生じていたわけだが、このことについて、朝鮮総督府官吏であった萩原彦三は、戦後の回想で、「朝鮮の官吏というものは内地における日本人の官吏と同じなんです。だからそういうふうに比較すれば何も違いはないんですけども」と指摘しながら、しかし実際の朝鮮の役所のなかにおいては、「現実に並んで仕事をしておる人で、こっちは在勤加俸がある、こっちは在勤加俸がつかない、そういうことはあったんですね」、「とにかく同じ机を並べておるのに、甲はもらい乙はもらわないということは非常な不平の種なんです」⁵⁷⁾という状況が、植民地という場において生み出されていたことを吐露している。植民地在勤加俸が、内地人官僚にとっては勤務地の違いによる手当という意味から導入されたとしても、一方で、植民地社会からみれば、内地人官僚の特権と見なされ不平等感をあおったことは間違いない。問題は、植民地という場において、

57) 「朝鮮の地方自治について」(宮田節子監修「未公開資料 朝鮮総督府関係者録音記録(3)」前掲『東洋文化研究』第4号) 256-257頁。

この制度がいかなる意味を持ったかを検討することであろう。なぜなら、この制度は植民地社会に民族間の溝を作りだし、また、内地人官僚の意識にも影響をあたえていったからである。

第二に、民族格差についてだが、朝鮮・台湾などの植民地内においては、朝鮮人・台湾人官僚は本俸のみ、内地人官僚は本俸プラス植民地在勤加俸が支給された。加俸支給率は、朝鮮人官僚に比して内地人官僚は4割～6割増し、台湾人官僚に比して内地人官僚は5～6割増しの俸給となり、このほかにも、宿舍料などの各種の手当てが組み込まれてゆく計算となる。給与格差の事例を、朝鮮における鉄道局職員の例でみると、【資料4】に示したようであり、両者間の給与格差には歴然たるものがあった⁵⁸⁾。

【資料4】朝鮮総督府鉄道局職員の民族別収入額（1936年および1942年）



註1 出典は、「鉄道局職員収入額比較調」（1943年8月17日時点。「加俸問題」文書綴・B236-5文書。学習院大学東洋文化研究所所蔵「友邦文庫」、所収）より作成。

註2 収入額中、奏任官・判任官・鉄道手は各年度における平均給により、雇員は勤続年数7年の者につき、傭人は勤続年数内地人3年・朝鮮人年の者につき調査したもの。

註3 1942年度収入額中には臨時家族手当（5円として計算）、戦時勤続手当、年功手当を含む。

なお、「皇民化」政策期の朝鮮では「創氏改名」が実施されたが、朝鮮人が「内地式」の氏名や氏にしたとしても、加俸支給による民族格差は貫徹された。朝鮮総督府交通局が作成した「人事例規」集から事例を見よう。1940年2月「創氏改名」が実施された翌月に、出された「朝鮮人ノ創氏改名ニ関スル件（昭一五、三 鉄庶人二七一）」という通牒では、「当局職員ニシテ内地人式ノ氏名又ハ氏ニ改ムル向ニ対シテハ諸給與其他ノ取扱上内地人トノ混同ヲ避クル為当分ノ間朝鮮人ニ対スル履歴書又ハ名簿等ノ取扱方左記ニ依リ御処理相成度通牒ス」としてい

58) なお、管見の限りでは、内地人以外の人々＝朝鮮人・台湾人などが、本国や本籍地以外の植民地・占領地などで官吏として勤務する際、加俸を給すると定めた法令は見あたらない。また、本国に勤務した台湾人官吏の回想の月俸からも、加俸を支給されていた形跡はない。

た。そして、朝鮮人の履歴書・名簿の取り扱いに関する通牒では、「履歴書カード」に「旧姓名ヲ縦（又ハ横）線ヲ以テ抹消シ余白ニ新姓名ヲ記載スルコト 書替ノ場合モ右ニ倣ヒ新旧氏（姓）名ヲ明ニシ置クコト（旧氏名欄ニハ内地人ノ場合ニ準シ旧姓名ヲ記入）」することとし、「名簿」には「内鮮人ノ區別ヲ明瞭ニスル為ニ氏名ノ傍ニ朝鮮人ニ対シテ鮮ト記入又ハ捺印シ識別整理シ置クコト」という。さらに「各種給与金関係書類」も「内鮮人給与定額ノ異ナル請求書、領収書、明細書等ニハ一旦内鮮人ノ區別ヲ明瞭ナラシムル為朝鮮人ノ欄適当一ヶ所ニ鮮ト記入又ハ捺印スルコト」⁵⁹⁾としていた（以上、傍点岡本）。「内鮮一体」を標榜し「創氏改名」を実施しながら、他方で名簿や給与関係の書類上に「鮮」と記入・捺印をして「内鮮人ノ區別ヲ明瞭ニスル」ことを、わざわざ懇切丁寧にも通牒していたのである。ここでは、官僚の個人々の能力や資質や勤務環境は一切問われておらず、加俸支給のための識別指標は、朝鮮人であるか内地人であるかという点のみである。たとえ「創氏改名」をしても、基本的には朝鮮・本国間で戸籍の移動ができない制度である以上⁶⁰⁾、民族の区別は戸籍により維持され、民族別給与体系も維持された。そして、これは雇員・傭人に対しても同様で、人事関係の内牒類では、民族別に定期増給や給与の上限（制限給）・加給の金額など明記していた⁶¹⁾。

③ 給与格差と民族間の溝

加俸は、官僚組織の内部に民族間の溝を生み出すものとなっていた。ある面事務所勤務の朝鮮人官僚の論説では、給与日の官庁の様子を以下のように述べる。

「筆者の居住する〇〇郡は、極く最小の郡で、現在諸官所が十許りある。其中加俸者（内地人）の勤務するもの七箇所職員数内鮮人併せて八十余名である。此内加俸者即ち内地人官吏は三分之一を出ないが、而して其の地位必ずしも全般的に高位ではないが而も彼の受くる処の俸給は多数を占むる無加俸の鮮人官吏に優つて居る。」「月の廿一日に於ける彼の得意、此の失意……。吁々×××なりせば……との嗟嘆の色が無加俸官吏の面上にあり、と現れ不愉快な空気がさつと流れて、瞬間異状な感に打たれるのである。」

このように、給与日に否応なく認識させられる民族間の待遇の差異を如実に伝えている。さらにこの論説では、「日韓併合」後「十有七年、一視同仁の実」が結ばれているはずの現在、「同一智識と同一地位とを有し而も同一国家に奉仕する官吏の、一を厚遇して一を冷遇するこ

59) 「朝鮮人ノ創氏改名ニ関スル件（昭和一五、三 鉄庶人二七一）」（「人事例規 朝鮮総督府交通局」〔山口県文書館所蔵「梅村明文書」60。以下、「人事例規」と略す〕77頁）。この「人事例規」は、「本書ハ昭和十九年六月十日現在ノ人事関係内牒類ヲ纂集ス」といい、活版印刷された内牒類を綴ったもの。

60) 朝鮮・本国間の戸籍の移動（移籍）問題については、拙稿「アジア・太平洋戦争末期の在日朝鮮人政策」（『在日朝鮮人史研究』第27号、1997年）、浅野豊美『帝国日本の植民地法制』（名古屋大学出版会、2008年）第V編第2章、参照。

61) 前掲「人事例規」所収の「雇員、傭人増給並登格内規通則（昭和一三、一二 鉄庶人一五四〇）」・「雇員及傭人制限給内規（昭和十七、二 鉄庶人二四四）」・「タイピスト加給支給ノ件（昭和一八、一一 鉄庶人一〇四〇）」（13～14・17・19頁）、参照。

の矛盾」が「現在制度として朝鮮に存すること」は、「明確なる矛盾」であり、「物質的待遇の差別よりして融和の美果の裏面に不快なる感情を交へつゝある」として、朝鮮統治の根本方針として掲げる「一視同仁」と矛盾する制度として批判されていた⁶²⁾。また、別の論説では、「行政の改善は内地人の加俸を撤廃するにあり、朝鮮の救済は教育費の補助にあり」として、加俸を廃止し教育費に充当せよと主張するものや⁶³⁾、「一視同仁主義を没却したる矛盾甚しき」制度たる加俸制度を廃止することが「名実共に内鮮人の差別を打破」であるなどの主張もあった⁶⁴⁾。

これに対する総督府側の反論は、「彼我の生活様式の差異」を強調し、「気候風土の差異」・「風俗習慣の差異」・「経済事情の差異」・「精神生活の変化」などを根拠に内地人官僚に対する加俸の必要性を説き、「朝鮮人、内地人といった差別をこうした方面に求めらるゝことは遺憾である」となどと言う⁶⁵⁾。あるいは、各植民地の加俸制度の撤廃は「独り官吏と言はず内地人の海外進出を阻止する結果」を惹起するかもしれない、「加俸全廃論の如きは机上論としては相当の価値があるだらうが、実際問題としては未だ時期尚早十分考慮すべき余地ある問題である」⁶⁶⁾として退けていた。

本国政府においても1930年代初頭に、財政緊縮という観点から加俸削減を考慮したこともあった。しかし朝鮮総督府は、内地人官僚への加俸支給を必要とする理由として、「遠ク郷土ヲ離レ言語、風俗、思想、民度ニ於テ著シク其ノ趣ヲ異ニスルヲ以テ内地ニ於ケル官吏ニ比シ心身ヲ消磨スルコト著シキコト」、「気候、風土、衛生状態等内地ニ比シ甚シク不良ニシテ常ニ伝染病絶ユルコト無クシテ物質的及精神的ニ受クル打撃大ナルコト」、「内地人官吏ノ需要スル物資ハ大部分ハ内地ヨリノ移入品ナルヲ以テ比較的高価品ヲ購入スルコトトナルヘシ」、「在勤加算、在勤加俸等アルニ拘ラス尚且優秀ナル官吏ヲ採用シ又ハ勤続セシムルコト困難ナルニ若シ之ヲ減スルコトアランカ将来一層困難ヲ来シ統治上重大ナル結果ヲ招来スルコト」などと列挙して、内地人官僚の植民地勤務の“労苦”と自身の“優秀性”を強調しながら、本国へ働きかけて断固として加俸削減に反対し⁶⁷⁾、朝鮮内では朝鮮人側の加俸廃止の要求を抑圧しながら、

62) 「加俸を撤廃せよ」(『朝鮮地方行政』1927年2月号、「行政論壇」欄) 60~61頁。無記名のこの論説は、朝鮮地方行政編輯局編『朝鮮地方行政公論』(帝国地方行政学会朝鮮本部、1928年)に採録された際に、執筆者は「咸南豊山郡里仁面事務所 太真基」と明記された(同書14頁)。

63) 朴春花「内地人の加俸を撤廃し朝鮮教育費を補充せよ」(『朝鮮地方行政』1929年4月号、「大弦小弦」欄) 64~65頁。

64) 金正祿「加俸を減額せよ」(『朝鮮地方行政』1930年1月号) 87頁。

65) 総督府某当局談「本誌行政論壇に対する朝野第一人者の批判 観念論は真ツ平一加俸を撤廃せよーを見る」(『朝鮮地方行政』1927年4月号) 39頁。

66) 「加俸撤廃説と朝鮮」(『朝鮮地方行政』1929年8月号、「社会時評」欄) 4~5頁。

67) 「俸給並ニ在勤加俸減額ニ関スル件」斎藤実総督発・原脩次郎拓務大臣宛、1931年5月22日付。拓務省野紙に記載(「植民地在勤俸関係雑件 台湾ニ於ケル在勤加俸減額関係」外務省外交史料館所蔵「茗荷谷研修所旧蔵記録」番号O16、所収)。

加俸支給を死守したのであった⁶⁸⁾。

以上のように植民地在勤加俸は、植民地朝鮮という場において朝鮮人側からは民族差別の象徴として明確に批判の対象とされていた。他方で内地人側は、本国との勤務地手当にすぎないという点を強調して差別ではないと主張し批判を退けており⁶⁹⁾、両者の議論はすれ違ったままであった。

④ 戦時下の適用民族の拡大

植民地在勤加俸制度の見直しが検討されたのは、小磯国昭総督（1942年5月就任）期に入ってからのことである。初期の改正案では、内地人官僚の加俸撤廃も視野に入れられていた⁷⁰⁾。しかし、田中武雄政務総監の回想によれば、「小磯総督は給与を同一にせいというので、内地人の加俸を撤廃せい」というのに対し、田中は「私はそれは総督には反対であった」「内地人の加俸撤廃ということは、それはいかんと。それより、朝鮮人の給与を上げたらいいんじゃないか。」⁷¹⁾といい、総督と政務総監の間でも意見は必ずしも一致していなかった。1943年秋以降、小磯総督のもとで制度改正に向け調査・立案が進められ⁷²⁾、同年10月時点の改正案⁷³⁾で、内地人官僚への加俸支給存続と、朝鮮人官僚への加俸支給が基調とされ、以後はこの路線が堅持された。適用法域は植民地に限定したまま、適用民族の拡大する方向が定められたのである。

内地人官僚の加俸存続の理由は、内地人の“優秀”な「人材」確保や植民地における生活の“労苦”という従来からの論拠が踏襲された。他方、朝鮮人官僚への加俸支給の論拠は、「優秀ニシテ堅実ナル」朝鮮人には「内地人同様ノ処遇ヲ附與スルニ吝ナルヘカラス」とし、これにより朝鮮人に「一視同仁ノ恩恵ニ感激セシメツツ皇国ニ忠誠ナラシメ得」ることができるとした。従来からの加俸支給の論拠との整合性は、以下のように説明された。

「鮮人ハ家郷ヲ鮮内ニ有スルノ故ヲ以テ加俸支給ノ必要ナシトシハ旧来通有ノ弁明ナリシモ施政三十余年今ヤ鮮人官吏ニシテ家庭ヲ内地ニ有シ其出生ヨリ高等学府卒業迄ヲ内地ニ於テ経過セルモノアルト同時ニ内地人官吏ニシテ右ニ反シ其今日ニ至ル迄ノ経歴ノ全部ヲ朝鮮ニ於テセル者アリ此傾向ハ将来更ニ増加スヘク是ニ於テカ単ニ内地人タルノ故

68) 1929・31年の朝鮮総督府官僚の減俸・加俸削減反対運動については、前掲『植民地官僚の政治史』第9章、参照。

69) 植民地在勤加俸に対しては台湾においても、台湾人の政治運動側が民族差別の象徴として批判の対象とし、その全廃を重要な課題としていた（前掲『植民地官僚の政治史』第10章、参照）。

70) 「加俸問題」文書綴（学習院大学東洋文化研究所蔵「友邦文庫」の「渡辺忍文書」B236）B236-7。1943年8月19日作成と推定（資料書き込みより）。

71) 「小磯総督時代の概観—田中武雄政務総監に聞く」（『東洋文化研究』第2号、学習院大学東洋文化研究所、2003年）116頁。

72) 水田直昌「昭和十九年度総督府予算について」（近藤鈿一編『太平洋戦下終末期朝鮮の治政』巖南堂書店、1961年）40頁。1944年3月29日講演の速記。

73) 前掲「加俸問題」文書綴、B236-3（「内鮮人官吏ノ待遇改正ニ関スル件」。「総督御作成案」との書き込みがある）。

ヲ以テ加俸ヲ支給スヘシト為スハ妥当ナラス而シテ今ヤ兵役、教育、納税ノ三大義務ヲ朝鮮人ニ課スルニ至レリ自然官吏ニ採用シ得ルカ如キ優良鮮人ニハ内地人同様ノ処遇ヲ与フコト絶対必要ナルニ至レリ」

すなわち、今や「内地」育ちの朝鮮人もいれば朝鮮育ちの内地人もいる、したがって、内地人であるというだけで加俸を支給することは妥当性を欠くというものであった。

このあと作成された幾つかの改正案を見てゆくと、「徴兵制度施行セラレ将ニ第一次ノ壮丁ヲ送ラントシツツアル今日」において、加俸改正問題は「半島治政ノ上ヨリ見テ喫緊」の課題であり、「従来ノ制度カ包蔵セル内鮮人間処遇上ノ欠陥ヲ事実上匡正シ得ルモノ」としている⁷⁴⁾。朝鮮人への徴兵制度実施は1942年5月に閣議決定され1943年8月に兵役法改正に至ったが、加俸制度改正問題はまさにこの兵役法改正と同時期に立案が開始されており、この問題が、兵役への反対給付的意味を持っていたことがわかる。

また、留意すべきなのは、加俸の適用対象が、「本国在勤の朝鮮人官僚」ではなく、「朝鮮在勤の朝鮮人官僚」とされたことである。このことは、加俸制度改正問題が、朝鮮の支配体制維持という喫緊の課題から生じたことを逆照射する。そしてその適用対象は、朝鮮人官僚全般ではなく、高等官や課長以上などの一部上層部の地位にある朝鮮人官僚に限定されていた⁷⁵⁾。これらの朝鮮人官吏は、「特ニ資質優秀志操忠誠ニシテ重要ナル特定ノ職ニ在ル者」でその「生活態様ニ於テモ内地人ト変ハルコトナキ」ため、加俸支給の対象たりえると見なされたからである⁷⁶⁾。

「朝鮮在勤の朝鮮人官吏」への加俸支給という事態は、従来の植民地在勤加俸の理念を覆すことを意味するものであった。財務局長水田直昌の言葉を借りれば、「中央でとって来た従来の在勤加俸の理念」とは、「内地人が外地＝朝鮮・台湾・樺太・南洋・関東州一の統治に従事するため、足一步海を渡ってふみ出した場合に特に支給される一種の俸給」という性格のものだが、「朝鮮在勤の朝鮮人官吏」への加俸支給は、これに「根本的の改変を加える」ものとなる。「即ち、在勤加俸とは『内地人たると台湾人たると何人たるとを問わず、足一步海外に踏み出すと否とに論なく、外地の統治に従事する官吏および同待遇者に支給される一種である』というように変更」を加えたことになるという。なお、一部上層の朝鮮人官僚に適用対象を限定することは、「事の起こりはもともと内鮮一体の理念に発足するもの」なので、「物心両面ともに皇国臣民化したもの、心はもちろん、経済生活等においても内地人と何等ケイ庭のない半島人に適用さるべき」なのは「怪しむに足らない」としていた⁷⁷⁾。

74) 前掲「加俸問題」文書綴、B236-10（「内鮮人官吏待遇改正案」。1943年10月9日と推定（資料書き込みより）。

75) 前掲「加俸問題」文書綴、B236-4。1943年11月7日と推定（資料書き込みより）。

76) 前掲「加俸問題」文書綴、B236-9（「朝鮮在勤朝鮮人官吏ニ対スル職務手当支給ニ関スル勅令案要綱」。1943年12月20日と推定（資料書き込みより）。

77) 前掲水田「昭和十九年度総督府予算について」40～41頁。なお、この解釈の変更は、日本の敗戦直後に大蔵省が作成配布した『日本人の海外活動に関する歴史的調査』朝鮮編第2分冊、62～63頁〔ゆまに書房、2000年、影印複製〕が、ほぼ同一の文言で説明している。

改正された「植民地在勤加俸令」は、1944年4月4日に公布された（「朝鮮台湾満洲樺太及南洋群島在勤文官加俸令中改正」勅令第230号）。同令の閣議請議案では、「現下ノ情勢ニ鑑ミ朝鮮台湾樺太関東州満洲及南洋群島ニ在勤スル内地人ニ非サル文官同待遇者ニ対シ在勤加俸ヲ給シ得ルコトト為スノ要アリ」〔傍点筆者〕⁷⁸⁾といい、本国以外の地域（「外地」）在勤の非内地人官吏への加俸支給を明言していた。法文上は、同令の第1条から、これまで支給対象を内地人に限定していた「内地人タル」の文言が削除され、また、条文末尾の「加俸ヲ給スルコト」の文言が「加俸ヲ給スルコトヲ得」と改正されることで、内地人以外にも加俸を支給することを可能とした。次いで、朝鮮総督府では、1944年朝鮮総督府令第168号（4月11日公布）により、内地人官僚すべてと朝鮮人官僚の一部上層階級のもを「加俸ヲ受クル者ノ範囲」として定めた。しかしこの朝鮮人で支給対象に含まれるのは、「高等官全部、第一次所属官署の課長以上、第二次所属官署の長以上および国民学校長、府、邑、面長」というように極めて限定的なものであった⁷⁹⁾。

朝鮮人官僚への加俸支給は、再び水田財務局長の回想によれば、朝鮮人のなかでは「結局朝鮮人に加俸を出す理由について、一般のものは何が何だか判らないという有様」であったという⁸⁰⁾。また、一部上層部に支給対象を限定したことは、かえって新たな波紋を呼んだ。この時期の朝鮮の状況に関する「復命書」⁸¹⁾によれば、対象を限定したことへの朝鮮人側の感想として、「島国根性的ニシテ大国トシテノ雅量ニ缺クル」・「上ニ厚ク下ニ薄キハ親心ニ反スル」・「上層指導階級ヲ懐柔スルコトニ依ッテ之等ヲ一般民衆ノ宣撫ニ利用セントスルモノナリ」などの批判があり、対象から排除された朝鮮人下級官吏は「物価高ニ比シ著シク薄給ニシテ殺人的ノ生活難ナルニ拘ラズ黙過シタルハ当局ノ企図ニ他意アルベシ」などいい、「疑惑感ハ否定シ得ベカラザルモノアリ」という状況が生まれていた。また、官吏ではない「朝鮮人民間有力者」の「忌憚ナキ意見」としては、「従来朝鮮人官吏ニハ加俸ヲ支給スベカラザルモノナルコトヲ理論的ニ説キ永年朝鮮人ノ深刻ナル反対心理ヲ抑制シ来リタルニ拘ラズ突然全ク同一率ノ加俸ヲ支給スルコトトナッタコトニ対シテハ先ツ驚キタルハ朝鮮人官吏自身デアッタデアロウ」と皮肉り、また「生活ニ余裕ナキ判任官以下ニ支給セズ比較的生活ノ安定ヲ得タル高等官ニノミ加俸ヲ支給スル結果高等官自身モ心中猜疑心ヲ抱クデアロウ」・「其ノ理由トシテハ即チ戦後朝鮮人ノ高等官ノ数ヲ減ズルハ必然ナリトシテ内心疑ナキ能ハズ」として、支給対象となった朝鮮人高等官自身も猜疑心を抱いていることが指摘されていた。さらに、「内地人ト朝鮮人トガ絶対平等トナルノ理ナキニモ拘ラズスル同率ノ加俸ヲ突然支給スルハ近キ将来ニ於テ内地人側ヨリ不平又

78) 「朝鮮、台湾、満洲、樺太及南洋群島在勤文官加俸令中ヲ改正ス」(『公文類聚』第68編・昭和19年・第38巻)。

79) 前掲水田「昭和十九年度総督府予算について」41頁。

80) 水田昌直口述『朝鮮財政余話』(財団法人友邦協会、「友邦シリーズ」第23巻、1981年)、101頁。

81) 小暮泰用「復命書」1944年7月31日、内務省管理局長竹内徳治宛(外務省外交史料館所蔵「本邦内政関係雑件—植民地関係」第2巻、所収。[アジア歴史資料センター、レファレンスコードA020312686700]。水野直樹編『戦時期植民地統治資料集』第7巻、[柏書房、1998年]影印で収録。同資料集の水野直樹「解説」(第1巻)では、小暮泰用は1940年に拓務省囑託の「権泰用」ではないかと推測している。

ハ反対運動起ルベク、之ヲ收拾スルコトモ困難デアラウ」として内地人側の不満の行方を危惧するもの、「朝鮮人ノ判任官以下ニ迄速カニ加俸ヲ普及スルコトガ出来ナイトスレバ之レ亦相当困難ナル問題ヲ惹起」するだろうと指摘するなど、総じて「今次ノ加俸ノ支給ハ技術的ニ見テ拙劣」であると喝破していた。

この時期の朝鮮では、地方行政の第一線たる農村においては、朝鮮人下級職員たちに依存する体制となっていたが、徴税や労働力や米の供出など増大する賦課を負担させられる朝鮮農民との間には亀裂が生じ、板挟みの立場にあった末端の朝鮮人職員たちのなかには、離職者や不正の増加、サボタージュなどの問題が浮上していた⁸²⁾。体制を揺さぶる厭戦気分や反官的風潮という下からの突き上げが蔓延してゆくなかで、ついに阿部信行総督期の1945年4月、すべての朝鮮人官僚への加俸支給へと踏み切った（1945年朝鮮総督府令第75号。4月12日公布）。加俸を全朝鮮人官僚へ支給するという方策は、再び水田局長の言を借りれば、「反内地の気分を緩和する一つの手段として」、「理屈にはならないがやってしまうということ」で実施に至ったのである⁸³⁾。「韓国併合」から35年間にもわたり加俸制度への批判を拒絶し続けてきたにも拘わらず、その拒絶の論理を転換してまでも、全朝鮮人官僚への加俸支給を拡大した時期は、すでに沖縄戦も東京大空襲も経て本土決戦すら視野に入れられていた時期であった。翻ってみれば、ここまで事態が緊迫しなければ加俸制度は改変されず、現在の戦時体制の維持という喫緊の課題のために取られた苦渋の策だったのである。ただし、この苦渋の策はあくまで官僚組織の補強にすぎないのであって、多大な犠牲を強いられている朝鮮農民の「処遇改善」とは結び付かない。むしろ官民間にくさびを打ち込み植民地社会に亀裂をもたらす措置であったといえよう⁸⁴⁾。

なお、この措置は、内地人側からは「無差別則差別なりとの批評も出た」という⁸⁵⁾。こうした内地人への配慮からであろうか、朝鮮人官僚への全面的な加俸支給と同時に、例えば交通局では、朝鮮人への加俸支給との「均衡上調整ヲ図ル」として、内地人の判任官にも「臨時増俸セシムルコトニ決定」した⁸⁶⁾。ここからは、制度上は民族間格差は埋めざるを得ないが、朝鮮人官僚と横並びされることへの内地人官僚の不満を解消しようとする苦慮が垣間見えるようである。

82) 前掲『朝鮮農村の（植民地近代）経験』第4章、前掲「植民地の政治史を描く視覚について」第3章。

83) 前掲『朝鮮財政余話』102～103頁。

84) 敗戦直前に導入された一連の「処遇改善」政策と植民地社会との関係については、前掲「植民地の政治史を描く視覚について」第3章、参照。

85) 前掲『日本人の海外活動に関する歴史的調査』朝鮮編第2分冊、70頁。

86) 「朝鮮人判任官及同待遇者ニ加俸支給ニ伴フ調整ノ件」交通人第360号、1945年5月12日（「朝鮮総督府交通局総務課長通達」前掲「梅村明文書」72、所収）。内地人官僚の俸給支給額を一級ずつ進めて実質的な増俸を図ったり、臨時増俸を施したりした。

まとめ

以上のように、朝鮮総督府官僚の任用制度は、文官任用令に基づく「内地延長主義」型のものとして構成されていた。その制度の概要を各地域と官吏の階級に分けてそれぞれ示すと、【資料5】のようになる。また、俸給制度も、本俸のように「内地延長主義」型に統合されたもの、植民地在勤加俸のように「特別統治主義」型のものから、複合的な制度として構成されていた。

では、これらの制度の併用は、各法域・民族に異なる状況をもたらしていたのか。それをまとめたものが【資料6】である。

【資料5】 本国・朝鮮・台湾の官僚任用制度の概要

	本国	朝鮮	台湾
高等官	文官任用令 (高文試験合格) (1889年～)	文官任用令 (高文試験合格) (1910年～)	文官任用令 (高文試験合格) (1898年～)
		朝鮮人特別任用令 (1910年～／朝鮮内のみ)	台湾人特別任用令 (1922年～／台湾内のみ)
判任官	文官任用令 (普通文官試験／実務経験／ 学歴具備) (1889年～)	文官任用令 (普通文官試験／実務経験／ 学歴具備) (1910年～)	文官任用令 (普通文官試験／実務経験／ 学歴具備) (1898年～、属のみ／ 漸次拡大)
		朝鮮人特別任用令 (1910年～／朝鮮内のみ)	特別任用令 (内地人・台湾人) (1898年～／属を除く／漸次縮小)

【資料6】 本国・朝鮮・台湾の任用制度と俸給制度

法域	本国			朝鮮		台湾		類型
	内地人	朝鮮人	台湾人	内地人	朝鮮人	内地人	台湾人	
文官任用令	○	○	○	○	○	○	○	「内地延長主義」型
特別任用令	×	×	×	×	○	×	× ↓ ○ (1922年)	「特別統治主義」型
本俸	○	○	○	○	× ↓ ○ (1919年)	○	○	「内地延長主義」型
植民地在勤加俸	×	×	×	○	× ↓ △ (1944年) ↓ ○ (1945年)	○	× ↓ △ (1944年)	「特別統治主義」型

まず確認できるのは、植民地を含む帝国日本全般にわたり、官吏任用の原則は文官任用令が貫徹していたことである。このことは、一見すると共通のルールに則るものように見えるが、「国語」と本国の教育制度・学歴を基準とした「試験任用」制度を根底に置く文官任用令は、翻って植民地出身者には排除の作用をもたらし、内地人に有利なルールが帝国日本全般を覆っていたことを照射する。他方で、朝鮮人・台湾人特別任用令は、本国には導入されず各植民地限りを法域としていたため、その効力は地域限定的なものにとどまっていた。植民地出身者に固有の制度を設けたことは“優遇”“恩恵”とみなす向きもあろうが、あくまで文官任用令から排除された側面への補充的・過渡的措置とみなすべきであろう。また本俸が帝国日本全般にわたり共通の秩序の下に置かれたことは、内地人官僚にとっては、その赴任先を植民地へと敷衍することを可能とし、さらに、植民地在勤加俸により優遇されることは、その膨張の人流を後押しする役割を果たしていた。翻って、朝鮮人や台湾人に対して、本俸は帝国日本全般で共通であるから差別は存在しないという論拠を生み出し、植民地在勤加俸を支給しないのも、本国在勤の内地人と同様の措置であり差別ではないという意識を生んだ。植民地という磁場において、明らかに朝鮮人や台湾人に不利に作用し、民族差別との批判を受けながらも、これらの制度が延々と持続することが可能であったのは、内地人の優位・特権を保持したいという意識が存在しつつも、他方で、内地人自身の主観において、“差別は存在していない”という自己弁護・自己暗示が介在していたためといえよう。

では、各法域はいかなる状況にあったのか。まず、本国では、植民地出身者に関する特別任用令はなく、官吏のほとんどは内地人のみで占められ、民族問題を内包せず、あるいは意識することのない世界として維持することができた。法理上は植民地出身者が本国官庁に就職することも可能であったが、それは、本国の行政システムの脅威となるものではない程度の微々たるものに過ぎない。

また、台湾では、1920年代まで台湾人特別任用令は未制定で、基本的には試験任用という原則が前面に押し出されていた。そのため、実質的に台湾人を官僚組織から排除することとなり、のちに有資格者の台湾人が輩出され始めても、登用への消極的な方針は継続されていった。台湾における官僚組織は、民族問題を排除する傾向が強く、翻ってその内部においては民族問題を内在する側面が弱かったといえる。

他方、朝鮮では、「韓国併合」当初に朝鮮人特別任用令が制定されたことで、朝鮮総督府の官僚組織は内地人・朝鮮人の両民族から構成された。ただし、朝鮮人特別任用令はあくまで適用領域を朝鮮に限定した「特別統治主義」型のものであり、本国の官僚制度にはならぬ影響を与えるものではなく、その効力は地域限定的なものであった。しかしながら、朝鮮を一つの領域とした固有の官僚制度を形成する役割の一端を担っていたといえる。そして、内地人・朝鮮人官僚は、本俸では制度上は平等とされたが、内地人には植民地在勤加俸制度が適用されたことで、官僚組織内部には、異なる待遇をもつ民族集団が形成され、ひいては異なる民族意識を醸成する契機ともなった。体制に包摂されることによって同一の意識を生み出す

のではなく、かえって異なる意識を生み出したわけだが、こうした制度は戦時体制下において修正を迫られた。ただし、この修正は官僚組織の内部の問題であって、その外部にある膨大な朝鮮農民たちとはどのような関係を有していたのかは未検討である。植民地社会における官民間の相関関係は、今後の課題として本稿の筆を置く。

■ 투 고 : 2010. 5. 31.

■ 심 사 : 2010. 6. 12.

■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

帝国日本の植民地金融政策

— 「紙でやった戦争」の1コマ —

多田井喜生*
Tatai-y@dream.ocn.ne.jp

<要 旨>

本稿は日本が貧弱な国力でありながら日中戦争から8年間も戦争を続けることができた理由を、金融政策の側面から探る。日本は日本銀行を中心にして、周辺に朝鮮銀行と台湾銀行、さらには満州中央銀行といった植民地発券銀行を支配して障壁として利用したことの構造を持っている。また日本の中国や南方の占領地では、現地通貨を発行することによって、物資調達などの軍事支出や開発投資、経営費用を賄う金融機構を作った。日本は植民地・占領地の通貨を増発することで、日銀券の増発を抑えて内地経済の崩壊を防ぎ、貧弱な国力にも8年間戦争を続けることができたのである。

キーワード：植民地金融政策、朝鮮銀行、植民地発券銀行、現地通貨

1. はじめに

1945年8月、日本は、無条件降伏を勧告するアメリカ、イギリス、中国3か国のポツダム宣言を受諾して、37年7月に北京郊外で起きた盧溝橋事件以来8年あまり続いた戦争がようやく終わった。

日本が降伏した8月15日にトルーマン米国大統領は、空爆効果の調査をドイツと同様に日本にも実施するよう指示し、文官、現役将校など1,150名を動員した米国戦略爆撃調査団は、108部門にわたる膨大な報告書をまとめた。戦時下のこの時期は、当局の徹底した秘密主義に加えて終戦時に政府の命令で重要資料が大量に焼却されたため実態解明が困難だったが、この報告書がその空白を埋めるのに大いに貢献している。

報告書は、結論として日本の国力の脆弱さを指摘し、人口の半分が農業に従事したのに食糧は2割も不足して輸入に頼り、重要な工業原材料や石油などは海外に依存したうえ、熟練工も不足していたとして、こういう。

「要するに日本という国は本質的には小国で、輸入原料に依存する産業構造を持つ貧弱な国であって、あらゆる型の近代的攻撃に対して無防備だった。手から口への、全くその日暮しの日本経済には余力というものがなく、緊急事態に処する術がなかった……その経済は合衆国の半分の強さをもつ敵との長期戦であっても、支えることは出来なかった」

報告書が指摘する日本の国力の脆弱さを、36～8年の世界工業生産シェアで見ると、ア

* 日本総合研究所 参与

アメリカ32%、イギリス9%に対して、日本はわずか4%に過ぎない(第1表)。また、日本とアメリカが開戦した41年の、石炭、鉄鉱石、銑鉄、アルミニウムなど重要物資13品目のアメリカと日本の単純生産比は、78対1である(第2表)。

第1表 世界工業生産シェア(1936-38)

アメリカ	32%
ソ連	19
ドイツ	11
イギリス	9
フランス	5
日本	4
イタリー	3
その他	17
計	100

(Rostow: The World Economy)

第2表 重要物資13品目生産比
アメリカ/日本 (1941)

石炭	9.3
石油	527.9
鉄鉱石	74.0
銑鉄	11.9
鋼塊	12.1
アルミニウム	5.6
13品目単純平均	77.9

(基本国力動態総覧)

これほどまでに懸絶する国力の差を無視して、日本は無謀な戦争に突入したのだが、そんな貧弱な国力の日本が、日中戦争から8年間も戦争を続けることができたのは、日本銀行券を中心にして、周辺に朝鮮銀行券と台湾銀行券、さらには満州中央銀行券といった植民地通貨を配して障壁とし、中国や南方の占領地では、現地通貨を発行することによって、物資調達などの軍事支出や開発投資、経営費用を賄うという巧妙な金融機構があったためだった。日本軍は、軍需物資だけでなく通貨も資金も「現地自活」にしたのである。

日中戦争が始まった37年7月から終戦の45年8月までの東京の卸売物価は、2.2倍の上昇に止まり、京城もほぼ同様だった。一方、占領地の物価は暴騰して、北京は2百倍、上海は5千倍を越えた。これも、日本円で内地から送金される軍事費や投資資金を、中国や南方の占領地では現地通貨—中国連合準備銀行券、中央儲備銀行券、南方開発金庫券などで支出し、手元に残る日本円資金は日本国債の購入に充てて国庫に還流させるという、占領地の経済を犠牲にした運営がなされた結果であった。占領地の通貨を増発することで、日銀券の増発を抑えて内地経済の崩壊を防ぎ、貧弱な国力の日本に8年もの戦争継続を可能にしたのである。

“金なんか幾らでも要るだけ空中からつくりますよ”と当時北京に駐在した銀行マンはうそぶいたが、この金融の仕組みはどのようなものだったのか。この舞台の主演として踊ることになった台湾銀行、朝鮮銀行、満州中央銀行、そして中国連合準備銀行、中央儲備銀行などの外地銀行について、その概要を説明しながら、明らかにしたい(第3表)。

(第3表) 外地銀行の概要

	営業開始	資本金 (当初払込)	主要株主	1945.8.31発行高 百万円
台湾銀行	1899.9	125万円	日本政府20%	1,651
朝鮮銀行	1909.11	250万円	韓国政府30% 李王家1%日本皇室1%	7,987
満州中央銀行	1932.6	750万円	満州国政府100%	8,157
蒙疆銀行	1937.12	300万円	察南・晋北・蒙古 三自治政府各1/3	2,798
中国連合準備銀行	1938.3	2,500万円	臨時政府50% 中国側8銀行50%	103,268
中央儲備銀行	1941.1	1億元	南京政府100%	元3,321,693 (円換算597,904)
南方開発金庫	1942.4	1億円	日本政府100%	19,532
				(円系通貨合計 741,297)

(参考) 外資銀行 1945.3 1,000万円 日本政府100%

現地物価騰貴と為替換算率の堅持による臨時軍事費特別会計予算の膨脹分を負担する
ため1945年3月に設立

資金納入額 陸軍関係 394,409 百万円 (1945. 8. 7まで)
海軍関係 160,743 百万円 (1945. 9. 1まで)

台湾銀行

1894～5年の日清戦争で台湾が日本の領土になると、統治機関として台湾総督府が置かれ、その第2代総督に就任した桂太郎かつらたろう・陸軍中將(後の首相)は、「今台湾を立脚の地と為し、厦門の港門より我勢力を清国南部に注入し、他日清国南部一帯の地は恰も朝鮮半島の如くならしむ」と積極的な南進論を展開した。

99年、台湾の中央銀行として台湾銀行が設立され、銀券を発行して百数十種の雑幣を整理すると、09年に金本位制に移行し台湾銀行券は日本円と等価になった。“南進”を開始した台湾銀行は、45年の終戦時には、台湾17店、中国35店、南洋20店、フィリピン9店など合わせて96の店舗を東南アジア一帯に展開した。

朝鮮銀行

韓国では、1878年に釜山に支店を出した日本の第一銀行が発行する第一銀行券が05年1月には“韓国中央銀行券としての特権”を付与されて、白銅貨や葉銭を回収して貨幣整理を進めていた。

しかし、1904～5年の日露戦役を機に3次にわたって日韓協約が締結されて05年12月に韓国統監府が設けられると、初代統監に就任した伊藤博文いとうひろぶみは、第一銀行券は回収して韓国には新たに中央銀行を設立することに方針転換した。09年10月に韓国銀行が韓国政府3割の出資により設立されて、第一銀行が持つ正貨準備、中央銀行業務、建物什器、行員

を引き継いで営業を開始し、翌年の日韓併合により国名が韓国から朝鮮になると、韓国銀行の行名も朝鮮銀行に改められた。

こうして日本は、大陸と南方地域に対して、「朝鮮銀行は北より台湾銀行は南より進む」体制を整えた。大陸前進兵站基地——これが朝鮮半島の位置づけである。朝鮮銀行は満州や華北への進出を積極化し、韓国銀行として設立された1909年から太平洋戦争終結により閉鎖される36年の間に、朝鮮に京城本店以下24店、旧満州に26店、シベリアに8店、中国関内に40店、日本内地に9店、それにニューヨーク出張所とロンドン派遣員事務所を含め、延べ109店の営業網を東アジア一帯に展開した。

朝鮮銀行のこのような店舗展開は、国策と深く関わり合っており、日露戦争はそもそも朝鮮半島での露国ループと円との角逐に端を發し、第1次世界大戦時のシベリア出兵は朝鮮銀行券のシベリア進出であった。また、満州事変は朝鮮銀行券が満鉄付属地で強制通用力を付与された延長線上にあり、さらに日中戦争は、軍用通貨としての朝鮮銀行券と、ポンドとドルが支える中国法幣との通貨戦争でもあった。

朝鮮銀行の役割についてされに述べると、「植民地銀行障壁論」があった。

前述のように、10年8月22日に国号が韓国から朝鮮に改められたことから、朝鮮総督府は新たに「朝鮮銀行法案」を立案して11年3月の帝国議会上に提出すると、その審議の場で、植民地金融体制の根幹に関わるこんな議論が交わされた。

質問「同一帝国領土内に2個の中央銀行を設け2様の銀行券を流通せしむるは種々不便なる場合を生ずべし、日本銀行兌換券にて統一せしめては如何」。

政府委員の^{あらい けんたろう}荒井賢太郎総督府度支部長官は、こう答えた。

「如何に朝鮮の経済状態は或る事情の為に動揺されても、それは日本の銀行には影響を及ぼさない方針を執るが宜しいではないかという趣意から、特別な銀行を立て特別な兌換券を発行することになりましたのであります」

北の国境で他国と接壤する朝鮮では、一朝有事の際にどんな異変が経済に起きるか計り難い。そこで、朝鮮銀行券をもって内地経済を擁護する緩衝的機能を果たさせるという“植民地銀行障壁論”である。

満州中央銀行

1905年の日露講和条約によって日本は、旅順や大連を含む関東州租借地3,462平方キロと、満鉄付属地——大連-長春間704キロなど総延長1,129キロの鉄道に沿う巾約62メートルの純然たる鉄道用地と市街地など182平方キロの行政権を獲得したが、それは満州総面積のわずか0.3パーセントにも満たなかった。しかし、^{こだま げんたろう}児玉源太郎満州軍総参謀長は日露戦争中に「戦後満州経営唯一の要訣は、陽に鉄道経営の仮面を装い、陰に百般の施設を実行するにあり」という「満州経営策梗概」を立案しており、戦後陸軍はここを拠点に満州の積極経営に乗り出し、日露戦争中に日本軍が満州で発行した円銀兌換の軍票5千万円

は、横浜正金銀行が銀建ての銀行券を発行して回収していた。

横浜正金銀行は1880年に日本銀行に2年先駆けて開業した外国貿易専門銀行で、02年には中国で一覽払い手形を発行していた。

第1次世界大戦直前の13年5月、寺内朝鮮総督は朝鮮銀行に満州進出を命じ、7月に奉天、8月に大連、9月に長春に朝鮮銀行の出張所が開設され、朝鮮銀行券の満州での流通が事実上公認された。

31年になって、9月18日に奉天郊外の柳条湖で中国便衣隊の仕業にみせかけた鉄道爆破事件が起きた。これをきっかけに、日本の関東軍は中国東北部＝満州を制圧し、翌32年3月に満州国建国を宣言、6月15日には、東三省官銀号など4行号の資産と負債を継承して満州中央銀行が設立されて、旧紙幣の回収整理を進めた。

満州では、関東州および満鉄付属地で朝鮮銀行券が法貨として通用していたが、「実際には満州では銀を使っている」ということで、満州国の国幣は銀本位通貨を採用したので、銀価格の変動によって金本位の日本円とは価格差が生じていた。34年にアメリカが本格的な銀買い上げを開始して銀の国際価格が急騰すると現銀の激しい海外流出が始まったため、満州国は35年10月に円本位に移行し、中国も同時に銀本位を捨ててポンドリンクの幣制改革を断行する。満州国幣が日本円にリンクしたことで、台湾銀行券、朝鮮銀行券とも等価になった。

37年1月1日に「農工業の発達に資する為めの特殊金融機関」として満州興業銀行が新設され、朝鮮銀行は、関東州の大連と旅順支店を除く在満州国20店舗、253名の行員、129名の傭員を新銀行に引継ぎ、36年末をもって満州から総撤退した。ただし、新銀行の資本金は朝鮮銀行と満州国が折半で出資し、副総裁には松原純一朝鮮銀行副総裁が横滑りした。

朝鮮銀行が満州興銀に引継いだ勘定は、貸出、預金とも全体の15%ほどだった。朝鮮銀行は、満州で失ったこれを華北で取り戻すことにして、満州撤退直後の37年1月に北京支店を開設し、3月には日系の上海銀行を、38年8月には天津銀行を傘下に加えて、中国での業務展開に力を注いだ。在中国店舗は41年末には25店に達して朝鮮銀行の全店舗のちょうど半分を占め、朝鮮銀行の営業の中心は中国に移った。

中国連合準備銀行

満州国を作った関東軍は、華北に第2満州国を夢見て謀略を繰り返し、37年7月7日に北京郊外の盧溝橋で日中両軍が武力衝突した。日本政府は早々と華北派兵を決め、差当り1千万円の朝鮮銀行券を現地での支払いに当てることにした。華北では、朝鮮銀行天津支店が治外法権を利用して発行する朝鮮銀行券が天津、済南、青島で3百万円ほど流通しており、天津に司令部を置く支那駐屯軍も従来から朝鮮銀行券を使用していたから、差当りこれを増発して軍事支出を賄うことにしたものである。

華北での臨時軍事費の支払いは7月から始まって、37年末で総額9,300万円になり、華北での朝鮮銀行券の流通高は、4,300万円に達した。しかし、外貨に転換できない朝鮮

銀行券は一般には普及せず、ことに外国租界内の物資はすべて蔣介石政権が発行する法幣建てで取引され、法幣がなければ日本軍の必需物資も購入できなかった。

国民経済の領域外に出た貨幣がいかなる運命を辿るかは明らかで、華北の朝鮮銀行券はこの頃、「金魚鉢から跳ね出た金魚」にたとえられた。武力戦では勝っていても、朝鮮銀行券を使用した第1次通貨戦争で日本は蔣介石政権の法幣に敗退した。

日本軍は12年末までに、華北5省と上海、南京で軍事行動をほぼ終え、12月14日に、河北、山東、山西の3省および察哈爾省の1部を包含して北京に中華民国臨時政府を発足させた。

すでに関東軍が制圧した察哈爾、綏遠2省と山西省北部の蒙疆地域では、11月に蒙疆連合委員会が成立し、その中央銀行として蒙疆銀行が12月1日に開業していた。蒙疆銀行の発行する通貨は満州国幣と等価とされ、日本円に間接にリンクしていた。

翌38年3月10日に、中華民国臨時政府の中央銀行として中国連合準備銀行が北京に総行を、天津に分行をおいて開業し、臨時政府は、“円元パー”——連銀円と日本円の等価を宣言した。

連銀開業直後の3月25日、寺内北支那方面軍司令官は連銀券使用命令を出し、同年9月には「軍費支払をもっぱら中国連合準備銀行券により統一する」という軍通牒を発した。38年6月末に華北全域で6千5百万円ほど流通していた朝鮮銀行券は、回収されることになったが、この回収資金をどうするか、さらに今後の軍費支払いに当てる連銀券をいかに調達するか、日本側は知恵を絞った。

38年6月16日、朝鮮銀行北京支店は連銀と「預け合契約」を締結した。「預け合」というのは、朝鮮銀行北京支店と連銀がそれぞれ相手の銀行に預金口座をつくり、日本側が軍事費などの支出に連銀券が必要になったら、朝鮮銀行北京支店にある連銀の日本円預金勘定にその金額を貸記する、連銀もこれと同金額を自行にある朝鮮銀行の連銀券預金口座に貸記することで、連銀券を随時簡単に引き出す仕組みである。

貸記する——要するに、お互いの預金口座に同金額を記入するだけで実際に現金が動くわけではないから、“架空預金”である。朝鮮銀行にある連銀の預金口座からの引き出しは禁止された。日本軍の軍費支出なのに、華北では日本円をまったく使用しないで済むという巧みな方法だったが、連銀券は増発の一途を辿り、45年8月の終戦時には850億円になった。

中央儲備銀行

40年3月、国民政府行政院長だった汪兆銘が重慶を脱出して南京還都宣言を行って新「国民政府」（南京政府）を樹立した。翌41年1月、南京政府の中央銀行として中央儲備銀行が総行を首都南京において開業した。資本金1億元は南京政府が全額出資し、儲備券は「中華民国の法幣となし、無制限に流通する」とされた。蔣介石政府が発行する旧法幣に等価でリンクし、開戦後の42年5月に旧法幣の交換回収を俟って100元＝18日本円の

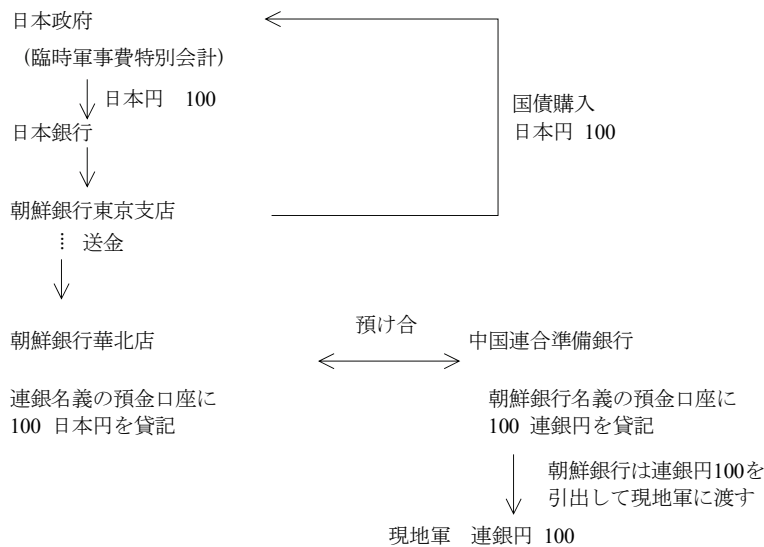
レートが確定した。日本側は、連銀と同じ預け合契約を、華中では中央儲備銀行と横浜正金銀行との間で結び、終戦時の儲備券の発行高は2兆2千7百億元に達した。

終戦時の朝鮮銀行と正金銀行の預け合残高は、華北で441億円、華中で1兆5千7百億元であり、華北では連銀券発行高の半分、華中では儲備券発行高の4分の3に達している。これで、日本側は戦費や占領地の経営費用を賄ったわけである。

朝鮮銀行を通じた軍事費送金ルート

華北の前線で支出される軍事費は、事変当初は、臨時軍事費特別会計から日本銀行代理店である横浜正金銀行華北支店に振込まれて、現地で朝鮮銀行券が払出された。しかし、連銀が開業して華北での軍費の支払通貨が連銀券に統一されると、連銀と預け合契約を結んでいる朝鮮銀行が、東京支店の傘下に在華北国庫業務取扱店を編成し、支払の勅裁を得た軍事費は東京支店が受入れて朝鮮銀行在華北店舗へ送金することになった。現地軍はこれを各地の日銀代理店である朝鮮銀行の店舗に配布し、個別費途が決まれば、朝鮮銀行の各店舗が預け合により連銀預け金を積み上げて所要連銀券を調達して現地軍に供給するという手続きで行なわれた（第4表）。

(第4表) 軍事費送金ルート



日本円勘定で振込まれる華北の軍事費は連銀券で支出されるから、朝鮮銀行には円資金がそのまま累積する。

朝鮮銀行東京支店を通じる臨軍費の国庫送金は、華北向けのほか朝鮮と関東州向けがあり、これは朝鮮と関東州での朝鮮銀行券の増発になるので、朝鮮銀行は日銀から受入れた円資金で国債を購入して増発分の発行準備に当てた。

また、連銀券で支払われる華北向け国庫送金については、そのまま朝鮮銀行東京支店の余裕金となるから、自主的に国債の購入などに当てられた。どちらの場合も、軍事費として朝鮮銀行東京支店に振込まれた円資金は、国債を購入することで国庫に戻るから、国庫負担はゼロになる。

朝鮮銀行華北店の一般貸出も、預け合によって調達した連銀券で行われた。貸出相手は主に日本企業である。日本政府は、外国為替管理法のもとで資本の外地流出には厳格な許可制をとったので、朝鮮銀行は「日本の商社が空手にて外地へ進出し、現地当行支店よりその必要資金を信用にて借り入れ、見返り担保として、借入金相当額の預金を内地当行支店に提供するという方法をとった」。朝鮮銀行には、連銀の資金を貸し出すと自行の円預金が増えることになった。

「岡崎君、戦争は紙でするものだよ」

太平洋戦争も日本の敗色が濃厚になった43年7月、上海大使館の岡崎嘉平太^{おかざきかへいた}・総務部長は、石渡荘太郎^{いしわたそうたろう}・南京政府経済最高顧問（翌年2月に小磯内閣^{こいそ}の蔵相に就任）からこういわれたという。軍事費の支払や物資の蒐集は、紙、つまり紙幣でするものであって、金塊などは使うなということであるが、連銀との預け合が成立したことで、“紙でやる戦争”の仕組みができあがったのである。

しかし、この預け合によって発行される連銀券や儲備券は、“架空預金”を発行準備とするのだから、大変安易な発行制度である。

このころの日本銀行の発券制度は、31年に金本位制が停止され、42年に新たに日本銀行法が制定されると、兌換銀行券と呼ばずに単に日本銀行券という名称に変わって、金や外貨との兌換義務は全く外された。この日銀券を朝鮮銀行券は発行準備とし、さらに朝鮮銀行の別動隊として華北に連銀が設立されて、朝鮮銀行への架空預金を発行準備にして連銀券という“軍票”を発行する体制がつくりあげられたのだが、これが通貨制度の根本を紊し、統制の出来ないインフレの原因となるのは、火を見るよりも明らかなことだった。

41年12月8日、日本は米英両国に宣戦布告をして、太平洋戦争に突入した。新たに戦域に入った南方では、現地通貨表示の軍票が使用されることになり、翌42年4月1日には南方開発金庫が営業を始め、開業1年後の43年4月から各地区の現地通貨表示の南方開発金庫券を発行して、現地日本軍の軍費支払のために供給した。

これにより、太平洋戦争下の占領地の通貨の供給は、朝鮮銀行、横浜正金銀行に加えて南方開発金庫の3行が担うことになり、終戦までの軍費支払のための南発券の供給額は111億円、また終戦時の南発券発行高は180億円になった。

インフレで破綻した軍事費会計

日中戦争が始まった37年9月10日に臨時軍事費特別会計が設置され、終戦の翌年2月

末をもって終結するまで8年8か月にわたるこの特別会計の決算額は、歳入1,733億円、歳出1,553億円の巨額に達した（第5表）。

（第5表）臨時軍事費特別会計（歳入）

公債	1,071 億円
借入	426 *
一般会計繰入	167
その他	69
計	1,733
* 内訳	
朝鮮銀行	51 (連銀券)
横浜正金銀行	252 (儲備券206・満州国幣34・仏印貨11)
南方開発金庫	111 (南発券)
日本金行	12 (タイ国貨)

日本の戦時下の財政の特徴は、軍事的経費のほとんど全部が公債および借入金によって調達され、租税その他の収入は辛うじて政治的経費を賄ったにすぎない点にある。例えば、44年度の歳出に占める軍事費の割合は78.7%、歳入に占める公債と借入金の割合は78.6%に達しており、財政インフレ必至の運営が続けられていた。

臨時軍事費の地域別支出状況は、内地が7割前後だった。内地以外での臨軍費の支出には、朝鮮、台湾、満州を含めてそれぞれ現地通貨が用いられ、43年度から臨軍費の調達を現地通貨の借入に変更し、43年度は連銀券9億円、儲備券27億円(100元=18円で換算)、44年度は連銀券42億円、儲備券179億円が、それぞれ朝鮮銀行と横浜正金銀行から貨上げられた。したがって朝鮮銀行は、43年度は臨軍費総額の3.1%、44年度は5.7%を預け合によって連銀から調達したことになり、臨時軍事費特別会計の歳入総額のうち、預け合による調達は連銀券51億円、儲備券206億円と、15%に達している。

（第6表）戦備総額の一試算

臨時軍事費特別会計	1,553 億円	連銀券	523
外資金庫借入 *	5,246	内訳	儲備券 4,625
一般・特別会計	249	→	南発券 80
国防献金	408		(不突合 18)
その他	100		
計	7,558		

* 外資金庫借入はインフレ価格調整による損失額

臨軍費特別会計1,553億円を含む日中、太平洋戦争を通じる戦費総額について、『昭和財政史』は、7,558億円と試算している（第6表）。ただし、このうち7割近い5,246億円は、45年になって外資金庫が連銀券、儲備券、南発券で支出したものである。現地の

猛烈なインフレによって“紙屑”と化した通貨での支払いを公定レートでそのまま戦費に加算するのは無意味なので、とりあえず戦費総額からこれを除いた2,312億円について見れば、37年度から44年度までの中国での臨軍費の支払総額380億円、すなわち戦費総額の16.4パーセントが、連銀と儲備銀から預け合によって調達されたことになる。

華北の連銀券は、円元パー、日本円と等価でスタートした。また華中の儲備券は、42年5月から100元=18円の換算率を採用した。しかし、占領地の激しい物価騰貴によって、例えば金塊相場で算出した連銀券100円の対日本円相場は、41年末 41円、44年末 1円3銭、45年8月10日 4銭と暴落し、同じく儲備券100元の対日本円相場も43年末 2円8銭、45年8月10日 1厘と“紙屑化”していた(第7表)。

(第7表) 対日本円相場 (単位 日本円)

	連銀券 100円	儲備券 100元
1941. 12 末	41.00	19.95
1942. 12 末	37.14	8.13
1943. 12 末	11.34	2.08
1944. 6 末	3.68	0.69
1944. 12 末	1.03	0.22
1945. 6 末	0.12	0.007
1945. 7 末	0.07	0.001
1945. 8. 10	0.04	0.001

(現地金塊相場より算出)

しかし、日本政府は、「当面支那民心把握の見地より比価の堅持を主とする」方針を固持しつづけた。確かにこれほどのインフレ、たとえば儲備券の相場は45年に入って毎月半分以下に下落しており、これに見合って儲備券の換算率を毎月半分に切下げることなど不可能なことだったが、換算率を据え置いたことによって、朝鮮銀行の勘定に占める中国店の割合が異常に膨らむことになった。

日本政府は、現地の物価騰貴によって軍事費が膨脹するのを避けるため、43年4月からそれまで臨軍費特別会計の公債発行によって賄ってきた現地軍事費を、華北と蒙疆では朝鮮銀行から連銀券を、華中華南では正金銀行から儲備券を借入れて賄うことに変更した。

さらに45年になると、占領地のインフレによる戦費の膨脹に対処するため3月1日に外資金庫を開業させ、「今後儲備券・連銀券物価が暴騰するも軍事費予算は現在以上に増加することなく而も現地に於ては適正価格に依る支出を厭うことなく物価騰貴に依る予算増額と同様の支出を行う」ことにした(第3表参照)。

具体的には、臨軍費予算を1とした価格調整率を、陸軍1.9、海軍9に設定し、この分は現地通貨を借入れて臨軍費予算に上乗せして支出した。調整率は、5月から4.9に、6月以降は1.2.9とめまぐるしく変更したが、現地では物件費が予算の1.3.0倍にも達するほどの

すさまじいインフレによって経済はすでに破綻していた。

45年7月30日、大東亜省支那事務局は、「戦局に即応する対支経済施策」を策定し、「既存預け合契約に依る我方債務を時価に依り金を以て償還する」方針を明示した。戦後処置を考えた対策である。

10日、閣議決定を経て、大東亜省から現地関係各機関に、金条処分による預け合債務その他政府債務の弁済が電報で指令された。

それをうけて、実際の金条売却は、華中では8月14日から8月31日までの間に、9.7トン（売上金額2兆4,015億円）、ほかに金証券関係4トン（5,012億円）、合計13.7トンの金条が売却され、これで8月14日現在の預け合預り越高1兆5,712億円を完済し、残額はその後の国庫支出に当てられた。

また、華北でも内地から指示を受けた8月10日時点で金条9,600本（3トン）を当時の天津の3日間の平均相場で連銀に売却した。売却総額456億円は、朝鮮銀行の預り金435億円、正金銀行の預り金10億円の返済に当てられ、残額は、その後の国庫支出に当てられた。終戦時点での預け合債務の清算に要した金は、華北3トン、華中13.7トン、合計16.7トンだった（第8表）。

(第8表) 金条売却による預け合勘定の決済

	売却数量	金額	預け合残高
華北	2,976 kg	45,606 百万円	44,458 百万円
華中	13,713 kg	2,914,917 百万元	1,571,226 百万元

(残額はその後の支払に充当)

こうして、連銀開業直後の38年6月から7年余りにわたって中国の占領地で、朝鮮銀行と正金銀行が累積した預け合債務は弁済された。しかしこれは、敗戦を目前にして、占領地に設立されたこの日系両銀行の通貨が“紙屑”化した時点で、100円=18円などの実態と全くかけ離れた交換レートで弁済して辻褄を合わせたに過ぎない。

思い起こせば、日清戦争後の1899年に台湾銀行が設立されて台湾で銀行券を発行し、同1902年には第一銀行が韓国で一覽払手形（銀行券）を発行して、日本“円”は大陸に渡った。

以来40余年、円は、ドルやポンドを後ろ盾とする中国“元”と角逐を続けながら、大陸で流通圏を拡大し、終戦時には、満州、華北から華南、東アジア一帯で、総額5千3百億円の円系通貨が発行されていた（日銀券303億円を含まず）。

台湾銀行券14億円、朝鮮銀行券50億円、満州国幣82億円、連銀券849億円、蒙銀券28億円、儲備券2兆2,772億円（日本円換算4,099億円）、南発券182億円……、これらは、敗戦とともにほとんど反古と化して、華北と華中では僅か20数トンの金

の価値にまで下落した。それが、「大陸に渡った円」の終焉であった。

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

韓国植民地時代の教育政策と教育実態

片桐芳雄*

ykatagir@agate.plala.or.jp

<要旨>

本稿は、植民地時代の朝鮮で行われた教育政策の歴史的な経緯を記述するとともに、1996年、韓国大邱地域で行った聞き取り調査に基づいて当時の教育現場の実態を改めて考えてみようとしたものである。実態調査は、当時の初等教育（普通学校）や中等教育の経験者、官立大邱師範学校の卒業生などを対象に行われたものである。

キーワード：植民地教育政策、植民地教育実態、官立大邱師範学校

1. 大日本帝国の確立と植民地支配

1876年、明治維新を成し遂げた日本のスローガンは、「文明開化」と「富国強兵」であった。アメリカ、イギリス、フランス等の欧米先進国の文物を積極的に学び、採り入れ、その上で強い経済力と軍事力を保持しようとするものであった。

そのために教育もまた重要な役割を果たすことが期待された。1872年に発布された「学制」は、制度的枠組みは、当時の先進的中央集権国家であったフランスのナポレオン学制に学び、教育の内容と方法は個人主義的なアメリカに学んだものである。学制の布告にあたって出された「学制布告文」は、日本の近代教育史における三大文書の一つというべきものであるが（ちなみに、他は1890年教育勅語、1947年教育基本法）、そこには三つの理念が書かれている。すなわち、①「実学」の強調にみられる実利主義的な教育観、②立身出世を奨励する個人主義的な教育観、③男女および身分制を廃する教育の機会均等の強調である。このような考え方は福澤諭吉に典型的に見られるが、「文明開化」「富国強兵」という国家目標を担う人材の選抜・育成を強く意識したものとなっている。ここではこれらの国家目標に相反すると見られた儒教や仏教的価値は否定された。

もっともこのような「文明開化」政策は民衆の反発を招き、学制実施直後には学校打ちこわしなどの暴動も起こっており、学校教育の定着のための教育政策の模索が続けられた。

このような模索過程に一応の決着がついたのが1889年の大日本帝国憲法発布と翌1890年の教育勅語の発布であった。

* 日本女子大学 教授

大日本帝国憲法は、第 1 条に「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」、また第 3 条に「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と規定し、近代国家の道を歩みはじめた日本が、天皇の統治する国家であることを明確に示すものであった。これに対して教育勅語は、天皇のもとに国民の精神と道徳を統一しようとするものであった。

すなわち「学制」が立身出世を奨励する個人主義的な教育観を強調し、「文明開化」「富国強兵」という国家目標を担う人材の選抜・育成を強く意識したものであるとするなら、教育勅語は、天皇の道徳的権威を強調することによって、教育による国民統合をめざすものであった。

人材選抜と国民統合は、相互に矛盾する側面を持つが、近代国家の教育、すなわち近代公教育は、この両方の機能を担うものである。ここに、日本における近代教育制度が、天皇制教育体制という形で確立したと見ることができる。

以後、この体制のもとで、初等、中等、高等教育の体制が順次拡大・整備されていくことになる。

このような過程は、同時に、日本が自らの領土を画定し、その領土内の支配体制を確立する、すなわち「国民」化する過程でもあった。そして、この過程は、韓国（朝鮮）、中国（清）、ロシア等、領土を画する隣国との軍事的緊張を伴うものでもあった。

明治維新直後の 1869 年、明治政府は蝦夷地を北海道と称することとし、直轄官庁として開拓使を置いて、積極的な「開拓」に乗り出した。「開拓」は、この地に先住するアイヌ民族の生活と文化を破壊し「日本化」することにほかならなかった。「開拓」によってアイヌの人々は土地と生業が奪われ、強制移住させられ、戸籍編成の過程で日本式の姓を名のることが求められた。1877（明治 10）年開拓使は、アイヌ児童のための教育所を設置し、日本語の習得が奨励された。以後 80 年代にかけて開拓地域にアイヌ学校が設置され、就学が奨励された。

1879 年の琉球処分によって沖縄県が設置された。

琉球はもともと 15 世紀前半に琉球列島を支配する王国であった。1609 年の薩摩藩による琉球侵略によって薩摩藩の支配下に置かれたが、同時に明国（のち清国）からの冊封を受けていた。琉球処分は、このような琉球王国を解体し、清国との外交を断絶させ、軍事的威嚇によって強引に日本の領土に組み入れるものであった。

このような事情の下で設置された沖縄県では、標準語や断髪をはじめとする日本の言語・風俗を普及させる一方で、当面は「旧慣」の存続にも意を用いねばならなかった。新たに設置された小学校の就学率は本土と比べて極端に少なく、1880 年代半ばまでは 5%にも達せず、とりわけ女子の就学率は 86 年に至っても 1%以下であった。

日清戦争の勝利はこのような状況に大きな変化を与えた。日本政府は沖縄の日本帰属をめぐる清国の動向を懸念する必要がなくなり、また琉球処分に対する琉球旧支配層の抵抗もなくなったからである。就学率も日清戦争後の 1896 年には 30%を超え、その 10 年後には 90%を超えて急上

昇し、本土とほとんど変わらないほどになった。

北海道にせよ沖縄にせよ、大日本帝国憲法公布以前に日本の領土であったという意味で「内地」であった。そして日本は日清戦争の勝利によって初めて「外地」すなわち植民地を持つことになった。1895（明治27）年日清講和条約による台湾の領有である。

初めての植民地である台湾の統治方法をめぐっては二つの考え方があった。北海道や沖縄県のように、内地に準じた統治をする「内地延長主義」と、内地とは異なる統治をする「特別統治主義」（植民地主義）である。台湾統治初期に民政長官としてその行政を担当した後藤新平は後者の立場をとった。植民地支配の困難を強く認識していたからである。

これに対して初代学務部長に就任した伊沢修二はむしろ前者の立場をとった。しかし96年元旦、日本人教師6人が抗日ゲリラに惨殺される事件が起こるなど、日本の台湾統治に対する現地の反発は強かった。伊沢の意気込みに反して、日本語の普及はそれほど効果が上がらなかった。

しかし教育によって文化的統合（同化）をめざしつつ、各種行政で内地とは異なる特別統治（差別）を行なうという、いわば「同化による差別」はのちの朝鮮を含め、日本の植民地支配の基本方針となった。

98年台湾公学校令が公布され、日本児童が通う小学校とは別に、8歳以上14歳未満の台湾児童を対象に、日本国民としての徳性の涵養と日本語の習熟を目的として、6年制の公学校が設置された。これは、「本島人ノ子弟ニ徳教ヲ授ケ以テ国民タルノ性格ヲ養成シ同時ニ国語ニ精通セシムルヲ以テ本旨」とするものである。

その後公学校規則の改正がなされたが、就学率はなかなか上がらなかった。伝統的な私塾である書房が根強い支持を得ていたからである。

1919年台湾教育令が公布され、6年制の公学校に接続する中等教育機関として高等普通学校と女子高等普通学校が設置され、この他師範学校、実業学校などが日本人とは別系統のものとして体系化された。この第1～3条は後述する1911年の朝鮮教育令とほぼ同文である。

さらに22年には第2次台湾教育令が公布され、日本人と台湾人の学校体系は統合され、「内台共学」の制度が成立した。しかし、初等教育段階は、「国語ヲ常用スル者」を対象とする小学校と「常用セサル者」を対象とする公学校に分かれ、事実上、日本人と台湾人とは別学にされた。中等教育以上は共学であったが、日本語で教育が行われたため、日本人に圧倒的に有利であった。

このほか、高砂族と呼ばれた先住民に対する教育は、上記とは別に蕃人公学校や警察官による蕃童教育所で行われた。

朝鮮植民地化の過程は台湾のそれとは、いくつかの重要な点で異なっている。台湾領有が日清戦争の勝利によって予想外に行われたのに対して、朝鮮の植民地化は、明治初年の征韓論を端緒に、江華島事件による日朝修好条規の強要、日露戦争後の3次にわたる日韓協約による韓国の保護国

化等の過程を経て 1910 (明治 43) 年の日韓併合条約によって強行された。また台湾が清国の一部であったのに対して、朝鮮の場合はその全国土を支配下に入れるという形で行われた。日本にとって朝鮮は、地理的に最も近く、軍事的にも台湾とは比較にならないほど重要な位置を占めていたが、同時に両国は古くからの歴史的関係を持ち、日本はむしろ朝鮮の文化から多くを学んできた。このような朝鮮を植民地として支配することは、きわめて大きな困難が予想され、このために、日本は台湾での経験を最大限に生かそうとした。

韓国を併合した日本は、大韓帝国 (韓国) の国号を改め朝鮮と称することとし、朝鮮総督府を設置し、併合の翌年 1911 年には第 1 次朝鮮教育令を公布した。

第 1 条に「朝鮮ニ於ケル朝鮮人ノ教育ハ本令ニ依ル」と、朝鮮人と日本人の教育は別体系とすること規定したあと、第 2 条「教育ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キ忠良ナル国民ヲ育成スルコトヲ本旨トス」と規定した。まさに「同化」の方針である。しかし第 3 条には、「教育ハ時勢及民度ニ適合セシムルコトヲ期スヘシ」と規定し、「時勢及民度ニ適合」という名目のもと「差別」の教育方針が合理化された。

このような第 1 条から第 3 条に示された基本方針は、前述のように、19 年の台湾教育令とほぼ同文である。台湾で領有後 25 年あまりたって明文化された基本方針を、併合直後から実施したところに、日本政府の朝鮮支配への強い姿勢を見ることができる。教育勅語の趣旨に基づくとする「同化」(国民統合)と、時勢と民度に適合させるという理由による「差別」という基本方針が、当初から貫かれたのであった。

初等教育機関として修業年限 4 年で入学年齢 8 歳以上の普通学校、その上に男子 4 年・女子 3 年の高等普通学校が設置された。普通学校では朝鮮語・漢文の科目も置かれたが、最も多くの時間が割かれたのは国語 (日本語) の授業であった。実業学校と専門学校の規定はあるが師範学校についての規定はなかった。これもまた、「時勢及民度ニ適合」という基本方針に基づくものである。

1919 年 3 月の三一独立運動に見られる朝鮮人民の強い抵抗に直面した日本は、武断政治から文化政治に方針転換し、1922 年第 2 次朝鮮教育令を公布した。第 1 条は「朝鮮ニ於ケル教育ハ本令ニ依ル」である。第 1 次朝鮮教育令第 1 条から「朝鮮人ノ」という文言が削除され、さらに第 3 条もなくなっている。すなわち「内鮮共学」の建前のもと、同日に公布された第 2 次台湾教育令と同様、朝鮮人と在住日本人の教育を同一の規定に基づくものとし、「国語ヲ常用スル者」を対象に小学校・中学校・高等女学校が、「常用セサル者」を対象に普通学校、高等普通学校が設置された。これらの学校の入学資格・修業年限は同一としたが、国語を「常用」するか否かで区別することは、日本人と朝鮮人の差別を表面上糊塗したに過ぎなかった。また初等教育段階のみ別学であった台湾と比べると、中等普通教育段階でも事実上「内鮮」別学であり、「一視同仁」の建前にもかかわらず差別的実態に変わりはなかった。

1938 年 3 月第 3 次朝鮮教育令が公布され、普通学校・高等普通学校・女子高等普通学校を廃止

し、内地同様の学校体系に一本化された。さらに1941年3月には国民学校規程が公布され朝鮮語の学習が廃止された。文字通り「同化による差別」が成立したのである。

他方、台湾においては1941年3月第3次台湾教育令が公布され、小学校・公学校を廃止して国民学校に一本化された。

以上、1では、明治維新以後の、領土の画定と領土内の支配体制確立の過程、すなわち大日本帝国確立の過程と、それが不可避的に生み出した植民地支配の特質とその教育政策について述べた。以下、その教育の実態について、私が行った調査をもとに述べてみたい。

2. 教育の実態—大邱での調査から

1) 慶北大学名誉学生への聞き取り調査から

私は、1996年9月から一年間、大邱にある慶北大学の特別研究員として、韓国に滞在した。日本による植民地支配下の教育実態調査を行なうためである。

実態調査は、初等教育を中心とし、主として聞き取りという方法で行なった。聞き取りの対象としたのは、私が滞在した慶北大学の「名誉学生」である。慶北大学には大学開放事業の一つとして「名誉学生」という制度があった。1995年から始まったこの制度は、一定年齢以上のお年寄りの入学を、無試験・無授業料で許可し、一般の学生とともに正規の授業を、所定の単位内で受講させる、というものであった。私が調査対象とした名誉学生は、1995～1996年度に「入学」した者のうち、1945年の解放時点で国民学校6年生以上であった可能性のある、1934年3月以前に生まれた人々、243名であった。

まずこれら全員に郵送の質問紙による予備調査を行った。宛先不明で7名分が返送されたが、最終的に78名の回答を得た。回答率33.1%ということになるが、住所・氏名を明記し、7頁20項目にわたる記述式のめんどうな質問紙への回答率としてはやむを得ないものであったと考える。

これらの回答を検討し、年齢・学歴・回答内容などを考慮の上、13名の聞き取り対象者を選定した。これらの対象者に、97年3月から6月までの期間、一人約2時間余りの聞き取り調査を行った。13名の性別は男性9名、女性4名、生年別では1910年代1人、20～24年2名、25～29年9名、30年代1名であった。

以上のような聞き取り調査に対して、対象となった人々はきわめて協力的であった。1年間という比較的長期の滞在期間の中で、慶北大学はじめさまざまな韓国の人々の好意のもと、名誉学生とのコミュニケーションを個人的にも図ることができたお陰であったと、私は思っている。植民地教育の体験を、旧統治国の研究者が聞き取るためには、配慮すべき多くの問題があり、まずは率直にその体験を語ってもらう関係を作ることが重要であろう。そのためには、長期間の現地

滞在という好条件を与えられたことは幸いであった。

もともと、名誉学生の聞き取りが一段落した 97 年 6 月、慶北大学校師範大学教育学科のセミナーにおいて、聞き取り調査の状況について報告を行ったが、この際、名誉学生だけを対象にした聞き取りでは、データに偏りがあるのではないかということが議論になった。このような示唆もあって、その後、より多様な経歴の人たちの聞き取りもすることとし、98 年 1 月に再度訪韓し、大邱の地域老人会で、普通学校未就学者の聞き取りを行うよう努力した。その結果 4 名の聞き取りができたが、その性別は、男性 3 名、女性 1 名、生年は 1900 年代 1 名、20～24 年 3 名であった。しかし、結果的に未就学者の聞き取りはきわめて難しく不十分であった。

いずれにせよ、この聞き取りの経験は、私にとって、じつに得がたい体験となった。私は、植民地教育についての、文字通り、怨嗟の声を、たくさん聞くことを覚悟して調査に臨んだが、この調査で、私が最も深い印象を受けたのは、聞き取りに応じてくれた人々が、つとめて冷静に、客観的に、当時のことを語ってくれたことである。それは、単に、私が覚悟していたような、日本に対する恨みツラミばかりではなかった¹⁾。

①普通学校の問題

朝鮮民衆は、公立普通学校に対して「1910 年代には大まかに見れば抵抗感と嫌悪感を示していて、日帝当局から強制就学命令を受けて初めて「子女を戦に送るような含涙而送」までしたが、1920 年代に入って、このような態度は緩和し始め、ひいては好感に変わっていった」と韓祐熙は述べている²⁾。また古川宣子は、43 年時点で普通学校の就学率は 49.0% であるが、志願者は 70% 近かったと推計できると言う³⁾。

私の聞き取り調査で、1904 年頃に生まれた O さんは、普通学校はあったが、行きたくなくて隠れたりした。「学校に行くと子どもが危ないと思って親が行かせなかった。隠したりした。学校に行くと日本人に似ると言っで。」などと 1910 年代の状況について語っている。また、30 年代に京城師範学校を卒業して故郷済州島の学校に赴任した人の証言によれば、学校の教師が就学勧誘に行くと村の子どもたちは皆逃げてしまってなかなか入学しなかったという。

このように 30 年代以降になっても、地域によっては総督府の教育に対する強い忌避と抵抗の意識は存在したが、全体としては急速に弱まっていったように見える。そこには植民地統治国が持ち込む、経済と文化の圧倒的な優位性があった。

普通学校入学前、2 年間、朝は書堂、夜は日本語を習うために夜学会に通った F さんは、「日

1) 上野千鶴子のいうように「語り narrative は語り手と聞き手の共同制作」(『ナショナルリズムとジェンダー』青土社、1998 年、175 頁) であろうから、私もまたこのような語りの制作に手を貸した、ということになるのかもしれない。しかしそのことを自覚したうえでなお、私はこのように、私の行なった聞き取りの内容をとらえておきたい。

2) 佐野通夫訳「日帝植民統治下朝鮮人の教育熱に関する研究」(『四国学院大学論集』第 81 集、1992 年)

3) 「植民地期朝鮮における初等教育」(『日本史研究』370 号、1993 年)

本語ができないと社会の落伍者になるという意識があった」と語っている。夜学には年長者も多かったが、彼らはよりよい仕事を得るために日本語が必要だと考えた人々であった。これらの人々は、Fさんのように普通学校に入る準備のために日本語を学ぼうとした子どもたちと一緒に机をならべた。生活の必要のためである。彼らの多くは、さらに普通学校の入学も望んだことであろう。普通学校には10代後半はもちろん、20代の青年も珍しくなかったのである。

植民地支配の継続の中で、生活のためには普通学校に入り、日本の教育を受けるほかない、と考える朝鮮民衆が増加していったのであったろう。

しかし多くの父親たちは、日本支配下で生活を送らねばならぬ子どもたちの将来を案じながら、「日本の学校」に彼らを入れることを潔しとはしなかった。彼らは苦悩に満ちた選択をすることになる。

約10万坪の地主の長男として生まれたAさんの父は、朝鮮が独立した場合、長男が、科挙を受けて官吏になるためには、漢文学習が必要だと考え、Aさんを書堂に通わせ、その必要のない次男には普通学校入学を認めた。Aさんが、自ら密かに希望した普通学校に入学することを父親が認めたのは、17歳になってからであった。Kさんの兄も書堂に通ったのち、従兄弟たちの影響で日本語を学ぶため私立学校に入学したが、それは父や祖父に隠れてのことであった。

普通学校に入学した場合でも、それ以前に書堂や家庭で、まず漢文を学習するというのが一般的であった。伝統を重んずる格式ある家の男子は、まず漢文を学ぶべきだとする考えは、1920年代はもちろん30年代においても、なお強固なものであった。これこそ朝鮮民族としての文化的アイデンティティー確保の証であったからである。

いずれにせよ、普通学校入学自体が競争の対象になっていった。したがってさらに、それ以上の中等学校への進学となれば、前節で述べた朝鮮総督府の教育政策のもとで中等教育機関が少なかったが故に、当時の日本以上の熾烈な進学競争が展開されたのであった。

②中等教育の問題—学校教育における植民地矛盾の発火点

40年代の初め大邱公立商業学校に入学したIさんには、「入学定員は日本人朝鮮人半分ずつ。入学倍率は朝鮮人は20倍、日本人は2倍。したがって必然的に朝鮮人学生の方が優秀だった」と語っている。この数字はもとより記憶によるもので不確かであろうが、中等学校への門は、日本人には緩く、朝鮮人には厳しかった。

江陵高等女学校に入学したJさんも「50人募集のうち日本人は25名優先的に入学し韓国人25名は競争だった。当時日本人は少なかったので易しかったが、韓国人は大変だった。同じ学校から5人受けて自分だけ合格した。学校で夜遅くまで課外勉強した。夕食のために一旦自宅へ帰り、また学校へ戻って勉強した」と語った。片道6kmの村から通っていたHさんも、「4年生の頃から中学校受験準備を始めた。夜まで課外補習授業があった。自分は遠かったので2時間ぐらいで帰宅した」と語っている。たいへんな受験地獄だったのである。

このような難しい入試をパスするのであるから、Iさんの言うように「必然的に朝鮮人学生の方が優秀だった」であろう。このような生徒を相手に、Iさんの入学した商業学校に新たに赴任した日本人の校長は、成績のつけ方を、試験50%操行50%にした、という。操行点の割合を高くすることによって日本人の成績を上げようとしたのである。Iさんは、日本人より朝鮮人生徒の成績が良いことにその校長は我慢ならなかったのだ、という。Jさんの学校の教師は、「授業中手を挙げても韓国人には指さなかった。難しい問題は韓国人にさせた」。このような露骨な民族差別は、中等学校に行くほどひどくなったようである。特に教練の時などはひどかった。Iさんは「特務曹長は、単純な訓練ばかりさせて、その中の1人は露骨に民族的な差別をするんですね。」と、60年以上前のことを思い出すだけでも怒りがこみ上げてくるようであった。

このようななかで、Iさんは勉強する気がなくなったというが、同時にこの不合理に対して、いやでも民族意識が目覚めることになるのである。

生徒同士の深刻な対立もあった。Jさんによれば、「女学校では座席も別々だった。弁当も別に食べた。日本人は「にんにく臭い」と言ってそばに来なかった。「日本人に対する反感や憎しみを当然持つようになったが、喧嘩しても損するのは自分たちだと分かっていたから我慢した」と語っている。

③日本人教師の問題

聞き取りのなかで深く考えさせられたのは日本人教師についての話である。

Jさんは「今でも衝撃的な出来事として憶えているのは、お父さんが亡くなって学校を休んだ子が後日学校に来たとき「なぜ教育訓練を受けなかった」と頬を張られたこと」だと言い、特に男の教師は、トイレ掃除以外に、正座して手を挙げさせるなどの体罰がひどかったという。またMさんは「6年制学校の4年の担任は恐かった。教室に竹の棒を置いておいてこれで頭を殴った」と言う。Nさんの端的な表現を借りれば、「その時は罰以外に先生がすることがなかったですね。それで先生は本当に厳しかった」ということになる。

しかし同時に、日本人の担任の教師は尊敬できる人だったとして、今でもその思い出を大切にしている人も少なくない。

Kさんの場合、校長先生が女の自分に進学を強く勧め、父親が反対すると講義録を申し込んだりしてくれた。校長先生は教師5名のなかの1人だけの日本人だった。奥さんが運動会や学芸会するときオルガンを弾いてくれた。教師経験があり、やさしかった。「校長先生の話をしたら、いまでもみんな涙を流しますよ。」「私たちを可愛がってくれましたからね。「朝鮮人」という言葉はこの先生からは聞いたことがないです。」と語っている。

朝鮮人の子どもにも日本人の子どもにも、どの子にも、分け隔てなく（日本人の子どものように！）接した日本人の教師たち、この教師たちの善意と愛情（「教育愛」！）は素直に認めよう。露骨な民族差別をしたような教師に比べれば、どんなに良かったか分からない。そしてこのよう

な教師たちの善意と愛情が、朝鮮の子どもたちにストレートに受け入れられ、今もなおその心の中に生き続けていることに、私は戸惑いとともに深い感慨をおぼえたものであった。

しかしこのような教師の「実践」は、朝鮮の子どもを自立した朝鮮人として育てるのではなく、日本人にするために「日本人の子どものように可愛がる」のであった。教育愛と民族差別が、紙一重、あるいは盾の両面であったのではないかと考えさせられる。

④朝鮮における女性、及び女子教育の問題

もう一つ聞き取りのなかで印象的だったのは、上のKさんの例にも関連する女子教育の問題がある。

男子のほとんどが普通学校入学前に書堂や夜学で漢文や日本語を習ったのに対して、女子はそのようなところには行かなかった。Fさんは自分の姉に、学校から帰ったら毎日夕方、学校で習った日本語を教えたという。当時、女の子たちは学校に行かず、行っている兄弟から文字の読み書きを習ったというのである。「その当時、女子は教育を受けるのではないと考えていました。生徒数60～80人の中で女子は5年生のときは6人、4年生は4人。入学したのは、その地方で経済力のある人の娘です」。入学したのは「地方の面で行事があるとき招待される人」の娘たちであった。

なお、女子教育の問題については、金富子『植民地朝鮮の教育とジェンダー』（世織書房、2005年）という優れた研究が発表されているので、それらを参照されたい。

2) 官立大邱師範学校調査

素直な小学生は、民族の意識を自覚することによって、扱いにくく反抗的な中等学校生へと成長する。難関を突破した朝鮮人生徒と、それほどのもなく入学してきた日本人生徒。そこに当然にも生まれてくる学力格差を糊塗しようとするれば、かえって差別的な措置をせざるを得ない。「一視同仁」のスローガンにもかかわらず、これが民族の意識を自覚させるのである。「時勢及民度ニ適合」（第1次朝鮮教育令第3条）させると称して中等以上の教育をサボタージュした結果が、このような矛盾を生んだのであった。かくして「一視同仁」を建前とする日本人教師の善意は壁にぶつかり、はね返される。中等学校にこそ、植民地教育の矛盾がはっきりと露呈する。官立大邱師範学校も例外ではない。

1929（昭和4）年4月19日勅令第83号による朝鮮総督府諸学校官制改正によって大邱師範学校が新設された。公立の慶尚北道地方費立師範学校が官立に移管されたのである。このとき同時に平安南道地方費立師範学校も官立に移管された。平壤師範学校である。1922（大正11）年に創設された京城師範学校のみであった朝鮮の官立師範学校は、これで3校になった。このとき示された学校職員定員表によれば、京城師範学校は学校長1人、教諭29人、訓導31人、書記3人に対して、大邱師範学校は学校長1人、教諭17人、書記2人、平壤師範学校は学校長1人、教

論 1 人、書記 2 人であった⁴⁾。

併合後 20 年近くたってようやく 2 番目の官立師範学校が創立されたことになるが、そもそも日本政府は、併合後の朝鮮における教員養成制度の創設に、極めて消極的であった。これは前述した、朝鮮における中等以上の教育へのサボタージュの一環でもある。

1939 (昭和 14) 年に日本の文部省内教育史編纂会によって刊行された『明治以降教育制度発達史』第 10 卷第三編「新領土其他に於ける教育」の「朝鮮の教育」の章は、併合 1 年後の 1911 (明治 44) 年 8 月に発布された第 1 次朝鮮教育令の教員養成に関する説明の個所で、「尚ほ注意すべきは普通学校教員の養成に関して別に師範学校を置かず、官立の高等普通学校及女子高等普通学校に教員養成科を置くことに依て其目的を達せんとしたことであり」と述べている⁵⁾。朝鮮人を対象とした普通学校の教員養成のための独立の機関を置かないことにしたのである。これによって 1895 (明治 28) 年に創立されていた官立の漢城師範学校は廃止された⁶⁾。

京城師範学校が創設されたのも、第 1 次朝鮮教育令から 10 年後、三・一独立運動後の 1921 (大正 10) 年である。しかもこれは「男子ニシテ小学校教員タルヘキ者ヲ養成スル所」(朝鮮総督府師範学校規則第一条)、すなわち、日本人児童を対象とする小学校の教員養成を目的としたものである。右の『発達史』第 10 卷は、その設立の理由を「小学校の漸増と世界戦争の^(まま)比 経済界の好況に依り、内地より優良教員を招聘することが困難になった事情との為に師範学校新設の必要を生じ」と、その理由を述べている⁷⁾。要するに、教員の本体は、日本人でなければならないのであり、朝鮮人が教壇に立つことを警戒したのである。創設された京城師範学校は、入学資格は尋常小学校卒業程度、修業年限 6 年とし、その中を普通科 5 年と演習科 1 年(1933 年から 2 年に延長)に分けた。普通科は基礎教育としての普通教育、演習科は直接教員となるための実習等を行ない、教員としての完成教育を施す、とした。したがって演習科を修了せず、普通科修了のみでは教員資格は与えられない。他方、「内地」の師範学校第 2 部のように、演習科に中等学校卒業生が直接入学することができた。普通科の入学定員は 100 名で、このうち当初朝鮮人は 10 名、その後約 20 名へと拡大されていったが、過半数を超えることはなかった⁸⁾。演習科に直接入学したのはほとんど日本人であった。

三・一独立運動後の「文化政治」への転換の中で、1922 (大正 11) 年第 2 次朝鮮教育令が公布

4) 文部省内教育史編纂会編修『明治以降教育制度発達史』(以下『発達史』と略す) 第 10 卷、1130 頁。

5) 同書、70 頁。

6) この前年、当時最大の排日派と目されていた最高権力者閔泳駿の私邸に「師範学校」が創設されていた。官立漢城師範学校はこれを前身として創設されたものと思われるという。「師範学校」およびこれと官立漢城師範学校との関係については、朴成泰『韓国近代学校における民族主義教員養成の成立過程』(風間書房、1996 年) 第 4 章第 1 節参照。

7) 『発達史』、374 頁。

8) ちなみに、たとえば創立 5 年後 (1926 年) の入学倍率は、日本人 5.0 倍に対して、朝鮮人は、なんと 60.2 倍である。金英宇『韓国近代教員教育史』(正民社(ソウル)、1987 年) 319 頁の表「京城師範学校入学者状況」により計算。

されたが、ここでようやく法令上正式に独立の師範学校が認められることになった。「国語ヲ常用スル者」（主として日本人）を対象とする小学校教員を養成する第一部と、国語ヲ常用セサル者」（主として朝鮮人）を対象とする普通学校教員を養成する第二部を置く、とされた。そして官立のほか公立、すなわち道地方費立の師範学校設立が認められ、1922年忠清南道公州に設立された忠清南道公立師範学校を始めとして、翌23年には残る12道すべてに公立師範学校が設立された。これらの公立師範学校には「特別ノ事情アル場合」（第2次朝鮮教育令第17条）に認められる3年制の特科が置かれたが、ここに入学したのはほとんどが朝鮮人であった。特科の入学資格は高等小学校卒業程度であった。

官立大邱師範学校の直接の前身となる慶尚北道公立師範学校も、3年制の特科と1年制の講習科をもって、1923年3月に創立された⁹⁾。

このような経緯のうえで、前述したように、1929（昭和4）年官立大邱師範学校が創設されたのだが、このとき同時に、特科は5年制の尋常科に改められた。『発達史』の説明によれば、特科の入学資格は高等小学校卒業程度としていたが、実際にはこれに該当する者は極めて少数で、現実にはそれ以下の者を入学させざるを得なかったので、入学資格を尋常小学校卒業程度に改め、修業年限を2年延長して5年とした、のであった¹⁰⁾。師範学校はその後、1935年に京城女子師範学校、1936年に全州師範学校、1937年に咸興師範学校と、解放前までに全部で15校設置された。しかし、普通科が置かれたのは京城師範学校のみであり、他はすべて尋常科であった。

尋常科は普通科同様修業年限5年であったが、普通科と異なり演習科に直接連絡せず、それ自体が教員養成の完成教育を行なうものとされ、修業期間が短い分だけ、京城師範学校に比べて低位なものとされた。京城師範学校と、その他の師範学校とは、明確に差別化されたのであり、京城師範学校を卒業すれば第1種訓導の資格が与えられたが、尋常科卒業生は第2種訓導に任命された。第1種と第2種との間に待遇上の格差があったことは、言うまでもない。

京城師範学校の入学定員は、前述の如く、日本人が圧倒的に多かったが、その他の師範学校では逆にほとんどが朝鮮人であった。日本人が増えるのは、日本との全面的な一体化を企図した1943年以後である。

朝鮮人と日本人の入学人数は大邱師範学校の場合、定員100名に対して日本人は10名程度に過ぎない。ちょうど京城師範学校の逆である。

もっとも大邱師範学校に置かれたのは尋常科だけではなかった。高等小学校卒業程度を入学資格とする1年または6ヶ月の講習科も置かれた。教員不足を補う、いわば速成科であり、原則として補助教員の養成を目的とした。さらに1938年からは京城師範学校同様、中等学校卒業程度を入学資格とする2年制の演習科が置かれた。しかしこれは、前述のように、それ自体教員養成の完成教育を目指した尋常科と連結するものではなかった。

9) 金英宇・前掲書、326,340頁。

10) 『発達史』975-6頁。

演習科の入学者数は、尋常科とは逆に圧倒的に日本人が多かった。中等学校卒業程度の入学資格をもつ朝鮮人が少なかったからである。そして演習科を卒業すれば京城師範学校卒業と同様に第 1 種訓導の資格が与えられた。

大邱師範学校に演習科が設置されることによって、尋常科を主体とする朝鮮人生徒と演習科を主体とする日本人生徒との間に、さまざまな対立を生むことになった。設置翌年の 1939 年には寄宿舎の各室に演習科と尋常科の生徒を混成収容させたことによって、その葛藤は一層深くなった。

前述のように普通学校には 10 代の後半ぐらいで入学した者も少なくなかった。したがって、中学校卒業後入学してくる日本人の演習科学生よりも年齢が高い朝鮮人の尋常科学生もたくさんいたのであり、日本人生徒が朝鮮人生徒に対して先輩風を吹かせることはできなかった。

卒業後には、さらなる差別が用意されていた。

教員就職後の俸給は、日本人教師には、1910(明治 43)年 3 月勅令第 137 号「朝鮮台湾満州樺太及南洋群島在勤文官加俸令」、1913(大正 2)年 3 月朝鮮総督府令第 36 号「朝鮮総督府及所属官署職員ノ加俸ニ関スル件」等によって、判任官の小学校及び普通学校訓導は本俸の一〇分の六が加俸された¹¹⁾。また 1910(明治 43)年 9 月勅令第 392 号「朝鮮総督府及所属官署職員ノ宿舍料ニ関スル件」および 1915 (大正 4) 年 2 月朝鮮総督府訓令第 63 号「宿舍料支給規程」によって宿舍料が加算された¹²⁾。これによって、朝鮮人教員と日本人教員の給与額は 2 倍近い格差を生むことになった。

「一視同仁」のスローガンの薄皮のなかにこのような差別が充満していたのである。

このような次第であったから、官立大邱師範学校は、創設当初から解放まで、絶えることなく、さまざまな抗日事件が生起した。秘密の読書会、抗日・独立を願う同人誌の発行、そして日本人教師や日本人生徒との抗争等々。同時にこれは、当時の朝鮮における中等学校すべてに見られた「事件」でもあった。

■ 투 고 : 2010. 5. 31.

■ 심 사 : 2010. 6. 12.

■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

11) 朝鮮総督府学務局学務課『朝鮮学事例規 昭和一三年度』(渡部学・阿部洋編『日本植民地教育政策史料集成(朝鮮篇)』(龍溪書舎、1991年)第6巻所収)102-4頁。

12) 同書、121-5頁。

協働学習におけるグループ編成に関する考察

— 大学での日本語授業を中心に —

倉持香*
mochi-@hanmail.net

<要 旨>

学習者の特性を考慮したグループ編成の基で協働学習を行ったらグループワーク過程でどのような相互作用がもたらされるのか、また、認知的・情意的側面に、どのような影響を及ぼすのかを質的調査結果を基に詳細に分析することが本研究の目的である。本論では、対人関係調査結果と学習日誌(ポートフォリオ)、さらに振り返りシートの5段階評定結果を基に考察をした。その結果、各学習者の特性である学習レベル、性格、友人関係、親和動機、アイデンティティ・ステータスの全てにおいてグループワークの中で影響を及ぼすことがわかった。特に、親和動機では、動機が高い学習者は、メンバーとの心理的距離を縮めるのに時間がかからない傾向があった。アイデンティティ・ステータスでは、上位の学習者であるほど対人関係に問題が発生しないという先行研究があるように、本調査のグループ編成でも、アイデンティティ・ステータスが高い学習者は、グループワークでグループを引っ張る存在であったり、メンバーへの配慮が見られたり、グループ方法や学習と自己について振り返りをするなどの特徴が見られた。本論では、学習日誌と振り返りシートの5段階評価資料を基に各学習者への影響についてを考察することにとどまり、親和動機の各側面のうち有意差があったものを細かく分析することができなかった。今後の課題として、グループワーク過程において学習者の特性にどのように影響を及ぼすのかについて、授業日誌を基にグループ単位で見る必要がある。そうすることで、本論の調査結果が明確になり、さらに詳細な分析ができると思われる。

キーワード： 学習者の特性、グループワーク、グループ編成

1. はじめに

韓国の協働学習は、認知的側面、情意的側面の両側面において効果が得られるすぐれた学習方法と認識され、幼児から成人教育の様々な教育機関で取り入れられ実践されている。しかし必ずしも肯定的見解だけあるのではなく、学習者の否定的意識、導入の難点、内面的側面における分析の不十分さなどが今後の課題として残されている。例えば、召현숙(2006)は、大学の教養科目の英語授業における協同学習¹⁾の学習達成度と学習態度や学習動機、社会性などの情意的側面への効果を設問調査や観察日誌などで分析した。その結果、肯定的側面の他に否定的な側面として、新しい友だちをつくることを大変がり、親しい人とのグループ編成を望み、役割分担での積極性が、不均等であるという意見があげられた。さらに、倉持(2009)は、2008年ソウル市に位置する4大学(女子大学2校、共学2校)、合計167名(女子114名、男子44名、性別無記名9名)を対象に協働学習に対するアンケート調査を行った。その結果、学習者の協働学習に対する意識は肯定的にも否

* 弘益大学教養外国語学部講師

1) 韓国語には「働」の漢字を表記しないため「働」という意味にとれるものでも「同」の漢字を使用する。

定的にも持たれていることがわかり、特に否定的意識は、学習効果、役割分担、グループ編成に対して強く表れていた。特に役割分担に対しては、分担の量の偏りを感じ、グループ編成に対しても「新しい人よりは、親しい人とグループを作ることを望んでいる」というものである。そして、協働学習を肯定的に認めているながらも、実際の授業ですることを望んでいる学習者はさほど多くないという結果であった。

グループ編成における先行研究を見ると、効果を検証した研究は異なる特性をもった学習者で編成したグループと同じ特性をもった学習者で編成したグループを比較するものに集中し、その特性として学業達成度と学習レベルを扱うものがほとんどである。最近になって、学業達成度と学習レベル以外に性格類型を把握した上でのグループ編成の必要性を強調する主張(이정연 2007) や、性格類型を考慮したグループ編成での研究(육문주 2006)、グループの中での人間関係に関する研究(전숙자2001;박윤정2008)がなされるようになった。しかし、これらの研究を見ると、考察対象とした学習者は小学生から高校生までであり、質問紙による量的分析から得られた結果を考察するまでにとどまっている。そのため、学習者の特性がグループワークの過程で学習者間にどのように影響するのかその相互作用を深く考察するまでにいたっていない。

このような知見から、グループ編成に考慮した学は、どのような変化を伴うのかなどについて、質的調査方法により詳細に分析する必要がある。本習者の様々な特性がグループワークの中でどのように影響をもたらすのか、そして、協働学習前後で研究²⁾では、詳細な分析のために、様々な質的研究資料を使って考察したが、本論では、学習日誌(ポートフォリオ)の分析結果を中心に量的調査結果を含め情意的側面における効果について考察することを目的とする。

2. 協働学習の授業報告

2-1. 調査概要

ソウル市に位置する大学で、教養科目の初級日本語(1)を受講する4クラスの日本語学習者44名を対象に本研究を遂行した。また、詳細な分析のため、ビデオ撮影とポートフォリオ作成及び面談は1クラスのみ(14名)の実施となった。年齢は10代が11名、20代が33名であり、学年は1年生(12名)、2年生(15名)、3年生(8名)、4年生(9名)であった。性別人数は、男子(12名)、女子(32名)であった³⁾。尚、本研究に参加した学生は、多様な学科の学生たちで構成されている。学科別研究対象分布度を<表1>に示した。

2) 本研究は、博士論文の全体のことを指し、本論とは、その中の一部の分析結果のことを指す。

3) 性別による各クラス人数(Aクラス(男子2名、女子12名)、Bクラス(男子4名、女子5名)、Cクラス(男子3名、女子8名)、Dクラス(男子4名、女子6名)である(考察対象者のみ記載)。

<表1> 研究対象者 専攻大学分布度

()は%

学部 区分4)	工学系	美術系	建築系	法学系	文科系	師範系	経営系	経済系	広告 広報系	合計
人数	2名 (4.5)	18名 (40.9)	1名 (2.3)	2名 (4.5)	7名 (15.9)	4名 (9.1)	4名 (9.1)	5名 (11.4)	1名 (2.3)	44名 (全員)
	1名	8名		1名	2名		1名	1名		14名 (Aクラス)

2-2. 研究手順

本研究実施期間は、2009年3月から2009年6月までの15週間である。100分と、50分の授業の週3時間で、総45時間を要した。1週目はレディネス調査(レベルチェックと学習歴や学習動機等)及び質問紙調査(協働学習に関する質問紙と対人関係を調査(アイデンティティ・ステータス調査及び親和動機調査⁵⁾)を実施し、協働学習に関する説明を行った。中間テストと期末テストは、授業以外の時間に一斉に実施した。授業進行過程は<表2>に示す。

<表2> 授業進行過程表

期間	内容	備考
3月1週目	レディネス調査、質問紙、プレイスメントテスト 協働学習オリエンテーション	グループ分け
3月10日から 4月9日までの5週間	1度目のグループワーク	
4月14日から 5月14日までの5週間	2度目のグループワーク 5月7日からポートフォリオ導入	4月23日授業時間外の時間に中間テスト 実施(授業時間外に面談)
5月19日から 6月11日までの4週間	3度目のグループワーク	6月12日授業時間外の時間に期末テスト 実施(授業時間外に面談)

2-3. グループ編成法

グループを編成するために考慮した学習者の特性は学習レベル、性別や学習者の性格、友人関係、学習者の対人関係である。学習者の対人関係を把握するためには、親和動機尺度とアイデンティティ・ステータス尺度を使用して調査し、得られた結果から学習者の対人関係を把握してグループ編成を行った。

4) 工学系(情報・産業工学専攻1名、電子・電気工学部1名)、美術系(産業デザイン専攻4名、視覚デザイン学科1名、陶芸ガラス科2名、絵画科4名、金属造形デザイン科1名、芸術学科2名、木造系家具学科2名、彫塑科2名)、建築系(建築学専攻1名)、法学系(法学科2名)、文科系(英語英文学科3名、国語教育科1名、英語教育科2名、フランスフランス文学科1名)、師範系(教育学科1名、歴史教育科2名、国語教育科1名)、経営系(経営学部3名、貿易学1名)、経済系(経済学部5名)、広告広報系(広告広報学部1名)

5) 参考資料参照

2-3-1. 学習者の特性

グループ編成の際に考慮した学習者の特性について説明する。

(1) 学習レベル

初めと最後の授業で実施したSPOT⁶⁾、インタビュー(OPIテスト⁷⁾を基準にした会話能力判定)をブレイスメントテストとして行った。これらから判定した結果で学習レベルが高い群の学習者1名、中間の群の学習者1名か2名、低い群の学習者2名を一つのグループに配置し⁸⁾、同じレベルが集中するなどの偏りがでないようにした。

(2) 性別、学年、専攻科目、友人関係など

Aクラス(男子2名、女子12名)、Bクラス(男子4名、女子5名)、Cクラス(男子3名、女子8名)、Dクラス(男子4名、女子6名)で、性別の合計は、男性が13名、女性が31名である。女性だけのグループにならないように男性を分散させたり、各学習者の特性を考慮し、メンバーを編成した。また、2度目、3度目のグループ替えをする前に1度目、2度目のメンバーとの関係を聞く質問紙⁹⁾をEメールで提出してもらった。Eメールを使用したのは、答えにくい質問も含まれているため、学習者の心理的負担を軽減させるためである。

(3) 対人関係調査1(親和動機)

(4) 対人関係調査2(アイデンティティ・ステイタス(自己同一性)¹⁰⁾)

2-4. 調査結果¹¹⁾

グループ編成とグループワークの様相を中心に考察するために、グループ編成のために考慮した学習者の特性別に各調査結果と資料を基に分析する。本論では、学習日誌を中心に考察する。

6) SPOT(Simple Performance-Oriented Test)は、外国人日本語学習者の日本語能力を短時間で測るテストとして、筑波大学の小林、フォード丹羽によって開発されたものである。自然なスピードで読み上げられた音声テープを聴きながら、解答用紙の同じ文にある空欄にひらがな一文字を埋めていく形式のテストである。その難易度、表記の違いによりいくつかのバージョンがある。公開用としてバージョンA(日本語学習時間400時間から800時間程度、難易度が高い)とバージョンB(日本語学習時間400時間程度、難易度が低い)が提供されている。本研究では、初級学習者を対象としたクラスのため、バージョンBを使用した(小林ら,1996)。

7) ORAL PROFICIENCY INTERVIEWのことで、言語の運用能力を実生活で起こり得る状況でどれだけ効果的に、適切に言語を使うことができるかという観点から評価するものである。「ACTFL言語運用能力基準-話技能」に記述される10段階の運用能力レベル基準と照らし合わせた測定方法である(ACTFLE-OPI試験管養成用マニュアル参照)。

8) ここで指す群とは、SPOTとインタビュー試験により得られた結果から、初めにA群(レベルが高いグループ)、B群(レベルが中間のグループ)、C群(レベルが低いグループ)の3グループに分けてから、各グループを編成した。この初めのグループの意味である。

9) 「よく教えた人は誰ですか」「よく教えてもらった人は誰ですか」「次のグループで一緒にになりたい人は誰ですか」「なりたくない人は誰ですか」などの質問である。

10) 参考資料2参照

11) 量的調査結果として学業達成度調査、協働学習の意識調査及び対人関係調査(アイデンティティ・ステイタス調査、親和動機調査)、振り返りシートの5段階評定結果を、質的調査結果としては、授業観察記録(授業日誌、ビデオ撮影資料)、学習日誌(ポートフォリオ)、面談資料、授業振り返りシートの記述などを使用した。尚、本論では、対人関係調査結果と学習日誌(ポートフォリオ)、さらに振り返りシートの5段階評定結果を基に結果考察を行った。

2-4-1. 量的調査結果

協働学習の意識調査及び対人関係調査(初めと最後の授業で実施)結果の協働学習前後の有意差を調べるために統計処理(SPSS.12)を用いて、t検定を行った。〈表3〉は、有意差が認められたものである。

〈表3〉 有意差が認められたもの

43名(全員)	13名(Aクラス)
親和動機の各側面	
「社会的比較」「注目」「平均」	「ポジティブな刺激」「社会的比較」
アイデンティティ・ステイタス	
「アイデンティティ・ステイタス」	

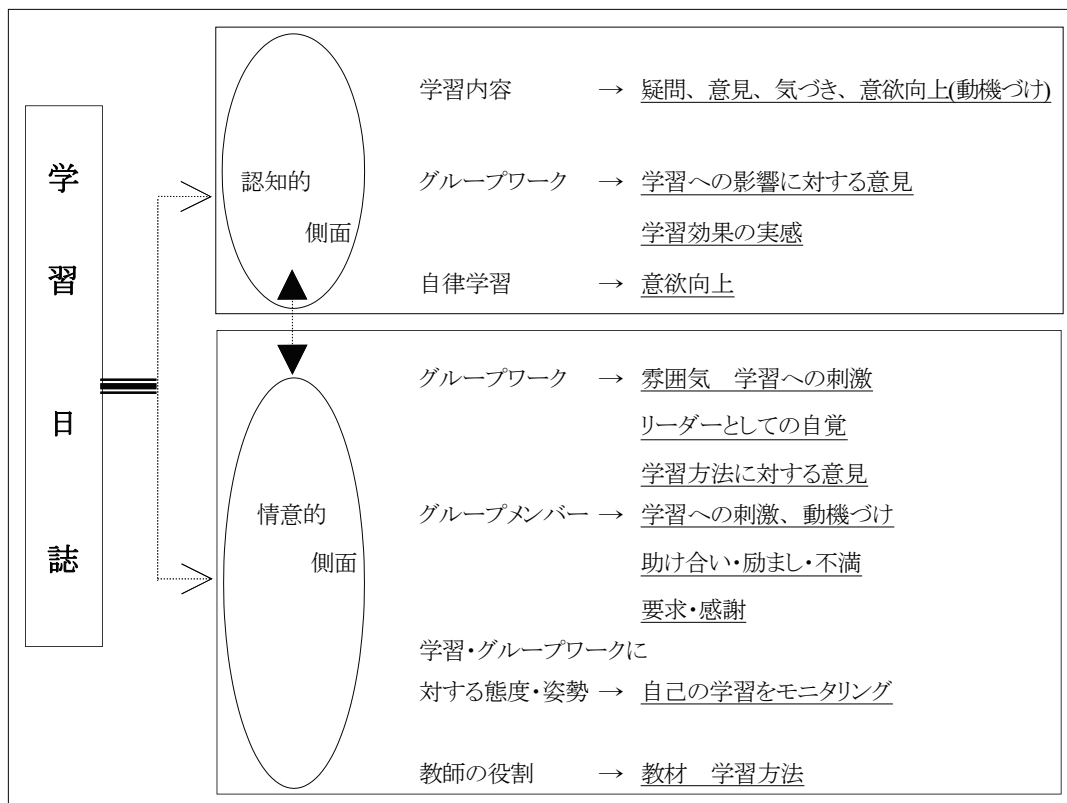
〈表3〉のように、親和動機の各側面のうち、上記の側面において有意水準($p < .05$)で有意差があることが確認でき、これらの側面の親和動機が増加したと言える。又、「アイデンティティ・ステイタス」は、43名では、有意水準($p < .05$)で有意差があることが確認できたが、13名では、有意差を確認することができなかった。

2-4-2. 質的調査結果及び考察

ポートフォリオは〈表4〉の太字の期間に作成させた。

〈表4〉 ポートフォリオ作成期間

グループ活動順番	期間										
グループ活動1度目	3/10	3/12	3/17	3/19	3/24	3/26	3/31	4/2	4/7	4/9	計5週間
グループ活動2度目	4/14	4/16	4/21	4/23	4/28	4/30	5/5	5/7	5/12	5/14	計5週間
グループ活動3度目	5/19	5/21	5/26	5/28	6/2	6/4					計4週間



＜図1＞ 学習日誌で示された側面

＜表5＞ 学習日誌に示されたグループワーク過程での影響項目整理表

学習者の特性	グループワーク過程での影響項目
(1)学習レベル	<ul style="list-style-type: none"> ・レベルの高い学習者が教えたり、学習を助ける役割をした。 ・レベルの低い学習者はメンバーに教えてもらいながらレベルが向上し、グループワークで迷惑にならないように努力するようになった。 ・グループワークの学習効果を実感し、学習意欲の向上と自律学習への動機づけとなり、成績向上へと発展した。
(2)性格、友人関係学年、専攻など	<ul style="list-style-type: none"> ・友人関係にある場合、どちらも学習意欲が高ければ教え合いや協力・共助が促進された。 ・性格が内向的であったり、恥ずかしがり屋の場合、グループに慣れるのに時間がかかった。
(3)親和動機	<ul style="list-style-type: none"> ・合計が高い学習者は、グループメンバーとの心理的距離を縮めるのに比較的にかからなかった。またそうするように努力する姿が目立った。
(4)アイデンティティ・ステータス	<ul style="list-style-type: none"> ・上位の学習者は、学習日誌で学習や学習方法と自己について振り返りをしていた。 ・グループワークの方法を考えたり、他のメンバーへの配慮などが見られた。

＜図1＞は、学習日誌で記載された内容を整理・分類し、認知的側面と情意的側面における影響をまとめたものである。学習日誌では、認知的側面においては、学習内容とグループワーク、

自律学習に対して主に記述されていた。学習内容は、学習した内容を整理し振り返りながら、学習に対しての疑問、意見、気づき、意欲向上などが見られた。さらに、グループワークは、グループワークの学習への影響に対する意見が示されていて、自律学習は、自律学習の内容を記述することで学習への意欲向上が見られたことが書かれていた。情意的側面においては、主にグループワーク、グループメンバー、学習・グループワークに対する姿勢・態度、教師の役割について記述されていた。グループワークを振り返りながら、自分のグループの雰囲気についてや、学習への刺激を受けること、そしてリーダーとしての自覚が芽生えてきたこと、協働するという学習方法に対する自分自身の意見などが書かれていた。さらに、グループメンバーについては、メンバーから学習への刺激を受けていることや、助け合い・励まし・不満・要求・感謝といった情意的な面への影響が表われていた。教師の役割については、授業を受けながら、協働学習がしやすいように教材や学習方法を準備することが教師の役割だとする教師に対する意見が書かれてあった。このように学習を振り返りながら、記述された学習日誌から、認知的側面と情意的側面の両側面において様々な影響を受けていることがわかる。特に認知的側面である学習内容・グループワーク・自律学習の内容が整理されてあるだけでなく、それが情意的にどのように影響を受けているのかがよく表われていた。そして多様な側面に渡って詳細に記述していた学習者は、アイデンティティ・ステイタスが高いという傾向が見られた。学習者に学習日誌を記述してもらうことによって、各学習者の授業に対してや他の学習者及び学習の捉え方について把握することができた¹²⁾。

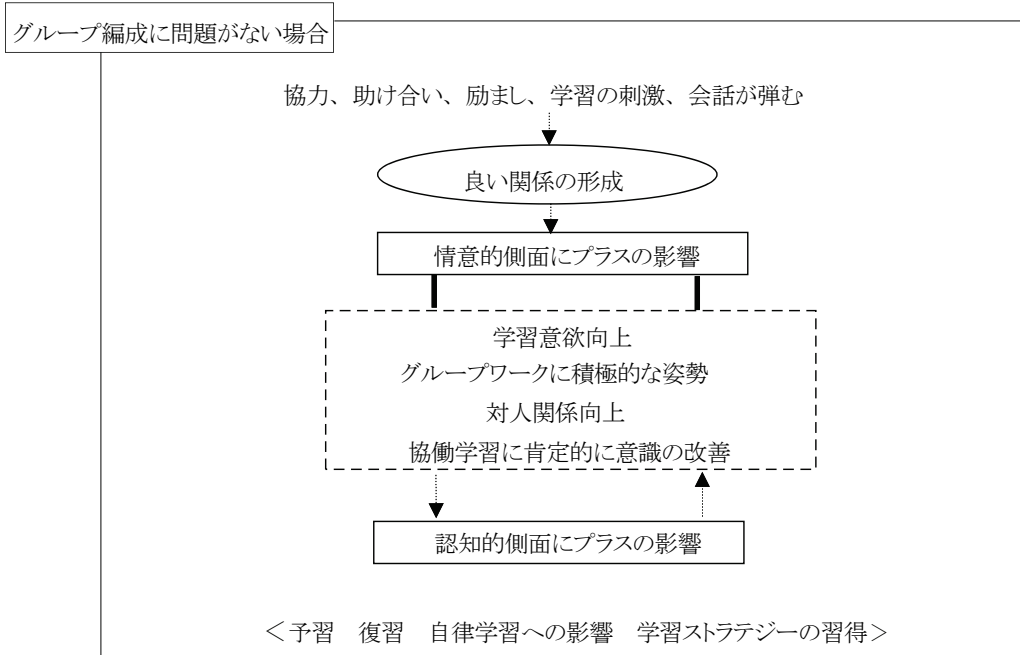
さらに、グループ編成する際に考慮した学習者の特性別に協働学習からの影響を<表5>のように整理した。(1)学習レベルでは、レベルが高い、中間、低い学習者を一つのグループにすることで、

教え合いや助け合いの姿勢が強化した。また、レベルの低い学習者はメンバーに教えてもらいながら学習効果を実感し動機づけとなり、グループワークで迷惑にならないように努力するようになった。また、教える側も教えながら、より理解度が深まり、学習方法について振り返りをよくするようになった。(2)性格、友人関係では、メンバーの中で友人関係にある学習者がいる場合、両方の学習者が学習意欲が高ければ教え合いや協力・共助が促進された。但し友人同士だけで固まってしまう恐れがあるため、他の学習者の特性も総合的に考慮してグループ編成しなければならない。(3)親和動機では、高い学習者はグループメンバーと関係をよくしようと努力するため、心理的距離が縮まるのに時間がかからない傾向があった。但し、親和動機が高くても、性格が内向的であったり、恥ずかしがり屋の学習者もいるため、その場合は協働学習に慣れる時間が必要である。(4)アイデンティティ・ステイタスは、上位の学習者であるほど、学習日誌で、多様な側面に渡って学習と自己について振り返りをしていた。また、メンバーへの配慮があったり、グループワークを率先して行う傾向が見られた。そのため他のメンバーがグループワークに慣れないうちは、アイデンティティ・ステイタスが高い学習者にリーダーの役割を任せると効果的であると言える。

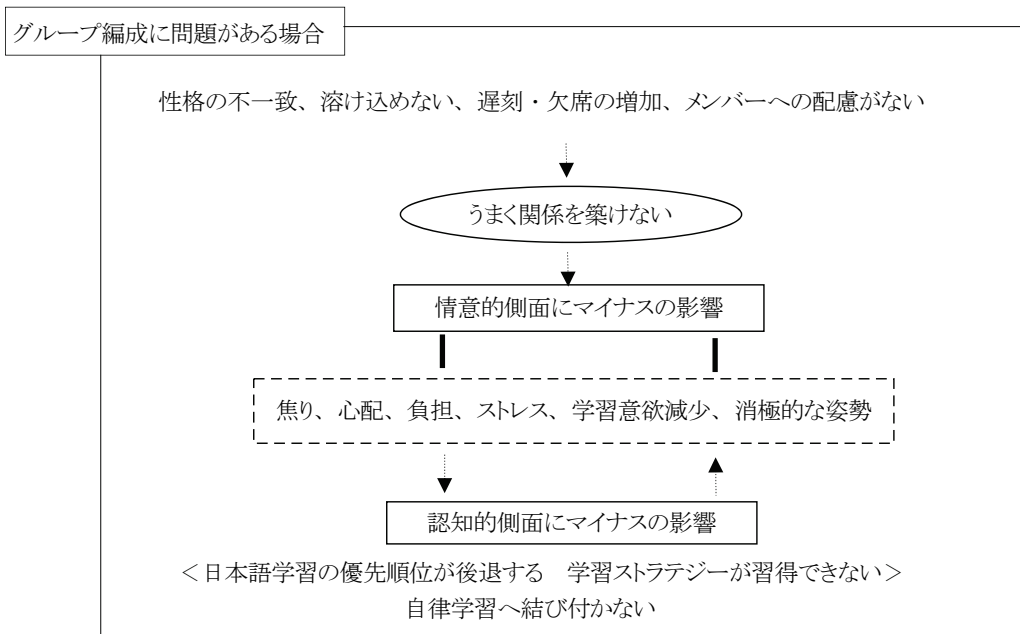
12) 学習日誌は参考資料参照

3. 結論

< 大学生を対象にした協働学習(グループワーク) >



<図2> グループワークに問題がない場合の影響図



<図3> グループワークに問題がある場合の影響図

協働学習における先行研究から見られる問題点から、学習者の様々な特性を考慮したグループ編成の基で協働学習を行ったらどのような影響を及ぼすのかについて分析することを試みた。本論では、対人関係調査結果を基に学習日誌(ポートフォリオ)、振り返りシートの5段階評価結果から各学習者の協働学習における認知的・情意的側面の影響について考察した。

まず、各学習者の特性への影響では、学習レベル、性格、友人関係、親和動機、アイデンティティ・ステータスの全てにおいて影響があることがわかった。特に、学習者が共に助け合い、教え合いながら協働学習することで、共に学ぶ楽しさやタスクを協力して達成させることから達成感を感じ、自己の学習への動機づけとなっていることがわかった。そして、認知的に学習効果を実感することで、情意面に肯定的な影響を及ぼしている。また、親和動機では、動機が高い学習者は、メンバーとの心理的距離を縮めるのに時間がかからない傾向があった。アイデンティティ・ステータスでは、上位の学習者であるほど対人関係に問題が発生しないという先行研究があるように、本調査のグループ編成でも、アイデンティティ・ステータスが高い学習者は、グループワークでグループを引っ張る存在であったり、メンバーへの配慮が見られたり、グループ方法、学習と自己について振り返りをするなどの特徴が見られた。このように友人関係や親和動機、アイデンティティ・ステータスなどの特性も考慮しグループ編成すれば対人関係面の問題が生じにくくなり、グループの連帯感も築きやすくなることが示唆される。

本論では、協働学習における認知的・情意的側面への全体的な影響を図2図3のように整理することができた。グループ編成に問題がない場合は、グループワークを通して、協力、助け合い、励まし、学習の刺激、会話が弾むなどからメンバー間に良い関係が形成され、情意的側面或は認知的側面にプラスの影響を与え、さらに認知的側面或は情意的側面へとプラスの影響を与え合う。反対に、グループ編成に問題がある場合は、性格の不一致、受け入れない、遅刻・欠席の増加、メンバーへの配慮がないなどから、メンバー間の関係がうまくいかず、情意的側面或は認知的側面にマイナスの影響を与え、さらに認知的側面或は情意的側面へとマイナスの影響を与え合う。

このように、グループ編成がうまく行われることが、協働学習の大きな鍵になると思われるが、本論では、学習日誌と振り返りシートの5段階評価資料を基にした各学習者への影響しか見ることができず、親和動機の各側面のうち有意差があったものも細かく分析することができなかつた。今後の課題として、グループワーク過程における学習者の特性への影響を、授業日誌を基にグループ単位で見る必要がある。そうすることで、本論の調査結果が明確になり、さらに詳細な分析ができるであろう。

◀ 参考文献 ▶

- 권석만(2004) 『젊은이를 위한 인간관계 심리학,서울』 학지사
 강홍숙(2006) 「협동학습의 효과에 관한 메타분석」 목포대학교 대학원 박사논문
 김현숙(2006) 「다양한 독해 전략을 적용한 대학 교양영어에서 협동 학습의 효과」 홍익대학교 대학원 박사논문
 박윤정(2008) 『프로그래밍 협동학습에서 친밀도에 따른 집단구성이 학업성취도 및 학습태도에 미치는 영향』 한국교원 대학교 교육대학원 修士論文집(1999) 「관계패턴 이해를 통한 대학생의 대인관계증진

집단상담 프로그램 의 효과」 계명대학교 교육대 석사학위논문
 이수련(1999) 「MBTI를 활용한 대인관계 향상 프로그램이 대학생의 대인관계 향상에 미치는 효과」 계명대학교 대학원 석사 학위논문
 이정연(2007) 『구조중심 협동학습에서 학습자의 성격유형에 따른 집단 구성이 학업성취도와 학습태도에 미치는 영향』 고려대학교 교육대학원 修士論文
 임채수(2001) 「협동학습 수업전략의 학습효과에 관한 메타분석」 경남대학교 대학원 박사학위논문
 육문주(2006) 『MBTI(Myers-Briggs Type Indecator)성격분석을 활용한 협동학습 팀 편성 알고리즘 개발 및 평가 방법 연구』 연세대학교 대학원 修士論文
 정문성(2002) 『협동학습의 이해와 실천』 교육과학사
 전숙자(2001) 『사회과 교육의 새로운 이해』 서울: 교육과학사
 최은영(2007) 「대학영어 협동학습 과정에서 나타난 학습자들의 수업경험」 전남대학교 대학원 박사학위논문
 岡島京子(1988) 「親和動機測定尺度の作成」 『日本教育心理学会第30回総会発表論文集』 864-865
 岡田努(1995) 「現代青年の友人関係と自己像・友人像に関する考察」 『教育心理学研究』 43,354-363.
 落合・佐藤(1996) 「青年期における友人とのつきあい方の発達的变化」 『教育心理学研究』 44,55-65.
 加藤厚(1986) 「同一性測定における2アプローチの比較検討」 『教育心理学研究』 56,357-360.
 倉持香(2009) 「韓国の日本語協働学習における情意的効果に関する考察」 『日本文化研究』 第31号.
 倉持香(2008) 「協働学習の事例からみる学習者主体授業に関する考察」 『日本語教育世界大会予稿集』 3,
 武蔵由佳(2006) 「大学生に対する構成的グループ・エンカウンターの手法を活用した心理学的援助」 博士論文
 Murray,H.A.1938 Exploration in personality.New York:Oxford University Press.
 Atkinson,J.W.,Heyns,R.W.,&Veroff,J.1954 The effect of experimental arousal of the affiliation motives on thematic apperception. Journal of Abnormal and Social Psychology,49,405-410.

[参考資料1]

(N・K) レベルアップの程度が高く親和動機の増加が見られた学習者¹³⁾

N・K	学年	4年生	性別	男子	専攻	情報・産業工学専攻
	学習レベル	SPOT 5点→21点		試験	(中間)73点 (期末)73.5点	
	会話能力	初級下程度→初級中程度				
	親和動機	情緒24→30	ポジティブ25→30		比較15→20	注目29→31
	アイデンティティ	不安41→37	合計134(3.8)→148(4.2)		アイデンティティ	B→A

[レディネス]

N・Kは、授業前では、SPOTの得点は5点/62点で、会話能力テストも質問が聞き取れず、ほとんどゼロ初級の状態であった。協働学習は、大学でしたことがあり、協働学習に対する反応は「良い」と認識していて、意欲も強かった。親和動機は平均130(3.7)よりやや高く、アイデンティティ・ステイタスも高かった。学習目標は「日本語の基礎会話程度は、自信を持ってできるようになりたい」を大きな目標とし、さらに授業ごとに小目標を設定した。

13) 紙面枚数の都合上、1名のみ分析結果を提示した。

学習日誌で見られた側面
グループワーク(2回目 5/7)・・・グループメンバー、グループワーク、学習への態度・姿勢
グループワーク(3回目 5/21)・・・グループワーク、グループメンバー、学習への態度・姿勢、自律学習
グループワーク(3回目 5/26)・・・自律学習、学習方法、学習効果、学習意欲
グループワーク(3回目 5/28)・・・グループメンバー
グループワーク(3回目 6/2)・・・学習内容、学習への態度・姿勢、グループメンバー、自律学習
グループワーク(3回目 6/4)・・・自律学習

振り返りシート結果¹⁴⁾

	評価項目	1回目 グループ	2回目 グループ	3回目 グループ
(1)	日本語をたくさん使えた	4.3	4	4.8
(2)	グループワークに積極的に参加した	4.3	4	4.8
(3)	グループワークを通じてメンバーと協力した	4.6	4	4.8
(4)	グループ協働学習を通じてメンバーに助けてもらった	4.8	5	5
(5)	グループ協働学習を通じてメンバーを助けた	4	4	5
(6)	今日の目標はどのくらい達成しましたか	1.3	3	3.2

<学習者分析>

(1)学習レベル

ゼロ初級だったので、ひらがなを一生懸命に覚え、授業についていけるように努力している姿が見られた。しかし、4年生で就職活動や卒業課題制作などで授業に出られないことも多く、授業中に理解できないことが多くなり、自律学習で授業についていけるように努力していたことが学習日誌で書かれている。中間試験・期末試験は平均点¹⁵⁾よりやや低い点数であった。SPOTは、5点→21点と大きな向上が見られ、インタビューでも、初級の下→初級の中へと大きな向上が見られた。グループごとの自己評価結果では、日本語使用に対する評価が高いが、学習目標は、達成度が低い評価になっている。グループ2度目の時期に就職活動で休むことが多かったため、全体的に自己評価が低くなっている。

(2)性格、友人関係

性格は、明るく活動的で、グループの雰囲気が暗い時は、冗談を言ったり、メンバーに話しかけたりするムードメーカーのような存在であった。同じ専攻科目の学習者はいなかった。

(3)親和動機

親和動機の合計は、合計134(3.8)→148(4.2)へと14ポイントの上昇があり、ポジティブな側面は初めは平均よりやや高く、5ポイントの上昇が見られた。比較の側面は、平均よりやや低く、5ポイントの上昇が見られた。合計のポイントは、協働学習以前は平均より4ポイント高く、協働学習後は全体の平均より8.2ポイント高かった。

(4)アイデンティティ・ステータス

B→Aに上昇した。協働学習に対して肯定的で、グループワークでは、雰囲気をよくしたり、メンバーに声をかけたり話しかけたりするなどグループの雰囲気を作る存在であった。学習日誌では、学習活動・グループワーク、グループメンバー、自律学習について、感じたままに詳細に綴っていた。日本語学習からの影響が教室以外の場所でもどのように影響しているのかがよく書かれていた。授業を振り返ることから自身の学習の姿勢を見つめ、日本語学習と自己をしっかりと把握することができていたようだ。しかし、2度目のグループでは、N・Kを初め他のメンバーの休みも多く、グループ全体の意欲減少などの支障が生じた。それをN・Kは、意識していたようで、授業に参加した時には、積極的に活動に参加して授業についていけるように復習もよくしていた。ポートフォリオは、整理された配付資料と学習日誌がきれいに整理されていた。

14) 各授業の終了5分前に、授業の振り返りの時間を設けて、各項目の5段階自己評価と授業全般に渡っての意見や感想などについて記入させた。

15) 中間試験のクラス平均は81.4点、期末試験のクラス平均は85.3点である。

[参考資料2]

「親和動機」

自分に似ていたり自分を好いてくれる人に近づき、喜んで協力したり、愛情を交換したりすること。強い愛着を抱いている相手を喜ばせて、その愛情を得ること、あるいは友だちに愛着し、忠誠であることである(Murray,1938)。Atkinson, Heyns & Veroff(1954)も、他人との積極的な感情的な関係を確立し、維持し、回復しようとするものを親和動機の基準としている。岡島(1988)では、親和動機について以下のように述べている。親和動機には、2つの性質が明らかにされてきており、1つは分離不安から人と一緒にいたいという気持を表し、他者からの拒否に対する恐れ of 要素を持つ「拒否不安」(Sipley & Veroff, 1952)と、もう1つは拒否に対する恐れや不安なしに人と一緒にいたいと考える「親和傾向」(Atkinson, Heyns & Veroff, 1954)である。親和動機尺度を測定する尺度では、Hill(1987)が作成し、岡島(1988)が邦訳したものがある。岡島(1988)は、精神的につらいときに、誰かにそばにいてほしいという「情緒的支持」、人と接触することで満足や活気、楽しさが得られるという向け、共感してくれる人と一緒にいたいという「注目」の4つの側面がある。評定は「全く違う(1点)」から「まったくそのとおりだと思う(5点)」までの5件法である。下位尺度の項目数は、情緒的支持が7項目、ポジティブな刺激が7項目、社会的比較が5項目、注目が7項目である。得点が高いほどそれぞれの側面が強いと考えるものである。

「アイデンティティ・ステータス(ego identity Status)」

Eriksonのアイデンティティに関する理論的疑念を、実証的に検討する方法の一つとして、Marcia(1964)によって、提唱された概念である。操作定義として加藤(1983)の分類方法を用いて、全体的なアイデンティティ・ステータスを判定する。これは、アイデンティティ・ステータスを「同一性達成地位(Attainment; A 地位と表記)、同一性達成－権威受容中間地位(A-F 中間地位; B 地位と表記)、権威受容地位(Foreclosure; C 地位と表記)、積極的モラトリアム地位(Moratorium; D 地位と表記)、同一性拡散－積極的モラトリアム地位(D-M 中間地位; E 地位と表記)、同一性拡散地位(Diffusion; F 地位と表記)の6地位の状態に分類できる」とするものである。A地位とB地位の学生は、必要なソーシャル・スキルをある程度持っていること、ありのままの自分で他者と接していること、他者がどのようなことを思っているかといった内面を配慮していること、集団に同調的に関わっているわけではなく、他者とふれあうことを楽しみながら相互交流するような関わりをしていることが伺われた。C地位の学生は、他者と積極的に関わろうとする意識が比較的高く、他者との関係を作るためのソーシャル・スキルも高い。D地位の学生は他者との積極的な関わりを求めたり、相互交流しようとする側面と他者との内面的な関係を志向する側面がどちらも高く、又他者との関係の中で、ありのままの自己を表出しようとしている傾向があると考えられる。E、F地位の学生で共通の特徴は、自己に対する自信のなさや消極性などが伺えると同時に対人関係に対しても、不安を抱えている可能性が示唆された。E、F地位の学生の違いとしては、E地位に比べてF地位の学生は、自己の内面に触れる内容に対して特に自信がなく、友人と深く内面を語るつきあいや、様々な他者と積極的に相互交流する関係を志向せず、職業においても、不安や葛藤が多く混乱している状態がうかがえる(武蔵、2006)。

<補足>

親和動機は、14名中、13名の増加、(1名は未提出)が見られた。アイデンティティでは、8名が維持、4名が上昇、1名が下降、(1名は未提出)が見られた。日本語能力は、SPOTと会話能力評価の結果から、全ての学生が向上した。

親和動機合計の平均 (授業前)・・130 (授業後)・・139.8

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

「させる」と「시키다」の意味的な関係及びその背景

金 庚 洙*
kyungsookim1@hanmail.net

<要 旨>

日本語においては「漢語する」「漢語させる」で構成される漢語動詞の他動表現と使役表現を、韓国語では「漢語하다」が他動表現を「漢語시키다」で使役表現の関係を担っている。このように形態的に区別されている両言語の他動表現と使役表現が、ある事態を叙述するのに他動表現と使役表現の両方が同様な意味を表す場合と、他動表現と使役表現が違う意味を表す場合があることについて指摘し、なぜ、このような違いが生じるかを韓国語の使役表現の歴史的な変遷に注目して考察を行った。

その結果、他動詞文と使役文の境界域に対しては、日本語と韓国語は基本的に共通した特徴を持つが、ある一部の漢語に関しては両言語間に違いが見られることが分かる。すなわち「更新、減点、変更、掲載」などの漢語に対しては、日本語では、「漢語する」と「漢語させる」が完全な独立性を有しているが、韓国語ではそうではない。そして、このような違いが生じる要因として、韓国語の「시키다」の歴史的な変遷についても指摘する。従来の韓国語の「하다」動詞に存在した「하이다」という「이, 히, 리, 기」形から派生した使役表現が、現代韓国語では無くなり、その「이, 히, 리, 기」形の意味機能を「시키다」形が引き継いだと考えられる。しかし、従来の韓国語では「이, 히, 리, 기」形から派生した使役表現が現代韓国語より生産性が高かったため、現代韓国語には「이, 히, 리, 기」形から派生した語彙でも使役性が表せない場合があることが分かる。このような「이, 히, 리, 기」形からの派生現象が「시키다」にもその影響がある可能性を示唆した。

キーワード：「させる」、「시키다」、「이, 히, 리, 기」、他動性、使役性

1. はじめに

日本語では、まず、一般動詞と漢語動詞は使役の助動詞《せる・させる》の付加によって使役化を行うが、韓国語では一般動詞の場合、動詞の語幹に「이, 히, 리, 기, 우, 구, 추」という接辞¹⁾が付加されて使役化が行われる。また、漢語動詞の場合は、「漢語하다」の「하다」が脱落し、その位置に「시키다」という形式が付加されて使役化が行われる。さらに、一般動詞と漢語動詞の両方に対して使われる「~게 하다」形式も存在する。

日本語と韓国語との使役形式の対応関係を比較してみると、非常に興味深い特徴がいくつかあることが分かる。例えば、日本語あるいは、韓国語の個別的な特徴であると思われるものが、言語の普遍的な特徴として通用することやその普遍的な特徴に関しても両言語間には、違いがあるということ

* 仁荷大 講師

1) 現代韓国語では、一般に「이, 히, 리, 기, 우, 구, 추」の7つが使役派生接尾辞として挙げられるが、송창선(1998)は、中世韓国語では、これら以外に「오, 우, 호, 후, 고, 치, 으리, 으키」などが存在したと述べている。また現代韓国語では使役派生接尾辞が結合可能な語彙が制限されているのに対して、中世および近代韓国語では、動詞の基本形を確認することが難しいほど生産的である。そのため現代韓国語に残存している「이, 히, 리, 기」形を用いた語彙の中では、その意味と機能を確認することさえ難しい語もあると指摘されている(송창선1998:44-48)。以下ではこれらを使役派生接尾辞「이, 히, 리, 기」形と呼ぶことにする。

などである。

使役に関わる様々な問題に関しては、これまで多くの研究がなされてきた。特に1970年代に Yang.I.S(1974、1976)とShibatani(1973)、柴谷(1982)の論争を筆頭にして、서정수(1975、1996a、1996b)、손호민(1978)、影山(1993、1996、2001)、菅野(1982)、임홍빈(1983)、Miyagawa(1984)、류성기(1992)、柴(1992)、野間(1993)、鷺尾(1997a、1997b、1998、2000a、2000b)、西村(1998)、김형배(1997)、송창선(1998)、김성주(2003)などの、膨大な量に及ぶ研究がなされている。

本稿では、このような研究成果に基づいて、日本語の使役形式に対応する韓国語の使役形式について考察を行うが、主に韓国語における「漢語하다」と「漢語시키다」との関係を、日本語の「漢語する」と「漢語させる」と関連付けて概観し、それによって韓国語の「漢語하다」と「漢語시키다」の本質的な相似と相異を記述・説明することを試みる。

2. 使役における両言語の対応関係と問題提起

2.1. 両言語において使役意味を表す形態の比較

日本語では、次の(1)のように、一般動詞と漢語動詞に使役の助動詞《せる・させる》を付加することによって使役文が派生される。

- (1)a. 学生が本を読む。
- (1)b. 先生が学生に本を読ませる。
- (1)c. 太郎が機械を稼動した。
- (1)d. 太郎が機械を稼動させた。

これに対応する韓国語の使役形式には、(2)に示すように一般動詞の「읽다」(2a)の語幹「읽」に「이,히,리,기」という接辞が付加される場合(2b)と、漢語動詞の「가동」(2c)に「시키다」という形式が付加される場合(2d)がある。

- (2)a. 학생이 책을 읽다.
- (2)b. 선생님이 학생에게 책을 읽히었다.
- (2)c. 철수가 기계를 가동했다.
- (2)d. 철수가 기계를 가동시켰다.

このような韓国語の「漢語하다」と、それを使役化して派生された「漢語시키다」との関係を、日本語の「漢語する」と「漢語させる」に対応させると、次のような関係が見られる。

- (3)a. 日本語：稼動する ⇒ 稼動させる
 (2)a. 太郎が機械を稼動した。
 (2)b. 太郎が機械を稼動させた。
 (4)a. 韓国語：稼動하다 ⇒ 稼動시키다
 (2)a. 철수가 기계를 가동했다.
 (2)b. 철수가 기계를 가동시켰다.

これらの対応関係において、韓国語の「漢語+시키다」は日本語の「漢語+させる」に相当するものとして見なされている。しかし、両言語において興味深いのは、日本語において(3a)の「稼動する」から派生された(3b)の「稼動させる」がほぼ同様の意味として使用されているばかりでなく、韓国語においても同じように、(4a)の「稼動하다」と(4b)の「稼動시키다」がほぼ同様の意味として使われているのである。これが両言語における対応関係の《第1の型》である。

これを踏まえた上で、次の例文を見られたい。

- (5)a. 警察は被疑者を監禁した。
 (2)b. 警察は被疑者を監禁させた。
 (2)c. 「監禁する」≠「監禁させる」
 (6)a. 경찰은 피의자들을 감금했다.
 (2)b. 경찰은 피의자들을 감금시켰다.
 (2)c. 「監禁하다」=「監禁시키다」

上記の例文でも、日本語の(5a)「監禁する」と(5b)「監禁させる」が韓国語の(6a)「監禁하다」と(6b)「監禁시키다」が表面上は(3)、(4)と同じ対応関係を示している。しかし、日本語の「監禁させる」の場合には(3b)の「稼動させる」と違って、「XがYにZをさせる」のように典型的な使役の意味だけを表している。つまり、使役主の「警察」が被使役主に該当する「誰か(担当者)」に被疑者を監禁するように仕向ける、または命令するという意味になり、日本語では与格に当たる「被使役主」の想定が必要である。それに対する韓国語では2つの意味解釈が可能である。まず1つは「X가 Y를 監禁시키다」が「X가 Y를 監禁하다」とほぼ同様の意味として使われている場合である。すなわち、「被疑者」を直接監禁したのは使役主の「警察」という意味解釈である。もう一つの意味解釈は日本語の(5b)のような意味解釈で「XがYにZをさせる」という典型的な使役の意味を表す場合である。この場合には「監禁시키다」が「監禁하다」と異なる意味解釈を持つ。これが両言語における対応関係の《第2の型》である。

しかし、韓国語では「XがYにZをさせる」という意味解釈がなされる場合、「시키다」の他に、「~게 하다」という使役形式が存在する。「~게 하다」形式は、動詞の語幹に「게」という形態素が伴い、続いて「する」という意味の「하다」が付いた形であり、直訳すると「~するようにする」ぐらいの意味になる。この「~게 하다」形式は、一般動詞の「이,히,리,기」形や「漢語시키

だ」形による使役化を許さない場合にも使われる。よって、使役の生産性の側面から見ると、日本語の「させる」形式は韓国語の「~게 하다」形式にもっとも近いと思われる。

- (7)a. 先生は学生に言語学を研究させた。
 (2)b. *선생님은 학생에게 언어학을 연구시켰다.
 (2)c. 선생님은 학생에게 언어학을 연구하게 하였다.

上の例文では、(7a)の「研究させる」に対応する韓国語として、(7b)の「연구시켰다」ではなく、(7c)の「연구하게 하다」のみが用いられている。しかし、次の例文を見られたい。

- (8)a. 風が水を蒸発させる。
 (8)b. 바람이 물을 증발시키다.
 (8)c. *바람이 물을 증발하게 하다.

(8a)の「蒸発させる」に対応する韓国語は、(8b)のように「시키다」形を用いることは可能であるが、(8c)のように「~게 하다」形を用いることは不可能である。このように、日本語の「漢語させる」に対して、韓国語では「漢語시키다」と「漢語(하)게 하다」が相補的な関係で現れる場合があるが、これが両言語における対応関係の《第3の型》である。

2.2. 問題提起

上記で示した日本語の「漢語する」・「漢語させる」と、韓国語の「漢語하다」・「漢語시키다」と「漢語(하)게 하다」との対応関係を韓国語の観点から見ると、次のようにまとめられる。

- ①「漢語시키다」が「漢語하다」と同じ意味で使われる場合。《第1の型》
 例：稼働、完成、固定、隔離、連結、復元など。
 ②「漢語시키다」と「漢語하다」が異なる意味で使われる場合。《第2の型》
 例：監禁、勉強、満足、駐車など。
 ③「漢語시키다」と「漢語(하)게 하다」が相補的な関係で現れる場合。《第3の型》
 例：「漢語시키다」のみ；蒸発、気絶、気化、孤立、麻痺など。
 例：「漢語(하)게 하다」のみ；研究、自殺、死亡、輸出など。

韓国語の「漢語시키다」の意味は大きく2つに分けられる。1つは他動詞の「漢語하다」の意味で用いられるものであり(①に属する)、もう1つは迂言的な使役表現の「漢語~게 하다」の意味で用いられるものである(②と③に属する)。このような「漢語시키다」の意味分類は日本語の「漢語させる」にも適用される。つまり、「漢語させる」の意味が他動詞の「漢語する」の意味として使われるものと、使役の本来の意味、すなわち伝統的な使役の意味として使われるものの2つに分けられ

る。しかし、日本語と韓国語で同じ現象が生じるとは言っても、その意味的な関係の捉え方により複数の可能性がありうると考えられる。例えば、韓国語の場合、「漢語시키다」が他動詞、または使役の意味として現れても、その境界をどのように引くかが問題になる。また、日本語の「漢語させる」と韓国語の「漢語시키다」の意味的な関係が一律的に決まるわけではない。つまり、(3)の「監禁する」のような動詞類を使役化すると、韓国語では「監禁하다」と「監禁시키다」が同じように他動詞として使われる場合と、「監禁시키다」と「監禁하게 하다」が同じように使役動詞として使われる場合がある。

本稿では、上記のような考え方の中、主に①と②の関係—他動詞と使役の境界—が生じる理由について考察を行う。²⁾

3. 「하다」と「시키다」の意味的な関係及びその背景

本節では使役性と他動性の意味的な関連性について示しておきたい。このことは2.2.節で論じられる他動詞と使役の間に生じる意味的な関係による漢語分類にも関係があるからである。

3.1. 使役性と他動性の意味的な関連性

他動詞の種類及び他動性に関する先行研究としては、Hopper & Thompson(1980)、池上(1981)、ヤコブセン(1989)、角田(1981)、金熹成(2003)などが挙げられる。これらの研究では、動詞が持っている意味的な性質が行為者(agent)から対象(主題、theme)に及ぶ(transferred)ことを他動性と呼び、この他動性の強弱の度合いに関して議論されてきた。主にヤコブセン(1989)と角田(1981)が規定している他動性の原型は、次のとおりである。

(9) ヤコブセン(1989:168)

- a. 関与している事物(人物)が二つある。
すなわち、動作主(agent)と対象物(object)である。
- b. 動作主に意図性がある。
- c. 対象物は変化を被る。
- d. 変化は現実の時間において生じる。

(10) 角田(1991)

- 参加者が二人(動作者と動作の対象)またはそれ以上いる。
動作者の動作が対象に及び、かつ、動対象に変化を起こす。
(動作者と対象は無生名詞句の場合もある。従って、二人ではなく、二つの場合もある。)

2) 《第3の型》の「漢語시키다」と「漢語(하)게 하다」の意味的な違いに関する考察は別の機会に譲る。

ヤコブセン(1989)と角田(1991)が取り上げている他動詞の原型というのは、主語の働きかけが目的語に及んで、その結果、目的語に変化が生じることである。

さて、次は使役性について見てみよう。一般に使役というのは、他の者に動作を行うように命じることを表している(日本文法用語事典(1989:130)。使役に関しては、昔から現在に至るまで様々な研究がなされている(Yang.I.S(1974,1976))、Shibatani(1973)、柴谷(1982)、Miyagawa(1984)、柴(1982)、鷺尾(1997、2000)など)。その中でも使役をより包括的に扱っているのがShibatani(1973)、柴谷(1982)である。これらの議論で彼は、使役を形態的、統語的、意味的な違いを基にして、間接使役と直接使役という2種類³⁾の使役を取り上げた。そして両方を関連させて使役を定義するため、次のように使役状況(causative situation)を提唱している。

- (11)a. 事象(2)がもう一つの事象、つまり事象(1)が起こった時よりも後に起きている。
 b. 事象(1)と事象(2)の関係は、事象(2)の生起が事象(1)に完全に(依存していて、他の総ての条件が同一である場合)もし事象(1)が起こっていなければ事象(2)も起っていない事であろうという反事実的推論が下せる状態である。

柴(1982:273)

以上、他動性と使役性を検討した結果、次のように両者の類似点が捉えられる。

- (12)a. 出来事(event)が二つある。
 b. 出来事1(働きかけ)が発端となって、出来事2(変化)が生起する。
 つまり、出来事1と出来事2の間には因果関係が成り立つ。

金熹成(2003:17)

3.2. 他動詞と使役の間に生じる意味的關係による漢語分類

2.2節で述べている《第1の型》に属する韓国語の「漢語하다」、「漢語시키다」と日本語の「漢語する」、「漢語させる」との意味的な関係を4つのタイプに分類し、その4つのタイプにどういう漢語名詞が属するかを詳しく見ていくことにする。

以下、調査から得られた用例を提示するとともに、各タイプの説明を加えることにする。

【Aタイプ】

2節の(3)と(4)で示したような、両言語において他動詞の形態と使役の形態が同じ意味を表す場合

3) 柴谷(1982)では、操作使役(manipulative causation)と指示使役(directive causation)の用語を用いるが、その意味として操作使役は直接使役を表し、指示使役は間接使役を表している。Shibatani(1976b)では、語彙的使役(lexical causative)と統語的使役(syntactic causative)の用語を用いる。

が最初のタイプに属する。

- (13)a. 伝染病の患者を町から隔離した。
 b. 伝染病の患者を町から隔離させた。
 c. 전염병 환자를 마을에서 격리했다.
 d. 전염병 환자를 마을에서 격리시켰다.
- (14)a. 太郎はホースを蛇口に連結した。
 b. 太郎はホースを蛇口に連結させた。
 c. 철수는 호스를 수도꼭지에 연결했다.
 d. 철수는 호스를 수도꼭지에 연결시켰다.
- (15)a. 地震の地域を復元するのに余念がない。
 b. 地震の地域を復元させるのに余念がない。
 c. 지진 지역을 복원하느라 여념이 없다.
 d. 지진 지역을 복원시키느라 여념이 없다.

上記の(b)と(d)の例文は形態上、両言語において動詞から派生した使役文を表したものである。しかし、上の例文においては、それぞれの(a)と(b)、あるいは(c)と(d)は言語形式が異なるので文法的解釈も異なるはずであるが、両言語では同じ意味として解釈されている。このように、両言語において異なった形態を持っていても同じ意味を表すグループをAタイプと呼ぶことにする。

【A'タイプ】

このタイプでは、韓国語の「漢語하다」と「漢語시키다」が同様の意味を表している。それに対する日本語の「漢語する」と「漢語させる」については、ほぼ同様の意味を表していると判断する話者と、意味が異なると判断する話者もいるので、Aタイプから分けてA'タイプと呼ぶことにする。⁴⁾

- (16)a. お酒で神経を刺激する。
 b. お酒で神経を刺激させる。
 c. 술로서 신경을 자극한다.
 d. 술로서 신경을 자극시킨다.
- (17)a. 現場の監督は工事期間を短縮するために…
 b. 現場の監督は工事期間を短縮させるために…
 c. 현장 감독은 공사기간을 단축하기 위해…
 d. 현장 감독은 공사기간을 단축시키기 위해…
- (18)a. 魚を急速冷凍する。⁵⁾

4) ここで取り扱われる例文の判断は、日本語を母語とし、主に言語学を専攻とする筑波大学の教員や学生の判断を筆者が総合的にまとめたものである。ここでの判断は全面的に母語話者の直感によるもので、判断のゆれが生じる場合がありうと考えられる。

- b. 魚を急速冷凍させる.
- c. 생선을 급속 냉동하다.
- d. 생선을 급속 냉동시키다.

(16)を例にとると日本語の(16a)と(16b)については、意味的な違いを認める母語話者がいるのに対して、それに対応する韓国語の(16c)と(16d)に関しては、ほぼ同義として扱われていることから、日本語と韓国語の間には若干の意味的な違いがあるといえよう。

【Bタイプ】

Bタイプに分類されるのは、韓国語の「漢語하다」と「漢語시키다」がほぼ同様の意味を表しているのに対して、日本語の「漢語する」と「漢語させる」が意味的な違いを示す組み合わせである。

- (19)a. 彼は大会の記録を更新した.
- b. 彼は大会の記録を更新させた.
- c. 그는 대회 기록을 갱신했다.
- d. 그는 대회 기록을 갱신시켰다.
- (20)a. 飛行機は航路を変更した.
- b. 飛行機は航路を変更させた.
- c. 비행기는 항로를 변경했다.
- d. 비행기는 항로를 변경시켰다.
- (21)a. 花子は雑誌に文を掲載した.
- b. 花子は雑誌に文を掲載させた.
- c. 영희는 잡지에 글을 게재했다.
- d. 영희는 잡지에 글을 게재시켰다.

(19)を例に説明すると、(19a)の「更新する」と(19b)の「更新させる」では意味的な違いがある。すなわち、(19a)の「更新する」は「彼」自身が記録を破る張本人であり、(19b)の「更新させる」における「彼」は「誰」かに記録を破らせるようにしむける者として使われるのである。それに対する韓国語の(19c)と(19d)はほぼ同様な意味として使われる。他の例も同義である。

【Cタイプ】

最後に、Cタイプであるが、これは韓国語の「漢語하다」と「漢語시키다」で意味が異なるものと、日本語の「漢語する」と「漢語させる」で意味が異なるものの組み合わせである。

5) 「魚を冷凍する」と「魚を冷凍させる」においては判断の揺れが生じる場合もあるが、「急速」を付け加えると判断の揺れが生じない場合が圧倒的である。この点についての議論は、別の機会に譲る。

- (22)a. 政府はこの地域を**開發する**ことに決めた。
- b. 政府はこの地域を**開發させる**ことに決めた。
- c. 정부는 이 지역을 **개발하**기로 결정했다.
- d. 정부는 이 지역을 **개발시키**기로 결정했다.
- (23)a. 警察は事件現場に**出動した**。
- b. 警察は事件現場に**出動させた**。
- c. 경찰은 사건현장에 **출동했다**.
- d. 경찰은 사건현장에 **출동시켰다**.
- (24)a. 新しい工法を**導入する**ことに決定した。
- b. 新しい工法を**導入させる**ことに決定した。
- c. 새로운 공법을 **도입하**기로 결정했다.
- d. 새로운 공법을 **도입시키**기로 결정했다.

以上の観察をまとめると、日本語の他動詞文と使役文の意味の異同と韓国語のそれとを比較してみると、次の《表1》のようにまとめられる。

《表1》

	他動詞文と使役文がほぼ同様の意味	他動詞文と使役文が違う意味
日本語	A、A'	B、C
韓国語	A、A'、B	C

上の《表1》が表していることは、他動詞文と使役文の間に生じる意味的な違いを日本語と韓国語で比較したもので、Bの組の所属に違いがあることが分かる。次節では、このような違いがどこから生じるのかを韓国語の「시키다」の歴史的な要因を考慮しながら議論する。

3.3. 「시키다」の歴史的な変遷

言語には一般的に2つの使役表現がある。1つが形態論的に規則的で、生産的なもので、もう1つが形態論的に不規則的で、非生産的なものである。前者を生産的な使役(*productive causative*)といい、後者を語彙的な使役(*lexical causative*)という。韓国語の場合は前述したように「~게 하다」形を生産的な使役、「이,히,리,기」形を語彙的な使役と呼んでいる。

しかし、「이,히,리,기」形は「~게 하다」形ほど多くの動詞と結合可能というわけではないものの、相当な数の動詞に付いて使役形を派生させることから、ある意味では生産性が高いといえる。6) このような「이,히,리,기」形の派生関係に関して、송창선(1998:51~58)では、現代より中世及び近代の方がはるかに生産的で、現代韓国語には派生された語彙のみが残っており、動詞の原型が消滅している場合もあることが指摘されている。また、「이,히,리,기」形から派生した語彙でも使役性

6) これは、日本語や英語の語彙的な使役より韓国語の「이,히,리,기」形が規則性と生産性が高いということである。

が表せない場合(動詞の原型と付与された派生語と意味的な違いがないことを指す)もあると述べられている。また、차광일(1982)、이용주(1991)によると、「하다」動詞には「하이다」という「이, 히, 리, 기」形から派生した使役表現が存在したが、現代韓国語には存在しない。つまり、「하이다」の表現が無くなることで、語彙の空白が生じている。そして、「하이다」の意味と機能を引き継いだのが「시키다」形であると記している。

以上のことに基づいて、次の例を見られたい。

- (25)a. 성별로는 남학생의 59.3%, 여학생의 17.7%가 담배를 피고 있는 것으로 파악됐다.
 a'. 性別では男子学生の59.3%、女子学生の17.7%がタバコを吸っているものと把握された。
 b. 골목에 앉아 담배를 피우고 있는 젊은이가...
 b'. 路地に座ってタバコを吸っている若者が...
- (26)a. 무례한 손님들이 억지로 문을 밀고 들어섰다.
 a'. 無礼なお客さんが無理やりにドアを押して入った。
 b. 선생님을 밀치고 단상 위에 올라가...
 b'. 先生を押しのけて壇上に上がった。

(25a)と(25b)の下線部にある「피고」と「피우고」は、両者共に日本語の「吸って」に対応するものである。しかし、「피고」と「피우고」の関係は、上述したように「피다」という動詞に「이, 히, 리, 기」形が加わり「피우다」が派生されたと思われるが、両者は、意味的に他動詞と使役の関係にあるとは言いがたい。換言すれば、これは송창선(1998)が述べたように、「이, 히, 리, 기」形から派生した語彙でも使役性が表せない場合である。(26a)の「밀다」と(26b)の「밀치다」の関係も同じである。

このような現象を表す動詞の例を提示すると、次のとおりである。

- (27)a. 나사를 죄다.⁸⁾ b. 나사를 조이다.
 (28)a. 참가비를 걷다.⁹⁾ b. 참가비를 거두다.
 (29)a. 턱을 괴다. b. 턱을 고이다.
 (30)a. 사랑의 손길을 뻗다. b. 사랑의 손길을 뻗치다.¹⁰⁾

7) 実際のところ、現代韓国語の「하다」は中世では「ㅎ다」で表記され、また、「ㅎ다」に「이, 히, 리, 기」形を付加して使役表現にした場合でも「하이다」という形態で現れるが、本稿では、便宜上「하이다」で表記する。

8) 韓国語の『東亞世国語辞典』には、(27a)の「죄다」と(27b)の「조이다」が他動詞で表記されている。

9) 송창선(1998:58)では、「이, 히, 리, 기」形から派生した語彙類を提示しているが、その用例の中では(28a)の「걷다(=集める)」と(33b)の「거두다(=集める)」が派生関係を持つものとして示されている。これに対して、韓国語の『東亞世 国語辞典』では、(28a)の「걷다」が(28b)の「거두다」の省略形として記されている。しかし、両者の用例を見ると、意味的な違いが見られる。例えば、《子供たちをよく育てる》という意味では「거두다」しか現れないし、《袖をまくる》という意味としては「걷다」しか現れない。このような意味的な違いを単なる「省略形」として捉えるのは不適切かもしれない。

10) 韓国語の『東亞世 国語辞典』は、(30b)の「뻗치다(=さしのべる)」の「치」を、強調の意味を表す接辞であると説明している。これと類似した語彙としては(30b)の「밀치다(=押しのける)」、「끼치다(=かける)」、「뉘우치다(=悔いる)」、「사무치다(=悔する)」などがある。송창선(1998:49)では、これらの「치」は、中世韓国語では使役の接辞で派生さ

- (31)a. 모를 쉽다. b. 모를 쉽기다.

以上のように、現代韓国語では、ある一般動詞に使役の形態素「이,히,리,기」形が付加されても何の意味変化も生じず、両者がほぼ同様の意味を表す場合がある。そして、中世及び近代韓国語で存在した「하다」動詞から派生された「하이다」が現代韓国語では無くなっており、その意味機能を引き継いだのが「시키다」である。これらを併せて考えてみると、次の《表2》のような対応関係が成り立つ。

《表2》

基本形	⇒	《이,히,리,기》の派生形
피다 《吸う》	⇒	피우다
밀다 《押す》		밀치다
죄다 《締める》		조이다
괴다 《当てる》		고이다
걷다 《集める》		거두다
하다 《する》	하이다	시키다
稼動하다 《する》	⇒	稼動시키다 《するの使役形》

以上のように「稼動하다」と「稼動시키다」がほぼ同様の意味を表すのは偶然のことではないと思われる。(35)

4. おわりに

以上、日本語の「漢語する」と「漢語させる」が、韓国語の「漢語하다」、「漢語시키다」と、どのような対応関係をなしているのかについて考察を行った。その結果を以下のようにまとめることができる。

《表3》

	他動詞文と使役文がほぼ同様の意味	他動詞文と使役文が違う意味
日本語	A、A'	B、C
韓国語	A、A'、B	C

(《表3》は《表1》を再掲)

他動詞文と使役文の境界域に対しては、日本語と韓国語は基本的に共通した特徴を持つが、あ

られた語であると記述している。一方、現代韓国語では強調の意味を表す接辞として見なされていると述べている。

更、掲載」などの漢語に対しては、日本語では、「漢語する」と「漢語させる」が完全な独立性を有しているが、韓国語ではそうではないことが明らかになった。そして、このような違いが生じる要因として、韓国語の使役表現の歴史的な変遷についても指摘した。従来の韓国語の「하다」動詞に存在した「하이다」という「이、히、리、기」形から派生した使役表現が、現代韓国語では無くなり、その「이、히、리、기」形の意味機能を「시키다」形が引き継いだと考えられる。しかし、従来の韓国語では「이、히、리、기」形から派生した使役表現が現代韓国語より生産性が高かったため、現代韓国語には「이、히、리、기」形から派生した語彙でも使役性が表せない場合がある(それに関する内容は《表2》を参照されたい)。つまり、「피다⇒피우다」「밀다⇒밀치다」「죄다⇒조이다」「괴다⇒고이다」「걸다⇒거두다」などのように、「하다」から「이、히、리、기」形が付加されても使役の意味を表せないのである。このような「이、히、리、기」形からの派生現象が「시키다」にもその影響がある可能性を示唆した。

◀ 参考文献 ▶

- 金 熹成(2003)『状態述語文の他動化と使役化』筑波大学博士学位論文。
 柴谷方良(1982)「ヴォイスー日本語・英語一」森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明(編)『講座日本語学10 外国語との対照1』pp.257-279, 明治書院。
 須賀一好・早津恵美子(1995)『動詞の自他』ひつじ書房。
 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版。
 鷺尾龍一(2000a)「使動法論議再考」筑波大学言語学研究会(編)『事象と言語形式』pp.1-66, 三修社。
 김 성주(2003)『한국어 사동』한국문화사。
 류 성기(1992)「사동사 사동법의 변화와 사동사 소멸」『국어학』22, pp.237-258。
 서 정수(1996)『국어문법(수정증보판)』한양대학교 출판사。
 송 창선(1998)『국어 사동법 연구』홍문각。
 이 정택(1997)「17세기 국어의 피·사동법 연구」『국어교육』95, pp.307-331。
 이 정택(2001)「국어 피동에 관한 역사적 연구」『한글』pp.93-118。

■ 투 고 : 2010. 5. 31.

■ 심 사 : 2010. 6. 12.

■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

日韓両言語における状態記述二次述部

金英淑*
youngsuk2001@yahoo.co.kr

<要旨>

本稿では、日本語と韓国語の状態記述二次述部(*depictive secondary predicate*;以下、DSP)に関して考察し、その異同を明らかにした。DSPとは、主動詞の担う時制辞が指し示す時点においてその参加者が有する状態を表す要素であり、日本語では(1a)のような「で」句が用いられる。なお、DSPには一時的な性質を表す段階レベル(*stage-level*)の述語のみ用いられるという意味制限があり、(1a)に対して(1b)のような恒常的な性質を表す「で」句はDSPに用いられない。

- (1) a. 太郎が鮭を塩焼で食べた。 b. * 太郎が鮭をチリ産で食べた。

一方、韓国語では日本語の「で」句に対して「lo」句が用いられるが、日本語では成立しない(1b)に対して(2b)が成立し、日韓語はDSPの成立に関して違いが見られる。

- (2) a. yeoneo-leul sogeumgui-lo meog-eoss-da.
鮭を 塩焼き-lo 食べる(-Past-Decl).
b. yeoneo-leul chillisan-eulo meog-eoss-da.
鮭を チリ産-lo 食べる(-Past-Decl)

このような(1b)と(2b)の対立に関して、本稿では、「で」句と「lo」句に現れる名詞句の意味的な性質に焦点を当てて考察を行い、次のような結論が得られた。「で」句と「lo」句はDSPの機能である叙述機能に関しては共通しているが、韓国語の「lo」句は、叙述機能のほかに指示機能をもつという点で「で」句とは異なり、そのような違いのため、(1b)と(2b)の対立が生じるということである。つまり、(1a)の「で」句と(2a)の「lo」句は同じDSPであるが、(2b)の「lo」句は指示機能をもつ要素であり、DSPとは違う性質をもつ。

キーワード：「で」句、「lo」句、状態記述二次述部、段階レベルの述語、叙述関係

1. はじめに

本稿では、日本語と韓国語における状態記述二次述部(*depictive secondary predicate* : 以下、DSP)について考察する。DSPとは、主動詞が担う時制辞が指し示す時点でのその主動詞が表す事態の参加者が有している状態を表す要素であり(竹沢(2001:249))、日本語では(1)のような「で」句が用いられると指摘されてきた¹⁾²⁾(菊池(1991),Koizumi(1994),奥津(1997),Nishiyama(1998),竹沢

* 同徳女子大学校 講師

1) (1)のような「で」句の品詞論上の性質に関しては研究者の間に違いがあり、奥津(1997)は、(1a,b)の「裸」「生」を形容動詞の語幹としているのに対してKoizumi(1994)、Nishiyama(1998)、竹沢(2001)では名詞と捉えられている。とりわけ、竹沢(2001)では、格マーカーとの共起可能性、連体修飾における「な」「の」の分布、N'削除現象、サ名詞化のテストに基づいて「で」句要素が名詞であることを示しており、本稿では、竹沢(2001)に従って、DSPには「名詞+で」句が用いられると捉える。ちなみに、「裸」「生」を形容動詞と捉える奥津(1997)でも(i)の「で」句要素である「カラヤン」「幸四郎」は名詞であるとし、形容動詞と名詞の両方ともDSPに使われるという立場をとっている。

(i) a. 花子は第九をカラヤンで聞きたがっている。(奥津(1997:92))

b. 花子は勸進帳を幸四郎で見た。(ibid.93)

DSPと捉える⁶⁾⁷⁾が、これらの要素は必ずしも同じ文法的振る舞いを示すわけではない。つまり、日本語では(3a)と(3b)のように「で」句名詞の性質によってDSPの成立可能性に違いが見られるが、韓国語では(3a)に対応する(4a)だけでなく(3b)に対応する(4b)も成立し、日本語との違いを示す。

- | | | | | |
|-----|----|---|-----|------------|
| (3) | a. | 鮭を塩焼きで食べた。 | b.* | 鮭をチリ産で食べた。 |
| (4) | a. | yeoneo-leul <u>sogeu^{ng}ui-lo</u> meog-eoss-da. | | |
| | | 鮭を 塩焼き-lo 食べる)-Past-Decl. | | |
| | b. | yeon-eoleul <u>chillisan-eulo</u> meog-eoss-da. | | |
| | | 鮭を チリ産-lo 食べる)-Past-Decl | | |

2節以降で詳しく述べるように、(3a)と(3b)の対立は「**個体レベル(individual level)**」対「**段階レベル(stage-level)**」の述語分類⁸⁾と関連した意味的な特徴によるものであり、DSPの意味制限が働いた結果であると分析される。一方、韓国語では(4)のようにDSPの成立可能性に関して日本語と対立するが、このような対立は「で」と「lo」の他の機能上の違いによる表面的な対立であり、基本的なDSPの性質に関しては日韓語で共通した性質をもつと捉えることができる。本稿では、このような(3)と(4)の対立を中心に、日韓語のDSPの性質について、とりわけ、「で」句と「lo」句に現れる名詞句の意味的な性質に焦点を当てて考察を行う。

以下の構成は次のようになる。2節では英語のDSPにおける意味制限について先行研究を概観し、日本語のDSPにも同様の制限が働いていることを示す。3節では韓国語の「lo」句について考察し、日本語との異同を明らかにする。具体的に、(3)と(4)の「で」句と「lo」句はDSPの機能である叙述機能に関しては共通しているが、韓国語の「lo」句は、叙述機能のほかに指示機能をもつという点で「で」句とは異なり、そのような違いのため、(3b)と(4b)の対立が生じることを示す。4節ではまとめと今後の課題を述べる。

2. 日本語DSPにおける意味制限

-
- 6) 竹沢(2001)で指摘されているように、日本語では形容詞、形容動詞がDSPとして使われないのに対して韓国語では形容詞もDSPとして用いられる(竹沢・金・金(2003)、金・竹沢(2008))。したがって、韓国語には形容詞DSPと名詞DSPが存在するわけであるが、本稿では、(2)(4)のような名詞DSPに注目して考察を行う。形容詞DSPの問題については本稿の4節で簡単に触れておく。
- 7) (2b)を韓国語のDSPと捉えると、韓国語の「lo」が叙述機能をもつ可能性が生じてくる。一方、임(1999,2006)では「lo」の叙述的な性質に関する指摘がなされており、本稿の分析が韓国語の研究の観点から支持される可能性が考えられる。
- 8) 個体レベルの述語は個体、あるいは一定の種のもつ一般的な傾向や特徴付け、属性などを表し、時間的、空間的に捉えられる個体の一時的な状態を表す段階レベルの述語とは区別される(Carlson(1977))。一般に前者は恒常的な性質を表し、後者は一時的な状態を表す。両者の区別が常に明確なわけではないが、それぞれに属する典型的な形容詞としては次のようなものがあげられる。
- (i) a. 個体レベル - big, boring, intelligent, insane, orange, fat, smart, etc.
 b. 段階レベル - sick, tired, hungry, drunk, open, naked, alert, awake, etc.

本節では、英語のDSPの意味的な性質について先行研究を概観し、「で」句の成立条件との関係を示す。従来、DSPの成立には述語分類と関連した意味的な性質が関与するとされたが、(3a)と(3b)における「で」句の対立はそのようなDSPの意味特徴によって生じるものと分析される。

2.1. DSPの意味制限：段階レベル述語の制限

従来、英語のDSPに関しては、述語の意味的な性質がその成立に影響を与えるとの指摘がなされてきたが(Rothstein(1983)⁹⁾, Tsuzuki(1988), Rapoport(1991, 1993)), 具体的に、Rapoport(1991)においては、個体レベル述語と段階レベル述語の違いがDSPの成立に関与し、後者の場合にのみDSPが成立すると述べられている。DSPの成立に関して異なる(5)~(7)では、それぞれ(a)と(b)の形容詞の性質の違いが見られる。

- (5) a. Ayala sold the book *used*.
 b.* Ayala sold the book *interesting*.
- (6) a. Mixa broke the glass *new*.
 b.* Mixa broke the glass *blue*.
- (7) a. Shuli ate the berries *raw*.
 b.* Shuli ate the berries *large*. (Rapoport(1991 : 168))

(5a)~(7a)の*used*, *new*, *raw*は段階レベルの述語、(5b)~(7b)の*interesting*, *blue*, *large*は個体レベルの述語と捉えられるが、このような形容詞の性質がDSPの成立に違いをもたらし、前者の場合にのみDSPが成立するということである。

2.2. 日本語のDSPにおける意味制限

日本語のDSPにも段階レベル述語の制限と捉えるべき現象が見られる。まず、主語指向のDSPとして(8a)と(8b)は許容度に違いがあるが、DSPが成立する(8a)では「で」句要素として服装や身体的な病気など、主語にとって一時的な性質が関与するのに対して、(8b)では生まれ年や出身、精神的な病気、特徴づけなど恒常的な性質が関与している。

- (8) a. 花子が {スーツ姿で/帽子をかぶったままで/風邪を引いた状態で} 会議に出席した。
 b.* 花子が {1980年生まれで/東京出身で/精神異常者で/賢い人で} 会議に出席した¹⁰⁾。

9) Rothstein(1983)では、述語が恒常的な(permanent)性質を表すものであるか、あるいは一時的・推移的状态(temporary/transitory)を表すものであるかという意味的な違いが関与しており、後者の場合にのみDSPが成立するとしている。用語の違いはあるものの、個体レベル・段階レベルと同様の区別を捉えている。

10) (8b)はDSPの用法として成立しないのであり、(i)のように中止法を表す場合は、「で」句名詞が恒常的な性質を表しても自然な文として成立する。(i)の「で」句名詞は主語の出身を表すが、自然な文として成立する。この場合、(i)の「で」句は(ii)の下線部と同じように断定の意味を表すと捉えられる。

このような一時的性質、恒常的性質はそれぞれ段階レベル述語と個体レベル述語の性質であり、前者の場合にのみDSPが成立するという意味制限から(8a)と(8b)の対立を説明することができる。

次に、目的語指向のDSPであるが、目的語の場合も同様の性質が見られる。1節で示した(3a)と(3b)の「で」句名詞である「塩焼き」と「チリ産」が目的語の「鮭」に対してもつ意味的な性質に注目すると、(3a)の「塩焼き」は「鮭」に「塩を振って焼く」という操作を加えることによって得られるものであり、調理法を変えることによって、たとえば、刺身やムニエルのように別の料理に変わる可能性がある。一方、(3b)の「チリ産」のような魚の産地は個々の「鮭」に備わっている性質であり、すでに存在する一定の「鮭」にとって変化することのできない性質である。このような意味で「チリ産」は鮭にとって恒常的な性質であり、「塩焼き」は鮭にとって一時的な性質として捉えることができるが、(3a)と(3b)の成立可能性の違いは、このような目的語における「で」句名詞の違いによってもたらされるものと考えられる。このような目的語のDSPに関する更なる例として(9)のようなものがある¹¹⁾。

- (9) a. 個々に、好みがあると思いますが、ロックで飲むとおいしい焼酎を、教えて。
(Yahoo!知恵袋/暮らしと生活ガイド Yahoo! 2005年06月)
- b. 本施設がプルトニウムを粉末で取り扱うため、工程内滞留はある程度・・・。
(原子力委員会 白書/安全 原子力白書_平成6年版 大蔵省印刷局 1995)
- c. 800円の時に、手持ちの株券を現物で売って800万円の売り代金を受け取り、・・・。
(株で儲け続ける「売り方」220の鉄則3社会科学 若井武彦 | 著 かんき出版2003)
- d. ヘンリー・コトンの本も原書で読みましたが、これはなかなかの名著です。
(確実に7打縮めるプロゴルファー七つの知恵 芸術・美術 江連忠著 講談社 2001)

(9)の「で」句名詞の性質に注目すると、(9a)の「ロック」は「焼酎」に氷を入れるという操作によって得られるものであり、(9b)の「粉末」は「プルトニウム」にとって「固体」や「液体」「気体」のような変化可能な状態の一つである。また、(9c)の「現物」は株の売買において選択可能な株の形態である。(9d)の「原書で」は作品もとの状態に手を加えないオリジナルのものであるが、作品の内容を異なる形式で伝える媒介語や文学ジャンル、編集方法は本にとって変化可能な性質の一つである。このような性質の名詞は目的語にとって段階レベルの性質と捉えられ、DSPに用いられる¹²⁾。それに対して、(10)はDSPとして成立しないが、「で」句名詞いずれも個体レベルの性質を

(i) a. 本多は野村と同じ広島藩の出身で、帰国後の野村から洋学を学び・・・。

b. 小牧源太は、尾張の出身で道三に仕え、～。

(ii) ましてヤマンスフィールドは民主党出身であり、民主党の大統領に任命された大使で、・・・。

11) これらの例は日本の国立国語研究所で実施される特定領域研究「日本語コーパス」のKOTONOHAデモサイトの検索によるものである。当該コーパスの詳細は砂川(2008)を参照。

12) 本文にあげられた例以外にKOTONOHAで検索したDSPの例としては次のようなものがある。

(i) 生で食べた、刺身で食べた、ストレートで飲んだ、お湯割りで飲んだ、新品で買った、新車で買った、中古で売った、セットで売った、景品つきで売った、物語で読んだ、戯曲で読んだ、日本語で読んだ、ボーカルなしで聞いた、～状態で、など。

表す。

- (10) a.* コーヒーを {モカで/キリマンジャロで} 飲んだ。 <原産地>
 b.* お酒を {焼酎で/久保田で} 買った。 <原料/銘柄>
 c.* パソコンを {富士通で/ペンティアムで} 買った。 <生産元/機種>
 d.* カバンを {大きいサイズで/黄色で} 持ち歩いた。 <商品のサイズ/色>

(10a)の「モカ/キリマンジャロ」は原産地によるコーヒーの種類を表すが、このような性質は個々のコーヒーに備わっているものであり、恒常的な性質である。(10b)の「焼酎」は「ビール」や「ウイスキー」など、お酒を造る原材料の違いによるお酒の種類であり、「久保田」はお酒の銘柄であるが、いずれも一定のお酒にとって変わることのできない性質である。同じく(10c)の「富士通」「ペンティアム」はパソコンの生産元と機種を表し、(10d)はカバンのサイズや色を表すが、いずれも目的語名詞にとって恒常的な性質であり、DSPとして成立しない。これまでの考察から、日本語では主語指向DSP、目的語指向DSPともに段階レベルの意味制限に従うと捉えることができる。

3. 韓国語の名詞DSP

韓国語の名詞DSPについて見ると、まず、主語指向のDSPに関しては日本語と同様の制限が見られる。日本語の(8a)と同じく、「lo」句要素が一時的な性質を表す(11a)は問題なく成立するが、恒常的な性質を表す(11b)は成立しない。

- (11) a. suni-ga {jeongjangchalim-eulo/ moja-leul sseu-n chae-lo} hoewi-e
 (人名)が {制服姿-lo / 帽子をかぶったまま-lo } 会議に
 chamseogha-ess-da.
 参加す(る)-Past-Decl
- b.* suni-ga {1980nyeonsaeng-eulo / seoulchulsin-eulo / hyeonmyeongha-n salam-eulo}
 (人名)が {1980年生まれ-lo / ソウル出身-lo / 賢-連体形 人-lo }
 hoewi-e chamseogha-ess-da.
 会議に 参加す(る)-Past-Decl

次に、目的語指向のDSPであるが、韓国語では、日本語の(9)に対応する(12)とともに、日本語では成立しない(10)に対応する(13)も成立する。

- (12) a. keopi-leul beullaeg-ulo masi-ess-da.
 コーヒーを ブラック-lo 飲(む)-Past-Decl

- | | | | |
|---------|------------------|---|-----------------------------|
| b. | peullutonyum-eul | <u>bunmal-lo</u> | sayongha-ess-da. |
| | ブルトニウムを | 粉末-lo | 使用する(Past-Decl) |
| c. | hellipoteo-leul | <u>wonseo-lo</u> | ilg-eoss-da. |
| | ハリーポッターを | 原書-lo | 読(む)-Past-Decl |
| d. | jusig-eul | <u>hyeonmul-lo</u> | geolaecha-ess-da. |
| | 株券を | 現物-lo | 売買する(Past-Decl) |
| (13) a. | keopi-leul | { <u>moka-lo/killimanjalo-lo</u> } | masi-ess-da. ¹³⁾ |
| | コーヒーを | {モカ-lo/キリマンジャロ-lo} | 飲(む)-Past-Decl |
| b. | sul-eul | { <u>soju-lo/jinlo -lo</u> } | sa-ss-da. |
| | お酒を | {焼酎-lo/チンロ-lo} | 買(う)-Past-Decl |
| c. | keompyuteo-leul | { <u>samseong-eulo/pentieom-lo</u> } | sa-ss-da. |
| | パソコンを | {サムソン-lo/ペンティアム-lo} | 買(う)-Past-Decl |
| d. | gabang-eul | { <u>keu-n saijeu-lo/nolansaeg-eulo</u> } | deul-go dany-eoss-da. |
| | カバンを | {大き-連体 サイズ-lo/黄色-lo} | 持ち歩(く)-Past-Decl |

韓国語において(12)(13)のように日本語との違いが生じる理由に関して二つの分析の可能性が考えられる。一つは、両言語のDSPの性質が異なる可能性で、韓国語のDSPは日本語とは異なり、意味制限が働かないため、(12)とともに(13)も成立すると説明することである。しかし、このような説明はこれまで論じてきたDSPの段階レベル述語の意味制限に対して大きな問題を提起する。というのは、日本語の(3b)(10)が成立しないのは、個体レベルの述語はDSPに用いられないという、英語などでも指摘されてきた一般的なDSPの意味制限と合致する結果であり、恒常的な性質の名詞が使われた韓国語の(13)はこの意味制限に違反することになってしまうからである。さらに、(11)で示したように、韓国語でも主語DSPに関してはDSPの意味制限が見られるため、目的語DSPだけが異質的であるということは韓国語の分析としても統一性を欠くものになりかねない。

次に日韓語の違いを説明するもう一つの可能性は、(13)の「lo」句がDSPとは異なる性質を有する可能性である。もし、(13)の「lo」句がDSPではないとすれば、その意味制限に影響されないのは当然の帰結であり、DSP分析の問題にもならない。実際、(13)の「lo」句は文内で果たす機能の面でDSPとは異なる性質を示す。以下では、後者の立場から「lo」句の機能について、DSPとの違いを中心に考察する。

3.1. DSP「で」句の機能

13) (13)の例は一定の文脈を想定した方がより自然に感じられる。たとえば、(13a)は喫茶店で友だちに希望するメニューを聞いたりする場合、「mwol-lo masi-llae? (何にする?)」に対する答えとして「moka-lo masi-llae (モカにする)」、(13c)はパソコンを購入した友だちにその種類を聞く場合、「computer, mwol-lo sas-eo? (パソコン、何を買った?)」に対する答えとして「samseong-eulo sas-eo (サムソンを買った。)」のように使われる場合、自然な文として成立する。一方、日本語では、同様の場面でも「*モカで飲んだ。」や「*サムソンで買った。」のような表現は全く許容されない。ここでは、このような日韓語の違いに注目している。

(13)の「lo」句がDSPとは異なる要素であることを示すために、DSP「で」句の機能について確認しておく。1節で述べたように、DSPはイベント参加者の状態を叙述する要素であり、(14a,b)の「塩焼きで」「ブラックで」はそれぞれ「鮭」「コーヒー」の状態を叙述する機能をもつと捉えられる。

- (14) a. 鮭を塩焼きで食べた。 b. コーヒーをブラックで飲んだ。

一般に名詞句は、指示機能と叙述機能をもつとされるが、大まかにいって、前者は可能世界において認定可能な一定の対象を指し示し、後者は、一定の指示対象が名詞句によって表される属性、性質を有することを表す。たとえば、(15a)(16a)の「塩焼き」はそれぞれ、指示と叙述の機能をもつと考えられる。

- (15) a. 塩焼き、一つ、ください。 b. (魚に)塩を振って焼いたもの(塩焼きのもの)
 (16) a. この鮭は塩焼きだ。 b. (魚に)塩を振って焼いた状態、その性質(塩焼きの状態)

(15a)の「塩焼き」は具体的な個体を指し示し、(15b)のような解釈をもつ。それに対して、(16a)は「この鮭」によって指し示される一定の対象が「塩焼き」によって表される属性、性質を有することを表し¹⁴⁾、この場合の「塩焼き」は(16b)のような解釈をもつ。

このような名詞句の二つの機能と関連してDSPの性質を捉えようと、叙述機能をもつDSPは(15)のように個体を指示する機能は持たないことが予測されるが、その予測の妥当性は(17)(18)の「で」句要素の言い換えの可能性から確認することができる。

- (17) a. 鮭を塩を振って焼いた状態で食べた。(=鮭を塩焼きで食べた。)
 b.* 鮭を塩を振って焼いたもので食べた。
 (18) a. コーヒーをブラックの状態で飲んだ。(=コーヒーをブラックで飲んだ。)
 b.* (コーヒーを)ブラックコーヒーで飲んだ。

(17a,b)は(14a)のDSP要素である「塩焼き」をそれぞれ(16b)(15b)に言い換えた文であるが、具体的な指示物を指し示す(17b)はDSPとして成立しない。同じく(18b)も(14b)の「ブラック」を具体的な指示対象をもつモノ名詞に言い換えた文であるが、DSPとして成立しない。これから(14a,b)はそれぞれ(17a)(18a)の意味で成立することが分かる。次節では、このような指示と叙述という二つの機能の観点から「lo」句名詞の性質を検討する。

14) (16a)は指定位文であり、ここでいう「叙述」の説明は指定位文の述語名詞の役割である。指定位文の性質については上林(1988)、西山(2003)を参照。

3.2. 「sogeumgui-lo(塩焼き-lo)」の二つの意味

名詞句のもつ二つの機能の観点から韓国語の「lo」句名詞の性質を検討すると、(19)の「sogeumgui-lo(塩焼き-lo)」は(20a,b)のように、叙述と指示の両方に関して成立する。

(19)	yeoneo-leul	<u>sogeumgui-lo</u>	meog-eoss-da.		
	鮭を	<u>塩焼き-lo</u>	食べる)-Past-Decl		
(20)	a. yeoneo-leul	sogeum-eul	ppuly-eo guu-n	<u>sangtae-lo</u>	meog-eoss-da.
	鮭を	塩を	振って 焼いた	<u>状態-lo</u>	食べる)-Past-Decl
	b. yeoneo-leul	sogeum-eul	ppuly-eo guu-n	<u>geos-culo</u>	meog-eoss-da.
	鮭を	塩を	振って 焼いた	<u>もの-lo</u>	食べる)-Past-Decl

(20a,b)の「lo」句の性質を見ると、まず、(20a)は、一定の「yeoneo(鮭)」を食べる際、その鮭が塩焼きの状態であったことを表し、日本語の(3a)と同じようにDSPであると捉えられる。このようなDSPの意味に関しては、「lo」句名詞にも日本語と同じ意味制限が働く。2.2節では、日本語でDSPとして成立しない(10)に対して韓国語では(13)が成立するとしたが、(13)の「lo」句名詞にDSPの意味が強いられる「sangtae(状態)」を明示した(21)の文は、日本語と同様、成立しない。

(21)	a.* keopi-leul	{moka <u>sangtae-lo</u> / killimanjalo <u>sangtae-lo</u> }	masi-ess-da.
	コーヒーを	{モカ <u>状態-lo</u> / キリマンジャロ <u>状態-lo</u> }	飲む(む)-Past-Decl
	b.* sul-eul	{soju <u>sangtae-lo</u> / jinlo <u>sangtae-lo</u> }	sa-ss-da.
	お酒を	{焼酎 <u>状態-lo</u> / チンロ <u>状態-lo</u> }	買(う)-Past-Decl
	c.* keompyuteo-leul	{samseong <u>sangtae-lo</u> / pentieom <u>sangtae-lo</u> }	sa-ss-da.
	パソコンを	{サムソン <u>状態-lo</u> / ペンティアム <u>状態-lo</u> }	買(う)-Past-Decl
	d.* gabang-eul	{keu-n saijeu <u>sangtae-lo</u> }	deul-go dany-eoss-da.
	カバンを	{大き-連体形 サイズ <u>状態-lo</u> }	持ち歩(く)-Past-Decl

(21)の「lo」句名詞はそもそも原産地や生産元のような恒常的な性質を表す名詞であり、一時的な性質を表す「状態」とは意味的に矛盾するため、その場合は韓国語も日本語と同じようにDSPは成立しないということである。それに対して、(20b)の「lo」句は「yeoneo(鮭)」の状態を表すわけではなく、「塩を振って焼いた鮭」という具体的な指示物を指している。つまり、(20b)は、目的語を表す「yeoneo(鮭)」というカテゴリーの中で「塩を振って焼いた」鮭の方を食べたことを表す¹⁵⁾が、こ

15) このような「-lo」の意味的な性質と関連して、임(1973)は、「lo」の機能を「選択の多様化」を表す[+選択]の意味素性をもつと捉えている。つまり、複数の選択の可能性がある中で、「lo」句の要素を選んだことを含意するという性質であるが、このような[+選択]の意味を(20b)を例にとって説明すると、食べる対象としての「鮭」というカテゴリーの中には「塩で焼いたもの」や「刺身」、「ムニエル」など複数の選択肢があり、その中で「塩で焼いたもの」を選んだという意味である。注2で示したように、このような「lo」の統語的な性質には立ち入らないが、ここではDSPの「lo」と区別するために、임(1973)に従って(20b)の「lo」を[+選択]の「lo」と捉える。

の場合の「lo」句名詞は、(20a)のDSP「lo」句とは異なり、具体的な指示物を指し示す指示機能をもつと捉えられる。

ここで、(20a)と(20b)の「lo」句の意味的な違いについて少し説明すると、(20a)において実際に「meog-eoss-da(食べた)」のは目的語の「yeoneo(鮭)」であり、「lo」句名詞はその鮭の状態を表しているのに対して、(20b)において実際に「meog-eoss-da(食べた)」のは「lo」句名詞の「sogum-eul ppuly-eo guu-n geos(塩を振って焼いたもの)」であり、目的語の「yeoneo(鮭)」は、「lo」句名詞が属するカテゴリーを表しているに過ぎない。このような(20a)と(20b)の意味的な違いに対する理解を手助けするために、(22)の言い換えの可能性をあげておく。(22a,b)は(20a,b)の目的語を主題化し、「lo」句名詞を目的語にした文であるが、(20a)に対応する(22a)が不自然であるのに対して、(22b)は自然な文として成立し、かつ、(20b)とほぼ同じ意味を表す。

(22) a.*	<u>yeoneo-neum</u>	sogum-eul	ppuly-eo	guu-n	<u>sangtae-leul</u>	meog-eoss-da. ¹⁶⁾
	<u>鮭は</u>	塩を	振って	焼いた	<u>状態を</u>	食べる)-Past-Decl
b.	<u>yeoneo-neum</u>	sogum-eul	ppuly-eo	guu-n	<u>geos-eul</u>	meog-eoss-da.
	<u>鮭は</u>	塩を	振って	焼いた	<u>ものを</u>	食べる)-Past-Decl

前述したように、(20a)と(20b)は、「lo」句名詞が述語動詞「meog-eoss-da(食べた)」の直接の対象になれるか否かという面で異なっており、(20a)の「lo」句名詞は目的語の状態を表すため、述語名詞の直接の対象になるのは不自然である。それに対して、(20b)の「lo」句は指示機能を持っており、具体的な指示物が「食べる」の目的語になるのは自然なことで捉えられる。(22a,b)の対立はこのような「lo」句名詞の違いに起因するものであり、両者の意味的な違いを表す証拠と考えられる。

このように(20b)の「lo」句名詞は具体的な対象を指し示す指示機能を持ち、その場合にかぎって日本語では成立しない「で」句に対応する「lo」句が成立する。(23)の「lo」句名詞はいずれも具体的な指示物を表すモノ名詞であり、自然な文として成立するが、DSPとは異なる性質を表す。

(23) a.	keopi-leul	<u>moka keopi - lo</u>	masi-ess-da. ¹⁷⁾
	コーヒーを	<u>モカ コーヒー-lo</u>	飲(む)-Past-Decl
b.	sul-eul	<u>jinlo soju-lo</u>	sa-ss-da.
	お酒を	<u>チンロ焼酎-lo</u>	買(う)-Past-Decl

16) (22a)は「meog-eoss-da(食べた)」の直接の対象として「sangtae(状態)」は成立しないが、日本語で「おいしく焼けたところを食べた」のような意味では「おいしく焼けたところで」の意味で成立する。

17) (23)のそれぞれの例において、「lo」句名詞と目的語の名詞が重複するため、たとえば、(i)のように目的語を省略した方がより自然に感じられる。この場合も(ia)に対応する(ib)は日本語では成立しない。

(i) a. suni-ga {moka keopi-lo} masi-ess-da.
 (人名)が モカコーヒー-lo 飲(む)-Past-Decl
 b.* 花子がモカコーヒーで飲んだ。

c.	keompyuteo-leul	<u>samseong keompyuteo-lo</u>	sa-ss-da.
	パソコンを	サムソン パソコン-lo	買(う)-Past-Decl
d.	gabang-eul	<u>keu-n saijeu gabang-eulo</u>	deul-go dany-eoss-da.
	かばんを	大き-連体 サイズ カバン-lo	持ち歩(く)-Past-Decl

以上の考察から、(19)の「lo」句には叙述と指示という二つの機能があり、個体レベルの名詞句が用いられた(4b)の「lo」句はDSPとは異なる要素であることが分かる。このような事実を踏まえて、(24a)と(24b)の対立を説明すると、(24a)において日本語の「で」句は叙述の解釈、すなわちDSPの解釈しか持たず、DSPと相容れない個体レベルの性質をもつ名詞句が用いられると意味的に整合しないため、非文になってしまう。それに対して、(24b)の韓国語の「lo」句は叙述と指示の両方の解釈が可能であり、名詞句の性質によってDSPの解釈が妨げられても指示を表す文として成立する。つまり、(24b)はDSPではなく指示機能をもつ名詞句である。

(24) a.*	鮭をチリ産で食べた。	< 叙述 >
b.	yeoneo-leul <u>chillisan-eulo</u> meog-eoss-da.	< 叙述、指示 >
	鮭を <u>チリ産-lo</u> 食べる)-Past-Decl	

4. まとめと今後の課題

本稿では、日本語と韓国語のDSPに関して「で」句と「lo」句に現れる名詞句の意味的な性質を中心に考察を行い、次の内容を明らかにした。日本語では(25a,b)で示すように、主語DSP、目的語DSPにおいて成立制限が見られるが、これは段階レベルの述語のみDSPとして用いられるという英語にも見られる一般的なDSPの意味制限と合致するものである。

(25) a.	花子が {スーツ姿で / *1980年生まれで} 会議に出席した。
b.	鮭を {塩焼きで / *チリ産で} 食べた。

一方、韓国語では(26b)で示すように、(25b)では成立しなかった「chillisan-eulo(チリ産で)」を含む文が成立し、日本語との違いが見られる。

(26) a.	sun-i-ga {jeongjangchalim-eulo / *1980nyeonsaeng-eulo} chamseogha-ess-da.
	(人名)が {スーツ姿-lo / 1980年生まれ-lo} (会議に) 参加す(る)-Past-Decl
b.	yeoneo-leul {sogeumgui-lo / <u>chillisan-eulo</u> } meog-eoss-da.
	鮭を {塩焼き-lo / <u>チリ産-lo</u> } 食べる)-Past-Decl

しかし、(26b)における「chillisan-eulo(チリ産で)」は、(27)で示すように、目的語の「yeoneo(鮭)」の状態を叙述するわけではなく具体的な指示対象である「チリ産の鮭」を指示する要素である。つまり、DSPとは異なる性質であるが、それはDSPの意味が強いられる「sangtae(状態)」の文脈において「lo」句が成立しないことから確認できる。

- (27) yeoneo-leul { chillisan yeoneo-lo/*chillisan sangtae-lo} meog-eoss-da.
 鮭を { チリ産 鮭-lo /* チリ産 状態-lo } 食べる)-Past-Decl

以上の考察を通じて本稿では、日韓語における「で」句と「lo」句はDSPの意味的な性質に関して共通した性質をもつという結論が得られたわけであるが、このような結論を踏まえてより包括的な両言語のDSPの体系を論じる際には、(25)(26)の名詞DSPだけでなく形容詞DSPのことも考慮に入れて分析する必要があると考えられる。竹沢(2001)で指摘されたように、日本語のDSPには範疇制限があり、形容(動)詞はDSPに使われない。(28a)は、料理を食べる際、その料理がしょっぱい状態であったことを意図する文であるが、日本語の文として成立しない。一方、(28a)を韓国語に直訳した(28b)はDSPの意味を表す自然な文として成立する。

- (28) a.* 料理をしょっぱく食べた。
 b. suni-ga eumsig-eul jjia-ge meog-ess-da.
 (人名)が 食べ物を しょっぱ-ge 食べる)-Past-Decl.

このような両言語における形容詞DSPに関して、日本語ではなぜ形容(動)詞がDSPに使われないのか、また、DSPと関連した日韓語の違いは何に起因するものなのか、などの問題が考えられる。今後、このような問題について考察を進めていきたい。

◀ 参考文献 ▶

- 서(ソ)정수(1996)『수정증보판 국어문법(修正増補版 国語文法)』, 한양대학교출판원(ハンヤン大学校出版院).
 임(イム)창국(1999)「한국어 이차술어 구문의 ‘로’의 계사적 양상(韓国語の二次述部構文: ‘lo’의 繫辭的な性質)」, 고려대학교대학원 철학과언어학전공 석사학위논문.
 _____(2006)「한국어 이차술어 구문의 통사(韓国語の二次述部構文の統語)」, 『언어(言語)』 31-1, p.125-141.
 임(イム)홍빈(1974)「{로}와 選択의 多樣化(「lo」と選擇の多樣化)」, 『語学研究』, 서울대학교語学研究所, p.143-159.
 内丸裕佳子(2006)『形態と統語構造との相関-テ形節の統語構造を中心に-』筑波大学博士学位請求論文
 奥津敬一郎(1997)「連体即連用? 第17回 一般述語文と連体・連用の対応 その一 ダ形容詞とイ形容詞-」, 『日本語学』 3-16, 明治書院, p.88-96.
 上林洋二(1988)「指定文と措定文-バとガの一面」, 『筑波大学 文芸言語研究・言語編』 14, p.57-74.
 菊池朗(1991)「日本語の二次述部」, 安井稔博士古希記念論文集編集委員会(編)『現代日本語学の歩み』, 開拓社, p.212-220.
 金英淑(2009)「種類を表す「名詞+で」句の成立条件」 『日本語教育』 48, p.83-94.

- _____ (2010) 「「名詞+で」句と状態記述二次述部」『日文学報』82, p.17-27.
- 金英淑・竹沢幸一(2008) 「日韓語における状態記述二次述部の意味と形式」, 『言語記述と言語教育の相互活性化のための日本語・中国語・韓国語対照研究 日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書』, p.1-19.
- 砂川有里子(2008) 「日本語教育におけるコーパス活用の可能性」, 『日本語教育世界大会2008予稿集2(グループC)』, p.110-113.
- 竹沢幸一(2000) 「空間表現の統語論-項と述部の対立に基づくアプローチ-」青木三郎・竹沢幸一(編)『空間表現と文法』, くろしお出版,p.163-214.
- _____ (2001) 「日本語の状態記述二次述部と品詞分類-記述的考察を中心に-」,筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究組織.『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書平成12年度IV』, p.237-264.
- 竹沢幸一・金熹成・金英淑(2003) 「日本語と韓国語における状態記述二次述部の記述的考察」『日本語文学』17,韓国日本語学会,p.229-250.
- 西山佑司(2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論-指示的名詞句と非指示的名詞句-』, ひつじ書房.
- 宮腰幸一(2007) 「結果句の定義と分類について-意味・機能的アプローチ-」, 『日本語文法』7-2, p.101-119.
- Carlson, Gregory N. (1977) A Unified Analysis of the English Bare Plural. *Linguistics and Philosophy* 1, p.413-157.
- Koizumi, Masatoshi(1994) Secondary predicates, *Journal of East Asian Linguistics* 3, p.25-79.
- Nishiyama, Kunio(1998) Morphosyntax and morphophonology of Japanese predicates, Ph.D. dissertation, Cornell University.
- Rapoport, Tova R.(1991) Adjunct-Predicate Licensing and D-Structure, Ed. by Susan D. Rothstein, *Syntax and Semantics 25: Perspective on Phrase Structure*, Academic Press, New York. p.159-187.
- _____ (1993) Verbs in Depictives and Resultatives. Ed. by James Pustejovsky, *Semantics and the Lexicon*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, p.163-184.
- Rothstein, Susan(1983) Syntactic Forms of Predication. Ph.D. dissertation. MIT.
- Tsuzuki, Masako(1988) Depictive Secondary Predicates versus Conditional Secondary Predicates, *English Linguistics* 5, p.71-90.

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

文法化理論を応用した日韓語の文末形式に関する対照研究

— 「のだ」と「것이다」の意味変化の対比を中心に —

金 廷 珉*
kjm-0630@hanmail.net

<要 旨>

本研究では日本語の自然な会話において頻出、多用される文末形式「のだ」とそれに該当する韓国語の形式「것이다」について対照分析を行った。具体的には従来の日韓対照研究における両形式の研究成果を踏まえて、文法化(grammaticalization)研究における意味変化の概念を応用して、両者の類似点と相違点の考察を行った。

その結果、「のだ」と「것이다」はTraugott(2003)によって提唱された「主観化(subjectification)」から「間主観化(intersubjectification)」へ意味変化の過程を体現している点で共通する。しかし、「のだ」は両方の過程に偏りなく意味変化が進んでいるのに対して、「것이다」は「主観化」「間主観化」それぞれの過程において、「のだ」に比べて意味変化の進度に制約と偏りが見られることが分かった。

本研究を通して、同じ膠着言語型に属し、形態・統語的に類似しているように見える両形式の、文法化の進度の度合いにおいて微妙な差が見られることが確認できた。この点は両形式の類似点と相違点に関する指摘に留まっていた従来の日韓対照研究に対して、新たな理論的考察を与えることができた点で意義があると考えられる。

キーワード：「のだ」、「것이다」、文法化、主観化、間主観化

1. 研究背景と目的

「のだ」文は自然な日本語の日常会話において欠かせないほど、生産的に用いられる文末形式である(近藤2007)。「のだ」については、これまで様々な点から多くの研究がなされてきたが、「のだ」の持つ文脈依存性の高さと多義的な性質のゆえに、その本質的機能の同定をめぐって、現在も議論が続いている(野田1997、角田2004、名嶋2007、益岡2007、藤城2007など)。

一方で日本語の「のだ」だけを取り上げるのではなく、他言語における「のだ」文に相当する形式との対照分析を通して、「のだ」文の特徴を明らかにしようとする研究も見られる(杉村1982、福畠1994、大竹2009¹⁾など)。その中でも近年は、特に日本語と最も多くの類似性を持つ韓国語の「것이다」²⁾との対照分析が、近年比較的に盛んに行われてきている(李2001、印2003、崔2005、金2007など)。これらの先行研究において両形式の特徴について明確になった点を簡単にまとめると

* 松山大学(Matsuyama University) 人文学部 講師

1) より厳密にいうと、大竹(2009)は日本語の「のだ」を基準にそれに対応する英語の構文の分析を行っている。

2) 本研究では韓国語の「것이다」について、「것이다」の前に用言の「過去連体形」と「非過去(現在)の連体形」が伴われる「-는 것이다」を「のだ」文に対応する形式として扱う。蓋然推量を表し、日本語の「はずだ」「だろう」に相当する「-ㄴ 것이다」は研究対象外とする。また、田野村(1990)、野田(1997)に倣い「のだ」「んだ」「の」などを「のだ」の変異形として扱って「のだ」と表記し、韓国語の「것이다」の変異形として「거예요」「거야」などの総称として「것이다」と表す。また、用例の出展の詳細は本稿の最後に記す。

以下のようになる。

- (i) 生起頻度の面において「のだ」の方が「것이다」より圧倒的に多い
- (ii) 両形式は「地の文」においては対応する度合いが高いが、「会話文」においては、対応関係に顕著なずれが見られる
- (iii) 「のだ」の方が「것이다」より用法に広がりがある

それでは、上で示した「のだ」と「것이다」の共通点と相違点はいったい何を意味し、どのような観点から捉えることができるのであろうか。従来の先行研究においては両形式の対応関係に関する記述はなされたものの、その普遍的、個別的特徴を究明するまでには至っていない。したがって、両者の特徴をより体系的に把握するためには、従来の研究成果に加えてなんらかの理論的な分析が必要であると考ええる。

そこで本研究では、「のだ」と「것이다」を対照分析する上での有効な道具立てとして、近年談話研究、言語類型論などと密接なかかわりを見せる「文法化(grammaticalization)」の知見を援用して分析を行い、両者の類似点および相違点の解明を目指す。具体的にはTraugott(2003)によって提案された「主観化(subjectification)」から「間主観化(intersubjectification)」への意味変化の仮説を援用して両形式を分析した、Kim and Horie(2009)を再検討し、修正・補完を行う。

本稿の構成は以下の通りである。2節では「のだ」と「것이다」について対照の観点から論じた諸研究について簡単にまとめ、問題点を述べる。3節では文法化の定義および、文法化を捉える本研究の立場を示す。次に、本研究で分析に用いる「主観化」「間主観化」という概念を簡単に説明する。4節では、3節で紹介した概念を応用した分析を行い、「のだ」と「것이다」の類似点と相違点を考察する。最後に5節では本研究で得られた結果とその意義について述べる。

2. 先行研究

本節では日本語の「のだ」文と韓国語の「것이다」について対照分析を行った先行研究について触れる。まず、1節で述べたように、両者の(非)対応関係についての記述が中心であった研究(李2001、印2003、金2007など)について検討する。

両形式は(1)-(1')、(2)-(2')に示されるとおり、先行文(脈)に対する「理由」「原因」などを後続文で述べる際に用いられる点では共通する。特に小説の地の文や新聞などの「書き言葉」において、両形式はよく対応することが指摘されている(李2001、印2003、金2007など)。

(1) 常雄自身は、かつて会社のあった下町のアパートに、妻と二人で暮らしている。商店街の一角にある、おんぼろだが居心地のいいアパートだ。通勤に便利のように引っ越したら、と社長夫婦にさん

ざっばら言われたが、常雄は頑として引っ越さなかった。そこでの暮らしが気に入っているのだ。

(1) 쓰네오 자신은 지금도 옛날에 회사가 있었던 동네의 아파트에 아내와 둘이 살고 있다. 상점가 한 모퉁이에 있는 볼품없지만 편안한 아파트다. 사장 부부는 출근하기 좋게 이사하라고 몇 번이나 권했지만, 쓰네오는 고집을 부렸다. 그 아파트에서의 생활이 좋았던 것이다. 【울】

(2) 그러나 콩콩 설레는 가슴을 안고 이사할 집 근처 동네에 도착했을 때 실망하지 않을 수 없었다. 그 곳에는 유리의 성도 언덕 위의 하얀 집도 없었고, 찌그러진 판잣집들만 우글우글 했던 것이다. 【9살】

(2)ところが、胸の高鳴りを抑えつつ引っ越し先の町に着いたとたん、ぼくはがっかりしてしまった。そこには (略) ぺちゃんこな掘っ立て小屋ばかりがごちゃごちゃとひしめき合っていたのだ。

一方で「話し言葉(会話文)」において(3)-(3')と(4)-(4')のように、話し手が聞き手の知らない事柄(事実)を一方向的に提示する文脈では、「것이다」は使用されにくいという相違が見られる。

(3) 高橋君は、(略)両手を振りながら、もっと急いだ。そしてドアのところに着くと、「君は速いな」といった。それから、「僕、大阪から来たんだ」といった。【토】

(3') 다카하시씨는 양손을 앞뒤로 흔들면서 더욱 서둘렀다. 그리하여 문 앞에 도착하자, “너 정말 빠르구나!”하고 말했다. 그리고 나서 이렇게 덧붙였다. “난 오사카에서 왔어.”

(4) 태영: 수혁아, 나 회장님 뵙고 오는 길이야. 허락 받았어. 약혼 허락 받았어. 【파】

(4) テヨン: スヒョク。私会長にお会いしたわ。お許しが出たの。婚約のお許しをいただいたの。

印(2003)は「のだ」と「것이다」の異同について統一的な説明を与えるために、「感情の有標性、無標性」というパラメータを導入して両形式の分析を行っている。印(2003)によると、「のだ」は(5)のように感情的に「ニュートラル」な場合においても、(6)のように感情的に「有標」な場合においても用いられる。これに対して、「것이다」の使用は(6)のように、「会話文」において「意外性」「驚き」など感情的に意見を強く主張する場合に用いられやすい傾向がある。しかし、印(2003)では「感情の有標性、無標性」の判断基準については明確に述べられてない。

(5) 「このへんのお宿はさ、昔、ぼうずが肉を食っちゃいけないっていうんでとうふをいろいろに工夫して食ってたんだよ、そいつをなんていうの、今風にしてお客に出すのが売りものなんだよね。あんたも今度昼来て、食べて見るといいよ。」運転手が言った。(印 2003:41)

(5') 「이 부근의 여관은 말이죠, 옛날, 스님은 고기를 먹으면 안 된다고 해서 두부를 여러 가지로 조리해서 먹었죠, 그걸 뭐라고 하나, 지금은 현대식으로 조리해서 손님한테 대접하는 걸로 유명합니다. 손님도 이 다음엔 낮에 와서 한번 잡춰보세요.」

(6) 「あの娘も手伝ってるんだね。」 「お鮎子を運んで来て、廊下の陰に立って、じいって見てん

のよ、きらきら目を光らして。あんたああいう目が好きなんですよ。」

(6) 「저 처녀도 거들어 주고 있군.」 「술병을 들고 복도 한편에서 뚫어지게 노려보는 거예 요.마구 눈을 번뜩이면서, 당신, 아마 그런 눈을 좋아하죠?」 (印 2003:38)

次に、文法化の観点から「のだ」と「것이다」について論じた研究(宋2000、崔2005、Kim and Horie 2009)を簡単に紹介する。まず、宋(2000)は、韓国語の「것이다」を、日本語の「もの(だ)」「こと(だ)」「の(だ)」の3つの形式に対するものとして取り上げ、音韻の変化、意味の漂白化、脱範疇化という観点から対比を行った。その結果、宋(2000)³⁾は韓国語の「것」と日本語の「の」は両方とも実質的意味は希薄であるが、「の」に比べて「것」の方が実質的意味を有すると述べている。

崔(2005)は「のだ」と「것이다」について「機能的必須度」という観点から考察を行い、「のだ」の必須性が「것이다」より高いことを根拠に、「のだ」の方がモダリティ形式として発達しているという主張を展開している。これらの研究は、日本語の「のだ」の方が「것이다」より文法化が進んでいる、という意見で共通しており、本研究もこの点に対して支持する。

次に、Kim and Horie(2009)について述べる。文法化においては、形態・統語論的变化の側面と談話における意味・語用論的变化という側面がある(堀江・パルデシ2009:129)が、Kim and Horie(2009)はどちらかという、後者の方に主眼をおいた研究である。

Kim and Horie(2009)は「のだ」と「것이다」について、野田(1997)による日本語の「のだ」の「対事的」「対人的」用法の2分類を修正した上で、Traugott(2003)によって提案された「主観化」「間主観化」という文法化の意味変化のメカニズムと関連づけて考察を行った。その結果、両形式は「主観化」を体現している点では共通するが、「間主観化」に関しては「のだ」の方が「것이다」に比べて意味変化が進んでいることを主張した。この点は従来の先行研究とは異なった分析方法を提示した点で新規性があると思われる。しかし、Kim and Horie(2009)ではそれを裏付ける根拠として両形式の生起頻度の差を挙げているが、実際分析に用いた資料が非常に限られていたため、この主張の一般化を行うには決して十分とは言いがたい。そこで、本研究ではKim and Horie(2009)を再検討する立場で、小説、ドラマなどより多くの談話資料⁴⁾から両形式のデータを収集し、Traugott(2003)の仮説の応用を試み、Kim and Horie(2009)の主張に修正・精密化を行う。

3. 文法化・主観化・間主観化

本節では具体的な分析に先立って文法化の定義および、本研究の立場を示しておく。「文法化」とは一般に、語彙的意味を持つ内容語が歴史的変化の中で文法的な意味を持つ機能語に変

3) 宋(2000)では、意味変化の方向性について触れてはいるが、本研究で用いる「間主観化」の概念は取り入れていない。

4) 談話の定義に関して、話し言葉と書き言葉の間には違いがあることは良く知られている(Brown&Yule1983)。本研究では「談話」を、「話し言葉」と「書かれた言葉」の両方を含んだ概念として用いる(砂川2005などを参照)。

化していく通時的プロセスを指す(Hopper and Traugott1993、2003、Bybee et al 1994)。典型例として、現代日本語において過去時制を表す「た」が挙げられる。日本語の「た」は「てあり>たり>た」という経路を経て文法化したものである。しかし、近年は、文法化について「談話に繰り返し現れる言語形式、構文が次第に固定化し、一定の文法的意味を表すようになる動的現象(堀江2004:95)」という、より「共時的」な談話現象として捉える見方もある。このような共時的観点から文法化を捉えている研究は、近年、言語類型論、認知言語学、談話研究などの研究分野と密接な関わりを持つ形で生産的に研究が行われている(大堀2005、ナロック2005、堀江2004)。本研究では共時的な観点からの文法化の側面に着目して、日本語の「のだ」と韓国語の「것이다」について考察を行うことにする。

次に、本研究で「のだ」と「것이다」の分析の道具立てとして用いる「主観化」と「間主観化」の概念について簡単に説明する。この2つの概念は、文法化における意味変化と関連してTraugott(1995、2003)が提唱した仮説である。Traugott(2003:124)によると「主観化」とは、「命題に対する話し手の主観的態度が、次第に表現の意味に取り入れられていく語用論・意味論的なプロセス」である。これに対して「間主観化」とは、「意味が話し手だけでなく、聞き手も含めた、より聞き手目当ての用法として変わっていくメカニズムTraugott(2003:129)」のことを指す(原文は英語。日本語訳は筆者による⁵⁾)。さらに、Traugott(2003)はこれらの2つの概念は、(7)のように主観的な意味を表すものから、間主観的な意味を表す方向へ進んでいき、その逆の現象は起こらないという「一方向性の仮説(unidirectional hypothesis)」を提示している。

(7)非主観的(non-subjective)>主観的(subjective)>間主観的(intersubjective) (ibid, p.134)

それでは、本研究で研究対象としている「のだ」と「것이다」の対照分析において、「主観化」「間主観化」という概念はどのように応用できるものであろうか。次節ではこの点について、これまでの日韓対照研究の研究成果を踏まえつつ、(7)の仮説に照らして詳しく論じる。

4. 日韓語の対照分析と考察

1節でも述べたように、従来の先行研究において「のだ」と「것이다」は先行文(脈)に対する原

5) 日本語訳は筆者による。原文は次のとおりである。「Subjectification refers to the semantic-pragmatic change in which “meanings tend to become increasingly based in SP/W’s (speaker/writer: KH)subjective belief state or attitude toward what is being said and how it is being said.”(Traugott 2003: 124) Intersubjectification, in turn, refers to “a mechanism whereby meanings become more centered on the addressee.”(ibid:129)。」

また、ここで「間主観化」という用語の訳について一言断っておく。「間主観化」という用語の不自然さについて発表の当時、フロアの方から指摘をいただいたが、この用語の訳は筆者が任意的に付けたものではなく、少なくとも日本国内の言語学分野においては一般的に通用されているものである(詳細は池上・守屋2009:17、堀江2008:36-41、鈴木2007:43などを参考)。韓国国内においては「相互主観化」といった韓国語訳が使われているようである(이성하教授との私信)。

因や理由などを後続文で提示する、「(広義の)説明・関連付け」を表す機能を持っている(印2003、崔2005、金2007など)。以下の例を参照されたい。

(8)-(8')は女の主人公が、久しぶりに彼女の目の前に現れた元彼に遭遇した驚きを表出している場面で、彼の存在を再確認、再認識する際に「のだ」と「것이다」が用いられる。

(8)그가 믿을 수 없는 표정으로(略)나를 바라보았다.(略)울음이 나올 것 같기도 하고 동시에 웃음이 터져 나올 것 같기도 했다. 나는 더욱더 자연스러워 지고 굳어지고 있었다. (略)그가 왔다. 그가 정말로 내 앞에 나타난 것이다.

(8')彼が信じられない表情で(略)私を見つめた。(略)泣きたいようで、それでいて笑いがこみ上げてきそうで、わたしは一層ぎこちなく固まっていく。私はさらに不自然になり、硬くなっていた(略)彼が来た。彼が本当に私の前に現れたのだ。」 【사】

(9)-(9')では、義理の母(「명자」)が自分の置かれた不幸な状況に対して、その原因を自分自身の過ちのせいであることと関連づけている場面で両形式が共起している。

(9)민철: 다시... 다시 한번만 말씀해 주세요. 선재, 정말 아버지 아들입니까?

명자: 미안하다. 너한테도 민지한테도 내가 너무 못할 짓을 했어. 잘못했다.(略)

민철:

명자: 내가 너무 욕심이 컸어. 선재 친아들처럼 키워주겠다는 니 아버지 말이 고마워서, 내가 그만 부리지 말아야 할 욕심을 부렸다. 그래서 내가 이렇게 벌을 받는 거야!

(9')민치올: 「もう…、もう一度言ってください。ソングェ、本当に父さんの息子じゃないんですか?」

ミョンジャ: 「ごめんなさい。あなたにもミンジにも、とても悪いことをしたわ。間違ってた。(略)」

ミンチオル: 「...」

ミョンジャ: 私が欲張りすぎたのね。ソングェを実の息子のように育ててやるというあなたの父さんの言葉がとても有り難くて、私がつい、欲張ってはいけないことを欲張ってしまったのね。だから私はこうして罰を受けているんだわ。」 【아】

また、(10)-(10')は男性主人公から、病院に倒れている彼のおじいさんのために、彼の妹のふりをしてほしいと提案された「ユリン」が、それを引き受けるべきかどうか、迷っているシーンである。彼女がこれからどうするかについて悩んだすえにくだした判断を、独り言で述べている文脈で、両形式が使用されている。

(10)유린: 내 돈! 그래 내가 잃을 게 뭐 있어? 한번 해 보는 거야. 【마】

(10')ユリン: 「私のお金! (私が) 失うものなんてないわ。一度やってみるのよ。」

本研究では(8-8')~(10-10')に見られるような「のだ」と「것이다」の用法を、「話し手(書き手)」の命題に対する認識や判断にかかわる「主観性(subjectivity)」を指標するものとして捉えることが可能と考える。その点ではKim and Horie(2009)で指摘されているように両形式は「主観化」を体現していると言える。しかし、次の例の場合はどうであろうか。(11)~(13)は目の前の状況を認識したり、それを根拠に過去の既事態に関して判断(推論)する例例であるが、「것이다」の使用は不自然であることが分かる(例(11')と(12))。ここで(13)について補足すると、仮に話し手が電気のスイッチの操作方法がわからず、引っ張ったり、押ししたりする動作を繰り返しているうち、「押したら電気が付く」ということをはじめて認識した状況において、「引っ張る」のではなく「押す」という、対比となる2つの動作が明示されている例(13'b)であれば「것이다」の使用は可能となる。

よって、Kim and Horie(2009)の主張のように、両形式は「主観化」が起こっていることは言えるが、「것이다」は「主観化」の過程の中においても「のだ」に比べて制限があることが確認できる。

(11) (濡れている地面を見て)昨日、雨降ったんだ。

(11')? 어제 비가 온 것이다/거야.

(12)오늘도 애가 안 들어 올라나 보다. 일이 많은가 보지. 【루】

(12')あの子、今日も帰らないわね。きっと忙しいのね。

(13) そうか、このスイッチを押すんだ。(野田1997:89)

(13')? a. 그렇구나. 이 스위치를 누르는 것이다/거다.

b. 그렇구나. 이 스위치를 당기는 게 아니라, 누르는 거다/거구나.

「そうか、スイッチを引っ張るのではなく、押すんだ。」

次に「間主観化」について考察する。Kim and Horie(2009:284)では日本語の「のだ」文がいわゆる「前置きの」な用法において「んですが...」の形で慣用的に用いられているのに対して、韓国語の「것이다」にはそのような機能がなく、日本語の「のだ」の方が「間主観化」への志向性が高いことを主張している(例(14)-(14'))。

(14)お願いがあるんですが..

(14')*부탁이 있는 것인데요.. (Kim and Horie2009:284;原文はローマ字表記。)

しかし、韓国語の「것이다」には話し手の聞き手に対する注意、働きかけなどを表す「間主観性(intersubjectivity)」を体現している例が見られないわけではない。例えば(14)-(14')のような「前置きの」な用法に関しても、韓国語では(15)、(16)のように「従属節」で理由を述べ、「主節」を

6) 金 (2009)ではこのような「のだ」の用法を「証拠性表現(evidential)」として位置づけている。

限定するような複文構造になっていれば、「것이다」は使用可能である。

(15)궁금해서 물어 보는 건데요... 【루】

(16)그냥 혹시나 해서 말씀 드리는 건데요... 7)

また、日本語の「のだ」は談話の場における、聞き手への助言・教示を表す用法がある(例17)。(17)のような用法に関して野田(1997:101)は、「のだ」文は「子供に対して一般常識をいいきかせるような場合に用いられるとし、話し手だけではなく一般的に定まっていることを示す場合に用いられやすい」と述べているが、韓国語の「것이다」にも同様な機能が観察できる(例(18)と(19)-(19'))。

(17)「ジロー君、車に気をつけるのよ」 (野田1997:101)

(18)밥 먹을 때는 “잘 먹겠습니다.” 하고 인사를 하는 거야.

(19)宮崎君は、家にあがるとき、靴をはいたまま、畳にあがろうとしたから、みんなは「靴をぬぐの!」と大騒ぎで教えてあげた。(略)みんなは、口々に、(略)「九品仏のお寺の、お庭はいいけど、本堂はぬぐの!」と教えてあげた。 【토】

(19') 그런데 미야자키가 현관으로 들어서면서 신발도 벗지 않은 채 다다미 방으로 들어가려고 하자, 아이들은 “신발을 벗는 거야!”라며 야단스럽게 떠들며 가르쳐 주었다。(略) 그러자 아이들은 제각각(略) “구혼부츠 절에서도 마당에선 괜찮지만 본당에선 벗는 거야!”라며 가르쳐 주었다。

これまでの両形式の対比に基づくと、「のだ」と「것이다」は「間主観化」への過程を遂げている点で共通性を見せる。しかし、以下に示す両言語の例を観察すると、「間主観化」において相違が見られる。例えば、「のだ」は(20)~(22)のように「話し手」と「聞き手」の談話のやりとりが行われている「いま・ここ」の談話の場において、「話し手」が「聞き手」に対して、ある行動の遂行を促す際に用いられる。

(20)いい加減にあきらめるんだ! (益岡2007:223)

(21)働け、働け、働くんだ! 永尾完治! (野田1997:101)

(22)お座り、座れ!座るんだ! (田野村1990:24)

ここで今一つ興味深い現象は(20)~(22)に見られるような「のだ」文の用法が「것이다」では見られないということである。具体例を(23)-(23')と(24)-(24')に示す。

7) <<http://tvzonebbs6.media.daum.net>>より検索。

(23) <主人公ビョンテとクラスメートのソクテとの会話>

그가 눈으로 내가 닦은 창틀을 훑어보는 동안 나는 가슴을 두근거리며 결과를 기다렸다.(略) 그런데 결과는 뜻밖이었다. “안 되겠는데. 여기 얼룩이 그대로 있어. 다시 닦아.” (略) 나는(略) 한참을 기다리다가(略) 검사 말으러 왔음을 알렸다. 그러나 결과는 마찬가지로였다. “여기 아직 파리똥이 그대로 있잖아? 이 구석 먼지하고 다시 닦아.” 【영】

(23') 彼が私の磨いた窓を目でなめるように見ている間、私は、胸をドキドキさせながら結果を待った。(略)ところが結果は意外なものだった。「だめだな、ここに斑がそのまま残っているから、もう一度磨くんだ。」(略)わたしは(略)しばらく待っていたが、(略)近づいて検査を受けに来たことを知らせた。(略)しかし結果は同じだった。「ここに蠅の糞がそのまま残ってるじゃないか。この隅の埃と一緒に、もう一度拭くんだ。」

(24) <A: チュワン、B: チオ、C: チェオク>

A: 종사관 나오리... 제가 잘못했습니다. 이 아이는 지가 하고 싶어서 한 것이 아니고...

B: 냉큼 무릎을 꿇지 못할까...!

A: 그래 채옥아... 빌어라... 빌어...

C: 빌지 못하겠습니다. 무릎 꿇고 빌 만한 죄가 아니라 생각합니다. 【다】

(24) A: 従事官殿、悪いのは私です。この子(チェオク)は自分がやりたくてやったのではなく...

B: さっさとひざまげ。

A: チェオク。謝れ、謝れ、謝るんだ。

C: 謝ることはできません。ひざまずいて謝るほどの罪ではないと思います。

(23)の韓国語においては、2回とも動詞「닦다」の直接命令形である、「닦아」が使用されているのに対して、日本語では(23')のように「磨くんだ」「拭くんだ」のように、「のだ」文で表されている。この場合、日本語においても「もう一度磨け」のように、「動詞の命令形」⁸⁾を使用して表すことは可能であると思われる。しかし、韓国語では(23')のような「짓이다」を用いた表現では、談話の場における聞き手に「再度窓を拭くこと」を仕向けるための「働きかけ・命令」の意味を現すことはできない、という制約が見られる。上記の(24)-(24')についても同様のことが言える。

* (23') 다시 닦는 거야! 「もう一度磨くんだ!」

さらに、日本語には明らかに「聞き手」への志向性を反映する例が多く見られる。例えば日本語では(25)、(26)のように、「話し手」にとっては既知の事柄(事態)を、「聞き手」に伝える際に用い

8) 両言語において「命令」を表す言い方について、「のだ」を用いる方法以外にも、「さっさと行く、行け、行くこと!」など、動詞の非完了形、命令形などを用いることも可能であることが多くの先行研究において指摘されている(田野村1990、名嶋2007など)。しかし、本研究は日韓両言語の「命令文」を比較するものではないため、日本語における「のだ」文以外の命令文との異同、及びその使い方に関する詳細については議論しない。

られる。これに対する韓国語の用例(25')、(26')から分かるように、「것이다」の使用は容認されにくく、言い切りの「裸の終止形」が用いられた方が自然である。一方で、日本語ではむしろ「のだ」の不使用が文の不自然さへ影響するという、両言語間での顕著な対比が観察される。

(25) <A: 船頭、B: 両班の会話>

A: 어서 오르시오! (사내 막 타려는 순간, 갓 쓴 양반 하나가 얼른 배에 올라탄다.)

B: 뭇들 그리 보느냐! 나 또한 급한 볼 일이 있다. 아픈 아이야 한 사람이 따라가 보살피면 될 거 아닌가?

A: 나으리 그래도 저 이들은 나으리께 자리를 양보한 게 아니라..

B: 네 이놈! 나도 촌각을 다투는 볼 일이 있다 하지 않느냐..

(25')A: 「早く乗ってください。」

(男が乗ろうとした瞬間、笠をかぶった両班が一人、素早く船に乗る。)

B: 「何をそんなに見ている。私も急用があるのだ。子供の付き添いなら一人で十分ではないか」

A: 旦那様。あの方たちは旦那様に席を譲ったのではなくて....

B: こいつ。私も急用があると云ったはずだ。 【다】

(26)高橋君は、(略)両手を振りながら、もっと急いだ。そしてドアのところに着くと、「君は速いな」といった。それから、「僕、大阪から来たんだ」といった。

(26') 다카하시는 양손을 앞뒤로 흔들면서 더욱 서둘렀다. 그리하여 문 앞에 도착하자, “너 정말 빠르구나!”하고 말했다. 그리고 나서 이렇게 덧붙였다.

“난 오사카에서 왔어.” ((3)-(3')の再掲)

これより韓国語の「것이다」にも談話の場において、「話し手」の「聞き手」に対する、働きかけ、注意、といった「間主観的」な意味を表す用法が観察できないわけではないが、「것이다」は「のだ」に比べて制約が見られることが分かった。

以上、本研究では、Traugott(2003)が提案している「主観化」から「間主観化」への仮説を応用して「のだ」と「것이다」の意味変化の過程に関する対比を行った。その結果を図1のようにまとめる。

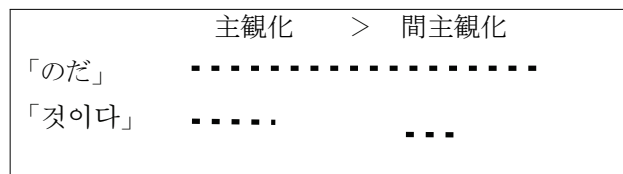


図1. 両形式の意味変化の進度の違い

図1のように「のだ」は「主観化」から「間主観化」への両方の過程において、偏りなく意味変

化が進んでいるのに対して、「것이다」の場合は、「主観化」「間主観化」それぞれの過程を遂げてはいるものの、両方において「のだ」に比べて、意味変化に制約と偏りが見られることが分かった。したがって本研究では「両形式が「主観性」を体現している点では共通するが、「のだ」の方が「間主観性」への志向性が高い」というKim and Horie(2009)の主張に対して、(27)のように修正を加えることを提案する。

(27)本研究の提案：両形式ともにTraugott(2003)による、(7)の「主観化」から「間主観化」への意味変化の仮説に合致する。ただし、「のだ」は両方の過程において意味変化が進んでいるのに対して、「것이다」は「主観化」においても、「間主観化」においても、「のだ」に比べてそれぞれ意味変化の進度に偏りと制約が見られる。

5. 終わりに

本研究では日本語の「のだ」文とそれに対応する韓国語の形式「것이다」を取り上げ、両形式を文法化における意味変化のメカニズムを応用して考察した。その結果、両形式は「主観化」から「間主観化」への過程を遂げている点では共通するが、「것이다」は「主観化」「間主観化」の両方において、「のだ」に比べて意味変化に制約が見られることが分かった。

本研究を通して、両形式の類似点と相違点に関する指摘に留まっていた従来の日韓対照研究に対して、新たな理論的な分析を与えることができたと考える。また、文法化の研究の視点から考えた場合、同じ膠着言語型に属し、形態・統語的に類似している日韓両言語においても、文法化の進度の度合いにおいて微妙な相違が見られることが確認できた。

◀ 参考文献 ▶

- 池上嘉彦・守屋三千代(2009)『自然な日本語を教えるために－認知言語学をふまえて－』.ひつじ書房.
 李南姫(2001)「現代日本語の「のだ」文の総合的研究」.大東文化大学大学院博士論文.
 印省熙(2003)「日本語の「のだ」と韓国語「-ㄴ. 것이다」の対照研究」.お茶の水大学大学院博士論文.
 大竹芳夫(2009)『「の(だ)」に対応する英語の構文」.くろしお出版.
 大堀壽夫(2005)「日本語の文法化研究にあたって－概観と理論的課題－」.『日本語の研究』.第1巻3号.日本語学会, p.1-17.
 金廷珉(2007)「日韓語の名詞化の談話・語用論的機能に関する対照言語学的研究－「のだ」と「것이다(KES-ITA)を中心に－」.東北大学大学院博士論文.
 _____(2009)「推論を表す「のだ」文の特徴」『韓国日本学会(KAJA)第78回国際学術大会Proceedings』,韓国日本学会,p.23-26.
 近藤安月子(2007)「日本語教育から見た日本語学」.『日本語学』.26巻3号.明治書院,p.62-70.
 杉村博文(1982)「「是...的」－中国語の「のだ」の文－」.『外国語との対照III』.講座日本語学12.寺村秀夫他(編).明治書院,p.155-172.
 鈴木亮子(2007)「他人の発話を引用する形式－話し言葉の通時的分析」.『言語』Vol.36, No.3,大修館書店,p.36-43.

- 砂川有里子(2005) 『文法と談話の接点 - 日本語の談話における主題展開機能の研究-』. くろしお出版.
- 宋承姫(2000) 「日本語の「もの(だ)」「こと(だ)」「の(だ)」と韓国語の「것이다geosida」に関する対照研究」. 広島大学育学大学院博士論文.
- 田野村忠温(1990) 『現代日本語の文法 I - 「のだ」の意味と用法-』. 和泉書院.
- 崔眞姫(2005) 「「のだ」の文法化と機能別必須性に関する研究」. 神戸大学大学院博士論文.
- 角田三枝(2004) 『日本語の節・文の連接とモダリティ』. くろしお出版.
- 名嶋義直(2007) 『ノダの意味・機能 - 関連性理論の観点から-』. 日本語研究叢書19. くろしお出版.
- ナロック・ハイコ (2005) 「日本語の文法化の形態的側面」. 『日本語の研究』. 第1巻3号. 日本語学会, p.108-120.
- 野田春美(1997) 『「(の)だ」の機能』. 日本語研究叢書9. くろしお出版.
- 福嶋孝隆(1994) 「「のだ」とes que」. 『国立國語研究所報告 108 日本語とスペイン語(1)』. くろしお出版.
- 藤城浩子(2007) 「ノダによる「強調」と「やわらげ」の内実」. 『日本語文法』7巻2号. くろしお出版, p.171-187.
- 堀江薫(2004) 「談話と認知」. 『認知文法論II』. 中村芳久(編). 大修館書店, p.247-278.
- _____ (2008) 「間主観化」. 『言語』Vol.35, No.5 大修館書店, p.36-41.
- 堀江薫・プラシヤントパルデン(2009) 『言語のタイポロジー』 講座認知言語学のフロンティア山梨正明(編). 研究社.
- 益岡隆志(2007) 『日本語モダリティ探究』. くろしお出版.
- Brown, Gillian. & George, Yule. 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hopper, Paul J. and Traugott, Elizabeth Closs. 2003. *Grammaticalization Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kim, Jungmin, and Kaoru Horie. 2009. Intersubjectification and Textual Functions of Japanese *Noda* and Korean *Kes-ita*, Takubo, Yukinori et al(eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 16, Stanford: CSLI, p.279-288.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1995. Subjectification in Grammaticalization. In: Dieter Stein and Susan Wright(eds.) *Subjectivity and Subjectivization in Language*, Cambridge: Cambridge University Press, p.31-54.
- Traugott, Elizabeth Closs. 2003. From Subjectification to Intersubjectification. In: Hicky, Raymond(ed.) *Motives for Language Change*. Cambridge, Cambridge: Cambridge University Press, p.124-139.

【用例の出典の詳細】(【 】は略語)

<ドラマデータ> 1~2については以下の対訳集を用い、3~5については筆者が直接該当例文を手作業で拾った。

1. 다모→【다】, 『チェオクの剣 シナリオデータ集』根本利恵(訳). キネマ旬報社.
 2. 아름다운 날들→【아】, 『美しき日々シナリオデータ集』金井孝利(訳). キネマ旬報社.
 3. 마이걸 (マイガール) →【마】 4. 루루 공주 (ルル姫) →【루】 5. 파리의 연인 (パリの恋人) →【파】
- <小説データ> 사랑 후에 오는 것들→【사】, 9살 인생→【9살】, 우리들의 일그러진 영웅→【영】, 울 준비는 되어 있다→【울】, 창가의 토토→【토】

作品名	著者	出版社	翻訳書	訳者	出版社
사랑 후에 오는 것들	공지영	소담	愛のあとにくるもの	김훈아	幻冬舎
愛のあとにくるもの	辻人成	幻冬舎	사랑 후에 오는 것들	김훈아	소담
9살 인생	위기철	청년사	9歳の人生	清水由希子	河出書房新社
우리들의 일그러진 영웅	이문열	민음사	われらの歪んだ英雄	藤本敏和	情報センタ出版局
号泣する準備はできていた	江國香織	新潮社	울 준비는 되어 있다	김난주	소담
窓際のトットちゃん	黒柳徹子	講談社	창가의 토토	김난주	프로메테우스

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

話しことばにおける韓日の「呼びかけ」表現の対照的考察

— 相手を指し示す表現を中心に —

羅福順*・長谷川香摘**

naboksoon@pufs.ac.kr・kadumi76@yahoo.co.jp

<要 旨>

本稿では、韓国と日本の小説と映画、それらの対訳などを用い、話しことばにおける名前などの呼びかけおよび共起する表現を調査し、どのような状況や発話内容において、韓日それぞれの呼びかけの特徴が見られるかについて分析を行った。小説資料の項では、原作に忠実に訳されることの多い翻訳作品の発話のうち、日韓で特に違いが見られた呼びかけの用例を抜き出し、原作と翻訳を対照的に提示、分析した。使用言語別の用例件数は、日本語（原作および訳）が韓国語（原作および訳）に比べわずかに多く、韓国語と日本語の呼びかけ使用の差異が、その訳出に影響していることが確認できた。

まず、小説資料において、日本語の原作にある呼びかけが韓国語に訳出されていない例では、日本語で非難や不満の意を表すときの「おまえ」、待遇性の低い発話と共に出現する「あなた」や「先生」などが、韓国語に訳出されていなかった。この傾向は、韓日の呼びかけの用法の差と、等級（敬語の観点からの）に関する差によるものと考えられる。また、韓国語の原作にはない呼びかけが、日本語訳に追加されている用例の多くは、展開中の話題を遮ったり、話の流れを変えたりする働きを持つものであった。それらの呼びかけにより、聞き手を自己の側へ強く引き寄せ、伝達しようとする内容や訴えようとする内容について、確実な認識と理解を促そうとするような状況で見られた。また、それらの多くは、すべて話し始めに訳出が加えられていた。

映画資料の分析の項では、韓日の呼びかけの出現位置および頻度において、それぞれの傾向が確認できた。韓国語の発話では、前方、後方のいずれの位置においても、呼びかけが用いられる傾向が見られた。日本語の発話では、全体として話し始めに呼びかけることが多く、また、あえて呼びかけることなく話を進める場面も見られた。話し始め以外の位置で呼びかけが認められる場合、感情の起伏が伴う傾向が見られた。

キーワード： 呼びかけ、話しことば、韓日対照、小説、映画

1. はじめに

話しことばでは、韓国語、日本語のいずれにおいても、自己に注意を向けさせる場合などに、名前や職業名などで相手に呼びかけることがある。どのような表現で呼びかけるかにより、話し手と聞き手の社会的関係や、聞き手に対する話し手の心的態度が明らかになる。そのため、名前などの呼びかけは、単なる注目要求の手段としての要素にとどまらず、待遇表現の重要な要素として、これまでさまざまな研究がなされてきた。特に、家庭内や職場内、学校内など、ある程度の固定的な関係や役割が存在するような状況において、どのような呼びかけが行われているかについては、鈴木（1973）などをはじめとする対称詞の研究として、多くのことが指摘されてきた。それらの研究は、主に、呼ぶ側と呼ばれる側の一定の関係において、どのような呼び名が選択されるかについて述べたものであり、研究者の観察に基づく記述のほか、質問紙を用いた意識調査の結果を分析したもの

* 釜山外国語大学 日本語学部 講義担当専任

** 明海大学 別科日本語研修課程 専任講師

などが見られる。そのほかには、小説の会話部分を抜き出した資料による調査なども行われ、翻訳作品とその原作の呼びかけを、対照的に分析する研究なども見られる。それらもまた、分析の中心は、いずれも呼びかけの表現形式自体や待遇性に焦点を当てたものと言える。

韓国語でも日本語と同じく、呼びかけが待遇性の重要な決定要素であるため、名前や役職名、親族名称などの呼称のほか、名詞や代名詞、さらに動詞に關係する文法範疇としての人称詞の研究が数多くなされている。このような呼称や人称詞自体の研究のほとんどが、どのような人間関係でどのような呼びかけが使われるかなど、その表現形式の選択に関する研究である。

韓日の呼びかけは、さまざまな観点から比較、対照がなされてきたが、表現形式や待遇性のみならず、出現の位置や用いられる場面、状況までを含めた傾向については、まだ十分に把握されていない。呼びかけの出現位置に着目し、使用状況および共起する発話内容に目を向けることで、韓日両言語における呼びかけの姿を、より具体的に明らかにすることが可能となろう。それが待遇性を含む呼びかけのより適切な使用を促し、対人コミュニケーションを円滑に保つ方法のひとつとなろう。さらに、異文化間の交流においては、呼びかけを適切に用いることにより、各言語間に存在する呼びかけの用法の違いが引き起こす誤解や摩擦を、相互に回避することにつながるとも言えよう。このような目的から、本稿では、韓日の呼びかけの使用のうち、明らかな相違点が見られる例について特に焦点を当て、位置的な分類に基づき、呼びかけの使用状況や発話内容の傾向を、対照的に分析していく。

2. 研究対象及び方法

本稿では、名前や地位役職名などによる呼びかけ（以下「呼びかけ」とする）と共起する表現について調査し、どのような状況や発話内容において、名前などの呼びかけが認められるかについて分析を行う。単に聞き手を限定するための呼びかけではなく、さまざまな人間関係や状況を観察するのに適した題材として、小説および映画の発話を調査の対象とする。

なお、注目要求のための表現「おい」「ちょっと」や、相手を指し示す表現以外の要素を伴う「このヤロー」などは、名前などの呼びかけには含まれないと見なし、本稿では特に言及しない。

調査対象となる小説（表1参照）は、韓国語の小説2作品とその日本語訳、および日本語の小説2作品とその韓国語訳の、計8作品とする。各作品の会話部分（「」内に示されている部分）をエクセルのデータにまとめ、原作と対訳に認められる呼びかけの件数および傾向を分析する。

小説資料に加え、映画（表5参照）の発話についても調査を行う。対象となる映画2本は、韓国の作品と、それをもとに日本でリメイクされた作品である。両作品は、異なる言語文化に見られる別々の作品として、それぞれ独立した存在でありながら、場面設定や登場人物の關係などに共通する部分が非常に多い。そのため、類似した状況における呼びかけ使用の比較対照調査には、大変有用と言えよう。これらの発話についても文字化を行い、韓日の呼びかけに見られる特徴を対照して

いく。

小説、映画のいずれの場合も、登場人物の役柄を演出するためや場面の脚色などのために、呼びかけが用いられることが考えられる。それらについても十分考慮に入れた上で、分析を行っていく。

なお、本論では、呼びかけの使用状況を分類する際、便宜上、出現位置による分類を行う。呼びかけは、話しことばにおいてさまざまな位置に出現すると考えられる。まず、相手の注意を自己に向けるためや、複数の人の中から誰かを特定する場合などに、呼びかけを用いてから話を始めることが考えられる。あるいは、「ねえ」「ちょっと」などの表現に続けて、名前などを呼びかける場合も考えられよう。本論ではそれらを「前方（の呼びかけ）」とする。また、「前方」以外の位置に認められる、発話の途中や発話末に見られる用例は、「後方（の呼びかけ）」とする。位置の違いがそのまま用法や状況の違いと一致するということではないが、ある程度の類似傾向を見出すことが可能であろう。

位置的な観点からの分析のほか、特筆すべき傾向が見られる用例についても、具体的な発話例を提示し、その特徴について触れていく。

3. 分析結果

3.1 小説資料の呼びかけ

3.1.1 小説にみられる呼びかけの概要

まず、韓日それぞれの小説の原作と翻訳に認められた、呼びかけの用例957件について、出現位置により分類した結果を以下に示す。

<表1> 小説8作品における呼びかけ 出現位置別分類の概要

No.	作品名	使用言語	出現位置及び件数(%)		合計件数
			前方	後方	
1	아버지 (原作)	韓国語	122(94.5%)	7(5.4%)	129
2	아보지 (作品No.1の翻訳)	日本語	129(94.8%)	7(5.2%)	136
3	쉬리 (原作)	韓国語	67(77.0%)	20(22.9%)	87
4	슈리 (作品No.3の翻訳)	日本語	67(77.0%)	20(22.9%)	87
5	ラブ & ポップ (原作)	日本語	27(79.4%)	7(20.5%)	34
6	리브&팝 (作品No.5の翻訳)	韓国語	27(79.4%)	7(20.5%)	34
7	天国までの百マイル (原作)	日本語	142(61.7%)	88(38.2%)	230
8	천국까지100마일(作品No.6の翻訳)	韓国語	138(62.7%)	82(37.2%)	220
計			719(75.1%)	238(24.8%)	957(100%)

作品により差が見られるものの、8作品の平均では75%の呼びかけが前方に出現している。8作品中、呼びかけが顕著に現れた作品は、日本の小説『天国までの百マイル』（作品No.7）とその韓

国語訳（作品No.8）であり、いずれも用例の合計件数は200件を上回っている。これらの作品は、他の作品よりも発話総数が多いため、それが呼びかけの件数の多さと関連していると考えられる。また、この傾向は、作品No.7およびNo.8の中心的な登場人物の話し方の特徴が、用例件数に影響を与えた結果とも言えよう。この作品に見られる特徴として、他者に対して自己を強く示す傾向のある話者の発話に、呼びかけが多数出現する点が挙げられる。また、主に家族や恋人、友人の間でのやりとりが多く、遠慮のない発話が許されるような、非常に親しい間柄での会話が中心となっている点も特徴と言える。この作品No.7に出現する呼びかけの多くが、その翻訳作品No.8にも忠実に訳出されている。しかし、訳出されない例もいくつか存在し、韓国語と日本語の呼びかけ使用の差異が、それらの訳出に反映されていると考えられる。この点については、以下の3.1.4および3.1.5において、再度触れることとする。

次に、韓国語と日本語の、原作と翻訳それぞれの件数をまとめ、以下の表2、表3に示す。

<表2> 韓国語の原作とその日本語訳に見られる呼びかけ

	韓国語原作 (作品No.1+No.3)		日本語訳 (作品No.2+No.4)	
	前方	後方	前方	後方
出現位置				
件数	189	27	196	27
増減	-	-	+7	0
合計	216		223	

（「増減」は韓国語の原作を基準にした日本語訳との件数差）

<表3> 日本語の原作とその韓国語訳に見られる呼びかけ

	日本語原作 (作品No5+No.7)		韓国語訳 (作品No6+No.8)	
	前方	後方	前方	後方
出現位置				
件数	169	95	165	89
増減	-	-	-4	-6
合計	264		254	

（「増減」は日本語の原作を基準にした韓国語訳との件数差）

表2を見ると、韓国語の原作にはない呼びかけの用例が、日本語訳に7件あることが確認できる。また、表3では、日本語の原作にある呼びかけが韓国語に訳されていない例が、前方および後方を合わせて10件認められる。これらを使用言語ごとの件数にまとめると、表4ようになる。

<表4> 呼びかけの使用言語別分類

	韓国語（原作+翻訳）		日本語（原作+翻訳）		韓国語に対する日本語の増減	
	前方	後方	前方	後方	前方	後方
出現位置						
件数	354	116	365	122	+11	+6
合計	470		487		+17	

使用言語ごとの件数では、日本語（原作および翻訳）が韓国語（原作および翻訳）を17件上回っている。これらの増減は、どのような状況で認められるのであろうか。そのような増減が見られる個所において、韓日両言語の特色や両者の差異が確認できるのではなかろうか。以下では、まず、呼びかけの概要を位置別に示し、続けて韓日の呼びかけ増減の具体的な用例を確認していく。

3.1.2 前方に見られる呼びかけの用例

まず、前方に見られる呼びかけの例を以下に示す。各例文の後の< >内は、作品名の略とデータ番号である。

- 1) 安男：おい、野田。→ 어이, 노다군. <百 47>
- 2) 安男：ねえさん、おふくろが入院してるのは、知ってるよね。→ 형수님, 어머니가 입원하신 것은 알고 계시겠지요. <百 520>
- 3) 友達：なお、ケイタイ買ったの？→ 나오, 핸드폰 샀니? <ラ 61>
- 4) 部下：書記官님, 어디 불편하세요? → 書記官, 도록이나 사셨습니까? <ア 473>
- 5) 同僚：유실장, 네가 앞장 서. → 柳室長,先去行ってくれ. <シュ 175>
- 6) 上司：임마! 너 지금 제 정신이야? → 오매, 기는 확카까. <シュ 931>

以上のように、前方の用例には、注目要求や聞き手を限定する状況で、呼びかけが用いられる例が多く含まれる。呼びかけに続き、確認、問い、依頼などの内容を述べる発話が見られる。

3.1.3 後方に見られる呼びかけの用例

次の例は、後方に分類した呼びかけの例である。

- 7) 姉：黙って聞きなさいよ、秀ちゃん。→ 좀 들어봐라, 히테오. <百 996>
- 8) 安男：死ぬなよ、おかあちゃん。→ 죽지마세요, 어머니. <百 2120>
- 9) 安男：悪いね、片山さん。→ 미안하네, 카타야마. <百 1969>
- 10) ジョンス：그래... 소령아... → わかったよ、소령! <ア 2611>
- 11) 朴：말조심해라, 유중원! → 口を慎めよ、柳重遠 <シュ 2119>
- 12) 朴：그렇습니다, 군단장님! → はい、そうです。軍団長 <シュ 41>

上に挙げた例では、自己の要求や願望、感謝、承認、怒り、非難など、聞き手に強く伝達しようとする内容と共に、呼びかけを用いる状況が認められる。また、例13のように、敬意表明として社会的に呼びかけを用いる例も見られる。

3.1.4 日本語の原作にある呼びかけが韓国語に訳出されない例

次の例は、日本語の原作にある呼びかけが、韓国語に訳出されていない例である。すべて『天国までの百マイル』（作品No.7）で10件見られる。この作品は、バブル崩壊後、経営していた会社が倒産し、妻子とも別れて友達の会社で世話になっている中年男性、城所安男(40代)が、心臓病を患っている母の命を救うため、天才的な心臓外科医がいる病院をめざし、百マイルをひたすら進む中で、家族や恋人との間に起こるさまざまな人間模様を描いた小説である。

下の例(13)は、主人公である安男と、高校の同級生で弁護士である野田との対話である。以前、野田は安男の離婚調停をしたが、生活に困った安男は野田を再び訪ね、別れた家族への毎月の仕送り額を減らす調停を依頼する。ところが、野田はそんな安男を非難するという場面である。

13) 野田：なあ、城所。おまえ会社つぶしたとき、どこかにカネ隠したろう。

이봐, 키도코로. 회사망했을 때, 돈을 숨겨놓았던거지?

安男：冗談はよせ。농담은 그만하게.

(怒りを押し殺しながら、安男はようやく言った。) [中略]

野田：じゃあこの四ヶ月、おまえどうやって生きてたんだよ。アパートの家賃だっておまえ、六畳一間にお勝手がついてりゃ三万や四万はするだろ。 <百 82>

→ 그럼 4개월 동안 어떻게 살았다는 거지? 아파트 방세만 해도 말야, 단칸방이라도 3, 4만 엔은 하지.

日本語の原作では、「おまえ」という呼びかけを使うことで、相手により強く迫ろうとする話者の心理状態が表れていると思われる。しかし、呼びかけとしては韓国語に訳出されていない。韓国語には、日本語の「おまえ」にあたる、同等または目下を指す「너」または「자네」という2人称があるが、「아파트 방세만 해도 말야 (アパートの家賃だつて)」と「단칸방이라도 3, 4만 엔은 하지 (六畳一間にお勝手がついてりゃ三万や四万はするだろ)」の間に、「너」または「자네」などの呼びかけを入れた場合、構文上、韓国語の文として不自然になり訳出が難しいため、文全体でそのモダリティを表していると考えられる。

次の例(14)は、母親の入院のことで、安男が兄に電話をかける場面で見られる。安男と兄の通話をそばで聞いていた兄嫁は、二人の会話に割り込むように、受話器の向こうの安男に話しかける。

14) 兄嫁：ちよつと、ヤッチャン。あなた、いいかげんにしてよ。 <百 573>

おかあさんのことですか？ そんなうまいこと言って、どうせまた借金にくるつもりでしょう。

→ 이봐요, 서방님. 좀 적당히 하세요. 어머니 일이라구요? 그렇게 얼렁뚱땅 핑계 대고 어차피 또 돈 꾸러 올 생각이겠죠.

兄：やめろよ。그만해.

兄嫁：だめよ、あなたはヤッチちゃんには甘いんだから。

안돼요, 당신은 서방님한테 너무 무르다니까.

日本語の「ヤッチちゃん」にあたる部分において、韓国語訳では相手を待遇する呼称として「서방님 (夫の既婚の弟に対する呼称)」で呼びかけた後、非難の意味を込めた「あなた」の韓国語訳を省略している。日本語では、愛称「やっちゃん」に続けて、直接的に相手を限定する「あなた」で呼びかけている。この「あなた」には、敬意は含まれていないと判断できる。しかし、韓国語においては、どんなに強い怒りを感じている場合でも、兄嫁が夫の弟に対し、敬意を含まない「너」や「당신」などを使うことは、待遇性の上で釣り合いが取れないと言える。そのため、「あなた」は韓国語に訳されず、文全体の内容で不満を表していると考えられる。

次の例15)は、安男の母親の担当医と、安男の兄との対話である。手術を勧めてくる医者に対し、安男の兄が批判的な口調で意見する場面である。

15) 医者：教授でも無理な手術を、成功させることのできるドクターがいます。

하루나 교수님에게도 무리인 수술을 성공시킬 수 있는 선생님이 계십니다.

兄：やめてくれよ、先生。それは、この大学病院の責任回避じゃないのか。

→ 관뒤요. 그건 이 대학병원의 책임회피 아니요? <百 914>

ここで使われている日本語の「先生」は、韓国語の「선생님」に比べ尊敬の意が強くなく、相手の職業や立場から選択された、単なる呼び名のひとつとして捉えられる。それは、兄の発話の丁寧度が非常に低いことから察することができよう。韓国語では、親愛や尊敬の意を込めて「선생님」を頻繁に用いるが、非難などの状況では、強い敬意を表す「선생님」は使いにくいことから、ここでは訳出がなされていないと考えられる。つまり、韓国語では、「관뒤요 (やめてくれよ)」と「선생님 (先生)」が、待遇性としてアンバランスになるため、訳出されていないのだと言えよう。

呼びかけの訳出がない例には、上記に見られる「おまえ」や「あなた」、「先生」などが省略される例のほか、次の例16) や例17) のように、文全体が訳出されない場合などもある。

16) 社長、日報は明日でいいですね。→ (翻訳なし) <百 1615>

17) 何を言われてもダメなものはダメだよ、秋元次長。→ (翻訳なし) <百 1663>

以上、日本語の原作にある呼びかけが、韓国語に訳出されていない例をいくつか確認した。

これらの例は、韓日の呼称の用法の差と、等級（敬語の観点からの）に関わる差を表していると考えられる。非難や不満の意味で使われる「おまえ」は、その呼称が持つ意味合いおよび構文において韓日で相違があることから、訳出がなされないと考えられる。また、非難する場面などに現れる「あなた」や「先生」においては、韓日の敬語の観点からの違いが見られた。特に、医者に向

けて使われる「先生」「선생님」の場合、韓日で待遇性の差異が明確に存在することが、呼びかけの用法の違いとして表出していた。

3.1.5 韓国語の原作にない呼びかけが日本語に訳出される例

次の例は、韓国語の原作にはない呼びかけが、日本語訳に追加されているものである。7件すべてが『アボジ』（作品No.2）で見られる。作品名である「アボジ」は「お父さん」という意味である。癌の宣告を受け、死を目前にした中年男性ハン・ジョンズが見せる家族愛を描いた物語である。主人公を取り巻く登場人物は、親友、家族、恋人などが中心で、私的な交流場面が多くある。

以下の例は、主人公男性（ジョンズ）が膵臓ガンにかかったという事実について、医者（ナムドクター）がなかなか告知できず、躊躇する場面で見られる。ジョンズとナムドクターは、親友である。

18) ジョンズ：왜? 검사결과 때문이야? どうしたんだよ。あつ、そうか検査結果が出たのか？

<남박사는 아무런 대꾸도 없이 주섬주섬 책상 위를 정리하고 있었다.

(しかし、ナムドクターはそれにこたえず、机の上のものをぎこちなく整理しだした)>

왜? 죽을병이야?

なんだよ、なんだよ、**お前**、まさか死ぬような病気でも見つかったってわけじゃねえだろうな。<ア22>

例18)での「お前」という呼びかけは、韓国語の原作にはないが、日本語訳には追加されている。韓国語「왜? 죽을병이야?」を直訳すると、「なんだよ、死ぬような病気なのか?」という疑問文の形である。日本語訳では「なんだよ、なんだよ」に続けて「おまえ」と呼び、さらに発話を続けている。不満や疑問、本音などを、相手に遠慮なく直接的にぶつけようとする心境で、呼びかけが用いられている。おそらくジョンズは、自己の検査結果に対して深刻な状況を想定していなかったと考えられよう。ところが、好ましくない検査結果を予感させるようなナムドクターの態度に、ジョンズは急に不安を覚え、動揺を隠せない様子を見せる。そして、真実を問い正そうと、ナムドクターに対し「おまえ」と強く迫ったと考えられる。

次の例は、作品1および作品2で見られる。数日前、酒に酔ったジウオンの父親が、果物屋の主人に文句をつけて喧嘩になった。ジウオンはそのような事実を知らないまま、その果物屋へ買い物に行く。果物屋の主人は、ジウオンがすべてを知っているものとして、思い出したように数日前の話始めるが、途中でジウオンが何も知らないことを知り、さりげなく話題を変えようと試みる場面である。

19) ジウオン：아저씨, 안녕하세요? おじさん, こんにちは。

果物屋：어, 그래. 지원이구나, 야, 우리 동네 자랑 지원이가 갈수록 예뻐지네. おつ、ジウオンじゃないか。いやあ、町内自慢のジウオンはますます可愛くなるね。

(중략) 그날 저녁에 아버지 별일 없었니?

(中略) あっ、そうそう。あの日、お父さんどうだった？

어, 모르는 모양이네. 그런데 왜 어머니는 요즘 통 안 오시지?

えっ、知らないのか……。ところで、お母さんはこの頃さっぱり見えないけど？

ジウオン：그게 무슨 말씀이세요? → **おじさん**、何のこと? <ア 498>

果物屋：으응...왜, 지난 금요일인가? 며칠 전 아버지가 술에 많이 취하셨던 날...う～ん……。ほら、先週の金曜日だっけ? お父さんがすごくお酒に酔っていた日あったでしょう……。

ジウオンは「おじさん、こんにちは」と日常的な挨拶を交わすが、父親のことについて尋ねてきた果物屋に「그게 무슨 말씀이세요? (それはいったい何のお話ですか)」と問いかける。日本語では、韓国語の原作にない「おじさん」という呼びかけを加えた形の訳になっており、続けて「何のこと?」と問いかけている。何かを言いかけて言葉を濁した果物屋の主人に対し、発話の内容を明らかにしてもらいたいと思う気持ちが強く働いたことから、何かを隠そうとする相手の態度に対し、呼びかけにより待ったをかけ、相手の意識を自分自身の側にしっかりと引き寄せた上で、改めて明白な説明を求めている。

例20)でも、相手の言動を制止するような場面で、韓国語の原作にない日本語訳が追加されている。

20)ナムドクター：내가 지금 자네 처지라면 난 아내에게 모든 걸 말할거야. 그리고 그동안 하고 싶었던 모든 말, 모든 욕, 모든 원망 다 털어놓고...그래야 나 죽은 뒤에라도 아내가 자책감 같은 것은 갖지 않을 거 아니야.

俺が今お前の立場だったら、俺はカミさんにすべてを話すよ。そう、今まで言いたかった話、悪口、怨みを全部ぶちまけてやるよ。そうやってはじめて、俺が死んだ後 でもカミさんが自分のことをせめたりしなくなるんだよ。

ジョン스：난 정말 그런 것 없어.

→**ナムドク**、せっかくだが、俺はそんなことで悩んでいるわけじゃないんだよ。<ア 618>

上の例では、既に中心となっている話題やその方向性を、「ナムドク」という呼びかけにより一度遮り、改めて自己の主張や実情を述べている。非常に深刻な場面に見られるような、相手に特によく聞いてほしい、しっかりと理解してほしいと願う心理の表出として捕らえられよう。

次の例では、患者が医者に対して、「やぶ医者ら」という意味の「돌팔이새끼들」という表現で呼びかけ、相手を批判している。

21) 존스：돌팔이새끼들……

→ **お前ら**、揃いも揃って、やぶ医者か。<ア 97>

日本語訳では、ハン・ジョンスがナムドクターを含めた医者達全員を「お前ら」と呼び、信用に値しない医師達に対する、自己の批判的な心情を表現している。すなわち、日本語訳では「돌팔이」にあたる「야ぶ医者」の前に、「お前ら,揃이も揃이」が追加され、それにより軽蔑の念を強く表している。

以上、韓国語の原作にはないが、日本語訳に追加されている呼びかけの例をいくつか見た。これらの例では、親友、知人への呼びかけとして「お前」「ナムドク」「おじさん」などが日本語訳に追加されていた。これらは、疑問や不満などの本音を遠慮なく直接的に述べる状況で使用されていた。また、既にやりとりが行われている途中に、あえて名前などを呼びかけることで話の流れを変え、相手の意識を自己にしっかりと向けさせ、何かを強く伝えたり訴えたりする場面で見られた。

3.1.6 状況による呼びかけ形式の変化

以下の発話は、聞き手に対する非常に強い訴えかけや、非難の内容を伝達する状況で見られる。韓国語では姓名が、日本語では下の名前のみが、話し始めに用いられている。

22) ジョンス: 지원이 여태 안 잤었구나? ジウオン、まだ寝てないのか?

ジウオン:

ジョンス: 어, 이놈 왜 이래? ...왜 잔뜩 꼴이 나어? 왜, 아빠에게 뭐 할 말 있어?

どうした . . . なにをへソ曲げてるんだ? なにか父さんに、言いたいことでもあるのか?

<지원은 여전히 아무런 말이 없었다. 나름대로 따지고 싶은 것을 망설이고 있는 것이었다.(ジウオンはなにも言わなかった。ジウオンはジウオンなりに問い詰めたかったが、ためらっていたのだ。)>

ジョンス: 지원아... ジウオン

<뭔가 말하려는 지원의 입술을 보고는 영신이 간곡하게 달랬다.

(何か言おうとしているジウオンの口許を見たヨンシンが、優しくなだめた。)>

ヨンシン: 그만 들어가서 자, 어서. もう、寝なさい。さあ。

<단호한 영신의 말투에 지원이 마지못해 자리에서 일어나 자신의 방으로 향했다. 그러나 여전히 정수에게는 아무런 인사도 없었다. 순간, 정수도 화를 억누르지 못했다.(毅然としたヨンシンの口ぶりに、ジウオンは仕方なくソファーから立ち上がり自分の部屋に向かった。ジョンスにはなんの挨拶もなかった。その瞬間、ジョンスも怒りを抑えられなかった。)>

ジョンス: **한지원**, 무슨 짓이야! → **지우온**, なんの真似だ?! <ア710>

<그의 고향에 획 돌아선 지원의 눈빛이 예사롭지 않았다.

(彼の怒鳴り声に振り向いたジウオンは憎々しい目で睨みつけていた。)>

ヨンシン: 버릇없이 무슨 짓이야. 어서 들어가.お父さんに向かって、なんて態度なの. 빨리 행きなさい. <다시 한번 단호한 영신의 말소리에 지원이 겨우 등을 돌렸다.(ㄷ

ンシンの声にジウォンがようやく背を向けた。) >

ジョンス：야, **한지원!** →おい、待て。**ジウォン!!** <이어지는 정수의 고향소리에도 아랑
곳없이 지원은 방문을 닫아버렸다. (ジョンスの怒鳴り声にも構わず、ジウォンはド
アを叩きつけるようにして閉めて出て行ってしまった。) >

韓国語ではフルネームで呼びかけることで、緊迫した状況や聞き手の言動を制しようとする、勢いを含んだ表現となっている。一方、日本語訳ではそのような表現は見られず、訳出の形式が異なっている。日本語における同様の状況では、通常の呼びかけと同じ表現形式で呼ぶ傾向が見られる。状況によっては、特に心理的な距離感を示したり、相手に対する厳しい態度を表出するためなどに、呼び方を変えることもあろう。普段用いている形式、例えば名前の一部を用いる呼び名（例：健）を、まったく省略しない形式（例：健太郎）に変えて呼んだりする場合である。あるいは、敬称などを省いて、姓のみや名のみを呼び捨てにするようなことも考えられよう。このような呼びかけの表現は、心理的な距離感を明示する以外に、危険などを相手に即座に伝達しようとする際など、非常に緊迫した状況においても用いられると考えられよう。しかし、いずれの場合も、韓国語の例のように、姓名のすべてを用いて呼びかけることは一般的ではないと言えよう。

3.1.7 小説資料の呼びかけ まとめ

以上、小説資料における呼びかけの特徴について、出現位置を中心に分析した結果を、以下にまとめる。

前方に見られる呼びかけは、韓日共に、特に注目要求として用いられる例が多くあった。また、後方に見られる呼びかけは、自己の要求や願望、感謝、承認、怒り、非難など、聞き手に強く伝達したい内容と共に用いられる傾向が認められた。それらは韓日、日韓それぞれの訳出にも比較的忠実に表現されていた。

日本語の原作にある呼びかけが、韓国語に訳出されていない例は、すべて同一の作品（作品8）で11件見られた。具体的には、日本語で非難や不満の意を表すときの「おまえ」、待遇性の低い発話と共に出現する「あなた」や「先生」などが、韓国語に訳出されていなかった。この傾向は、韓日の呼称の用法の差と、等級（敬語の観点からの）に関する差によるものと考えられる。

また、韓国語の原作にはない呼びかけが、日本語訳に追加されている例も、すべて同一の作品（作品2）で7件認められた。親友への呼びかけとして使われている「お前」「ナムドク」などが、日本語訳に追加されていた。それらの呼びかけは、特に強く相手に訴えかけたい内容を伝達する際の前置きや、談話の展開に変化を与えるきっかけとして、主に話し始めに多く認められた。

その他、ある状況における特徴的な形式も見られた。韓国語では、普段、下の名前呼びかけしている相手にフルネームで呼びかけることで、激しい感情を込めて聞き手の言動を制しようとする、勢いを含んだ表現になる。これらの表現に対応する日本語訳では、フルネームにはならず、普段の呼び方の通りか、姓のみ、名のみで訳出がなされていた。

3.2 映画資料の呼びかけ

3.2.1 映画にみられる呼びかけの用例の概要

韓国語の調査資料は、「8월의 크리스마스」という作品の発話を用い、そのリメイクである日本映画「八月のクリスマス」の発話を、日本語の資料として用いる。両作品は、病と闘う小さな写真館の店主の静かな日常を、まだ無邪気な若い女性との触れ合いを通して描いた物語である。

資料に見られる呼びかけの概要を、以下の表5に示す。各用例の位置による分類は、小説資料の呼びかけと同様、前方と後方の2種類とする。

<表5> 調査映画2作品における呼びかけ 出現位置別分類の概要

No.	作品名 (時間)	使用言語	件数および割合		件数および割合
			前方	後方	合計
1	8월의 크리스마스 (99分)	韓国語	44 (57.1%)	33 (42.9%)	77 (100%)
2	八月のクリスマス (103分)	日本語	46 (75.4%)	15 (24.6%)	61 (100%)

呼びかけ用例の位置別分類において、件数の上では、前方が韓国語44件、日本語46件であり、韓日で同程度である。それに対し、後方では出現件数が韓国語33件に比べ日本語が15件と少なく、韓国語のおよそ半数となっている。それにより、前方、後方の割合に韓日で大きな差が生まれ、韓国語では57.1%対42.9%、日本語では75.4%対24.6%となっている。

以下、韓日の映画の発話資料を用いた調査のうち、各言語の特徴が顕著に表れた例について、具体的な発話を示していく。

3.2.2 韓国語の作品に見られる特徴的な例

呼びかけの使用傾向に特徴が認められる例として、韓国語の「할머니 (おばあさん)」という表現が挙げられる。

この用例が見られる場面、状況は、韓日で共通している。夜8時頃、主人公男性（ジョンウオン および寿敏）は、父親から継いだ写真館で知人を待っている。そこへ、昼間、写真を撮りに来た年輩の女性客が再び現れ、写真の撮り直しを依頼してくる。主人公男性はその依頼を快く引き受け、そのままスタジオに入り撮影を始める。

以下の韓日の例では、発話内容は類似しているものの、呼びかけの使用頻度において明らかな違いが見られる。まず、日本の作品の発話を以下に示す。

23) 寿敏：本当におきれいですよ

眼鏡 外してみましようか (客が眼鏡を外す)

あ その方がずっといい じゃ 撮りますよ

首を少し右に はい え いいっすね

笑ってください はい

日本語の作品において、主人公男性は淡々とした穏やかな口調で、年輩の女性客に指示を出すために語りかけている。その際、女性客に対して直接的に呼びかける様子は見られない。

韓国語の作品における同様の場面では、主人公男性は、緊張をほぐすような明るく優しい口調で、女性客に向かって「할머니 (おばあさん) / 할머니님 (おばあさま)」と頻繁に呼びかけながら撮影を進めている。

以下、韓国語の作品における発話に、筆者による日本語訳を加えて示していく。なお、「할머니 (おばあさん) / 할머니님 (おばあさま)」の訳出には、客への敬意を表出する意味として示す場合、「お客さん」などと訳す方法も考えられるが、ここでは元の韓国語の表現に近い形式を優先し、「おばあちゃん/おばあさん」という表現を用いることとする。

24) 정원 : 아, 할머니, 젊으셨을 땐 너무 고우셨겠어요.

ジョンウオン : ああおばあちゃん お若い時とてもおきれいだったでしょ

여성고객 : 이쁘긴 뭐가 이빠?

女性客 : きれいだなんて 何を言っているの

정원 : 자, 할머니 찍을게요.

ジョンウオン : じゃ おばあちゃん 撮ります

할머니, 죄송하지만 이 안경 한 번만 더 벗어보세요.

おばあちゃん すみませんが (この) 眼鏡をもう一度外してみてください

아우, 훨씬 이쁘세요. 찌, 찍을게요.

わあ その方がずっとおきれいですよ じゃ 撮ります

할머니, 고개 조금만 오른쪽으로요.

おばあちゃん、首を少しだけ右の方に (おねがいます)

예예예, 자, 할머니, 한 번 웃어보세요.

はい はい じゃ おばあさん にっこり笑ってみてください

예헤헤. 자, 찍을게요.

はいーい (笑い) じゃ 撮ります

고개 조금만 오른쪽으로요...예, 웃으시구요.

首をもうちょっとだけ右に はい 笑ってください

하나, 둘, (찰칵) . . . 예, 잠깐만요, 할머니, 한 장만 더 찍을게요.

いち に (カシャッ) はい そのまま… おばあさん もう一枚撮ります

この例24)の中で、「할머니 (おばあさん) / 할머니님 (おばあさま)」と呼びかける例は、6件見られる。上で示したように、同様の日本語の発話においては、特に呼びかけることなく撮影を進め

ているのに対し、韓国語の発話では、非常に類似した内容でありながら、頻繁に呼びかける様子が確認できる。

これらは通常の対話ではなく、一方的に語りかける状況であり、さらに店員が客に指示を出しつつ誘導するような、ある意味では特殊な状況である。従って、通常の言葉のやりとりとは異なるという点を、十分に考慮する必要があるだろう。しかし、いずれにせよ、非常に類似した状況や人間関係でありながら、呼びかけの使用に韓日でこれだけ明らかな違いが存在し得るという事実を、改めて認識できる一例と言えよう。

日本語でも、相手の年齢や性別から推し量った呼び名（おじいちゃん、おねえさんなど）を、客に対して用いることが不可能な訳ではない。しかし、使用可能な状況、範囲、頻度などにおいて、日本語の方がより多くの制限を持つと考えられる。それは、人が年を重ねていくこと、高齢になることに対する概念や評価の違いをはじめ、不特定多数の年上の人物に対する敬意の抱き方を含めた社会通念など、韓日で異なる価値観が存在する可能性があり、それが呼びかけの使用に影響を与えているためと言えよう。また、心的態度を表現する方法や手段においても、韓日で差異が存在すると思われる。敬意や親愛の情を、呼びかけによって頻繁に口にすることで明示するのか、あるいは反対に、相手を直接的に指し示す表現を口にすることを礼儀に反する行動と捉え、あえて呼びかけることなく接するのかなど、文化背景や状況、場面などにより、さまざまな違いが考えられよう。また、同じ文化圏の中でも、年代や時代、また、地域的な違いなどにより、呼びかけに対する認識が異なる可能性も、十分考慮しなければならない。

先の例では、韓国語の「할머니 (おばあさん) / 할머니 (おばあさま)」と、日本語の「おばあさん (お客さん)」という表現が持つ、韓日それぞれの印象やニュアンスの違いが、状況的または感覚的な呼びかけやすさ、または呼びかけにくさの違いとなり、それらが呼びかけの使用状況に影響を与えていると推測できる。そのような差異の存在により、韓日の呼びかけの特徴が上記の発話例のように、特徴的な違いとして表出したのだと言えよう。

3.2.3 日本語の作品に見られる特徴的な例

日本語の作品にも、特徴的な例が認められる。日本語の作品における呼びかけの件数は、75%以上が前方に見られることは、3.2.1で既に確認した。残りの約25%の後方の用例は、多くの場合、感情の起伏が伴う状況および発話に後続する傾向が見られる。以下に、具体的な用例を示していく。

日本語の後方の呼びかけが見られる場面は、主人公男性や友人らが酒に酔い大声でわめく際、発話末に「お前」と激しい口調で呼びかける状況で複数確認できる。

以下の例(25)は、親友の悪ふざけに対して怒りを感じ、その言動に対して、受けて立とうとする状況で見られる。そこまで言うなら付き合ってやろうじゃないか、覚悟しろ、と腹を据えた様子を見せた後、荒っぽい口調で述べる例である。

例25) 亮二：わかった 付き合ってやるよ お前

続く例26) は、親友（亮二）を怒らせはしたものの、結果的に願い通りになったことへの喜びに浮かれている主人公男性が、酔っぱらった勢いで親友（亮二）に絡み付く際に見られる。

例26) 寿敏：最初からそう言え お前 行くぞ

上記2例は、非常に親しい間柄で、強い怒りや喜びの感情と共に、後方の呼びかけが表出した例である。このような既知の関係以外に、初対面の相手に対しても、激しい感情のぶつかり合いなどが生じた場合には、同様の表現が認められる。

例27) 亮二：お巡りさん こいつが先に殴ってきたんですよ

男：ふざけんな お前

誰がそんなきたねえ顔なぐんだよ 馬鹿野郎

亮二：どっちがきたねえんだ おい！

これらはいずれも、特に強い感情の起伏を伴う発話や状況と共に、呼びかけが用いられている例と言えよう。このことから、日本語では呼びかけが話し始めに用いられることが非常に多いが、相手に強く訴える場合や激しい感情の起伏が存在する場合には、後方にも呼びかけが用いられる傾向があると判断できる。日本語の呼びかけのこのような傾向とは反対に、韓国語の呼びかけはさまざまな位置で認められることが多い。本稿用例においては、日本語よりも韓国語の方が出現位置の自由度や使用頻度が高いと言えそうである。

3.2.4 映画資料の呼びかけ まとめ

映画資料の調査分析の結果、韓国語の発話ではおよそ6対4の割合で、前方と後方の両者に呼びかけが見られた。日本語の後方の呼びかけが、件数、割合のいずれも韓国語より少なかった点を考慮すると、韓国語では前方のみならず後方においても、呼びかけが多用されている可能性が指摘できる。韓国の言語文化の中で、呼びかけを話の中に頻繁に織り込むことが、尊敬の念や親愛の情の表出手段として、好意的に評価される傾向があるとすれば、それは呼びかけの積極的な使用の動機になると解釈できる。

日本語の発話では、全体として話し始めに呼びかけることが多いという傾向が見られた。また、韓国語とは対照的に、あえて呼びかけることなく話を進める場面についても、確認することができた。話し始め以外の位置で呼びかけが認められる場合、激しい怒りや苛立ちあるいは喜びなど、感情の起伏が明らかに認められる傾向も見られた。

これらの考察は、現時点では本調査の対象作品に限り述べられることである。今後、他の作品に

ついても継続して調査を行っていく必要があることは言うまでもない。

4. まとめと今後の課題

以上、韓国語と日本語の話しことばにおける呼びかけについて、小説と映画の発話部分の傾向を概観した。調査対象の作品数が十分とは言えないことから、本稿に見られた分析結果を一般化することはできないが、本稿の調査資料から得られた呼びかけの用例および使用状況の傾向は、以下の通りである。

小説の中の呼びかけの位置は、韓日共に前方が7割以上を占めていた。前方に出現する呼びかけは、注目要求として用いられる例が多く見られた。後続する表現には、確認、問い、依頼などの内容が含まれていた。また、後方に出現する呼びかけは、要求や願望、感謝、承認、怒り、非難などに続いて出現する場合が多くあった。

使用言語別の件数は、日本語（原作および訳）が韓国語（原作および訳）に比べわずかに多く、韓国語と日本語の呼びかけ使用の差異が、その訳出に影響していることが確認できた。まず、日本語の原作にある呼びかけが韓国語に訳出されていない例では、日本語で非難や不満の意を表すときの「おまえ」、敬意を特に含まない場合の「あなた」や「先生」の訳において、韓日の呼称の用法の差と、等級（敬語の観点からの）に関わる差が見られた。また、韓国語の原作にはない呼びかけが、日本語訳に追加されている場合は、展開中の話題を遮ったり、方向性を大きく変えようとしたりする状況での訳出であった。呼びかけにより聞き手を自己の側へ強く引き寄せ、自己が伝達しようとする内容や訴えようとする内容について、確実な理解を促そうとする状況で確認できた。

映画の発話に見られる呼びかけの出現位置には、両言語で明らかな差が見られた。韓国語の作品では、話し始めや発話の最後など、さまざまな状況で呼びかけが確認できた。それに対し、日本語の作品では、ほとんどが話し始めの呼びかけとして出現していた。

また、韓日それぞれに特徴的な呼びかけの例が見られた。韓国語の作品において、目上、年上の人物に対する「할머니（おばあさん）」などの呼びかけが、積極的に用いられる傾向が確認できた。日本語の作品における同場面では、そのような傾向は見られず、目上、年上の人物に対して特に呼びかけることなく接する様子が確認できた。また、日本語の作品では、激しい感情の起伏が伴う状況において、例外的に後方の呼びかけが認められた。

映画の資料と小説の資料を比べてみると、映画の資料では、韓国映画の呼びかけの件数が日本語より多くあったが、小説の資料ではわずかながら日本語の呼びかけの方が多く見られた。これは一見相反することのように映るが、状況による人間関係の点から見ると、矛盾しているとも言えない。映画資料では、年輩の女性客に「할머니（おばあさま）」を頻繁に用いている。これが韓国語の「할머니」が持つ敬意の高さの反映だとすると、小説資料の中で、医者や教師を非難する状況下で「先生」にあたる韓国語「선생님」が韓国語に訳されなかったことは、相通することであると言える。

すなわち、韓国語の場合、普段あまり親しくない他人に親しみを感じさせる「아저씨 (おじさん)」「아줌마 (おばさん)」「おねえさん (언니, 아가씨)」などを意識的に使い、また、ある程度の距離があり敬意を表す必要がある人に対しては、「お医者様 (의사 선생님)」「先生 (선생님)」などの呼びかけを積極的に用いることで、礼節を守る傾向がある。しかし、あえて呼びかけを控えることにより、待遇性を低めて表現することもあり得るとのことである。これは、直接的な呼びかけを避け、相手との距離を保つことで敬意を表明しようとする日本語の傾向と、大きく異なると言える。

その他、韓国の小説の日本語訳に、話し始めの呼びかけを加えた訳出が見られた点も、日本映画の用例で、日本語の呼びかけの多くが発話の始めに見られた傾向と一致している。日本語においては、特に話し始めの呼びかけが、単なる注目要求以上の意味合いや役割を担っている可能性があるということ、この傾向から指摘することができよう。

今後は、呼びかけの使用の位置や状況について更に考察を進め、特に発話の途中や終わりに見られる呼びかけの意味機能および役割などに関し、明確な傾向を示していくことを課題とする。

◀ 参考文献 ▶

- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店
 関陽子・金真喜(2005)「韓日両言語における呼称対照研究-妻が夫について話すときの使用呼称について-」『漢陽日本学』
 宋善花(2007)「日本語、朝鮮語、中国語における人称詞の対照研究」東北大学博士論文中間発表要旨
 ソンユゼ(2003)「韓国語と日本語の呼称表現の対照研究」金澤大学博士論文
 鄭惠先(2002)「日本語と韓国語の人称詞の使用頻度-対訳資料から見た頻度差とその要因-」『日本語教育』114号
 林炫情・玉岡賀津雄(2004)「韓国の職場での呼称使用の適切性判断に及ぼす属性・対人関係特性・性格特性の影響」広島経済大学研究論集Vol.27

<資料>

(1) 小説資料

- 村上龍『ラブ&ポップ』幻冬舎 1996/김지용訳『러브&팝』동방미디어 1999
 浅田次郎『天国まで百マイル』朝日新聞社 1999/권남희訳『천국까지100마일』산성미디어 1999
 김정현『아버지』문이당 1996/田嶋きよ子他 訳『アボジ』双葉社 1998
 정석화『쉬리』다른세상 1999/金重明訳『シュリ』文藝春秋 1999

(2) 映画資料

- DVD 『8월의 크리스마스』韓国 ウノ・フィルム (1998) /DVD 『八月のクリスマス』日本 キングレコード (2005)

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

平田篤胤와 『訓蒙字會』*

閔丙燦**
minbc@inha.ac.kr

<要 旨>

本稿は、いわゆる「神代文字」の存在を主張した代表的な人物の一人である平田篤胤が、『神字日文伝』を執筆した理由およびその内容、そして本書に『訓蒙字會』が掲載されるようになった経緯等について探ってみたものである。その結果分かったことは以下の通りである。

まず、『神字日文伝』は、『古史徴』をもって「神代文字」の存在を明らかにしたにもかかわらず、それを信じない人が少なくなかったこと、そして以降「神代文字」の実物だとして発見され蒐集したものがあまりにもハングルと類似していることなどから、ハングルと「神代文字」を「肥人書」との関係の中で議論し直す必要に迫られた結果作成されたものと見受けられる。

次に、篤胤は、これが「神代文字」の実物だとして『神国神字弁論』を通じて初めて世に披露した諦忍にたいして、その典拠とした文献の真偽を問題にして彼を批判しつつも、「神代文字」の存在を主張した諦忍の考えそのものに関しては容認する立場をとっている。

また、新井白石にたいする批判等を含めて、ハングルが「肥人書」の偽作であるとする考えをもっていた篤胤は、行智の紹介をきっかけとして『訓蒙字會』と接したが、字体の異同の問題に執着した彼は『訓蒙字會』の一部を補う等の方法と、「五十音図」の枠の中にハングルのあてはめようとする試みなどを通じて、『訓蒙字會』までも自らの主張を裏付ける典拠として利用しようとした。

最後に、篤胤は漢字使用の問題点を述べ、かつ表音文字こそ有用であるとの認識を示すわけであるが、これは後、漢字の廃止を主張した前島密につながるもので、篤胤の『神字日文伝』における業績は、「無稽」な「神代文字」存在説にあるのではなく、漢字音問題の解明に偏ってきた従来の言語研究の流れを、文字にたいする関心へと旋回させ、漢字使用を含めた表記法の問題を提起することによって、明治以降のいわゆる「国語国字問題」の先駆けとしての役割を果たしたという点から捉え直す必要があるのではないかと考えられる。

キーワード： 平田篤胤、神代文字、肥人書、「神字日文伝」、「古史徴」、「訓蒙字會」

1. 들어가기

주지하는 바와 같이 平田篤胤(1776-1843)의 학문적 성과 및 후학에 미친 영향 등에 대해서는 다양한 측면에서 논의가 진행되어왔다. 그 가운데 언어적으로는 소위 ‘神代文字’의 존재에 관한 주장이 주목받아왔는데, 이에 관해서는 이미 당대에 伴信友에 의한 부정과 더불어 후대에도 통렬한 비판이 가해져온 만큼, 그 진위 문제는 더 이상 논의할 여지가 없다고 할 것이다. 다만 ‘神代文字’가 존재한다고 하는 주장의 근거를 비롯한 그 구체적인 내용에 대해서는 상세한 음미가 필요할 것으로 생각되며, 아울러 이러한 검토를 통해 篤胤의 언어에 대한 관점을 이해할 수 있을 것으로 기대된다.

그런데 일본의 소위 ‘神代’에 문자가 존재했다고 하는, 즉 漢字 유입 이전에 이미 일본

* 이 논문은 2010년도 인하대학교 교내연구비 지원에 의하여 연구되었음.

** 인하대학교 문과대학 동양어문학부 일어일본학전공 부교수, 일본어학·일본어교육.

에 글자가 있었다고 하는 주장을 적극적으로 펼친 篤胤 저 『神字日文伝』(1819)에 『訓蒙字會』를 인용한 부분이 있다. 물론 篤胤가 전거로서 제시하는 문헌이 『訓蒙字會』에 한하는 것은 아니지만, 조선에서 간행된 漢字 학습서인¹⁾ 『訓蒙字會』를 篤胤가 어떠한 경위로, 어떻게, 또한 왜 제시하고 있는가를 밝히는 것은 흥미로운 주제가 아닌가 생각된다.

閱(2004a, pp.23-29)에서는 『訓蒙字會』의 異本이 다수 일본에 전해지고 있다는 점을 들며, 본서가 일본에서도 매우 광범위하게 이용되었을 개연성에 대해 언급했다. 그 연장선상에서 閱(2004a, pp.93-123)에서는 『訓蒙字會』를 통해 한글에 대한 종래의 이해 부족을 해소한 行智(1778-1866)에 대해, 그리고 閱(2004b)에서는 본서를 일본한자음의 연구에 이용한 白井寬蔭(생몰년 미상)에 대해 논의했다.

또한 閱(2009a)와 閱(2009b)에서는 이것이 ‘神代文字’의 실체라고 처음으로 문헌상에 제시한 諦忍에 주목하여, 『以呂波問弁』(1764)과 『神国神字弁論』(1779)의 내용 등에 대한 검토를 통해, 諦忍의 언어인식 및 그 공표 배경 등에 대해 고찰했다.

이러한 일련의 연구들이 篤胤의 저서에 등장하는 『訓蒙字會』에 대한 관심으로 이어지게 되었는데, 본고에서는 이하 『神字日文伝』의 집필 이유 및 내용, 그리고 본서에 『訓蒙字會』가 게재되게 된 경위 등에 대해 살펴보기로 하겠다.

2. 『古史徵』와 『神字日文伝』

『神字日文伝』은 다음과 같이 시작한다.

齋部広成의 古語拾遺에 ‘上古之世未有文字’ 운운과 같이 적혀있지만 그렇지 않다. 사실은 神世에 文字가 있었다고 하는 이야기는 『古史徵』의 「開題記」, 「神世字의 論」이라고 하는 조목에서 증명하여 논한 바와 같다²⁾.(p.181)³⁾

또한 이를 이어 두 줄 주의 형태로 다음과 같은 언급도 보인다⁴⁾.

* 모든 이 히후미(日文)의 생각은 그 조항을 잘 살펴둔 연후에 봐야 한다, 그렇지 않으면 이

1) 『訓蒙字會』 책머리의 「訓蒙字會引」의 언사를 통해 본서의 편찬 취지를 확인할 수 있다. 즉 「訓蒙字會引」에는, 한자 학습의 기본서로서 종래에 사용되었던 『千字文』이나 『類合』에는 「虛字」가 많다는 등의 결함이 있기 때문에, 그러한 결함을 보완하고 이후 그것을 대신하여 본서를 사용한다는 내용이 담겨있다.

2) [원문]齋部広成宿禰の古語拾遺に。上古之世未有文字。云々と書れたれど然らず。實は神世に文字有しことの論ひは。古史徵の開題記。神世字の論といふ條に。委く徵し論へるが如し。

3) 이하 『神字日文伝』을 인용할 때는 平田篤胤全集刊行會編 『新修 平田篤胤全集 第15卷』에 의한다. 또한 페이지는 본서의 것을 제시한다.

4) 이하 두 줄 주를 인용하는 경우에는 인용문 앞에 ‘*’ 표시를 붙인다. 아울러 인용하는 본문에 이어지는 경우에는 괄호에 넣어 표시한다.

해할 수 없는 것이 많이 있기 때문이다⁵⁾.(p.181)

즉 篤胤가 밝히고 있는 바와 같이 ‘神代文字’에 대해서는 『古史徵』에서 자세하게 다루고 있는데, 그 가운데서도 一春之卷의 「神世文字の論_二」이 중심이 된다. 「神世文字の論」의 전체적인 내용에 대해서는 一春之卷의 「開題記目錄大意」에 상세하게 정리되어 있으므로 아래에 인용하는 것으로 대신하고자 한다⁶⁾.

○神世文字의 論_二

이 조목에서는 세상의 지식인들이 古語拾遺에 ‘上古之世未有文字’ 운운이라고 기록되어 있는 것을 증거로 삼아, 神世에 문자가 없었다고 하는 것은 잘못된 설이라는 것을, 日本紀私記, 釈日本紀를 비롯하여 古書 등에서 증거를 취해 자세하게 밝히고, 그에 이어 옛날에 仮名日本紀라고 했던 史가 2部 있었던 점, 또한 그 書체에 대한 생각, 또한 釈日本紀를 읽는 마음가짐, 日本紀의 私記 등에 대해, 釈日本紀에 소위 肥人書, 薩人書, 私記에 圖書寮에 있었다고 하는 梵字体의 書 등은 神世字였던 점, 天武天皇 시절에 만드신 新字라는 書에 대해, 神世字의 字原 字体에 대한 생각, 空海가 만든 以呂波(以呂波) 글자는 神代字의 書法을 사용한 점, 또한 梵字도 空海 이후에는 神字의 書法을 사용한 점 등, 모든 字体의 근원을 밝히고, 漢字가 건너온 이후 점차 神字를 멀리하고 그 글자를 널리 사용하게 된 연유, 또한 欽明天皇本註에 「帝王本紀多有古字」 운운하는 글에 대한 논의, 또한 中世 사람들이 上古에 文字가 있었다고 말하지 않았던 뜻, 또한 古語拾遺에 ‘書契以來. 不好談古. 浮華鏡興’ 운운한 데에 깊은 이유가 있었던 것까지 밝혔다⁷⁾.(『古史徵』 p.25)

이처럼 ‘神代文字’에 대해서는 『古史徵』에서 이미 충분히 논파한 내용이라면 굳이 『神字日文伝』을 세상에 내놓을 필요도 없었을 것이라는 소박한 의문이 드는데, 이에 대한 篤胤의 언사를 짚어두도록 하겠다.

5) [원문] *すべて此の日文の考へは、彼の条をよく見おきて後に見るべし、然らでは、曉り得がたき事の多有^{おほかり}ばなり、

6) 이하 『古史徵』를 인용할 때는 平田篤胤全集刊行会編 『新修 平田篤胤全集 第5卷』에 의한다. 또한 페이지는 본서의 것을 제시한다. 아울러 「開題記目錄大意」에는 ‘山崎篤利謹記’라는 기록이 있다.

7) [원문]○神世文字の論_二

此ノ条には、世の事識人^{コトシロヒト}たち、古語拾遺に、上-古之-世未^{カキイデ}レ有^{アガシ}二文-字-一云々。と記出^{カキイデ}られしを証拠^{アガシ}として、神-世に文字無^イりしと論^{ヒガコト}へるは非說^{ヒガコト}なる由を、日本紀ノ私記、釈日本紀を始め、古-書等^キに徵^{ヒガコト}をとりて精^キく弁^{ヒガコト}へ、それに就て、古^イく仮名日本紀といひし史^{ヒガコト}の二部ありし事、および其ノ書体^キの考へ、また釈日本紀を讀む心得^{アガシ}かた、日本紀の私-記^{ヒガコト}どもの事、釈日本紀にい^イはゆる肥人書、薩人書、私記に圖書寮^{カミモ}に在^{モジ}しと云へる梵字体^{カミモ}の書などは、神世字^{カミモ}なりし事、天武天皇の御世^{カミモ}に造しめ給へる新-字^{カミモ}といふ書のこと、神世字^{カミモ}の字-原字-体^{カミモ}の考へ、空-海^{カミモ}の製れる以呂波字^{カミモ}は、神代字^{カミモ}の書-法^{カミモ}を用たる事、また梵字も空-海^{カミモ}より後には、神-字^{カミモ}の書-法^{カミモ}を用^{カミモ}じたる事など、総て字-体^{カミモ}の原^{カミモ}を論^{カミモ}ひ、漢字^{カミモ}わたり来て後、次々に神字^{カミモ}を罷めて、其ノ字^{カミモ}を弘く用ふる事となれる由よし、また欽明天皇ノ本註に、帝王本紀^{カミモ}多有^{カミモ}二古字^{カミモ}一云々と見たる文^{カミモ}の論^{カミモ}ひ、さて中ツ世の人々の、上-古^{カミモ}に文字ありと言ざりし意^{カミモ}ばへ、また古語拾遺に、書契^{カミモ}以來。不^{カミモ}好^{カミモ}談^{カミモ}レ古。浮^{カミモ}華^{カミモ}鏡^{カミモ}興^{カミモ}云々。と言れし事^{カミモ}の、深^{カミモ}き由ある事^{カミモ}までを論^{カミモ}はれたり。

* 다만 그 조목을 보면서도, 여전히 듣해서 믿지 못하고, 또한 고쳐 말하지도 못하면서 그저 중얼거리고 있는 사람도 있다고 하는데, 그것은 미혹하는 귀신에게 마음을 빼앗긴 사람이므로 그러한 비겁한 부류는 지금 말할 가치도 없다⁸⁾.(p.181)

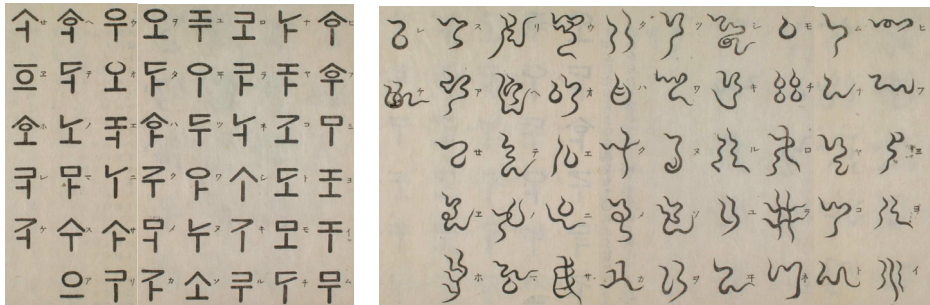
또한 『古史徵』 작성 이후의 상황에 대한 다음과 같은 언급도 『神字日文伝』 저술의 동기를 미루어 짐작할 수 있게 한다.

그런데 神世字에 대해 앞서 開題記를 저술할 무렵까지는 아직까지 이것이야말로 바른 文字일 것이라고 생각할 것을 정하지 못했기 때문에, 지금 세상에 神世의 글자라고 이것저것 베껴 전해지는 가운데는 진짜도 있겠지만 아직 정하지 못해서, 잘 그 진위를 살펴 후에 전할 것이 있으면 전할 것이라고 적었는데, 그 후에도 이것저것을 모았다⁹⁾.(p.181)

이와 같이 다양한 문건들에 접한 篤胤은 ‘神世行文。中古所謂肥人書也’라는 기록이 있는 ‘真字’만으로 적힌 한 장의 문건을 발견했다고 언급한다.

마나(真字)만을 보면 朝鮮의 소위 諺文이라는 글자와 비슷한데, 이는 본디 그 諺文을 취해 만든 것은 아닌가 하고 반신반의했는데, 다시 생각하니 그 諺文에 草書가 있다는 것을 듣지 못했다. 그런데 소위 肥人書에는 草書가 있다¹⁰⁾.(p.182)

위에서 篤胤가 ‘真字’와 ‘草書’라고 하는 것은 본서 p.201-202에 제시하고 있는 아래와 같은 글자를 가리키는 것으로 보인다. 오른쪽에 있는 것이 소위 ‘草書’의 예다.



- 8) [원문]但し彼の条を見つゝも、なほ心おそく信得ず、また論ひ直すことも得為ずて、只につぶやき居る人もありとか、其は佞鬼に心を奪はれたる人にしあれば、然る怯き倫は、今云ふ限りに非ず、
- 9) [원문]さて神世字のこと。前に開題記を著せる頃までは、猶いまだ、是ぞ正しき文字ならむと所思るを。考へ定めざりし故に。今の世に神世の字とて彼此写し伝ふる中には、眞の物有るべけれど、未考へ定めざれば、熟くその信偽を正して後に伝ふべき物有らば伝ふべし。と記せるが、其の後にも、何某くれがしの集たる。
- 10) [원문]真字をのみ視れば、朝鮮のいはゆる諺文といふ字に似たるに。此はもと彼の諺文を採て作れるには非じかと。半は疑はしく成ぬるを。また思へば、彼の諺文に草書ある事を聞かず。然るに謂ゆる肥人書には、草書あり。

위에 제시한 바와 같이 篤胤가 ‘草書’라고 하는 것은 이를테면 흘림체를 일컫는 것으로 보인다. 즉 이러한 흘림체가 한글에 있다는 것을 듣지 못했다는 것이며, 이를 근거로 삼아 소위 ‘肥人書’와 현재의 한글을 별개의 것으로 취급한다는 것이다. 이렇게 해서 이윽고 한글에 대한 언급이 시작되는데, 그 가운데 ‘肥人書’와의 관계를 주장한 점이 특징적이라고 할 것이다. 이 문제에 대해서는 후술하기로 하는데, 결론적으로 篤胤는 한글이 오히려 ‘肥人書’를 위작한 것이라는 주장을 펼치게 된다.

또한 속고하니, 朝鮮의 諺文이라고 하는 것은, 우리 神世의 文字가 옛날 그 나라에도 전해졌던 것을 그 나라 사람들이 아는 체 하여 고쳐 만든 것일 터라 마침내 깨달아서, 어찌 바로잡을 수 있을까 생각하니¹¹⁾(p.183)

바로 이러한 문제의식이 『神字日文伝』을 저술하게 만든 동기가 된 것으로 생각된다. 즉 『神字日文伝』은 『古史徴』를 세상에 내어놓았음에도 불구하고 그 내용이 이론적·추상적인 주장에 그쳐 실증적인 면이 부족하여 믿지 못하는 사람들이 적지 않다는 점과, 이후 발견되고 수집한 ‘神代文字’의 물증들이 너무나도 한글과 유사하다는 점에 대한 당혹감에서, 한글과 ‘神代文字’와의 관계 등에 대한 추가적인 기술이 필요하다는 인식을 바탕으로 작성된 것으로 보인다.

3. 篤胤의 諦忍 비판

위와 같은 이유 때문인지 한글과 관련된 언사가 『神字日文伝』에 많이 할애되어 있는데, 그것을 살펴보기에 앞서, 이것이 ‘神代文字’의 실체라며 『神国神字弁論』을 통해 처음으로 세상에 공표한 諦忍에 대한 篤胤의 언사를 짚어두기로 한다.

宝曆 13년(1763) 무렵, 尾張国 八事山 興正寺의 諦忍 和尚이라는 사람이 『以呂波問弁』이라는 책을 써서(중략) (* 篤胤가 말한다. 이 설은 그 黒瀧의 潮音が 위작한 『旧事大成経』이라는 것에 적힌 妄說에 의거하여 말한 설이다. 이 諦忍이라고 하는 중은 空華老人이라고도 칭하는데, 수많은 저술들이 있어서 박식하다고 들었는데, 『大成経』에 대해 제대로 분간하지 않았기 때문일 것이다. 그러므로 이 중이 神世에 文字가 있었다고 한 것은 좋지만, 그 의거한 설은 잘못이다.)¹²⁾(p.186)

11) [원문]なほ、熱々に考ふれば、朝鮮の諺文といふは、我が神世の文字の。古く彼の国にも伝はりたるを。彼の国人のさかしらを加へて。作り改めたる物ならむと。かつがつ悟り得て。いかで糾し試ばやと思へるに。

12) [원문]宝曆十三年のころ。尾張国八事山興正寺の諦忍和尚と云へるが。以呂波問弁といふ書を著はして(中略)(* 篤胤云ふ此説は、かの黒瀧の潮音が偽り作れる旧事大成経といふ物に記せる、妄説に本づきて言ひ出たる説なり、此諦忍といひし僧は、空華老人とも称るが、くさくさ著述ども有りて、博識と聞えたるに、大成経の事を、よく弁へざりしにこそ、然れば此僧の神世に文字ありと云へるは宜けれど、其本づける説は非なり、)

위에 인용한 바와 같이 篤胤은 諦忍의 저술 내용에 대해 기본적으로는 신뢰하지 않지만, 그 결론 즉 ‘神世에 文字가 있었다고 한 것’ 만큼에 대해서는 긍정적인 평가를 내리고 있음을 확인할 수 있다. 또한 諦忍이 『神国神字弁論』에서 敬雄의 비난에 답하는 과정을 묘사한 후,

이것은 다양한 사정을 생각건대, 諦忍이 그 『以呂波問弁』을 만들 때, 이미 이 히후미(日文) 글자를 득해서 가지고 있었다고는 하지만, 깊이 존송하는 마음에 쉽사리 세상에 드러낼 수 없어 숨겨 가지고 있다가, 敬雄가 이 건에 대해 비난하기 때문에 어쩔 수 없이 『神字弁論』에 밝혔을 것이다¹³⁾.(p.188)

라 하여, 諦忍이 제시한 ‘神代文字’만큼은 위작이 아니라는 입장에서의 기술을 선보인다. 다만 諦忍이 제시한 ‘神代文字’가 모두 신뢰할 만한 것은 아니라는 다음과 같은 기술은 주목할 만하다.

그런데 諦忍 和尚이 鶴岡宮에 전해지는 글자를 세상에 밝힌 후에 그에 놀라 여러 지역의 신사나 고찰에 감추어두었던 옛글들이 연달아 나타나, 이제는 이렇게 많이 모여 고려할 만한 것으로도 되었다. (* 그러나, 그 나타난 글자들 가운데 위작으로 보이는 것이 매우 많다.)¹⁴⁾ (p.189)

이러한 입장은 高田与清라는 인물의 저서 내용을 소개하고, 그에 대한 자신의 생각을 밝히는 순서로 이루어져 있는 다음 기사에서도 확인할 수 있다.

그런데 神世에 文字가 없다, 지금 시절에 있는 것은 偽作이라고 하는 사람이 있다. 실제로 文字가 없다고 하더라도 있다고 말해야만 우리나라를 존송하는 이치가 될 것이다.(* 篤胤가 말한다. 이렇게 말하는 뜻은 매우 사랑스럽지만, 실제로 없는 것을 있다고는 해서는 안 된다. 그러나 文字에 있어서는 진실로 神世부터 있어 왔던 것에 조금도 의심할 바가 아닐 것이다.)¹⁵⁾(p.190)

13) [원문]此はつらつら事情を思ふに、諦忍かの以呂波問弁を作れる時に、既この日文字を得て、藏たりとは通ゆれども、深く尊み思ふ心に、容易く世に現しがてにして、秘藏たりしを、敬雄が上の件のごと難たる故に、已ことを得ずて、神字弁論に著はせるなるべし。

14) [원문]さて諦忍和尚の。鶴岡宮に伝はれる字を世に著せるより。其に驚かされて。諸国の神社古寺に秘め置りし遺文ども。次々に現はれて。今はかく数多集めて考へ合さるゝ事としても成にたり。(* 然れど、其現はれたる字どもの中に偽り作り、と見ゆるがいと多かり、)

15) [원문]然るに神世に文字なし。今の世にあるは。偽作なりと云ふ人あり。實に文字なしとても。有と云ふこそ。御国を尊み称る義なるべし。(* 篤胤云、かくいふ意はいと愛けれど、實になき物を有りとは云ふべからず、然れど文字におきては、信に神世より有来しこと、いさゝかも疑ふべき事に非ずかし、)

이처럼 篤胤은 諦忍이 전거로 삼은 문헌에 위작 논란과 같은 문제가 있다는 이유 등에서 그를 비판하면서도, ‘神代文字’가 존재한다는 것은 단순한 ‘애국담¹⁶⁾’ 만은 아니라는 입장을 밝히고 있는 것이다.

4. 肥人書와 新井白石

앞서 언급한 바와 같이 篤胤은 한글은 ‘肥人書’를 위작한 것이라는 주장을 펼치는데, 문제가 되는 ‘肥人書’에 대해 『古史徵』에서는 다음과 같은 견해를 밝히고 있다.

松下見林, 新井君美 등, 『万葉集』에 高麗人^{コウレイジン}라고 하는데 肥人^{ヒジン}라고 적은 것도 있어서, 이는 高麗國의 책을 말할 것이다. 지금도 朝鮮에서 사용하는 文字, 그 글자체가 梵字와 같은 諺文이라고 하는 것이 있다. 그러므로 그 나라 文字가 우리나라에 전해진 것을 적은 책일 것이라고 하는 것은 틀렸다. 그것은 肥人書에 관해 『大外記』 業忠의 本朝書籍目録에 『肥人書五卷』이라 보이고, 이와 나란히 『薩人書』라고 하는 것도 있다. 그러므로 肥人書는 火國人^{ヒクコビト}의 책, 薩人書는 薩摩人의 책이라는 것은 의심할 바 없다¹⁷⁾.(『古史徵』 pp.37-38)

이러한 篤胤의 지적의 대상이 된 것 가운데 하나가 바로 新井白石(1657~1725)가 저술한 『同文通考』(1769)이다. 본서 卷二에 수록된 「肥人書」 항목에는 다음과 같은 기술이 있다¹⁸⁾.

肥人書란 肥의 國 사람의 책이다. 肥의 國이란 지금의 肥前 肥後 등의 國이 이것이라는 사람이 있지만, 万葉集 안에(* 11권) 肥人이라 쓰고 ‘コマビト’라고 읽었으므로, 肥人書라고 하는 것은 高麗國의 책을 말할 것이다. 지금도 朝鮮의 나라 안에서 사용하는 文字, 그 글자체가 梵字와 같은 諺文이라고 하는 것이 있다. 지금의 朝鮮이라고 하는 것은, 옛 三韓의 땅을 합한 나라이므로, 지금 그 나라에서 사용하는 文字가 있다는 것은 예로부터의 관습일 것이다. 그렇다면 高麗 시절에 그 나라에서 사용되던 文字가 우리나라(일본)에 전해진 것을 적은 책일지도 모른다¹⁹⁾.(p.126)

16) 花岡(1902)는 篤胤가 주장하는 神代文字 존재설에 대해 ‘篤胤의 설에는 학리 상 어떠한 가치도 인정할 수 없고, 단지 國字가 없는 것을 일국의 치욕으로 여기고 변론한 하나의 애국담에 지나지 않는다(p.15)’는 평가를 내린다.

17) [원문]松下見林, 新井君美めしなど, 万葉に高麗人と云ふに、肥人と書ることも有ルに依りて、此は高麗國の書を云ひけむ、今も朝鮮にて用ふる文字、其ノ体梵字の如くなる諺文と云ふあり、然れば、彼ノ國の文字の、我が國に伝はりしを、記せる書なりけむ、と云へるは違へり。其は、この肥人書のこと、大外記業忠の本朝書籍目録に、肥人書五卷と見え、其にならべて、薩人書と云ふもあり。然れば、肥人書は火國人の書、薩人書は薩摩人の書なること疑ひなし。

18) 여기에서 인용하는 것은 勉誠社文庫70 『同文通考』에 의한다. 또한 페이지는 본서의 것을 제시한다.

19) [원문]肥人書とは、肥の國人の書也。肥の國とは今の肥前肥後等の國是也といふ人あれど、万葉集の中に(* 十一卷)肥

즉 白石은 『万葉集』의 예를 근거로 삼아 ‘肥人書’는 ‘고려의 책’이라 단정하고 있는 것이다²⁰⁾. 篤胤은 이러한 白石의 언사에 대해 ‘이는 매우 잘못된 설이다(此はいみじき非説なり)(p.205)’라고 단정 짓고 있으며, 아울러 ‘肥人書’와 관련하여 다음과 같이 밝혀 白石와 대립되는 의견을 제시하고 있다.

肥人書란 肥国人의 책이라고 하는 사람이 있지만(* 肥国이란 지금의 肥前 肥後 등의 国이 이것이다²¹⁾(pp.204-205)

그런데 『同文通考』에는 「神代文字」(pp.109-125)라는 항목도 마련되어 있다. 거기에서의 白石의 주장 가운데 주목할 만한 것은, 일본에 거북점(龜卜)은 있었으나 그것은 문자가 아니고, 후일 백제를 통해 한자가 전해짐으로써 비로소 문자를 가지게 되었다는 지적이다. 이와 관련해서는 호를 달리하여 논의하고자 하는데, 아무튼 ‘神代文字’가 존재했다는 주장은 白石에게서는 찾아볼 수 없다. 그럼에도 불구하고 篤胤은 다음과 같이 언급한다.

가까운 시절 사람으로 神대에 文字가 있다고 말한 것은 新井君美가 처음이었다²²⁾(p.184)

그리고 이에 이어서 아래와 같은 흥미로운 언사도 보인다.

이보다 이전에 소위 神道 학자들 가운데서도 그렇게 말한 사람이 많았지만, 그 주장은 매우 유치하고 무계한 주장이므로 지금 언급할 가치가 없다²³⁾(p.184)

人と書て、コマビトよみたれば、肥人書といふは、高麗国の書をやいひけん。今も朝鮮の国中にて用ゆる所の文字、其体梵字の如くなる諺文といへるあり。今の朝鮮といふは、古の三韓の地をあはせたる国なれば、今其国に用ふる所の文字あること、古よりの俗なるへし。さらば高麗の世に、その国に行はれし文字、我国に伝はりしを、しるせる書なりけんも知らず。

20) 白石가 근거로서 언급한 『万葉集』의 예는 ‘肥人の額髮結へる染木綿の染みにし心我忘れめや[一に云ふ、「忘れぬやも」](2496)’이다. 여기에서 문제가 되는 ‘肥人’에 대해 岩波書店에서 간행된 新日本古典文学大系3에서는 ‘こま人’는 ‘くま人’, 즉 九州 球磨의 사람이다. 高麗 사람이 아니다’라고 강조하여 주석을 붙이고 있다. 다만 그것이 九州의 球磨가 되었건, 薩摩가 되었건, 역사적 지리적 관계를 고려할 때, 그 지역에 한글이 흘러 들어갔을 개연성은 매우 높다고 할 것이다.

21) [원문]肥人書とは、肥国人の書なりといふ人有れど。(* 肥国とは、今の肥前肥後等の国是なり、)

22) [원문]近き世の人に。神代に文字ありと論へるは。新井君美ぬしぞ始なりける。

23) [원문]此より以前に、いはゆる神道学者たちの中にもしか云へるが多かれど、其説いと稚く、無稽の説等なれば、今論ふかぎりに非ず。

5. 篤胤와 行智 그리고 『訓蒙字會』

한글이 ‘肥人書’의 위작이라는 생각을 가지고 있던 篤胤은 文政 2年 즉 1819년 行智와 만나게 되었다는 기록을 남긴다. 篤胤의 行智에 대한 묘사는 다음과 같다.

이 사람은 淺草에 있는 銀杏八幡宮의 승관으로 나의 속세를 떠난 친구이다. 悉曇의 학문에 매우 정통하여 悉曇字記新釈이라는 것을 만들었다. 이 학문이 있는 이래 그 만큼의 해석은 나는 아직 보지 못했다²⁴⁾(p.183)

이와 같이 학문적으로 신뢰하는 行智가 『訓蒙字會』를 篤胤에게 소개시켜주었다고 하는데 그 경위는 다음과 같다.

요사이 어떻게 지내는가 물으니, 최근 朝鮮의 訓蒙字會라는 책을 보니, 漢字 아래에 모두 諺文을 붙였기에 이를 밝혀보려 생각하여 그 일에 매달리고 있다고 하여, 매우 기뻐서 앞선 것을 쓴 일 등을 이야기하고, 베껴 가지고 있는 肥人書와 薩人書도 보이고, 그 諺文은 우리 皇國의 글자가 그 나라에 옛날 건너가 전해진 것을, 그 나라의 原文으로 삼아, 悉曇章에 의해 梵字의 쓰임새로 쓰려고 그 나라 사람이 아는 체 한 것으로 보인다고 하니, 매우 감동하여 그렇다면 빨리 神世의 글자를 밝혀시라 하니, 다시 생각이 일어서 나도 우선 諺文이 만들어진 근본부터 밝혀보고자, 그것이 보이는 책들을 이것저것 찾아 모아²⁵⁾(pp.183-184)

위 인용문 말미에 보이는 篤胤가 수집하여 확인한 서책들은 다음과 같은 3종이라고 밝히고 있다.

屋代²⁶⁾ 옹에게 訓蒙字會를 빌리고 (중략) 伴信友에게 朝鮮原文訳語라는 것을 빌리고 (중략) 高田与清에게 朝鮮板의 衿陽雜録이라는 책의 漢字 아래에 諺文을 덧붙인 것 등을 빌려 모아서²⁷⁾(p.184)

24) [원문]此人は、淺草の里に坐す、銀杏八幡宮の別當にて、余が方外の友なり、悉曇の学にいと精しく悉曇字記新釈といふ物を作れり、此学ありし以来、かばかりの釈は、吾未だこれを見ず。

25) [원문]此頃の態はと問へば。近きころ。朝鮮の訓蒙字會といふ書を見たるに。漢字の下に。悉く諺文を付たれば。此を明らかめ試ばやと思ひて。其事にいたづき居るよし云ふにぞ。いと歎喜しくて。上の件記せる事どもを語り。写し持たる肥人書。薩人書をも示せて。彼の諺文は。これの皇國字の。彼國に古く遺り傳はれるを。其國の原文にとり成し。悉曇章によりて。梵字の用格に用ふべく。彼の國人のさかしらせる物と見ゆ。と云へば。甚く感よろこびて。然も有らば。疾く神世の字を。明め給へと云ふに。また思ひ發ちて。己もまづ。諺文の成たる本より明らかめてむと。其の事の見えたる書どもを。彼此とあなぐり索めて。

26) 이 인물은 에도시대의 국학자로 알려진 屋代弘賢(1758-1841)로 보인다.

27) [원문]屋代翁に。訓蒙字會を借り。(中略)伴信友に。朝鮮原文訳語といふ物をかり。(中略)高田与清に。朝鮮板の。衿陽雜録といふ書の。漢字の下に。諺文を加たるなど借り集へ。

이러한 서책들을 가지고 자세히 살펴보고 생각해낸 결론은 다음과 같다.

이렇게 지금 기록되어 전해지는 옛글 등을, 소위 肥人書, 薩人書로서, 이는 곧 神世의 古字라고 생각을 굳히게 되었다²⁸⁾.(p.184)

그런데 閔(2004a)에서는 行智 저 『諺文攷』(1819)와 『諺文解』(1834)에 韓語를 梵語에 빗대는 경우가 많다는 점과, 韓語와 梵語 사이에 차이가 있는 곳에 韓語에 대한 해석에 있어서 오늘날의 관점에서 보면 오류가 발생되고 있다는 사실에 근거해서, 行智는 한글의 체계와 梵字의 그것이 같은 원리 아래에 있다고 인식하고, 또 그러한 관점에 입각해서 韓語를 이해하고 있다고 밝혔다. 이러한 인식을 가진 行智의 영향도 있었기 때문인지 篤胤 역시 梵字와의 관련 속에서 언급하는 부분이 적지 않다. 다만 아래 인용문에서 볼 수 있듯이 일본의 문자를 가장 우월한 것으로 자리매김한다.

어떤 설에 이로하(以呂波) 글자는 梵字의 書法에 따라 만들어졌다고 하는 설도 듣지만, 이는 본말이 다르다. 이는 내가 아는 사람인 円明院의 行智가 悉曇字記積에 梵字는 皇國에 건너오고 나서 우아하고 아름답게 되었다. 이는 자연스럽게 皇國 書風の 아름다움이 옮겨간 것으로서, 弘法 이래의 일로 보인다. 옛날 天竺 漢土에서 썼던 梵字는 지금 皇國에서 적는 梵字와 비교하면 매우 굵어서 지지분한 글자체라고 한 것은 정말로 명백한 설로서, 梵字도 이로하(伊呂波) 글자도 皇國의 書法을 옮겼기 때문에 아름다워진 것이다²⁹⁾.(『古史徵』 p.41)

한편 閔(2004a)에서 行智는 『訓蒙字會』를 통해 韓語에 대한 종래의 오류를 바로잡게끔 되었다는 점을 밝혔다. 그런데 行智의 『諺文解』에는 아래 인용하는 바와 같이 ‘肥人書’에 대해 언급한 부분이 있다.

‘諺’은 『廣韻』에 ‘俗言也’라고 註한다. 俚俗의 通用에 편리하게 만든 文이기 때문에 그렇게 이름 붙인다. 이 文에 古今의 2체가 있다. 古體는 三韓國 초에 만들어 전해지는 것일 테다. 今體는 일본의 後小松院 明德 3년 壬申(* 南朝 後龜山院 元中 9년) 明太祖 洪武 25년에 즈음하여 高麗의 李成桂라는 者가 自立하여 國을 朝鮮이라 칭한다. 그 아들인 世宗 시절, 明의 太宗 永樂 年間에 前代의 古文을 고치고 줄여서 今體의 諺文을 만든다. 당시 나온 世宗御製訓民正音이라는 책이 있어 그 나라에서 간행했다. 이것이 곧 지금의 諺文의 시작이다. 古文은

28) [원문]斯て今著はし伝ふる遺文等を。謂ゆる肥人書。薩人書にて。是やがて。神世の古字と。思ひ定めたるになむ有りける。

29) [원문]或ル説に以呂波ノ字は、梵字の書法にならひて、作り成せりと云へる説も聞ゆれども、此は本末違へり。其は我が知る人円明院ノ行智が、悉曇字記ノ積に、梵字は皇國に渡り来てより優美くなれり。其は自然に皇國の書風の美さのうつれるにて、弘法よりの事と見ゆ。古く天竺漢土にてかける梵字は、今皇國にて書ところの梵字にくらべては、甚詰訕ツにきたなげなる字体なりと云へるは、信に然る説にて、梵字も伊呂波字も、皇國の書法をうつせる故に、美くなれるなり。

篤胤은 이것이 屋代가 소장하고 있던 것을 빌려 베껴 쓴 것이라고 밝히고 있는데, 아울러 다음과 같이 기술한다.

단 드물게는 글자에 잘못이 있는 것도 있어서, 三韓紀略에 인용된 것에 의해 보완도 하고, 바로잡기도 하여 인용했다³²⁾.(p.207)

이에 어떤 부분을 바로잡았는가를 찾아보니 예컨대 한글의 ‘ㅋ’을 ‘ㅋ’와 같이 고치는 등 한글 글자체의 일부가 변형되어 있을 뿐이었다. 또한 篤胤의 논의 그 가운데 주목되는 하나는 ‘日非는 日文로는 日인 것을 어찌하여 이렇게 잘못 전했는가(何にしてかく訛り伝へたるか)日非は日文にては日なるを。何にしてかく訛り伝へたるか)’하는 自問이다. 이에 대해 篤胤은 ‘어쩌면 조선인이 아는 체 한 것일지도 모른다(もしくは朝鮮人の、さかしらならむも知るべからず)’는 견해를 밝힌다. 또한 ‘悉曇의 이치조차 모르는 잘못’이 있다는 생각을 밝히기도 하고, 일본의 ‘五十音図’에 의거하여 『訓蒙字會』의 내용을 비판하는 등, 앞서 살펴본 바와 같이 자신이 경계한 ‘매우 유치하고 무계한 주장’을 펼치고 있는 것이다. 이와 같이 篤胤은 한글의 글자체에 집착하여 그 일부를 ‘보완’ 수정하는 등의 방법과 한글의 체계를 ‘五十音図’의 틀 속에 끼워 맞추려는 시도를 통해 『訓蒙字會』까지도 자신의 주장을 뒷받침하는 전거로서 이용하려 했던 것이다.

마지막으로 篤胤의 다음 언사에 주목하고자 한다.

글자는 소리의 숫자만큼 적는 것처럼 편리한 것은 없다. 그런데 漢國에는 글자가 많아 오히려 불편하고 번잡하다고 하는 것은 이미 本居宣長가 자세히 설명한 바와 같다. 또한 서양인도 매우 漢文字를 비웃어, 漢人은 너무나도 글자를 많이 만들어서 일생 자신의 國字를 다 알 수 없다고 한 것도 생각해야 한다³³⁾.(『古史徵』 p.37)

위 인용문은 이를테면 표음문자의 우수성을 강조하는, 그런 의미에서 漢字 사용에 대한 비판으로 여길 수 있는데, 이는 후일 前島密가 행한 건의와 맥락을 같이하는 것으로서 흥미롭다. 즉 前島는 한자를 폐지하고 仮名와 같은 표음문자를 사용할 필요가 있음을 깨닫고, 1866년 12월 開成所 대표(지금의 동경대 총장)인 松本寿太夫에게 부탁하여 당대의 將軍인 徳川慶喜에게 「漢字御廢止之儀」라는 제하의 건의서를 제출했던 것이다. 이렇게 볼 때 篤胤의 『神字日文伝』에서의 업적은 ‘神代文字’ 존재 주장에 있는 것이 아니라, 종래

32) [원문]但し稀には、字の誤りたるも有るをば、三韓紀略に引けるによりて、補ひもし、正しもして引きたり、

33) [원문]字は音の数ほど印せるばかり便よきはなし。然るを漢國には字多くて、却て便悪く煩はしき由は、果居ノ大人鈴屋ノ大人の、既に委く弁られたるが如し。また西洋人も甚く漢文字を笑ひて、漢人は余りに字を多く製して生涯己が國字を知尽すこと能はずと云へるをも思ふべし。

한자음 연구에 치중되어온 언어와 관련된 학문의 흐름을 문자에 관한 관심으로 돌리고, 그 연장선상에서 漢字 문제를 포함한 표기법 문제를 제기함으로써, 明治 이후의 소위 ‘國語國字問題’를 선도했다는 점에서 찾아야 할 것으로 생각된다.

6. 맺음말

이상 본고에서는 소위 ‘神代文字’의 존재를 주장한 대표적인 인물인 平田篤胤 저 『神字日文伝』의 집필 이유 및 내용, 그리고 본서에 『訓蒙字會』가 게재되게 된 경위 등에 대해 살펴보았다. 그 결과 다음과 같은 몇 가지 사항을 확인할 수 있었다.

먼저 『神字日文伝』은 『古史徵』를 통해 ‘神代文字’의 존재를 밝혔음에도 불구하고 믿지 못하는 사람들이 적지 않다는 점과, 이후 발견되고 수집한 ‘神代文字’의 물증들이 너무나도 한글과 유사하다는 점에 대한 당혹감에서, 한글과 ‘神代文字’를 ‘肥人書’와의 관계 속에서 논의할 필요가 있다는 인식을 구체화하기 위해 작성된 것으로 보인다.

다음으로 篤胤은 이것이 ‘神代文字’의 실체라며 『神國神字弁論』을 통해 처음으로 세상에 공표한 諱忍에 대해, 그 전거로 삼은 문헌에 문제가 있다는 이유 등에서 그를 비판하면서도, ‘神代文字’가 존재한다는 것은 단순한 ‘애국담’ 만은 아니라는 입장을 밝히고 있다.

아울러 新井白石에 대한 비판 등을 바탕으로, 한글이 ‘肥人書’의 위작이라는 생각을 가지고 있던 篤胤은 行智와의 만남을 계기로 『訓蒙字會』의 존재를 알게 되는데, 글자체의 異同 문제에 집착한 그는 『訓蒙字會』의 일부를 ‘보완’ 수정하는 등의 방법과 ‘五十音圖’의 틀 속에 한글을 끼워 맞추려는 시도 등을 통해, 『訓蒙字會』를 자신의 주장을 뒷받침하는 전거로서 이용하려 했다.

마지막으로 篤胤은 漢字 사용의 문제점을 언급하고 표음문자의 우수성을 강조하는데, 이는 후일 漢字 사용 폐지를 주장한 前島密에 연결되는 언사로서, 篤胤의 『神字日文伝』에서의 업적은 ‘무계’한 ‘神代文字’ 존재 주장에 있는 것이 아니라, 종래 한자음 연구에 치중되어온 언어와 관련된 학문의 흐름을 문자에 관한 관심으로 돌리고, 그 연장선상에서 漢字 문제를 포함한 표기법 문제를 제기함으로써, 明治 이후의 소위 ‘國語國字問題’를 선도했다는 점에서 재조명되어야 할 것으로 생각된다.

◀ 参考文献 ▶

- 新井白石 『同文通考』, 古屋彰解説(1979), 勉誠社文庫70.
 佐藤喜代治編(1977) 『国語学研究事典』 明治書院
 白井寛蔭 『音韻仮字用例』, 湯沢質幸解説(1978), 勉誠社文庫53
 花岡安見 (1902) 『国語学研究史』 明治書院
 湯沢質幸(1996) 『日本漢字音史論考』 勉誠社

- 平田篤胤全集刊行會編(1977)「古史徵」『新修 平田篤胤全集 第5卷』名著出版
平田篤胤全集刊行會編(1978)「神字日文伝」『新修 平田篤胤全集 第15卷』名著出版
原本國語國文學叢林6『原本 訓蒙字會』(1988), 大提閣
新日本古典文學大系3『萬葉集 三』(2002), 岩波書店
閔丙燦(2004a)『日本韻學と韓語』불이문화.
閔丙燦(2004b)「白井寬蔭의 韓語 理解와 그 利用에 대하여」『日本學報』61, pp.97-110.
오만(1997)「훈민정음 기원설 - 일본 「神代文字起源說」을 비판, 부정한다」『배달말』22. 배달말학회, pp.121-135
李基文(1971)『訓蒙字會研究』서울大學出版部

■ 투 고 : 2010. 5. 31.

■ 심 사 : 2010. 6. 12.

■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

要求・依頼を表す複合辞「～てほしい」の通時的研究

安志英*
nazue@hanmail.net

<ABSTRACT>

Since the study of 「-tehosii」 has been dealt mainly in the contemporary grammar and dialect, this thesis was done in a way different from the previous studies by using resources written during the Meiji period such as hanashibon, novels, Yomiuri newspaper and Taiyo journal. As a result, the first recorded appearance of 「-tehosii」 in Japanese literature was in a book called *Kinouwakyoumonogatari* around year 1624. It was first used in kamigata region compared with other regions. Thus, it was mainly used in Kansai dialect. In my research, 「-tehosii」 was often used in hanashibon and Yomiuri newspaper during the Meiji period. 「-tehosii」 was considered as a spoken language. In particular, 「-tehosii」 often appeared in readers' column in newspapers during this period. I think it was because a readers' column reflects a relatively easy spoken language to target women and young persons as main readers, which is the characteristic of kosinbun. Kosinbun use simple and straight forward expressions that are easy to understand which is preferred by women and young persons. In contemporary grammar, the common negative forms of 「-tehosii」 are 「-tehosikunai」 and 「-naidehosii」. But in my research, it was found out that aside from those two mentioned, the expression 「-nai(nu)youni-tehosii」 was also used. In frequency of usage, 「-nai(nu)youni-tehosii」 was more popular than 「-naidehosii」. It means that the softer expression 「-nai(nu)youni-tehosii」 was preferred over 「-naidehosii」 at that time. I think this is the reason for the delay of the popularity in the usage of 「-naidehosii」 just like what is stated in previous researches and studies. However, during the Showa period, 「-nai(nu)youni-tehosii」 was non-existent. It means that 「-nai(nu)youni-tehosii」 was not established as a compound auxiliary verb. Instead, the expressions 「-tehosikunai」 and 「-naidehosii」 were later commonly used.

Key word : Compound particles and compound auxiliary verb, 「～tehosii」, Demand and Request, A study of Historical Linguistics of Japanese

1. 序論

要求・依頼を表す複合辞¹⁾の中の一つである「～てほしい」は、『日本語文型辞典』によると、以下のように記述されている。

* 高麗大 講師、日本語学

- 1) 複合辞とは、いくつかの語が一まとまりとなって、その一まとまりが固有の「付属語」(辞)的な意味を担うものとして用いられる形式をいう。たとえば、「において」、「がよい」などがこれに属し、「が」「よい」のような語が複合して一まとまりとなり、固有の意味になった表現の類である。このような複合辞について松木正恵は、形式全体で一つの助詞と同様の働きをするものを助詞性複合辞、同じく、形式全体で助動詞と同様の働きをするものを助動詞性複合辞としている。本稿の対象である「～てほしい」は助動詞性複合辞である。

【てほしい】

1. 自分以外の人に対する話し手の希望や要求を表す。「～してもらいたい」「その状態でいてもらいたい」という意味で、「その人が何かをしてくれること」を望んだり、「その人がある状態にいること・ある状態になること」を望んだりしていることを表す場合がある。否定の形には「V～ないでほしい」と「V～てほしくない」の二つがある。「V～ないでほしい」は、「～しないでください」という依頼の表現としてよく使われる。「V～てほしくない」を使うのは、自分の望みを聞き手とは関係なく述べる場合や、聞き手のとった行動に対する非難となる。

(例) この展覧会には、たくさんの人に来てほしい。

2. ある事態が生じることを望んでいるという意味を表す。対象が人間の時は「Nに」で表されるが、ある事態が生じることを望む場合には「が」で現れる。

(例) 早く夏休みが始まってほしい。

3. 「聞き手にある行動をしてもらいたい」という話し手の願望を述べて、間接的に依頼する表現。

(例) 今日は早く帰ってきてほしいんだけど。

このような意味で用いられる「～てほしい」の先行研究はほとんど現代語に限られており、通時的研究はわずかしがなく、その初出は『日本国語大辞典』によれば『好色五人女』とされているが、先行研究を検討すると、『萬年草』に見える次の用例²⁾となるようである。

(1) (祝詞ノ) 盃延べてほしけれど親のくうけん是非なふて

これ以外、方言研究の視点からの言及もある。まず、方言資料で知られる『浪花聞書』に次のように記述されていることから、江戸時代はおそらく上方を中心として使われていたかと考えられる。

(2) ○ほしい 何して貰いたひと云ふことを何してほしいと云。

そして、工藤真由美 (1979) は、依頼表現の「～てくれ (てくれるな・ないでくれ)」「～て (ないで)」「～てちょうだい (ないでちょうだい)」「～てもらいたい (ないでもらいたい)」「～ていただきたい (ないでいただきたい)」「～てほしい (ないでほしい)」の形式を中心に江戸語資料や明治以降の資料などを利用して調査した結果、「～てほしい」は江戸語から、「～ないでほしい」は戦後から使われるようになったことを指摘した。

2) 『徳川時代言葉の研究』から引用。

また、三井はるみ（2007）は国立国語研究所が作成した『方言文法全国地図』と『方言文法資料図集』を利用し、「～てほしい」は近畿地方を中心に分布していることや「～てほしい」が1926年を境に全国的に増加したことを指摘し、中村通夫（1957）の「戦後直後の「～てほしい」が共通語的な場で多く使われ出した」という言及については1926年生まれの人が成人を迎え、社会で活躍し始めたことによって、その言葉が耳目に触れるようになったと結論づけている。

上述の先行研究では江戸時代以前の資料での考察が不十分な点、話し言葉の資料での検討が少ない点、また明治以降の用例はすべて文学資料に偏っている点などの問題点があることに着目し、本稿では対象資料として上方語の資料³⁾、噺本資料⁴⁾、明治時代の小新聞⁵⁾・雑誌⁶⁾・小説⁷⁾などを用いて再考することにした。次に、それらの資料から収集できた用例を根拠とし、「～てほしい」の初出や変遷過程を実証的に考察することにする。

2. 各資料における複合辞「～てほしい」の実態

上述した資料における「～てほしい」を調査した結果、肯定表現と打消表現によって、特徴的な結果が見られる。そこで、それぞれの表現形式について述べることにする。

2.1 「～てほしい」の肯定表現

(1) 江戸時代までの実態

江戸時代までの資料ではその用例のほとんどが噺本に見え、話し言葉でよく使われていたようである。初出は、先行研究においては『萬年草』とされているが、調査した結果、さらに13年早い『きのふはけふのものがたり』に見えることがわかった。願望表現として用いられたものである。

(3)あれハ、大さからう人ちやというふ。さやうにみえた、よい子ちやか、とても野事に、へゝをつけてほしや、といへは、此中、長老さまも、さやうにおほせらるゝ、と申た

[きのふはけふのものがたり 古活字十行本 89-4]

そして、「～てほしい」の用例は古くはすべて願望を表していたが、『頓作万八噺』に初

3) 岩波書店刊行『日本古典文学大系』（1957～1969）の中の上り語資料を調査対象とする。

4) 武藤禎夫・岡雅彦編『噺本大系』（1975～1979）の20巻(約2万話)を調査対象とする。

5) 小新聞である読売新聞のデータベースを利用し、明治・大正・昭和期の記事から収集する。

6) 博文館から刊行された総合雑誌『太陽』（1895～1925）のデータベースを利用し、その用例を収集する。

7) 「新潮文庫明治の文豪CD-ROM」と「新潮文庫大正の文豪CD-ROM」の資料を利用する。

めて依頼を表す用例が見える。

(4)とうぞとゝ様。ゆもじに、めづらしいもやうを、そめてほしいござんす。 [頓作万八噺 173]

また、用例 (5) のように、聞き手に対する願望や依頼ではなく、ある事態が生じることを望む意も『雅興春の行衛』から見えるようになる。

(5)わしやもう早う春になつてほしい。 [雅興春の行衛 53]

特に、用例 (6) ~ (7) は「…が～てほしい」という文型で、目的格に「ガ格」をとって、現在の使い方とは異なっている。これは、「～てほしい」が「…がほしい」から発生したため、その影響によって当初対象語格の「ガ」格をとったのではないと思われる。

(6)アノやうにつむりが長ふしてほしい事てござります。 [時勢話大全 58]

(7)てうどゆかたのせんたくができた。つゐでに糊がつけてほしい。 [噺栗毛 316]

また、「～てほしい」と「どうぞ」が呼応して使われている用例も次のように見出せた。

(8)それゆゑつかへやら、しやくやらで、甚 (はなはだ) 気 (き) ぶんがわるひ。どうぞ此しやくがなをしてほしい。 [会席噺袋 337]

そもそも「ほしい」⁸⁾は、『万葉集』に見える「自分のものにしたい。手にいれたい。」の意から「そうありたいと思うさま。望ましい」の意に変化し、そこに「て」が接続されるようになり、付加的な意味が発生し、現在の「～てほしい」の用法になったものである。それゆえ、用法が成立した当初は「～てほしい」はまだ「ほしい」という語自体の意味が強く、依頼の意味は希薄で、もっぱら願望の意で用いられたのであろう。

次の<表1>は江戸時代までの「～てほしい」の用例数を示したものである。

<表1 江戸時代までの「～てほしい」の実態>

資料	表現	「～てほしい」	
		願望	依頼
きのふはけふのものがたり (1624頃)		1	
好色五人女 (1686)		1	
軽口露がはなし (1691)		1	
初音草噺大鑑 (1698)		1	

8) 『日本国語大辞典』によると、その初出は『万葉集』で、上述した意として使われている。用例は次のようである。「山城の久世の若子が欲といふわれあふさわに吾れを欲といふ山城の久世 (人麻呂歌集12・2362)」

けいせい反魂香 (1708)	1	
大經師昔暦 (1715)	1	
鎌倉三代記 (1716)	1	
軽口新歳袋 (1741)	1	
頓作万八斬 (1776)		1
時勢話大全 (1777)	1	
雅興春の行衛 (1796)	1	
庚申講 (1797)		1
曲雑話 (1800)	1	
会席噺袋 (1812)	2	1
浮世風呂 (1809～1813)	1	
百生瓢 (1813)	1	
噺栗毛 (1830)	1	1
計	16	4

上の表からも分かるように、江戸語資料での用例はかなり少なく、しかも『浮世風呂』における用例は上方から来た女性の言葉に用いられたものであった。「～てほしい」は上方語に主として使われ、江戸語ではあまり用いられなかったと見られる。

これは三井はるみ (2000) の先行研究とも一脈相通ずるところで、近畿地方の方言における使用率の高さを裏付けるものといえよう。

(9)あないは (あのやうなといふこと) 着物がしてほしいわエ [浮世風呂 二編巻之上]

(2) 明治・大正期の小説の「～てほしい」の実態

明治・大正期の小説における用例は全体的に多くはないが、前代と同じく願望の意で用いられる傾向が強い。そして、次第に依頼表現の用例も増加していく様子も見える。

また「～てほしい」の場合、江戸時代までは「ガ」格をとっていた用例が多かったが、明治・大正期でも数少ないものの、その用例がみえる。古い用法が残存していたといえる。1910年以降はそのような用例は全く見えない。

一方、古くは「どうぞ」と呼応する用例が見当たらなかったが、現代日本語でよく共起する「どうか(して)」とともに用いられている用例も見えるようになる。

(10)芸事で宗山の留を刺したほどの豪い方々、是非に一日、山田で謡が聞かして欲しい、と羽織袴、フロックで押寄せたろう。 [歌行燈]

(11)生れたものの貰われて行った先で、どうかしてこの子のお母さんの苗字だけでも明して欲しい、それを明すことが出来なければ東京のどの辺か [新生]

明治・大正期の小説における「～てほしい」を表にまとめると、次のようになる。

<表2 明治・大正時代の小説での「～てほしい」の実態>

年度	表現	「～てほしい」	
		願望	依頼
1897年		1	
1899年		1	
1907年		7	
1908年		1	
1910年		2	2
1911年			1
1914年			2
1916年		4	
1918年		4	2
1919年		3	1
1920年			1
1922年		5	
1924年			1
1925年		1	
1926年			1
1929年		4	4
1930年		4	
1941年		1	2
計		38	17

(3) 小新聞の「～てほしい」の実態

中村通夫(1957)の研究に、「～てほしい」は新聞の投稿によく見られるという指摘があり、明治・大正期の小説以外にも小新聞である「読売新聞」の用法を調べた結果、数多くの用例が新聞の投稿欄に見える。また、依頼表現が圧倒的に多いこともわかった。

さらに、「せめて」「ぜひ」のような副詞と共起する用例も多くなることが目立つ。このような副詞との共起は、依頼のニュアンスがより明確になり、正確な意味伝達を要求される新聞ならではの表現であろう。

(12)付録は刷りが悪く小さくて破れやすい、せめて記事大に改めて欲しい。

[読売新聞 1875年 12月 20日]

(13)ぜひ実行に移してほしい。

[読売新聞 1875年 11月 7日]

<表3 読売新聞での「～てほしい」の実態>

年度	表現	「～てほしい」	
		願望	依頼
1874年			1
1875年		2	11
1876年		1	20
1877年			4
1878年			9
1879年			2
1880年			3

1882年		1
1883年		1
1889年		1
1890年	1	
1891年	1	
1893年		1
1895年	1	
1900年		1
1907年		1
1909年		1
1918年		1
1919年		5
1920年	2	1
1921年		1
1922年		2
1923年		2
1925年	3	2
1926年	2	7
1927年		5
1928年		3
1929年	1	2
1930年		2
1931年	2	1
1932年	1	3
1933年	2	1
1934年	1	1
1935年	1	
1936年	1	2
1937年	1	
1938年		1
1939年	3	
1941年		1
1944年	1	2
計	27	102

このように、新聞に「～てほしい」の使用がこのように多いのは、投書という比較的口頭語が反映しやすい記事が掲載されたからであり、そして小新聞という性格から婦女子を対象とするために、わかりやすい言語表現が好まれたからであるように思われる。さらに、その使用頻度の多さから見ると、明治初年以降、依頼表現の新しい言い方として使われるようになったことを示すものかと思われる。

(4) 雑誌『太陽』の「～てほしい」の実態

「論説」「評論」に用いられた「～てほしい」の表現は比較的多く、中でも「…ように～てほしい」、漢文訓読風の「…をして…しむるように～てほしい」などの特殊な文型がみえる。

(14)外國に對してはなるべく文飾して侮られるやうにもして欲しいといふのである。

[太陽 1909年 5号]

(15)亦決然起つて、男子をして一切後顧の憂無からしむるやうにして欲しいものである。

[太陽 1917年 3号]

そして、「どうぞ」や、その「どうぞ」の強調形「どうぞして」と呼応して使われたものも一例ずつあり、また「どうか～してほしい」の用例も見えた。

また、「～してほしい」の後に「ものだ」が接続されている用例も多く見え、そのニュアンスをより強くさせ、複合辞化していく様相を表していると思われる。

(16)此の新春の初日の出と共に大分景氣がついて來たやうだが、どうぞ此年は此の勢でずつと推して行つてほしいものだ。

[太陽 1901年 1月]

(17)あんたが私のためにこないにお成りやしたと思はれるのが辛うおすさかひ、何卒して偉い人になつて欲しいと心で祈つてますのやわ。

[太陽 1917年 1号]

(18)強い確信をもつて言つて居ることは判る。どうか氏の言ふ通り今年の文壇は景氣よくあつて欲しいものだ。

[太陽 1917年 2号]

<表4> 『太陽』での「～してほしい」の実態

年度	表現	「～してほしい」	
		願望	依頼
1895年		2	1
1901年		1	
1909年		1 2	2
1917年		2 0	4
1925年		9	6
計		4 4	1 3

2.2 「～してほしい」の打消表現の実態

「～してほしい」の打消表現は、明治以前まではその用例は見当たらない。工藤真由美(1979)には、戦後からそのような形式が見られると指摘されているが、調査した結果、数は少ないものの、1875年からすでにその形式がみえることがわかった。

(1) 明治・大正期の小説の「～してほしい」の打消表現の実態

現代日本語では「～てほしくない」と「～ないでほしい」が打消表現として認定されているが、明治・大正期の小説では「～ないでほしい」は全く見えず、その代わり、願望の意味が強い「～てほしくない」が1918年に初めて現れる。

<表5> 明治・大正の小説での「～てほしい」の打消表現の実態

年度	表現	～てほしくない
	1918年	1
	1927年	1
	計	2

(19)併し継母の気持としては、借家も出来た以上一日も半日も、継母の所謂かまどにゐてほしく
無いと云ふ訳なのだ。 [呪はれた手]

(20)まア、あまりさういつた変化のある方に居て欲しくないといふのは、どうも本 当のところ
らしいですな。 [酔狂者の独白]

(2) 小新聞の「～てほしい」の打消表現の実態

『読売新聞』における「～てほしい」の打消の表現も用例は少ないが、依頼表現において1875年と1877年に一例ずつ見えた。

<表6> 『読売新聞』での「～てほしい」の打消表現の実態

年度	表現	「～てほしい」の打消の表現 (依頼)	
		「～ないでほしい」	「ないように～てほしい」
	1875年	1	
	1876年		1
	1877年	1	
	計	2	1

工藤真由美 (1979) では「～てほしい」の打消表現は戦後から見えると結論されているが、実際にはその使用は70年以上前に遡ることになる。現代においても用いられているこの表現がかなり早い時期から使われ、定着してきたものと思われる。さらに、その表現が先行研究に言及がなかった「…ないように～てほしい」という別の表現で用いられていたことも注目される。

(21)投書は厳選して 面白くないのは掲載しないで欲しい。 [読売新聞 1875年 5月 7日]

(22)息子の刑死を、孫の戸籍に載せないで欲しい。 [読売新聞 1877年 9月 12日]

(23)報道には正確を期し、誤報で人の名誉を傷つけないようにして欲しい。
[読売新聞 1876年 11月 17日]

(3) 『太陽』の「～てほしい」の打消表現の実態

総合雑誌『太陽』では願望と依頼の打消表現が見える。「～てほしい」では、願望の表現

には「～てほしくない」が用いられ、依頼の表現では「～ないでほしい」が全く見えず、もっぱら「…ない(ぬ) ように～てほしい」が使用されている。

次の表は雑誌『太陽』における「～てほしい」の打消表現をまとめたものである。

<表7> 『太陽』での「～てほしい」の打消表現の実態

年度	表現	「～てほしい」	
		～てほしくない	(ぬ) ないように～てほしい
1895年			1
1917年		1	
1925年			3
計		1	4

『読売新聞』と比べると、「～ない(ぬ) ように～てほしい」の形も用いられているということが分かる。「～てほしくない」と「～ない(ぬ) ように～てほしい」との用例数は拮抗しており、前者の直接的な言い回しに対して、後者には柔らかい語感が感じられ、そのため広く用いられたものと見られる。

(24)僕は二重丸とらない間にかいてほしくないの。 [太陽 1917年 10号]

(25)即ちオリジナリテがあるとカキヤラクタリスチツクだとかいふ作品が出たならば、それを見るのがさないやうに又養成する方針に出でて欲しいのです。 [太陽 1925年 14号]

また、このような表現がよく使われたことによって、先行研究において「～ないでほしい」の出現ならびに定着が遅くなったというように結論づけられたと思われる。なお、明治・大正期以降の小説や新聞及び雑誌で「～ない(ぬ) ように～てほしい」の用例が見えなくなり、「～ないでほしい」「～てほしくない」が増えることもこのことを裏付けるものといえよう。

3. 結論

以上、要求・依頼を表す複合辞「～てほしい」について、おおまかにその初出と変遷についてみてきた。その通時的様相を示すと、次の通りである。

- ①「～てほしい」は、当初願望表現に使われ、最も古い使用例は『きのふはけふのものがたり』（1624年頃）である。一方、依頼を表す最も古い用例は『頓作万八噺』（1777年刊行）である。なお、願望や依頼ではなく、ある事態が生じることを望む意を表す「～てほしい」は『雅興春の行衛』（1796年）から見える。

- ②そもそも、「～てほしい」は形容詞「ほしい」から発生し、それに「て」が接続するようになり、付加的な意味が生じて「～てほしい」の用法になった形式である。従って、当初は「ほしい」という本来の意味が強かったため、依頼の用法が少なく、願望の意味で使われた。
- ③「～てほしい」の地域別の使用に関しては、上方語において「～てほしい」が早くに使用され、定着していることがわかる。
- ④「～てほしい」は、特に噺本資料に多く見えることから、江戸時代では話し言葉でよく使われていたことが分かる。また、新聞の投稿欄に「～てほしい」が多く見られることは、投書という比較的口頭語が反映しやすい、そして小新聞という性格から婦女子を対象とするため、わかりやすい言語表現として意識されたからであろう。
- ⑤「～てほしい」は、江戸時代では現代の用法と違って、目的格を表す場合「ガ」格をとる用例が見えるが、これは「～てほしい」が「～がほしい」から発生し、その影響によるものであろう。これは明治以降にもつながるが、それ以降、次第に「ガ」格の使用が衰退し、現代と同じ用法となった。
- ⑥「～てほしい」の打消用法は、現代日本語では一般的に「～てほしくない」「～ないでほしい」という形式で使われるが、それ以外に「…ない(ぬ)ように～てほしい」という表現があった。使用頻度においても「～ないでほしい」よりやや柔らかいニュアンスが感じられることから好まれて用いられたと思われる。それゆえ、「～ないでほしい」「～てほしくない」の定着が遅くなったものと考えられる。なお、それ以降次第に「～ない(ぬ)ように～てほしい」の用例が見えなくなり、「～ないでほしい」「～てほしくない」が増えてきて、現代のように定着したものと思われる。
- ⑦工藤真由美(1979)には依頼における「～ないでほしい」が戦後から現れるとされていたが、今回の調査によって「～ないでほしい」は1875年から見えることがわかった。

◀ 参考文献 ▶

- 工藤真由美(1979)「依頼表現の発達」『国語と国文学』, 東京大学国語国文学会. p46-64
- グループ・ジャマシイ(1998)『日本語文型辞典』, くろしお出版. p526-528
- 国立国語研究所(1981)『方言文法資料図集』.
- (2002)『方言文法全国地図』.
- 小学館国語辞典編集部(2000)『日本国語大辞典』, 小学館.
- 中村通夫(1957)『NHK国語講座 現代語の傾向』, 宝文館.
- 正宗敦夫編(1913)『片言 付補遺物類稱呼・難波聞書・丹波通辞』, 日本古典全集刊行會. p4
- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語教育センター紀要2』. p27-52
- 三井はるみ(2007)「要求表現形式「～てほしい」の共通語としての定着—『方言文法全国地図』から見る—」『日本語学』臨時増刊行 vol.26, 明治書院. p102-110
- 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』, アルク. p526-528
- 湯沢幸吉郎(1955)『徳川時代言語の研究』, 風間書房. p223

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

잉여적 선택성에 기초한 「なさる」와 「される」의 사용상의 기준*

— 신약성서(신공동역)의 4복음서를 대상으로 하여 —

李成圭*
Leesk@inha.ac.kr

<要 旨>

本稿では日本聖書協会発行の新約聖書(新共同訳)四福音書を対象として「する」の尊敬語形式である「なさる」と「される」の使用実態を分析することにより、両者の使用上の基準に関して検討した。

本稿で考察した内容を整理すると、以下の通りである。

1. 四福音書から「なさる」には、次のような使用上の基準が認められる。
 - [1] 地文において<神>の行為に関しては、行為主体が絶対的な存在として認められ、当該行為が<神>の関与する包括的で甚大な事柄、または「証し」や「裁き」のように、聖書では神の領域に属す絶対的な権能と見做される事柄については「なさる」が使われている。これに対し<イエス>の行為に関しては、当該行為が個別的で具体的なものでなく、規模が大きく抽象度の高い神の領域に属す事柄と見做される時、これを四福音書では<神>の行為と同格に扱って「なさる」が使われている。
 - [2] 一方、対話文では待遇表現上の一般的な規則が適用された例を除くと、全て<イエス>を高めるのに「なさる」が使われている。この時<イエス>の行為に関しては、それが個別的で具体的なものであるか、規模が大きく抽象的な事柄であるかという区分は適用されない。
2. 尚「される」には、次のような使用上の基準が認められる。
 - [3] 地文において<神>の行為に関しては、該当行為が個別的で具体的なものの場合に限って「される」が使われており、また、<イエス>の行為に関しても、当該行為が個別的で具体的なものであることを表すのに「される」が使われている。
 - [4] 「される」は対話文では<ヨハネの弟子>が<ヨハネ>を高めたり、または対話文に相当する文章では<ヨハネ>が<イエス>の行為を高めるのに使われている。

以上のように四福音書では、従来の敬語教育や日本語教育次元で述べている規範意識上の敬語使用規則とは異なり、「なさる」と「される」の敬意度の違いを、1)<神>または<イエス>であるか、その他であるかといった敬意主体の区別と、2)当該行為が包括的で抽象的な事柄であるか、或いは個別的で具体的なものであるかという行為対象の範疇的な違い、3)そして地文または対話文であるかという文体上の違いの区分に反映させている。そしてこのような「なさる」と「される」の併用は単に敬語表現の混用ではなく、翻訳者の立場から - 高度に意図された - 同一動詞の尊敬語形式に表れる剩余的選択性を積極的に活用し、日本語聖書の本文を正確に理解させるために、使用上の基準によって運用されていると解釈される。このような「なさる」と「される」における使用上の基準は、李成圭(2010a)で「おっしゃる」と「言われる」を対象に行った使用上の基準、李成圭(2010b)で「おいでになる」と「行かれる・来られる」を対象に行った使用上の基準と原則的に一致する。

キーワード： 尊敬語形式、なさる、される、剩余的選択性、使用上の基準

1. 들어가기

李成圭(2010a), 李成圭(2010b)에서는 日本聖書協会에서 제공하고 있는 新約聖書(新共同訳)의 4복음서를 대상으로 하여, 동일 동사에 복수의 존경어 형식이 공존할 경우, 과연 이들

* 仁荷大学校 文科大学 東洋語文学部 日語日本学専攻 教授, 日本語学

형식이 어떤 기준에 의해 선택적으로 사용되고 있는가 하는 사용상의 기준을 고찰했다.

본 논문에서는 「する」의 존경어 형식인 「なさる」와 「される」를 대상으로 하여 경어동사와 「レル」型の 敬語의 사용실태를 검토함으로써, 4복음서에서는 종래의 경어교육이나 일본어교육 차원에서 말하는 규범의식상의 경어 사용 규칙과는 달리, 「なさる」와 「される」의 경의도의 차이를, 1)〈神〉 또는 〈イエス〉인가 기타인가 경의 주체의 구별과, 2)당해 행위가 포괄적이고 추상적인 사항인가 아니면 개별적이고 구체적인 사건인가 하는 행위 대상의 범주적 차이, 3)그리고 지문인가 대화문인가 하는 문체상의 차이를 구분하는 데 반영하고 있다는 점을 분명히 한다. 그리고 이러한 「なさる」와 「される」의 병용은 단순히 경어표현의 혼용이 아니라, 번역자 입장에서 - 고도의 의도된 - 동일 동사의 존경어 형식에 나타나는 잉여적 선택성을 적극 활용하여, 일본어 성서 본문을 제대로 이해시키는 위한, 사용상의 기준에 의해 운용되고 있다는 점을 강조한다. 동시에 「なさる」와 「される」에 있어서의 사용상의 기준은 李成圭(2010a)에서 「おっしゃる」와 「言われる」를 대상으로 행한 사용상의 기준과 李成圭(2010b)에서 「おいでになる」와 「行かれる・来られる」를 대상으로 행한 사용상의 기준과 원칙적으로 일치한다는 점을 확인한다.

2. 복수의 존경어 형식에 있어서의 사용상의 기준

李成圭(2010a)에서는 「4복음서에 있어서의 존경어 형식의 사용실태에는 종래의 경어교육이나 일본어교육 차원에서 말하는 규범의식상의 경어 사용 규칙과는 상이한 양상이 전개되고 있다」(p.109), 는 점을 지적하고, 「言う」의 경어동사 「おっしゃる」와 「レル」型 敬語 「言われる」의 사용실태를 분석함으로써, 양자 사이에 다음과 같은 사용상의 기준을 제시했다.

「おっしゃる」는 〈神〉를 찬양하거나 또는 대화문에서 〈イエス(예수)〉를 높이는 데 사용하고 있는 데에 대해, 「言われる」는 지문에서 〈神〉과 관련된 내용을 인용하여 전달하는 형식의 지문이나 〈イエス〉의 발화내용을 나타내는 경우에 사용된다. 이와 같이 〈神〉의 발화행위에 대해서도 지문에서 「言われる」를 사용하는 경우가 있다. 이것은 4복음서에서 〈神〉과 관련된 내용을 전달함에 있어서도, 해당 행위의 규모가 거대하고 추상도가 높은 사상이라는 점에서 감히 거역할 수 없는 신의 절대적인 권능을 인정하고 이를 찬양하는 내용과 개별적이고 구체적인 사건에 대한 내용을 구분하고, 전자에 대해서는 「おっしゃる」, 후자에 대해서는 「言われる」라는 사용상의 기준이 행해지고 있다는 것을 의미한다. 지문에서는 〈神〉와 관련된 내용을 제외하면, 「言われる」는 전부 〈イエス〉를 높이는 데 사용된다. 한편, 대화문에서 「言われる」는 〈イエ스〉의 발화에 대해서도 사용이 가능하지만 「おっしゃる」보다 낮은 경의도를 반영하는 경우에 한정하여 사용된다. (李成圭; 2010a, p.110)

그리고 李成圭(2010b)에서는 新約聖書(新共同訳)의 4복음서의 「行く」의 경어동사 「おいでになる」와 「レル」型 敬語 「行かれる」, 「来る」의 경어동사 「おいでになる」와 「レル」型 敬語 「来られる」를 대상으로 하여, 각각의 존경어 형식의 사용실태를 분석함으로써, 동일 동사에 복수의 경어가 공존할 경우, 4복음서에서는 성서 오독을 미연에 방지하고자 하는 입장에서 이들 형식을 <잉여적 선택성>에 기초하여 적의 구별하여 사용하고 있다는 점을 밝히고, 다음과 같은 사용상의 기준을 제시했다.

1. 「行く」에 있어서는, 존경어 형식으로 「おいでになる」와 「行かれる」가 사용되고 있고, 전자는 대화문, 후자는 지문이라는 일단의 구분이 행해지고 있지만, 대우관계나 문체적 요인 등을 감안할 경우에는 대화문의 경우에도 「行かれる」가 사용되고 있다고 하는 사용상의 기준이 인정된다.
2. 「来る」에 있어서는, 존경어 형식으로 「おいでになる」와 「来られる」가 사용되고 있고, 그 사용실태는 「おいでになる」와 「行かれる」의 그것에 비해 다소 복잡하게 전개되고 있지만 기본적으로는 <イエス>의 이동에 대해 대화문에서는 「おいでになる」가, 지문에서는 「来られる」가 존경어 표현으로 사용되고 있다는 점에서는 「おいでになる」와 「行かれる」에 있어서의 사용상의 기준과 일치한다. 한편 선지자의 말을 인용하는 문맥이나 예수가 사용한 인용문에서, 「おいでになる」가 사용되고, 무리들이 외치는 구호나 요한이 그리스도를 찬양하는 장면 그리고 주의 왕립이라는 심대한 사건을 다루고 있는 경우에는 전통성 또는 관용성을 반영하여 「来られる」 표기를 선택적으로 사용하고 있다는 점이 특징적이다.

(李成圭; 2010b, pp.109-110)

3. 「なざる」의 사용실태와 그 사용상의 기준

「する」의 존경어표현에는 경어동사 「なざる」와 「レル」型 敬語 「される」가 있고, 「ナル」型 敬語는 성립되지 않는다¹⁾

이하, 4복음서에서 「なざる」와 「される」가 구체적으로 어떻게 구별되어 사용되고 있고, 그 경우 양자 사이에 어떠한 사용상의 기준이 인정되는가 하는 점을 검토한다.

1) 4복음서에서 「なす」의 「レル」型 敬語 「なされる」가 존경어 형식으로 사용된 것에는 다음과 같은 예가 있다.

これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、二回目のしるしである。(ヨハネによる福音書 / 4章 54節)

그리고 「なされる」는 다음과 같이 수동으로도 사용되고 있다.

また、カファルナウム、お前は、／天にまで上げられるとでも思っているのか。陰府にまで落とされるのだ。お前のところでなされた奇跡が、ソドムで行われていれば、あの町は今日まで無事だったにちがいない。(マタイによる福音書 / 11章 23節)

「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ。お前たちのところでなされた奇跡がティルスやシドンで行われていれば、これらの町はとうの昔に粗布をまとい、灰の中に座って悔い改めたにちがいない。(ルカによる福音書 / 10章 13節)

しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」(ヨハネによる福音書 / 3章 21節)

3.1. 「なさる」의 사용실태

3.1.1. 지문에서의 「なさる」의 사용실태

먼저 지문에 사용된 「なさる」의 예부터 살펴보자.

- (1) 力ある方が、／わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、
(ルカによる福音書 / 1章 49節)
- (2) 「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。
(ル카による福音書 / 8章 39節)
- (3) あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」
(マタイによる福音書 / 18章 35節)
- (4) イエスは言われた。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。『家を建て
る者の捨てた石、／これが隅の親石となった。これは、主がなされたことで、／わたしたち
の目には不思議に見える。』
(マタイによる福音書 / 21章 42節)
- (5)そこで、イエスは彼らに言われた。「はっきりしておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。
(ヨハネによる福音書 / 5章 19節)
- (6) 父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのこと
よりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。
(ヨハネによる福音書 / 5章 20節)

(1)은 마리아의 찬가에서 나오는 장면으로, 마리아가 「力ある方(능하신 이)」 즉 <神>을 찬양하는 데에 「なさいました」가 사용되고 있고, (2)는 <イエス(예수)>가 <귀신 나간 사람>에게 말하는 문맥에서 <神(하나님)>의 행위에 대해, (3)은 <예수>가 <베드로>에게 하는 설교 내용에서 「天の父(하늘 아버지)」의 행위에 대해 「なさる」가 사용되고 있다. 그리고 (4)는 <イエス(예수)>가 성서의 이야기를 인용하는 문맥에서 「主(주)」의 행위에 대해, (5)는 <イエス(예수)>의 설교 내용에서 「父(아버지)」의 행위에 대해, (6)도 <예수>의 설교 내용에서 「父(아버지)=御自分(자기)」의 행위에 대해 「なさる」가 사용되고 있다. (1)~(6)에서 행위 주체는 「{力ある方・神・天の父・主・父・御自分}」과 같이 절대적인 존재이고, 그 대상은 「偉大なこと(큰 일)」 「こと(일)」과 같이 개별적이고 구체적인 사건이 아니라 <神>이 관여하는 포괄적이고 심대한 사항을 나타내고 있는데, 이때는 「する」의 존경어 형식으로 경어동사 「なさる」가 선택되어 사용되고 있다.

한편 「なさる」는 다음과 같은 내용의 지문에서도 사용된다.

- (7) わたしについて証しをなさる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなさる証しは真実であることを、わたしは知っている。(ヨハネによる福音書 / 5章 32節)
- (8) わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。(ヨハネによる福音書 / 15章 26節)
- (9) わたしは、自分の栄光は求めている。わたしの栄光を求め、裁きをなさる方が、ほかに
おられる。(ヨハネによる福音書 / 8章 50節)

(7)~(9)는 <예수>의 설교 내용에서 쓰인 예인데 (7)에서 「証をなさる(증언하시다)」의 주체는 <方(분)=その方(그 분)>이고, (8)에서 「証をなさる(증언을 하시다)」의 주체는 <真理の霊(진리의 성령)=その方(그 분)>이고, (9)에서 「裁きをなさる(판단하시다)」의 주체는 <方(분)>으로, 이들 행위가 <神>에 의해 이루어지는 사항임을 알 수 있고, 「証(증언)」이나 「裁き(판단, 심판)」과 같은 행위는 성서에서는 신의 영역에 속하는 절대적인 권능으로 간주된다. 이러한 행위에 대해 4복음서에서는 (1)~(6)과 마찬가지로 「する」의 존경어 형식으로 경어동사 「なさる」가 사용되고 있다.

그럼 지문에서 「なさる」가 사용된 다른 예를 검토하자.

- (10) 人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった。(마태이による福音書 / 13章 58節)
- (11) こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなされた数々のすばらしい行いを見て喜んだ。(ルカによる福音書 / 13章 17節)
- (12) そこで、人々はイエスのなされたしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言った。(ヨハネによる福音書 / 6章 14節)
- (13) このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなされたが、それはこの書物に書かれていない。(ヨハネによる福音書 / 20章 30節)
- (14) 他方、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなされた不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、(마태이による福音書 / 21章 15節)
- (15) ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、(마태이による福音書 / 11章 2節)
- (16) マリアのところに来て、イエスのなされたことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。(ヨハネによる福音書 / 11章 45節)
- (17) ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、そのときエルサレムでイエスがなされたことをすべて、見ていたからである。(ヨハネによる福音書 / 4章 45節)

- (18) 人々は皆、神の偉大さに心を打たれた。再び自分の死を予告する イエスがなされたすべてのことに、皆が驚いていると、イエスは弟子たちに言われた。

(ルカによる福音書 / 9章 43節)

(10)~(18)은 <예수>의 행위에 대해 지문에서 「나서」가 사용된 예이다. 「나서」의 행위 내용을 구체적으로 살펴보면, (10)의 「奇跡をなせる(능력을 행하시다)」, (11)의 「数々のすばらしい行いをなせる(모든 영광스러운 일을 하시다)」, (12)의 「しるしをなせる(표적을 행하시다)」, (13)의 「多くのしるしをなせる(다른 표적도 많이 행하시다)」, (14)의 「不思議な業をなせる(이상한 일을 하시다)」, (15)의 「キリストのなされたこと(그리스도가 하신 일)」, (16)의 「イエスのなされたこと(예수께서 하신 일)」, (17)의 「イエスがなされたことをすべて(예수께서 하신 모든 일)」, (18)의 「イエスがなされたすべてのこと(그 행하시는 모든 일)」과 같이, 개별적이고 구체적인 사건이 아니라 심대하고 절대적인 신의 영역에 속하는 사항임을 알 수 있다. 이러한 <イエス(예수)>의 행위에 대해, 4복음서에서는 (1)~(9)에서의 <神>의 행위와 동격으로 취급하여, 경어동사 「나서」가 사용되고 있다.

3.1.2. 대화문에서의 「나서」의 사용실태

다음은 대화문에 사용된 「나서」의 예를 검토한다.

- (19) 이스카리오테でない方のユダが、「主よ、わたしたちには御自分を現そうとなせるのに、世にはそうなさらぬのは、なぜでしょうか」と言った。(ヨハネによる福音書 / 14章 22節)

- (20) そして、その弟子たちをへろデ派の人々と一緒にイエスのところに遣わして尋ねさせた。
「先生、わたしたちは、あなたが眞実な方で、眞理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらぬからです。

(マタイによる福音書 / 22章 16節)

- (21) しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなせるだろうか」と言った。(ヨハネによる福音書 / 7章 31節)

- (22) ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなせるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」(ヨハネによる福音書 / 3章 2節)

- (23) そして、すっかり驚いて言った。「この方のなされたことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてください。」

(マルコによる福音書 / 7章 37節)

- (24) いつ、病気をなしたり、牢におられたり2)するのを見て、お訪ねしたでしょうか。」

2) 「いる」의 존경표현으로는 경어동사 「いらっしゃる」「おいでになる」, 그리고 「おる」에 「れる」가 접속된 「おられる」가 있는데, 李成圭(2010b)에서 지적한 바와 같이, 4복음서에서는 「いらっしゃる」「おいでになる」는

사용되지 않고, 「おられる」만이 사용되고 있다. 그 사용실태를 본동사와 보조동사 그리고 지문과 대화문으로 구분하여 살펴보면 다음과 같다.

- 1) 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。(マタイによる福音書 / 1章 23節)
- 2) だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を開め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。(マタイによる福音書 / 6章 6節)
- 3) わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。(ヨハネによる福音書 / 14章 10節)
- 4) 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。(マタイによる福音書 / 2章 11節)
- 5) しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかったので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。(マルコによる福音書 / 2章 4節)
- 6) 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」(マタイによる福音書 / 2章 2節)

1)~5)는 지문에서 「いる」의 존경어 형식 「おられる」가 본동사로 사용된 예이다. 1)에서는 선지자의 예언을 인용한 문장에서 <神(하나님)>을 높이는 데에, 2)에서는 예수의 설교에서 <あなたの父(네 아버지)>를 높이는 데에, 3)에서는 <イエス(예수)>가 <父(아버지)=神>를 높이는 데에 「おられる」가 사용되고 있다. 그리고 4)에서는 <幼子(아기)=예수>를, 5)에서는 <예수>를 높이는 데에 「おられる」를 사용되고 있다. 6)은 동방에서 온 박사들이 예루살렘에 도착하여 한 발화인데, <ユダヤ人の王としてお生まれになった方(유대인의 왕으로 나시다)>의 존재를 높이는 데에 「いる」의 존경어로서 「おられる」가 사용되고 있다.

- 7) 神は、「父と母を敬え」と言い、「父または母をのしる者は死刑に処せられるべきである」とも言っておられる。(マタイによる福音書 / 15章 4節)

7)은 지문에서 <神(하나님)>를 높이는 데에, 「言っておられる」와 같이 보조동사 「~ている」의 존경어 형식으로 「~ておられる」가 사용된 것이다. 지문에서 <神>을 높이기 위해 「~ておられる」가 사용된 예로는 이밖에 「住んでおられる」(マタイによる福音書 / 23章 21節)·「求めておられる」(ヨハネによる福音書 / 4章 23節)·「生きておられる」(ヨハネによる福音書 / 6章 57節)가 있다.

- 8) 弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。(マルコによる福音書 / 6章 49節)

8)은 지문에서 <イエス(예수)>를 높이기 데에, 「歩いておられる」와 같이 「~ておられる」가 사용된 예인데 같은 유형의 예로서는 「祈っておられる」(マルコによる福音書 / 1章 35節)·「優れておられる」(マタイによる福音書 / 3章 11節)·「見ておられる」(マタイによる福音書 / 6章 4節)·「歩いておられる」(マルコによる福音書 / 6章 49節)·「眠っておられる」(マタイによる福音書 / 8章 24節)·「しておられる」(マタイによる福音書 / 9章 10節)·「話しておられる」(マタイによる福音書 / 9章 18節)·「座っておられる」(マタイによる福音書 / 13章 1節)·「教えておられる」(マタイによる福音書 / 13章 54節)·「教えておられる」(マタイによる福音書 / 21章 23節)·「飢えておられる」(マタイによる福音書 / 25章 37節)·「渴いておられる」(マタイによる福音書 / 25章 37節)·「着いておられる」(マタイによる福音書 / 26章 7節)·「黙り続けておられる」(マタイによる福音書 / 26章 63節)·「語っておられる」(マルコによる福音書 / 2章 2節)·「見回しておられる」(マルコによる福音書 / 5章 32節)·「思っておられる」(マルコによる福音書 / 7章 24節)·「見ておられる」(マルコによる福音書 / 12章 41節)·「生きておられる」(マル코による福音書 / 16章 11節)·「残しておられる」(ルカによる福音書 / 2章 43節)·「祈っておられる」(ルカによる福音書 / 3章 21節)·「立っておられる」(ルカによる福音書 / 5章 1節)·「いやしておられる」(ルカによる福音書 / 5章 17節)·「追い出しておられる」(ルカによる福音書 / 11章 14節)·「通っておられる」(ルカによる福音書 / 19章 1節)·「近づいておられる」(ルカによる福音書 / 19章 11節)·「告げ知らせておられる」(ルカによる福音書 / 20章 1節)·「泊まっておられる」(ヨハネによる福音書 / 1章 39節)·「知っておられる」(ヨハネによる福音書 / 2章 25節)·「授けておられる」(ヨハネによる福音書 / 3章 22節)·「求めておられる」(ヨハネによる福音書 / 4章 23節)·「働いておられる」(ヨハネによる福音書 / 5章 17節)·「任せておられる」(ヨハネによる福音書 / 5章 22節)·「持っておられる」(ヨハネによる福音書 / 5章 26節)·「来ておられる」(ヨハネによる福音書 / 6章 17節)·「巡っておられる」(ヨハネによる福音書

(マタイによる福音書 / 25章 39節)

(25) 除酵祭の第一日に、弟子たちがイエスのところに来て、「どこに、過越の食事をなさる用意をいたしましょうか」と言った。(マタイによる福音書 / 26章 17節)

(26) 若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。(マルコによる福音書 / 16章 6節)

(27) 彼は答えた。「もうお話したのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」

(ヨハネによる福音書 / 9章 27節)

(19)는 가롯인이 아닌 <ユダ(유다)>가 <イエス(예수)>에게 말하는 대화문인데, <主=御自分=イエス>에 대해 「現そうとなさる(나타내시다)」 「そうなさらない(아니하려 하시다)」와 같이 「する」의 존경어 형식으로 「なさる」가 사용되고 있고, (20)은 바리새인들이 자기 제자를 헤롯 당원들과 함께 <イエス(예수)>에게 보내 말하는 대화문인데, <先生=あなた=イエス>에 대해 「なさらない」와 같이 「なさる」가 사용되고 있다. (21)은 무리 중의 많은 사람이 예수가 행한 표적에 관해 말하는 대화문인데, <メシア(그리스도)>의 행위에 대해 「なさる」가 사용되고 있고, (22)는 바리새인 <니고데모>라는 사람이 <예수>에게 말하는 장면에서 쓰인 것으로 <ラビ=あなた=イエス>의 행위에 대해 「なさる」를 사용하여 높이고 있다. 그리고 (23)은 사람들이 예수가 귀가 먹고 말을 더듬는 사람을 고친 것에 대해 놀라서 하는 대화문인데, 「この方のなさったこと(그가 하신 일)」과 같이 <この方=イエス>의 행위에 대해 「なさる」가, (24)는 예수가 제자에게 하는 설교 내용 중에서 사용된 발화인데, <正しい人たち

/ 7章 1節) · 「受けておられる」(ヨハネによる福音書 / 7章 39節) · 「愛しておられる」(ヨハネによる福音書 / 11章 3節) · 「行っておられる」(ヨハネによる福音書 / 14章 10節) · 「集まっておられる」(ヨハネによる福音書 / 18章 2節) · 「死んでおられる」(ヨハネによる福音書 / 19章 33節)가 있다.

9)そこでペトロ가、「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」と言うと、(ルカによる福音書 / 12章 41節)

10) 彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか。」(マルコによる福音書 / 12章 14節)

11) そこでイエスに、「母上と御兄弟たちが、お会いしたいと外に立っておられます」との知らせがあった。(ルカによる福音書 / 8章 20節)

9~11)은 「~ておられる」가 대화문에 사용된 예인데, 9)에서는 <ペトロ(베드로)>가 <主=イエス(예수)>를 높이는 데에 「話しておられる」가 사용되고 있고, 10)은 예수의 말을 책잡기 위해 바리새인과 헤롯당 중에서 보낸 <사람>이 <イエス(예수)>에게 질문을 하는 장면에서 <예수>를 높이기 위해, 「教えておられる」가, 11)에서는 <イエス(예수)>의 <母上と御兄弟たち(당신의 어머니와 동생들)>를 높이는 데에, 「立っておられます」가 사용되고 있다. 같은 유형의 예에는 「泊まっておられる」(ヨハネによる福音書 / 1章 38節) · 「知っておられる」(ヨハネによる福音書 / 1章 48節) · 「持っておられる」(ヨハネによる福音書 / 6章 68節) · 「愛しておられる」(ヨハネによる福音書 / 11章 36節) · 「言っておられる」(ヨハネによる福音書 / 16章 17節)가 있다.

(의인)>이 <主(임금)>에게 대답할 때, <主(주)>의 행위에 대해 「なざる」가 사용되고 있다. (25)는 제자들이 <イエス(예수)>에게 「過越の食事をなざる用意をいたしましょうか」와 같이 <유월절 음식 잡수실 것>을 묻는 대화문인데, <イエス>에 대해 「なざる」를 사용하여 높이고 있다. 한편 (26)은 흰 옷을 입은 <한 청년(천사)>가 <막달라 마리아와 야고보의 어머니 마리아와 살로메>에게 하는 발화인데, <あの方=イエス(예수)>의 부활에 대해 「なざる」를 사용하고 있다.

(27)은 맹인이 유대인(바리새인)에게 책망조로 대답하는 장면에서 「(聞きこうとなざる)와 같이 「なざる」가 <유대인>을 높이는 데에 사용되고 있는데 이는 대우표현에서 상위자를 높인다고 하는 일반적인 규칙이 적용된 결과이다.

이상 대화문에 사용된 「なざる」의 대상을 살펴보면, 「(御自分)を現そうとなざる・そうなざらない」(19)·「人々を分け隔てなざらないからです」(20)과 같이 그 행위 내용이 개별적이고 구체적인 사건을 나타내는 경우도 있고, 「(しるし)をなざる」(21)(22)·「(こと)をなざる」(23)과 같이 규모가 크고 추상도가 높은 사항을 나타내는 경우도 있다. 그리고 「なざる」가 (19)~(23)과 같이 단독으로 사용된 경우, 그리고 「病氣をなざる」(24)·「食事をなざる」(25)와 같이 한어동사의 동사화에 참여하는 본용언으로서의 용법뿐만 아니라 「復活なざる」(26)과 같이 형식용언으로 사용되어 그 대상을 특정화시키는 등 그 용법은 다기에 걸쳐 있다. 따라서 (27)과 같이 맹인이 유대인을 높이기 위해 사용하는 예를 제외하면, 행위의 내용이 개별적이고 구체적인 사건인가 규모가 크고 추상도가 높은 사항인가 라는 구분에 관계없이 또한 「なざる」가 본용언인가 보조용언인가의 구분에 상관없이, 대화문에서는 <イエス>를 높이는 데에 「する」의 존경어 형식 중에서 「なざる」를 선택적으로 사용하고 있다고 하겠다.

3.2. 「なざる」의 사용상의 기준

이상 「する」의 존경어 형식인 「なざる」의 사용실태를 지문과 대화문으로 구분하여 분석했다.

먼저 지문에서 <神>의 행위에 관해서는, (1)~(6)에서 검토한 바와 같이, 행위 주체가 절대적인 존재로 인정되고 당해 행위가 「偉大なこと(큰 일)」 「こと(일)」과 같이 <神>이 관여하는 포괄적이고 심대한 사항이거나 또는 (7)~(9)의 「証(증언)」이나 「裁き(판단, 심판)」과 같이 성서에서는 신의 영역에 속하는 절대적인 권능으로 간주되는 사항에 대해서는 「なざる」가 사용되고 있다. <예수>의 행위에 관해서는 (10)~(18)과 같이 당해 행위가 개별적이고 구체적인 사건이 아니라 규모가 크고 추상도가 높은 신의 영역에 속하는 사항으로 간주될 때, 이를 4복음서에서는 (1)~(9)에서의 <神>의 행위와 동격으로 취급하여, 「なざる」가 사용되고 있다.

한편 대화문에서는 (27)과 같이 맹인이 유대인을 높여서 사용하는 예를 제외하면, (19)~

(26)과 같이 모두 <イエス>를 높이는 데에 「なさる」가 사용되고 있다. <イエス>의 행위에 관해서는 그것이 개별적이고 구체적인 사건인가 규모가 크고 추상적인 사항인가 라는 구분은 적용되지 않는다.

4. 「される」의 사용실태와 그 사용상의 기준

4.1. 「される」의 사용실태

다음은 「する」의 「レル」型的 존경어 형식인 「される」의 사용실태를 검토한다.

4.1.1. 지문에서의 「ささる」의 사용실태

지문에 쓰인 「される」의 사용실태를 검토하는 데에 있어서는, 기술의 편의상 이하 「される」를 본동사와 형식동사로 구분하여 분석한다. 먼저 「される」가 본동사로 사용된 예부터 검토한다.

(28) 「神は彼らの目を見えなくし、／その心をかたくなにされた。こうして、彼らは目で見ることなく、／心で悟らず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない。」

(ヨハネによる福音書 / 12章 40節)

(29) 朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」

(ヨハネによる福音書 / 6章 27節)

(28)은 <요한>이 예언자 이사야의 말을 전하는 내용에서 <神>의 행위에 대해 「される」가 사용되고 있는데, 이때 「される」의 대상은 「その心をかたくなにされた(그들의 마음을 완고하게 하시다)」와 같이 개별적인 구체적인 행위에 속하는 것으로 판단된다. (29)는 <イエス>(예수)가 행하는 설교 내용 중에서 사용된 예인데, <父である神(아버지 하나님)>의 행위에 대해 「認証される(인치시다)」와 같이 한어동사의 「される」가 사용되고 있고 해당 행위가 개별적이고 구체적이라는 점에서 (28)의 「される」와 궤를 같이한다. 앞의 (1)~(6)에서 검토한 바와 같이, <神>에 관계된 행위라고 하더라도, 그 대상이 포괄적이고 추상도가 높은 사항일 경우에는, 「なさる」가 사용되었다. 이러한 점을 종합하면, 지문에서 <神>의 행위에 대해 4복음서에서는 그 대상이 포괄적이고 추상도가 높은 사항인 경우에는 「なさる」를, 개별적인 구체적인 사건인 경우에는 「される」를 선택적으로 적용하고 있다고 하는 사용상의 기준이 인정된다. 이와 같이 4복음서에서는 「する」의 존경어 형식에 「なさる」와 「される」라는 두 형식이 공존할 경우, 잉여적 선택성에 기초하여, 이를 성서

본문을 제대로 이해시키기 위해 적의 구분하여 사용하고 있다고 해석된다.

- (30) イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされた。しかし、イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえってますます言い広めた。
(マルコによる福音書 / 7章 36節)
- (31) すると娘は、その霊が戻って、すぐに起き上がった。イエスは、娘に食べ物を与えるように指図をされた。
(ル카による福音書 / 8章 55節)
- (32) ファリサイ派의 律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされる³⁾のを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。
(マルコによる福音書 / 2章 16節)
- (33) このために、ユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとねらうようになった。イエスが安息日を破るだけでなく、神を御自分の父と呼んで、御自身を神と等しい者とされたからである。
(ヨハネによる福音書 / 5章 18節)
- (34) イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。
(ヨハネによる福音書 / 21章 13節)
- (35) そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、
(マルコによる福音書 / 6章 7節)
- (36) そこで、ゲラサ地方の人々は皆、自分たちのところから出て行ってもらいたいと、イエスに願った。彼らはすっかり恐れに取りつかれていたのである。そこで、イエスは舟に乗って帰ろうとされた。
(ルカによる福音書 / 8章 37節)
- (37) 一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。
(マルコによる福音書 / 10章 46節)
- (39) 再び総督官邸の中に入って、「お前はどこから来たのか」とイエスに言った。しかし、イエスは答えようとされなかった。
(ヨハネによる福音書 / 19章 9節)
- (40) イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」 (マルコによる福音書 / 10章 17節)

(30)은 <イエ스(예수)>가 사람들에게 아무에게도 이르지 말라는 장면에서 쓰인 것인데, 예수

3) 「食べる」・「飲む」의 존경어 형식으로는 경어동사 계열의 「上がる」・「お上がりになる」・「召し上がる」・「お召し上がりになる」와 「ナル」型 敬語인 「(お)食べになる」「(お)飲みになる」 그리고 「レル」型 敬語인 「食べられる」「飲まれる」가 있는데, 4복음서에서는 (25)의 「食事をなざる」와 같이 「ナル」型的 敬語, (32)의 「食事をされる」와 같이 「レル」型 敬語가 사용되고 있다.

イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。(ルカによる福音書 / 24章 43節)

와 같이 「食べる」의 「レル」型 敬語인 「食べられる」가 쓰이고 있다.

의 행위에 대해 「口止をされる(경고하시다)」와 같이 본동사 「される」가 사용되고 있고, (31)은 <イエス(예수)>가 아이에게 먹을 것을 주라는 장면에서 쓰인 것으로 예수의 행위에 대해 「指図をされる(명하시다)」와 같이 본동사 「される」가 사용되고 있다. (32)에서는 <예수>가 죄인과 세리들과 함께 식사하는 것에 대해 「食事をされる(잡수시다)」와 같이 본동사 「される」가, (33)에서도 <예수>가 자신을 하나님과 동등으로 삼는다는 행위에 대해 「(御自身を神と等しい者)~とされる」와 같이 본동사 「される」가 사용되고 있다. 그리고 (34)에서도 <예수>가 생선도 그와 같이 하다고 하는 행위에 대해 「(魚も同じ)~ようにされる」와 같이 「される」가, (35)에서도 <예수>가 (둘씩 둘씩 보내다)고 하는 행위에 대해 「(二人ずつ組にして遣わす)~ことにされる」와 같이 「される」가, (36)에서도 <예수>가 배에 올라 돌아간다고 하는 행위에 대해 「舟に乗って帰ろうとされる(배에 올라 돌아가시다)」와 같이 「される」가, (37)에서도 <예수>가 여리고에서 나가는 행위에 대해 「出て行こうとされる」와 같이 본동사 「される」가 사용되고 있다. (38)에서도 <예수>가 지나가려고 하다고 하는 행위에 대해 「通り過ぎようとする」와 같이 「される」가, (39)에서도 <예수>가 대답하여 주지 않았다고 하는 행위에 대해 「答えようとなれない」와 같이 「される」가, (40)에서도 <예수>가 길에 나서는 행위에 대해 「(旅に)出ようとする(길에 나가시다)」와 같이 본동사 「される」가 사용되고 있다.

이상의 (30)~(40)은 지문에서 「する」의 존경어 형식인 「される」가 예수의 행위를 높이는 데 본동사로 사용된 것이다. 이를 구체적으로 살펴보면, (30)의 「口止をされる(경고하시다)」, (31)의 「指図をされる(명하시다)」, (32)의 「食事をされる(잡수시다)」는 개별적이고 구체적인 사건을 나타내는 점에서 행위의 특정화가 인정된다. 그리고 (33)의 「(御自身を神と等しい者)~とされる」, (34)의 「(魚も同じ)~ようにされる」, (35)의 「(二人ずつ組にして遣わす)~ことにされる」, (36)의 「舟に乗って帰ろうとされる」, (37)의 「出て行こうとされる」, (38)의 「通り過ぎようとする」, (39)의 「答えようとなれない」, (40)의 「(旅に)出ようとする(길에 나가시다)」에서도 해당 행위가 개별적이고 구체적이라는 점에서 공통점이 인정된다.

다음은 「される」가 한어동사와 같이 형식동사로 사용된 지문의 예를 검토한다.

(41) しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかつた。それは、すべての人のことを知っておられ⁴⁾、(ヨハネによる福音書 / 2章 24節)

4) 「知る」의 존경어 형식에는 경어동사 「ご存じだ」와 「レル」型 敬語인 「知っておられる」가 있다. 「知る」는 「知っている·知らない」의 대립에서 알 수 있듯이, 현재 긍정 형태의 「知る」는 통상 쓰이지 않기 때문에, 「ナル」型 敬語인 「お知りになる」는 그 성립 및 사용이 제한적이다. 広辞苑 第6版에는 「しろしめす【知るしめす】〔他五〕(「知る」의 尊敬語「しろす」よりさらに敬意の強い言い方。上代には「しらしめす」とも)①お知りになる。ご存知である。」라고 고전어의 번역에 있어서 「知る」의 존경어로 「お知りになる」와 「ご存知である」를 들고 있다.

4복음서에서는 「知る」의 존경어 형식 「ご存じだ」와 「知っておられる」에 대해 다음과 같은 사용상의 기준을 적용하고 있다.

먼저 「ご存じだ」의 사용실태를 살펴보면 다음과 같다.

(42)そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された⁵⁾。(マルコによる福音書 / 10章 16節)

- 1) 彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。(마태이による福音書 / 6章 8節)
- 2) そこで、イエスは言われた。「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。(ル카による福音書 / 16章 15節)
- 3) 「その日、その時は、だれも知らない。天使たちもも知らない。ただ、父だけがご存じである。(마태이による福音書 / 24章 36節)

1)~3)은 예수의 설교 내용(인용문 형식의 지문) 중에 쓰인 예로서, 1)에서는 <あなたがたの父(네 아버지)>를, 2)에서는 <神(하나님)>을, 3)에서는 <父(아버지)>를 높이는 데에, 「知っている」의 존경어 형식인 「ご存じだ / ご存じである」가 사용되고 있다.

- 4) そのとき、弟子たちが近寄って来て、「フェリサイ派の人々がお言葉を聞いて、つまずいたのをご存じですか」と言った。(마태이による福音書 / 15章 12節)

한편, 대화문에서는 4)와 같이 <弟子たち(제자들)>이 <イエス(예수)>를 높이는 데에 「知っていますか」의 존경 표현으로 「ご存じですか」가 사용되고 있다.

- 5) 食事が終わると、イエスはシモン・ペ트로に、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロ가、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。(ヨハネによる福音書 / 21章 15節)
- 6) 二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロ가、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。(ヨハネによる福音書 / 21章 16節)
- 7) 三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。(ヨハネによる福音書 / 21章 17節)

5)~7)은 예수가 부활한 후, 제자들과 식사를 하고 나서, <イエス(예수)>가 <시몬·페트로(시몬 베드로)>에게 나를 사랑하느냐 하고 묻는 장면에서 사용된 예이다. 첫 번째 질문에 대해 <베드로>는 5)와 같이 <主=あなた=イエス>에 대해 「ご存じです」를 사용하고 있고, 두 번째 질문에 대해서도 <베드로>는 6)과 같이 <主=あなた=イエス>에 대해 「ご存じです」를 사용하고 있다. 세 번째 질문에서는 <베드로>는 7)과 같이 <主=あなた=イエス>에 대해 처음에는 「ご存じです」를, 그 다음에는 「知っておられます」를 사용한 점이 흥미롭다. 이는 동일한 표현의 반복을 회피하기 위한 수단일 수도 있고, 「ご存(ぞん)じだ」와 같은 명사적 표현에서 「知っておられる」와 같은 동사적 표현으로 전용함으로써, 강조의 의미를 함의시키려는 의도로도 해석할 수 있다

- 8) 彼は答えて言った。「あの方がどこから来られたか、あなたがたをご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。(ヨハネによる福音書 / 9章 30節)

8)에서는 맹인이었던 사람이 유대인을 <あなたがた>로 높여 말하는 데에 「知らない」의 존경 표현으로 「ご存じない」를 사용하고 있는데, 이는 대우 표현에서 경어적(敬語的) 상위자를 높인다고 하는 일반적인 규칙이 적용된 결과이다.

다음은 「知っておられる」의 사용실태를 살펴보면 다음과 같다.

- 9) イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がたれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。(ヨハネによる福音書 / 13章 11節)
- 10) ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うと、イエスは答えて、「わたしは、あなたがファイリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」と言われた。(ヨハネによる福音書 / 1章 48節)

9)는 지문에서 <イエス>를 높이기 위해 「知っておられる」가 사용된 것이다. 10)은 <나타나엘(나다나엘)>이 <イエス(예수)>에 대해 어찌 당신이 나를 아시나이까 라고 묻는 장면에서 사용되고 있는 예인데, 이때는 <나타

- (43) たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。(マルコによる福音書 / 4章 34節)
- (44) イエスは十二人の弟子に指図を与え終わると、そこを去り、方々の町で教え、宣教された。(마태이による福音書 / 11章 1節)
- (45) この後、イエスは母、兄弟、弟子たちとカファルナウムに下って行き、そこに幾日か滞在された。(ヨハネによる福音書 / 2章 12節)
- (46) イエスはこう話し終えると、心を騒がせ、断言された。「はっきり言っておく。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」(ヨハネによる福音書 / 13章 21節)
- (47) こうして十二人を任命された。シモンにはペトロという名を付けられた。(マルコによる福音書 / 3章 16節)
- (48) イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉とを信じた。(ヨハネによる福音書 / 2章 22節)
- (49) イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。(マルコによる福音書 / 6章 41節)

(41)~(49)에서는 지문에서 「される」가 한어동사의 후향동사 즉 형식동사로 사용된 것이다. 「される」가 형식동사로 사용된 경우에도, (41)의 「信用されなかった(의탁하지 아니하셨다)」, (42)의 「祝福される(축복하시다)」, (43)의 「説明された(해석하시더라)」, (44)의 「宣教される(전도하시다)」, (45)의 「滞在された(계셨다)」, (46)의 「断言された(증언하여 이르시다)」, (47)의 「任命される(세우다)」, (48)의 「復活された(살아나시다)」, (49)의 「分配される(나누시다)」와 같이 예수의 행위를 높이는 데에 사용되고 있고, 해당 행위가 개별

나엘>가 예수를 <하나님의 아들><이스라엘의 임금>으로 아직 받아들이지 않은 상태에서, 다소 의아함을 지니고, 「知っておられるのですか」를 사용하고 있는 것으로 해석된다.

이상의 검토를 통해, 「ご存じだ」는 지문에서는 <あなたがたの父=父=神(하나님)>을 높이는 데에, 대화문에서는 맹인인 자가 미지의 유대인들을 높여 사용하는 8)를 제외하고는 <베드로> 등의 제자들이 <イエス(예수)>를 높이는 데에 사용하고 있다. 이에 대해 「知っておられる」는 지문에서 <イエス>에 대해 사용하고, 대화문에서 10)과 같이 <イエス>에 대해 쓰인 예가 있지만, 이것은 예수를 <하나님의 아들><이스라엘의 임금>으로 아직 용인하지 않은 상태에서 사용하고 있다는 점에서, 8)과 마찬가지로 대우표현상의 일반적인 규칙이 적용된 사례라고 판단된다. 4복음서에서는 「ご存じだ」와 「知っておられる」에 대해, 잉여적 선택성에 기초하여, 지문에서 <神>에 관해서는 「ご存じだ」를, <イエス>에 관해서는 「知っておられる」를 의도적으로 구별하고 사용하고 있다고 하는, 사용상의 기준이 인정된다. 한편 대화문에서도 「ご存じだ」는 <하나님의 아들>인 <イエス>를 존경하는 데에 한정하고, 그 이외의 사항에 대해서는 「知っておられる」를 사용하고 있다는 점에서 양자 사이에 사용상의 기준이 그대로 적용되고 있다. 이상의 「ご存じだ」와 「知っておられる」에 있어서의 사용상의 기준은, [1]李成圭(2010a)에서 고찰한 「おっしゃる」와 「言われる」의 사용상의 기준, [2]李成圭(2010b)에서 행한 「おいでになる」와 「行かれる・来られる」의 사용상의 기준, 그리고 본 논문에서 검토하고 있는 「なさる」와 「される」의 사용상의 기준과, 기본적으로 일치한다.

- 5) 4복음서에서 「祝福される」는 다음과 같이 수동의 뜻으로 사용된다.
 声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。(ルカによる福音書 / 1章 42節)

적이고 구체적인 사건임을 나타내고 있다. 「される」가 본동사로 사용된 (30)~(40) 및 「される」가 형식동사로 사용된 (41)~(49)에서, 해당 행위가 함의하는 내용에 있어서 의미적 차이는 인정되지 않고, 모두 <예수>에 의한 개별적이고 구체적인 사건임을 나타내고 있다. 이상의 검토에서 4복음서에서는, 예수의 개별적이고 구체적인 행위에 대해, 지문에서는 잉여적 선택성에 기초하여 「される」를 사용하고 있음이 확인된다.

4.1.2. 대화문에서의 「される」의 사용실태

다음은 「される」가 대화문 또는 대화문 상단에 해당하는 문장에서 사용된 예를 살펴보자.

(50) 彼らはヨハネのもとに来て言った。「ラビ、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行っています。」
(ヨハネによる福音書 / 3章 26節)

(51) この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。
(ヨハネによる福音書 / 3章 32節)

(50)은 요한의 제자들과 한 유대인이 요한에게 말하는 장면에서 쓰인 것인데, <요한(ラビ=あなた)>에 대해 「証しされた(증언하시다)」와 같이 「される」가 사용되고 있다. (51)은 <요한>이 <イエス>를 <上から来られる方(위로부터 오시는 이)>로 찬양하고, <この方=イエス>를 높이는 데에 <証しされる(증언하시다)>를 사용되고 있다. 이상과 같이 대화문 및 그에 해당하는 문장에서는 <요한의 제자>들이 <요한>을 높이거나 또는 <요한>이 <예수>의 행위를 높이는 데에 「される」가 사용되고 있다.

4.2. 「される」의 사용상의 기준

이상 「する」의 존경어 형식인 「される」의 사용실태를 지문과 대화문으로 구분하여 검토했다.

먼저 지문에서 <神>의 행위에 관해서는, 당해 행위가 개별적이고 구체적인 사건인 경우에 한하여 (28)(29)와 같이 「される」가 사용되고 있다. 그리고 <イエス>의 행위에 관해서는, 본동사로 사용된 (30)~(40)과 형식동사로 사용된 (41)~(49) 사이에 해당 행위가 함의하는 내용에 있어서 의미적 차이는 인정되지 않고, 모두 <예수>에 의한 한시적이고 개별적이고 구체적인 사건임을 나타내는 데 사용되고 있다.

그리고 「される」가 대화문(50)에서는 <요한의 제자>들이 <요한>을 높이거나, 또는 대화문에 해당하는 문장(51)에서는 <요한>이 <예수>의 행위를 높이는 데 사용되고 있다.

5. 맺음말

이상 日本聖書協會에서 제공하고 있는 新約聖書(新共同訳)의 4복음서를 대상으로 하여 「する」의 존경어 형식인 「なさる」와 「される」의 사용실태를 분석함으로써, 경어동사와 「レル」型的 敬語의 사용상의 기준에 대해 검토했다.

본 논문에서 고찰한 내용을 정리하면 다음과 같다.

1. 4복음서에서 「なさる」에는 다음과 같은 사용상의 기준이 인정된다.

[1] 지문에서 <神>의 행위에 관해서는, (1)~(6)에서 검토한 바와 같이, 행위 주체가 절대적인 존재로 인정되고 당해 행위가 「偉大なこと(큰 일)」 「こと(일)」과 같이 <神>이 관여하는 포괄적이고 심대한 사항이거나 또는 (7)~(9)의 「証(증언)」이나 「裁き(판단, 심판)」과 같이 성서에서는 신의 영역에 속하는 절대적인 권능으로 간주되는 사항에 대해서는 「なさる」가 사용되고 있다. 이에 대해 <예수>의 행위에 관해서는 (10)~(18)과 같이 당해 행위가 개별적이고 구체적인 사건이 아니라 규모가 크고 추상도가 높은 신의 영역에 속하는 사항으로 간주될 때, 이를 4복음서에서는 (1)~(9)에서의 <神>의 행위와 동격으로 취급하여, 「なさる」가 사용되고 있다.

[2] 한편 대화문에서는 (27)과 같이 대우표현상의 일반적인 규칙이 적용된 예를 제외하면, (19)~(26)과 같이 모두 <イエス>를 높이는 데에 「なさる」가 사용되고 있다. <イエス>의 행위에 대해서는 그것이 개별적이고 구체적인 사건인가 규모가 크고 추상적인 사항인가 라는 구분은 적용되지 않는다.

2. 그리고 「される」에는 다음과 같은 사용상의 기준이 인정된다.

[3] 지문에서 <神>의 행위에 관해서는, 해당 행위가 개별적이고 구체적인 사건인 경우에 한하여 (28)(29)와 같이 「される」가 사용되고 있다. 이에 대해 <イエス>의 행위에 관해서는, 본동사로 사용된 (30)~(40)과 형식동사로 사용된 (41)~(49) 사이에 해당 행위가 함의하는 내용에 있어서 의미적 차이는 인정되지 않고, 모두 <예수>에 의한 개별적이고 구체적인 사건임을 나타내는 데에 사용되고 있다.

[4] 그리고 「される」는 대화문(50)에서는 <요한의 제자>들이 <요한>을 높이거나, 또는 대화문에 상당하는 문장(51)에서는 <요한>이 <예수>의 행위를 높이는 데에 사용되고 있다.

이와 같이 4복음서에서는 종래의 경어교육이나 일본어교육 차원에서 말하는 규범의식상의 경어 사용 규칙과는 달리, 「なさる」와 「される」의 경의도의 차이를, 1)<神> 또는 <イエス>인가 기타인가 하는 경의주체의 구별과, 2)당해 행위가 포괄적이고 추상적인 사항인가 아니면 개별적이고 구체적인 사건인가 하는 행위 대상의 범주적 차이, 3)그리고 지문인가 대화문인가 하는 문체상의 차이를 구분하는 데에 반영하고 있다. 그리고 이러한 「なさる」

와 「される」의 병용은 단순히 경어표현의 혼용이 아니라, 번역자 입장에서 - 고도의 의도된 - 동일 동사의 존경어 형식에 나타나는 잉여적 선택성을 적극 활용하여, 일본어 성서 본문을 제대로 이해시키는 위한, 사용상의 기준에 의해 운용되고 있다고 해석된다. 이러한 「なざる」와 「される」에 있어서의 사용상의 기준은 李成圭(2010a)에서 「おっしゃる」와 「言われる」를 대상으로 행한 사용상의 기준과 李成圭(2010b)에서 「おいでになる」와 「行かれる・来られる」를 대상으로 행한 사용상의 기준과 원칙적으로 일치한다.

◀ 参考文献 ▶

- 李成圭·閔丙燦(1999) 『現代日本語敬語の研究』 不二文化社.
 李成圭(2003) 『日本語 語彙 I - 日本語 実用文法の展開 II-』 不二文化.
 李成圭·閔丙燦(2006) 『현대일본어 경어의 제문제 - 日本語 実用文法の展開IX - 』 不二文化.
 李成圭(2007a) 「日本語 依頼表現 研究の課題」 『日本学報』 70 韓国日本学会.
 李成圭(2007b) 「<お/ご~>くださる> 계열의 서열화 및 사용가능성에 대해」 『日本学報』 71 韓国日本学会.
 李成圭(2007c) 『일본어 의뢰표현 I - 肯定的 依頼表現의 諸相 -』 시간의물레.
 李成圭(2008a) 「일본어 의뢰표현의 유형화 및 서열화에 대해 - <てくれる>계열 · <てもらえる>계열을 대상으로 하여 -」 『日本学報』 74 韓国日本学会.
 李成圭(2010a) 「「おっしゃる」와 「言われる」의 사용상의 기준 - 신약성서(신공동역)의 4복음서를 대상으로 하여 -」 『日本学報』 82 韓国日本学会.
 李成圭(2010b) 「「おいでになる」와 「行かれる・来られる」의 사용상의 기준 - 신약성서(신공동역)의 4복음서를 대상으로 하여 -」 『日本学報』 83 韓国日本学会.
 菊地康人(1994) 『敬語』 角川書店(再刊:講談社学術文庫, 1997).
 菊地康人(1997) 『敬語再入門』 丸善(丸善ライブラリー).
 金田弘 (1952) 「東京語における「れる型」敬語の性格」 『日本文学論究』 10号 国学院大学文学会.
 郡 千寿子(2008) 「文化審議会の答申と敬語教育」 『弘前大学教育部紀要』 第99号 弘前大学.
 水谷美保(2005) 「「イラッシャル」に生じている意味領域の縮小」 『日本語の研究』 第1卷4号 日本語学会.
 山崎久之(1963) 『国語待遇表現体系の研究 近世編』 武蔵野書院.
 日本聖書協會(1999) 『聖書』 (新共同訳)
 聖書本文検索(新共同訳) 日本聖書協會 <http://www.bible.or.jp/vers_search/vers_search.cgi>
 대한성서공회(2002) 『한일대조 성경전서』 (개역개정판/신공동역)
 国語審議会(1952) 「これからの敬語」 (建議)
 国語審議会(2000) 『現代社会における敬意表現』 (答申)
 文化審議会(2007) 『敬語の指針』 (答申)

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について

— 機能的分類による定量的分析と会話教育への示唆 —

磯野英治*

Chung_ang_isono@yahoo.co.jp

<要 旨>

磯野 (2010b) では、会話の中でインタラクションの特徴が最も顕著に現れると考えられる「ターン交替」について、日本語母語場面における統制された大規模なデータを、形式的分類から定量的に分析した。この継続調査として本研究では、磯野 (2010b) で調査された形式的分類 (表現形式) が会話の中でどのような語用論的な特徴や相対的な機能あるのか、という観点から機能的分類 (「応答」「確認」「直接的な発話」) による定量的分析をして、調査・分析を行った。

この結果、日本語母語話者のターン交替の特徴として、「応答」からターンを開始することが多いこと、そしてそれはコミュニケーションを円滑に進めるための役割を担っていると考えられること、の2点が明らかになった。また形式的分類と機能的分類を対応させることにより、一つの表現形式が持つ語用論的特徴、及び相対的効果が一様ではないことも確認できた。

このような実際の会話データから得られた知見は、より自然なコミュニケーションを日本語教育に取り入れるにあたり、有効な材料となり、会話教育への具体的な示唆となることが確認された。

キーワード： ターン交替、機能的分類、定量的分析、語用論的特徴、会話教育への示唆

1. はじめに

これまでの日本語を対象としたインタラクションの研究は、定性的分析やタスク中心の研究が主であるため、実際の会話を対象とした定量的・定性的といった両面的な研究はあまり行われていない。より自然な会話や場面を日本語教育に取り入れるにあたり、実際の会話を取り上げ、コミュニケーション問題を解決するため、どのようにインタラクションが行われているのか、傾向を分析し、実態を把握することは重要であると考えられる。また実際の会話の展開をある一定の観点から詳細に分析することにより、より実践的なコミュニケーションを日本語教育へ有効に取り入れていく示唆が得られるのではないかと。

上記のような問題意識から、磯野 (2009a) では「会話における展開性」に大きく関係し、また会話の中でインタラクションの特徴が最も顕著に現れると考えられる会話の「ターン交替」について、日本語母語場面における統制されたデータの会話分析を通じて、表現の形式的分類から定量的分析を行った。この結果、ターン交替の形式的分類によるコーディングから、個人差はあるものの、日本語母語話者同士の初対面会話では、「あいづち」がその主要な表現形式として使用されていることが分かった。

* 中央大学校・助教授

本研究では、上記の定量的分析結果をもとに、その表現形式が会話の中でどのような語用論的な特徴や相対的な機能あるのか、という観点から機能的分類（「応答」「確認」「直接的な発話」）による定量的分析をして、調査・分析を行う。そしてこのような形式的分類（表現形式）と機能的分類（語用論的特徴、相対的効果）の調査・分析によって、実際の会話やより実践的なコミュニケーションを日本語教育へ有効に取り入れていくための示唆を得たい。

2. 先行研究

ターン交替に関する研究は、Sacks、Schegloff、Jeffersonらの社会学を基礎としたエスノメソドロジの会話分析によるターンテイキングの研究が有名である。これらの研究から「会話の聞き手は話し手がいつ話し終えるかについての正確な予測ができる」、「相手の話の終わりと同時に自分が話し始めたり、相手の話の終わりを自分が代わって話したりすることができる」という事実が確認された（Jefferson1973）。またターンテイキングが行われるのは「一発話が終了したところで話し手がポーズを置いた‘transition relevance place(TRP)’であること」（Schegloff&Sacks1973）、この特徴として「エー、アー、シー」などの発話は、ターンテイキングの際に起こりえる沈黙を避けるためのものであることを挙げ、多くの場合話者は一人ずつ交代に話し、発話ターンの長さや順序は一定ではないが、ターンの移行は秩序正しく調整され、発話の重なりなどはあまり見られないといった報告をしている(Sacks, Schegloff&Jefferson1974)。

これらの研究成果をもとに、日本語でも杉戸(1987)以来、会話におけるターンの交替に関する研究が数多く行われた。主な研究として西原(1991)のターンテイキングの諸要因に関する研究、ザトラウスキー(1993)、堀口(1997)の「隣接ペア」「応答ペア」の研究、「談話展開」の観点から日本語母語話者のターンテイキングを考察した大浜(1998)、初鹿野(1998)の相手の発話中に自発的にターンを始める場合のテクニックの分析、堀口の行った日本語におけるインタラクションの現象を聞き手の立場から考察した一連の研究(1988、1990、1991、1997)と初鹿野(1997)の観点について、整理、再分類を検討した研究として松本(2003、2005)がある。

また、用語やその定義に違いはあるものの、日本語でも数多く研究されている「あいづち」の研究も、その時点でターンの交替が行われていると捉えれば、広義の意味においてターンの交替に関する研究と考えることができる。水谷(1984、1988、1993)は、日本語の会話が話の途中であいづちが入ったり、相手の話を引き取って完結させたりというように、会話を話し手と聞き手の二人で作っていく「共話スタイル」であると分析を行っているが²⁾、これは会話を大きく談話レベルで考えた場合、

1) 「隣接ペア」とはある発話に対して直接的に対応するその次の発話とのペア、「応答ペア」とは間があくこともあるがある発話に対してそれに対応する発話とのペアのことである。

2) 水谷(1984、1988、1993)では、「あいづち」や「共話スタイル」が日本語独特のものであるように論じられているが、外国語においてもSchegloffやSacksなどがこの論文以前にエスノメソドロジーによる会話分析を行い、その諸特徴を報告しており、また水谷以降の研究においても「あいづち」や「共話スタイル」が必ずしも日本語独自のものとは言えないと位置づけ

会話におけるターンをどのように展開しているのかという会話スタイルの研究であるともいえるだろう。また先行研究を踏まえた上で、大浜（2006）は「ターン交替形式と相づち使用の実態」を関連させ、ターン交替に至るプロセスには、あいづちの役割・機能が密接に関係していることを論じている。

上記のように先行研究を概観すると「ターン交替」に関する研究では、主に「ターン交替が行われるタイミング及び規則」、「あいづち」に関する研究では、主に「あいづちの役割および機能」が研究されてきたといえるだろう。一方、会話というものが一人の話者によって一方的に行われるものではないという点において、ターン交替こそ会話の特徴と考えられるものの、ターン交替の際にどのようなやりとりが行われているのか、またその特徴は何かといった観点は先行研究に多くはない。また上述した松本（2005）では、このような観点からの分析が行われておりターン交替時のあいづちの重要性に言及しながらも、OPI³⁾による会話のやりとりを分析データとして扱っているため、会話の中に現れる現象について、ある程度のコントロールや制限が生じるものと考えられる。

3. 研究課題

先行研究で概観したターン交替やあいづちに関する研究は、数々の意義ある観点を有しつつ、現在では対人コミュニケーション論のみならず、日本語教育への応用といった期待に、その関心が高まりつつある。こうした中、前述したような「ターン交替が行われた時点で、何が行われているのか」といった観点の研究は数少ないといえることができるであろう。会話というものが一人以上の複数人による行為であるならば、まさに会話の特徴はターンが交替した際に現れるということもでき、これまでに先行研究で行われてきた「ターンがいつ交替するのか」といった観点とともに、重要な調査項目となる。また日本語学習者が実際に日本語で会話をする際に、どのように会話相手と調整しながら会話を展開していくのか、といった円滑なコミュニケーションのための方法としても、ターン交替時の特徴の把握は必須であると考えられる。

上記の問題意識から、磯野（2009a, 2010b）では、「日本語母語話者のターン交替時」の特徴について、表現の形式的な分類から定量的な分析を行った⁴⁾。以下にその一例を示す。

		形式①	形式②	機能①	機能②
IN	そうですねー、もし、じゃ、おうちによぶとしたらどんな風におもてなししますか？。				
M01	<u>そうですね</u> 、やっぱり焼酎を<笑い>(おー)、いい焼酎を<笑い>(はい)、一本買ってきます。	C	c-2	A	a-1

られる研究(Ferrara1992、Clancy,Thompson,Szuki&Tao 1996)もある。

3) ACTFL-OPIとは、外国語学習者の口頭表現能力を総合的に評価することを目的とした会話能力判定方法でありOral Proficiency Interviewのこと。OPIでは会話モードとロールプレイモードの二つの要素によって構成されるインタビュー形式のテストが行われる。

4) 形式的分類及びその定義については、磯野（2010b）を参考のこと。
<http://nihongo.human.metro-u.ac.jp/~micj/>

形式①は表現の形式的分類による上位分類、形式②はその下位分類、また機能①はその表現の形式が相対的にどのような語用論的な特徴や機能を有しているのかといった機能的分類の上位分類、機能②はその下位分類である。インタビュアーは「IN」、被験者は「M01」で表されており(男性M01-12、女性F01-12)、分析対象となるのは、上記のようにインタビュアーから被験者である「話者F04」へターンが交替した直後の発話である。この会話では、インタビュアーから被験者へターンが交替した際に、形式的分類では上位分類「C:あいづち」、下位分類「c-2:そう系」、機能的分類では上位分類「A:応答」、下位分類「a-1:聞いているという信号」となる。

本研究に先駆けて行ったターン交替時の形式的分類による定量的分析では、「あいづち」が日本語の会話におけるターン交替時の構成要素として、重要な役割を果たしていることが分かった(磯野2010b)。この研究では、先行研究でも指摘されている日本語母語話者が相手と話している途中に打つ単発的なあいづちのみならず、ターン交替といった発話文レベルでも短い間隔であいづちを使用することによって、意味のずれを修正、回避するとともに、直接的な発話から会話を始めることを避けることで、会話相手への配慮となっていることが観察できた。

本研究では上記の分析を踏まえた上で、その表現の形式的分類が相対的に、つまり会話相手に対してどのような語用論的な特徴や機能を持っているのか、という観点から、同様の会話データをもとに機能的分類による定量的な分析を行っていく。

4. 研究方法

4.1. 本研究の概要

本研究では、インタビュアーと日本語母語話者24名(以下被験者)の会話データ⁵⁾を録画のかたちで収集し、その文字化資料を作成した上で、その録画データによる音声的、対人コミュニケーションの特徴と文字化資料を対応させる形で、インタビュアーから被験者へターンが受け継がれた直後の発話の語用論的な特徴を調査する。このためまず形式的分類による定量的分析を行った磯野(2009b)と同様の方法で機能的分類による定量的分析を行い、形式的分類がどのような相対的効果、及び語用論的特徴として会話に現れているのかといった機能的分類との対応にも言及する。

4.2. 被験者

日本語母語場面における日本人インタビュアーは同一の人物とし、もう一人の被験者については日本人(男女各12名)の計24会話とする。それぞれの各ペアは全て初対面、年齢については20代、

5) 本研究で扱った会話データは現在「mic-J corpus 日本人へのインタビュー」として首都大学東京大学院 日本語教育学教室で公開されている。

http://japanese.human.metro-u.ac.jp/mic-j/mic-J_corpus_II/index.html
「mic-J corpus」の公開については西郡・崔・磯野(2010)を参考のこと。

現在の言語環境は東京で共通語圏という環境で条件統制を行った。会話の収集方法については自然な会話データが収集できるようなかたちでビデオ録画をした(西郡2002、磯野2007)。

表1：被験者の属性

グループ	年代	現在の言語環境	会話協力者の属性	会話総数
日本語母語場面	インタビュアー：30代 学生：20代	東京(共通語)	インタビュアー：女性1名 (IN) × 日本語母語話者：男女各12名 (M01-12、F01-12)	24会話

4.3. 文字化方法と分析データの信頼性について

収集された会話データの文字化は、会話におけるターン交替を分析するという観点から、「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2007年3月31日改訂版」(宇佐美2007)に従った。文字化については会話データのターン交替の認定などの観点から3次文字化チェック(ピアチェック)まで行い、会話データの信頼性を得た。

本研究におけるターン交替の認定については、上述したBTSJによる改行の原則に従い、「BTSJ上で改行が行われた時点を指し、かつ対話者の発言にもう一人の話者の発言が続く場合」をターン交替が行われた(※改行されていても同一人物の会話が続いている場合はターン交替と認定しない)と操作的に定義した。その上でインタビュアーから被験者へターンが受け継がれた直後の発話の特徴についてコーディングを行い、分析した。

また上記によって得られたデータからコーディングされるターン交替の機能的分類については、信頼性確保のため、2名の評定者が全データの25%(男性3会話、女性3会話：計6会話)について個別に認定を行って、評定者間信頼性係数であるCohen'sKappa (Bakeman&Gottman1986)による一致率を算出した。Cohen'sKappaは単純一致率から偶然一致率を差し引いた一致率を表すものであり、機械的分類の基準値が $k > 0.75$ であればコーディングの定義、分類方法について問題がないと考えることができる。その結果 $k = 0.823$ という数値が得られ、 $k > 0.75$ でコーディングの信頼性が確認された。

5. 分析方法

本研究では「3.研究課題」で述べたように、インタビュアーから被験者へターンが交替した直後の発話の特徴について、機能的な分類のコーディングを行い、分析を行った。分析は分類されたターン交替時の特徴について、その出現頻度と構成比の算出を行い、どのような傾向が観察できるのかを調査した。本研究における機能的分類について、以下に示す。

A. 「応答」：情報要求（質問、同意要求）や行為要求（単独行為要求、共同行為要求）や注目要求のような話し手からの働きかけに対して、聞き手が応じる発話。

a-1. 「聞いているという信号」：文脈の内容とは関係なく応答しているもの。

(例)

IN	じゃあ今日は(はい)、こちらの大学の方ではなくって(はい)、来てくださったん<ですね>{<}\。
F04	<あ、はい>{>}\。

a-2. 「理解しているという信号」：会話相手の発話内容に関する理解や、先取りをして理解を示そうとしているもの、自身が直前の発話の内容を既に理解しているという意味で応答しているもの。

(例)

IN	<へ>{>}\, あれはかなり長距離になりますけど
F04	<u>そうですね</u> (うーん)、なんか、あたしの友達が(はい)、行ったことがあるって(ふーん)、なんかその友達の話聞いてたら、すごい楽しそうで(うーん)、1回、一生のうちに1回は<行ってみたいとか>{<}\。

a-3. 「同意の信号」：会話相手の発話に関して、その内容への同意や共感を示しているもの、疑問文に対するYesに相当するもので、かつあいさつを含む。

(例)

IN	オオツカさん(はい)、よろしくお願 <small>い</small> く <small>しま</small> ー <small>す</small> >{<}\。
F04	<よろしく>{>}\おねがいます。

IN	温泉いいところいっぱいあります<よね>{<}\。
F04	<そうですね>{>}\。

a-4. 「否定の信号」：会話相手の発話に関して、それとは違うという意味で応答しているもの、疑問文に対するNoに相当するもの。

(例)

IN	すーごーい、勉強熱心<ですね>{<}\。
F04	<いやー<笑い>>{>}\。

a-5. 「感情の表出」：文脈の内容とは関連が薄く、上記a-1-a-4の特徴を含まないもので、かつ

笑いで応答しているものを含む。

(例)

IN	<ほー>{>}、知らないです。
F04	<u>なんか</u> 、社会人とかも多いんですけど(はい)、その採点を専門にやらせて頂いています。

B. 「確認」：情報要求（質問、同意要求）や行為要求（単独行為要求、共同行為要求）や注目要求のような話し手からの働きかけに対して、聞き手が同じように働きかけを返す発話で対話者との間で何らかの意味の交渉がおこなわれていると考えられるところ。

b-1. 「反復要求」：相手の発話が聞き取れなかった時にその繰り返しを要求するもの。

(例)

IN	じゃあですねー、あなたの学校の好きなところを一つ挙げるなら。
M09	<u>この学校でですか?。</u>

b-2. 「聞き取り確認要求」：一応相手の発話は聞き取れたがその聞き取りに自信が持てないときに相手に確認を要求するもの。

(例)

IN	じゃあですね、えー、最後に一生のうちに1度はやってみたって思うことがあったら、教えてください。
M06	<u>一生のうちに??。</u>

b-3. 「理解確認要求」：相手の発話は聞き取れたがその意味の理解に自信が持てず、自分の理解が正しいかどうかを確認してくれるように要求するもの。

(例)

IN	<へー>{>}、じゃあ、やってて(はい)、嬉しかったこと、やってて良かったって思う<こと>{<}。
F04	<あー>{>}、あ、そのバイトの中ですか?。
IN	<はい>{<}。

b-4. 「説明要求」：相手の発話は聞き取れたが意味や意図、その発話を行う理由・事情がよく分からず、そのために言い淀みや半疑問文になったり、相手の発話を繰り返したり、更に詳しい説明を要求するもの。

(例)

IN	へー、じゃあ逆に (はい) 、不満に思ってることはありますか?。
F04	<u>不満</u> に思ってることですか??、そうですね、うーん、/少し間/そうですね、/少し間/うーん、特に<はないですね<笑>、はい>{<}。

b-5. 「相手への聞き取りチェック」：相手が自分の発話を聞き取れたどうか確認するもの。

(例)

M01	もう普通に一、なんか何ですかね、/少し間/この前福生に行って来て=。
IN	'=福生?。
M01	<u>福生</u> 。何か横田の基地があるところ。

b-6. 「相手への理解チェック」：相手が自分の発話を正しく理解したかどうか確認するもので、聞き返しや会話相手の発話の繰り返しを含むもの。

(例)

F01	あの一、とてもくだらないアニメなんですけど、<何か、はい>{<}。
IN	<アニメ??、へー>{>}。
F01	<u>フラッシュアニメ</u> (ふーん)なんですけど、/沈黙3秒/はい(ふふ)、とりあえずくだらない<二人で笑いながら>(へー)、それしか言いようがないような。

C. 「直接的な発話」：ターンが受け継がれた際に、相対的にみてクッション言葉や対話相手に対する合図や意図がなく会話が始まる発話で、かつ上記のA、Bを含まないもの。また情報要求(質問、同意要求)や行為要求(単独行為要求、共同行為要求)や注目要求のような対話相手からの働きかけを必ずしも必要とせず、話し手が話し手自身に対して行う発話。

(例)

IN	<うーん>{>}。
F04	<u>テレビ</u> で(はい)、映画をやってるじゃないですかーとき##(うんうんうん)、それを見たりとか、あんまりいきませ、見に行ったりしないですねー、<はい>{<}。

堀口(1997)は「応答」を「情報要求(質問、同意要求)や行為要求(単独行為要求、共同行為要求)、注目要求のような話し手からの働きかけに対して、聞き手が応じる発話」と定義し、聞き手の会話参加の観点からその積極性が弱いとし、聞き手の側から積極的に話し手に働きかけるあいづち、反復要求、説明要求、確認要求、先取りといった項目とは別の認識を示している。しかし本研究に先駆けて行った研究(磯野2010b)において「あいづち」及び「先取り」は、ターン交替の形式的分類の項目に挙げられているため⁶⁾、本研究では堀口(1997)を再検討し、機能的分

6) 「あいづち」は機能的分類ではないかといった観点も考えられるが、磯野(2010b)では、まず「あいづち」をその表現の

類の大分類として、まず会話参加への積極性が弱い「A.応答」、積極性の強い「B.確認」、またこれらが相対的にない、つまり会話相手への調整や会話相手からの働きかけを必要としない「C.直接的な発話」を設定した。

「A.応答」は話し手からの働きかけに対して聞き手が応じる発話であり、その中にはあいづちや理解、同意、否定など様々な要素が含まれるため、より精緻化された分類が求められる。このためターン交替の機能を下位分類したa-1からa-5については、堀口(1997)の「あいづちの機能」の研究を参考に、さらに細かいターン交替時の働きについて分析が行えるように追加した。

「B.確認」は、主にインタラクションに関する研究で行われている意味交渉の観点から会話の相互作用を分析するための項目である。インタラクションの代表的なタイプは(1)「明確化要求」(clarification request)：相手の発話が理解困難な際、相手の発話の明確化を求める方略、(2)「確認要求」(confirmation check)：相手の発話を(自分が理解したとおりに復元することなどによって)正しく理解しているかどうか確認する方略、(3)理解チェック(comprehension check)自分の発話を相手が正しく理解したかどうか確認する方略、の3つである(横山1998)。またこの「明確化要求」「確認要求」について、さらに詳しい分析を行っている研究として、尾崎(1992、1993)による「聞き返し」の研究が挙げられる。尾崎はコミュニケーションストラテジーとして、日本語学習者の「聞き返し」を取り上げ(尾崎は「機能」の代わりに「発話意図」という用語を提示している)、「明確化要求」を相手の発話が聞き取れなかった時に出される「反復要求」と、聞き取りに自信が持てないときに相手に確認を求める「聞き取り確認要求」、さらに、「確認要求」を相手の発話は聞き取れたが意味がよく分からない時に出される「説明要求」と、自分の理解が正しいかどうかを確認してくれるように求める「理解確認要求」の2つに分け、2つの機能が同時に行われる「反復/説明要求」と「聞き取り確認/説明要求」の2つも加え、計6つの機能を抽出している。このため本研究でも、横山の「理解チェック」と尾崎の「反復要求」「聞き取り確認要求」「説明要求」「理解確認要求」をコーディングの参考とし、また「理解チェック」には会話相手への自身の会話に関する「聞き取りのチェック」と「理解のチェック」も考えられるので、「理解チェック」をこの二つに分けた。また複数の機能が同時に現れていると思われる場合は、その性格のより強いと考えられるものをコーディングすることとした。

6. 分析結果と考察

まず分析結果の提示とともに、本研究で扱った会話データの妥当性について言及したい。本研究では24人の全被験者に「自然に会話ができただろうか」といった観点から、フォローアップアンケート

形式的側面から分類した。これは例えば「はい」という「あいづち」が、音声的特徴や文脈により、その機能が「聞いているという信号」であったり、「理解しているという信号」であったりというように、ばらつきが観察できるためである。また「あいづち」を形式面から分類した研究に小宮(1986)、陳(2001)、郭(2002)などがあり、本研究でも参考とした。

ト)を行った。これは5段階評価法によって、その平均値を求めたもので、「1.会話の自然さ」については3.25、「2.言いたいことを話すことができたか」という項目では3.96、「録画を意識しなかったか」という項目では3.79という数値であった。本研究は、ターン交替の諸特徴を形式的、機能的分類によって分析するだけではなく、実際のコミュニケーションを日本語教育に役立てていくための基礎的研究と位置づけられるため、「会話の自然さ」は重要なポイントになると考えられる。このためフォローアップアンケートの結果から、本研究における会話データは、上記の観点からのある一定の妥当性が得られたと考えてよいだろう。8)

ターン交替の機能的分類による定量的分析では、その出現頻度と使用率の構成比を算出・同定するとともに、性別による違いがあるのかないかという観点から、男女別のグループに分けたt検定を行った。またさらに形式的分類(磯野2010b)と機能的分類の対応関係についても概観した。

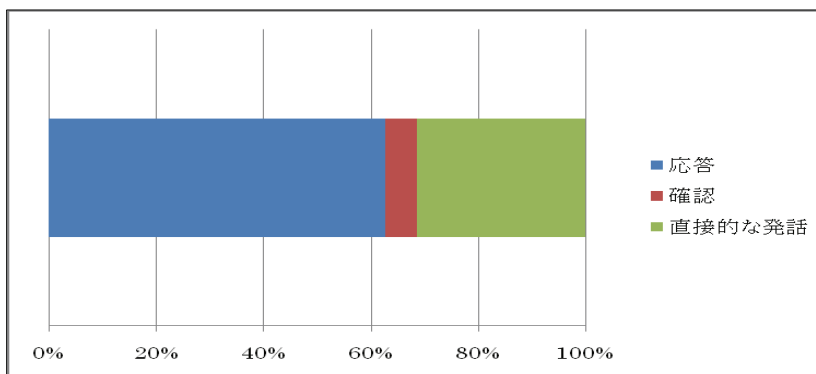
表2：ターン交替時の各出現頻度の平均(機能大分類M01-12, F01-12)

	応答	確認	直接的な発話	合計
平均(回)	56.08	5.17	30.08	91.33
S.D	13.12	3.77	18.64	22.98

表3：ターン交替時の各出現率の平均(機能大分類M01-12, F01-12)

	応答	確認	直接的な発話	合計
平均(%)	62.70	6.03	31.27	100.00
S.D	12.57	4.87	13.16	0.00

グラフ1：日本語母語話者24名の談話における構成要素(機能大分類)



7) フォローアップアンケートの詳細については、磯野(2010b)を参考のこと。

8) 本研究で取り扱った会話データはインタビュー会話であり、また許可を得た方たちでの録画も行っているため、厳密な意味で「自然」な会話データとは言えない。しかし冗長を避けるため、創作されたシナリオのある会話とは違って、あるいは会話参加者の言語行動自体は統制されていないという意味で「準自然」なものと本研究では位置づける。実際の会話では被験者からの質問も観察されるなど、和やかな雰囲気の中でやりとりが行われたことも付記しておく。このような会話データの位置づけに関しては土岐(2005)、宇佐美(2007)を参照のこと。

日本人母語話者の会話ターン交替時の機能的特徴として、表2の出現頻度、表3の出現率ともに「応答」が高い数値を表していることが分かる。そして日本人母語話者男女24人の各会話について、機能的分類からその使用率の構成比を割り出し、その平均値を可視的に示したグラフ1をみると「応答」が全体の60%を超え、ターン交替時に主要な機能を果たしているのがはっきりと分かる。本研究で分類項目となっている「応答」は、堀口（1997）に倣うかたちで、主に「話し手からの働きかけに対して、聞き手が応じる発話」であり、話者の会話参加への積極性は弱いとされている。確かに「応答」は、本研究の分類項目である「確認」と比較すると、「働きかけ」や「意味交渉」の観点からは、やや受け身の印象を受ける。しかし、前述のように本研究で扱った会話データはインタビュー会話でありながらも、インタビュアーがした一つ一つの質問に対して、インタビュアーと被験者が話題を共有して会話をするというかたちが採用されたため、インタビュアーからの一方的な働きかけがあったとは考えにくい。この場合、「応答」の役割は会話参加への積極性といった意味合いとともに、円滑な会話を進行するための重要な役割を担っていると考えることができるのではないか。この理由として機能的分類の「応答」は、形式的分類の「あいづち」及び「ディスコースマーカ」に主に対応していることが大枠で確認でき、また磯野（2010b）では、形式的分類の「あいづち」や「ディスコースマーカ」が、円滑なコミュニケーションのための役割を果たしていることを指摘している。このため、「応答」に関しても同様のことが考えられる。つまり、会話者はターン交替時に自身の言いたいことをいきなり話し始めるのではなく、一度会話相手からのターンを「応答」という機能で受けて、自身のターンを開始する、というようにコミュニケーションの展開を調整しているのではないか。

次に「直接的な発話」、及び「確認」については、全体の約37%ほどであった。「直接的な発話」に関しては、インタビュアーのターンが「あいづち」や「フィラー」、または「なるほど、あー、分かりました。」のように言い切るようなかたちで終了している場合に、多く観察された。これは次にターンを取る被験者が会話相手であるインタビュアーからの働きかけ、または「確認」のひとつの特徴である意味交渉などによって会話をしている訳ではないことが考えられ、この場合はターン交替の際に「応答」で前述したような円滑なコミュニケーションのための調整機能も必要としないだろう。

そして「確認」については、本研究で設定した分類による定量的分析では他の2項目に比べてその出現率が少なかった。これは本研究で定義した「確認」の項目に「聞き取り」や「（会話）内容」に関する意味交渉、すなわち日本語母語話者と日本語非母語話者といった接触場面では日本語母語場面と比べて相対的に多く観察されると考えられる特徴が、多くはなかったためと考えられる。この点については引き続き、同様の方法論によって接触場面との比較・検討を行い、根本的にどのように違うのかといった観点から調査をする必要があるだろう。

また定量的分析によるこれらの一定の傾向は、性別による偏りがあるのかどうかといった観点から、男性と女性にグループ分けをした上で、相対的な違いがあるのかどうかをt検定によって調査した。その結果「応答」「確認」「直接的な発話」の全ての項目において、有意差は認められな

かったため、日本語母語話者のターン交替の機能として、ある一定の傾向が本研究から得られたと考えられる。

次に形式的分類で明らかになった表現形式が、機能的分類の中ではどのような語用論的特徴・相対的効果があるのか、という観点から調査したところ、同じ表現形式の言葉であっても同様の機能として使用されている訳ではないということが分かった。以下に例を示す。

形式的分類：C. あいづち c-2. そう系

機能的分類：A. 応答 a-1. 聞いているという信号

IN	じゃあですねー、お休みの日があったら何をすることが多いですか?。
M04	そうですね、最近はよく麻雀やってますね<笑い>。

形式的分類：C. あいづち c-2. そう系

機能的分類：A. 応答 a-3. 同意の信号

IN	普段から、よく話とかしたりする?。
M04	そうですね、やっぱりまた部活の人に<笑い>(はい)、部活の子に (はい)、タイの方がいらっやまして。

(磯野 2010bより)

上段の会話では、INの問いかけに文脈とは関係ない「聞いているという信号」として「そうですね」が機能しているのに対し、下段の会話では同じ形式ながらも「同意の信号」としての機能を有している（機能的分類の大分類では上下段とも「応答」だが、下位分類では機能が異なる）。これは日本人母語話者が円滑なコミュニケーションを行うために、あるひとつの表現形式が持つ様々な機能を会話相手への相対的な効果という観点から、使い分けしていると考えられるだろう。そしてこれらの諸特徴は創作会話とは根本的に異なるため、特に会話教育において、コミュニケーション上の語用論的な特徴を提示できる可能性が高い。

7. おわりに

本研究では、日本語母語話者のターン交替について、機能的分類による定量的分析から一定の傾向を調査し、また形式的分類と機能的分類の対応関係について語用論的な観点からその実態を探った。その結果、まず日本語母語話者のターン交替の特徴として、「応答」からターンを開始することが多いこと、そしてそれはコミュニケーションを円滑に進めるための役割を担っていると考えられること、の2点が規模の大きい会話データの分析から確認できた。また形式的分類と機能的分類を対応させることにより、一つの表現形式が持つ語用論的特徴、及び相対的効果が一樣ではないことが分かった。

上記のように実際の会話データから得られた知見は、より自然なコミュニケーションを日本語教育に取り入れるにあたり、有効な材料となるだろう。これらは日本語教育で現在導入が盛んになってきているe・mラーニングといった映像や音声を活用した視聴覚教材にも、発展的には応用可能であると考えられる(磯野・関2008)。

本研究はそのための基礎的研究と位置つけた上で、今後の展開として、形式的分類と機能的分類の対応関係を定量的に分析し実態を調査すること、及びその対応関係の質的要素について定性的な分析を行っていくことが挙げられる。さらに「6.分析結果と考察」で述べたような、特に機能的分類に関して接触場面との比較を試みて、諸特徴のさらなる考察を行うことを今後の課題とする。

◀ 参考文献 ▶

- 磯野英治 (2007) 「自然会話教材開発研究における素材データの収集について」『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成プログラム」報告集3自然会話教材開発研究会』、東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室、275-279.
- (2009a) 「日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴に関する定量的分析—インタビュー会話における調査から—」口頭発表、2009年日本語教育国際研究大会、シドニー、オーストラリア.
- (2009b) 「日本語母語話者のターン交替における定量的分析とその語用論的特徴について—会話教育への示唆—」『2009年度韓国日本学会傘下学会連合学術大会 Proceedings』、韓国 日本学会、122-126.
- (2010b) 「日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴について—インタビュー会話における定量的分析から—」『日本研究』Vol.28、韓国 中央大学校日本研究所、137-158.
- 磯野英治・関峻泓 (2008c) 「日本語教育におけるeラーニング・mラーニングの可能性について—授業実践例と日韓の学習ツールの比較の観点から—」『第7回日本語教育国際研究大会予稿集』3、日本語教育学会、341-344.
- 宇佐美まゆみ (2007) 『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成プログラム」報告集3自然会話教材開発研究』、東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室.
- (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B(2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書、17-36.
- 大浜るい子 (1998) 「日本人の言語行動—談話展開のためのストラテジー—」『広島大学日本語教育学科紀要』no.8、97-105.
- (2006) 『日本語会話におけるターン交替とあいづちに関する研究』、溪水社
- 郭末任 (2002) 「日本語のあいづちに関する—考察—対話の中に挿入される相づちを中心に—」『日本語教育研究』No.42、(財)言語文化研究所、111-123.
- ザトラウスキー・ポーリ(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』、くろしお出版.
- 小宮千鶴子 (1986) 「相づちの使用実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』第3号、大東文化大学語学教育研究所、43-62.
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相—座談資料の分析—』国立国語研究所報告書92、三省堂、68-106.
- 陳姿菁 (2001) 「日本語の談話におけるあいづちの種類とその仕組み」『日本語教育』108号、日本語教育学会、24-33.
- 土岐哲 (2005) 「インタビュー・聞き書きと質問紙調査法」『日本語学』6月臨時増刊号vol.23、32-43.
- 西郡仁朗 (2002) 「自然会話データ『偶然の初対面の会話』～その方法論について～」『人文学報』330号、東京都立大学人文学部、1-18. (転載：文部科学省科学研究費報告書(基盤研究C(2))『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』(研究代表者：宇佐美まゆみ) .
- 西郡仁朗・崔文姫・磯野英治 (2010c) 「mic-Jコーパスの公開について—「外国人へのインタビュー篇」「日本人へのインタビュー篇」—」『人文学報』377号、首都大学東京都市教養学部人文・社会系、31-39.

- 西原鈴子 (1991) 「会話のturn-takingにおける日常的推論」 『日本語学』 10月号vol.10、10-18.
- 初鹿野阿れ (1998) 「発話ターン交代のテクニクー相手の発話中に自発的にターンを求める場合ー」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 24、東京外国語大学留学生日本語教育センター、147-162.
- 藤本かおる・小松恭子・磯野英治・関峻泓・王瑩・西郡仁朗 (2008b) 「海外高等教育機関の日本語教育におけるeラーニング・mラーニング利用状況の実態調査」 『2008年度日本語教育学会春季大会予稿集』、日本語教育学会、189-190.
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」 『日本語教育』 64号、13-26.
- (1990) 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」 『日本語教育』 71号、16-32.
- (1991) 「あいづち研究の現段階と課題」 『日本語学』 第10巻第10号、31-41.
- (1997) 『日本語教育と会話分析』、くろしお出版.
- (1997) 「聞き手の役割2ー予測ー」 『日本語教育と会話分析』くろしお出版、81-105.
- 松本剛次 (2003) 『日本語インタビュー会話におけるターンテイキングと日本語学習者のその習得過程』、東京外国語大学大学院修士論文.
- (2005) 「日本語学習者のターンの受け継ぎに関する談話レベルでの横断調査ーフランス語母語話者でのケーススタディーー」 『言語社会心理学的アプローチによる自然会話分析方法論ハンドブック』、東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、CD-ROM版、135-150.
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話し言葉の実態ーあいづちの分析ー」 『金田一春彦博士古希記念論文集』 第二巻言語学編 三省堂.
- (1988) 「あいづち論」 『日本語学』 Vol.7 No.13、4-11.
- (1993) 「「共話」から「対話」へ」 『日本語学』 Vol.12 No.4、4-10.
- Bakeman,R.&Gottman,J.M. (1986) Observing interaction : an introduction to sequential analysis. *Cambridge university Press*.
- Clancy,P.M.,Thompson,S.A.,Szuki,R.&Tao,H. (1996) The conversational use of reactive tokens in English,Japanese,and Mandarin. *Journal of Pragmatics*,26, 355-387.
- Ferrara,K. (1992) The interactive achievement of a sentence : Joint Productions in therapeutic discourse. *Discourse Processes*,15, 207-228.
- Jefferson,G. (1973) A case of precision timing in ordinary conversation ;Overlapped tag-positioned address terms in closing sequences. *Semiotica*,9, 47-96.
- Schegloff,E.A.& Sacks,H. (1973) Opening up closings. *Semiotica*,7, 289-327.
- Sacks,H. Schegloff,E.A & Jefferson,G.(1974) A sioplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. *Language*,20 No.4, 696-735.

- 투 고 : 2010. 5. 31.
 ■ 심 사 : 2010. 6. 12.
 ■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

비언어적 커뮤니케이션 기제로서의 이모티콘 사용 및 번역에 관한 연구

— 『電車男』의 일-한 텍스트 사례를 중심으로 —

崔少榮*
momorin@paran.com

<ABSTRACT>

Under the assumption that a non-verbal act goes beyond a simple expression to serve as a certain communication mechanism, emotion can be interpreted as an act that exerts physical and psychological influence on others. In this regard, emoticon, which signifies one's intension in the form of a non-verbal act, may affect relationship with others. In this respect, this paper presumed that emoticon alleviates face-threatening and functions as a strategy to convey politeness.

From the perspective of face-threatening act (FTA) and politeness strategy, this study examined the presumption with a Japanese-Korean text of Densha Otoko(translated as Train Man),which incorporated emoticon in its content.

In terms of the scope of research subject, this paper confined emoticon to a combination of characters and symbols, i.e. keys on a computer keyboard, and excluded icons constituted with only a fraction of a computer file.

Key words: emoticon, face-threatening act, politeness strategy

1. 들어가기

인터넷이 보급됨에 따라 많은 사람들이 온라인 환경에서 채팅이나 게시판 등을 통해 대화를 나누게 되었다. 그런데 인터넷과 같이 자판으로 의사를 전달해야 하는 커뮤니케이션 환경에서는 문자 외의 표현 수단이 존재하지 않기 때문에 면대면(face-to-face) 발화 환경에 비해 자신이 전하려는 바를 온전히 전달하기가 어렵다. 그리하여 인터넷 참여자들은 표정이나 억양 등 면대면 발화 환경에서 사용되는 각종 비언어적 기제를 이모티콘(1)으로 도상 문자화(2) 해 사용하기 시작했다. 즉, 적은 타수로도 감정이나 느낌을 전달할 수 있는 이모

* 동아방송예술대학 강사

- 1) 이모티콘(emoticon)은 감정(emotion)과 도상기호(icon)의 합성어이다. 대개 이모티콘이라 하면 인쇄기호를 조합해 만든 시각 단서로서 왼쪽으로 읽으면 기분이나 감정을 나타내는 표정이 나타나는 것으로 이모티콘은 전형적인 웃는 표정을 나타내며 메시지를 보내는 사람의 감성을 나타낸다. 또한 특정한 이모티콘을 사용하는 것은 기쁨, 행복한, 유쾌한, 혹은 그와 유사한 마음의 상태를 나타낸다(Rezabek & Cochenour 1998:201).
- 2) 국내에서는 1990년대 중반부터 PC통신이 확산되면서 그전에는 볼 수 없었던 특징적인 언어 현상이 나타나기 시작했다. 사람들은 PC통신을 하면서 문자를 입력할 때 축약된, 혹은 간결한 어휘를 사용함으로써 타수(打數)를 줄이고자 했으며, 친근감을 나타내기 위해 애교있는 말투를 사용하는 경향이 있었는데 이를 통신어 또는 통신언어라 불렀다. 통신언어는 고의로 철자법을 무시하는 등 온라인 환경 참여자들의 관행적 표기현상으로서의 언어체 뿐 아니라 새로운 말을 만들어 내거나 이모티콘과 같이 철자를 도상적으로 이용하는 어휘 현상을 포함한다(박현구 2003:33).

티콘이 온라인 환경에서 새로운 커뮤니케이션 기제로 사용되기 시작한 것이다.

이모티콘은 얼굴 표정을 나타내기 위해 사용된 기호지만 그 자체만으로 비언어적 행위라고 하기보다는 사용자의 의도나 목적에 따라 입력된 이미지의 한 표현이라 할 수 있다 즉, 이모티콘 사용은 의도적 행위이므로 사용자가 이를 통해 어떠한 커뮤니케이션 효과를 은연 중에 기대하고 있다고 볼 수 있다. 다시 말해 온라인 참여자가 문자 텍스트만으로는 얻기 어려운 특정 커뮤니케이션 목표를 위해 이모티콘을 사용한 것으로 볼 수 있다³⁾.

본 연구에서는 컴퓨터 자판에서 찾을 수 있는 문자 및 기호의 조합에 이모티콘의 범주를 한정하며 그림 파일의 일부로 만들어진 아이콘 등은 분석대상에 포함시키지 않는다.

박현구(2005)의 선행연구에서는 한국의 온라인 채팅환경에서 사용된 도상문자의 유형 및 그 사용량을 통계적으로 분석하고 있다. 그리고 분석결과, 인터넷 이용자는 자신에게 중요한 사안을 요구할 때는 상대가 친밀하지 않은 경우, 더 많은 이모티콘을 사용해 대화하는 경향이 있었다고 밝히고 있다. 선행연구와 본고와의 차이로는 1)이모티콘의 유형이나 사용량을 통계적으로 분석하는 것이 아니라 2)일본 온라인 상에서 사용된 문자텍스트+이모티콘의 결합 텍스트가, 번역문으로서 한국어 문자텍스트+이모티콘으로 번역되었을 때, 커뮤니케이션 기제로서의 이모티콘의 기능에 어떤 변화가 일어나는지, 또 그 이유는 무엇인지에 주안점을 두는 것이라 하겠다.

2. 커뮤니케이션 전략으로서의 이모티콘

비언어적 행위가 단순한 표현 이상의 어떤 커뮤니케이션 기제로 기능한다고 가정할 경우, 감정을 표현하는 것은 상대방에게 심리적, 물리적 영향을 미치는 행위라 할 수 있다. 그렇다면 비언어적 행위를 상징한다고 할 수 있는 이모티콘 역시 상대방와의 관계에 모종의 영향을 미치는 것으로 생각해볼 수 있다. 이에 본고에서는 먼저, Goffman의 'face(체면)' 개념에 입각한 체면유지전략으로서의 이모티콘, 그리고 Brown & Levinson의 'FTA(체면위협 행위)'의 개념에 입각한 공손전략으로서의 이모티콘이라는 두 가지 측면에서 살펴보고자 한다.

2.1. 체면유지전략으로서의 이모티콘

2.1.1. Goffman의 'face'

대인관계 속에서 개인이 보호받고자 하는 사회적 정체성은 체면(face)을 통해 나타난다.

3) Thompson & Foulger(1996)은 이모티콘을 비언어적 커뮤니케이션의 대리물인 유사언어(paralanguage)로 규정하며 언어의 맥락을 풍부하게 하는 점을 특징으로 거론하고 있다. 또한 Godin(1993:4)은 “이모티콘이 표현 관행으로 정착되기 전까지 온라인 참여자들은 미묘한 감정 변화를 표현할 수 없었으며 농담 및 풍자를 하거나 말장난을 하기도 어려웠다”고 언급하고 있다.

상호작용 과정에서 상대의 체면을 지켜주지 못하거나 자신의 체면을 보호받지 못할 경우 그 대인관계는 어긋나고 만다.

Goffman(1967)은 인간 상호작용에 있어 중요한 개념 중 하나로 '체면(face)'을 들고 있다. 체면유지는 사회적 상호작용 과정에 필요한 조건이며 자신 뿐 아니라 상대에 대한 우호적 전제조건이 된다는 것이다.

문자 중심의 인터넷 환경에서는 체면을 살리기 위한 비언어적 단서를 활용하기가 어렵다. 그런데 그럼에도 불구하고 온라인에서는 지금도 다양한 상호작용이 일어나고 있고 지속적인 대인관계가 형성, 유지되어 가는 것을 볼 수 있다. 이를 통해 인터넷 상에서 오고가는 메시지에는 체면살리기에 필요한 언어 외적 요소들이 가미되어 있다고 추론해볼 수 있는데, 면대면 환경에서의 비언어적 행위를 상징하는 이모티콘이 바로 이 기능을 수행하고 있다고 볼 수 있다. 즉, 인터넷 참여자들은 이모티콘을 통해 비언어적으로 공손함을 나타내거나 공손하고자 하는 언어 표현의 의미를 강화할 수 있다는 것이다.

2.2. 공손전략으로서의 이모티콘

2.2.1. Brown & Levinson의 'FTA'

Goffman의 'face(체면)' 개념에 영향을 받아 Brown & Levinson(1978/1987)은 상호작용 상황을 분석해 언어사용을 지배하는 규칙과 사회적 관계를 지배하는 규칙 간의 관계성을 정립함으로써 좀 더 체계적이고 종합적인 '공손이론(politeness theory)'으로 발전시켰다.

Brown & Levinson(1978/1987)에 의하면 체면은 '적극적 체면(positive face, PF)'과 '소극적 체면(negative face, NF)'의 두 가지 측면을 지닌다. 적극적 체면은 화자 자신의 바람이 상호작용 대상자들 중 적어도 몇 사람에게는 수용되길 바라는 것인 반면, 소극적 체면은 화자 자신의 욕구가 다른 사람에 의해 방해받지 않기를 바라는 것이다. 이러한 체면을 고려할 때 '체면욕구(face-wants)'를 위협하는 어떠한 행위도 '체면위협 행위(face-threatening act, FTA)'로 간주된다. 따라서 대화자들은 가능한 체면위협 행위를 피하고 갈등을 최소화하고자 하는 담화전략을 사용한다. 또한 체면의식이 PF와 NF로 세분화되는 것처럼 공손전략 역시 '적극적 공손전략(positive politeness, PP)'과 '소극적 공손전략(negative politeness, NP)'으로 나뉜다⁴⁾. 이를 표로 정리하면 다음과 같다.

체면의 구분	적극적 체면(positive face, PF) : 다른 사람들이 자신을 인정하고 평가하기를 바라는 적극적인 자기 이미지	소극적 체면(negative face, NF) : 영토에 대한 권리, 행동의 자유, 강요로부터의 자유 등 자신의 행동이 타인에 의해서 방해받고 싶지 않다는 욕구
--------	--	---

공손전략	<p>적극적 공손전략 (positive politeness, PP) : 공통점 주장하기, 관심, 승인, 동정 등을 과장하기, 상대방에게 통하는 내집단(in-group)의 자아정체표지와 방언 사용하기, 반대의사 피하기, 청자의 가치가 화자의 가치와 동일하다고 가정하기, 이유를 제시하고 요청하기 등</p>	<p>소극적 공손전략 (negative politeness, NP) : 간접적으로 발화하기, 사과와 같은 화자의 욕구가 청자에게 강요되지 않는 발화 등</p>
------	--	---

3. 분석대상 및 연구과제

3.1. 분석 텍스트 및 선정배경

분석대상으로는 2004년 봄, 일본의 한 인터넷 사이트인 투채널(2ちゃんねる; HTTP://WWW2.2CH.NET/2CH.HTML)이라는 곳에 게재된 네티즌들의 실제 글들과 댓글을 엮어 책으로 발간한 『전차남(電車男)』으로 선정했다. 이 책은 전철 안에서 자신의 이상형을 만난 한 남성(소위 전차남)이 자신의 마음을 어떻게 고백해야 좋을지 모르겠다는 고민을 인터넷 게시판에 올린 데서부터 출발한다. 게시판을 본 불특정 다수의 네티즌들이 이 남성을 적극 지지하고 나서 이른바 연애포스트를 함으로써 게시판에 댓글이 폭주하게 되었고 게시판을 통한 네티즌들과의 지속적인 커뮤니케이션으로 전차남은 이상형과 해피엔딩을 맞게 되었다는 내용이다. 본 책의 선정이유로는 첫째, 실제 인터넷 상에서 사용된 문자 텍스트와 이모티콘이 그대로 수록되어 있다는 점, 둘째, 네티즌들이 소위 연애포스트를 함으로써 ‘어떻게 하라’는 형식의 명령문, 요청문이 많이 쓰였는데 이것이 이모티콘과 어우러져 FTA를 어떻게 완화시키고 있는지 살펴볼 수 있다고 판단했기 때문이다.

한편, 투채널에서는 사이트 내에서 주로 사용되는 이모티콘과 감성, 동작, 캐릭터 등을 나타내는 이모티콘을 어순별로 나누어 <표 1>과 같이 정리해놓고 있다. 본고의 분석대상이 된 이모티콘도 이 표 안에 정리되어 있으며 아래는 이러한 표의 일부를 발췌한 것이다. 또 아래 표의 원문에 보듯이 각 이모티콘마다 ‘복사(コピー)’기능이 첨부되어 있어 채팅을 하다가 참여자가 삽입하고자 하는 이모티콘이 있으면 이 ‘복사’ 기능을 이용해 언제든지 쉽

4) Brown & Levinson은 적극적 공손전략(PP)과 소극적 공손전략(NP)을 나타내는 담화전략을 제시했다. 적극적 공손전략을 성취하기 위한 전략으로는 공통점 주장하기, 관심, 승인, 동정 등을 과장하기, 상대방에게 통하는 내집단(in-group)의 자아정체 표지와 방언 사용하기, 반대의사 표현 피하기, 청자의 가치가 화자의 가치와 동일하다고 가정하기, 이유를 제시하고 요청하기 등이다. 반면에 소극적 공손전략을 나타낼 수 있는 전략으로는 간접적으로 발화하기, 사과와 같은 화자의 욕구가 청자에게 강요되지 않는 발화 등을 들 수 있다(송경숙 2003:149에서 재인용).

5) 출처 <http://www.smile-style.jp/list/>에서 부분발췌

본고에서는 온라인 환경에서의 이모티콘 사용을 중심으로 다음과 같은 연구과제를 설정해보았다.

- 첫째, 이모티콘이 FTA완화기제 및 공손전략으로 어떻게 기능하고 있는가
- 둘째, 일-한 간에 차이가 발생했다면 그 차이는 무엇이며 이유는 무엇인가
- 셋째, 문자텍스트+이모티콘 결합의 텍스트를 번역할 때 고려되어야 할 사항은 무엇인가

4. 텍스트 분석

분석유형으로는 아래와 같이 크게 두 가지로 나누어 살펴보았다.

첫째, 원문 문자텍스트 vs 번역문 문자텍스트

둘째, 원문 문자텍스트+이모티콘 vs 번역문 문자텍스트+이모티콘

이 중 두 번째 경우, ST-TT 간 이모티콘이 일치하는 경우와 일치하지 않는 경우로 하위 분류해 살펴보았다.

4.1. 원문 문자텍스트 vs 번역문 문자텍스트

<사례 1> 대화자: 비공개→전차남⁶⁾

(50) 美容院だ！すぐに予約 <u>し</u> ！	(55) 미용실이지! 당장 예약 <u>할</u> 것!
명령: NF에 대한 FTA 공손어법: 명령형 어미 ‘しる’를 사용하는 대신 비슷한 발음의 ‘しる’를 한자로 변환(汁)해 직접적인 명령을 완화 → 간접적으로 발화 → NP	명령7): NF에 대한 FTA 공손어법: 원문에 사용된 FTA완화기제(발음유사 한자어로 변환)를 그대로 적용할 수 없어 ‘당장 예약해라’의 표현을 ‘당장 예약할 것’으로 수위 낮춤 → 간접적으로 발화 → NP

<사례 2> 비공개→전차남

(102) 洋食かあ・・テーブルマナーに気をつけろ <u>Yo</u>	(106) 양식이야.. 테이블 매너에 주의 <u>해야</u> 겠네.
--	--

6) 사례에서 괄호 안의 숫자는 분석 텍스트의 해당 페이지를 나타내고 이탤릭체와 밑줄 표시는 분석대상이 된 표현을 나타낸다. 또 분석사례 윗부분의 ‘비공개→전차남’의 경우, 대화방향이 비공개 네티즌에서 전차남에게 향하는 것을 나타낸다.

7) 고성환(2003) 『국어 명령문에 대한 연구』, 역락출판사. p.43-108 참조

명령: NF에 대한 FTA 공손어법: 명령형 어미 ‘~ろ’뒤에 종조사 ‘Yo’를 덧붙여 명령의 정도를 완화 ⁸⁾	직접충고: NF에 대한 FTA 공손어법: 원문에서 명령형+yo로 사용된 것을 충고로 전환 → 간접적으로 발화 → NP
--	--

4.2. 원문 문자텍스트+이모티콘 vs 번역문 문자텍스트+이모티콘

4.2.1. ST-TT간 이모티콘의 불일치

<사례 1> 전차남→네티즌

(17) マジでどうすりゃいいのかわかんねえよ！ \(`´) 今すぐ電話すんの？ え drftgyふじこlp@	(21) 진짜로 어떻게 해야 될지 모르겠어요! \(`´) 지금 바로 전화해야 돼나요? 모, 모ㄴ#\$%^&*@
정보제공요청: NF에 대한 FTA 공손어법: 1)정보제공 요청 전에 화자의 상태 언급 2)문자 텍스트도 표정을 나타내는 이모티콘도 아닌 문자들의 나열 : 상황의 급박성 및 심각성 전달 → 이유를 제시하고 요청하기 → NP	정보제공요청: NF에 대한 FTA 공손어법: 1)‘지금 전화해?’의 표현을 ‘전화해야 돼나요?’로 어미변화 2)원문과 다른 문자나열 사용 중 웃는 표정에 사용하는 ‘^^’의 ‘^’가 사용됨으로써 원문만큼의 급박성 결여 → 이유를 제시하고 요청하기 → NP

<사례 2> 비공개→전차남

(72) 手え握られたんだろう！？ そうだろ？ なあ！？ な！？ そうなんだ r j k あ j l g じゃ j g k あ j k g	(76) 그녀가 손 잡았죠? 그랬죠? 그죠? 네? 네? 그렇구나! @#\$%^*(라■ㄴㄹㅇ&*(라■ㄴㄹㅇ
정보제공요청: NF에 대한 FTA 공손어법: ‘そうだろ?’ ‘なあ!?’ ‘な!’ 등 반복물음과 반말처리로 동료의식 높임 → PP	정보제공요청: NF에 대한 FTA 공손어법: 존댓말 사용으로 원문에서보다 대화자 간의 거리감 증대시킴 → NP

8) 송현숙(2007) 「종조사 「ね」와 「よ」에 대한 일고찰 : 중학교 생활일본어 『こんにちわ』를 중심으로」, 고려대학교 교육대학원. p.20-43 참조

<사례 3> 비공개→전차남

<p>(102) ナイフを逆に持ったり、スープを音立てて飲んだりしないように^w</p>	<p>(102) ナイ프를 거꾸로 쥐거나, 소리내서 스프를 먹거나 하지 <u>않도록</u>^{^^}</p>
<p>명령: NF에 대한 FTA 공손어법: 1)종조사 ‘な’를 사용함으로써 FTA완화 → 간접적으로 발화 → NP 2)‘w’라는 이모티콘으로 FTA완화 → 관심 → PP</p>	<p>명령: NF에 대한 FTA 공손어법: 1)‘않도록’으로 마무리함으로써 명령의 FTA완화 → 간접적으로 발화 → NP 2)원문의 이모티콘 ‘w’를 ‘^^’로 바꿔 TT독자에게 친숙한 이모티콘 사용 : 원문에서의 FTA완화에서 한 단계 더 완화 → 관심 → PP</p>

4.2.2. ST-TT간 이모티콘의 일치

<사례 1> 전차남→네티즌

<p>(118) <u>やっぱ</u>まずかったですか… <u>=_ _ o</u></p>	<p>(122) <u>역시</u> 실수했나요… <u>=_ _ o</u></p>
<p>정보요구: NF에 대한 FTA 공손어법: 1)‘やっぱ’란 단어를 넣음으로써 상대방 대답의 예비조건을 달아줌 → 청자의 가치가 화자의 가치와 동일하다고 가정하기 → PP 2)고쳐하는 모양의 이모티콘 사용 → 정보요구에 대한 FTA완화</p>	<p>정보요구: NF에 대한 FTA 공손어법: 1)‘역시’란 단어를 넣음으로써 상대방에 대한 정보요구의 FTA완화 → 청자의 가치가 화자의 가치와 동일하다고 가정하기 → PP 2) 고쳐하는 모양의 이모티콘 사용 → 정보요구에 대한 FTA완화</p>

<사례 2> 비공개→전차남

<p>(132) (((;°∇°)))<u>なんだその</u> _ _ oは!</p>	<p>(136) (((;°∇°)))<u>모야?</u> 그 _ _ o은!</p>
<p>정보요구: NF에 대한 FTA 공손어법: (((;°∇°))) → 관심, 동정 → 정보요구에 대한 FTA완화</p>	<p>정보요구: NF에 대한 FTA 공손어법: 1) ‘뭐야’ 대신 ‘모야’를 사용해 거리감 좁힘 → 방언 사용하기⁹⁾ → PP 2) (((;°∇°))) → 관심, 동정 → 정보요구에 대한 FTA완화</p>

9) 사회방언(social dialect 또는 sociolect)이란 지역방언과 대립되는 개념으로 지리적인 요소에 의해서가 아니라 사회적

<사례 3> 비공개→전차남

<p>(223) 昨日まで死ぬ思い出で連チャンで徹夜してレポート仕上げてやっと眠って…起きたら<u>これですか orz</u></p>	<p>(230) 어제까지 죽기 아니면 살기로 연짱 밤새서 레포트 쓰고 겨우 한숨 자고 일어났더니 <u>이 꼴이란 말인가? orz</u></p>
<p>전차남에 대한 부정적 평가: PF에 대한 FTA 공손어법: 전차남의 행동을 비난하는 FTA를 존대형 ‘ですか’와 ‘orz’(엎드리고 있는 사람의 형상을 알파벳으로 도상화한 모양)로 완화 → 간접적으로 발화, 동정 → NP</p>	<p>전차남에 대한 부정적 평가: PF에 대한 FTA 공손어법: 원문에 사용된 ‘ですか’가 TT에선 반영되지 않고 ‘이 꼴이란 말인가’로 나타나 ‘orz’가 병기되었음에도 FTA완화 효과가 떨어짐</p>

<사례 4> 비공개→전차남

<p>(23) 手紙は有効じゃないんですか<u>ね</u>? (` · ω · `)</p>	<p>(27) 편지는 별 효과가 없을까<u>요</u>? (` · ω · `)</p>
<p>정보요구:Nf에 대한 FTA 공손어법: 1)종조사 ‘ね¹⁰⁾’를 통해 상대방에게 동의를 확인 → 청자의 가치가 화자의 가치와 동일하다고 가정하기 → PP 2)고민하는 이모티콘 사용으로 FTA완화</p>	<p>정보요구:Nf에 대한 FTA 공손어법: 1)원문의 종조사 ‘ね’가 TT에서는 동의 확인으로서의 기능보다는 종결어미 ‘요’로 나타남 2)이모티콘 사용으로 FTA완화</p>

<사례 5> 비공개→전차남

<p>(31) (` · π · `)つと <茶<u>飲め</u></p>	<p>(35) (` · π · `)つと 물도 <u>마시고</u></p>
<p>명령: NF에 대한 FTA 공손어법: 물을 마시라는 명령형에 이모티콘을 첨부 → 명령에 대한 FTA완화</p>	<p>명령: NF에 대한 FTA 공손어법: 1)종결어미를 원문의 명령형으로 하지 않고 ‘마시고’로 끝맺음으로써 직접적인 명령을 피함 → 간접적으로 발화 + 관심의 이모티콘 → NP</p>

급, 연령, 성별, 종교, 인종 등과 같은 사회적 요인에 의해 분화된 방언을 말한다. 달리 말하면 지역방언은 지리적인 집단에 의해 형성된 방언이요, 사회방언은 사회적 집단에 의해 형성된 방언이다(이익섭 1998:80).

10) 정호선(2005) 「終助詞「ね」についての考察」 성신여대 대학원. p.45 참조

<사례 6> 비공개→전차남

(76) (·▽·)ソレデソレデ	(80) (·▽·)그래서? 그래서?
정보요구: NF에 대한 FTA 공손어법: 반복어휘 사용 + 호기심에 찬 표정의 이모티콘으로 정보제공 요구에 대한 FTA완화 → NP	정보요구: NF에 대한 FTA 공손어법: 1)원문에 사용된 반복어휘 사이에 ‘?’를 넣음으로써 상대에게 다음 말을 재촉하는 급박성이 떨어짐 + 이모티콘 사용으로 FTA완화 → NP

<사례 7> 비공개→전차남

(76) つうなあげえよおおおおお!! · · ·はΣ(°Д°) まだつづくのか。	(80) 얘기 계속 해쥬오오오오오오오!! Σ(°Д°) ..휴 계속하는구나.
명령: NF에 대한 FTA 공손전략:1)어절을 길게 늘어뜨림으로써 간절함 표현 → PF에 대한 완화장치 2) 이야기가 계속된다는 것을 알고 놀라는 표정의 이모티콘을 통해 상대방의 이야기를 얼마나 원했는지, 앞의 명령과 대비시켜 PF를 살리는 완화장치로 사용	명령: NF에 대한 FTA 공손전략:1)어절을 길게 늘어뜨림으로써 간절함 표현 → PF에 대한 완화장치 2) 이야기가 계속된다는 것을 알고 놀라는 표정의 이모티콘을 통해 상대방의 이야기를 얼마나 원했는지, 앞의 명령과 대비시켜 PF를 살리는 완화장치로 사용

5. 분석결과 및 논의

분석대상인 두 텍스트에서 이모티콘이 수행한 FTA완화기제로서의 역할은 여러 면에서 유사하다. 분석사례 외에 전체 텍스트를 통해 살펴본 바, 이모티콘이 사용된 경우는 대개 네티즌이 전차남에게 상황이 어떻게 되어 가는지 정보를 요구하는 경우와 연애키프를 하면서 ‘어떻게 하라’고 명령하는 경우, 반대로 전차남이 네티즌에게 자신의 행동이 옳았는지 확인하거나 다음 행동에 대한 키프를 요구하는 경우에 주로 나타나고 있다. 또 전차남이 네티즌에게 연애키프를 부탁하는 상황이지만 온라인 상이라는 특수한 환경으로 인해 힘의 상하관계가 확실한 수직관계를 형성하고 있지는 않다. 그 근거로 이를 언어적으로 나타내는 방법이라 할 수 있는, 의도적으로 FTA를 아무런 완화장치 없이 사용하는 경우는 거의 나타나지 않고 있음을 들 수 있다. 즉, 명령을 하거나 정보요구를 하면서도 문자 텍스트 차원에서 말미에 공손전략을 사용하거나 이모티콘을 첨가해 FTA수위를 완화하

고 있으며, 얼굴이 보이지 않는 상대의 가치를 비하하는 어휘는 거의 사용하지 않고 있다. 따라서 대부분이 PF가 아닌 NF에 대한 FTA로 나타나고 있으며 이는 한국어 번역문에서도 마찬가지이다.

또한 이때 일-한 텍스트에 나타난 동일한 FTA에 대해 원문에 사용된 이모티콘을 그대로 가져옴으로써 FTA의 성격변화에는 큰 변화가 없음을 확인할 수 있다. 다만 한국어 번역문의 경우, 원문에서의 반말표현이나 명령형이 번역문에서 존댓말이나 충고형태로 나타나 이모티콘으로 인한 FTA완화라기보다 문자 텍스트 자체에서 FTA의 수위가 낮아졌음을 볼 수 있었다. 더불어 공손전략의 경우, 문자 텍스트 자체 번역과정에서 사용된 어미 변화 등에 이모티콘이 추가되면서 PP, NP의 틀 안에서 다양한 형태의 공손전략이 실현되고 있음을 볼 수 있다.

한편, 한국어 번역문에서 일본어 원문의 이모티콘이 그대로 사용된 경우와 그렇지 않은 경우를 볼 수 있는데 이는 한일 양국의 이모티콘 사용 환경에 따른 차이이기도 하다. 즉, 한국의 이모티콘은 일본의 그것에 비해 간단한 기호나 자음 등으로 만들어져 있는데 문자표를 이용해 쉽게 찾을 수 있는 기호들이다. 반면, ‘顔文字’라 불리는 일본의 이모티콘은 다양한 형태의 특수문자를 사용하고 있어 한국의 그것에 비해 복잡한 구조를 띠고 있다. 또한 한국과 일본의 이모티콘의 차이를 만드는 또 다른 요인으로 운영체제인 마이크로소프트 윈도우즈의 기능 차이를 들 수 있다. 한글 윈도우즈의 한국어 입력기(IME)와 일본어 윈도우즈의 일본어 입력기(IME)를 비교해보면 한국어 입력기는 단어등록기능이 없는 데 반해 일본어 입력기에는 단어등록기능이 있어 복잡한 이모티콘 등을 등록해놓고 손쉽게 불러올 수 있는 것이다. 단어등록기능이 없는 한글 윈도우즈 상에서는 이모티콘을 직접 하나하나 입력해 사용해야 하기 때문에 이모티콘의 구조도 단순하고 종류도 다양해지기 어렵다는 한계를 갖는다. 그렇기는 하나 본 분석 텍스트에서 이모티콘 자체의 번역이 전혀 이루어지지 않은 것은 아니다. 4.2.1. ST-TT간 이모티콘의 불일치의 예에서 보듯이 의미를 이루지 않는 문자열은 전혀 다른 형태로 바꾸거나 일본에서 웃는 표정을 나타낼 때 사용하는 ‘w’를 한국 독자들에게 익숙한 이모티콘(“^^”)으로 대체한 예를 볼 수 있다. 다만, 낮은 이모티콘이 텍스트 전체적으로 사용된 가운데 유독 그 부분만 눈에 띄어 전체적으로 통일감이 떨어지는 효과를 내고 있다는 점도 간과할 수 없다.

이상의 간단한 분석을 통해서도 알 수 있듯이 얼굴 표정이나 감정을 도상적으로 묘사한 이모티콘을 통해 문자로는 표현할 수 없는 커뮤니케이션 단서를 전달할 수 있다. 그리고 이러한 이모티콘이 사용된 메시지는 상대방에게 동질감을 느끼게 하고 존중받고 있다는 느낌을 전달함으로써 체면을 살리는 데 기여한다. 즉, 네티즌들에게는 이미 일상적 화법으로 자리잡았다고 할 수 있는 이모티콘이 실제 텍스트 분석을 통해서도 대인관계에 있어 FTA완화기제로 작용하고 있음을 살펴볼 수 있었다.

한편 번역에 있어서는 각각의 FTA가 번역문에서 어떻게 번역되었는가를 평가하는 것도 중요하지만 그 못지않게 전체적인 텍스트 흐름이 일관성있게 옮겨졌는지를 살피는 것도

번역의 중요한 작업이 될 것이다.

끝으로 본고의 한계로 분석데이터의 양과 본 텍스트 분석이 일-한 텍스트 간에 보여지는 경향을 중심으로 주관적 평가에 기반하고 있다는 점을 들 수 있다. 향후 연구에서는 이러한 점을 보완해 분석대상 텍스트의 양적 확대와 복수 분석자에 의한 데이터 분석도 함께 검토해 볼 수 있을 것이다.

◀ 참고문헌 ▶

- 고성환(2003) 『국어 명령문에 대한 연구』, 역락출판사. p.43-108
- 박영순(2004) 『한국어의 사회언어학』, 한국문화사. p.11-30
- 박현구(2003) 「문자 중심 컴퓨터매개환경에서 도상문자와 공손 표현의 관계 연구」, 연세대학교 대학원 박사학위논문. p3-66
- 박현구(2005) 「온라인 환경의 이모티콘과 비언어 행위의 관계」, 『언론과학연구』 제5권 3호. p.273-302
- 송경숙(2003) 『담화 화용론』, 한국문화사. p.123-149
- 송현숙(2007) 「종조사 「ね」 와 「よ」 에 대한 일고찰 : 중학교 생활일본어 『こんにちわ』 를 중심으로」, 고려대 교육대학원 석사학위논문. p.20-43
- 이성범(2002) 『영어화용론』, 한국문화사. p.15-24
- 이익섭(1998) 『사회언어학』, 민음사. p.80-92
- 정호선(2005) 「終助詞 「ね」 についての考察」 성신여대 대학원. p.45
- 정호정(2001) 「공손어법의 언어문화특수성과 번역」, 『한국외대 통번역연구소 논문집』 제5집. p.169-192
- Brown and Steven Levinson[1978](1987) *Politeness: Some Universals in Language Use*, Cambridge University Press.
- Brown, Gillian, and George Yule(1983) *Discourse Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, Erving(1967) *Interaction Ritual*, New York: Doubleday.
- Levinson, Stephen(1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lim, T., & Bowers, J. W(1991) Facework: Solidarity, approbation, and tact. *Human Communication Research*, 17. p.415-450
- Rezabek, L. L., and J. J. Cochoenour(1998) Visual cues in computer-mediated communication: Supplementing text with emoticons. *Journal of Visual Literacy*, 18. p201-215
- Tompson, P. A., and D. A. Foulger(1996) Effects of pictographs and quoting on flaming in electronic mail. *Computers in Human Behavior*, 12. p225-243
- Godin, S(1993) *The smiley Dictionary*. Berkeley, CA: Peachpit.

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

일본어 동경방언과 한국어 대구방언의 음조에 대한 악센트론적 고찰

— 악센트체계와 출현빈도, 유형론 —

辻野 裕紀*
tsujino@sungshin.ac.kr

<要 旨>

本稿の目的は、日本語東京方言と韓国語大邱方言の名詞の音調をアクセント論の観点から照射し、両者の共通点を明らかにするところにある。先行研究と言語事実に立脚し、音韻論的なレベルである<アクセント体系>やアクセント型の<出現頻度>などといった観点から詳細な分析を加えた結果、両言語において、次の5つの点が共通していることが明らかとなった：

- ① 下げ核を有するピッチアクセント言語である。
- ② n+1個のアクセント型の対立がある (n: 音節数・モーラ数)。
- ③ 非均衡アクセント言語である。
- ④ 次末アクセントを基本 (default) とする (次末アクセント規則を持つ)。
- ⑤ アクセントを置きにくい、音韻論的に「弱」の環境が存在する。

つまり、日本語東京方言と韓国語大邱方言の音調は音声的には大きく異なるが、アクセント論的には極めて類似したタイプの言語と云える。

また、④の次末アクセント規則は言語類型論的にも注目すべき特徴である。何となれば、次末アクセント規則は、ラテン語やラテン語と系統的、歴史的に関連のある諸言語をはじめ、世界の多くのアクセント言語に共通して観察されるもので、アクセント規則として一般性が高いからである。

こうした一連の言語事実は、今後の日韓両言語のアクセント研究のみならず、大邱方言話者に対する日本語教育にも裨益するところがあろう。

キーワード：日本語東京方言、韓国語大邱方言、アクセント体系、生起頻度、類型論

1. 들어가기

본고의 목적은 일본어 동경방언¹⁾(이하 ‘동경방언’이라 함)과 한국어 대구방언²⁾(이하 ‘대구

* 성신여자대학교 전임강사, 동경대학 대학원 박사과정. 언어학·한국어학.

1) 동경방언 악센트의 개략은 이한섭(1989:24-26), 斎藤純男(1997:112-122), 민광준(2002;2006), 上野善道(2004:241-245), 스기토 미요코[杉藤美代子](2008) 등을 참조.

2) 대구방언은 경상도방언의 하위방언이다. 대구방언을 비롯한 경상도방언의 악센트에 관한 선행연구는 허웅(1955,1963), 문효근(1962), 김영만(1966), 정연찬(1968,1974), 服部四郎(1968), 菅野裕臣(1972), 羅聖淑(1974), 大江孝男(1976), 橋本萬太郎(1978), 早田輝洋(1999), 李連珠(2000,2002), 福井玲(2000,2001), 孫在賢(2007), 辻野裕紀(2008ab) 등이 있다. 방언연구회(2001), 한성우(2009)도 참조. 辻野裕紀(2008a:48,76)에서는 경상북도 대구방언, 영천방언, 안동방언, 경주방언, 경상남도 부산방언, 김해방언, 창원방언, 창녕방언 등을 총칭해서 <동부 경상도방언>이라고 부르고 있는데 이는 福井玲(2000:4)가 제창하는 <경상도형 다형악센트>에 해당된다. 일반적으로 동부 경상도방언은 다형악센트언어, 서부 경상도방언은 N형악센트언어임이 잘 알려져 있다(<다형악센트>, <N형악센트>의 개념은 上野善道(1984:167-168) 등을 참조). 경상도방언은 현재의 한국어 표준어 및 서울방언에서 상실된 변별적인 고저악센트를 유지하고 있다는 점에서 한국어사의 관점에서도 중요한 방언이다. 중세한국어에

방언'이라 함)의 명사의 음조(音調)에 대해 악센트론적인 관점에서 고찰하여 그 공통점을 밝히는 데에 있다.

동경방언과 대구방언 모두 고저악센트(pitch accent)언어임은 일찍부터 많은 연구자들이 지적해 왔다. 대구방언에 관해서는 주로 한국의 연구자들을 중심으로 성조언어로 간주하는 견해도 있었으나 본고에서는 악센트언어로 본다³⁾.

본고는 동경방언과 대구방언이 모두 악센트언어라는 전제에 입각하여 악센트론의 입장에서 분석했을 때, 두 언어가 극히 유사한 언어라는 사실을 몇 가지의 선행연구와 언어사실을 근거로 밝히고자 한다.

논증의 근거로 삼은 자료는 동경방언은 기존의 선행연구⁴⁾, 대구방언은 필자가 2007년 8월 하순에 대구광역시에서 실시한 현지조사에서 얻은 데이터에 의거한다⁵⁾. 제보자(informant; consultant)는 20대부터 60대의 대구방언 모어화자(토박이) 다섯 명이다. 제보자 선정에 있어서는 佐藤和之(2003), 이상규·안귀남(2007) 등을 참조하여 ①대구에서 태어나 자란 사람, ②외지에서 오랫동안 산 적이 없는 사람, ③부모 및 배우자가 대구 내지 경상북도에서 태어나 자란 사람이라는 세 가지의 원칙에 따랐다.

2. 음조형(音調型)과 악센트체계

도 변별적인 고저악센트가 있었음이 알려져 있다 (그러나 중세한국어는 피치가 어디서 올라가는가가 음운론적으로 중요하다는 점에서 경상도방언과 차이가 난다. 중세한국어는 고전 그리스어나 산스크리트어, 카잔타타르어, 아이누어, 일본어 나라다(奈良田)방언 등과 같이 <상승형>을 가지는 악센트언어이다). 중세한국어 역시 대구방언과 같이 성조언어였다고 주장하는 입장도 있으나 필자는 기본적으로는 악센트언어였다고 보고 있다. 어쨌든 소리의 높낮이가 변별성을 가지고 있었다는 점은 틀림없는 사실일 것이다. 더 거슬러 올라가면 악센트에 변별성이 없었을 가능성도 있다. 중세한국어의 악센트에 대해서는 김완진(1973;1989), 門脇誠一(1976,1985), 福井玲(1985,2003), 김성규(1994,2009), 趙義成(2002) 등, 한국어 악센트의 기원에 대해서는 Ramsey(1991), 福井玲(2003) 등을 참조.

- 3) 단적으로 말해서 성조는 <어느 것인가>가 문제가 되는 것이고(예를 들어 중국어(북경관화)에서는 'ma'《말, horse》라는 단어가 제1성, 제2성, 제3성, 제4성 중 어느 성조인가가 문제가 됨), 악센트는 <어디에 있는가>가 문제가 되는 것이다(예를 들어 영어에서는 'import'《수입하다》라는 단어의 어디에 악센트가 있는가가 문제가 됨). 만약 대구방언을 중국어 등과 같은 성조언어로 간주하여 고(高)와 저(低)라는 두 가지의 성조가 있다고 본다면 이론적으로는 적어도 2음절명사에는 네 가지, 3음절명사에는 여덟 가지, 4음절명사에는 열 여섯 가지의 대답이 있어야 한다 (물론 성조언어라도 중국어(북경관화)와 같은 경우에는 이른바 tone sandhi현상이나 경성(輕聲)도 있기 때문에 실제로는 좀 더 복잡하다). 그러나 언어사실을 관찰하면 실제로는 대구방언의 2음절명사에는 세 가지, 3음절명사에는 네 가지, 4음절명사에는 다섯 가지의 대답밖에 존재하지 않는다. 이러한 점을 감안하면 단어를 구성하는 음절 하나하나에 성조가 하나씩 부여되어 있다고 보는 것보다는 일본의 많은 연구자들처럼 악센트핵의 위치를 지정하여 단어 전체가 어떤 악센트패턴으로 나타나는가가 중요한 역할을 하는 <악센트언어>로 해석하는 것이 타당하다 하겠다.

- 4) 上野善道(1975,1977,1989,2004), 窪菌晴夫(2006), 金田一春彦 監修, 秋永一枝 編(2008) 등을 참조했다.

- 5) 조사 대상어는 필자가 미리 작성한 조사표의 명사(단순명사, 복합명사) 약 2200개이다. 조사 어휘 선정에 있어서는 허웅(1963), 梅田博之(1971), 최명옥(1980), 김차균(1980), 菅野裕臣他(1988;1991), 연세대학교 언어정보개발연구원 편(1998), 福井玲(1999), 李連珠(2000), 朴宗姬(2000), 野間秀樹(2002), 孫在賢(2006) 등을 참고했다. 이 조사의 결과는 辻野裕紀(2008ab)에서도 이용했다.

H를 고조의 음절(모라)⁶⁾, L을 저조의 음절(모라)로 해서 동경방언과 대구방언의 음조형을 정리하면 다음과 같다⁷⁾:

【표1】 동경방언의 음조형⁸⁾

1모라명사	2모라명사	3모라명사	4모라명사
L(H) ヒ<<해>>	LH(H) トリ<<새>>	LHH(H) サクラ<<벚꽃>>	LHHH(H) トモダチ<<친구>>
H(L) ヒ<<불>>	HL アメ<<비>>	HLL イノチ<<목숨>>	HLLL フジサン<<후지산>>
	LH(L) ハナ<<꽃>>	LHL ココロ<<마음>>	LHLL ウグイス<<휘파람새>>
		LHH(L) オトコ<<남자>>	LHHL ミズウミ<<호수>>
			LHHH(L) イモート<<여동생>>

【표2】 대구방언의 음조형⁹⁾

1음절명사	2음절명사	3음절명사	4음절명사
H(H) 말<<升>>	HH 구름<<雲>>	HHL 이야기<<話>>	HHLL 콘크리트<<コンクリート>>
H(L) 말<<馬>>	HL 노래<<歌>>	HLL 며느리<<嫁>>	HLLL 윈도우즈<<ウィンドウズ>>
	LH 나무<<木>>	LHL 미나리<<芹>>	LHLL ¹⁰⁾ 그랑프리<<グランプリ>>
		LLH 부뚜막<<竈>>	LLHL 고슴도치<<針鼠>>
			LLLH 알루미늄<<アルミニウム>>

6) 여기서는 동경방언은 모라, 대구방언은 음절을 기준으로 표를 작성했다. 음절과 모라의 정의, 개념에 대해서는 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996:160-161,1309) 등을 참조.

7) 여기에 열거한 LH(H), HL, LH(L)과 같은 음조형은 그 단어를 단독으로 발음할 때 나타나는 이른바 인용형(citation form)의 음조이다.

8) 단어의 예는 金田一春彦監修, 秋永一枝編(2008:18-19)에 의한다.

9) 동경방언과 달리 대구방언은 4음절명사(단순명사)의 대부분이 LLHL로 나타나 LLHL 이외의 악센트형으로 나타나는 단어가 거의 외래어이기 때문에 LLHL 이외의 예는 외래어를 제시한다. 辻野裕紀(2008a:72-73)에서는 악센트의 세대차에 대해서도 논하고 있는데, 이에 의하면 노년층(60대 이상)의 화자는 단어의 제1음절에 상승조(rising tone)의 장모음(long vowel)을 유지하고 있으며(이 장모음은 주로 중세한국어의 상성(上聲)에 해당하는 것으로 모음연속(hiatu)의 축약으로 생긴 장모음과는 명확히 구별해야 한다. 이 문제에 대해서는 早田輝洋(1976,1999), 辻野裕紀(2008a:80) 등을 참조), 이 장모음을 早田輝洋(1976,1999), 辻野裕紀(2008a) 등과 같이 운율적 특징으로 해석해서 하나의 계열로서 인정하면 음절수n에 대해 n+2가지의 대립이 존재하는 다형악센트로 보는 것도 가능하다. 한국의 국어학에서도 대구방언의 음조체계를 고저와 함께 음장이 작용하는 체계로 간주하는 견해가 지배적이다. 그러나 이 장모음은 현재 점점 소멸되어 가고 있으며 비(非)노년층 화자의 대부분은 노년층이 장모음으로 발음하는 음절도 거의 모두 단모음으로 발음한다. 본고에서는 이러한 점을 고려해 n+2가지가 아니라 n+1가지의 대립이 있는 체계로 보기로 한다.

10) 단순어에는 LHLL이라는 음조형으로 나타나는 단어가 적고, LHLL로 나타나는 단어가 거의 모두 차말(次末)음절이 약모음이라는 특징을 공통으로 가지고 있기 때문에 LHLL을 LLHL의 변이형(variant)으로 해석해서 기저

이런 식으로 음조형을 정리하면 동경방언도 대구방언도 음절(모라)수n에 대해 n+1 가지의 음조형이 대립하는 <다형(多型)악센트>¹¹⁾임을 알 수 있다.

또한 빗금 친 부분은 동경방언과 대구방언의 음조가 서로 다르지만¹²⁾, 음운론적인 해석을 가하면 기저형(基底形:underlying form)에서는 모두 동일한 체계를 이루고 있다는 사실을 알 수 있다. 즉 동경방언의 L(H), LH(H), LHH(H), LHHH(H), 대구방언의 H(H), HH, HHL, HHLL을 모두 악센트핵(accent kernel)¹³⁾이 없는 무표적(無標的:unmarked)인 형식으로 간주하여, 나머지를 악센트구(accentual phrase)¹⁴⁾내의 마지막 고조(H)에 악센트핵이 있는 것으로 해석하고, 그리고 구음조(句音調)¹⁵⁾와 같은, 악센트가 아닌 평면에 속하는 것들을 사상(捨象)해서 음운론적으로 악센트체계를 표시하면 다음과 같다¹⁶⁾:

【표3】 동경방언의 악센트체계

1모라명사	2모라명사	3모라명사	4모라명사
○	○○	○○○	○○○○
○]	○]○	○]○○	○]○○○
	○○]	○○]○	○○]○○
		○○○]	○○○]○
			○○○○]

【표4】 대구방언의 악센트체계

1음절명사	2음절명사	3음절명사	4음절명사
○	○○	○○○	○○○○
○]	○]○	○]○○	○]○○○
	○○]	○○]○	○○]○○
		○○○]	○○○]○
			○○○○]

다시 말하면 동경방언도 대구방언도 n+1가지의 악센트형이 대립하는 다형악센트로, 기저형에서는 똑같은 체계를 이루고 있다.

형에서는 N형악센트로 간주할 수도 있다.

- 11) 악센트단위의 길이에 따라서 악센트소(prosodeme)의 대립수가 늘어나는 악센트체계를 <다형악센트>라 한다. 한편 악센트단위의 길이와 상관없이 일정한 대립수밖에 존재하지 않는 악센트체계를 <N형악센트>라 한다. 上野善道(1984:167-168) 등을 참조.
- 12) 실제로는 대구방언의 LLH, LLHL, LLLH도 각각 LHH, LHHL, LHHH로 발음될 수도 있다. 친척히 발음하면 전자의 음조가 나오기 쉬울 것 같다. 이는 어디까지나 음성적인 차이지 음운론적인 구별은 아니다.
- 13) <악센트핵>이라는 개념에 대해서는 服部四郎(1973), 上野善道(1975,1977,1989,2004) 등을 참조.
- 14) 여기서 말하는 <악센트구>란 악센트가 부여되는 단위로서의 단어(즉 HLL, LHL과 같은 악센트형이 부여되는 기본단위)를 가리키며(窪菌晴夫(1995:138)참조), 窪菌晴夫(1995) 등이 부르는 <인토네이션구>를 <악센트구>라고 부르는 논고(Pierrehumbert&Beckman(1988) 등)와는 입장이 다르다.
- 15) 동경방언에서 구두(句頭)의 상승(예를 들어 LHH의 L에서부터 H로의 상승)은 川上繁(1961), 上野善道(1989) 등이 지적했듯이 단어의 변별에 관한 악센트와는 완전히 다른 차원에 속하는 구음조이다.
- 16) 악센트핵을 ']' 로 표시한다. 동경방언의 '○'는 모라, 대구방언의 '○'는 음절을 가리킨다.

3. 악센트형의 출현빈도

3.1. 비균형악센트로서의 동경방언과 대구방언: 차말(次末)악센트규칙

다음으로 <출현빈도>라는 관점에서 동경방언과 대구방언의 악센트를 각각 고찰하겠다. 2장에서 살펴보았듯이 동경방언도 대구방언도 모두 음절(모라)수 n 에 대해 $n+1$ 가지의 악센트형이 대립한다. 그러나 계량적인 관점에서 바라보면 < $n+1$ 가지의 악센트형이 대립한다>고 기술하는 것만으로는 불충분하다. 모든 악센트형이 각각 같은 비율로 출현하는 것은 아니기 때문이다.

동경방언에 대해서는 <평판식(平板式)¹⁷⁾>과 <어말에서부터 세 번째에 악센트가 부여되는 기복식(起伏式)¹⁸⁾>이 통계적으로 많다는 사실이 잘 알려져 있다. 窪藪晴夫(2006)에 의하면 동경방언의 3모라명사의 경우, 52%가 LHH(H), 42%가 HLL로 나타난다. 즉 3모라명사에는 네 가지의 악센트형이 존재하는데도 불구하고 계량적으로는 두 가지의 악센트형이 전체의 94%나 차지하고 있는 것이다.

【표5】 동경방언 3모라명사의 악센트형과 출현빈도¹⁹⁾

악센트형	HLL	LHL	LHH(L)	LHH(H)
예	いのち	こころ	おとこ	ねずみ
출현빈도	42%	4%	2%	52%

대구방언에 대해서는 辻野裕紀(2008ab)에서 차말음절(次末音節: penultimate syllable)에 악센트가 부여되는 패턴이 가장 많다는 사실을 지적했다. 그리고 이 경향은 음절수가 많을수록 현저해지며, 5음절명사에 이르러서는 92.4%의 단어가 차말음절에 악센트가 있다.

【표6】 대구방언 명사의 악센트형과 출현빈도²⁰⁾

	2음절명사	3음절명사	4음절명사	5음절명사
0계열	174개(28.2%)	50개(12.3%)	2개(1.3%)	2개(3.0%)
+1계열		24개(5.9%)	7개(4.6%)	1개(1.5%)
-2계열	289개(46.9%)	263개(64.5%)	126개(83.4%)	61개(92.4%)
-1계열	153개(24.8%)	71개(17.4%)	16개(10.6%)	2개(3.0%)
계	616개(100.0%)	408개(100.0%)	151개(100.0%)	66개(100.0%)

이와 같이 <출현빈도>라는 관점에서 두 언어의 악센트체계를 다시 분석해 보면 동경방

17) 악센트핵이 없는 것, 즉 L(H), LH(H), LHH(H), LHHH(H)... 를 <평판식>이라 부른다.

18) 악센트핵이 있는 것을 <기복식>이라 부르고, 기복식은 단어의 첫 모라에 핵이 있는 두고형(頭高型), 단어의 마지막 모라에 핵이 있는 미고형(尾高型), 그 이외의 중고형(中高型)의 세 가지로 나뉜다.

19) 窪藪晴夫(2006:15)의 <표2>를 일부 수정.

20) <0계열>은 악센트핵이 없는 것, <+1계열>은 악센트핵이 제1음절에 있는 것, <-1계열>은 악센트핵이 맨 마지막 음절(어말음절)에 있는 것, <-2계열>은 악센트핵이 차말음절에 있는 것을 가리킨다.

언은 <N형악센트(N=2)>, 대구방언은 <고정악센트²¹⁾>(=1형악센트)에 가까운 체계를 이루고 있으며 辻野裕紀(2008a:69)에 따라서 특정한 악센트형으로 나타나는 단어가 계량적으로 뛰어나게 많은 악센트체계를 <비균형(非均衡)악센트>라고 부르기로 한다면 동경방언과 대구방언의 악센트체계는 모두 <비균형악센트>라는 공통점을 가지고 있다고 볼 수 있다²²⁾.

그리고 동경방언의 <어말에서부터 세 번째에 악센트가 부여되는 기복식>이라는 것은 엄밀하게 말하면 <어말에서부터 세 번째의 모라를 포함한 음절에 악센트가 부여되는 패턴>이라는 뜻이며²³⁾ 어말의 구조를 중음절(heavy syllable)을 h, 경음절(light syllable)을 l로 해서 정리하면 다음과 같다:

【표7】 동경방언 어말의 3음절구조(밑줄 친 부분이 악센트가 부여되는 음절)

<p>...h <u>h</u> h e.g. スーパーマン</p>	<p>...h h <u>l</u> e.g. アンコール</p>	<p>...l <u>h</u> h e.g. ワシントン</p>	<p>...l <u>h</u> l e.g. ナターシャ</p>
<p>...h <u>l</u> h e.g. バーベキュー</p>	<p>...h l <u>l</u> e.g. エジンバラ</p>	<p>...l <u>l</u> h e.g. ビタミン</p>	<p>...l <u>l</u> l e.g. 크리스마스</p>

또한 窪蘭晴夫(2006:43)에서는 위의 여덟 가지 패턴 중, ...hlh와 ...llh에 관해 더 자세한 계량조사를 하면 실제로는 각각 ...hlh, ...llh가 더 많이 나타남을 지적하고 있다. 예를 들어 ...hlh라는 어말 음절구조를 가지는 インタビュー, ゴーリキー, パークレー 등과 같은 단어들은 어말에서부터 세 번째 음절에 악센트가 부여되고, ...llh라는 어말 음절구조를 가지는 カラヤン, アマゾン, ラマダン, トロフィー 등과 같은 단어들도 어말에서부터 세 번째 음절에 악센트가 부여된다. 이들은 모두 차말음절이 경음절인 단어들이다. 이러한 사실을 고려하면 동경방언의 <기복식 악센트규칙>은 다음과 같이 수정할 수 있다:

- 어말에서부터 두 번째 음절이 중음절(2모라음절)이면 그 음절에 악센트가 부여된다. (예: スーパーマン, アンコール, ワシントン)
- 어말에서부터 두 번째 음절이 경음절(1모라음절)이면 그 음절보다 하나 앞의 음절에 악센트가 부여된다. (예: カナダ, バナナ, クリスマス)

다시 말하자면 이 규칙은 동경방언에서는 차말음절에 악센트가 부여되는 것이 기본

21) 모든 단어에서 피치나 스트레스의 위치가 하나로 고정되어 있는 악센트체계를 <고정악센트>라 부른다. 예를 들면 일본어 미야자키현(宮崎縣) 미야코노조시(都城市)방언은 어느 단어에서도 마지막 음절만 높다. 체코어나 게일어, 핀란드어는 단어의 제1음절에, 폴란드어나 스와힐리어는 단어의 차말음절에, 프랑스어는 어말음절에 강세가 부여된다. 齋藤純男(1997:111) 참조.

22) 본고에서는 자세히 논하지 않으나 악센트체계의 이러한 계량적인 <비균형성>은 악센트의 기원이나 변별성에 대한 문제를 풀어 나가기 위한 실마리가 된다.

23) 동경방언은 일반적으로 특수모라에는 악센트가 부여되지 않기 때문에 악센트는 모라가 아니라 음절이 담당하고 있다고 보아야 한다.

(default)이고, 차말음절이 경음절, 즉 음운론적으로 약한 환경이면 거기에 악센트가 부여되기 어려워 한 음절 앞의 음절인 전차말음절(前次末音節: antepenultimate syllable)로 악센트가 이동한다는 사실을 보여주고 있다. 즉, 동경방언의 기복식도 모라가 아니라 음절을 기준으로 하면 대구방언과 같이 <차말음절에 악센트가 부여되는 것이 기본>이라는 악센트규칙(이를 <차말악센트규칙>이라 부르기로 함)을 지니는 언어라고 할 수 있다.

여기서 더 주목해야 할 것은 대구방언에서도 이와 유사한 악센트의 이동이 관찰된다는 점이다. 辻野裕紀(2008b)에서도 지적했듯이 차말음절이 개음절(open syllable)이고 음절핵(nucleus)이 약모음(weak vowel)/w/인 경우에는 전차말음절로 악센트가 이동하는 경향이 있다²⁴⁾. 즉, 동경방언에서도 대구방언에서도 악센트를 부여하기 어려운, 음운론적으로 약한 환경이 존재하며, 그러한 경우에는 하나 앞의 음절로 악센트가 이동하는 현상이 보인다. <약한 환경>의 조건만 다를 뿐, 음운론적으로 약한 환경이 존재하여 그로 인한 악센트의 이동이 관찰되는 점은 공통되어 있는 것이다.

3.2. 차말악센트의 일반성: 유형론적인 관점으로

더 나아가서 언어유형론적인 관점에서 동경방언과 대구방언의 차말악센트규칙을 바라보면 흥미로운 사실을 알 수 있다. 즉, 세계의 악센트언어 중에서 차말음절에 악센트가 부여되는 언어는 그 수가 매우 많아 차말악센트규칙은 악센트규칙으로서 일반성이 높은 것이다. 이러한 언어로서는 라틴어²⁵⁾나 그와 계통적, 역사적으로 관계가 깊은 언어(이른바 로망스제어와 게르만어파의 언어들)가 잘 알려져 있으나 그 외의 언어에도 차말악센트규칙을 가지는 언어가 많이 보고되고 있다. 예를 들어 柴田武(1992:79)에 의하면 아삼어(인도공화국 아삼주의 공용어), 알류트어(에스키모 알류트어족), 율타어(만주통구스어족), 일라논어(필리핀제어), 아이마라어(페루, 볼리비아의 공용어의 하나) 등과 같은 언어들에서도 차말음절에 악센트가 부여되는 것이 원칙이다. 또한 Hayes(1995)는 아랍어(레바논방언, 베드윈방언), 하와이어, 통가어, 맘어(마야어족), 마남어(오스트로네시아어족. 파푸아 뉴기니), 피지어 등과 같은 언어들도 라틴어나 라틴어와 유사한 악센트규칙을 갖고 있다는 사실을 지적하고 있다.

이와 같이 세계의 악센트언어에는 차말악센트규칙을 가지는 언어가 매우 많으며 이러

24) 예를 들어 ‘나그네’, ‘테스크’, ‘리스트’, ‘머느리’, ‘아흐레’, ‘어드레’, ‘여드름’ 등과 같은 단어는 HLL, ‘그랑프리’, ‘카리스마’, ‘카리스트’ 등과 같은 단어는 LHLL로 나타난다. 또한, 차말음절이 개음절이고 음절핵이 약모음이라도 악센트가 이동하지 않고 ‘마그마’처럼 차말음절에 악센트가 부여되는 단어도 없지는 않으나 그 수는 매우 적다. 그리고 화자에 따라서는 ‘나그네’를 LHL, ‘여드름’을 HHL, ‘카리스마’를 LLHL로 발음하는 사람도 있는 것 같다. 이러한 악센트의 동요(fluctuation)에 대해서는 앞으로 자료를 좀 더 보강하면서 재고할 필요가 있을 것이다.

25) 라틴어의 악센트규칙은 風間喜代三(1998:61) 등을 참조. 라틴어도 차말음절에 악센트가 부여되는 것이 원칙이며 차말음절이 경음절로 악센트가 부여되기 어려운 경우에는 하나 앞의 음절, 즉 전차말음절로 악센트가 이동한다.

한 점에서 동경방언과 대구방언은 언어유형론적으로 주목할 만한 언어라고 할 수 있겠다. 선행연구의 대부분은 동경방언도 대구방언도 모두 다형악센트라는 설명밖에 해 오지 못했으나 <출현빈도>라는 새로운 관점을 도입함으로써 두 언어의 악센트언어로서의 일반성이 선명하게 부각되는 것이다.

4. 마무리

이상에서 살펴보았듯이 악센트론의 관점에서 동경방언과 대구방언을 분석해 보면 이 언어들은 극히 유사한 언어라고 할 수 있다. 즉, 동경방언과 대구방언에는 다음 다섯 가지의 공통점이 있다:

1. 하향핵을 가지는 고저악센트언어임.
2. $n+1$ 가지의 악센트형이 대립함(n : 음절수 or 모라수).
3. 비균형악센트언어임.
4. 차말악센트를 기본(default)으로 함(차말악센트규칙을 가짐).
5. 악센트가 부여되기 어려운, 음운론적으로 약한 환경이 존재함.

이 가운데, 3에 대해서는 그에 대응하는 <균형악센트언어>라는 언어가 실제로 존재하는지, 그리고 5는 많은 악센트언어에서 관찰되는 현상이기 때문에 과연 동경방언과 대구방언의 특징이라고 할 수 있을지 더 자세한 고찰이 필요할 것이다. 이러한 문제는 앞으로 다른 언어와의 대조나 유형론적인 연구 성과를 원용하면서 밝혀 나가야 할 주제이다. 이러한 의미에서 앞으로 일본어나 한국어의 악센트연구는 개별언어연구에서 벗어나 대조언어학적, 언어유형론적인, 폭넓은 시각에 입각해서 이루어져야 할 것이다.

그리고 마지막으로 본고에서 밝혀진 언어사실은 대구방언 화자²⁶⁾에 대한 일본어교육에도 이바지하는 바가 크리라 본다. 동경방언과 대구방언의 공통점을 학습자들에게 이해시킴으로써 일본어의 운율적인 부분을 더 효율적으로 습득하기가 용이해질 것이기 때문이다²⁷⁾.

26) 실제로는 대구방언 화자뿐만 아니라 유사한 악센트체계를 가지는 다른 동부 경상도방언 화자들에 대한 일본어교육에도 도움이 될 것이다.

27) 노마 히데키[野間秀樹](2001:651)도 지적하듯이 한국어 모어화자는 다른 언어권의 화자에 비해 일반적으로 일본어 습득 능력이 빠르다고 하지만 높낮이나 음의 길이와 같은 프로소디와 관련해 발생하는 부자연스러움은 실로 심각하다. 한국어를 모어로 하는 일본어 학습자들이 말하는 일본어 악센트나 억양의 부자연스러움은 필자도 일본어교육의 현장에서 일상적으로 경험하고 있다. 이는 학습자만의 문제가 아니라 악센트지도를 충분히 실시하지 않는 교사들이나 악센트의 중요성이 기술되어 있지 않은 교재들에도 문제가 있다. 악센트교육은 한국어 모어화자에 대한 일본어교육의 큰 과제라 할 수 있겠다. 최근에는 악센트가 변별적이지 않은 서울방언의 음조도 조금씩 밝혀지고 있으며 이러한 연구들의 성과도 앞으로 적극적으로 언어교육의 현장에서 응용되어야 할 것이다. 예를 들어 宇都木昭(2005), 孫在賢(2007) 등에 서울방언 음조 연구의 새로운 동향이 보인다.

언어연구에서도 언어교육에서도 앞으로의 악센트연구가 맡은 역할은 크다.

◀ 참고문헌 ▶

- 김성규(1994) 「중세국어의 성조변화에 대한 연구」 서울대학교 박사학위논문.
- 김성규(2009) 「15세기 한국어 성조의 성격에 대하여」 『국어학』 56 서울: 국어학회.
- 김영만(1966) 「경남방언의 성조 연구」 『국어국문학』 31 서울: 국어국문학회.
- 김완진(1973;1989) 『중세국어성조의 연구』 (국어학총서4) 서울: 탑출판사.
- 김차균(1980) 『경상도 방언의 성조 체계』 서울: 과학사.
- 노마 히데키[野間秀樹](2001) 「한국어 모어화자의 일본어 피치악센트 교육을 위하여」 梅田博之교수 고회기념논총 간행위원회 『한일어문학논총』 서울: 태학사.
- 문효근(1962) 「대구방언의 고저·장단」 『인문과학』 7 서울: 연세대학교문과대학.
- 문효근(1974) 『한국어성조의 분석적연구』 서울: 세종출판공사.
- 민광준(2002;2006) 『일본어 음성학 입문』 서울: 건국대학교출판부.
- 방언연구회(2001) 『방언학 사전』 서울: 태학사.
- 스기토 미요코[杉藤美代子](2008) 『일본어 악센트 연구』 (민광준 옮김) 서울: 제이앤씨. (原著: 『日本語アクセントの研究』 1982年 三省堂)
- 연세대학교 언어정보개발연구원 편(1998) 『연세 한국어사전』 서울: 두산동아.
- 이상규·안귀남(2007) 『한국어 방언학』 서울: 학연사.
- 이한섭(1989) 『일어학 개설』 과주: 한신문화사.
- 정연찬(1968) 「경상도방언의 성조에 대한 몇 가지 문제점」 『이승녕 박사 송수기념논총』 서울: 을유문화사.
- 정연찬(1974) 『경상도방언성조연구』 대구: 형설출판사.
- 최명옥(1980) 『경북 동해안 방언 연구 —영덕군 영해면을 중심으로』 (민족문화총서4) 경산: 영남대학교 민족문화연구소.
- 한성우(2009) 「방언 음운론의 현황과 과제」 『국어학』 54 서울: 국어학회.
- 허웅(1955) 「방점연구」 『동방학지』 2 서울: 연희대학교 동방학연구소.
- 허웅(1963) 『중세국어연구』 서울: 정음사.
- 李連珠(2000) 「大邱方言のアクセント体系 —若年層を中心に—」 福井玲編 『韓国語アクセント論叢』 東京: 東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門.
- 李連珠(2002) 「韓国語大邱方言アクセントの音韻論的解釈」 『東京大学言語学論集』 21 東京: 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部言語学研究室.
- 宇都木昭(2005) 「朝鮮語ソウル方言におけるアクセント句 —音響分析による再検討—」 筑波大学大学院博士論文.
- 梅田博之(1971) 『現代朝鮮語基礎語彙集』 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 上野善道(1975) 「アクセント素の弁別的特徴」 服部四郎・R. ヤコブソン編 『言語の科学』 6 東京: 東京言語研究所.
- 上野善道(1977) 「日本語のアクセント」 『岩波講座 日本語 5 音韻』 東京: 岩波書店.
- 上野善道(1984) 「N型アクセントの一般特性について」 平山輝男博士古希記念会編 『現代方言学の課題 第2巻 記述的研究編』 東京: 明治書院.
- 上野善道(1989) 「日本語のアクセント」 『講座 日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』 東京: 明治書院.
- 上野善道(2004) 「第7章 音の構造」 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健 『言語学 第2版』 東京: 東京大学出版会.
- 大江孝男(1976) 「大邱方言におけるアクセントの型と長母音」 『言語研究』 69 東京: 日本言語学会.
- 風間喜代三(1998) 『ラテン語とギリシア語』 東京: 三省堂.
- 門脇誠一(1976) 「中期朝鮮語における声調交替について」 『朝鮮学報』 79 天理: 朝鮮学会.
- 門脇誠一(1985) 「中期朝鮮語の声調の特徴 —特に15世紀末の文献を中心に—」 『朝鮮学報』 116 天理: 朝鮮学会.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 東京: 三省堂.
- 川上泰(1961) 「言葉の切れ目と音調」 『国学院雑誌』 62-5 東京: 国学院大学.
- 菅野裕臣(1972) 「朝鮮語慶尚道方言アクセント体系の諸問題」 『アジア・アフリカ語学院紀要』 3 東京: アジア・アフリカ語学院.
- 菅野裕臣他(1988;1991) 『コスモス朝和辞典 第2版』 東京: 白水社.
- 金田一春彦 監修, 秋永一枝 編(2008) 『新明解日本語アクセント辞典』 東京: 三省堂.

- 窪菌晴夫(1995)『語形成と音韻構造』東京：くろしお出版。
- 窪菌晴夫(2006)『アクセントの法則』東京：岩波書店。
- 斎藤純男(1997)『日本語音声学入門』東京：三省堂。
- 佐藤和之(2003)「第2章 方言のしくみ 音韻」小林隆・篠崎晃一編『ガイドブック方言研究』東京：ひつじ書房。
- 柴田武(1992)「アクセント核の逆算指定」『国語学』171 東京：国語学会。
- 孫在賢(2006)「アクセント調査項目リスト 一単純名詞一」『アジア・アフリカの言語と言語学』1 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 孫在賢(2007)「韓国語諸方言アクセントの記述研究」東京大学大学院博士論文。
- 趙義成(2002)「中期朝鮮語アクセント小攷」朝鮮語研究会編『朝鮮語研究1』東京：くろしお出版。
- 辻野裕紀(2008a)「韓国語大邱方言における名詞のアクセント体系」『朝鮮学報』209 天理：朝鮮学会。
- 辻野裕紀(2008b)「韓国語大邱方言における名詞のアクセントと分節音の関係」2008東京韓国語学国際学術大会発表要旨。
- 羅聖淑(1974)「韓国語大邱方言の音韻 一アクセントを中心に」『言語研究』66 東京：日本言語学会。
- 野間秀樹(2002)『暮らしの単語集 韓国語』東京：ナツメ社。
- 朴宗姫(2000)「韓国語釜山方言の複合語のアクセント研究 一4音節の複合名詞を中心に一」福井玲編『韓国語アクセント論叢』東京：東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門。
- 橋本萬太郎(1978)『言語類型地理論』東京：弘文堂。
- 服部四郎(1968)「朝鮮語のアクセント・モーラ・音節」『ことばの宇宙』3-5 東京：テック言語教育事業グループ。
- 服部四郎(1973)「アクセント素とは何か？そしてその弁別的特徴とは？」『言語の科学』4 東京：東京言語研究所。
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』東京：大修館書店。
- 福井玲(1985)「中期朝鮮語のアクセント体系について」『東京大言言語学論集'85』東京：東京大学文学部言語学研究室。
- 福井玲(1999)「全羅南道光陽市津上面のアクセント」『アジア・アフリカ文法研究』27 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 福井玲(2000)「韓国語諸方言のアクセント体系について」福井玲編『韓国語アクセント論叢』東京：東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門。
- 福井玲(2001)「韓国語のアクセント」『音声研究』5-1 東京：日本音声学会。
- 福井玲(2003)「韓国語音韻史の諸問題」『音声研究』7-1 東京：日本音声学会。
- Hayata, Teruhiro[早田輝洋](1976)“On Long Vowels in the Kyongsang Dialects of Korean”『言語研究』66 東京：日本言語学会。
- Hayes, Bruce(1995) *Metrical Stress Theory: Principles and Case Studies* Chicago: University of Chicago Press.
- Pierrehumbert, Janet and Mary E. Beckman(1988) *Japanese Tone Structure* Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Ramsey, S. Robert(1991)“Proto-Korean and the origin of Korean accent” In: Boltz, W.G. and Shapiro, M.C. eds. *Studies in the historical phonology of Asian languages* Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

■ 투 고 : 2010. 5. 31.

■ 심 사 : 2010. 6. 12.

■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

韓國人에 의한 日本 近現代文學 研究의 過去・現在・未來 照明

— 나쓰메 소세키(夏目漱石)를 중심으로 —

權赫建*

kwon6134@hanmail.net

<要 旨>

最初に、2000年1月から2009年12月までの最近10年間に、韓國を代表すると思われる六学会の学会誌に韓國人による漱石関連論文は85編掲載されており、韓國と日本で刊行された単行本や著書は12冊に及んでいる。そのことから考えると、この10年間韓國人による研究が充実しており、多様に進められていることがわかる。

第二に、日本近現代文學研究の發展のためには、日帝時代に朝鮮と滿洲で發行された『朝鮮及滿洲』等の新聞や雑誌の文芸欄に載せられた日本語の作品を發掘、収集、分析し、研究する必要がある。また、韓・日・中の近現代文學を比較研究する必要性を強く提言したい。そして「近現代文學と映画芸術との接木」などをはじめとする創造的な融合研究が活性化されることを望んでいる。

第三に、最近韓國内で爆発的な人気を誇っている村上春樹や吉本ばなな、根強い人気で翻訳本が出刊され続けている桐野夏生ら日本作家と、韓國の李文烈、崔仁浩、韓水山らの作品に対する比較研究はもちろん、彼らの生存中に、直接訪問したりして、研究の基礎となる資料を集めておく必要があることを提言する。

キーワード： 日本近現代文學、夏目漱石、翻訳、韓・中・日比較文學、融合研究

1. 서론

2010년은 21세기가 시작된지 10년이 되는 해이다. 뿐만 아니라 2010년은 한일강제병합과 식민지로의 전략이 이루어졌던 1910년으로부터 100년이 되는 해이며, 한반도 분단의 결과인 1950년 한국전쟁으로부터 60년, 독재에 맞서 민주주의를 일으켜 세운 1960년 4·19 혁명으로부터 50주년, 그리고 군사정권에 맞서 싸운 1980년 5·18 민주항쟁으로부터 30주년이 되는 해이다.

돌이켜보면 지난 100년간 실로 파란만장한 사건들이 한국현대 역사에 아로새겨져 있다. 100년 전에 일어난 한일강제병합의 영향은 모두 사라진 것이 아니라 현재까지 음으로 양으로 이어져 내려오고 있다. 일본 근현대문학에도 100년 전에 일어났던 한일강제병합과 제국주의로 치닫는 일본인의 모습들이 작품에 따라 깊고 얽게 녹아내려 있다고 생각한다.

논자의 조사에 의하면 2000년 5월까지 한국인에 의해 이루어진 일본문학 연구성과물은 4,265편이나, 그 가운데 일본 근현대문학에 관한 연구물이 「일본문학 전체 연구물의 57%」¹⁾에 이르고 있다. 2003년 김종덕의 조사에 의하면 한국에서 일본문학 연구는 「근대

* 東義大學校 日語日文學科 教授. 日本近現代文學

1) 權赫建 「한국에서의 일본문학 연구 동향과 과제」 (『나쓰메 소세키(夏目漱石)과 한국』, 제이앤씨, 2004) 307-308쪽.

문학에 관한 논문이 전체의 약 63%」²⁾를 차지하고 있다. 한국에서의 일본문학 연구는 전체 연구물 가운데 일본 근현대문학 연구물의 편수가 두드러지게 많다는 것이 하나의 특징이며 연구물 편수가 점차 늘어나고 있다

2010년 현재 한국에서 일본 근현대문학에 관한 연구물이 전체 연구물의 몇 퍼센트를 차지하고 있는지는 학회지의 숫자가 예전에 비해 매우 많아져서 정확하게 파악하기 어려웠다. 최관의 조사를 참고하여 보면 2010년 4월 현재 한국연구재단에서 인정하는 등재(후보) 학술지를 발행하는 일본관련 연구단체가 한국일본학회를 비롯하여 「인문분야 20개, 사회분야 3개, 복합학에 2개 등 총25개」³⁾이다. 25개의 일본 관련 연구단체가 년 2회에서 4회 학술지를 발행하고 있는 것을 고려할 때, 2000년 이전보다는 상당히 많은 수량의 일본 근현대문학 관련 연구물이 발표되고 있는 것이다.

한국에서 일본 근현대문학 교육이 본격적으로 이루어지기 시작한지 약 50년이 지난 현재 「韓國人에 의한 日本 近現代文學 研究의 過去・現在・未來」에 대해 조명, 점검하여 연구 실태를 정확하게 파악하고 앞으로의 연구에 대해 제언을 하는 것은 최근 국내에서 일본 근현대문학 연구가 대단히 활성화되어 가고 있는 현실을 감안할 때 학문발전을 위해서도 반드시 필요한 작업이라 생각된다. 특히 일본 근현대문학 연구 가운데서도 연구물 발표 숫자가 일본의 다른 작가에 비해 압도적으로 많은 나쓰메 소세키(夏目漱石, 1867~1916: 이하 소세키로 간략하게 표기함) 문학에 정확하게 파악, 점검하는 것은 소세키 문학뿐만 아니라 일본 근현대문학의 발전을 위해서도 필요한 연구라고 생각한다.

2. 선행연구

이제까지 「韓國人에 의한 日本 近現代文學 研究現況과 課題」 등에 대한 테마로 이루어진 선행연구를 점검해 보면 아래와 같다.

일본 근대문학 연구의 성장기로 접어들기 시작하던 시기인 1984년에 도모나가 노리(朝長ノリ)는 「韓國에 있어서 日本文學 研究・紹介의 現狀」이라는 논문을 발표했다. 이 논문은 일본 근현대문학과 소세키 연구 성과만을 점검한 논문은 아니지만 그 당시까지의 일본문학 전반에 관해 단행본·학술논문·학위논문 등으로 구분하여 점검하였다. 일본인 연구자가 한국인이 쓴 연구물을 점검하는 것에 대해 충격을 안겨주고 있으나, 이 논문은 이후 발표되는 일본 근현대문학 연구 현황과 과제를 점검하는 연구에 영향을 미쳤다고 판단된다. 그는 당시에 일본 근현대문학 연구에 있어서 「夏目漱石(こころ)가 가장 인기 있는 연구대상」⁴⁾이었다고 지적했다.

2) 金鍾德 「韓國에 있어서 日本文學 研究의 現況과 展望」(『일어일문학연구』 「제45집」, 한국일어일문학회, 2003) 51쪽.

3) 崔官 「國內 日本研究團體 現況과 韓國日本學會가 나아갈 길」(『KAJA Newsletter』 「2010-01」, 한국일본학회, 2010) 14쪽.

1988년에 황석승이 「한국에서의 일문학 연구의 회고와 성과」(『日本學報』「第20輯」)라는 논문을 발표했고, 1993년에 정형이 「한국에 있어서의 일본문학 연구의 성과와 과제」(『日本學報』「第30輯」)라는 논문에서 당시까지의 소세키에 대한 연구물이 75편이라는 구체적인 숫자를 제시했다.

1995년에 논자는 「한국에 있어서 일본문학 연구의 성과와 전망」(『芸術至上主義文芸』「第21輯」, 日本: 芸術至上主義文芸学会)이라는 논문을 통해 그 당시까지의 나쓰메 소세키 연구물은 167편이며, 한국에서 일본 근현대문학 연구 가운데 두드러진 현상중 하나는 소세키 연구가 다른 어느 작가에 대한 연구보다 많다는 것을 지적한 바 있다.

1996년에는 최재철이 「한국에 있어서의 외국문학의 연구-일본문학 연구를 중심으로-」(『한국학과 생활문화』, 경기대학교)라는 논문을 발표했고, 1999년에 김용기가 「한국에서의 일본문학 연구의 문제점 및 극복방안」(『일본문학연구』「제2집」)이란 논문을 발표했다.

2004년 11월에 한국일본학회의 일본문학회에서는 일본문학 내 각 전공분야를 대표하는 연구자 15명⁵⁾이 한자리에 모여 「한국에서의 일본문학 연구 성과와 과제 조명」이라는 테마로 발표하는 자리를 마련했다. 기획테마에 대한 논문발표 과정을 소개해 보면 우선 발표하기 약 1년 전에 국내에서 점검이 이루어지지 않은 전공분야에 있어서 논문을 많이 발표하며 그 전공분야를 대표한다고 여겨지는 연구자들을 선별하여 테마를 부여했다. 이후 연구자들이 약 1년 간 연구한 것을 한국일본학회 학술발표회에서 발표하는 과정을 취했다.

이와 같이 전문연구자 15명이 한자리에 모여 각자 한 작가 및 작품에 대하여 「이제까지 이루어진 각 전공분야에 대하여 구체적인 자료를 조사하여 점검하고 앞으로 일본문학을 어떻게 연구할 것인가」에 대하여 심도 있게 논의한 것은 국내에서 처음 있는 일이었다. 소세키와 가와바타 야스나리 등 일본 근현대문학의 각 작가에 대하여 연구한 논문 8편이 학술발표회에서 발표되었다. 이 후 각 연구자가 발표한 것을 학회지 『일본학보』「제62집」(2005)에 논문으로 게재시킨 이후, 그것을 모아 수정 보완하여 『21세기 일본문학연구』(제이앤씨)라는 한 권의 책으로 발간했다. 2005년에 발간된 위의 저서는 그 해에 문화관광부 우수도서로 선정되는 성과를 거두었다.⁶⁾

2005년에 박유하는 「한국에서의 일본근대문학 연구에 관한 일고찰」(『日語日文學研究』「第52輯」)이라는 논문을 통해 「자신의 연구가 무엇을 목적으로 하고 있는지에 대한 재확인」이 늘 필요하다고 주장했다. 2009년도에는 김순전이 「일본 근대문학과 한국의 문학적 트라우마 극복을 위하여」(『2009년도 국내 일본연구자 초청 워크숍』, 고려대 일본연구센터)라는 테마로 발표를 했다.

4) 朝長ノ 「韓國에 있어서 日本文學 研究・紹介의 現狀」(『日本文學論集』, 남영문화사, 1984) 516쪽.

5) 기획테마 발표자 및 저서의 저자로 참여한 일본문학 연구자는 김춘미, 박정희, 최광준, 김종덕, 김충영, 유옥희, 정형, 최관, 권태민, 임성규, 권혁건, 유은경, 하태후, 이재성, 임용택 등 15명임.

6) 김춘미 외14인 『21세기일본문학연구』(제이앤씨, 2005) 1-399쪽 참조.

한국에서 소세키 문학 연구 성과를 논문의 형태로 최초로 점검했던 것은 1988년에 발표되었던 왕태웅의 「한국에서의 나쓰메 소세키 연구에 관한 일고찰」이다. 그는 한국에서의 소세키 연구는 「일본인 연구자들의 맹점을 꿰뚫어 볼 수 있는 독자적인 시각이 필요」⁷⁾ 하다고 논했다. 2000년에 논자는 「한국에 있어서 나쓰메 소세키(夏目漱石) 문학 연구의 현황과 전망」(『日本文學研究』「第3輯」, 한국일본문학회)이라는 논문을 발표했고, 2005년에는 「나쓰메 소세키(夏目漱石) 문학 연구 고찰-번역본과 단행본을 중심으로-」(『21세기 일본문학 연구』)라는 테마로 논문을 발표했다. 2000년에 김정훈은 「한국에 있어서 소세키 연구 현상」(『阪神近代文學研究』「第3号」, 日本:阪神近代文學研究会)이라는 논문을 발표했다. 2009년에 박미자(朴美子)는 「한국에 있어서 나쓰메 소세키 연구 양상-일본에서의 연구와 관련하여-」(『漱石と世界文學』, 日本:思文閣出版)라는 테마로 논문을 발표했다.

3. 과거와 현재의 연구 성과

김종덕은 일본문학 연구의 시대구분을 근대이후인 「1960년대까지를 胎動期, 1961년부터 1980년까지를 摸索期, 1980년부터 현재에 이르기까지를 成長期」⁸⁾로 나누었다. 그런데 위와 같은 시대구분이 애매한 면도 있어 좀더 구체적으로 알기 쉽게 나누면 아래와 같다.

해방이후인 「1945년부터 1959년까지를 胎動期」, 「1960년부터 1979년까지를 學習期」, 「1980년부터 1999년까지를 成長期」, 「2000년부터 2010년 현재까지를 自立期」로 나누는 것이 한국에서의 일본문학 연구과정과 현황을 쉽게 이해할 수 있고 명확하다고 생각한다.

1990년대까지의 일본 근현대문학의 주요 연구대상은 나쓰메 소세키(夏目漱石)·아쿠타가와 류노스케(芥川龍之介)·가와바타 야스나리(川端康成)·시마자키 토송(島崎藤村)·모리 오가이(森鷗外)·다자이 오사무(太宰治) 등 근현대문학을 대표하는 작가와 작품 연구로 집중되어 있었다. 1990년대까지 한국일본학회·한국어일문학회·한국일본어문학회·일본어문학회·한국일본문화학회·대한어일문학회 등 국내의 6개 학회지에 실린 일본 근현대문학 논문 가운데 위의 5명의 대표작가에 대한 논문 발표 비중도는 약 40%에 달했다.

그런데 2000년대에 들어오면서부터 일본 근현대문학 연구의 특이한 현상 중 하나는 나쓰메 소세키와 아쿠타가와 류노스케, 시마자키 토송 등을 비롯한 대표 작가와 작품에 대해 한쪽으로 집중되는 연구에서 탈피하는 현상이 일어나기 시작했다는 것이다. 즉, 대표 작가와 작품에 대한 연구도 이루어지고 있지만 그와 병행하여 일본에서도 아직 충분한 연구가 되어 있지 않은 작가의 작품 연구라던가, 혹은 아직까지 국내에 알려지지 않았지만 독특한 개성과 재능이 있는 작가의 작품이 다양하게 연구되고 있다는 것이다. 이와 같은 현상을 최근에 피부로 느낄 수 있는 것은 학회의 학술발표대회 때는 물론이고 학회와 연구소

7) 왕태웅 「韓國에서의 夏目漱石研究에 관한 一考察」(『어문연구』「13」, 경북대어문연구소, 1988) 169쪽.

8) 앞의 논문, 金鍾德 「韓國에 있어서 日本文學 研究의 現況과 展望」, 41쪽.

에서 논문심사를 의뢰하려고 하면 잘 알려지지 않은 작가와 작품을 연구한 논문이 있어 토론자와 심사자 선정에 곤란을 겪는 경우가 자주 일어나고 있다.

2000년대에 들어와서 대표작가의 작품연구와 병행하여 독특한 개성이 있는 작가들의 작품 연구로 연구가 다양하게 펼쳐지고 있다는 것은 숨길 수 없는 사실이다. 이런 현상은 크게 보아 연구가 편중되지 않고 바람직스럽게 진행되고 있다는 증거라고 생각된다.

그런데 연구의 내용에 있어서는 비판적인 주장이 제기되고 있는 것 또한 숨길 수 없는 사실이다. 한글이 모국어이고 일본어를 외국어로 배워 익힌 세대가 일본어를 모국어로 배워 익힌 일본인과 동등한 입장에서 일본문학을 논한다는 것은 언어해독 능력·문화 차이 등에서 오는 이해력 부족 문제를 포함하여 어려운 점이 많다.

위와 같은 연구에 있어서의 약점을 갖고 있기 때문에 일본어를 외국어로 배워 익힌 한국인 연구자들 가운데 일부는 일본인 연구자의 주장을 그대로 받아들여 약간의 자기 의견을 첨삭하는 수준의 연구물을 발표한다던가 연구자 자신도 자신의 주장인지 기존 연구자의 주장인지 확신할 수 없는 연구물을 발표하는 경우도 있다고 생각된다.

그런 이유 때문인지 한국의 일본문학 연구자의 대부분은 작품을 앞에 두고 이를 어떻게 비평하고 연구해야 할 것인지에 대해 미리 익힌 기술이 없다보니 논문이

학문적인 논리에 의하여 쓰여지는 것이 아니라 거의 감상문 수준에 그치고 만다.(중략) 우리나라에서 생산되는 많은 논문이 일본인 연구자들이 해놓은 연구의 방법을 그대로 사용하므로 일본인 연구의 아류에 불과한 형편)

이라고 냉혹하게 비판하는 의견도 있다.

또한 2000년대의 일본 근현대문학 연구를 「일본인 연구자의 추수주의(追隨主義)적 연구 태도에서 크게 벗어나지 못하였으며, 이렇다 할 방향을 제시하지 못했던 것도 사실」¹⁰⁾이라는 견해도 있다.

위와 같은 주장과 견해를 전혀 그렇지 않다고 부인할 수 없는 것이 현실이라고 생각한다. 하지만 한국인이 이룩한 일본 근현대문학 연구 성과를 옹호하는 쪽으로 생각해 보면 한국에서의 일본문학 연구 역사가 짧아 어쩔 수 없는 경우도 있었을 것이다. 그러나 대부분의 연구물이 감상문 수준에 그치는 것으로 단정하기에는 긍정할 수 없는 부분도 있다고 생각한다.

한국인 근현대문학 연구자가 발표한 연구물 가운데 소세키 문학으로 범위를 좁혀서 살펴보면 감상문 수준의 연구물도 일부는 있고, 일본인 연구자의 추수주의적 연구태도에 의해 진행된 연구물도 있을 것이다.

9) 하태후 「아쿠타가와 류노스케(芥川龍之介) 문학 연구 성과와 과제 조명」(『21세기일본문학연구』, 제이앤씨, 2005) 330-331쪽.

10) 김순전 「일본 근대문학과 한국의 문학적 트라우마 극복을 위하여」(『2009년도 국내 일본연구자 초청 워크숍』, 고려대학교 일본연구센터, 2009) 8쪽.

그러나 본 논문의 뒷면에 첨부한 「자료Ⅰ. 한국인에 의한 나쓰메 소세키(夏目漱石) 문학 연구 논문 학회별 현황」과 「자료Ⅱ. 한국인에 의한 나쓰메 소세키(夏目漱石) 문학 단행본 연도별 간행 현황」을 살펴보면 알 수 있듯이 2000년 1월부터 2009년 12월까지 지난 10년간 한국을 대표한다고 여겨지는 6개 학회지¹¹⁾에 게재된 소세키 관련 논문은 85편이며, 한국과 일본에서 간행된 단행본 저서는 12권에 이른다. 한 작가에 대한 연구가 최근 10년 동안에 착실하게 진행된 것을 확인할 수 있을 것이다. 연구 테마만 간단히 살펴보아도 주제가 참신한 것이 있으며 연구가 다채롭게 진행되고 있는 것을 알 수 있다.

지난 10년간 한국에서 발표된 소세키 관련 연구물을 분석해 보았을 때, 일부의 논문과 단행본은 일본인 연구자가 연구를 해서 그 성과를 이끌어 내기 어려운 연구물도 있다. 또한 소세키 관련 연구물 가운데 일부는 저명한 일본인 연구자가 발표한 연구물과 질적으로 비교해도 손색이 없는 관계로 찬사와 비판을 받으면서 일본의 학회지와 단행본 등에 연구물이 소개되며 인용되고 있다. 다시 말해 해방이후 한국에서 일본문학 교육이 시작된 지 약 50년이 지난 현재 소세키 관계 한국인 연구자 가운데 일부는 일본의 저명한 연구자와 동등한 대우를 받으며 국내외에서 연구물을 발표하고 있고, 연구물의 수준도 국내외 연구자들에게 인정받고 있는 것이다.

그런데 일본에 소재하는 대학의 석박사 과정에 재학 중인 대학원생이라면 몰라도 일본의 식민지시대도 아닌데 한국인 연구자가 일본 근현대문학 연구물을 발표하여 일본인 연구자에게 인정받는 것이 그렇게 중요한 것인가에 대하여 되돌아 볼 필요가 있을 것이다. 일본인 연구자 가운데는 머리가 숙여질 정도로 뛰어난 연구업적을 발표하는 연구자가 있는 반면, 그 수준이 현저하게 떨어지는 연구물을 발표하는 연구자도 있다. 문학 작품을 분석하고 비평하는 연구물은 발표할 당시에는 인정을 못 받는 경우가 있지만 시간이 지나면서 주옥같은 연구물로 인정받는 받았던 경우가 있었던 것을 간과하면 안 될 것이다.

오늘날의 세계는 산업화시대에서 지식정보화시대로, 국가중심 시대에서 세계화시대, 글로벌 기업중심 시대로 급격하게 변화하고 있다. 이러한 시대에 옛날의 가치관 혹은 기존의 지식만을 가지고 급변하는 시대에 대응하려고 했다가는 무능한 사람, 바보 취급을 받는 경우도 생기고 있다.

정보통신 기술의 발달에 의한 지식정보화시대의 도래는 국적이 어디인가를 떠나 능력이 있는 사람이 우대받는 현상이 문학·예술·스포츠 등 각 분야에서 나타나고 있다. 이와 같은 시대의 도래는 일본문학 연구에 있어서도 논문 발표자의 국적이 중요하지 않게 되었다. 또한 논문 발표 언어와 관계없이 질 높은 연구물을 발표하면 일본뿐만 아니라 전 세계에서 인정하는 시대가 도래되었다고 보아 틀리지 않을 것이다.

그러므로 일본의 대학에서 석·박사학위를 받는 것이 아니라면 연구물을 발표하여 일본인 연구자에게 인정받는 것에 안달하고 초조해 할 필요가 없다고 생각한다. 한국어로 논문

11) 한국일본학회, 한국일어일문학회, 한국일본문화학회, 한국일본어학회, 대한일어일문학회, 동북아시아문화학회 등 6개의 학회지에 2000년 1월부터 2009년 12월까지 게재된 나쓰메 소세키 관련 논문을 조사했음.

을 발표해도 그 논문이 독창성을 가진 질 좋은 논문이라면 일본인·중국인 연구자들이 궁금증이 발동하여 직접 논문을 찾아 번역하여 읽는 시대가 도래한 것이다.

덧붙여 말하고 싶은 것은 연구물을 발표하여 국내외 연구자, 선배와 동료, 후배연구자에게 인정을 받고 못 받고 하는 것보다 더 중요한 것은 자기가 쓴 논문을 시간이 지난 이후에 다시 읽어 보았을 때 자신이 만족감을 느끼고 있는가 하는 문제일 것이다.

4. 연구에 대한 제언

4-1. 번역

외국문학 작품의 연구는 연구자 자신이 먼저 외국문학 작품을 완벽하게 이해하여 체득해야만 가능할 것이다. 하지만 언어·역사·문화가 다른 외국문학 작품을 이해하여 자신의 것으로 소화해 낸다는 것은 그렇게 간단한 문제가 아니다. 때문에 작품 번역의 중요성이 대두되고 있는 것이다.

소세키 연구에 있어서 한국어 번역본이 있는 것이 번역본이 없는 작품보다 연구물 편수에서 압도적으로 많음을 확인할 수 있다. 일본어를 외국어로 익힌 연구자가 늘어나고 있는 추세를 감안할 때, 번역본이 있는 쪽이 연구물 편수가 늘어나는 것은 당연할 것이다.

그런데 『도련님(坊っちゃん)』 처럼 대중성이 있는 작품은 14개 출판사에서 경쟁적으로 간행하고 있지만 작품 『우미인초(虞美人草)』 등은 아직 번역이 되어있지 않다. 아직 번역이 안 된 일부 작품과 일기, 서간문 등이 가능한 빨리 번역되어야 독자와 그의 문학을 연구하려는 후학들에게 도움이 될 것이다. 국내에 번역이 안 된 일본 근현대문학 관련 명작들이 전문가에 의해 오역 없이 상세한 각주를 붙여 번역된다면 연구자 및 독자들로부터 크게 환영받을 것이며 텍스트로도 이용될 것이다.

4-2. 한국인 연구자의 선행연구물 인정 문제

일본 근현대문학 관련 한국인의 논문을 살펴보면 대부분의 연구자가 일본인이 발표한 연구물을 각주(脚註)로 인용하고 있다. 참고문헌에 있어서도 많은 연구자가 한국인 연구자에 의해 이루어진 연구물에 대해서는 무시하고 일본 연구자의 연구물만 인용하는 경우가 많다. 이런 현상은 일본 근현대문학 전공분야만이 아니라 일본어학과 일본학 전공분야에서도 대동소이하게 나타나는 현상이라고 생각된다.

한국인 연구자의 일본 근현대문학 연구물이 한국에서 외면당하는 근본적인 이유가 의식적이든 무의식적이든 선배와 동료, 후배 연구자의 연구 성과에 대한 불신과 무시에 기인한다면 우려스러운 일이다. 물론 한국인 연구자의 연구물을 질적으로 높게 평가할 수 없고, 이미 발표된 선행연구물의 학설인지, 연구자의 점검에 의한 새로운 결과인지, 확실하지 않

은 부분이 있어 각주로 인용하기에 어려운 점도 있을 것이다.

그러나 언제까지 선배와 동료, 후배 한국인 연구자의 연구물을 불신하고 일본인 연구자의 연구 수준 편차를 고려하지 않고, 그들이 발표한 연구물을 한국에 소개하는 정보의 수신자 역할에 머무를 것인지 심각하게 고민해 보아야 될 문제라고 생각한다.

가능하면 한국인 연구물에 대해 각주로 인용할 만한 가치가 있는 것은 적극적으로 인용해야 할 것이다. 연구물의 질적인 문제가 있어 각주로 인용하기에 문제가 있다면, 선행연구사 정리를 통해서 한국인 연구물에 대한 동향과 연구 편수 안내 등으로 간략하게라도 언급해 주는 것이 좋을 것이다.

4-3. 연구 자료 수집 및 문학의 현장 확인

한국인이 국내에서 일본 근현대문학 연구를 함에 있어 어려운 점은 셀 수 없이 많다. 그 가운데서도 가장 어려운 점은 연구 자료의 부족일 것이다. 연구세계의 정상을 달리는 일본인 연구자는 연구의 역사도 길고, 작가가 원고지 등에 만년필 등으로 쓴 정본을 보고, 그것을 현대일본어로 바꾸어 독자들이 문고판으로 읽을 수 있게 만든 사람들이다. 작품의 정밀한 분석은 물론이고, 전공에 관련된 선행연구물을 대부분 구입하여 치밀하게 분석한 경우가 많아서 이런 일본인 연구자들을 만나면 연구에 있어 무엇인가 부족함을 느끼며 그들의 연구 성과를 인정하지 않을 수 없다고 느끼는 경우가 많다.

관련 연구 자료를 수집하는 것은 연구자에게 있어서는 매우 중요한 작업이다. 연구 자료를 어느 정도 완벽하게 수집했다면 연구에 집중하는 시간도 절약되며 자신을 갖고 참신한 테마의 논문을 쓸 수 있을 것이다. 경제적인 능력과 시간, 도움을 주는 사람이 있어야 가능한 문제겠지만 관련 연구 자료를 수시로 최대한 빨리 수집하는 것이 신속한 연구 진행을 위해서 필요하다고 생각된다.

또 다른 어려운 점은 근현대문학 작품 속에 나오는 일본의 풍경, 지명의 모습, 유적지, 건물, 사찰, 신사, 묘지, 온천 등에 대한 정확한 이해일 것이다. 한 번도 가본 적이 없는 일본 각 지역 모습, 유적지, 온천 등에 대한 내용이 작품에 나오면 이것이 어떤 문화 배경으로 쓰여진 것인지 쉽게 판단을 내릴 수가 없는 경우가 많다.

때문에 연구자가 한 번도 일본에 가본 적이 없이 텍스트와 기존에 발표된 자료만 갖고 논한다면 작품을 정확히 이해하기가 어려운 점이 있을 것이며 경우에 따라서는 오독할 우려가 전혀 없다고 단언하기 어렵다. 따라서 근현대문학을 연구함에 있어 관련 있는 지역과 관련 문학관, 박물관, 기념관 등을 방문해 철저하게 연구의 현장을 확인하여 관련 자료를 수집하는 것은 연구를 충실하게 할 수 있는 기본이 될 것이며, 연구자에게 정신적으로 자신감을 안겨줄 것이다.

4-4. 일제강점기 시대 한국과 만주에서 발행된 근대문학 자료 발굴

한국과 만주, 대만 등에는 일제강점기 기간에 한국어, 중국어로 쓰여진 문학작품 이외에도 일본어로 쓰여진 다수의 문학작품이 현존하고 있다.

정병호는 한반도 내에서 황국신민화 정책이 강화되고 한글 사용이 금지되었던 1930년대 이후부터 해방 이전까지 「한국인이 쓴 일본어문학뿐만 아니라 상당히 이른 시기부터 다양한 형태의 일본어문학이 간행되어 독자들에게 읽혀지고 있었고, (중략) 메이지시대 한국에서 발행된 일본어신문의 총수는 67종」¹²⁾에 달한다고 주장했다.

일제강점기 시대에 1908년 3월 조선에서 창간되어 1912년 1월까지 발간된 『조선(朝鮮)』과 1912년 1월부터는 1941년 1월(통권 398호)까지 매월 1일 간행된 월간 종합지 『조선과 만주(朝鮮及滿洲)』¹³⁾ 등 신문, 잡지의 문예란에 실려 있는 일본어 작품을 국내외의 서점과 서울대학교 도서관, 국회도서관, 부산 초읍도서관, 중국의 만주 지역 도서관 등을 통해 발굴 수집, 분석하여 연구할 필요성이 대두되고 있다.

또한 일제 강점기 시대에 한국 근대문학자가 일본어로 쓴 작품을 일본에서 발표한 것이 있다. 이런 연구 자료를 발굴·수집하여 능력있는 한국 근현대전공자와 공동으로 연구를 진행하면 빠르게 연구 성과를 올릴 수 있을 것이다.

4-5. 한·중·일 근현대문학 비교 연구

동아시아의 근대화가 이룩되는 시기에 한국 근현대문학의 선두주자였던 이광수를 비롯해, 염상섭, 이기영, 이태준 등은 일본 유학을 통해 근대 문명에 접하면서 그들의 사회적 인식과 문학 세계를 형성해 나갔다. 중국이 근대화 되는 과정에서 노신, 호적, 곽말약 등 당대를 대표하는 중국의 작가들 역시 일본 유학이라는 체험의 장을 공유하고 있으며 그 체험을 통해 서양의 근대문명과 문화를 접했다.

그런데 이제까지 한국과 일본의 근대를 대표하는 작가의 비교 연구라든가, 한국과 중국의 근대를 대표하는 작가의 비교 연구는 그렇게 활발하게 이루어지지 못했다. 더욱이 한국·일본·중국의 근현대작가 비교를 통해 동아시아 삼국의 근현대문학을 집중적으로 비교한 연구는 아주 드물다.

그런 이유 때문인지 2005년에 유은경은

국내의 아리시마 문학 연구에 있어서 특히 의의가 있다고 여겨지는 것은 한일 비교문학 쪽이 아닌가 한다. 한국 근대문학 초창기 작가들은 대부분이 일본에서 유학을 하여 아리시마의 작품을 접했을 가능성이 큰 만큼, 이광수, 김동인, 염상섭, 황순원 등의 작가들과의 영향 관계가 속속 밝혀지고 있는데, 이런 연구들은 한국문학 연구에 기여하는 바가 크다고 하겠다. 이외에도 아직까지 밝혀지지 않은 국내 작가나 작품과의 영향관계가 더 많이 밝혀져 한국에서의 아

12) 정병호 「20세기 초기의 일본의 제국주의와 한국 내 <일본어문학> 의 형성연구-잡지 『조선』(朝鮮,1908-11)의 『문예』란을 중심으로-」(『일본어문학』 「제37집」, 한국일본어문학회, 2008) 410쪽.

13) <http://book.daum.net/detail/book.do?bookid=KOR9788991222533> 참조.

리시마 다케오의 위상이 더욱 높아지길 기대해 본다.¹⁴⁾

라고 아리시마 문학 연구에 있어서 비교문학 연구 필요성을 주장했다.

한·중·일 근현대문학 비교 연구의 필요성은 크게 대두되고 있으나 일본 근현대문학 연구자 혼자서 한·중·일 근현대문학 비교에 관해 연구를 진행시키는 것은 대단한 노력을 요구하고 있다. 이 분야의 연구는 한국과 중국의 근현대문학 관련 전공자와 공동 연구를 진행시켜야 빠른 시간 안에 알찬 성과를 이끌어 낼 수 있을 것으로 생각된다.

한·중·일 근현대문학을 대표하는 작가의 비교 연구와 더불어서 현재 생존해 있으면서 작품 활동을 활발하게 펼치고 있는 무라카미 하루키(村上春樹), 요시모토 바나나(吉本ばなな) 등과 이문열(李文烈), 최인호(崔仁浩) 등의 한·일 현대문학 작가들을 주시해 볼 필요성이 있다.

4-6. 융합연구

2010년에 들어와서 교육과학기술부에서는 학생을 잘 가르치는 대학에 집중적으로 재정적인 지원을 하겠다고 하며, 그 평가의 중요한 기준 가운데 하나는 「창의적인 글쓰기와 문제해결 능력교육」¹⁵⁾ 중시이다. 학원과 인터넷 통신 등을 통해 언제라도 배울 수 있는 기능적인 강좌보다는 창의력을 진작시키고, 실용적인 것이 나올 수 있는 기본 바탕이 되는 학문인 동서양의 문학을 대학에서 가르치는 것이 좋을 것이라는 의견이 대두되고 있다. 때문에 서울대학교를 비롯한 미국의 하버드대학 등의 교과과정을 살펴보아도 창의성을 높일 수 있고, 세상을 이해할 수 있는 문학 강좌를 핵심교양으로 편성해 놓고 있다. 어학과 전산관련의 실용적 교과목에 밀려 영원히 퇴조될 것만 같았던 문학 강좌가 창의성과 다양한 리더십을 배양할 수 있는 강좌로 새삼 인식되고 있는 것이다.

최근에 문학교육의 중요성이 강조되는 것과 함께 문학연구에 있어서도 학문간의 영역을 넘나드는 공동연구의 필요성이 공론화되고 지식의 통합과 융합의 필요성이 강조되고 있다. 2006년부터 인문학의 위기가 본격적으로 사회적 관심사가 되었을 무렵 「인문학의 위기를 타개하는 방안의 하나로 인문학과 자연과학의 융합연구가 강조」¹⁶⁾되었다. 융합연구라는 것은 연구 영역의 경계 허물기를 통해 과학적 합리성, 인문적 통찰력, 사회적 상상력, 예술적 창조성을 융합하여 복잡한 사회문제를 창조적이고 합리적으로 해결하려는 것이다. 「서로 다른 학문 영역 사이의 경계를 넘나들며 새로운 연구 주제에 도전하는 융합 학문은 첨단지식 창조의 원동력」¹⁷⁾이 되고 있다.

14) 유은경 「아리시마 다케오(有島武郎) 문학 연구 성과와 과제 조명」(『21세기일본문학연구』, 제이앤씨, 2005) 305-306쪽.

15) 중앙일보, 2010년 01월 22일자, 「잘 가르치는 대학 10곳 30억씩 지원」 기사 참조.

16) 이인식 『지식의 대융합』(고즈윈, 2009) 450쪽.

17) 위의 책, 6쪽.

그러나 실제로 연구 영역의 경계를 허물고 학문 간의 영역을 넘나드는 「일본 근현대문학 학과 영화 예술 접목」, 「일본 근현대문학과 관광학 접목」, 「일본 근현대문학과 자연과학 접목」, 「일본 근현대문학과 과학기술 접목」 등을 테마로 하여 융합연구를 하려고 하면 쉽지 않은 일들이 앞을 가로막고 있는 것을 발견할 것이다.

인접 학문과의 합체와 공동연구도 필요하지만 연구대상을 어떤 시각에서 보며, 그런 융합연구를 통해서 어떠한 성과를 이끌어 낼 수 있을지가 중요하게 대두된다. 융합연구를 성공적으로 마무리하기 위해서는 양쪽 연구 영역의 어느 쪽에 선다고 해도 자신 있게 토론하여 남을 설득할 수 있고, 지적 능력을 발휘할 수 있는 실력과 지식을 갖추어야 한다는 것이다. 그러기 위해서는 사전에 연구 테마에 대한 충분한 자료조사를 통해 연구 필요성과 성과에 대해 자신이 먼저 확신을 갖는 것이 중요할 것이다.

5. 결론

첫째, 2000년 1월부터 2009년 12월까지 최근 10년간 한국을 대표한다고 여겨지는 6개 학회지에 게재된 한국인에 의해 이룩된 소세키 관련 논문은 85편이며, 한국과 일본에서 간행된 단행본 저서는 12권에 이르고 있다. 소세키문학 연구 가운데 최해수(崔海秀)의 〈한일 근대소설 작중 지식인의 유형 비교 연구-나쓰메 소세키(夏目漱石) 소설의 「高等遊民」과 염상섭 소설의 「심파사이저」의 비교-〉(『日本學報』 「第57輯」) 등 신선한 테마로 발표된 논문이 있는 것을 고려할 때, 최근 10년간의 연구가 알차고 테마가 다채롭게 진행된 것을 확인할 수 있었다.

둘째, 일본 근현대문학 연구 발전을 위해서는 일제강점기 시대에 조선과 만주에서 발행된 『조선(朝鮮)』과 『조선과 만주(朝鮮及滿洲)』 등 신문, 잡지의 문예란에 실려 있는 일본어 작품을 발굴 수집하여 연구할 필요성이 있다. 또한 동아시아의 근대화가 이룩되는 시기에 한국과 중국 근현대문학의 선두주자들은 일본유학이라는 체험의 장을 공유하고 있다. 하지만 이들 작가의 비교를 통해 동아시아 삼국의 근현대문학을 집중적으로 비교 분석한 연구 테마는 아주 드물다. 그러므로 한·중·일 근현대문학 비교 연구의 필요성이 있음을 강력하게 제언한다. 그리고 분야별로 전문화된 개별 지식만으로는 현대 사회의 복잡하고 다층적인 문제를 해결하기가 어려워지면서 융합연구는 시대적 흐름으로 받아들여지고 있다. 21세기에 들어와서 학문의 융합 현상이 시대적 흐름으로 자리 잡게 된 까닭은 상상력과 창조성을 극대화할 수 있는 지름길로 여겨지기 때문이다. 연구 영역의 경계를 허물고 학문 간의 영역을 넘나드는 「일본 근현대문학과 영화 예술 접목」 등을 비롯한 창조적인 융합연구가 활성화되기를 기대한다.

셋째, 최근 국내에서 폭발적인 인기를 얻고 있는 무라카미 하루키(村上春樹)와 요시모토 바나나(吉本ばなな), 꾸준하게 번역본이 출간되고 있는 기리노 나쓰오(桐野夏生) 등의 일본

작가와 한국의 이문열(李文烈), 최인호(崔仁浩), 한수산(韓水山) 등의 작가와 작품에 대하여 관심을 가질 필요가 있다. 이들의 작품에 대한 비교 연구는 물론이거니와 그들이 생존해 있을 때 직접 찾아가 연구의 기초자료가 될 만한 것을 모아 둘 필요성이 있음을 제언한다.

자료 I. 한국인에 의한 나쓰메 소세키(夏目漱石) 문학 연구 논문 학회별 현황

♣ 논문발표기간 : 2000년 01월-2009년 12월

1. 한국일본학회

순서	저자명	논문 제목	도서/논문명	연도	페이지
1	권혁건	나쓰메 소세키 눈에 비친 서울 남산의 소나무; 「일기」·「서간문」 분석을 중심으로	『日本學報』 「第51輯」	2002	pp.179-194
2	권혁건	한국에서 나쓰메 소세키(夏目漱石) 문학 연구성과와 과제 조명	『日本學報』 「第62輯」	2005	pp.359-374
3	권혁건	나쓰메 소세키(夏目漱石)가 생애를 통해 느꼈던 불안 고찰	『日本學報』 「第69輯」	2006	pp.167-178
4	권혁건, 신윤주	나쓰메 소세키의 『그 후(それから)』 고찰	『日本學報』 「第72輯」	2007	pp.39-148
5	권혁건, 신윤주	나쓰메 소세키(夏目漱石)의 『나눈고양이로소이다』에 나타난 고양이 이미지 고찰	『日本學報』 「第76輯」	2008	pp.171-179
6	권혁건, 김태관, 박노중	나쓰메 소세키 작품에 나타난 근대 문명 수용 과정의 갈등과 불안 고찰	『日本學報』 「第80輯」	2009	pp.101-110
7	권혁건, 이호규, 황은미	일본 근대문학에 나타난 근대와 전통 고찰 -나쓰메 소세키의 『몽십야』 「제팔야」를 중심으로-	『日本學報』 「第81輯」	2009	pp.111-120
8	권혁건, 이정연	나쓰메 소세키 『夢十夜』 「第一夜」에 묘사된 여자의 죽음과 소생고찰	『日本學報』 「第65輯」	2005	pp.279-290
9	박유하	漱石の文明觀と擬似植民地的恐怖	『日本學報』 「第59輯」	2004	pp.287-300
10	박유하	근대의주박 - 「현대 일본의 개화」 / 「나의 개인주의」를 중심으로 -	『日本學報』 「第65輯」	2005	pp.386-406
11	서영식	나쓰메 소세키의 『마음』에 나타난 K의 차남성	『日本學報』 「第55輯」	2003	pp.254-270
12	이재성, 안신영	나쓰메 소세키 『夢十夜』에 나타난 '백년'의 의미 고찰 - 「제1야」와 「제3야」를 중심으로-	『日本學報』 「第77輯」	2008	pp.79-90
13	양희선	소세키의 신경 쇠약 - 그 굴레와 반전 -	『日本學報』 「第60輯」	2004	pp.399-410
14	윤혜영	『산시로(三四郎)』의 향기	『日本學報』 「第73輯」	2007	pp.199-210
15	오준영	夏目漱石 『門』論 - 夫婦という制度と自然の葛藤 -	『日本學報』 「第52輯」	2002	pp.41-58
16	오현수	나쓰메 소세키(夏目漱石)와 미술(手品)	『日本學報』 「第57輯」	2003	pp.461-472
17	유상희	나쓰메 소세키와 스가 도라오(夏目漱石와 菅虎雄)	『日本學報』 「第54輯」	2003	pp.352-369
18	정수원	『行人』論 - <心理學>に關する考察 -	『日本學報』 「第59輯」	2004	pp.469-482
19	정수원	『門』 - 「하나의 유기체」에의 환상	『日本學報』 「第63輯」	2005	pp.209-222

20	최명숙	나쓰메 소세키의 『양허집(滢虛集)』론	『日本學報』 「第66輯」	2006	pp.255-272
21	최명숙	나쓰메 소세키(夏目漱石)와 영문학; 18, 19세기 영문학과의 초기 작품을 중심으로	『日本學報』 「第50輯」	2002	pp.376-402
22	최명숙	「하룻밤(一夜)」론 - 포스트 모더니즘적인 로렌스 스티븐과 관련하여 -	『日本學報』 「第64輯」	2005	pp.323-348
23	최혜수	한일 근대소설 작중 지식인의 유형 비교 연구 - 나쓰메 소세키(夏目漱石) 소설의 「高等遊民」과 염상섭 소설의 「심퍼사이저」의 비교-	『日本學報』 「第57輯」	2003	pp.527-542
24	최혜수	청년지식인 근대체험의 두 영상; 나쓰메 소세키(夏目漱石)의 『三四郎』와 廉想涉의 『萬歲前』의 비교	『日本學報』 「第62輯」	2005	pp.231-250
25	尹 一	夏目漱石の『こころ』— Kの死と「心」の問題 —	『日本學報』 「第59輯」	2004	pp.355-368

2. 한국일어일문학회

	저자명	논문 제목	학회지명	연도	페이지
26	권혁건	나쓰메 소세키 작품『마음』에 나타난 일본 사회문화 연구	『日語日文學研究』「第44輯」	2003	pp.115-133
27	김명주	아쿠타가와 「미생의 믿음(尾生の信)」 고찰 -소세키 「제1야(第一夜)」와의 상관성을 중심으로-	『日語日文學研究』「第53輯」	2005	pp.203-220
28	김숙희	나쓰메 소세키(夏目漱石) 『행인(行人)』의 표현 고찰 - “언설의 공백”을 중심으로 -	『日語日文學研究』「第55輯」	2005	pp.235-251
29	노영희	요시노 사쿠조와 나쓰메 소세키의 한국관 비교 연구 - 『만한을 시찰하고』와 『만한 여기저기』를 중심으로 -	『日語日文學研究』「第43輯」	2002	pp.83-98
30	박유하	漱石 『門』論 - 子供不在が語るもの	『日語日文學研究』「第57輯」	2006	pp.151-166
31	박유하	別れる理由 - 漱石の倫敦テキストが語るもの	『日語日文學研究』「第50輯」	2004	pp.149-163
32	박유하	始原への慾望と東洋回歸 - 『草枕』論	『日語日文學研究』「第51輯」	2004	pp.185-199
33	신지숙	나쓰메 소세키 『열흘밤의 꿈(夢十夜)』 「第三夜」論-이즈미 쿄카(泉鏡花) 「竜潭譚」과 관련하여-	『日語日文學研究』「第65輯」	2008	pp.105-124
34	오현수	나쓰메 소세키(夏目漱石)의 강담(講談)취미	『日語日文學研究』「第45輯」	2003	pp.131-155
35	오현수	강담(講談)의 화술적 묘사(話術的描寫)가 나쓰메 소세키(夏目漱石)의 기술적 묘사(記述的描寫)에 끼친 영향	『日語日文學研究』「第48輯」	2004	pp.135-159
36	오현수	나쓰메 소오세키(夏目漱石)의 문명비판정신과 강담(講談)의 풍자성 - 「노와키(野分)」에 나타난 강담 「오오쿠보히코자에몽(大久保彦左衛門)」의 영향을 중심으로 -	『日語日文學研究』「第38輯」	2001	pp.167-192
37	오현수	나쓰메 소오세키(夏目漱石)의 『초가를 태풍(二百十日)』과 강담 『이가의 결투(伊家の水月)』	『日語日文學研究』「第40輯」	2002	pp.117-139
38	오현수	나쓰메 소세키(夏目漱石)문학에 나타난 미개척 영역으로서의 강담(講談) - 사생문(写生文)소설 『풀베개(草枕)』에 끼친 영향 -	『日語日文學研究』「第53輯」	2005	pp.139-163

39	윤은경	나쓰메 소세키의 『門』 론 : 소스케(宗助)의 불안	『日語日文學研究』 「第46輯」	2003	pp.113-129
40	정수원	『도초』 론 - 산실의 기능에 관하여 -	『日語日文學研究』 「第47輯」	2003	pp.317-334
41	정수원	나쓰메 소세키의 『히간스기마데(피안과홀)』 론 -소설의 「재미」와 「새로움」에 관한 고찰 -	『日語日文學研究』 「第55輯」	2005	pp.253-267
42	정수원	『피안과홀』 론 - 경태랑과 도시공간 -	日語日文學研究』 「第49輯」	2004	pp.293-308
43	조영석	소세키의 『산시로(三四郎)』 연구 - 「길 잃은 어린양(迷羊),stray sheep」을 키워드로 한 작품 읽기(독법) -	『日語日文學研究』 「第47輯」	2003	pp.295-315
44	조영석	소세키의 『마음(こころ)』 연구-작중인물의 무명성(無名性)과 「선생님과 유서(先生と遺書)」의 문제를 중심으로-	『日語日文學研究』 「第58輯」	2006	pp.177-196
45	최명숙	나쓰메 소세키와 영문학 강의 - 『영문학형식론』을 중심으로 -	『日語日文學研究』 「第55輯」	2005	pp.269-289
46	최명숙	나쓰메 소세키와 異國-異國人; 『만주-조선의 이모저모』와 그 주변을 중심으로	『日語日文學研究』 「第45輯」	2000	pp.507-525
47	최명숙	『노방초』 론 - 나쓰메와 겐조의 < 나의 옛날 > 속에 있는 < 나의 지금 > -	『日語日文學研究』 「第39輯」	2001	pp.217-242
48	최명숙	『환영의 방패(幻影の盾)』 론 - 이야기의 구조 분석을 중심으로 -	『日語日文學研究』 「第43輯」	2002	pp.271-291
49	최명숙	나쓰메 소세키와 영문학 강의 - 『문학론』을 중심으로-	『日語日文學研究』 「第57輯」	2006	pp.125-150

3. 한국일본문화학회

	저자명	논문제목	도서/논문명	연도	페이지
50	권혁건, 임성규	나쓰메 소세키 작품 『夢十夜』 「第七夜」와 최인훈 작품 『광장』에 나타난 투신자살 비교 연구	『日本文化學報』 「第16輯」	2003	pp.101-117
51	권혁건	韓國の怪談「美しい鬼神の誘惑」と『夢十夜』 「第十夜」の比較研究	『日本文化學報』 「第12輯」	2002	pp.115-128
52	권혁건, 한광수	나쓰메 소세키의 『夢十夜』 「第三夜」와 동아 시아문학 비교 연구	『日本文化學報』 「第22輯」	2004	pp.195-214
53	권혁건, 전수진	나쓰메 소세키의 『夢十夜』에 묘사된 아이의 양상 고찰	『日本文化學報』 「第26輯」	2005	pp.203-214
54	권혁건	나쓰메 소세키의 『夢十夜』에 나타난 불안연구	『日本文化學報』 「第28輯」	2006	pp.263-276
55	권혁건, 김태관, 차민경	일본 근대문학에 나타난 에도시대의 전통고찰-나쓰메 소세키의 『그 후』에 묘사된 참살과 할복	『日本文化學報』 「第42輯」	2009	pp.99-116
56	이지숙	『그녀의 생활(彼女の生活)』에 나타난 신여성의 정체성에 관한 연구	『日本文化學報』 「第31輯」	2006	pp.363-383
57	윤혜영	『行人』에 있어서의 「비」	『日本文化學報』 「第36輯」	2008	pp.275-289
58	윤혜영	「動」과 「靜」을 통해본 소세키의 여성관	『日本文化學報』 「第38輯」	2008	pp.185-200
59	윤혜영	소세키(漱石)와 오가이(鷗外)의 청년상	『日本文化學報』 「第40輯」	2009	pp.273-288

4. 한국일본어문학회

	저자명	논문 제목	도서/논문명	연도	페이지
60	권혁건	나쓰메 소세키의 『夢十夜』 「第四夜」와 한국 고전문학 『公無渡河歌』에 나타난 죽음의 이미지 비교	『日本語文學』 「第12輯」	2002	pp.159-180
61	장영철	나쓰메 소세키(夏目漱石)와 모리 오가이(森鷗外)의 문학적 경계	『日本語文學』 「第24輯」	2005	pp.335-360
62	임은정	나쓰메 소세키(夏目漱石)의 『마음(こころ)』과 『열흘밤의 꿈(夢十夜)』에서 본 ‘회상 / 꿈’의 기억공간	『日本語文學』 「第24輯」	2005	pp.309-333
63	장남호	나쓰메 소세키(夏目漱石)의 아시아 - 「만주·한국의 여기저기」를 중심으로 -	『日本語文學』 「第6輯」	1999	pp.207-235
64	조영석	나쓰메 소세키의 時代意識論 - 시대의식의 성립을 중심으로 -	『日本語文學』 「第1輯」	1995	pp.231~264
65	조영석	도런님』에 나타난 漱石의 金錢觀	『日本語文學』 「第9輯」	2000	pp.229~257
66	조영석	『虞美人草』 연구- 虛榮心과 道義心の 問題를 중심으로 -	『日本語文學』 「第19輯」	2003	pp.271-290
67	진명순	夏目漱石の作品に表れた「雲」について	『日本語文學』 「第18輯」	2003	pp.325-343
68	최명숙	소세키의 문예이론에 관한 강연 고찰 - 「문예의 철학적 기초」와 「창작가의 태도」 -	『日本語文學』 「第27輯」	2005	pp.337-360
69	최명숙	나쓰메 소세키와 영문학강의 - 『문학평론』을 중심으로 -	『日本語文學』 「第29輯」	2006	pp.345-383
70	유상희	漱石와 天皇制 家族國家	『日本語文學』 「第3輯」	1997	pp.217-242
71	유상희	夏目漱石의 '原體驗 女性'說 考察	『日本語文學』 「第7輯」	1999	pp.235-265
72	유상희	夏目漱石의 『三四郎』와 森鷗外の『青年』 비교 고찰	『日本語文學』 「第30輯」	2006	pp.241-259
73	유상희	夏目漱石의 『三四郎』小考	『日本語文學』 「第29輯」	2006	pp.287-304
74	박유하	漱石의 ミゾジニー - 『行人』を中心に -	『日本語文學』 「第21輯」	2004	pp.203-217
75	박유하	『行人』と沼波武夫著『始めて確信し得たる全実在』	『日本語文學』 「第29輯」	2006	pp.225-239
76	류승규	『미치쿠사(道草)』론 - 부부관계를 중심으로 -	『日本語文學』 「第18輯」	2003	pp.191-211
77	황호철	漱石의 學歷을 통해본 日本近代教育 - 考察	『日本語文學』 「第7輯」	1999	pp.145-172

5. 대한일어일문학회

	저자명	논문 제목	학회지명	연도	페이지
78	권혁건	일본 근대문학에 나타난 금전의 의미와 역할-夏目漱石 작품 『보짱』을 중심으로-	『日語日文學』 「第7輯」	1997	pp.159-180
79	김남희	나쓰메 소세키(夏目漱石) 문학의 디테일이 표상하는 상징고찰 - '모자'와 '금테안경'을 중심으로	『日語日文學』 「第30輯」	2006	pp.121-133
80	진명순	夏目漱石의 『野分』論 - 『道』を中心に -	『日語日文學』 「第7輯」	1997	pp.207-226

81	진명순	漱石文學における「畫」の一考察	『日語日文學』 「第20輯」	2003	pp.143-158
82	진명순	日本近代文學に表れた「公案」の研究 - 夏目漱石を中心に -	『日語日文學』 「第22輯」	2006	pp.259-271
83	진명순	漱石の「則天去私」考 - 「則天去私」に至るまでその根底をめぐって	『日語日文學』 「第36輯」	2007	pp.305-323

6. 동북아시아문화학회

	저자명	논문 제목	학회지명	연도	페이지
84	권혁건	나쓰메 소세키의 징병기피 연구	『동북아문화연구』 「第18輯」	2009	pp.99-108
85	권혁건, 서미경	나쓰메 소세키(夏目漱石)와 이광수(李光洙)의 유학체험 비교연구	『동북아문화연구』 「第14輯」	2008	pp.47-65

자료Ⅱ. 한국인에 의한 나쓰메 소세키(夏目漱石) 문학 단행본 연도별 간행 현황

♣ 저서간행기간 : 2000년 01월-2009년 12월

순서	저자명	저서명	출판사	연도	비고
1	권혁건 (權赫建)편집	나쓰메 소세키(夏目漱石) 文學研究	제이앤씨	2001	한국
2	유상희 (柳相熙)	나쓰메 소세키(夏目漱石) 연구	보고사	2001	한국
3	조영석 (曹榮錫)	나쓰메 소세키(夏目漱石)의 문학세계	보고사	2001	한국
4	김정훈 (金正勳)	漱石 男の言草, 女の仕草	和泉書院	2002	일본
5	권혁건 (權赫建) 편저	나쓰메 소세키 작품 『마음(こころ)』 연구	제이앤씨	2003	한국
6	오경 (吳敬)	가족관계로 읽는 소세키(漱石) 문학	보고사	2003	한국
7	권혁건 (權赫建)	나쓰메 소세키(夏目漱石)와 한국	제이앤씨	2004	한국
8	한국나쓰메소세키연구회 편	나쓰메 소세키의 전기삼부작 연구	제이앤씨	2005	한국
9	김태연 (金泰淵)	夏目漱石小説研究-漱石作品における色と空間-	제이앤씨	2005	한국
10	진명순 (陳明順)	소세키 시의 문학사상	제이앤씨	2006	한국
11	권혁건 (權赫建)	나쓰메 소세키 생애와 작품	고려대학교 출판부	2007	한국
12	박유하 (朴裕河)	ナショナル・アイデンティティとジェンダー-漱石・文学・近代	クレイン	2007	일본

◀ 참고문헌 ▶

- 權赫建(2004) 「한국에서의 일본문학 연구 동향과 과제」, 『나쓰메 소세키(夏目漱石)과 한국』, 제이앤씨,, p.307-308
- 김순전(2009) 「일본 근대문학과 한국의 문학적 트라우마 극복을 위하여」, 『2009년도 국내 일본연구자 초청 워크숍』, 고려대학교 일본연구센터, p.8
- 김춘미 외14인(2005) 『21세기일본문학연구』, 제이앤씨, 2005,p.1-399 참조.
- 金鍾德(2003) 「韓國에 있어서 日本文學 研究의 現況과 展望」, 『일어일문학연구』 「제45집」, 한국일어일문학회, p.41-51
- 이인식(2009) 『지식의 대응함』, 고즈윈, p.6-450.
- 유은경(2005) 「아리시마 다케오(有島武郎) 문학 연구 성과와 과제 조명」, 『21세기일본문학연구』, 제이앤씨, p.305-306
- 왕태웅(1988) 「韓國에서의 夏目漱石研究에 관한 一考察」, 『어문연구』 「13」, 경북대어문연구소, p.169
- 정병호(2008) 「20세기 초기의 일본의 제국주의와 한국 내 <일본어문학>의 형성연구-잡지 『조선』(朝鮮,1908-11)의 『문예』란을 중심으로-」, 『일본어문학』 「제37집」, 한국일본어문학회, p.410
- 중앙일보(2010) 01월 22일자, 「잘 가르치는 대학 10곳 30억씩 지원」 기사 참조.
- 崔官(2010) 「國內 日本研究團體 現況과 韓國日本學會가 나아갈 길」, 『KAJA Newsletter』 「2010-01」, 한국일본학회, p.14
- 하태후(2005) 「아쿠타가와 류노스케(芥川龍之介) 문학 연구 성과와 과제 조명」, 『21세기일본문학연구』, 제이앤씨, p.330-331
- 朝長ノリ(1984) 「韓國에 있어서 日本文學 研究・紹介의 現狀」, 『日本文學論集』, 남영문화사, p.516

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

일본어잡지 『조선(朝鮮)』(1908)의 역사물(歷史物)과 한국 표상*

金 青 均**
kgsiga321@hanmail.net

<要 旨>

日本語雑誌『朝鮮』は1908年3月から1911年11月まで発行された総合雑誌である。本稿は、この中で1908年刊行された『朝鮮』の文芸欄収録作品のうち、韓国の歴史と関連した歴史物を中心に作品にあらわれた韓国のイメージと当時の日本人が韓国をみる視線に焦点をあてて考察した。

まず、日本は「群山の夜泊」にあらわれるように清に対抗する善の勢力と自らを仮装し、韓国への侵略を正当化したことを分析した。また、「首陽大君」にみられるように韓国の政争を私的な欲望の争奪戦と貶していることを把握した。さらに、「南大門」、「清涼里を訪れて」、「大院君の墓前にたちて」などの作品から、日本が韓国史を虚無主義と宿命論をとおして見ていたことを把握した。

結局、『朝鮮』の文芸欄にあらわれたものは日本の美化、韓国侵略の正当化であり、同時に、韓国の歴史を私的な欲望、虚無主義、宿命論と結びつけた韓国停滞論である。これは韓日併合を前後とした時期の日本の政治的目的に軌を一にするものであったと考えられる。

キーワード： 韓国の歴史、日本の韓国侵略の正当化、私的な欲望、虚無主義、宿命論

1. 들어가며

일본어잡지 『조선(朝鮮)』은 1908년 3월부터 1911년 11월(통권46호)까지 발간된 종합잡지이다. 1912년 1월부터는 『조선과 만주(朝鮮及滿洲)』로 잡지명이 개칭되었고 이후 1941년 1월까지 간행되었다. 『조선과 만주(朝鮮及滿洲)』로 개명되기 이전의 『조선(朝鮮)』은 한일병합을 전후한 시기에 간행되었고 또한, 논설, 시론, 실업(實業)의 자료, 잡찬(雜纂), 문예란 등을 포함하는 다양한 구성으로 편집되어 일본의 한국 강점 과정을 파악하는 데 있어 연구할 가치가 충분한 자료로 생각된다.

잡지 『조선』에 문예란이 개설되어 있었다는 점은 특기할 만하다. 이 문예란에는 소설, 시, 수필 등 제 장르의 문학 작품이 수록되었다. 문학의 담론은 상징효과와 지속성을 가지고 독자에게 영향력을 행사한다. 그러므로 문학의 담론 속에 교묘하게 은폐되어 있는 의도를 읽어내는 것이야말로 잡지의 진정한 의미의 편집의도를 파악하는 작업이 될 수 있다. 이러한 관점에서 잡지 『조선』의 문예란의 작품들을 꼼꼼히 독해하고 연구할 필요가 있다. 특히 『조선』의 문예란 수록 작품들 중에는 한국의 역사를 소재로 한 역사물들이 존재하는 바, 이들 작품은 한일병합을 전후한 시기에 일본인들이 한국과 그 역사에 관하여

* 이 논문은 2009년 정부(교육과학기술부)의 재원으로 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임 (KRF-2007-362-A00019)

** 고려대학교 일본연구센터 HK연구교수

어떤 인식을 가지고 있었는지를 표상한 작품들로 주목된다.

그런데, 이러한 연구의 필요성에도 불구하고, 일본어잡지 『조선』의 문예란 속의 역사물을 대상으로 일본이 한국에 대하여 어떤 인식을 보이고 있는지에 대하여는 그다지 연구되고 있지 않은 실정이다.

한일병합을 전후한 시기의 일본인들의 한국인식에 관한 연구로는 일본 지식인들의 한국관을 살펴 본 금병동의 연구¹⁾, 일본인들의 식민정책과 왜곡된 한국인식을 고찰한 이규수의 연구²⁾, 일본의 한국관련 서적 출판과 한국인식을 분석한 함동주의 연구³⁾, 근대교류사를 중심으로 한국과 일본의 상호인식을 분석한 한일공동연구포럼의 연구⁴⁾ 등이 있다. 이와 같이 이 시기의 한국인식에 대한 연구는 최근 적지 않은 축적이 있었다고 할 수 있으나 일본어 잡지 『조선』에 대한 연구는 아직 활발하지 못한 실정이다. 잡지 『조선』에 관한 선행연구로는 『조선』의 문예란을 중심으로 한 ‘일본어문학’의 형성 과정을 고찰한 정병호의 연구⁵⁾, 『조선』의 시사문제 관련 논설을 대상으로 일본지식인의 한국인식을 분석한 최혜주의 연구⁶⁾가 주목할 만한 큰 성과라 할 수 있으나, 『조선』의 문예란의 개별작품들에 대해서는 이렇다 할 연구가 진행되고 있지 않다.

본고에서는 이러한 선행연구의 현상에 대하여 문제의식을 가지고 1908년 3월부터 12월 까지 간행된 『조선』의 문예란 수록 작품 중 한국의 역사에 관련된 역사물(歷史物)을 중심으로 각 작품에 보이는 한국의 이미지와 당시의 일본인들이 한국의 역사를 바라본 시선에 초점을 맞추어 고찰하고자 한다.

먼저 「군산에서의 하룻밤(群山の夜泊)」(제1권 제1호, 통권 제1호, 1908.3)을 통하여 ‘일본의 한국침략의 정당화’에 대하여 고찰해 보기로 한다. 그리고 「수양대군(首陽大君)」(제1권 제2호, 통권 제2호, 1908.4)을 통하여 일본이 한국의 정쟁(政爭)을 개인적 욕망의 쟁탈전이라는 코드로 보고 있었음을 분석하기로 한다. 또한 「청량리를 찾아서(淸涼里に訪れて)」(제1권 제4호, 통권 제4호, 1908.6), 「대원군의 묘 앞에 서서(大院君の墓前にたちて)」(제2권 제3호, 통권 제9호, 1908.11), 「남대문(南大門)」(제1권 제4호, 통권 제4호, 1908.6) 등의 한국 역사를 소재로 한 시(詩) 작품을 통하여 일본이 한국사를 숙명론과 허무주의라는 프리즘으로 재단하였음을 분석하기로 한다.

아울러 본고에서 1908년 3월부터 12월까지 간행된 『조선』의 문예란 수록 작품의 인

- 1) 금병동 저, 최혜주 역 『일본인의 조선관: 일본인 57인의 시선, 그 빛과 그림자』, 논형출판사, 2008
- 2) 이규수 『제국 일본의 한국인식: 그 왜곡의 역사』, 논형출판사, 2007
- 3) 함동주 「1900년대 초 일본의 조선 관련 서적 출판과 ‘식민지 조선상」, 함동주 김광열 임현순 공저 『근현대 일본의 한국인식』, 동북아역사재단, 2009
- 4) 김용덕·미야자키 히로시 공편 『근대교류사와 상호인식 I』, 아연출판부, 2002
- 5) 정병호 「20세기 초기 일본의 제국주의와 한국 내 <일본어문학>의 형성 연구 -잡지 『조선』(朝鮮, 1908-1911)의 「문예」란을 중심으로-」, 한국일본어문학회 『일본어문학』 제37집, 2008.6
- 6) 최혜주 「잡지 『조선』(1908-1911)에 나타난 일본 지식인의 조선인식」, 한국근현대사학회 『한국근현대사연구』 제45집, 2008.6

용 시에는 식민지 일본어문학·문화연구회 공역 『완역 일본어 잡지 『조선』 문예란(1908년 3월-1909년 2월)』(도서출판 문, 2010)을 사용하였음을 부기해 둔다.

2. 일본의 한국 침략의 정당화

『조선』의 문예란에 수록된 문학 작품 중 이 잡지의 간행시기에 비교적 가까운 시기의 한 사건을 다룬 작품으로는 「군산에서의 하룻밤(群山の夜泊)」(제1권 제1호, 통권 제 1호, 1908.3)을 들 수 있다. 다음을 보기로 한다.

14일 삭풍이 약하여 배가 제대로 나아가지 못하니 누런 물이 소용돌이쳐 부딪히며 천남(天南)에서 내려오고, 강변 양쪽에 수양버들 이미 실처럼 싹이 나있다. 지루한 경치에 질린 우리 일행은 14일 저녁 군산에 닿았다.

군산이라는 이름은 백제사(百濟史) 이래 들어본 바가 있다. 건너다보니 돛대가 죽 늘어서 있고 배 두척이 정박해 있다. 병사의 왕래, 육상의 왕래 황망해지며 살풍경해진다. 뱃사람에게 물으니 오늘 저녁 경성에서 동비(東匪) 토벌을 위해 강화(江華) 대대가 도착했다고 한다. 아마 오늘 밤 군산은 전쟁이 한바탕 일어날 것 같다고 한다. 소좌 일행은 즉시 상륙하여 호남 운전사(運轉使)를 방문했다.

그는 짧은 키에 뚱뚱한 한남(韓南)의 고급관리이다. 우리 일행을 반갑게 맞이하였다. 우리는 호남의 변고에 대해 듣고 돌아왔다. 또 기선에 이르러 한성의 시사를 들었다. 선장이 말하길, 공들은 니로 소좌 일행이 아닌지요, 라고 묻는다. 그렇다. 그렇다면 시세가 심상치 않음을 알고 있지 않나? 일본군대는 한성과 인천 사이에 가득하다. 아산은 청국군이 점령했다. 전운은 감돌아 이미 일촉즉발의 상태다. 아산만에서 학살이 있었다고 한다. 공들 일행의 무사를 기원한다.

이것 참 청천벽력의 변고가 아닌가? 돌아가서 이 사실을 니로 소좌에게 고했다. 소좌 역시 경악한다. 초봄에서 늦봄 동안 아침에 파도소리를 듣고 저녁에 어부들의 노래를 들으며 바다에서 바다로 떠도는 나룻배 여객들은 이제 잠시도 지체할 수 없다. 선장을 불러 서둘러 돌아가기를 재촉한다. 선장이 말하길 큰 바람이 불어 몹시 거친 날씨라고 한다. 해상 생활은 서두른다고 해서 될 일이 아니다. 그 날 저녁 마을 주민들이 피난해서 배로 향하는 것이 천둥소리처럼 시끄러웠다. 군산에서의 하룻밤은 내 일생을 통해 경천동지(驚天動地)의 하룻밤이다.⁷⁾

이 작품은 「군산에서의 하룻밤」이라는 작품명이 가리키는 바대로 군산에서의 하룻밤의 경험을 작품화한 것이다. 먼저 이 작품의 시간적 배경에 대하여 살펴보기로 하자. 이에 대하여는 위 인용 부분이 시작되기 전의 대목에 “1894년 6월 13일 늦은 봄날 저녁 추적추적 비가 내렸다”⁸⁾ 라고 하고 위 인용 부분의 첫 단락에는 ‘지루한 경치에 질린 우리 일행

7) 조후세(長風生) 작, 김효순 역 「군산에서의 하룻밤(群山の夜泊)」, 식민지 일본어문학·문화연구회 공역 『완역 일본어잡지 『조선』 문예란(1908년 3월-1909년 2월)』, 도서출판 문, 2010, pp.15-16

은 14일 저녁 군산에 닿았다'고 나와 있으므로 1894년 6월 14일의 하룻밤을 소재로 한 것임을 알 수 있다.

「군산에서의 하룻밤」에는 1894년의 청일전쟁을 일본이 어떻게 보고 있었는지가 분명히 드러나 있다.

먼저 주목되어야 할 것은 ‘동비(東匪) 토벌’이라는 표현이다. 고부 군수 조병갑의 폭정이 계기가 되어 쫓겨난, 동학교도가 중심이 된 농민군은 이 작품에서 동비라 불리고 있다. 이 동비라는 표현은 폭정에 항거하여 일어난 농민들을 비적 무리 취급하는 표현이며 이는 농민군을 적대시하는 시각이 반영된 것이다.

주지하는 바대로 조선 조정은 농민군의 진압을 위해 청나라군의 파병을 요청하고, 청나라는 텐진조약(天津條約, 1885)에 의거하여 조선에 대한 파병 사실을 일본에 통보한다. 조선에서 청나라 세력을 내몰고 패권을 장악할 것을 꿈꾸고 있던 일본은 이를 기회 삼아 조선에 파병한다. 그리고 조선에서의 패권 장악을 목적으로 청일 양국은 조선의 농민군을 진압하고 두 나라 간에는 전쟁이 발발하게 되는 것이다. 그런데, 이러한 패권 전쟁의 구실은 조선 조정의 농민군 진압 요청에 있었으므로, 일본은 농민군을 적대시하는 시각에서 동학교도가 중심이 된 농민군을 동비라 부른 것이다. 이 대목에서 분명히 알 수 있는 것은 자신들의 정치적 이익을 위해 농민군을 동비로 매도하고 있다는 점이다.

작품의 내레이터는 철저히 일본의 침략주의적 관점에서 작품을 기술한다. 내레이터는 조선의 호남 운전사(運轉使)가 일본인 일행을 ‘반갑게 맞이하였다’고 하고 또 이 관리에게서 ‘호남의 변고’를 들었다고 한다. 이 대목에는 조선의 관리가 일본군의 조선 파병을 환영하고 있다는 시각, 또 농민군의 봉기를 변고로 보는 시각이 드러나 있다. 이는 일본군은 조선의 변고를 바로잡기 위해 파병된 것이며, 조선의 고급관리도 파병을 원하고 환영하고 있다는 것으로, 어디까지나 일본의 조선 침략을 합리화하는 관점을 보여주고 있는 것이다.

그런데, 이 작품의 시간적 배경이 된 6월 14일의 6일 전인 6월 8일에는 농민군이 폐정개혁안을 제시하였고 10일에는 전주화약(全州和約)이 성립되었다.⁹⁾ 농민군이 제안한 폐정개혁안은 탐관오리의 처벌뿐만 아니라 노비 문서 소각, 천민의 대우 개선, 청상과부의 개가 허가, 일본과 내통하는 자의 처벌 등의 내용을 포함하는 반봉건(反封建), 반외세(反外勢)적인 성격의 개혁안이었다. 이러한 농민군의 움직임은 ‘호남의 변고’로 매도될 수 있는 것이 결코 아니라 당시 조선 사회가 응당 개혁해야 할 바를 정확히 꿰뚫는 것이었다. 그러나 내레이터는 이러한 사실을 무시하고 오직 일본의 파병을 정당화할 뿐이다.

여기서 주목해야 할 것이 일본군과 청나라군이 어떻게 묘사되고 있는가 하는 점이다. 이 작품에는 바야흐로 일본군과 청나라군 사이에 전투가 임박하였음이 그려지고 있다. ‘일본군대는 한성과 인천 사이에 가득하며 ‘아산은 청국군이 점령했’고 ‘전운은 감돌아 이미 일촉즉발의 상태’라는 것이다. 이는 역사적 사실에도 부합하는 것이다. 즉, 청나라 쪽에서

8) 조후세(長風生) 작, 김효순 역 「군산에서의 하룻밤(群山の夜泊)」, p.15

9) 한일역사공동연구위원회 한국측 위원회 『근현대 한일관계 연표』, 경인문화사, 2006, p.90

는 6월 5일에 청나라군 1500명이 인천에 도착하였고, 6월 8일에 청나라군의 선발대가 충청도 아산에 상륙하였으며, 이에 대하여 일본은 6월 10일에 일본 공사 오토리 게이스케(大鳥圭介)가 호위병 400명과 대포 4문을 인솔하고 서울에 도착하였고 일본 해병대 500명이 인천에 상륙하였으며, 12일에는 일본육군 혼성여단 선발대 800명이 인천에 도착하였다.¹⁰⁾ 청나라군이나 일본군이나 조선에서의 패권 확립을 목표로 긴박하게 파병하였던 것이다.

그런데, 청나라나 일본이나 조선에서의 패권 확립을 목표로 하고 있는 세력이라는 동질성이 있음에도 불구하고 「군산에서의 하룻밤」에서는 청나라군과 일본군은 전혀 성격이 다른 군대인 것처럼 그려진다.

이 작품에서는 ‘아산은 청국군이 점령했’고 ‘아산만에서 학살이 있었다고 한다’고 하는데, 이는 곧 청나라군이 아산만에서 조선 백성을 학살한 세력임을 부각시키려는 의도가 내포된 것으로 보인다. 또, 이러한 소식에 대하여 내레이터는 ‘청천벽력의 변고’라고 하고 니로 소좌도 ‘경악’하였음을 전하는데 여기에는 일본군이 청나라의 만행에 놀라는 세력으로 조선 백성 편에서 있는 세력이라는 암시가 들어 있다 할 수 있다. 또 이 작품의 말미에는 ‘선장을 불러 서둘러 돌아가기를 재촉’하였다고 하고 ‘그 날 저녁 마을 주민들이 피난해서 배로 향하는 것이 천둥소리처럼 시끄러웠다’고 하는데 이는 일본군을, 조선 백성이 무사히 피난하는 것을 돕는 세력으로 그리고 있는 대목인 것이다.

이 작품에서 청나라군은 악의 세력으로 묘사되고, 일본군은 선의 세력으로 묘사되고 있다. 청나라군은 아산만에서 학살을 일으킨 악의 세력으로 그려지는 반면, 일본은 이러한 학살을 일으킨 세력에 맞서 싸우는 세력으로 부각되어 있을 뿐 아니라, 마을 주민들이 난을 피하여 배에 옮겨 타는 것을 돕는 세력, 즉 선의 세력으로 묘사된다.

이 작품에서 일본군은 동비 진압, 청군 축출, 그리고 마을 주민 보호를 수행하는 선의 세력으로 그려진다. 이렇게 선의 세력으로 일본군이 미화되면서 일본이 청일 전쟁의 과정을 통하여 일본의 조선 침략과 조선을 식민지화하는 길로 나아갔다는 본질적인 부분은 은폐되고 있다고 할 수 있다. 이러한 점에서 「군산에서의 하룻밤」은 일본의 한국 침략을 정당화하는 시각이 드러난 작품으로 파악된다.

3. 개인적 욕망에서 비롯되는 권력 쟁탈전이라는 한국 역사 해석

1908년 3월부터 12월까지 간행된 『조선』의 문예란에 수록된 문학 작품 중 장르상 역사소설로서의 성격이 두드러지는 작품으로는 「수양대군(首陽大君)」(제1권 제2호, 통권 제2호, 1908.4)을 들 수 있다.

수양대군(세조)은 한국문학에서도 여러 차례 역사소설에서 형상화된 바 있다. 가장 대표적인 예로 이광수(李光洙)는 1928년 11월 30일부터 1929년 12월 1일까지 동아일보(東亞日

10) 한일역사공동연구위원회 한국측 위원회 『근현대 한일관계 연표』, pp.90-91

報)에 「단종애사(端宗哀史)」를 연재한 바 있고, 김동인(金東仁)은 1941년 잡지 『조광(朝光)』의 64호(1941.3)에서 73호(1941.12)에 「대수양(大首陽)」을 발표한 바 있다. 이광수의 「단종애사」가 어린 임금 단종(端宗)을 옹호하는 입장에서 수양대군을 부당하게 왕위를 찬탈한 인물로 묘사한 작품인 데 대하여 김동인의 「대수양」은 수양대군을 정치적 역량이 뛰어난 군주로 그려낸 작품이다.

그런데, 『조선』에 수록된 「수양대군」은 일본인에 의해 창작된 것으로 1908년 시점에서 일본인이 한국사를 어떤 관점에서 바라보았는지 파악하는 데 중요한 단서를 제공해주고 있다.

먼저 다음을 보기로 하자.

보시던 책을 덮는 수양대군, 몸은 둘째 아들로 태어났으되 자신도 황가(皇家)의 피를 물려받은 자, 그것을 수양대군이라는 은퇴한 노인 취급하는 것은 어인 일인가. 건장한 사내 하나를 쉽사리 꼼짝 못하게 가두어 둔다는 것은 큰 착각. 말하자면 사자를 우리에게 넣어두는 것과 마찬가지로 천품(天稟)의 맹위를 떨치는 백수의 왕인 자가 어찌 속절없이 우리 안에서 찌고만 있을까 보냐. 보라, 이대로 둘 것 같으냐. 대저 단종(端宗)이 천위(天位)를 받았을 때, 열두 살 어린 아이가 어찌 천하를 다스리리요. 그 섭정과 영의정 될 자는 내가 아니면 그 누구리오. 백부(伯父)와 조카 사이인 내가 그 요직은 당연할 터인데, 무엇을 고쳐하며 황보 인(皇甫仁) 같은 소인을 정승으로 삼았나. 그것도 필시 대호(大虎)놈의 흉중에서 나온 것. 대호놈이 잘도 이 수양군의 속을 뒤집어 놓았구나. 좋다. 그럼, 이제 보라, 세상은 돌고 도는 것이다. 정인지가 자리를 뜬 뒤, 수양군의 비분의 눈빛은 무시무시했다.¹¹⁾

이 대목은 「수양대군」의 전반부에 해당한다. 상기 인용한 대목을 살펴보면 수양대군의 고뇌는 기본적으로 매우 사적(私的)인 것이라 할 수 있다. 그것은 자신이 왕족임에도 불구하고, 은퇴한 노인 취급을 당하고 있다는 불만, 자신은 백수의 왕과 같은 탁월한 재능을 지닌 인재임에도 불구하고 하릴없이 재능을 발휘하고 있지 못하다는 좌절감과 분노이다. 그리고 자신이 이러한 처지에 빠지게 된 것은 대호(大虎)로 불리는 김종서(金宗瑞)가 조정의 권력을 장악하고 있는 데서 비롯된다고 수양대군은 생각하는 것이다. 그러나, 수양대군은 자신이 이러한 불우한 처지에 빠져 있다고 하더라도 그것이 계속되리라고는 생각하지 않는다. ‘세상은 돌고 도는 것’이어서 반드시 자신의 처지가 바뀌리라고 생각하는 것이다.

이 작품에서 수양대군은 사적인 동기에서 권력을 탐하는 인물로 그려진다. 나이 어린 임금이 즉위함으로써 빛어지게 된 왕권(王權)의 약화, 신권(臣權)의 비대화에 대하여 수양대군이 국가의 장래를 걱정하는 입장에서 고뇌하였다는 류의 역사 해석은 조금도 드러나지 않는다. 수양대군은 개인적 야심으로만 가득 찬 인물로 그려지고 있는 것이다. 그러므로

11) 스키코(醉公) 작, 김청균 역 「수양대군(首陽大君)」, 식민지 일본어문학·문화연구회 공역 『완역 일본어잡지 『조선』 문예란(1908년 3월-1909년 2월)』, 도서출판 문, 2010, p.45

이러한 시선에서 수양대군을 바라보았을 때 이 작품의 후반부에 등장하는 계유정난(癸酉靖難)은 사적인 동기에 따른 부당한 권력 찬탈에 지나지 않게 되는 것이다.

작품 「수양대군」에서 수양대군은 개인적 야심에 불타는 인물로 그려질 뿐만 아니라 동시에 비열한 방법으로 정권을 장악하는 인물로도 묘사된다. 수양대군은 임예(林藝), 양정(楊汀) 등을 대동하고 김종서의 자택을 방문한다. 그는 머리에 쓰고 있던 사모(紗帽)를 땅에 떨어뜨려 사모 하나를 김종서에게 빌려달라고 한다. 김종서는 아들 승규에게 집안에서 사모 하나를 가져오도록 명한다. 그리고 승규가 사모를 가지러 집안으로 달려 간 사이 임예와 양정이 혼자 있는 김종서를 암살한다. 김종서는 “지금까지 굳이 적이라 할 만한 일도 없어서 대호는 조용히 아들 승규(承珪)와 함께 맞이하러 문으로 나왔다”¹²⁾ 는 대목에서 잘 알 수 있듯이 별다르게 수양대군의 방문을 의심하지도 않고 받아들이는 인물로 묘사된다. 김종서가 묵묵히 자신의 길을 걷는 인물로 그려지는 반면 수양대군은 권력 장악을 위해 수단과 방법을 가리지 않는 교활한 인물로 묘사된다.

수양대군이 단종에게 왕위를 선양받기까지의 과정은 다음과 같이 서술된다.

이제는 눈에 거슬리던 대호는 쓰러지고 황보 인의 권세도 나날이 땅에 떨어지고 있다. 수양대군의 억누를 수 없는 야심은 이미 한시도 제어할 수 없다. 방해꾼은 죽이거나 또는 물리쳐 황보 인까지도 몰아내고 자신은 영의정의 자리를 차지했다. 정인지와 한명회를 비롯하여 양정, 임예 등은 정난공신(靖難功臣)이 되어 그 기세는 파죽지세로 궁궐 안팎을 뒤흔들고 있다. 나이 겨우 열넷의 어린 임금의 권세는 지는 해의 형세로 이제 어쩔 수 없는 가련한 모습이다. 어느 새 선위(禪位)의 소문마저 안팎에 전해지게 되었다. 그것이 마침내 사실로 나타나 결국 단종3년 6월에 선위는 결정되었다.¹³⁾

수양대군은 ‘억누를 수 없는 야심’의 소유자로 ‘방해꾼은 죽이거나 또는 물리쳐’ 영의정에 오른다. 수단과 방법을 가리지 않고 권력을 추구하는 수양대군은 마침내는 ‘가련한 모습’의 단종에게서 왕위를 선양받기에 이른다. 수양대군이 사적인 야심으로 권력욕에 불타 잔악하고 비열한 방법도 불사하고 왕위에 오르는 악인으로 그려지는 데 대하여 단종은 그 상대역으로 ‘가련한 모습’의 선인으로 그려진다.

이제 이 작품의 말미 부분을 살펴보기로 하자.

덧붙여 말하자면 길인지 흉인지 수양군 세조 즉위하여 오랫동안의 야심은 오늘에 이르렀다. 그것도 말하자면 천하를 거스른 일, 심지가 있는 자는 따르지 않는다.

그러나, 천하를 통솔할 충분한 그릇인 덕분에 팔도의 세월이 요운(妖雲)에 쓰러지는 일 따위는 없었다.

원수를 갚는 일은 어디에나 있는 법. 하(河), 유(柳), 유(兪), 이(李)와 같은 제신(諸臣)은 다시

12) 스이코(醉公) 작, 김청균 역 「수양대군(首陽大君)」, p.48

13) 스이코(醉公) 작, 김청균 역 「수양대군(首陽大君)」, p.49

단종을 세우고 세조를 황위에서 쫓아내려고 도모하였으나 와신상담의 충고(忠苦)도 봄밤의 하룻밤 꿈으로 사라지고 세조의 세상은 완연 효운(曉雲)을 가르고 떠오르는 옥일의 기세.¹⁴⁾

이 말미 부분에는 분명한 형태로 수양대군의 행위에 대한 내레이터의 가치 판단이 개입되어 있다. 그것은 수양대군의 야심은 ‘천하를 거스른 일’이라는 것이다. 그리고 ‘심지가 있는 자는 따르지 않’을 일이라는 것이다. 이 ‘심지가 있는 자’의 예로 제시되는 인물이 ‘하(河), 유(柳), 유(兪), 이(李)’로 표현된 하위지(河緯地), 유성원(柳誠源), 유응부(兪應孚), 이개(李塏)이다.

여기서 이 작품의 기저에 있는 ‘한국사를 보는 관점’을 파악할 수 있다. 그것은, 한국사에서는 ‘천하를 거스르는 세력’이 ‘천하에 순응하는 세력’을 제압하고 정권을 장악하는 일이 빈번하였다는 한국사에 대한 부정적 인식이다. 또한 한국에서 정치가 작동하는 기본 원리는 수양대군의 예에서 보듯이 개인적 야심, 내지는 사리사욕에 의한 것이라고 하는 부정적 인식이다.

그런데, 한국사를 개인적 야심에서 비롯되는 권력쟁탈전으로 파악하는 부정적 인식은 잡지 『조선』 내에서 이 작품에만 보이는 시각이 아니다. 다음을 보기로 한다.

동요

(중략)장다리 꽃 피었다. 미나리 꽃 또 피었다. 장다리는 한철의 생명, 미나리는 사철의 생명
(중략)

이 동요는 철종 임금 시절 상궁 장씨와 민비와의 총애 다툼에서 유래한 풍자라고 듣고 보니 결코 천진난만한 노래이지도 않다. 즉, 민비파의 작품으로 상궁 장씨를 노래한 것이다. 그런 동요에 이르기까지 권력 쟁탈의 의미를 암시하고 있다는 것이 참으로 조선식(朝鮮式)이다.¹⁵⁾

잡지 『조선』의 제1권 제3호(통권 제3호, 1908.5)의 잡찬(雜纂)에 수록된 「조선의 가요(朝鮮의歌謠)」로부터 인용하였다. 위 인용 부분에서 말하는 동요의 ‘장다리 꽃 피었다. 미나리 꽃 또 피었다. 장다리는 한철의 생명, 미나리는 사철의 생명’은 한국인에게 널리 알려진 ‘장다리는 한철이나 미나리는 사철이다. 미나리는 사철이요, 장다리는 한철이다. 메꽃같은 우리 딸이 시집 삼년 살더니 미나리 꽃이 다 피었네’ 라는 노래의 일부분에 해당한다. 이 노래는 인현왕후가 왕후자리에서 쫓겨나고 대신에 희빈 장씨가 왕후가 되었을 때 백성들이 이를 동정하여 불렀다는 노래로 여기에는 장다리로 상징되는 장희빈의 영화는 오래가지 못하고 미나리로 상징되는 인현왕후가 다시 왕후에 오를 것이라는 백성들의 기대가 담겨 있다.

인현왕후와 장희빈은 숙종 시절의 인물들이므로 위 인용에서 ‘철종 임금 시절’이라고 말

14) 스이코(醉公) 작, 김청균 역 「수양대군(首陽大君)」, p.51

15) 甘笑子 「朝鮮の歌謠」, 『朝鮮』第1卷 第3号, 日韓書房, 1908.5, p.56

하고 있는 것은 물론 오류이다. 위 인용문에서 주목되는 것은 ‘동요에 이르기까지 권력 쟁탈의 의미를 암시하고 있다는 것이 참으로 조선식(朝鮮式)’이라고 말하고 있는 점이다. 한국에서는 동요에까지 권력 쟁탈전이 암시되고 있을 정도로 한국사는 그야말로 각 당과 간의 권력 쟁탈전이 끊임없이 계속되었다는 시각이 드러난다.

하야시 다이스케(林泰輔)의 『조선근세사(朝鮮近世史)』(1901), 쓰네야 세이후쿠(恒屋盛服)의 『조선개회사(朝鮮開化史)』(1901) 등을 비롯한 일본의 역사서에서 조선 왕조 쇠퇴의 원인을 당쟁과 외척으로 인한 것이라는 역사 해석이 반복되었다¹⁶⁾는 함동주의 분석대로 한국사를 당쟁과 연결시켜 해석하는, 일본의 한국사 해석은 20세기에 들어 강화된 형태로 나타났다.

일본어잡지 『조선』에 수록되었던 「수양대군」도 「조선의 가요」도 바로 한국이 당쟁에 의해 국력이 쇠퇴하였다는 인식과 일맥상통하는 역사인식을 보여준다. 「수양대군」과 「조선의 가요」는 한국사를 제 정치세력이 개인 또는 자파의 이익만을 위해 경합하였다는 관점을 제시하고 있는 것이다. 그리고 이러한 한국사에 대한 인식이 한국 정체론(韓國停滯論)과 연결된다고 생각된다.

4. 숙명론과 허무주의에 입각한 한국 역사 해석

본장(本章)에서는 『조선』의 문예란의 작품군이 숙명론과 허무주의에 바탕하여 한국사를 부정적으로 인식하고 있었음을 입증하고자 한다.

그렇다, 쓸쓸한 일곽(一廓)이여
반은 자연이 빚어낸 곳
반은 인간이 만든 곳
아아, 깊숙한 능지에서의
그 간의 무료함을
되살아나서 말씀하소서
슬픈 꿈을 -반도에
피 칠한 그대, 민비여

그대, 절세의 재목이니
나일강변에 태어났다면
마음껏 위정(爲政)하고
클레오파트라로 불렸을 것을
가엾어라 불우의 일대기

16) 함동주 「1900년대 초 일본의 조선 관련 서적 출판과 ‘식민지 조선상」, 함동주·김광열·임현순 공저 『근현대 일본의 한국 인식』, 동북아역사재단, 2009, pp.33-35

피로 물든 얼룩에
눈물방울 떨어뜨리며
어둠 속에서 마쳤구나

그 예언자가 가리킨 대로
이씨 왕정 오백년,
태조가 칼을 쥐고
군신을 거느린 근정전
연보라빛 향기로 남아도
석정(石庭)에는 작은 풀들이 무성하고
벌레 소리 매우 쓸쓸하니
아름다운 눈썹을 찌푸릴 것 같구나

“지금 동양의 정해(政海)에
화관을 쓰고
손가락을 문 -그래 바로 나.
그래 바로 북경의 서태후,
누가 이길 것인가”라고 미소 지으며
일가의 영달을 위해서
사민(四民)의 눈물을 짜서는
덧없는 꿈을 꾸고 있는 것인가¹⁷⁾

잡지 『조선』의 제1권 제4호(통권 제4호, 1908.6)의 문예란에 수록된 「청량리를 찾아서(淸涼里に訪れて)」라는 시(詩)의 일부분이다.

이 시에서는 명성황후(상기 인용 작품에서는 민비)를 어떻게 바라보고 있는가가 주목된다. 이 시에서는 명성황후를 ‘절세의 재목’이자 ‘슬픈 꿈’을 가졌던 이라고 한다. 또 그 삶은 ‘불우의 일대기’였다고 한다. 명성황후를 ‘절세의 재목’으로 보고 있는 점은 명성황후에 대한 긍정적 인식이라고 할 수 있다. 또 ‘슬픈 꿈’, ‘불우의 일대기’라는 표현도 구한말 격동의 상황 속에서 조선 사회에 변화의 바람을 불어 넣으려다 실패하고 암살당하고 만 명성황후의 삶을 애처롭게 바라보는 시각이 들어 있다고 읽을 수도 있다.

그러나, 문제는 이 시에서 명성황후의 정치적 좌절은 단지 명성황후 한 사람의 좌절로 그려진 것이 아니라는 데 있다. ‘그대, 절세의 재목이니 / 나일강변에 태어났다면 / 마음껏 위정(爲政)하고 / 클레오파트라로 불렸을 것을 / 가없어라 불우의 일대기’라는 구절에서 이야기되고 있는 것은 명성황후는 탁월한 정치력을 가진 재목이었으며, 그 역량을 발휘할 수 있는 환경에서 태어났다면 클레오파트라와 같은 정치적 달성을 이루었으리라는 것이다.

17) 다카하마 덴가(高浜天我) 작, 유계진 역 「청량리를 찾아서(淸涼里に訪れて)」, 식민지 일본어문학·문화연구회 공역 『완역 일본어잡지 『조선』 문예란(1908년 3월-1909년 2월)』, 도서출판 문, 2010, pp.99-100

여기서 시사되고 있는 것은 조선이라는 곳에서는 탁월한 인재라 할지라도 재능을 크게 발휘할 수 없다는 숙명론이다. 조선은 정체(停滯)된 사회이며 그곳에 사는 이들에게는 숙명적으로 정체된 삶이 기다리고 있다는 것이다.

이러한 숙명론은 또한 이미 조선의 국운이 다하였다는 논리로 강화되고 있다. ‘그 예언자가 가리킨 대로 / 이씨 왕정 오백년’이라는 구절에 보이는 것은 조선 왕조는 국운이 오백년 밖에 지속되지 못할 왕조라는 결정론이다. 이 시 「청량리를 찾아서」는 분명 일본이 한국을 침략하여 식민지로 삼는 것을, 예언서에 이미 예언되어 있다며 허무맹랑하게 합리화하고 있는 것이다.

이 시에서 숙명론과 결정론의 기저에 있는 것은 허무주의이다. 이 작품에 보이는 허무주의는 두 가지 차원에서 전개된다.

첫째는 조선 왕조의 역사 전체가 허무하다는 것이다. ‘태조가 칼을 짚고 / 군신을 거느린 근정전 / 연보라빛 향기로 남아도 / 석정(石庭)에는 작은 풀들이 무성하고 / 별레 소리 매우 쓸쓸하니’라는 대목에서는 태조 이래로 조선의 임금이 신하들과 국정을 논하였던 근정전에는 이제 그 뜨락에 풀들이 무성하고 별레소리만 구슬플 뿐이라고 한다.

둘째는 명성황후 개인의 삶이 허무하기 이를 데 없다는 것이다. 인용 부분의 마지막 연에서는 명성황후가 동아시아의 정치를 좌우한 인물이라는 점에서 중국의 서태후에 비교되고 있다. 유의할 것은 명성황후가 훌륭한 정치적 업적을 남긴 것으로서 서태후에 비교되는 것이 아니라, ‘일가의 영달을 위해서 / 사민(四民)의 눈물을 짜’는 인물로 매도되며 서태후에 비교되고 있는 것이다. 이는 전장(前章)에서 이미 지적한, ‘한국의 역사가 개인 또는 각 정파의 이익 추구에 좌우되었다는 일본의 부정적 인식’이 여실히 드러나는 대목이라 할 수 있다. 그런데, 상기 인용의 마지막 부분은 ‘일가의 영달을 위해서 / 사민(四民)의 눈물을 짜서는 / 덧없는 꿈을 꾸고 있는 것인가’ 인데 여기에는 결국 명성황후의 야심은 허무한 꿈에 불과하다는 인식이 담겨 있다.

이와 같이 이 시는 명성황후 개인의 삶도, 조선 왕조의 역사도 모두 허무하다는 허무주의가 깔려 있는 시인 것으로 파악된다.

한국의 역사를 허무주의의 관점에서 그리고 있는 시는 또 있다. 다음을 보기로 하자.

두 개의 나귀 석상
일찍이 군정(君庭)의 보리밭에서
채찍질하던 꿈의 흔적인가

능 앞의 수행인 석상
위사(衛士)의 얼굴로 늘어서 있기는 하지만
옥소매(玉裾) 소리도 들리지 않누나

등롱(燈籠)에 새겨진 모란

성세(盛世)의 영화는 전하지만
아, 그 또한 이끼에 덮이었구나

떠도는 마음은 부질없이
자색 풀을 뜯으니
자의(紫衣) 향이어라 그대 슬프구나

아, 공명의 드높은 관
왕의 보좌, 천만의 부
저 세상에서 무슨 의미 있으랴¹⁸⁾

「대원군의 묘 앞에 서서 (大院君の墓前にたちて)」(제2권 제3호, 통권 제9호, 1908.11)에서 제1연을 제외하고 나머지 연 모두를 소개하였다.

주지하는 바대로 대원군은 고종의 섭정으로 국정을 좌우하였으며 고종이 장성하여 섭정에서 물러나게 된 후로는 며느리인 명성황후와 정치적으로 대립하였다. 그러므로 일본에 있어서 대원군에 대한 평가는 명성황후에 대한 평가와 다른 것이 당연하리라고 생각된다. 그런데, 상기 인용한 시를 살펴보면, 대원군에 대한 평가는 「청량리를 찾아서」에 나타난 명성황후에 대한 평가와 동일선상에 놓여 있음을 파악할 수 있다.

첫째로 대원군에 대하여 명성황후와 마찬가지로 개인적 역량을 평가하고 있음을 알 수 있다. ‘두 개의 나귀 석상 / 일찍이 군정(君庭)의 보리밭에서 / 채찍질하던 꿈의 흔적인가’라는 대목은 대원군 또한 국가 경영에 있어 나름의 꿈을 갖고 있었음을 시사한다. 또한, ‘등롱(燈籠)에 새겨진 모란 / 성세(盛世)의 영화는 전하지만’라는 대목은 대원군의 통치능력을 상당히 인정한 것으로 볼 수 있다. 이는 명성황후를 ‘슬픈 꿈’을 가졌던 인물, ‘절세의 재목’으로 평가하였던 「청량리를 찾아서」와 마찬가지로 비전과 능력을 겸비하였던 인물로 대원군을 평가한 것이라 할 수 있다.

둘째로 대원군에 대한 평가는 명성황후에 대한 평가의 경우와 마찬가지로 허무주의라는 잣대를 통하여 평가된다. ‘꿈의 흔적’, ‘성세(盛世)의 영화는 전하지만 / 그 또한 이끼에 덮이었구나’, ‘아, 공명의 드높은 관 / 왕의 보좌, 천만의 부 / 저 세상에서 무슨 의미 있으랴’는 대목을 통해서 대원군이 누렸던 권세와 영화가 결국은 부질없고 헛된 무가치한 일 지나지 않는다는 관점을 보여준다. 또한, 이는 대원군이 명성황후와 마찬가지로 권력의 정점에 있었던 인물이라는 점에서 조선 왕조의 역사 자체를 허무한 것으로 평가하는 관점이라고 할 수 있다.

이와 같이 「대원군의 묘 앞에 서서」는 대원군의 역량을 평가하면서도 허무주의라는

18) 꿈꾸는 사람(夢見る人) 작, 유수정 역 「대원군의 묘 앞에 서서 (大院君の墓前にたちて)」, 식민지 일본어문학·문화연구회 공역 『완역 일본어잡지 『조선』 문예란(1908년 3월-1909년 2월)』, 도서출판 문, 2010, pp.272-273

프리즘으로 조선 왕조의 역사를 재단하고 있는 작품임을 알 수 있다.

다음으로 「남대문(南大門)」이라는 시를 살펴보기로 한다.

그 속에서 단청을 반짝이며
우뚝 선 남대문이며
지난 세월을 자랑스럽게
뽐내면서

아침마다 저녁마다
남으로 북으로
오가며 몸을 숙여 지나가는
무수한 사람들

발길을 멈추고 생각에 잠겨
바라보는 이는 없구나
나라는 망했어도 추억의
봄은 변함없도다

아아 사람 나라의 임금의
부, 권력, 영화, 다툼
결국에는 모두 똑같이
세월에 묻히도다

오로지 남는 것은 예술의 향기
오로지 강한 것은 자연의 힘
애처롭도다 내 가슴에 간직된
불후의 생명¹⁹⁾

잡지 『조선』의 제1권 제4호(통권 제4호, 1908.6)의 문예란에 수록된 「남대문(南大門)」의 일부분이다.

본장에서 분석한 「청량리를 찾아서」, 「대원군의 묘 앞에 서서」 등의 시가 19세기 한국사의 주역을 소재로 하고 있는 것과는 달리 「남대문」은 조선 왕조의 건축물인 남대문을 소재로 하고 있다. 그러나 한국의 역사를 허무주의로 재단하는 관점은 이 시에서도 여실히 드러난다.

상기 인용한 부분의 전반부는 ‘지난 세월을 자랑스럽게 뽐내면서’ 등의 대목이 있어 일

19) 재경성 문학사 나리타 지쿠우(成田竹雨) 작, 유재진 역 「남대문 (南大門)」 식민지 일본어문학·문화연구회 공역 『완역 일본어잡지 『조선』 문예란(1908년 3월-1909년 2월)』, 도서출판 문, 2010, pp.97-98

견 한국의 역사를 자랑스러운 것으로 평가하는 듯이 보이는 부분이 없지도 않다. 그러나, 이러한 부분은 사실은 이 시의 마지막 연의 ‘오로지 남는 것은 예술의 향기’ 라고 주장하기 위한 부분에 지나지 않는다.

「남대문」은 ‘오로지 남는 것은 예술의 향기 / 오로지 강한 것은 자연의 힘 / 애처롭도다 내 가슴에 간직된 / 불후의 생명’ 이라는 마지막 연으로 귀착되어 가는 시적 구조를 보인다고 생각된다.

여기서 먼저 ‘나라는 망했어도 추억의 / 봄은 변함없도다’ 라는 구절이 주목된다. 이는 당(唐)의 시인 두보(杜甫)가 지은 「춘망(春望)」의 첫 구절 “나라가 파괴되니 산과 강뿐이고 / 성(城) 안에 봄이 오니 초목만 무성하네 (國破山河在 / 城春草木深)”를 본딴 것이다. 그런데 이 두보의 시 「춘망」의 첫 구절은 “바쇼(芭蕉)가 「오쿠노호소미치」에 ‘나라가 파괴되니 산과 강뿐이고 성(城) 안에 봄이 오니 풀은 푸르네라고 생각하며 샷갓을 깔고 앉아 언제까지나 회구(懷舊)의 눈물을 흘리고 있었다.’ 라고 인용한 것은 너무도 유명하다. 그 이래로 패전의 비애를 말할 때 얼마나 많은 사람들의 입에 오르내린 명구이런가²⁰⁾ 라는 지적대로 일본에서는 마쓰오 바쇼(松尾芭蕉) 이후 빈번하게 인용되어 왔다.

일본 근세의 대표적 작가의 한 사람인 마쓰오 바쇼의 「오쿠노호소미치(おくのほそ道)」는 일본의 대표적인 기행본(紀行本)의 하나인데, 바쇼가 두보의 시 「춘망」을 인용한 대목은 히라이즈미(平泉)²¹⁾를 방문하였을 때의 감회를 노래하고 있는 부분이다. 바쇼는 헤이안시대(平安時代)의 호족(豪族) 오슈후지와라씨(奥州藤原氏)의 근거지였던 히라이즈미를 찾아 「오쿠노호소미치」에서 “3대의 영화, 일취지몽(一炊之夢)과 같고 대문의 자취 1리(里) 정도 앞에 있네²²⁾”라고 시작하여 “나라가 파괴되니 산과 강뿐이고 성(城) 안에 봄이 오니 풀은 푸르네 라고 생각하며 샷갓을 깔고 앉아 언제까지나 회구(懷舊)의 눈물을 흘리고 있었다²³⁾”라고 맺는 것으로 그 감상을 토로한다. 여기서 3대란 후지와라노키요히라(藤原清衡), 후지와라노모토히라(藤原基衡), 후지와라노히데히라(藤原秀衡)의 3대를 가리키는 것이며 위에 인용한 대목에서 바쇼는 ‘이러한 3대의 영화도 덧없다’는 허무주의적 심경을 드러내고 있다. 그리고 두보의 시 「춘망」은 바쇼의 허무주의적 심경을 보다 효과적으로 드러내는 기능을 하고 있다.

그런데, 이와 같이 두보의 시 「춘망」이 허무주의와 연동하여 인용되는 것은 시 「남대문」의 경우에 있어서도 마찬가지이다. 위에 인용한 시 「남대문」에서 ‘나라는 망했어도 추억의 / 봄은 변함없도다’ 라고 「춘망」이 인용된 이후에 두드러지는 것은 허무주의인 것이다. 인용 부분의 네 번째 연은 분명히 ‘부도 권력도 영화도 다름도 모두 세월 앞에서

20) 鎌田正・米山寅太郎 『漢詩名句辞典』, 大修館書店, 1980, p.568

21) 현재의 이와테현(岩手県) 니시이와이군(西磐井郡) 히라이즈미초(平泉町)에 소재.

22) 松尾芭蕉 「おくのほそ道」, 井本農一・久富哲雄・村松友次・掘切実 校注・訳 『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集②』, 小學館, 1997, p.99

23) 松尾芭蕉 「おくのほそ道」, p.99

는 다 사라지고 마는 것'이라는 의식을 보여주고 있다. 그리고 다섯 번째 연에서는 '부, 권력, 영화, 다툼'에 대치하여 유구한 것이라면 '예술, 자연, 내 가슴 속의 생명'이라고 하고 있다. 부와 권력을 향한 인간의 활동이라 할 수 있는 역사를 허무한 것으로 보면서 그에 대비되는 예술, 자연, 개인의 생명 또는 영혼을 영원한 것으로 보는 관점이 이 시에는 드러난다. 문제는 이렇게 역사를 허무한 것으로 보는 허무주의를 조선 왕조의 상징적 건축물이라 할 수 있는 남대문을 소재로 하여 이 시의 내레이터가 제시하고 있다는 점이다. 이는 한국의 역사를 허무한 것으로 보는 시각을 표출한 것으로 생각된다.

이와 같이 『조선』의 문예란에 수록된 「청량리를 찾아서」, 「대원군의 묘 앞에 서서」, 「남대문」 등의 시에 대하여 고찰해 보았는데, 이 시들은 조선 왕조의 정치적 주역이었던 명성황후, 대원군, 그리고 조선 왕조의 상징적 건축물인 남대문을 소재로 하여 한국의 역사를 허무주의와 숙명론이라는 프리즘을 통하여 재단하고 있음을 알 수 있다.

5. 마치면서

이상, 『조선』의 문예란에 수록된 작품 중 한국의 역사에 관련된 역사물을 중심으로 당시의 일본인이 한국의 역사를 어떻게 바라보았는지 그리고 일본이 어떻게 조선에 대한 침략을 정당화하였는지에 대하여 고찰하였다.

「군산에서의 하룻밤」에서는 일본이 청에 맞서는 선한 세력으로 스스로를 가장하여 한국침략을 정당화하고 있으며, 또한, 「수양대군」에서는 일본이 한국의 정쟁을 개인적 욕망의 쟁탈전으로 폄하하였음을 파악하였다. 그리고 「남대문」, 「청량리를 찾아서」, 「대원군의 묘 앞에 서서」 등을 통하여 일본이 한국사를 허무주의와 숙명론으로 보고 있었음을 고찰하였다.

결국 『조선』의 문예란에 드러나는 것은 일본의 미화와 한국 침략의 정당화였고, 그와 동시에 한국의 역사를 개인적 욕망, 허무주의, 숙명론과 연결시킨 한국정체론(韓國停滯論)이라 할 수 있으며, 이는 한일병합을 전후한 시기의 일본의 정치적 목적과 궤를 같이하는 것이었다고 보여진다.

◀ 참고문헌 ▶

- 금병동 저, 최혜주 역(2008) 『일본인의 조선관: 일본인 57인의 시선, 그 빛과 그림자』, 논형출판사
 김용덕·미야자키 히로시 공편(2002) 『근대교류사와 상호인식 I』, 아연출판부
 식민지 일본어문학·문화연구회 공역(2010) 『완역 일본어잡지 『조선』 문예란(1908년 3월-1909년 2월)』, 도서출판 문,
 이규수 (2007) 『제국 일본의 한국인식: 그 왜국의 역사』, 논형출판사
 정병호(2008.6) 「20세기 초기 일본의 제국주의와 한국 내 <일본어문학>의 형성 연구 -잡지 『조선』(朝鮮,1908-1911)의 「문예」란을 중심으로-」, 한국일본어문학회 『일본어문학』 제37집

- 최혜주(2008.6) 「잡지 『조선』(1908-1911)에 나타난 일본 지식인의 조선인식」, 한국근현대사학회 『한국근현대사연구』 제45집
- 한일역사공동연구위원회 한국측 위원회(2006) 『근현대 한일관계 연표』, 경인문화사
- 함동주(2009) 「1900년대 초 일본의 조선 관련 서적 출판과 ‘식민지 조선상」, 함동주 김광열 임현순 공저 『근현대 일본의 한국인식』, 동북아역사재단
- 鎌田正・米山寅太郎(1980) 『漢詩名句辭典』, 大修館書店
- 甘笑子(1908.5) 「朝鮮の歌謠」, 『朝鮮』第1卷 第3号, 日韓書房
- 松尾芭蕉(1997) 「おくのほそ道」, 井本農一・久富哲雄・村松友次・掘切実 校注・訳 『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集②』, 小學館

- 투 고 : 2010. 5. 31.
■ 심 사 : 2010. 6. 12.
■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

内村鑑三의 「天然」觀

尹福姬*
bokeeyn@dongduk.ac.kr

<要 旨>

内村鑑三(1861-1930)의天然觀は、たとえば『空ノ鳥ト野ノ百合花』(1883)に見えるように、初期には目に見える「天然の美」を賛美する表面的なものであった。そしてまもなく「天然物は心靈の示現である、心の物に顕はれたものが天然である」とした初期の天然觀は『近代における科学的思想の変遷』(1910)における「喜的宇宙觀」に要約される。すなわち、希望的宇宙觀であり、天然觀であるといえる。

その後、最愛の娘、ルツ子の死に直面してから内村の天然觀は次第に天然の裏面ないしは内面を見る方向に転換するようになり、そのような彼の変化を示してくれるのが『二つの神』(1912)、『神と天然』(1912)、『万物の復興』(1918)などの作品である。特に『万物の復興』では、彼の天然觀が「全人類全宇宙と運命を共にする」運命共同体としての宇宙觀、天然觀、宗教觀に到達したことを語ってくれる。そして晩年の『羅馬書の研究』(1924)に至って、内村はついに天然の呻きに耳を傾け天然との話し合いに成功する。この話し合いを越えてさらに最晩年の『人と天然』(1929)においては、天然を徹底的に相対化、客観化してそれを超越する境地に達する。その過程のなかで「天然に対して採る態度」―「之に服従すべき乎、之を征服すべき乎、之と妥協すべき乎」に悩んだすえ、征服することを決心する。内村の選んだ「征服」とは他ではなく、「肉と其情とを十字架に釘けて、此身に在りて大天然を征服する事」、つまり自分を捨てて天然に自らの身と心を委ねることであった。偶然なのか『人と天然』を書いて3ヶ月後、内村鑑三はこの世を去っている。内村の天然征服の真の成敗は、日頃心より待望してやまなかった自分自身の復活の日、果たしてイエス・キリストの例のように証明されることになるだろうか。

キーワード：天然、神、天然の美、天然の呻き、天然の征服

1. 들어가며

지금부터 100년 전인 1910년, 우치무라 간조(内村鑑三, 1861-1930)는 새 해를 열며 正月에 발간한 『聖書之研究』 116호를 특집호로 꾸민다. 이름 하여 「天然号」. 이는 당시 그의 관심사가 무엇이었는지를 반영하는 좋은 예라고 할 수 있다.

우치무라 간조는 삿포로 농학교(札幌農学校)에서 학창시절을 보내며 홋카이도의 대자연을 너무도 좋아했고 틈만 나면 주변을 거닐며 자연의 아름다움을 만끽했다. 자연과학을 전공한 그는 자연 속에서 자연을 보며 자연 이상의 것을 찾아내려고 했다. 그에게 자연은 단순히 물리적이고 현상적인 자연이 아니었으며 스스로 즐겨 사용한 단어는 ‘自然’이 아니라 ‘天然’이었다.

본고는 간조가 즐겨 쓴 이 천연이라는 용어를 그대로 사용하면서 그의 천연관에 대해 고찰하고자 한다. 이 경우, 자연이나 자연관이라는 용어로 대체해도 큰 무리는 없겠지만 그렇게 하기에는 그가 사용한 천연이라는 용어의 범주가 너무 포괄적이어서 다소 제한을

* 동덕여자대학교 인문대학 일본어학과 부교수

받는다. 예를 들면 뒤에서 고찰하게 될 『사람과 천연(人と天然)』(1929)에서는 우주, 세계, 세상, 별, 태양, 지구, 바다, 산 등 物的實在物 전체와 심지어 인간의 情과 本能, 사랑, 연애, 우정 등도 천연에 포함시키고 있어 일반적인 ‘자연’으로 보기에는 어딘지 부적절하다. 아마 그런 의미에서 간조가 활동하던 당시에 자연이라는 말은 이미 통용되었지만 그는 이 천연이라는 용어를 애용했다고 본다.¹⁾

참고로 간조의 자연관 내지는 천연관과 관련한 선행연구 중 본고와 관련하여 몇 가지 주목할 만한 연구로는 가와키타 요시오(川喜田愛朗)²⁾, 우누마 히로코(鵜沼裕子)³⁾, 오하라 신(小原信)⁴⁾, 이 밖에도 우치다 요시아키(内田芳明)⁵⁾, 가토 사치코(加藤幸子)⁶⁾ 등의 연구를 꼽을 수 있다. 또한 자연관 관련 단독 연구는 아니지만 꾸준히 간조관련 연구를 축적한 스즈키 노리히사(鈴木範久)의 이 분야에 관한 간헐적인 발언도 주목된다.⁷⁾ 이하에서 간조의 저작을 고찰하는 가운데 함께 살펴보고자 하며 그 과정에서 이러한 선행연구와 본고와의 차이가 드러나리라고 본다. 특히 우누마와 오하라는 왜 간조가 ‘자연’이라는 용어 대신에 ‘천연’이라는 단어를 선택 했는지에 관한 참고가 되는 추측을 한 바 있어 그에 대해서는 여기서 먼저 언급해 두고자 한다.

예를 들면 우누마는 「우치무라의 천연에는 단순한 即物的自然으로서는 다 표현할 수 없는 内実이 담겨있으며 ‘天’이라는 글자를 얹은 데는 그 나름의 의미가 있다」⁸⁾고 하며 깊은 언급은 차후로 미루면서도 일정한 의미를 부여했다. 비슷한 맥락 안에서 오하라는 간조가 자연 대신에 천연을 多用한 이유에 대해 「우리가 사는 세상은 神에 의해 움직인다고 보고, 地上의 일을 항상 동시에 天上의 일과 결부지어서 생각했기 때문이리라」⁹⁾고 추측하며 역시 간조의 ‘자연’ 아닌, ‘천연’이라는 단어의 선택에 주목했다.¹⁰⁾

1) 간조가 천연이라는 용어를 사용한 시기는 필자가 조사한 바에 따르면 메이지 31년, 즉 1898년경부터가 아닌가 한다. 간조의 자연, 천연에 관해 언급한 글을 모아 검토한 결과, 그 전까지 「自然」이라는 용어를 사용하던 간조는 1898년 10월 『東京獨立雜誌』에 발표한 『조류와 속인(鳥類と俗人)』에서 비로소 「天然」이라는 용어를 사용하고 있다. 일기, 서간 등 참고자료의 좀 더 치밀한 검토가 필요하기에 단정하기는 어렵지만 대략 이 무렵부터 사용한 것이 확실시 된다.

2) 「内村鑑三の「天然」觀」 (『内村鑑三研究』2号, キリスト教図書出版社, 1974.6)

3) 「内村鑑三における神と天然」 (『内村鑑三研究』11号, キリスト教図書出版社, 1978.10)

4) 「内村鑑三における「天然」」 (『内村鑑三研究』18号, キリスト教図書出版社, 1982.4)

5) 「『代に生きる内村鑑三』, 岩波書店, 1991

6) 「内村鑑三の自然觀」 (『内村鑑三撰集5』, 岩波書店, 1990)

7) 『内村鑑三とその時代』, 日本基督教団出版局, 1975

8) 앞의 「内村鑑三における神と天然」, 74쪽

9) 앞의 「内村鑑三における「天然」」, 29쪽

10) 이상의 의견에 전적으로 동의하면서 이와 관련하여 본고의 조심스러운 추측을 보태자면 간조는 혹시 당시 문단의 ‘자연주의’ 풍조와 일정한 거리를 두고자 하지 않았을까 하는 점이다. 물론 간조가 ‘자연’ 대신에 ‘천연’이라는 용어를 사용하기 시작한 1898년은 아직 자연주의가 일본문단의 주류는 아니었다. 하지만 이미 프랑스에서는 일본의 자연주의에 막대한 영향을 끼친 모파상(Maupassant, 1850-1893)이 활동을 접고 타계한 뒤로, 항상 서구의 동향에 민감했던 간조가 문학에 대한 관심은 상대적으로 덜 했다 하더라도 유럽자연주의의 일본 유입의 기운을 몰랐을 리가 없다고 보기 때문이다. 그로부터 10여년 뒤, 모파상의 영향을 받은 다야마 가타이(田山花袋)는 1907년에 『이불(布団)』을 발표하며 일본 자연주의의 선두주자가 된다. 이듬해인 1908년

간조가 접한 천연은 그가 기독교에 입문한 후에는 신(神)¹¹⁾을 증거 하는 도구로 그에게 각별한 의미로 다가왔다. 그러나 좀 더 깊이 들어가 초기부터 만년의 문장을 검토해 보면 같은 ‘천연’이면서도 그 안에 다양한 변화가 있음을 발견할 수 있다. 이러한 변화에 원인을 제공한 계기를 돌아보면서 그의 천연관이 어떻게 심화, 발전되어 가는지를 이하에서 살펴보기로 한다.

2. 아름다운 천연 - 「喜的宇宙觀」

간조 초기의 문장은 자연에 대한 감탄과 놀라움, 아름다움에 대한 찬미로 가득하다.

예를 들면 아직 천연이라는 용어를 사용하기 전인 그의 나이 만 22세 때의 작품, 『공중의 새와 들의 백합화(空ノ鳥ト野ノ百合花)』(1883, 이하 『공중의 새』)에는 순수하게 자연을 향유하는 간조의 모습을 볼 수 있다. 아사쿠사(淺草)에서 열린 기독교 친목회 모임에서의 강연을 한 달 후에 문장화한 이 글은 간조의 초기 천연관을 고찰할 때, 앞서 든 선행연구 등에서도 자주 거론되었다. 예를 들면 간조의 천연관 연구에서 선구적인 자리를 차지하는 가와키타 요시오는 이 작품이 삿포로 농학교 졸업 후, 그의 자연과학사상의 전모를 보여준다고 하며 「처음으로 창조주로서의 유일신을 믿게 된 그의 아름답고 확신에 찬 천연관이 웅변적으로 드러나 있다」¹²⁾고 평가하고 있다. 또한 스즈키 노리히사는 이 작품에는 「자연을 통해 神(창조주 하나님-인용자 주)을 본다고 하는 사상」이 가장 단적으로 드러나 있다고 하며, 「자연이 곧 神」이라고 하는 전통적인 일본의 범신론적 자연관과 간조의 그것과의 차이점을 지적하고 있다.¹³⁾

간조는 여기서 造化의 미묘함과 그 체계를 탐구하는 것은 기쁨이라고 하며 꽃이나 철새, 물고기, 브라이언트, 워즈워드의 시를 열거한다.

이상에서 제시한 예로 생각하면 세상의 이른바 무신론자가 볼 때는 겨우 자연의 미묘한 현상이라 칭하기에 그 사람의 사상과 기쁨은 이보다 높은 위치에 오를 수가 없다. 그러나 조물주를 인정하는 사람의 눈으로 이것을 볼 때는 그 기쁨은 단순히 오감으로 느끼는 그것에 그치지 않고 마음의 기쁨도 얻을 수 있다.¹⁴⁾ (『内村鑑三撰集5』, 19쪽. 이하 ‘선집’으로 표기)

에 간조는 「自然主義」라는 소감문을 통해 자연주의에 관한 자신의 견해를 짚막하게나마 피력한 바 있다. 「사람의 자연을 그리는 것은 추하다」, 「사람의 自然主義」(『内村鑑三全集15卷』, 428쪽. 이하 ‘진집’) 등의 내용으로 보건대 당시 문단을 휩쓸기 시작한 ‘자연주의’를 지칭하고 있음이 분명해 보이며 은연중에 자신의 ‘天然’과의 사이에 선을 긋고 있다.

11) 神은 프로테스탄트 기독교인 간조가 사용한 개념으로는 ‘하나님’이지만, 초기 그의 글에서는 종종 이 개념이 모호하여 ‘하나님’으로 번역하면 의미전달에 혼선이 빚어지는 경우가 있다. 그러므로 본고에서는 우선, 문자 그대로 ‘신’이라 번역하며 그 안에 ‘하나님’의 개념을 담기로 한다.

12) 앞의 「内村鑑三の「天然」觀」, 6쪽

13) 앞의 『内村鑑三とその時代』, 184쪽

14) 「今左ニ示ス所ノ例ニ依テ考フレバ世ノ所謂無神論者ナル者ヨリ見ル時ハ僅カニ自然ハ美妙ナル現象ト称スルマデニシテ

브라이언트의 시와 그에 대한 자신의 견해를 열거한 후, 상기 인용문에 보이는 『공중의 새』의 결론은 당시 그의 삶에서 과학을 시작으로 신앙과 예술에 대한 감성이 별 괴리 없이 일치하고 있음을 보여준다. 이렇게 간조가 스스로 자연에 민감하게 감응하는 힘을 가지고 있었음은 이 밖에도 『조류와 속인(鳥類と俗人)』(1898), 『근현보행(近県歩行)』(1899) 등, 간조 초기의 문장을 읽으면 얼마든지 발견할 수 있다. 여기서 그는 속물들의 별장으로 화하는 땅들에 분노하는가 하면 한편으로 아무도 관심을 기울이지 않는 들꽃, 잡초에 눈길을 주곤 한다.

그러다가 「天然物은 심령의 示現이다. 마음이 물질로 나타난 것이 天然이다」, 「天然物에는 각각 도덕적 내지는 종교적 의미가 있다」¹⁵⁾ 등의 표현에는 이후 그의 독특한 천연관 형성의 기원을 보는 듯하다. 당시 일본의 정치에 관심이 많았던 간조는 청일전쟁을 겪으며, 뺏속까지 타락한 정치가들에 대한 환멸을 씻고자 산과 들의 자연 속으로 나가 「들을 거닐며 희망을 회복」(『사람과 천연(人と天然)』, 1901)¹⁶⁾하는가 하면, 「천연의 美와 인간의 醜」(『천연과 사람(天然と人)』, 1902)¹⁷⁾를 대비시키며 뒤틀린 심사를 다스리곤 했다.¹⁸⁾

한편, 앞서 언급한 『공중의 새』에서 일찍이 진화론에 관해 운을 댄 간조의 견해를 읽을 수 있다는 점이 매우 흥미롭다. 간조의 진화론에 대한 본격적인 고찰은 차후로 미루지만 우선 본고와 관련 차원에서 간단하게나마 언급해 두기로 한다.

간조는 다윈의 진화론과 조물주의 숨씨와의 관계에 대해 언급한 후, 진화론의 진실과 조물주의 미덕은 모순되지 않는다고 주장한다. 이에 대해 가와키타 요시오는 「거기서는 과학 그 자체 안에 신에게까지 도전하는 논리가 내장되어 있다고 하는 가능성이 간과되었다」¹⁹⁾고 하며, 스스로도 지나친 해석이 될까 우려하면서도 우회적으로 당시 20대 초반이었던 청년 간조의 자연과학관의 미숙함을 지적한 바 있다. 그리고 훗날, 가와키타의 지적에 한편으로는 동조하면서도 또 다른 관점에서 접근한 우치다 요시아키는 간조의 천연관을 샤프로 농학교 시절에 만난 홋카이도의 원시림 풍경에서 비롯된 「천연(풍경)의 現象学的인 삶의 개시와 전개」, 말하자면 ‘현상학적 풍경관’으로 규정했다. 그는 다소 무리한 자신의 논리에 감춰, 초기 표면적 천연관에서 점차 내면적 그것으로 이행해 간 간조의 천연관의 변천 과정을 깊이 이해하지 못한 것 같다. 어쨌든 우치다는 간조의 사상이 충분히 정

其人ノ思想及ビ快樂ハ之ヨリ高尚ナル位置ニ登ル能ハズ 然レドモ造主ヲ認メタル者ノ目ヨリ之レヲ見ル時ハ其快樂ハ僅カニ五感ノ快樂ニ留マラズシテ心中ノ快ヲモ得ルニ至ル」(원문의 傍点 생략, 이하, 텍스트를 포함한 자료의 인용시, 기본적으로 원문은 게재하지 않고 필자의 줄여쓰기로 실었음을 밝혀둔다)

15) 「어떻게 여름을 보낼까(如何にして夏を過ごさん乎)」(1899 / 선집5, 80쪽)

16) 선집5, 98쪽 / 앞에서 언급한 『사람과 천연』(1929)과는 같은 제목, 다른 작품임.

17) 선집5, 105쪽

18) 이 무렵의 간조를 고찰한 필자의 논문 참조(内村鑑三論, 日本學報83집, 2010.5). 간조의 나이 만 40세가 되는 1901년과 이듬해인 1902년의 글 중에는 특히 회고조의 글들이 눈에 띄는 가운데, 정치에 좌절된 마음을 사회 개량사업으로 채우고, 천연을 통해 치유 받고자 한 그의 일면이 드러나 있다.

19) 앞의 「内村鑑三の「天然」觀」, 9쪽

리되지 않아 「모순, 동요, 반전, 재반전」²⁰⁾을 거듭하고 있다고 주장하는데, 아마도 우치다의 이런 입장이, 그리고 앞선 가와키타의 다소 의혹을 담은 시각이 보편적인 우치무라 간조의 이해가 아닌가 생각한다.

다시 본론으로 돌아가, 한편 초기 간조의 천연관은 이윽고 『근대 과학적 사상의 변천(近代における科学的思想の変遷)』(1910, 이하 『근대 과학적 사상』)에 이르러 간조 스스로가 副題로 든 「喜的宇宙觀」으로 함축된다. 한마디로 희망적 우주관이자 천연관이라고 할 수 있다.

『근대 과학적 사상』은 앞서 본고의 초입에서 언급한 『聖書之研究』116호, 「天然号」란 이름의 특집호에 실린 글이다. 가와키타를 비롯한 선행연구자들이 간조 중기의 사상을 살펴보는데 귀중한 자료로 꼽고 있지만 본고는 오히려 이 작품을 간조 초기의 천연관을 가장 잘 요약한, 즉 초기의 대미를 장식하는 작품으로 평가한다. 물론 과학적 사상의 변천 과정을 놓고 본다면 그의 나이 49세인 중기 작에 해당하지만, 천연관에 국한하여 볼 때, 초기부터 이때까지는 대체로 ‘천연은 아름답다, 우주는 생명으로 충만하다’ 식 사상의 지속 확장으로 봄이 타당하다고 생각한다. 다음과 같은 부분은 그의 「喜的宇宙觀」의 내용이 무엇인지를 잘 보여주고 있다. 전자는 우주와 그 힘에 관한 사상을, 후자는 천연에 관한 사상을 피력한 글이다.

우주는 나이를 먹으면서 쇠퇴하기는커녕 점점 완전을 향해 진보한다. 진화는 그 법칙이다. 새로운 힘은 점점 더해지고 새로운 美는 점점 나타나고 있다. 이 우주는 어떻게 보든 절망의 우주가 아니다. 영원히 진화하는 희망의 우주다.²¹⁾

優勝劣敗는 천연진화의 유일한 법칙이라고 우리는 들었다. 진화론자들의 주장에 따르면 세계는 넓은 전쟁터이며 전쟁은 승리하기 위한 유일한 방법이다. 여기에는 자비도 연민도 없다(중략) 구과학이 주장하는 천연관처럼 살벌한 것은 없다.(중략)

그러나 이제 과학은 천연의 다른 방면을 보게 되었다. 천연은 戰爭만이 아니다. 또 調和다.(중략) 천연은 이를 깊이 관찰하면 競争이 아니라 公生(共濟)이다. 동물은 식물을 위해 탄소를 배출하고 식물은 이를 섭취하여 동물을 위해 공기를 정화한다.(중략) 鬪爭은 鬪爭을 위한 鬪爭이 아니고 平和를 위한 鬪爭이다.²²⁾

이 안에 드러난 간조의 사상에서 「영국경험주의 과학 사상」과 「독일 낭만과 생물학」의 영향관계를 추정할 것은 가와키타이지만, 본고는 다른 측면의 관련성을 제시하는 것으로 이러한 추정에 중지부를 찍고자 한다.

20) 앞의 『現代に生きる内村鑑三』, 220쪽

21) 선집5, 173쪽

22) 선집5, 174-175쪽

스웨덴의 학자 스반테 알레니우스씨가 宇宙生命充實說을 주창하여 학계의 환영을 받고 있다. 그 설에 따르면 1인치의 6백 29만 7600분의 1 이하인 살아있는 細胞가 전 우주에 충만하며, 빛이 이를 밀어내어 球體 사이를 왕래하면서 때가 차 생명을 받기에 합당한 존재를 만나면 이에 임하여 생명을 발생시킨다고 한다. (중략) 생명은 우주에 충만하다, 죽음은 불가능하다. 생명불멸설은 이제 과학적으로 증명되었다. 기뻐해야 마땅하도다. (「宇宙生命充實說」, 1909)²³⁾

간조가 말하는 「喜의宇宙觀」은 마치 여기 보이는 「宇宙生命充實說」을 가리키는 듯하다. 그 정도로 이 두 사상은 흡사한 맥락이라고 생각된다. 이는 『근대 과학적 사상』보다 4개월 앞서 발표된 짤막한 소감문으로 너무 짤막한 글이라 오히려 가와키타가 주목하지 못했을 가능성이 높다. 스웨덴의 과학자 스반테 알레니우스의 宇宙生命充實說을 접한 당시 간조의 희열이 글 속에 유감없이 드러나 있다. 즉, 이 학설을 접하고 나서 그 영향을 받아 자신의 우주관, 천연관에 탄력을 얻은 간조는 『근대 과학적 사상』을 집필하며 그 속에서 과학과 신학, 우주와 천연, 진화와 진보, 등 평소의 사상을 일목요연하게 정리하게 된다. 이 작품은 短文이 많은 간조의 문장 치고는 비교적 길이가 있는, 그야말로 天然문란 이름의 특집호에 걸맞은 역작이 아니었나 생각한다.

3. 루쓰코의 죽음과 천연관의 변화

이상에서 보듯이 간조는 천연을 신의 풍성한 造化라 느끼며 마음껏 천연에 찬가를 보낸다. 천연은 전쟁이 아니라 조화요, 경쟁이 아니라 공생이라고 주장하며 천연의 투쟁은 투쟁을 위한 투쟁이 아니라 평화를 위한 투쟁이라고 역설하고 있음은 이미 위의 『근대 과학적 사상』에서 살펴본 바이다.

그러나 그는 갑자기 돌변한 듯, 중반 이후로 갈수록 천연을 관찰하며 글로 읊기는 필체가 무거워진다. 진화론자들이 주장한 「優勝劣敗」를 구 과학의 살벌한 천연관이라고 얼마 전 『근대 과학적 사상』에서 가차 없이 주장했던 간조는 2년 뒤의 문장에서는 「천연의 신은 잔혹한 신이다, 무자비한 신이다, 優勝劣敗의 신이다」고 하며 스스로 살벌한 주장을 펼치고 있는 듯하다. 또한 천연 그 자체보다 그것을 배후에서 조종하는 「천연의 신」에 주목하고 있는 느낌이 든다.

신은 하나가 아니다. 둘이다. 천연의 신이 있다. 默示의 신이 있다. 이 둘은 같은 신이자 또한 다른 신이다.

천연의 신은 잔혹한 신이다. 무자비한 신이다. 優勝劣敗의 신이다. 競争의 신이다. 戰爭의 신이다. 教會의 신이다. 不義와 權力과 결탁하여 正義와 貧弱을 제압하는 신이다. 이에 반해 默

23) 선집5, 167쪽

示의 신은 恩惠의 신이다. 慈愛의 신이다. 예수 그리스도의 아버지가 되신다. (중략) 눈에 보이는 천연의 신은 참 신이 아니다. 천연은 신의 얼굴이다. 그러나 그 마음은 아니다. (중략) 천연의 신을 참 신이라고 생각하는 그것이 미신이다. 인생의 모든 오류와 이에 수반되는 모든 불행은 이 미신에서 난다. 그러나 보이는 천연을 배제하고, 보이지 않는 참 신을 인정할 때 우리는 진리에 도달할 수 있다. 신은 천연이라는 추한 얼굴로 나타나 사람의 마음을 시험하신다. 그러나 사람은 보이는 것에 의존하지 않고 보이지 않는 것으로 말미암아 신을 인정하고 자신의 신앙을 굳건히 하며 그 영혼의 구원을 완수할 수 있다. (후략) (『두 신(二つの神)』, 1912)²⁴⁾

「천연의 신」과 「黙示의 신」, 「보이는 천연」과 「보이지 않는 참 신」, 이 대비가 의미심장하다.

앞서 천연의 아름다움에 감동하고 「천연은 심령의 示現이다」고 하며 천연에서 신의 마음을 읽었던 간조는 이제 여기서 「천연은 신의 얼굴이다. 그러나 그 마음은 아니다」고 하며 시침을 떼고 있다. 이 『두 신(二つの神)』이 1912년 4월에 발표되고 나서 같은 해 9월에 발표된 『신과 천연(神と天然)』 역시 이전까지의 천연관과는 확연히 다른 천연을 그리고 있다. 즉, 천연은 「얕은 물질계」이고 사람은 신이 지배하는 「심원하기 그지없는 영계」의 소속인 즉, 천연은 사람을 지배할 수 없다고 주장한다. 이어 신은 「천연 밖에 서서 그의 은혜를 베푸신다. 천연의 신은 영혼의 신이 아니다」고 하며 천연으로부터 신에 이르는 길은 전혀 없다고 한다.

(신은 -인용자 보충)천연 밖에 서서 그의 은혜를 베푸신다. 천연의 신은 영혼의 신이 아니다. 그렇다. 구약의 신은 신약의 신이 아니다. 예수 그리스도의 아버지 되시는 참 신은 이제 역병으로 그 적을 치시지 않는다. 하늘에서 불을 내려 자신을 대적하는 자를 멸망시키지 않으신다. 이제 신의 은혜는 사람의 영혼에 임하고 그 형벌도 역시 사람의 영혼에 임한다. 이제 천연은 마치 신이 없는 것처럼 행동한다. 고로 이때를 신앙의 때라고 부른다. (『신과 천연(神と天然)』)²⁵⁾

「신의 은혜는 사람의 영혼에 임하고 그 형벌도 역시 사람의 영혼에 임한다」, 「이때를 신앙의 때라고 부른다」 등의 표현을 통해 그의 신앙에 중대한 변화가 일어났음을 암시한다. 이는 자신의 신앙에 바탕을 둔 천연관의 변화를 상징하는 것이기도 하다. 이 변화의 배경을 잠시 살펴보자.

1912년 1월에 우치무라 간조는 사랑하는 딸 루쓰코(ルツ子)²⁶⁾를 잃는다. 당시 그녀의 나이는 만 18세 꽃다운 나이였다. 외모 등, 여러 가지 면에서 간조를 빼닮았다고 알려진 그

24) 전집19, 70쪽

25) 선집5, 200-201쪽

26) 루쓰코라는 이름은 구약성서 「룻기」의 주인공의 이름을 본뜬 것이다. 루쓰코가 태어나기 석 달 전인 1893년 12월, 간조는 룻기 주해서인 『정조미담 룻기(貞操美談 路得記)』(福音社)를 간행한 바 있다.

녀의 죽음은 전처와 사별한 쓰라린 경험이 있는 간조에게 또다시 삶과 죽음에 관한 해결할 수 없는 숙제를 제시하며 그의 깊은 고뇌를 유발한 것 같다. 위의 인용문에 앞선 다음과 같은 구절이 아마도 당시 간조의 삶과 죽음, 죽음과 삶에 관한 깊은 사색의 일단을 보여주는 듯싶다.

천연은 사람을 구별하지 않는다. 동일한 세균이 신자도 불신자도 습격한다. 善人 중에도 불운한 사람이 있고 惡人 중에도 운 좋은 사람이 있다. 천연 앞에는 善惡正邪의 구별이 없다. 그리고 죽음은 만인에 대한 그의 마지막 선고다. (『신과 천연』)27)

루쓰코의 사망으로 유발된 그의 천연관은 이렇듯 변모하면서 간조에게 보이지 않는 세계와 「보이지 않는 참 신」에 대한 관심을 촉발하며 오히려 그의 신앙의 심화 면에서 촉매제 역할을 한 것으로 보인다. 간조가 받은 심적인 타격은 이루 말로 다할 수 없는 것이었겠지만 이 사건을 겪으며 그는 영생, 내세, 부활에 대한 실재감을 키움과 동시에 그의 천연관은 표피적 그것에서 점점 내면화되어 몇 년 뒤에 가시화하는 재림사상을 잉태하게 된다.

한편, 간조의 이러한 변화에 주목한 가토 사치코는 초기에서 중, 후기로 갈수록 간조의 글에서 점점 「유모어와 재치」가 자취를 감추고 그의 특징인 「구체적 사물에 관한 집착이 벌어지고 관념성이 전면에 돌출」하는 등, 자연에 대한 태도가 경직되고 있다며 그 이유를 궁금해 했다. 또한 가토는 위의 『신과 천연』보다도 십여 년이 더 지나, 같은 제목으로 발표된 글 속의 다음과 같은 부분을 통해 그녀의 표현을 빌자면 「인간지상주의로 비약」28)한 그의 원인을 알 수 없는 급격한 변화에 경악하고 있다.

천연은 신묘막측하다. 그러나 천연은 신이 아니다. 신이 천연의 위에 있을 뿐만 아니라 사람도 천연의 위에 있다. 사람이 천연을 신으로 추앙할 때 그는 타락하고 이를 종으로 대할 때 그는 진보한다. (『신과 천연』, 1923)29)

아마도 가토는 간조의 변모의 배경에 숨어 있던 사랑하는 딸의 죽음이라는 엄청난 사건을 간과한 듯하다. 그러나 가토는 그뿐만 아니라 위와 같은 발언을 한 간조의 진의에 대해서도 간과했다. 왜냐하면 간조는 위의 글에 바로 이어 「천연을 가버이 보는 자는 스스로 자신의 무학을 드러내는 자다. 사람이 천연 위에 있다고 하는 말은 천연이 별 볼일 없다는 말이 아니다. 사람은 신을 닮아 무한히 존귀하다는 말이다」라고 자신이 한 말의 진의에 대해 부연하고 있기 때문이다. 즉, 이는 가토가 주장하듯 「인간지상주의」로의 비약이라

27) 선집5, 200쪽

28) 이상 가토의 견해는 앞의 「内村鑑三の自然觀」, 282쪽

29) 선집5, 262쪽

기보다는, 차라리 ‘신지상주의’, ‘신본주의’로의 전환이자 더불어 신의 형상을 닮은 사람의 존엄성을 강조한 견해라고 보는 것이 옳다고 본다. 동시에 이 글은 이에 앞서 잉태한 재림 사상과 그 연장선에서의 천연관, 말하자면 뒤에서 살펴보게 될 운명공동체로서의 온 인류와 온 우주를 품는 간조의 진일보한 천연관의 발로에 다름 아닌 것이다.

간조는 이 『신과 천연』에 앞선 1918년에 발표한 글에서 「再臨을 알고 天然을 알았다」³⁰⁾고 서슴없이 고백하고 있다. 언뜻 그 이전까지의 천연관을 부정하는 듯이 보이기도 하지만 이는 부정이 아니라 천연에 대한 지식의 심화를 보여주는 표현이라고 봄이 옳을 듯싶다. 같은 시기 발표된 『만물의 부흥(万物の復興)』(1918)에서 다가올 예수 그리스도의 재림과 더불어 자신의 부활을 꿈꾼 그의 모습이 극명하게 드러나는 것을 보아도 그의 천연관이 그동안 어떻게 변모했는지를 알 수 있다. 성서의 로마서 8장 16절에서 25절까지를 주해한 이 글에서 간조는 특별히 다음의 8장 18절 및 20, 21절에 주목하고 있다.

「생간건대 현재의 고난은 장차 우리에게 나타날 영광과 족히 비교할 수 없도다」
(18절)³¹⁾

천지만물(피조물)은 허무한데 굴복하며 썩어짐의 종노릇을 한다고 한다. (20, 21절)³²⁾

「천지만물(피조물)은 허무한데 굴복하며 썩어짐의 종노릇」을 하는데, 자신 및 인류를 포함한 모든 피조물이 직면한 이 「현재의 고난」은 장차 나타날 「영광」을 위한 포석에 불과하다고 그는 여기서 주장한다. 이어지는 문장에 드러나듯, 만물은 현재로서는 학자 헉슬레의 주장처럼 「완성되자마자 파괴」되는 불완전한 상태지만 언젠가는 인류와 함께 영광의 부활을 할 것이며, 인류의 구원은 온 우주의 그것과 함께 완성된다고 하는 것이 이 구절에 담긴 의미라고 간조는 해석한다. 그가 존경한 로마서의 저자 사도바울의 이 사상을 통해 간조는 이윽고 전 세계를 품게 되며 바울처럼 자신의 이상 안에서 온 우주를 포용하게 된다.

우리의 구원은 온 우주의 그것과 함께 완성된다. 이 사상을 품으면 사람은 전 세계에 복음의 증인이 되고자 하는 큰 야심을 품지 않을 수 없다. 사람의 인격은 그 이상에 따라 달라진다. 에머슨은 「네 차를 별나라까지 연결하라」고 했지만 바울은 자신의 이상 안에서 온 우주를 포용했다. 그리고 그의 마음에 이 넘치는 희망이 있었기에 온 땅은 그의 전도구역이 된 것이다. 또한 이 이상을 품으면 사람은 만물에 대해 무한한 동정을 품지 않을 수 없다. 자기 혼자만 구원받는 것이 아니다. 온 인류, 온 우주와 운명을 함께 하는 것이다. 이렇게 함으로써 작 은 자기중심의 신앙은 소멸하고 나의 종교는 동시에 만물의 종교로 화하는 것이다.³³⁾

30) 『그리스도 재림을 믿고 난 후의 나의 사상상의 변화(基督再臨を信ずるより來たりし余の思想上の變化)』(1918, 선집1, 263쪽)

31) 이하, 일본어성서의 우리말 번역은 대한성서공회 발행의 「개역한글판 성경」(1996, 184판)을 참조했다.

32) 선집6, 255-256쪽

마침내 간조는 편협한 「자기중심의 신앙」에서 벗어나 「온 인류, 온 우주와 운명을 함께 하는」 운명공동체로서의 우주관, 천연관, 종교관을 품기에 이른 것이다.

4. 천연과의 소통, 천연의 정복

위의 『만물의 부흥』과 관련하여 우치무라 간조 만년의 천연관을 가장 잘 나타낸 작품으로 『로마서 연구(羅馬書の研究)』(1924)를 빼놓을 수 없다. 이 작품은 1921년 1월부터 이듬해 10월까지 무려 2년에 걸쳐 진행한 60회 강연을 1924년에 단행본으로 완성한 대작이다. 그 중 로마서 8장은 간조가 연구에 가장 역점을 둔 장으로, 로마서의 중심이자 또한 저자인 사도 바울의 천연관이 가장 잘 드러난 장이라고 그는 이해했다.

그(바울-인용자 주)에게도 확실한 천연관이 있었다. 이것을 전하는 것이 로마서 8장 19-22절이다. 바울의 천연관은 성서기자의 그것이다. 특히 예언자 이사야의 천연관이다. 그 천연관이 야말로 그리스 철학의 흐름을 따르는 근대인의 천연관보다 훨씬 심오한 것이었다. 이사야도 바울도 천연의 표면에는 눈길을 주지 않았다. 깊이 그 마음속에 들어가 그 신음소리를 듣고 희망의 노래를 불렀다. (중략)

사람은 천연의 아름다움을 노래한다. 그러나 그 아름다움은 겨우 그 표면에 그친다. 한 걸음 더 나아가 그 이면에 들어가면 천연은 미가 아니라醜다. 調和가 아니라 混亂이다. 平和가 아니라 戰爭이다. (중략) 참으로 땅에 귀를 대고 들으면 천연의 신음소리가 들린다. (중략) 천연은 사람과 함께 저주받고 사람과 함께 속박당해 사람과 함께 해방을 부르짖고 있다. (『로마서 연구』 「第39講約說」)³⁴⁾

앞서 살펴본 1912년의 『두 신』과 『신과 천연』, 그리고 『만물의 부흥』의 계보를 잇고 있는 이 『로마서 연구』에 보이는 사상은 그 사이의 그의 변화에 대한 재차, 재삼의 확증인 것 같다. 여기서 간조는 과거 천연의 표면만 보고 감탄했던 자신의 천연관이 얼마나 피상적이었나를 바울의 예에 빗대어 반성하고 있는 듯 보인다. 그가 「그리스 철학의 흐름을 따르는 근대인의 천연관보다 훨씬 심오」하다고 한 바울의 천연관은 「천연의 표면」에는 눈길을 주지 않고 「깊이 그 마음속에 들어가 그 신음소리」를 듣는 것이었다.

이제 간조는 「피조물이 다 이제까지 함께 탄식하며 함께 고통 하는 것을 우리가 아나니」(로마서 8장 22절)에 이르러 바울과 예언자 이사야의 천연관에 완전히 동조하면서 모든 피조물(천연)이 온전하게 회복되기를 기다리는 가운데 지금도 고통, 탄식, 「신음」을 하고 있다고 설파한다. 만물의 부흥과 회복을 고대하는 「신음소리」는 인류와 마찬가지로

33) 선집6, 258쪽

34) 전집27, 40-42쪽

천연에도 있고 간조의 귀에는 이 천연의 신음소리가 들렸다. 천연과 간조 사이에 어느덧 깊은 공감과 소통이 이루어진 것이다.

이렇듯 천연과의 소통에 다다른 간조 만년의 천연관은 그가 타계하기 불과 몇 달 전에 발표된 『사람과 천연(人と天然)』(1929)에 이르러 그 정점에 도달한다.

이 작품은 제목이 상징하듯, 사람과 천연을 철저히 대칭관계에 놓고 고찰하고 있다. 천연은 「物的實在物 전체」를 가리키며 사람은 「나, 他人, 神」을 포괄하는 「靈의宇宙」를 구성하는 삼자관계이지만 간조는 여기서 「천연 대 나」의 관계로 축소하여 논하고 있다. 이하에 다소 난해하지만 그만큼 심오한 『사람과 천연』의 거의 전문을 인용하며 그 내용의 세부에 접근해보고자 한다.

○천연, 우주, 세계, 세상, 말은 다르지만 가리키는 것은 하나다. 즉 物的實在物 전체를 지칭한다. (중략) 우리는 천연 안에서 살고 움직이고 존재한다고 해도 과언이 아니다. 위대 하도 다 천연이여. 그리고 천연에 대해 나(我)가 있다. 자신이 있다. 내 自覺의 중심이 있다. 이를 靈이라 하고 靈魂이라 하고 精神이라고 하며 이름은 달라도 내용은 하나다. 천연은 万有 안에 있으나 나만은 그렇지 않다. 나는 천연이 아니다. 천연과 相對하는 존재다. 그리고 나와 마찬가지로 他人이 있다. 나, 他人, 神, 삼자가 서로 관련을 가지며 靈的宇宙를 구성한다. 그렇지만 문제를 간단히 하기 위해 천연 대 나 한사람으로 보면 편리하다. 천연과 나의 관계는 어떠한가? 나는 천연에 대해 어떤 태도를 취해야 하나? 이에 服從해야 하나? 征服해야 하나? 妥協해야 하나? 가장 중요한 문제다.

○반복한다. 大天然에 대해 나 자신은 별개(別)다. 나, 나 자신, I, Ich는 별개다. 나는 지구도 아시아도 일본도 아니다. 나는 이 몸에 거하는 것으로 그 주인이지 器官이 아니다. 넓은 우주에 거하며 나는 천연에 속하지 않고 천연을 相對하여 서 있는 존재다. 적도 아니지만 종속도 아니다. 나는 우주천연에 대해 獨立人이다. (중략) 無形의 나, 나 자신, 생각하면 위대한 존재다. 오리온 좌의 별이 무한대라 해도 그 가치 면에서는 靈인 내게는 미치지 못한다.

○그러므로 나는 천연 안에 거하지만 천연의 산물은 아님을 안다. 천연의 일부분인 내 몸은 흙에서 왔는지 모르지만 나는 특수한 존재이며 천연의 영역에 속할 수 없다. 그리고 이러한 내가 천연에 대해 어떠한 태도를 가져야 하는지가 인생 최대문제다. (중략)

○천연은 그 아름다움으로 나를 유혹한다. 그 강함으로 나를 위협한다. 천연과 相對하면 나는 도저히 적수가 되지 않는다. 그러나 나는 이에 服從해서는 안 된다. 妥協해서도 안 된다. 이를 征服해서 그 주인공이 되지 않으면 안 된다. 이것은 나의 사람으로서의 의무이자 특권이다. 나의 價值는 내가 천연에 대해 취하는 태도에 따라 결정된다. 천연에 服從하면 나는 망하고 천연과 妥協하면 나는 이것도 저것도 아닌 무의미한 존재가 된다. 천연을 이기고 이것을 征服하면 나는 사람답게 살 수 있다. 내가 천연 안에 있는 것은 이 때문이다. 내가 이것을 이기고 살기 위해서다. 인생의 의미는 여기에 있다. 천연에 이길 것인가, 질 것인가 여기에 있다.

○천연을 征服한다는 것은 단순히 그것을 이용하는 것이 아니다. 어떤 의미로든 이것을 내 주인으로 삼지 않는 일이다. 창공의 위대함으로 나를 위협하지 못하게 하는 것이고, 금은보화

의 소소함으로 나를 유혹하지 못하게 하는 것이다. 천연은 무한대라고 하지만 肉과 情을 가지고 내게 접근한다면 나는 그를 눌러버릴 수 있다. 천연을 征服한다고 오린 좌까지 갈 필요는 없다. 肉과 情을 십자가에 못 박고 이 몸에 거하면서 大天然을 征服할 수 있다.

○그리고 예수는 이 같이 해서 세상을 이겼다. 천연을 征服했다. 「내가 세상을 이기었노라」고 그가 말한 것이 이것이다. 그리고 그의 復活이 그 증거다. 그는 완전히 천연을 이기고 그 법칙을 초월하였다. (후략)

(『사람과 천연(人と天然)』, 1929.12)³⁵⁾

여기서 그는 반복해서 천연과 나는 「相對」하는 존재임을 강조한다. 천연은 천연이고 나는 나, 서로를 독립된 존재로 객관화시키고 나서 그는 가장 중요한 문제이자 「인생 최대문제」인, 천연에(을) 「服從해야 하나? 征服해야 하나? 妥協해야 하나?」를 고민하고 있다. 결국, 복종도 타협도 아닌 정복을 그 답으로 선택하는데 여기서 「征服」이란 앞뒤 문맥을 살펴볼 때, 천연의 유혹과 위협으로부터의 ‘극복’에 가까운 의미임을 짐작할 수 있다. 그리고 이것은 문장의 말미로 갈수록 「초월」에 가까운 의미로 변화하고 있다. 특히 이글의 핵심이라고 할 수 있는 위 인용문의 마지막 단락을 주의 깊게 살펴보면 간조가 말하고자 한 것이 무엇인지, 그가 말한 「征服」의 진정한 의미가 무엇인지를 발견하게 된다.

여기서 간조의 천연은 끊임없이 금은보화 등, 아름다움으로 인간을 유혹하고 대자연의 위력으로 인간을 위협하여 주인이 되고자 하는 존재로 묘사되고 있다. 그러한 천연을 상대하는 「나」는 대자연의 위협에 속수무책으로 굴복할 수밖에 없는 연약한 「肉」으로 만들어진 존재요, 금은보화 등 여러 가지 모양으로 나의 「情」을 자극하며 접근하면 그 유혹에 속절없이 무너지고 마는 취약한 존재에 불과하다. 그럼에도 불구하고 「物的實在物」 즉, 물질계 전체를 상징하는 천연은 「靈」인 인간에게는 미치지 못하는 존재라고 간조는 말한다. 왜냐하면 아무리 천연이 나의 肉情을 위협하고 자극해도 나는 그것을 눌러버리고, 나아가 그것을 「십자가」에 못 박아 위협과 유혹의 근원을 원천적으로 차단하고 「靈」으로 살 것이기 때문이다. 이것이 「예수」가 택한 방법이요, 천연을 征服한 법칙이며 간조가 따르고자 하는 전형이다.

한편, 이상에서 드러난 천연과 상대하는 존재로서의 인간의 존엄성에 대한 사상은 여기서 표현이 다소 심화되었을 뿐, 이미 1923년의 『신과 천연』에 표명된 바 있다. 즉, 앞서도 인용한 「사람도 천연의 위에 있다. 사람이 천연을 신으로 추앙할 때 그는 타락하고 이를 종으로 대할 때 그는 진보 한다」 식의 사상이 그것이다. 그것이 여기서 표현상으로는 「천연을 征服한다」로 더 직설적이 된 듯 보이지만, 그 내용인즉 이상에서 살펴본 대로 征服이란 문자적인 의미가 아니라 肉과 情을 극복, 초월한다는 의미임을 알 수 있다.

35) 선집5, 273-276쪽

5. 맺음말

간조의 천연관은 활동초기부터 만년에 이르기까지 다양한 양상으로 변화를 보인다. 그러나 그것은 한 단계 한 단계 단계적으로 변화할 때마다 이전의 사상을 버리고 새로운 단계로 전진하는 것이 아닌, 새로운 사상을 이전의 사상에 추가하는 방식으로 또는 약간씩 수정하는 방식으로 심화하며 발전해 가는 양상을 보이고 있음을 알 수 있다. 자신의 인생에서 다양한 사건들을 겪으며 그의 천연관은 눈에 보이는 천연의 아름다움에 감탄하며 그 속에 담긴 조물주의 능력을 찬양하는 이른바 表面的 천연관에서 점점 천연의 裏面 내지는 内面을 들여다보는 쪽으로 방향전환하게 된다. 그리고 마침내 만년에는 천연과의 소통을 넘어서 천연을 철저히 객관화하며 중국에는 그것을 초월하고자 하는 경지에 이르게 된다. 그 과정에서 그는 천연을 어떻게 대해야 하는지-征服해야 하는지, 服從해야 하는지, 妥協해야 하는지- 수 없는 고민 끝에 征服하기로 마음먹는다. 그가 선택한 征服은 다름 아닌, 자신의 肉과 情을 십자가에 못 박고 천연에 스스로의 몸을 내맡긴 채, 초연하게 대처하는 것이었다. 이렇게 자신의 肉情을 초월하는 길만이 천연 征服의 유일한 길임을 믿어 의심치 않은 우치무라 간조는 비로소 훌훌 육신의 옷을 벗고 우연인지 필연인지 그로부터 3개월 뒤 영면한다. 이제 그의 천연 征服의 成敗는 자신이 그토록 열망한 復活의 그 날, 과연 예수의 예처럼 증명될 것인가.

◀ 참고문헌 ▶

*주텍스트 : 『内村鑑三撰集』(全8卷 +別卷), 岩波書店, 1990
*부텍스트 : 『内村鑑三全集』(全40卷), 岩波書店, 1980.10-1984.2

河上徹太郎(1959) 『日本のアウトサイダー』, 中央公論社
山本泰次郎(1968) 『内村鑑三の根本問題』, 教文館
鈴木範久(1975) 『内村鑑三とその時代』, 日本基督教団出版局
小原 信(1976) 『評伝内村鑑三』, 中央公論社
内村美代子(1985) 『晩年の父内村鑑三』, 教文館
鈴木範久(1986) 『内村鑑三』, 岩波書店
内田芳明(1991) 『現代に生きる内村鑑三』, 岩波書店

川喜田愛郎(1974.6) 「内村鑑三の「天然」觀」(『内村鑑三研究』2号, キリスト教図書出版社)
鶴沼裕子(1978.10) 「内村鑑三における神と天然」(『内村鑑三研究』11号, キリスト教図書出版社)
小原 信(1982.4) 「内村鑑三における「天然」」(『内村鑑三研究』18号, キリスト教図書出版社)
加藤幸子(1990) 「内村鑑三の自然觀」(『内村鑑三撰集5巻』, 岩波書店)

■ 투 고 : 2010. 5. 31.
■ 심 사 : 2010. 6. 12.
■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

무라카미 하루키(村上春樹)의 『노르웨이의 숲(ノルウェイの森)』 연구

— 여성 동성애를 중심으로 —

趙柱喜*
mjih0202@hanmail.net

<ABSTRACT>

A 13-year-old lesbian girl comes into the novel, Norwegian Woods by Murakami Haruki. She has a physically beautiful appearance as well as an intellectual excellence, which has the other negative side and the destructive evil spirit that threatens other people's daily life in order to satisfy her own desires. Haruki intends to show the pornography itself through the character he describes. The punishment taken to the girl is a homosexual that her sexuality is toward females. The author does not consider the girl's fundamental problems just because he attaches importance to the homosexual love.

When we take a close look at her homosexual experiences with Leiko's confession, so far from trying to share her agony with 'I(boku)', she asserts the lesbian girl and herself into dichotomy; a homosexual and a heterosexual, and allows the visualization of discrimination on lesbians blatantly by expressing the feeling of relief asserted to heterosexual through the sexual bargaining with 'I'.

Moreover, as the lesbian girl is characterized to the abnormal and deviant images, he expresses the prejudice that lesbian means abnormality and his aversion against a homosexual love itself. In conclusion, he couldn't depart from the classical representation that negates a homosexual love but pursues a heterosexual love.

Also, when it comes to Leiko, that she goes back to the reality with her own big hurts and has four time sex with 'I' like a ritual ceremony, standing her own feet and regenerating through the 'I's penis, makes us feel that the novel is based on the male-centered phallicism.

Key words: lesbian, homosexual, heterosexual, pornography

1. 들어가며

레즈비언이란 성에 대한 자아의 인식(性自認)이 여성이고, 성적지향이 동성을 향하는 사랑을 말한다.¹⁾ 문학 작품 속에서 동성애를 다루기 시작한 것은 고대 그리스 시대로 거슬러 올라갈 만큼 그 역사가 깊지만,²⁾ 이들 작품들 대부분은 남성간의 동성애를 다룬 것으로, 여성 간의 동성애를 다룬 작품들은 찾아보기 힘들다. 그 이유로서는 과거 예술의 집행자들이 대부분 남성작가들에 한해 있었고, 여성간의 동성애 행위는 19세기말부터 엄격하게 통제되었기 때문이라 여겨진다.³⁾

* 리즈메이칸(立命館)대학 객원연구원

1) 堀江有里(2006) 『「レスビアン」という生き方 キリスト教の異性愛主義を問う』, 新教出版. p.80

2) 기원전 700-800년 전에 만들어진 호메로스의 『일리아스』에는, 아킬레스와 파트로클리스가 동성애 사이였다고 쓰여 있으며, 동성애 연구의 시작 또한 여기서 비롯된다. (ケネス・ドゥーヴァー, 仲務哲郎・下田立行訳(1984) 『古代ギリシアの同性愛』, リブポート. p.32-33)

일본에서는 다니자키 준이치로(谷崎潤一郎)의 『만지(卍)』, 미시마 유키오(三島由紀夫)의 「하루코(春子)」 「과실(果実)」, 가와바타 야스나리(川端康成)의 『아름다움과 슬픔과(美しさと哀しみと)』와 다케다 다이준(武田泰淳)의 『아름다운 호숫가(美しき湖のほとり)』 등 남성작가들의 작품이 대부분이다.

무라카미 하루키(村上春樹; 1949~)의 작품 중에도 레즈비언이 등장하는 작품들이 있다. 『노르웨이의 숲(ノルウェイの森)』(1987)을 비롯하여 『스푸트니크의 연인(スプートニクの恋人)』(1995)⁴⁾과 최근작인 『1Q84』(2009)⁵⁾에서 이들은 다양한 스타일로 표상되고 있다. 하루키 자신은 『스푸트니크의 연인』을 쓰면서 레즈비언에 대해 잘 몰라 힘들었다고 하는데,⁶⁾ 실제로 이 작품들을 들여다보면 남성작가에 의한 것이고, 직접 체험자가 아니라고 보기 어려울 정도로 굉장히 리얼하게 동성애 묘사가 이루어지고 있음을 알 수 있다. 이 작품들 간의 차이를 살펴보면 『노르웨이의 숲』은 당사자의 감정 교류는 없고, 오로지 동성애 행위만이 묘사되어 있는데 반해, 『스푸트니크의 연인』과 『1Q84』로 갈수록 동성애자 간의 감정(사랑과 우정)에 바탕을 두고 그러한 감정을 전달하는데 신중을 기하고 있다는 점이다.

하루키의 동성애에 관한 선행연구는 그리 많지 않으며, 그 대부분은 『스푸트니크의 연인』에 편중되어 있다. ‘고야노 아쓰시(小谷野敦)’는 하루키가 『노르웨이의 숲』에서 레즈비언 여성을 공포 영화의 괴물처럼 그리고 있다고 지적하고 있고,⁷⁾ ‘곤도 유코(近藤裕子)’는 『스푸트니크의 연인』에서 ‘스미래(すみれ)’와 ‘뮤(ミュウ)’의 관계에 ‘아버지 적인 것’의 그림자가 관련되어 있다는 ‘마쓰모토 쓰네히코(松本常彦)’의 논문에 대해,⁸⁾ 오히려 이 작품 내의 레즈비언리즘은 헤테로섹스즘 및 그 근원에 있는 부권과 싸우기 위한 논리로 작용하고 있다고 반박한다.⁹⁾

본고는 이상의 선행연구를 참고로 남성 작가 하루키(春樹)에 의해 그려진 여성 동성애 양상을 『노르웨이의 숲』에서 고찰해 봄으로써, 그들의 위치를 점검하고, 그들을 작품 내

3) リアン・フェダマン, 豊岡明美ほか編(1996) 『レズビ안의歴史』, 筑摩書房. p.154

4) すみれは身体を少し上の方にずらせた。彼女の鼻先がミュウの首に触れた。二人の乳房が触れ合った。ミュウは口にたまった唾液を呑み込んだ。すみれの手が彼女の背中をさまよっていた。(中略) それからすみれの指がミュウの寝間着の前のボタンをはずし始めた。(中略) すみれの指がミュウの乳房に触れた。その指は静かにミュウの乳房の曲線をなぞっていた。すみれの鼻先が、ミュウの首筋の上を左右に揺れていた。すみれはミュウの乳首に触れた。そっと撫でて、つまんだ。最初はおずおずと、それから少しだけ力をこめて。(村上春樹(2003) 『村上春樹全作品 1990-2000②』, 講談社. p.366)

5) 環の楕円形の乳首や、薄い陰毛や、お尻のきれいな膨らみや、クリリスのかたちを、青豆は今でも不思議なくらい鮮明に覚えていた。(中略) 彼女の手のひらは大塚環の身体のくびれた部分をそっと撫でていた。相手は始めはくすぐっていたが、そのうちにくすぐす笑いが止まった。息づかいが変わった。(中略) 相手の乳首が突然堅くなっていくのがわかった。彼女自身の乳首も同じように堅くなった。(村上春樹(2009) 『1Q84 BOOK1』, 新潮社. p.58-59)

6) (인터뷰) 村上春樹(1999) 「物語はいつも自発的でなければならない」, 『広告批評』 231, マドラ. p.60

7) 小谷野敦(2004) 『反=文芸評論 文壇を遠く離れて』, 新曜社. p.68

8) 松本常彦(2001) 「孤独—村上春樹『スプートニクの恋人』」, 『国文学 解釈と教材の研究』 46-3, 学燈社. p.63

9) 近藤裕子(2008) 「すみれへ/すみれから—父権とレズビアニズム」, 『国文学 解釈と鑑賞 別冊』, 至文堂. p.219

에 배치한 작가의 의도를 밝혀보고자 한다.¹⁰⁾

2. 레즈비언 표상의 한계

『노르웨이의 숲』에서 ‘이 아이(この子)’ ‘그 아이(あの子)’ ‘그녀(彼女)’로 호칭되며 작품 중 유일하게 이름조차 부여받지 못한 13세의 중학교 2학년 여자아이는, 상실이라는 병을 앓고 있는 주인공들로 이루어진 이 작품 내에서 독보적으로 부각되고 있다. 전체 430여 쪽 중 1/10 분량을 차지하고 있는 ‘레이코(レイコ)’와 그녀의 동성애 장면은 ‘100% 연애소설’이라는 작가의 설명이 무색할 만큼 선정적으로 묘사되어 있다.

이 이야기는 주인공 ‘나(ワタナベ)’의 여자 친구인 ‘나오코(直子)’와 같은 요양원에서 생활하고 있는 ‘레이코(レイコ)’라는 여성이 ‘나’에게 자신의 동성애 경험을 고백하는 형식을 취하고 있다. 이 여성을 중심으로 한 동성애 스토리를 메타 픽션으로 설정하여 전체의 줄거리를 살펴보면 다음 <표 1>과 같다.

<표 1> ‘레이코’의 인생

1935년 (4세)	피아노 시작
1953년 (22세)	프로 피아니스트 지망의 음대 4학년생. 왼쪽 새끼손가락 마비. 정신병원에 2개월 입원 후 복학
1954년 (23세)	대학 졸업. 집에서 피아노 레슨
1955년 (24세)	7개월 간 요양소 입원
1956년 (25세)	결혼
1958년 (27세)	출산
1962년 (31세)	레즈비언 소녀에게 피아노 레슨 시작. 동성애 경험과 자살미수.
1969년 (38세)	‘나’와 만남. 동성애 체험 고백
1970년 (39歲)	퇴원. ‘나’와 네 번의 섹스. 아사히카와(旭川)로 떠남.

위의 표에서도 알 수 있듯이 그녀의 인생은 ‘4세→22세→25세→31세’를 고비로 상승과 하강의 곡선을 취하고 있다. 4살 때부터 21세까지의 ‘한 점의 먹구름 없는 청춘’기를 보내던 그녀는(상승), 대학 4학년 때 왼쪽 새끼손가락을 쓸 수 없게 되면서 정신병원에 두번

10) 본문의 인용은 村上春樹(1991) 『村上春樹全作品 1979~1999 ⑥』, 講談社에 의하며 이하 쪽수만을 표기함. 아울러 번역문과 원문의 밑줄 및 강조선은 인용자에 의함

입원하게 된다.(하강) 퇴원 후 25세 때 자신을 이해해 주는 남편과 결혼, 아이를 낳고 서른 한 살 때까지 그녀의 인생 중에서 ‘가장 행복했던 시기’ (최고 정점)를 보낸다. 드디어 서른 한 살 되던 해에 그녀의 삶을 송두리째 뒤엎드는 한 소녀를 만나게 되면서 그녀의 삶의 곡선은 끝도 없이 아래로 추락하게 된다. (최고 하락)

13세의 소녀와 31세의 주부라는 결합은 의도적인 설정으로 보이는데, 시대 배경이 1960년대 말로 되어 있는 이 작품 내에서 대단히 부자연스럽게 여겨진다. 물론 일본 내의 여성 동성애의 역사는 태고부터 존재했고, 이미 메이지(明治) 44년(1911년)에 여성 동성애자간의 ‘동성정사(同性情死)’ 사건이 보고되고는 있지만,¹¹⁾ 그 대부분은 여학생들의 기숙사나 여공의 합숙소 등 같은 생활공간에서 거주하는 비슷한 나이의 여성들 간에 은밀히 이루어지는 경우가 많았다. 그렇기 때문에 1960년대 말의 13세의 레즈비언이라는 설정은 대단히 파격적인 동시에 비현실적이라고 할 수 있다. 숫자 13의 설정에는 기독교의 영향이 농후하게 여겨지는데.¹²⁾ 아마도 하루키는 기독교에서 ‘악’을 상징하는 ‘13’을 먼저 설정한 후, 그 반사경인 ‘31’을 설정한 것으로 보인다.¹³⁾

이 작품 속에서 유일하게 성욕을 보유한 ‘레이코’를 통해 하루키는 여성의 성욕을 가시화함으로써 잠재된 여성의 욕망의 문제를 작품 속에 제시하고 있고, 그런 면에서 페미니즘의 선구적 역할을 하고 있다고 할 수 있다. 그러나 이러한 긍정적 역할의 이면에 놓인 동성애에 대한 배타적인 시선 또한 무시할 수 없을 것이다. 여성동성애라는 다소 특이한 소재를 등장시킨 이유를 인물의 설정과 동성애 묘사를 통해 살펴보고 그 한계점을 분석해보도록 하겠다.

1) 팜프파탈의 이미지

남편과의 관계에서 단 한 번의 오르가슴도 경험하지 못하던 평범한 여성에게 일생 최대의 오르가슴을 느끼게 해 주는 상대역으로서의 레즈비언 소녀는 ‘레이코’의 회상 속에서 ‘예쁘다’, ‘아름답다’ ‘눈부시다’와 같은 형용사로 반복되어 서술되고 있다.

“(前略) 천사처럼 예쁜 아이였어. 정말로 비쳐 보일 듯이 예뻐. 그렇게 예쁜 여자 아이를 본 건 그게 처음이야. 머리는 이제 막 갈아 놓은 숯처럼 검고 길고, 팔다리는 가느다랗게 쪽 뻗어있고, 눈은 빛나고 입술은 이제 막 만든 것 마냥 작고 부드러울 거 같아. (중략) 가만히 보고 있노라면 아주 눈부셔서 말이야. (중략) 그 아이를 앞에 두고 이야기를 하고 있노라면 점

11) 小峰茂之(1985) 『同性愛と同性中心の研究』, 小峰研究所. p.22

12) 많은 연구자들이 하루키 작품의 기독교적인 영향에 대해 언급하고 있는데, ‘요시다 하루오’는 특히 그의 초기 작품에 등장하는 ‘제이스 바’의 ‘제이(ジェイ)’가 ‘지저스(Jesus)’나 ‘예루살렘(Jerusalem)’을 의미하고, 부인의 영향으로 작품 내에 성서세계를 도입하고 있다는 지적이 일반적이다. (吉田春生(1997) 『村上春樹、転換する』, 彩流社. p.10) 아울러 최근작인 『1Q84』에는 주기도문을 비롯하여 보다 직접적으로 기독교의 영향이 표상되고 있다.

13) 콘도 유코는 13과 31이라는 좌우가 바뀐 형태의 이 결합으로 두 사람이 분신관계를 구성하고 있다고 분석한다. (近藤裕子, 앞의 책. p.216)

점 정상적인 판단이 사라져 버려. 다시 말하면 상대가 짧고 아름다워서, 거기에 압도당해 버려서.”

(「(前略) 天使みたいにきれいな子だったわ。もうなにしろね、本当に好きとおるようにきれいなの。あんなきれいな女の子を見たのは、あとにも先にもあれがはじめてよ。髪がすったばかりの墨みたいに黒くて長くて、手足がすらっと細くて、目が輝いていて、唇は今つくったばかりっていった具合に小さくて柔らかさうなの。(中略) その子を前に話をしているとだんだん正常な判断がなくなってくるの。つまりあまりに相手が若くて美しいんで、それに圧倒されちゃって、」)(p.178-179)

“열세 살 치고는 가슴이 큰 아이인데, 내 두 배는 됐어. 브래지어도 주니어용이 아니라 제대로 된 성인용이고 그것도 꽤 고급인 거야.”

(「十三にしちゃおっぱいの大きな子でね、私の二倍はあったわね。ブラジャーもね、ジュニア用のじゃなくてちゃんとした大人用の、それもかなり上等なやつよ。」)(p.224)

‘숯처럼 검고 긴 머리’ ‘가늘고 쪽 뺨은 팔다리’, ‘작고 부드러운 입술’ ‘반짝이는 눈’으로 표상되는 ‘그 아이’의 모습은 흡사 ‘메두사’로 상징되는 ‘팜프 파탈’의 전형으로 묘사되어 있는데, 13세의 팜프 파탈이라는 설정은 일본 문학 내에서도 그 예를 찾아보기 힘들지 않을까 여겨진다. 남성작가들에 의해 구현되는 여성의 이미지는 ‘천사’와 ‘마녀’의 이분법으로 극명하게 드러나는데, 특히 ‘마녀’ 이미지의 여성은 자신의 욕망을 과감히 노출하고 대부분 부정적인 시각으로 표현되고 있다.¹⁴⁾ 이 작품 내에서도 그녀는 자신의 욕망을 위해 ‘레이코’의 평온한 일상을 위협하는 악마적 존재로 등장한다.

그녀는 외적인 아름다움뿐만 아니라 성적인 조숙함-그 나이에 어울리지 않게 큰 가슴과 성인용 브래지어 착용-까지 구비함으로써 동성애 러브스토리의 주인공으로서의 위치를 확보하게 된다. 그녀의 벗은 몸의 완벽한 아름다움이 독자들에게 마이너스적인 요소로만 다가오는 이유는, 하루키에 의해 표상된 이 소녀의 몸이 ‘여성의 나체’의 아름다움보다는 ‘나체의 여자’에만 집중되어 있기 때문이다.¹⁵⁾

이렇게 ‘압도적’인 몸매를 소유한 그녀에 비해 ‘레이코’는 자신의 가슴을 ‘볼품없는 물건’이라고 대비시킴으로써 그녀의 완벽한 몸매는 독자들에게 섹슈얼하게 어필되고 독자들이 하여금 성적인 상상력을 불러일으키게 하고 있다. 게다가 ‘머리도 영리하고, 이야기하는 요령도 있고’ ‘무서울 정도로 빼어난 아이’로 두뇌의 우수함까지 겸비한 그야말로 거의 완벽에 가까운 인간으로 표상되고 있다. 이렇게 완벽한 이 소녀의 역할이 오로지 레즈비언으로서 성적인 능력을 이용해 타자를 파괴하는 데만 사용되고 있다는 점은 남성 작가들에 의해 표상되는 여성들의 이미지의 한계를 극명하게 드러내고 있다고 할 수 있을 것이다. 그리고 그녀의 완벽함은 신이나 악마가 아니고서는-특히 악마에 가까운-불가능한, 결국은

14) 데리 이글턴, 김명환 외 역(1986) 『문학이론입문』, 문학과 비평, p.257

15) 도요오카는 E·J·베로크라는 사진작가의 『ストーリーヴィル・ポートレイツ』라는 사진집 속에 등장하는 창녀들의 누드의 아름다움을 논하며 이 작가가 찍은 여자의 사진이 아름다운 이유로서 ‘나체의 여자(ハダカの女)’가 아닌 ‘여자의 나체(女の裸)’를 찍었기 때문이라고 설명한다.(豊岡多恵子(1995) 『女の表現』, 岩波書店. p.99)

이 동성애 스토리를 불완전함과 억지와 비현실성으로 점철된 ‘꾸며낸 이야기’로 전락시키는 역할을 하고 있다.

2) 일탈자라는 왜곡된 시선

이 작품에서 레즈비언 표상의 또 하나의 문제점은 레즈비언 소녀를 비정상적이고 일탈적인 이미지로 부각시키고 있다는 점이다. 이는 이성애 중심주의, 남성중심주의, 호모포비아적 사회에서 생산되고 있는 레즈비언에 대한 여러 부정적 이미지가기도 한데, 하루키는 교묘하게 이들에 대한 차별을 정당화시키고 있음을 알 수 있다.

먼저 그녀가 열세 살의 ‘골수 레즈비언(筋金入りのレスビアン)’이 되기까지의 배경을 하루키는 불우한 그녀의 집안 환경으로 돌리고 있다. 그녀가 ‘레이코’에게 고백한 가정사를 들여다보면, 아버지에게 다른 여자가 있고, 어머니는 그로 인해 그녀에게만 신경질을 부려서 매일 얻어맞고 있고, 집에 돌아가기가 무섭다는 것이다. 이러한 설정은 결국은 레즈비언은 불행하고 불쌍한 존재라는 편견을 반영하고 있다. 그녀가 성정체성을 확립하게 되기까지 매우 중요한 역할을 해야 할 부성의 부재와 모성의 학대는, 그녀가 제대로 자신의 성자인(性自認)을 할 수 없도록 방해하고 있으며, 특히 어머니의 학대에 대한 돌파구로서 모성의 대체물을 갈구하게 되며, 어머니뻘의 ‘레이코’를 통해 왜곡된 욕구를 분출시키고 있는 것이다.

‘구메 요리코(久米依子)’는 가와바타 야스나리의 『아름다움과 슬픔과(美しさと哀しみと)』 속의 주인공 ‘오토코(音子)’와 ‘게이코(けい子)’의 동성관계를 ‘모녀관계(母娘関係)’와 ‘자기애적관계’가 중첩된 사랑이라 분석하는데,¹⁶⁾ 『노르웨이의 숲』의 ‘레이코’와 ‘레즈비언 소녀’ 또한 비슷한 구조를 하고 있고, 이들의 관계는 불구적인 모녀관계라고 할 수 있을 것이다.

그런데 과연 불행한 가족사만으로 레즈비언이 되는 것일까 하는 의문이 일 것을 염려한 하루키는 또 하나의 장치로서 그녀의 내면적인 문제점, 즉 ‘병적인 거짓말쟁이’로 설정함으로써 그녀의 고백에 대한 신빙성을 떨어뜨리고 ‘레즈비언=환자, 비정상적인 사람’이라는 도식을 제시하고 있다..

“순서대로 이야기 하자면 말이야, 그 아이는 병적인 거짓말쟁이였던 거야. 그건 정말 완전한 병이야.”

(「まあ順番に話していくとね、その子は病的な嘘つきだったのよ。あれはもう完全な病気よね」)

(p.179)

16) ‘구메 요리코’는 『아름다움과 슬픔과(美しさと哀しみと)』 내에서 ‘오토코’는 40, 41세, ‘게이코’는 22, 23세로 설정되어 있고, ‘오토코’는 ‘게이코’를 자신의 죽은 아이(17세에 조산하여 죽은 아이)의 대리로서 양녀로 받아들인 것이라고 지적한다.(久米依子(1999) 『美しさと哀しみと』論—語られる>女性像—, 『川端文学の世界3 その深化』, 勉誠出版. p.160)

“그녀는 자신을 지키기 위해 아무렇지도 않게 남에게 상처를 주는 거짓말을 하고, 이용할 수 있는 건 뭐든지 이용하려고 해.”

(「彼女は自分を守るために平気で他人を傷つける嘘をつくし、利用できるのは何でも利用しようとするの。」) (p.180)

그녀가 왜 ‘병적인 거짓말쟁이’가 되었는지에 대해서는 ‘골수 레즈비언’이 되기까지와 마찬가지로 구체적인 설명이 누락되어 있다. 하루키는 이 소녀가 마음의 병을 앓고 타인을 상처내면서 병적으로 거짓말을 해대는 이유를 ‘자신을 지키기 위해’서라고 설명하고 있는데, 그렇다면 그녀가 그렇게라도 해서 자신을 지키지 않으면 안 되는 이유가 무엇인지에 대한 설명 또한 미비하다. 단순히 불행한 가족사만으로 이 소녀가 ‘병적인 거짓말’을 한다는 것, 또한 그로 인해 ‘골수 레즈비언’이 됐다는 것은 과장된 해석이자 레즈비언에 대한 과도한 편견이다.

결국 레즈비언 소녀를 등장시킴으로써 하루키가 관심을 가지고 있는 부분은 오로지 그들의 성적 교섭에만 있는 것은 아닐까. 동성애 스토리의 절반 이상을 차지하고 있는 ‘레이코’의 설명을 자세히 들여다보면, 그 내용은 강제적 동성애를 입증하기 위한 레즈비언 소녀의 불가항력적인 힘과 그에 대한 회생양으로서의 자신의 나약함 자신이 동성애자가 아니라는 결백함이라는 방어기제들이 작용하고 있다. 또한 자신 대 레즈비언 소녀를 이성애자와 동성애자라는 이분법으로 극명하게 편 가르기를 함으로써 이성애자간(주인공 ‘나’와 ‘레이코’)의 우애를 과시하는 한편, 이성애자의 범주에 들어선 그녀의 안도감(‘나’와의 섹스)으로 마무리함으로써 레즈비언에 대한 차별을 노골적으로 가시화하고 있다.

남성작가들에 의해 쓰인 레즈비언 소설의 대부분이¹⁷⁾ 레즈비언 여성의 심리묘사가 누락되어 있다. 이 작품 내에서도 ‘나’와 ‘나오코’ ‘미도리’ ‘레이코’는 대화와 추측을 통해 그들의 생각과 내면까지 상세하게 서술되어 있는데 반해, ‘레즈비언 소녀’의 심리는 전혀 언급되고 있지 않다. 결국 작가의 손이 미치지 못하는 그녀의 심리의 공백은 부(負)적 요소로 가득 찬 판도라의 상자처럼 주변을 고통의 도가니로 몰아넣고 만다.

‘레즈비언 소녀’는 신의 명령을 어기고 상자를 연 판도라, 선악과를 따먹지 말라는 신의 명령을 듣지 않고 아담에게 먹도록 사주하는 이브와 같이, 이 작품 내에서 ‘금기’를 깨는 일탈자로 등장하고 있다. 그녀는 기독교에서 강조하는 이성애 주의에 기반한 남녀의 결합을 통한 생육과 번성의 의무를 위반하고 있고, 남성중심주의에서 말하는 ‘자연의 법칙’을 거스르고 있다. 미셸 푸코는 아르테미도르가 자연의 법을 거스르는 행위에 대해 신과의 섹슈얼리티 관계, 수간, 송장과 관계, 자기와의 관계, 두 여자 사이의 관계를 언급한데 대

17) 물론 이 작품은 레즈비언 소설이라고 규정할 수는 없다. 아직도 레즈비언 소설을 레즈비언 작가에 의한 작품들로 규정할지, 레즈비언을 소재로 한 작품까지를 포함시켜야 할지 의문이 분분하기 때문이다. 그러나 만약 레즈비언 소설을 전자에 한정시킨다면 또 하나의 차별을 자초하는 것이고, 작가의 프라이버시에 대한 침해와 머지않아 그 영역의 한계가 드러나게 되고 말 것이다. 더욱이 이 작품은 그 주제가 동성애가 아닌 만큼 이 용어의 사용에 있어 주의를 요하지만, 편의상 후자의 이론에 따르기로 한다.

해, 왜 여성동성애가 자연의 법칙을 거스르는 행위인지에 의문을 제기하며 그 해답으로서 ‘삽입’을 들고 있다, 다시 말하자면 여성들 간의 섹스에는 삽입이 이루어질 수 없고, 그것은 자연을 벗어나는 것이라는 해석이다.¹⁸⁾

결국 이 열 세 살의 레즈비언 소녀는 자연의 섭리를 거역하고, 신의 명령을 위반한 죄인으로서, 그 벌로 ‘병든 사과’처럼 주위를 오염시키게 되고, 결국은 이 사회 질서를 어지럽히고 혼란과 붕괴를 야기하는 사회적 일탈자로 단죄된다. 하루키는 이로써 그녀를 텍스트 밖으로 추방시키는 당위성을 확보하고, 작품 내에서 그녀를 소거시킴으로써 레즈비언의 존재 자체를 부정, 소멸시키고 있다.

3) 과도한 에로티시즘의 대상

레즈비언들의 관계 표상에 있어서 문제점은 그들 각자의 인격이나 가치관 혹은 상호간의 감정은 무시된 채 오로지 성적 매력과 그들의 성관계에만 집중되어 있다는 점이다. 다시 말하면 그들의 관계는 오로지 성적인 결합을 위해서만 존재하는 것으로 비춰지고 있다는 것이다. 문학 작품은 물론이고 각종 미디어 등에서 이들은 과장되게 섹스어필되어 나타나고 있고, 상품화되어 소비되고 있다. 즉 미디어는 실재하지 않는 가공의 레즈비언들을 생산해 내고, 편향적인 보도로 이들을 가십거리로 만들고 있다.

‘레이코’의 고백 전반부에서 아름다움과 완벽함으로 포장됐던 레즈비언 소녀는, 후반부에 들어와 ‘병적인 거짓말쟁이’로 남을 감탄시키고 칭찬받기 위해 수단과 방법을 가리지 않는 ‘교활함’과 ‘거짓말’과 ‘결점’의 소유자로 급전환되면서, 독자들로 하여금 그 교활한 거짓말이 불러올 엄청난 과장을 예감하게 한다.

‘그 아이’에게 피아노를 가르친 지 6개월 정도 지난 어느 날, 얼굴이 창백해지며 ‘레이코’에게 등을 쓰다듬어 달라고 부탁하던 그녀는, 갑자기 ‘레이코’의 브래지어를 풀며 그녀의 몸을 애무하기 시작한다. 그 ‘반짝이는 눈’으로 눈물을 뚝뚝 흘리며, 이제 갓 만든 것 같은 ‘자그맣고 부드러운 입술’로 자신을 버리지 말아 달라고 애원하며 ‘신조차도 눈시울이 뜨거워질’ 정도로 ‘레이코’와 독자들에게 불쌍하고도 가련한 이미지로 안겨온다.

이어지는 애무는 자신의 ‘남편 따윈 발치에도 못 미칠’ 정도로 ‘굉장한’ ‘온몸의 테두리가 조금씩 벗겨지는’ 생애 최초의 오르가슴을 느끼게 하는 것이었다. ‘레이코’는 멈춰달라고 몇 번을 애원하지만 그 때마다 ‘외롭다’고 매달리며 ‘그 아이’는 성적인 자극을 계속한다. ‘그만’ ‘안 돼’라고 부르짖는 ‘레이코’와 13세 나이에 31세의 여자를 성적으로 완전히 농락하는 레즈비언 소녀와의 동성애 장면은 대단히 리얼하게 묘사되고 있다

그게 어느 정도 이어지다가 점점 오른 손이 아래로 내려오는 거야. 그리고 팬티 위로 거길 만지는 거야. 그 쯤 난 더 이상 참을 수 없을 정도로 흠뻑 젖어 있었어, 거기가. 창피한 얘기

18) 미셸 푸코, 이규현 옮김(1990) 『성의 역사 3』, 나남출판사. p.40

지만. 그렇게 젖은 건 난생 처음이었어. (중략) 그리고 팬티 속으로 그 애의 가느다랗고 부드러운 손가락이 들어 와서 (중략) 난 이미 머릿속의 퓨즈가 날아가 버릴 것 같았어. (중략) 그 아이 그 때 내 팬티를 벗기고 거길 핏 흘리고 있었어. (중략) 그게 진짜 천국에 올라간 것처럼 굉장한 거야.

(そういうのがしばらくつづいて、それからだんだん右手が下に降りてきたのよ。そして下着の上からあそこ触ったの。その頃は私はもうたまんないくらいぐじゃぐじゃよ、あそこ。お恥しい話だけれど。あんなに濡れたのはあとにも先にもはじめてだったわね。(中略) それから下着の中に彼女の細くてやわらかい指が入ってきて、(中略) 私もう頭のヒューズがとんじやいそうだったわ。(中略) その子、そのとき私の下着脱がせてクニニリングスしてたの。(中略) それがまた天国にのぼったみたいにしごいんだもの。) (p.226-227)

이 작품의 특징 중의 하나가 여자 주인공들의 고백의 서사인데 나오코는 편지를 통해, ‘레이코’는 고백을 통해 자신의 정당성을 확보하려고 하고 있다. 고백은 타자의 진입을 불가능하게 하는 고백자만의 세계이고, 그 안의 진리 또한 철저히 주관적이며 고백자는 그 세계에 균립하며 자신만의 질서를 구축하려 한다. 고백이라는 형식에서 중요한 것은 <저자=화자=주인공>이라는 상상적 도식을 독자가 자연스럽게 받아들이는 담론적 효과를 창출하는 일인데, 작가는 1인칭 화자를 전면에 내세움으로써 독자들이 경험하는 세계가 진실하다는 것을 환기시킨다.¹⁹⁾

위의 인용 장면 또한 ‘레이코’라는 여성의 고백을 빌어 그녀가 체험한 세계를 독자들로 하여금 똑같이 경험하도록 유도하고 있는데, 그러한 리얼한 경험을 통해 독자들이 느끼는 것은 에로스적인 환상 이외의 아무 것도 아님을 알 수 있다. 즉 고백이라는 형식을 취하고 있지만, 그녀가 말하려고 애쓰는 과거가 무엇을 지향하고 있는지 불분명하다. 거의 폭로에 가까운 치부를 드러내는 고백을 통해 그녀는 무엇을 얻으려고 하는 것일까.

조르주 바타유는 남자와 여자는 동물적인 속성에서 얼마나 멀리 떨어져 있느냐에 따라 아름답다고 여겨지고, 특히 여자는 형태가 비현실적일수록, 또한 동물적 진실이나 인간 신체의 생리적 진실에 덜 종속될수록 욕망을 자극하는 여성의 가장 보편적인 이미지에 더 잘 부합된다고 설명하는데,²⁰⁾ 참회도 아니고 그리움도 아닌 그녀의 고백에서 독자가 느끼는 위화감은 그것이 너무나 노골적이고 적나라하게 여성의 성욕을 드러내고 있고, 이 둘의 성적 교섭이 전혀 아름답게 느껴지지 않는 이유는 이 둘이 매춘부와 같은 포르노그래피의 상투적인 여성들로 그려져 있기 때문이다.

물론 고백의 진정성을 놓고 볼 때 정신병 경력이 있는 ‘레이코’의 고백 자체를 전적으로 신뢰하기는 어렵고, ‘레이코’의 환상이 빚어낸 거짓말일 수도 있지만, 중요한 것은 ‘레이코’와 13세 소녀의 동성애 행위가 사실이든 아니든, 『노르웨이의 숲』이라는 작품 내에서 적

19) 고봉준(2005) 「그녀들의 모노드라마—고백의 서사와 독백의 전략」 『비평, 90년대 문학을 묻다』, 여름언덕. p.280

20) 조르주 바타유, 조한경 옮김(2009) 『에로티즘』, 민음사. p.164

지 않은 분량을 차지하며 이야기가 전개되고 있다는 점이다. 즉 하루키가 안톤 체호프의 말을 인용하며 ‘이야기 속에 권총이 나왔다면 그건 반드시 발사되어야 한다’²¹⁾ 즉 이야기 속에 필연성이 없는 소도구를 끌어들이지 말라고 지적했던 것처럼, 이 작품에 ‘여성 동성애자’를 등장시킨 데는 작가 나름대로의 ‘발사’ 이유가 있었을 것이라는 점이다. 그리고 그 이유는 13세 여성 동성애자의 성 정체성에 대한 고민도 아니고, 31세 주부의 이성애와 동성애 사이에서의 갈등 또한 아니다. 명백한 것은 ‘동성애’의 성애 묘사를 통해 작가가 노리고 있는 것은 독자들에게 대한 성적 자극, 즉 포르노그래피에 다름 아니라는 점이다.²²⁾

‘가케후다 유코(掛札悠子)’는 일본 내의 레즈비언의 이미지에 대해 다음과 같이 이야기하고 있다.

일본사회에서는 ‘레즈비언’이라는 존재는 두 종류의 틀에 들어가 있다. 하나는 포르노 그래피라는 틀, 다른 하나는 ‘레즈비언=남성화된 여자’라는 틀. 전자에서는 실제 모습과 무관한 ‘레즈비언’ 이미지가 남성애 의해 만들어져 반복적으로 소비되고 있다.

(日本社会では、「レズビアン」という存在は二種類の枠におしこまれている。ひとつはポルノグラフィという枠、もうひとつは「レズビアン=男化した女」という枠。前者では、実在とは無関係な「レズビアン」のイメージが男性によってつくりだされ、くりかえし消費されている。)²³⁾

‘커튼이 내려진 침실’이라는 무대에서 열 세 살의 완벽한 몸매의 여주인공이 서툰한 살 여성을 옷을 유연하게 벗기고, ‘가늘고 보드라운 손가락’으로 능숙하게 애무하고, 상대 여성을 성적으로 완전히 점령하는 놀라운 연기는 독자를 당혹하게 만든다. 이 장면은 명백하게 인간 사회의 성규범-섹스는 남녀 상호 간에 이루어져야 하며, 결혼한 사람은 배우자 이외의 사람과 관계를 맺어서는 안된다-과 성도덕-자신의 성 행위를 남에게 보여서도 안 되고, 남의 성 행위를 보아서도 안 된다-을 일탈하고 있으며, 그러한 일탈을 꿈꾸는 남성(물론 여성도 있겠지만 주로 남성)독자들의 욕망을 실현시켜주는 역할을 하고 있다.

고백 형식을 취하던 ‘레이코’의 이야기는 이 장면에서는 주인공 자체의 경험담보다도 더욱 자세하게 폭로되고 있고, 그럼으로써 독자들로 하여금 그녀의 쾌감과 아픔을 동시에 맛보게 한다. 도대체 누가 이만큼이나 적나라하고 빠짐없이 자신의 치부를 타자에게 드러낼 수 있을 것인가.

하루키 소설의 특색 중의 하나가 남성 주인공 ‘나’의 듣기 행위인데, 이 작품에서도 ‘나’는 몇 마디 부탁과 호응만으로 ‘레이코’로 하여금 자신의 치부를 드러내는 이야기를 하나

21) 村上春樹(2009) 『1Q84 BOOK 2』, 新潮社. p.33

22) 포르노그래피(pornography)란 고대 그리스어의 *porne*와 *graphos*에서 파생된 말로, <매춘부에 관해서 쓰기> 즉, 여자를 비속한 매춘부로서 생생하게 묘사하는 것을 의미한다. 그리스 시대의 *pomeia*라는 매춘부는 가장 비속한 매춘부를 의미하는 것이었고, 이에 대해 쓰는 것은, 여자의 성욕은 더럽고 음란하다는 확신에서 발생했다. 포르노그래피의 목적은 여성의 비속화이고 남성들의 성욕의 충족에 있다고 과언이 아닐 것이다안드레아 드 위킨, 柳惠蓮 옮김(1996) 『포르노그래피』, 東文選. p.297-298)

23) 掛札悠子(1992) 『「レズビアン」である、ということ』, 河出書房新社. p.81

도 빠짐없이 쏟아놓게 만든다. 그녀의 고백 장면에서 ‘나’의 대사는 고작 ‘미안합니다’ ‘정말 그런가요?’ ‘이야기해 주세요’ ‘그렇군요. 솔직히 말해서’ ‘무슨 소문이죠?’ 라는 대역섯 구절에 불과하다. 다시 말하자면 이러한 고백을 이끌어낼 아무런 준비도 하지 않고, 또한 제대로 된 질문조차 던지지 못하는 불구적인 청자의 역할을 하고 있다. 그러나 그러한 불구적인 대화에도 불구하고 ‘레이코’는 과하다고 여겨질 만큼 철저하게 자신을 발가벗겨 드러내고 있다. 이 여성의 고백이 자연스럽지 않은 것은 독자를 의식한 작가가 ‘레이코’로 하여금 ‘남자에게 이런 이야기를 하는 건 처음’이라든지, ‘부끄럽네, 이런 이야기, 땀이 다 나네’라는 대사를 발설하게 함으로써 부자연스러움을 무마시키려고 한다는 점이다.

결국 이 동성애 스토리는 욕망의 주체로서 물화된 여성의 육체에 대한 부정과, 그러한 욕망에 휩싸인 대가로 이 사회에서 격리되는 한 여성의 비참한 인생을 통해 이성애 중심, 남성중심의 가치관을 지향하고 있다고 할 수 있다. 정신병원에서 나온 ‘레이코’라는 여성이 새로운 출발을 하기 위해 ‘나’를 만나서 종교의식처럼 치르게 되는 네 번의 섹스를 통해 그녀의 질 속에 충만하게 되는 ‘나’의 정액은 그동안 그녀가 상실하고 있었던 모든 것을 채워주고 있다. 이 작품의 마지막 장면이 시사하는 바는 매우 크다. 결국 여성의 자립과 재생, 그리고 세계와의 소통이 ‘나’의 페니스를 통해서 이루어지고 있다는 것은 결국 남성중심주의적이고 고전적인 도식으로서의 남근사상이 바탕을 이루고 있음을 느끼게 한다.

3. 나오며

무라카미 하루키의 『노르웨이의 숲』에는 13세 레즈비언 소녀라는 섹슈얼 마이너리티가 등장한다. 그녀는 외형적 아름다움과 지적인 우수함까지 겸비한 완벽한 여성인데, 이러한 긍정적 이미지의 저변에는 자신의 욕구 충족을 위해 타자의 일상을 위협하는 부정적이고 파괴적인 악마적 근성이 깔려 있다. 이러한 인물의 설정을 통해 하루키가 의도하는 바는 포르노그래피 그 자체라고 할 것이다. 이 소녀에게 가해진 형벌은 자신의 성적 지향이 여성에게 향한다는 동성애자라는 것인데, 작가는 오로지 동성애적 성애의 묘사에만 치중한 나머지, 이 소녀의 근본적인 문제에 대해서는 조금의 배려조차 하지 않고 있다.

‘레이코’라는 여성의 고백을 통해 들여다 본 그녀의 동성애 체험을 자세히 살펴보면, 그러한 아픔을 ‘나’와 공유하려는 의식보다는, 자신과 레즈비언 소녀를 이성애자와 동성애자라는 이분법으로 분류하고, ‘나’와의 성적 교섭을 통해 이성애자의 범주에 들어간 안도감을 표명함으로써 레즈비언에 대한 차별을 노골적으로 가시화하고 있음을 알 수 있다.

아울러 레즈비언 소녀를 비정상적이고 일탈적인 이미지로 부각시킴으로써, ‘레즈비언=비정상적인 사람’이라는 편견과 동성애 자체에 대한 혐오감을 드러내고 있으며, 결론적으로는 동성애에 대한 부정과 더불어 이성애의 추구라는 고전적인 도식에서 벗어나지 못하고

있음을 알 수 있다.

나아가 그렇게 커다란 상처를 받은 그녀가 현실로 돌아가 세계와 소통하기 위해 종교의 식처럼 치르게 되는 ‘나’와의 네 번의 섹스에서는 여성의 자립과 재생이 ‘나’의 페니스를 통해 이루어지고 있다는, 남성중심주의적인 남근사상이 바탕을 이루고 있음을 느끼게 한다.

◀ 참고문헌 ▶

- 데리 이글턴, 김명환 외 역(1986) 『문학이론입문』, 문학과 비평. p.257
 미셸 푸코, 이규현 옮김(1990) 『성의 역사 3』, 나남출판사. p.40
 안드레아 드워킨, 柳惠蓮 옮김(1996) 『포르노그래피』, 東文選. p.297-298
 조르주 바타유, 조한경 옮김(2009) 『에로티즘』, 민음사. p.164
 掛札悠子(1992) 『「レズビアン」である、ということ』, 河出書房新社. p.81
 久米依子(1999) 「『美しさと哀しみと』論—語られる>女性像—」, 『川端文学の世界3 その深化』, 勉誠出版 p.160
 케네스·도버너, 仲務哲郎·下田立行訳(1984) 『古代ギリシアの同性愛』, 리프로보트. p.32-33
 小峰茂之(1985) 『同性愛と同性中心の研究』, 小峰研究所. p.22
 小谷野敦(2004) 『反=文芸評論 文壇を遠く離れて』, 新曜社. p.68
 近藤裕子(2008) 「すみれへすみれから—父權とレズビアニズム」, 『国文学解釈と鑑賞 別冊』, 至文堂. p.219
 豊岡多恵子(1995) 『女の表現』, 岩波書店. p.99
 堀江有里(2006) 『「レズビアン」という生き方 キリスト教の異性愛主義を問う』, 新教出版. p.80
 松本常彦(2001) 「孤独—村上春樹『スパートニクの恋人』」, 『国文学 解釈と教材の研究』 46-3, 学燈社. p.63
 村上春樹(1991) 『村上春樹全作品 1979~1989⑥』, 講談社. p.178-179, p.226-227
 村上春樹(2003) 『村上春樹全作品 1990~2000 ②』, 講談社. p.366
 村上春樹(2009) 『1Q84 BOOK1』, 新潮社. p.58-59
 村上春樹(2009) 『1Q84 BOOK 2』, 新潮社. p.33
 (인터뷰) 村上春樹(1999) 「物語はいつも自発的でなければならない」, 『広告批評』 231, マドラ, p.60
 吉田春生(1997) 『村上春樹、転換する』, 彩流社. p.10
 리리안·페더만(1996) 豊岡明美ほか編, 『レズビアンの歴史』, 筑摩書房. p.3
 渡部みえこ(2009) 『語り得ぬもの:村上春樹の女性表象』, お茶の水書房. p.85

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

〈記憶〉の反転

—田宮虎彦「異端の子」における戦後ナショナリズム—

黄益九*
younrok@hotmail.com

〈要旨〉

本稿は、田宮虎彦「異端の子」を取り上げ、占領末期における「共同体の記憶」の形成において、戦前・戦時中の国民国家の〈記憶〉が取り込まれていくプロセスを分析した。「異端の子」では、戦前・戦時中の国民国家の〈記憶〉が〈共同体〉の内なる〈他者〉を排除する原理としてその正当性を確保しつつ強化される様相が浮き彫りにされていた。このような〈記憶〉の保持と〈他者〉の排除が可能であった事情の背後には、冷戦構造の深化と、それともなうアメリカによる占領政策の方向転換が大きく作用していた。つまり、1950年6月、朝鮮戦争の勃発とともに加速化した冷戦構造のなかで、占領者側のアメリカは日本の国民国家の〈記憶〉の復活を黙認したのである。それゆえ、朝鮮戦争を契機に日本の「再軍備問題」は表面化し、1950年8月には警察予備隊が創設された。なお、警察予備隊は占領終結の年に保安隊へと変わり、さらなる軍備増強を行っていった。戦前・戦時中の国民国家の〈記憶〉は、〈冷戦〉という政治パラダイムの庇護のもとに消えることなく、むしろ喚起されていき、占領末期における「共同体の記憶」として社会に定着していったのである。「異端の子」は、このような占領末期の社会像を〈記憶〉のメカニズムというレンズを通してとらえたのである。

キーワード： 戦後占領期、冷戦、〈記憶〉、共同体、戦後ナショナリズム

1. はじめに

敗戦後、日本に対するGHQの占領政策は、軍国主義から民主主義へ、戦争から平和へとといった路線変更の側面からすれば一定の成果が得られたと評価できる。それに伴って日本は、「危険な」という修飾語から解放されて「安全な」国としての地位を獲得する転機を迎えたともいえる。なお、そのなかで「新日本建設」を求める戦後日本の欲望もGHQの占領政策と相俟って表面的には順調に成就していく様子を見せる。つまり、戦後占領期は占領イデオロギーを磁場としながら展開されただけに、GHQの占領政策と不可分の関係を呈する時代として位置づけられる。このような見地からすれば、占領政策の軌道修正は戦後日本の社会風潮にも大きな方向転換をもたらしたと察知できる。周知のように、GHQは1950年の朝鮮戦争を前後とする占領末期から「逆コース」といわれる占領政策の転換に踏み切る。そのことが日本社会にどのような影響をもたらしたのか、戦後占領史研究家の竹前栄治は「逆コース」について、1950年前後の「反共旋風」が大きく作用し、「流行語」として流布するほどの社会的現象であったと述べる¹⁾。流行語が一定の「共同性」を獲得する社会的現象であることを考えれば、「逆コース」となる政策転換が当時の人々にいかなる文化的

* 筑波大学 人文・文化学群比較文化学類 非常勤講師

1) 竹前栄治『GHQ』岩波書店、1983年、pp.200-201

な磁場を提供したのか、またいかなる文化的な要素に影響を与えたのかは注目に値する。

本稿は、それを全般にわたって再検証するのではなく、同時代の文学テキストを分析することに焦点をしばって占領末期における占領政策の軌道修正がもつ文化的な意味とその作用を考察する。とりわけ本稿が課題とするところは、当時の人々に共有された「逆コース」がいかなるプロセスによって「共同体の記憶」を構築していくのかという点である。この論点を提示したうえで、本稿は分析対象とする文学テキストとして、田宮虎彦「異端の子」(1952年)を取り上げる。「異端の子」は、占領末期における「排外的民族主義の復活の危機²⁾」、「ファッションの復活進行ぶり³⁾」を問題化したテキストとして同時代においては話題にのぼったものの、具体的なテキスト分析は行われないうまま、今日ではほとんど言及されることもなく、忘れられたかのようなテキストとなっている。しかし「異端の子」は、本稿で明らかにされるように、占領末期の「逆コース」が同時代の文化的要素と絡み合って形成する「共同体の記憶」の様相を見事に描き出すテキストなのである。

「異端の子」は、サンフランシスコ講和条約の発効まで後二ヶ月となる1952年2月、『中央公論』に発表された。シベリア帰りの父をもつ二人の姉弟が「西鷲村」という村落において「他処もの」として除け者にされるなかで、村を訪れる「元宮様」のために「道普請」に参加せず、「日の丸」の旗も立てなかったことから、村の子供たちに「赤の子」とレッテルをはられ、残酷なリンチを受けるという内容が描かれている。

田宮は、「異端の子」を発表した後、その内容の事実関係を疑問視する当時の読者のために「異端の子」について「人間の意志」ではなく、「別の大きな意志」に触発されて「非人間的な暴力」をふるう人間群像を描いたと語る⁴⁾。この解説には、日本の〈共同体〉が「現在おかれてゐる危機をみつめたい」という作者の現実認識、つまり占領末期の社会状況に対する危機感もうかがうことができる。

ところが、文芸評論家のはぎはら・とくじは、この田宮の解説にふれながら、社会主義的な立場から「人間的なものと非人間的なものとの矛盾しながら発展してゆく現実を否定的側面からのみとらえたということ」と把握することで「資本主義社会の一般的現実を意識しながらも日本の今日的現実を把握しえなかつたということ」を批判する⁵⁾。付け加えると、はぎはらは、田宮が「異端の子」において「人間の悲劇」という「否定的側面」だけで「現実」を捉えようとした点、「敗戦後の『民主主義革命』」が共同体に残る「封建遺習」を利用しながら「形式的・部分的」に行われたという認識の欠如が表われている点に不満を示す。つまりはぎはらは、「異端の子」を民主主義文学の視座から批判したものだといえる。このような批判は、後に「田宮の文学が現実の「否定的側面」を描くリアリズムであるということばで、もはや公式化⁶⁾」されていった。

2) 佐藤静夫「文芸時評 危機意識と知識人」『新日本文学』新日本文学会、第7巻3号、1952年3月、p.89

3) 野村喬「田宮虎彦について」『文学評論』理論社、第1号、1952年12月、p.24

4) 田宮虎彦「「異端の子」の意味」『中央公論』中央公論社、1952年4月号、pp.98-99

5) はぎはら・とくじ「田宮虎彦論」『新日本文学』新日本文学会、第7巻第6号、1952年6月、p.49

6) 小久保実「田宮虎彦論」『近代文学』近代文学社、第10巻第1号、1955年1月、p.31

しかし、知識人、とりわけ文学者には、現実社会に対して肯定的な期待を表明する以前に、現実社会の現状を見極める作業に取り組む必要があるとすれば、作者田宮が「異端の子」において「現実の「否定的側面」」だけを提示したことは、むしろ作者の現実社会に対するより鋭い眼差しが投影されていることの証ではなからうか。作者田宮は自己の見つめる村落の〈共同体〉に外部の社会主義理論を投影させようとはしなかったのである。

本稿は、このような視点から占領末期の社会状況が文化的要素と絡み合って形成する「共同体の記憶」の様相を究明すると同時に、占領末期における作者の現実認識を捉えなおすことも考察の範囲に入れる。

2. 悲劇の暗部—二つの〈戦争〉

「異端の子」の冒頭には、「鉄道の本線を遠くはなれている」へんぴな村の「西鷺村」、通称「鷺の岬」に「元宮様」が訪れて「秋色をさぐられた」ことを「人々はいいつたえた」と描かれている。なぜこのような書き出しが必要だったのかをまず理解する必要がある。

物語は、都会あるいは都会近郊を舞台とするのではなく、「鉄道」も通らないほどの遠隔の地を舞台と設定されている。なぜ、遠隔の村落なのか。鉄道などの近代文明とは縁遠い地方の村であるということは、その村落の〈共同体〉が中心の文化・政治・経済が浸透するには時間がかかる地域だという条件をもつことである。それだけ、伝統的因襲のなかに生きる自己閉鎖的な〈共同体〉ということになる。それゆえに、そのような村落に中心から「宮様」が訪れてきたということは語り伝えられる事件だったのである。しかも訪れたのも、天皇や宮様ではなく、物見遊山を目的とする「元宮様」であった。そして村の人々はこれを話題としたという。その事件がこの小説にとってどのような意味をもつのが問題となるのだが、その前に歴史的背景にふれておこう。

敗戦後、日本の華族制度は、1947年5月3日に施行される日本国憲法十四条において、「華族その他の貴族は、これをみとめない」という条項によって廃止となる。その後、同年10月の宮内府の「皇籍離脱」に対する告示によって多数の皇族が皇籍を離れることになる。1951年の晩秋に「鷺の岬」を訪れた「元宮様」も、おそらくその時に皇籍を失った一人である可能性が高い。このように考えた場合、注目すべきところは、「鷺の岬」の人々は皇籍を失った皇族であっても「元宮様」の訪問を大きな話題として捉えている点である。ここには長年にわたって日本の天皇制を支えてきた華族制度に対する「鷺の岬」の人々の封建的で時代錯誤的な姿勢が見受けられる。しかし、人々がみせるこのような態度は単に「鷺の岬」における特異な光景ではない。

敗戦翌年の1月に「人間宣言」を行った昭和天皇は、同年2月から1954年まで約9年間にわたって地方巡幸を実施した。天皇の地方巡幸は、巡幸先の熱烈な歓迎や奉迎のなかで行われたという。清水幾太郎は、1953年の論文で、天皇の地方巡幸に対する都市と地方との受け止め方の相違について指摘する。清水が注目したのは、巡幸を報じる新聞記事において、「中央で発行される

全国紙には極めて貧弱なスペースしか与えられていない」のに対して「巡幸が行われた地方の地方新聞となれば」「各地方とも、数日間に亙って全紙面を巡幸のために献げている」と述べる。また、「東京からの距離と、巡幸の際の警戒の嚴重さとは正比例する」と触れながら「上からの態度が変わらないだけではなく、地方の民衆の、下からの態度も変ってはいない」と論じる⁷⁾。清水の指摘からは、天皇を目の当たりにしたことによって掻き立てられる「地方の民衆」の「国体観念」は戦前と変わりなく温存されていることが読み取れる。

このような「地方の民衆」の感情は、中央や都市から遠く離れた「鷺の岬」の人々が「元宮様」の訪問を話題にする感情的な様相と通底する。つまり、小説の冒頭は都会と距離をおいた地方、伝統的因襲が色濃く保存されるとともに旧来の封建的な情感が温存されている地方の〈共同体〉が、あえて物語の舞台として設定されていることを示唆する。物語はその事件が村落共同体に派生させることはなかった二次的事件ともいべき内部の波紋をめぐって展開する。言い換えれば、「鷺の岬」という村落共同体が「いいつたえる」話題とは異なる話題、「元宮様のおなり」があった後の物語が展開されるのである。

小説は都会の東京から地方の「鷺の岬」へ移住して来た栗澤良一の一家が、地方に温存される「封建遺習」によって迫害される悲劇を描いている。時代とは隔絶されたかのような村落共同体に戦後的状況が突然入ってきたとき、内部の人間の精神がどのように揺さ振られるのか、そしてそれがどのような行動を起こさせ、悲劇を生むのか、作者は〈共同体〉と人間の関係に眼を注ぐ。良一の一家は父親の萬治が「満洲の関東軍につれて行かれていた」なかで、「敗戦の年の三月、東京の本所の空襲で焼け出されてから」、ここ「鷺の岬」の近くに疎開してきた。この内容からすれば、戦時中の良一の一家は、父親は戦場に召集され、残りの家族も戦争によって悲劇を受けるといふ戦時中の日本人家庭の典型として描かれている。特に、良一の一家は戦争が終わった後も、「戦争の不自由」による「栄養失調」で、良一の両脚が不自由になる悲劇にも見舞われる。良一の一家は、戦時中はもちろん〈戦後〉になっても、悲劇に曝されたのである。しかし、良一の一家を襲う悲劇はこれだけではない。

父親の萬治は、敗戦後の「二十三年の夏」にシベリアから復員する。しかし、父親は職場を求めて単身上京するものの、「何処も話がまとまりそうになつて、シベリヤ帰り」を理由に断られることになる。シベリアからの復員・引揚者に対する戦後社会の警戒心が採用を拒否する理由として作用したのである。1947年12月10日付の『朝日新聞』には、「在留邦人に赤化教育”反動”に帰国許さぬソ連」という小見出しの記事が確認できる。この記事は、主にシベリア抑留者がソ連で受ける「赤化教育」の内容や方法などを紹介しながら、戦後社会に警戒を促している。さらに、1948年6月28日付の『朝日新聞』にも、シベリアからの引揚者と復員兵が共産主義と関わっている様子を「共産主義者は最高率」、「共産党教育の影響歴然」、「教育された引揚者」などの小見出しの記事で報じながら、一般の人々に注意を喚起している。当然のことながら、GHQも同様に、警

7) 清水幾太郎「占領下の天皇」『思想』岩波書店、第348号、1953年6月、pp.636-637

戒対象として共産主義の動向に関心を強めていく。

当初、共産党と労働組合の活動を容認していたGHQは、次第にそれらの活動を「敵視」する姿勢をみせるようになり、後には禁止や弾圧の方針へ転換する。このような時代状況のなかで、父親の萬治に「西鷺村の小学校の教師に採用されるという話」が起こる。しかし、ここでも萬治は「シベリヤ帰り」を理由に不採用となる。この不採用の理由を同時代の文脈と照らし合わせながらより具体的に考察してみよう。

萬治が「教育辞令」を待っていた1949年4月に、日本政府は団体等規正令を公布した。団体等規正令の目的を確認してみると、

第一条 この政令は、平和主義及び民主主義の健全な育成発達を期するため、政治団体の内容を一般に公開し、秘密的、軍国主義的、極端な国家主義的、暴力主義的及び反民主主義的な団体の結成及び指導並びに団体及び個人のそのような行為を禁止することを目的とする⁸⁾。

となっている。団体等規正令は「反民主主義的な団体」を取締りの対象とすることを明確にするのが、占領末期の冷戦構造を考慮すれば、その主な対象が共産主義であることはいうまでもなく、時の政府は共産主義を「反民主主義」に位置づけたのだ。それにもかかわらず、結成・指導を禁止された団体が「占領軍に対して反抗し、若しくは反対し、又は日本国政府が連合国最高司令官の要求に基いて発した命令に対して反抗し、若しくは反対すること」（などをふくむ七つの項目）を行った場合、「団体の解散に伴う公職からの除去」を命じるとする強権発動を認める。さらに、団体等規正令が規定する各号のなかには、「公職の候補者を推薦し、又は支持する」際には規定による届け出の提出が義務づけられている。当然ながら、学校教育を担当する教員の採用にはこの団体等規正令が適用される。学校の現場における団体等規正令の適用については、次の証言を紹介したい。

県教委は“整理基準”を作って教育事務所に渡し、教育事務所は学校長に示して報告させ、選衡して県へ上げ、県で決定したという。〔中略〕〔しかし〕校長は調査選衡にかかわってはいない。では教育事務所だけでできるか。こんなスパイ調査が教育事務所のできるわけがない。考えられるのは、同年四月施行の団規令による届け出で、あるいは警察などのスパイ調査、ソ連帰還者の調査などが特審局へ上り、ここで赤色教員リストができたということである。それが極秘で県教委幹部にも示されたにちがいない⁹⁾。

物語のなかで、なぜ父親萬治の教員採用が拒否されたのか、その政治背景が理解できる。団体等規正令の学校の現場における適用は、極めて組織的な仕組みによって行われた。「赤色教員リスト」を作成するために団体等規正令による届け出はもちろん、警察の「スパイ調査、ソ連帰還者

8) 吉橋敏雄『団体等規正令解説』みのり書房、1951年、p.139

9) 平田哲夫『レッド・ページの史的探究』新日本出版社、2002年、p.35

の調査」までもが利用される徹底ぶりが語られている。「ソ連帰還者」すなわち「シベリヤ帰り」が「赤色教員」を弁別する基準であったことは注意深い。しかしそのことは国家の要請であるとともに、社会の要請であったことが、前掲の『朝日新聞』の記事からもうかがえる。「シベリヤ帰り」の萬治が教員に不採用となることは必然的であったといえる。そこからみえてくるものは、国家のみならず、社会の警戒心が「シベリヤ帰り＝共産主義者」という等式を定着させていったことである。それによってシベリアから復員する元兵士たちは、国や家族が育む共同性を崩壊させる集団、アメリカ的な民主主義の秩序をかき乱す存在として見なされるようになる。そうすると、次第にシベリアからの復員に対する「国民感情」も警戒と排斥を当然視する方向へと展開する。「シベリヤ帰り」を烙印されている萬治が様々な職場から拒否される背景にもシベリアからの復員に対する「国民感情」が大きく反映されていることはいうまでもない。

隔絶された〈共同体〉は〈他者〉の侵入に警戒心をもつものである。作者田宮は「シベリヤ帰り」の人物を入り込ませるといふシチュエーションを設定することで、日本全体では見えにくくなっている戦後占領期の時代状況を描き出している。封建的因襲・保守的地盤・占領期体制（民主主義）の是認。それに対して反体制的共産主義の浸透、そしてそれへの警戒心・敵意。その構造にはやがて保守的で反共的な国家ナショナリズムが再構築されていく時代状況の骨格が剥き出しにみえている。戦争という〈共同体〉の悲劇を共有してきた良一の一家が〈共同体〉の内部で新たな悲劇に直面する必然性はこの構造的背景にある。つまり、良一の一家をめぐる悲劇の暗部には、第二次世界大戦とともにもう一つの〈戦争〉、いうまでもなく、戦後占領期における〈冷戦〉パラダイムが伏在している。

3. 〈記憶〉と暴力の相関

普段から良一は、「他処ものを毛嫌いする」という「封建遺習」が根強く残っている西鷺村の子供たちから「他処ものであるということ」と「両脚が不自由であること」を理由に仲間はずれにされていた。この後者も身体不具をケガレとみなし、〈共同体〉から排除することで〈共同体〉を浄化しようとする、典型的な封建的因襲である。そのなか、「鷺の岬」に「元宮様」の訪問があつて以来、村の子供たちが学校のなかで良一と美津子の姉弟に悪辣きわまる制裁を加える事件が起る。しかしこの事件は、これまでの封建的因襲とは異なる論理によるものであつた。その経緯をたどっていこう。

机ごと教室の隅に押しつけられた良一は、クラスの子供たちから「やあい、あかの子」と怒鳴られながら暴行される。また、美津子も校内で村の子供たちに囲まれて残酷なリンチを受ける。村の子供たちは姉弟に暴行を加える理由として良一の一家が「元宮様」の訪問中に「日の丸」を立てなかったことを問題視する。そして、「日の丸」を立てるか否かを「日本人」であるかどうかという弁別材料として用いている。中心から遠く離れた小さな村落共同体であるからこそ、そこが「日本」だ

とする帰属意識は、中心から訪れた「元宮様」への敬意、すなわち「日の丸」を立てることを共有することで掻き立てられたのである。これは時代錯誤の臣民意識の残存といってもよい。天皇信仰によって喚起された「日の丸」に折り畳まれている国体意識を想起する行為から「日本人」というアイデンティティを確認しようとする。ここからは、「元宮様」が天皇家＝日本を表象するものとして、「日の丸」の旗を「国旗」と同定する帝国主義的ナショナリズムが読み取れる。これとは対照的に占領初期において「日の丸」の掲揚は、GHQの指令よりも、敗戦という事実を内面化した人々の自己規制によって自粛された側面が強い。したがって村の子供たちが「日の丸」から喚起される〈共同体〉の帰属意識とは、戦時中の帝国日本の「日の丸」に込められていた「臣民感情」と無縁ではない。村の子供たちは〈共同体〉が日本に帰属するという連帯のメタファーとして「日の丸」を意識している。しかし注意すべき点は、村の子供たちが意識している「日の丸」の位相は、戦前・戦時中を生きてきた大人の〈記憶〉を聞き伝えてきた伝聞という媒体によって再構築された帰属意識の表象だということである。

敗戦後、GHQと日本政府の間で、「敵」の旗と「国旗」というシンボル操作の相違によって、「日の丸」の使用問題をめぐる軋轢が生起する。しかし〈占領〉と〈被占領〉という権力構造において、「日の丸」使用問題はヘゲモニーの不均衡によってGHQの許可次第となる。そのなかで行われた「日の丸」掲揚に関するGHQの措置は、敗戦後の日本国民において「国民の祝日」と「日の丸」とを公的に結合させる契機を提供する。そのうえ、ナショナル・イメージの再構築による〈共同体〉の感情的な統括にも影響を及ぼす。

戦後占領期において「日の丸」がGHQの規制から全面解禁となるのは、1949年1月1日に公表されたマッカーサーの「年頭メッセージ」からである。マッカーサーは、「余はここに諸君にたいし諸君の国旗をふたたび国内において無制限に使用し、掲揚することを許可する」と語りかけながら「日の丸」が「日本国民」のナショナル・シンボルであることも容認する¹⁰⁾。「日の丸」掲揚が「無制限」となったことから「国旗」としての「日の丸」の位相はふたたび注目を浴びる。1950年2月27日付の『朝日新聞』には、同月15日と16日に実施した「日の丸」に関する全国世論調査の結果が発表されている。

『朝日新聞』は、「日の丸」の無制限掲揚が許されたにもかかわらず「街には祝祭日でも昔のような風景はみられない」と指摘しながら「国民の国旗に対する考えを知るため」に世論調査を実施したとその目的を記す¹¹⁾。しかし『朝日新聞』の世論調査や結果公表は、「国民」の「日の丸」への関心を調査してその現状を知らせる役割だけではなく、読者に「日の丸」掲揚を呼びかける機能をも果たしたと推察できる。つまり『朝日新聞』の全国世論調査は、「国民」に「国旗」としての「日の丸」の位相を再認識するように働きかける使命も併せ持ったものなのだといえる。

『朝日新聞』の世論調査の結果をこの小説における美津子の家に適用してみよう。美津子の家は、「空襲で家が焼かれた時、焼けてしまい」「日の丸の旗」を持っていないという。美津子の家

10) 田中伸尚『日の丸・君が代の戦後史』岩波書店、2000年、p.13

11) 「日の丸への関心 本社世論調査」『朝日新聞』朝日新聞社、1950年2月27日付。

は、世論調査の結果が示す「日の丸の国旗」を「持っていない 二七%」に属する。また、「持っていない」一番の理由である「戦災にあつて焼いてしまった」という回答にも見事に当てはまる。つまり美津子の家は、「日の丸の旗」を「持っていない」典型的な家として設定されている。このように考えると、美津子に向かって「日の丸」の有無を問い詰めようとする村の子供たちの行為は、世論調査のなかで「日の丸」を「持っていない 二七%」の人々に対する詰問行為に相当するとも解釈できる。

では、なぜ村の子供たちは「日の丸」の有無を問い詰める行為を行うのか、その背景を同時代の文脈から考察してみよう。この問題は、「日の丸」がもつ表象機能が再構築されていく同時代の〈記憶〉の場を確認する作業でもある。1950年4月29日付の『日本経済新聞』には、「国旗と国民の自覚」と題する社説が掲載されている。

戦時中は上からやいやいいわれたから掲げたが、終戦後はだれもやまかしくいわないから掲げないだけで、別に深い理由もない。だからもし戦時中の隣組みたいなところで国旗を掲げよといわれれば、また戸棚の中から引張り出して、あるいは新しく買って掲げる。おそらくはそうした人も少なくないであろうが、これは困ったことである。(中略) 祭日には国民こぞつて日の丸の旗を掲げ、日本国中をそれこそ太陽の光のごとく埋めつくして、世界中に向つて平和と中立の日本の存在を高らかに示すべきではないか¹²⁾。

二ヶ月前に『朝日新聞』が公表した全国世論調査の論調に比べれば、『日本経済新聞』の「社説」は、「国民」に対する失望と要望が露骨に表われている。ここで注目すべき点は、戦時中に「上から」あるいは「隣組みたいな」組織が「国民」に促した「日の丸」掲揚の〈記憶〉を用いる点である。ここには戦時中の〈記憶〉を想起させることで、再び「国民」に「日の丸」掲揚を催促しようとする文脈が読み取れる。つまり戦時中の〈記憶〉は、「日の丸」掲揚を呼びかける一つの材料とみなされていることがわかる。ただしその間には戦時中の「日の丸」が帝国主義の表象として、占領地に日本帝国の偉大さを表象させていたのに対して、〈戦後〉のこの時期の意識は「国民」のアイデンティティの自覚と誇りの回復を目指していたことが認められる。さらに、「世界中に向つて」「日本の存在を高らかに示す」という戦後ナショナリズムの再構築にもつなげようとする。注意すべきことは、そのナショナリズムには多義的な感情が絡んでいるということである。いうまでもなく、そこには復古的な国粋意識が潜んでいることを見逃すべきではない。

このような論調が現われるところは新聞メディアだけではない。子供たちに絶大な影響力を及ぼしたと思われる学校教育においても同様の主張が確認できる。1950年10月17日、当時の文部大臣天野貞祐は、各学校に「学校における「文化の日」その他国民の祝日の行事について」という談話を通達する。

明治天皇誕生の日を記念するために制定されたかつての「明治節」（11月3日）は、1948年に

12) 「社説 国旗と国民の自覚」『日本経済新聞』日本経済新聞社、1950年4月29日付。

「文化の日」として復活した。談話は、間近に「文化の日」を控えながら通達された。各学校において「国民の祝日」とともに様々な学校行事の時にも「国旗を掲揚し、国歌を斉唱する」ように指示が出されたのである。当然ながら学校教育における「日の丸」と「君が代」に対するナショナリズムの強化は十分に予想できる。後に、天野文部大臣は読売新聞社編集局次長の高木健夫とのインタビューのなかで、「小学生」に「自分が、この国民であつて、そうしてこの国というもののために自分が働くんだけ、というようなことをだんだんに教え込みたいのですね。何も理屈で教えるのじやなくて感覚的にそういう気持を持たせたいので、それには旗とか歌とかいうものはぜひ必要」であると述べる¹³⁾。つまり「国のために」奉仕できる「国民」の育成が学校教育の目的であり、その目的を達成するための装置として「日の丸」と「君が代」が動員されるということなのだが、それはまるで近代国民国家における「国家」と「国民」の関係を1950年代に再建したいという発想のようである。奉仕の理論が国家と結びつくとき、それ以外の奉仕は認められないという排除の論理が絡むようになる。それが戦前に国家を至上とする国粋主義の論理だったであろう。やはり、この政治的言説の文脈には排除の論理が潜められている。「鷲の岬」の子供たちがみせる言動には、この天野文部大臣の時代錯誤的な発想に潜む排除の論理が残存している様相が確認できる。

美津子にリンチを加えた村の子供たちは、美津子の家が「宮様がおいでになる前の道普請」に参加していなかったことを追及する。それが〈共同体〉への奉仕だというのは、〈共同体〉が「元宮様」に「日本人」のアイデンティティを認め、それへの帰属を確認することにつながるからである。したがって奉仕を拒否することは〈共同体〉からの排除を正当化する反共同体的行為なのである。この物語にあつて「元宮様」の訪問のために各家庭から「道普請」に出ることは、戦時中に盛んだった隣組の行動パターンを連想させる。

この場面で子供たちは、「宮様は、日本人の御本家だ」と叫ぶ。それが戦前・戦時中の国粋主義の反復であることはいうまでもない。戦前・戦時中において天皇家は「日本人」の起源（祖先）であると認識されている。この発想は、戦時中に天皇制国家の理念を「国民」に教化するために文部省が編纂した『国体の本義』の思想体系と通底する。美津子を責める場面で、村の子供たちは、『国体の本義』に従順な「皇民」と変わりはない。つまり彼らの姿は、「国家の繁栄に尽くすこと」、「天皇の御栄えに奉仕すること」、「天皇に忠を尽くし奉ること」を美德として信奉する「少国民」としての姿そのものである。

小説は、1950年代の時代状況が戦前の村落共同体に残存する国粋主義の復活だと告発している。作者田宮は占領末期の時代状況から「否定的側面」を見つめていたのである。「否定的側面」は閉鎖的な〈共同体〉の歪んだ共同規制が増幅するなかで過激化していく。村の子供たちの姉弟に対する迫害には、全校生徒たちも加わるようになる。生徒たちは美津子と良一に、「赤」や「赤の手先」と書いた紙と「下手くそな舌けた唇のあつい男の似顔に極悪人」と書いた紙を背中などに貼りつけて校庭をねりまわる。ここに貼りつけられた「男の似顔」は、1950年、レッド・ページ

13) 天野貞祐「君が代・日の丸・修身科—現代日本人の課題」『読売評論』読売新聞社、1951年1号、p.20

によって公職追放された日本共産党書記長の徳田球一を連想させる。生徒たちは美津子と良一の後について「君が代」、「軍艦マーチ」、「予科練の歌」、「愛国行進曲」などの歌を斉唱していく。生徒たちの行為からは素朴な論理として〈共同体〉に入り込んできた異端の「他所もの」を排除しようとする論理がはたらいている。しかしそこには時代状況としての反共的な態度とナショナリズムが結合する大人の論理が看取できる。「シベリヤ帰り」を「赤」と称し、当時の共産党書記長の徳田球一を連想させる似顔絵に「極悪人」と書く生徒たちの行為には、前述したとおり、冷戦イデオロギーに関わる同時代の反共的な「国民感情」が克明に投影されている。また、彼らが合唱する歌は、戦時中にナショナリズムを高揚させた効果と同様の機能をもたされたのである。このような行為が全校生徒によって行われたことは、物語の舞台となっている〈共同体〉が、たとえナショナリズムが抑圧的排他的暴力を行使したとしても、その対象が「敵」とみなす共産主義であれば、その行為を黙認するという共同体的機制を背景とする。このような黙認は、全校生徒たちの行為を目撃した校長や受持の教師たちが、職員室から「誰一人制止しようとするものも出て来なかつた」ことから見受けられる。ここには、占領末期のナショナリズムが反共思想と結びつき、その影響力を強化すると同時に正当性を確保していく当時の社会風潮が察知できる。

看過してはならないことは、戦時中の〈記憶〉が占領末期のナショナリズムを喚起する装置として機能することである。戦時中の〈記憶〉のなかから生徒たちが取り上げているのは、「日の丸」の旗と軍歌および軍国歌謡である。天野文部大臣が語る「旗とか歌とかいうものはぜひ必要」であるという主張を、隔絶された村落共同体に住む生徒たちが実践しているのである。もちろん生徒たちは天野文部大臣の教育方針を受け入れて、戦時中の〈記憶〉を想起したわけではない。同時代において戦時中の〈記憶〉を想起する場は学校教育の場以外にも存在する。生徒たちが戦時中の〈記憶〉を想起する場としては、同時代の社会的な風潮と結びついているメディア空間も大きく影響する。このような風潮は、「国歌」としての位相や存続をめぐる論争が繰り広げられた「君が代」についてはいうまでもないが、物語のなかで生徒たちが歌う「軍艦マーチ」においても同様のことが見受けられる。

明治時代に軍歌として誕生した「軍艦マーチ」は、第二次世界大戦中に陸海軍の行進曲として繰り返し演奏され、大衆の間にも親しまれた曲である。「軍艦マーチ」がメディア言説において再登場するのは占領末期である。評論家の新居格は「旧軍国主義的な反動傾向が社会現象となって現れて来つつある」と危惧しながら、「軍艦マーチ」のレコードを製作しようとする会社があることを例に挙げる。新居格は「再武装の制限がないにしても軍艦行進曲を複製しようとするこの心理的背景には危険なものがある」と指摘し¹⁴⁾、「軍艦マーチ」に絡みついている戦時中の〈記憶〉を再軍備の社会風潮と関連づけて批判する。また同時代の『朝日新聞』には、「声」欄や「天声人語」欄などで「軍艦マーチ」をめぐる論議が展開されている。その論議には、「軍艦マーチ」や「愛国行進曲」の復活が、戦時中の軍国主義にまつわる〈記憶〉の喚起につながることを懸念す

14) 新居格「軍艦マーチと教育」『教育技術』小学館、第6巻第7号、1951年9月、p.65

る視点が表われている。これらのメディア言説からすれば、戦時中の〈記憶〉をめぐる喚起の問題は同時代において争点の一つであったと推測できる。言い換えれば、占領末期のメディア言説において反共的イデオロギー浸透の脅威に圧迫されるかたちで、「軍艦マーチ」に代表される戦時中の国粋主義と結びついた、様々な〈記憶〉を復活させるように強制される。そのような状況が戦時中の〈記憶〉を喚起しようとする社会的風潮を促進させていった。そのプロセスにおいて、戦時中の〈記憶〉はナショナリズムと結合することが確認される。「軍艦マーチ」などを斉唱しながら〈他者〉である主人公たちに排他的暴力をふるう生徒たちの行為には、戦前の〈共同体〉のイデオロギーの無意識的な継承が認められる。そしてそれは占領末期の時代を象徴的に体現する行為であるといえよう。

4. 排除と〈記憶〉の変容

反共思想とナショナリズムの結合は占領末期の時代状況であるが、この小説はその状況を中心から隔絶された〈共同体〉の、それも子供たちの感情と行動のうちに縮約して表象している。その極端な現われが主人公の姉弟に加えられた生徒たちの暴力行為だが、その行為は学校の校長や受持の教師たちによって容認されて以降、より激化する。

前日、「日の丸」と「道普請」の問題を「日本人」という〈共同体〉のメンバーの弁別材料として用いた村の子供たちは、今度は美津子と良一を〈共同体〉の磁場から排除しようと威嚇する。彼らは共産主義を「売国党」と捉えて抹殺しようとする態度を取る。そのために美津子と良一は、村の子供たちから共産主義者と決めつけられて〈共同体〉の「敵」とみなされ、排除されようとする。村の子供たちが、まるで「敵」を鎮圧し勝利したかのように「軍艦マーチ」を合唱しながら行進するところにも排除の姿勢をみることができる。

ここに表われている問題は、〈日本人〉でありながら〈日本人〉ではない、〈国民〉でありながら〈国民〉ではない者を排除・疎外するという〈共同体〉の境界認識である。それを根拠に〈共同体〉における排除と包摂の政治学が暴力を媒介にして機能しているのである。美津子と良一は「他所もの」であり、かつ父親が「シベリヤ帰り」であるということだけで〈共同体〉の内なる〈他者〉として扱われ、それであるがゆえに〈日本人〉であるという帰属性をも憎悪されるほどに敵視される。この瞬間、村の子供たちがおそらく素朴に大人たちの言動に影響を受けてそのように振舞ったとすれば、〈共同体〉の成員は戦時中の〈記憶〉を想起したといえる。それは戦時中の国家体制を批判し、〈共同体〉の団結を攪乱するという理由から「非国民」と呼ばれた人々に加えた社会的迫害の〈記憶〉であろう。村の子供たちが美津子と良一に加えた迫害は、戦時中の「非国民」に対する社会的迫害の再生産にほかならない。社会と国家のシステムは戦時中に「非国民」が〈共同体〉によって排除されたプロセスを戦後占領期社会においても有効に機能させることを証明したのである。それは〈共同体〉の内なる〈他者〉を排除すれば、より「純粹」な〈共同体〉の構築が可能

となるという認識が、依然として力を発揮していたという事実である。注目したいのは、より「純粹」な〈共同体〉の構築のためには戦時中の〈記憶〉が喚起されるものの、帝国の外地であった植民地をめぐる〈記憶〉は除去あるいは隠蔽していったことである。

敗戦後、日本は、かつて「皇国臣民」であった植民地出身の人々を〈日本人〉の境界から追放する方針を実行する。1947年5月2日に公布された「外国人登録令」は、「台湾人のうち内務大臣の定めるもの及び朝鮮人は、この勅令の適用については、当分の間、これを外国人とみなす」と規定する¹⁵⁾。その結果、多くの植民地出身の人々が「外国人」として〈日本人〉の境界の外へと排除された。つまり「台湾人」および「朝鮮人」は、〈日本人〉という〈共同体〉の内なる〈他者〉として位置づけられて、再構築される〈共同体〉からは拒絶されたのである。この作業によって、日本における植民地出身の人々に対する保護問題は管理・統制問題へと転換される。こうして、戦後日本は、より「純粹」な〈共同体〉の構築にも着手できるようになった。敗戦後の日本社会における「台湾人」や「朝鮮人」に対する排除の論理は、大東亜共栄圏の建設を理想として掲げながらも、植民地では同化政策に従わせるか、排除するといった強制を行った戦前・戦時中の〈記憶〉を逆手に取った論理である。

より「純粹」な〈共同体〉の再構築を指向する日本の欲望は占領末期においても継続する。1947年4月7日、日本の国会では「非日活動委員会に関する件」について会議が行われた。会議録によると、両院法規委員会の委員である林百郎は、「日本の再建に重大な悪影響を及ぼすような諸行為を調査」し、「日本の民主主義的な機構を破壊するような行為があつた場合に、行政執行の面でそれを調査し適宜の処置をするために」「非日活動委員会」の設置が必要であると指摘する¹⁶⁾。

国会の場において「非日活動委員会」の設置問題が審議されるなか、メディア空間において「非日活動委員会」の設置問題を危惧する言説が現われる。文学者兼評論家の渡辺一夫は、「非日活動委員会」が設置された時の活動内容を見通しながら、その活動が持つ危険性を憂慮する¹⁷⁾。ここで渡辺は、「真の日本人」というものが「非国民」なるものを弁別して、追放または排除するという社会構図を察知している。そしてその構図から「戦前の一時期を、また戦争中のことを、思い出す」と記す。つまり渡辺は、「純粹」な〈共同体〉の構築を指向する「真の日本人」というものが「非国民」を弁別する、因襲的な〈共同体〉のメカニズムを看破したのである。さらに、そのメカニズムが戦前・戦時中の〈記憶〉から復活したことも示唆する。

村の子供たちが美津子と良一に加えた迫害には、戦前・戦時中の〈記憶〉から想起された排除のメカニズムが関与していることが確認できるとともに、逆に外部の時代状況として反共・排除の論理が、この小説にみられる因襲的な村落共同体の基層に秘められていることを、作者田宮は告発す

15) 「外国人登録令」『新版 外国人登録法逐条解説』日本加除出版、1988年、p.369

16) 国会会議録検索システム「非日活動委員会に関する件」『両院協議会・合同審査会等会議録』第005回、両院法規委員会、第2号、1949年4月7日

17) 渡辺一夫「「非国民」扱いについて」『日本評論』日本評論新社、第24巻第5号、1949年5月、p.36

る。その基層のうえに戦後のナショナリズムも醸成されていったとするならば、占領末期における排除のメカニズムは反共思想とナショナリズムによって正当性を確保し、強化されていく。

その様相は小説の結末部においてより明確に表われている。村の子供たちによるリンチ事件が警察にも知られて、「五十人近い小学生と、その父兄と、小学校の校長や教師たち」が警察署に任意出頭する。しかし、「大人たちは皆、そんな事件があつたことも知らなかつた」と供述する。そこには校庭でリンチ事件を目撃していた「小学校の校長や教師たち」も含まれている。さらに注目されるのは、実は警察も村の大人たちと同様に黙認の姿勢を示したことが直叙ではないが、語り手の暗示表現から見て取れる。語り手は「問題には、勿論、警察の手がのびた」と語りながら「知らなかつた」という大人たちの尋問結果を示す。「勿論」という言葉には、すでに警察の調査や尋問がどのような結論を出すのかはわかり切つたこととして、それに期待を寄せない語り手の姿勢が読み取れる。このような視座からすれば、美津子と良一に対するリンチ事件は、警察や教師たちを含む村の大人全員が加担する社会的黙認のなかで抹殺されてしまうことになる。このような解釈は物語の最後に登場する子供たちの描出によってより説得力を持つ。

「栗澤の家はシベリヤ帰りの赤で、宮様がおいでになつた時も道普請にも出なかつたし、日の丸の旗も出さなかつた悪い奴だから、そんな奴が村にいては、村がほろびると思つて、こらしめてやつた」と答えた。五十人近い生徒が、誰も別に悪いことをしたと思つてもいず、むしろ、正しいことをしたといつた誇りを頬にうかべて、にこにこ笑いながらそれを答えた。子供の言葉というよりは、誰か大人のいつた言葉をそのまま暗誦していつているような単調ないい方に聞こえた。もつとも、借りものの言葉をいうような単調ないい方は、表でだつた場所に出た時、四十、五十の大人でも言う場合がある。(p.394) 18)

子供たちのセリフは、戦前・戦時中に帝国日本が植民地や戦地の人々に向かって強弁した自衛の論理と不気味にも似通っている。注意したいのは、このような子供たちのセリフが、実は大人たちからの「借りものの言葉」であつたという点である。子供たちのリンチ事件の背後に大人たちの〈共同体〉の論理が隠されていることは、これまでも繰り返し確認してきた。重要なのは、その〈共同体〉の論理が、ナショナリズムによる暴力を正当な行為として認めてしまう基層をなしているという事実である。こうして子供たちは姉弟に対する暴力を「正しいことをしたといつた誇り」として捉える。

このような認識からすれば、日本が戦前・戦時中に植民地や戦地で行つた多大な暴力の〈記憶〉、加害の〈記憶〉も、ナショナリズムに従つたものとみなし、したがってそれをやむを得ない結果として簡単にすり替えることができる。言い換えれば、これは〈記憶〉の変容を助長する認識にはかならない。このような意味で、占領末期に復活するナショナリズムは、加害の〈記憶〉を自衛という自己正当化の〈記憶〉に転換させる欺瞞的態度の根拠となつたといえよう。

18) 田宮虎彦「異端の子」の引用は、『新選現代日本文学全集24』（筑摩書房、1960年）を底本とし、本文引用の際には底本の頁のみ記す。

5. おわりに

占領末期におけるナショナリズムと反共思想の結合については、同時代の知識人も指摘している。丸山真男は、「戦後ナショナリズムの漸次的勃興とその諸形態」を論じるなかで、「伝統的なナショナリズム」が反共思想と結びつく社会的な基盤について言及する¹⁹⁾。丸山は「天皇およびいわゆる「国体」に対するノスタルジア」、「国民生活に直接関係する交通機関、郵便、電気事業等の争議に対する一般市民や農民の反感」、「ソ連の引揚者抑留に対する憤懣」、「対ソ悪感情」などを主な基盤として提示する。具体的には、天皇に対する「親近感と憧憬がなお根強く残っている」地方、ソ連からの引揚者がみせる「敵前上陸」的態度への「国民感情」などを取り上げる。丸山は、「地方」や「村落」に残存する「伝統的なナショナリズム」を反共思想と結びつける占領末期の政治メカニズムを洞察したといえる。

あらためてまとめると、「異端の子」は、「西鷲村」という村落共同体が「赤」と決めつけた良一の一家を「伝統的なナショナリズム」によって迫害する小説である。このような見地からすれば、「異端の子」は、丸山のような同時代の知識人たちにおける社会的なまなざしが見事に具現化された小説といえる。言い換えれば、作者の同時代における先鋭的な現実認識が反映されているのである。

それに加えて、「異端の子」は、戦前・戦時中の〈記憶〉を想起するナショナリズムが新たな暴力を引き起こす社会様相を描出する。占領末期の時代状況が提供する〈記憶〉の場は、小説において社会的な暴力を触発する契機・動機として作用する。そして社会的な暴力は、〈共同体〉の境界をつける排除と包摂のメカニズムを媒介にしながら〈共同体〉の内なる〈他者〉に向けられる。

「異端の子」は、〈共同体〉の内なる〈他者〉を排除して、より「純粹」な〈共同体〉の構築を欲望する占領末期の日本を表象する。「異端の子」が描き出す占領末期の日本の風景とは、「国民」を再定義する日本、「他者のいない日本²⁰⁾」である。注意したいのは、これらの日本の風景がナショナリズムによって容認され、なおかつ正当性を確保しながら支持されたことである。そしてその正当性と支持の下で、戦争をめぐる〈記憶〉、植民地をめぐる〈記憶〉も変容の可能性を与えられたのである。

田宮虎彦の文学において「悲劇的緊張」が「危機の感覚」として機能すると論じる小久保実²¹⁾は、田宮虎彦における〈記憶〉の問題に触れながら「田宮虎彦にとつての記憶は」、「過去の再認識としての機能をもっている」と述べる²¹⁾。小久保実にならっていえば、「異端の子」は、姉弟の周辺を取り巻く「悲劇的緊張」が占領末期のナショナリズムに対する「危機の感覚」、つまり〈現在〉の批判的な再認識を呼びかけたといえる。いうまでもなく、「異端の子」における〈現在〉の再認識は「過去の再認識」を要請する。ここに田宮の〈記憶〉は機能する。「異端の子」は、田宮の〈記憶〉が加害の〈記憶〉を監視する小説である。

19) 丸山真男「戦後日本のナショナリズムの一般的考察」日本太平洋問題調査会編『アジアの民族主義』岩波書店、1951年12月（引用は、『丸山真男集 第五巻』（岩波書店、1995年）pp.113-114）

20) 道場親信『占領と平和 〈戦後〉という経験』青土社、2005年、pp.24-26

21) 小久保実「田宮虎彦論」『近代文学』近代文学社、第10巻第1号、1955年1月、pp.35-37

◀ 参考文献 ▶

- 小熊英二(2002) 『〈民主〉と〈愛国〉 戦後ナショナリズムと公共性』新曜社
 姜尚中(2006) 『反ナショナリズム』教育史料出版会
 久保義三(2006) 『新版 昭和教育史 天皇制と教育の史的展開』東信堂
 坂本孝治(1988) 『象徴天皇がやって来る 戦後巡行・国民体育大会・護国神社』平凡社
 清水幾太郎(1953.6) 「占領下の天皇」 『思想』岩波書店、第348号、pp.636-637
 竹前栄治(1983) 『G H Q』岩波書店
 田中伸尚(2000) 『日の丸・君が代の戦後史』岩波書店
 西川祐子編(2006) 『歴史の描き方2 戦後という地政学』東京大学出版会、pp.3-43
 平田哲夫(2002) 『レッド・パーズの史的的研究』新日本出版社
 丸山真男(2005) 『丸山真男集 第五巻』岩波書店
 道場新信(2005) 『占領と平和 〈戦後〉という経験』青土社
 山崎行雄(1991) 『田宮虎彦論』オリジン出版センター
 吉田裕(2004) 『日本の時代史26 戦後改革と逆コース』吉川弘文館
 吉橋敏雄(1951) 『団体等規正令解説』みのり書房、p.139

- 투 고 : 2010. 5. 31.
 ■ 심 사 : 2010. 6. 12.
 ■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

芭蕉の俳諧世界に影響した莊子の「物」に関する考察

許 坤*
heokon@kangwon.ac.kr

<要 旨>

「物」は芭蕉と莊子とのかかわりに關して論じる時、先ず欠かせない大事な言葉の中の一つである。勿論、芭蕉と莊子の文章の中にも例外なく様々な形で登場している。しかし本稿で注目したいのは、「物」がもつ多くの意味の中で、ふだんはあまり使わない「物」の特別な意味を芭蕉と莊子は彼らの文章の中で大事な意味をもたせて用いているところである。

莊子において「物」は汎神論的に考えられ、造化の作用が、人間の意識にとらえられるように現象化したものが「物」である。「物」は、それ故單なる物質、物体だけを指すのではなくて、人間の意識、心情を含めた物的精神的なあらゆる存在するものをさし、そしてあらゆる存在するものを存在せしめている宇宙の物体的生命の現象的顯現であるとみられる。芭蕉の俳諧世界での「物」は、より美しいうたを求めようとする詩人の魂と、新しい詩の境地を求めている詩人の心と意識世界などをあらわしている。芭蕉の作品からうかがえる「物」は、大変特徴ある存在であるといわざるを得ない。これは自然という環境にかこまれながら歩み切った芭蕉の旅の人生こそ彼の新しい俳諧の世界を求める求道者のような心境を現實化する實踐への過程であったといえる。

『莊子』の「物」は、人間の精神的世界と意識、心情、魂などをあらわしており、芭蕉の「物」は、人間の内面世界に於ける精神世界、より究極的なうたの世界を求める詩人の魂、詩心などを意味している。このような「物」の意味を芭蕉がはっきり定立するまでには、禪の影響や伝統的な日本文学からの影響、そして芭蕉が当時から心酔していた『莊子』からも甚大な影響があったことは揺るがない事實であるといえるであろう。

キーワード： 莊子、芭蕉、俳諧、物、思想、自然、紀行

1. 序 論

一般的に「物」とは、他のどの言葉よりも多くの意味をもっており、また様々な形で用いられている。勿論莊子の文章の中にも例外なく様々な形で登場している。しかし本稿で注目したいところは、「物」がもつ多くの意味の中で、ふだんはあまり使わない「物」の特別な意味を莊子は彼の文章の中で大事な意味をもたせて用いているところである。莊子の思想のなかで大事な役割をしている「物」の特別な意味について調べるために、本稿では、先ず中國で用いられている「物」の一般的意味から調べなければならない。そして「物」が實際、莊子の文章の中でどのような形で用いられているのかを調べ、更に莊子の思想世界に於ける「物」の役割はどのようなものであったのかを調べていきたい。そして芭蕉の俳諧に現れている「物」と莊子の「物」とのかかわりに關しても照明していきたい。

「物」は芭蕉と莊子とのかかわりに關して論じる時、先ず欠かせない大事な言葉の中の一つである。勿論芭蕉と莊子の文章の中にも例外なく様々な形で登場している。しかし本稿で注目したいの

* 강원대학교 교수, 일본근세문학

は、「物」がもつ多くの意味の中でふだんはあまり使わない「物」の特別な意味を芭蕉と莊子は彼らの文章の中で大事な意味をもたせて用いているところである。そして「物」が實際二人の文章の中でどのような形で用いられているのかを調べ、更に二人のかかわりに於ける「物」の役割はどのようなものであったのかを考察する。

2. 近世の『莊子』の受容

芭蕉が活動していた近世の日本での『莊子』の受容は、当初より排斥される批判があったにもかかわらず、近世以前も廣く讀まれたが、日本文学への影響は、『文選』・『白氏文集』に遙かに及ばず、『論孟』・『五経』・『史記』・『蒙求』に比較しても大なりとはいわれない。しかし、近世に入ってから空前の盛行を見、日本文学に畫期的な影響を与えることとなった。先ず、林希逸注『虞齋口義』十卷が慶長活字本として上梓され、以後日本人に最も親しまれたテキストとなった。次いで万治年間には成玄英の『註疏』三十卷が刊行せられ、寛文・延宝・天和・元祿・正徳・享保・明和と相次いで印行をみた。その種類も『三註大全』・『鉄』・『仕諺鉄』・『因』の他、素本・カナ付本など十余種に及び、かつ『口義』・『註疏』・『三註大全』などは、それぞれ十數回にわたって出ている。その他、寛永年間（一六二四—一六四四）に刊行された『莊子虞齋口義』が版を重ねたが、『南華眞經注疏解経』（万治四年刊）や明の焦端の『莊子翼』（承応二年刊）も和刻された。江戸期半葉に至って、服部南郭が元文四年に郭象注を公刊し、千葉芸閣も天明三年に同じ本を点して出刊しており、この本によって『莊子』に接する機会を持つ人が多くなった。江戸後期には、秦浪が清の林雲銘の『莊子因』に補義して寛政九年に刊行し、この本で行われるようになった。注釋書としては、著者未詳の『莊子口義抄』（寛文十年刊）・人見林塘の『莊子口義棧航』（延宝九年跋）などが早く出たが、最も行われたのは、毛利貞齋の『莊子口義大成仕諺鉄』（元祿十六年）である。後には、五井蘭洲の『莊子郭注紀聞』（寫本）・巖井文の『莊子南華眞經集註』（文政八年序）などもある。『近世漢学者著述目錄大成』には、『莊子』の関係書籍として『莊子考』・『莊子獨了』・『莊子獨斷』・『莊子文評』・『莊子弁疑』・『莊子集覽』・『莊子譯說』などが記録されている。また『徳川時代出版社 出版物集覽續編』¹⁾には『莊子口義愚解二卷』宝曆十二年・『莊子因卷三・五・六』寛政九年・『莊子翼』承応二年・『莊子虞齋口義一〇卷』寛文五年などがみえる。『享保以後江戸出版書目』²⁾には『莊子』元文四年・『莊子口義愚解』宝曆十二年・『郭註莊子訓点』天明三年・『莊子繪抄』天明四年・『莊子周』寛政八年・『莊子小字解』寛政四年・『莊子答』文化四年などがある。その他、注目を引く『莊子』関係の書である宮内庁書陵部の『和漢図書分類目錄』³⁾では、江戸時代に朝鮮から伝えられた莊子関係書がみられ、同時代徳川

1) 矢島玄亮(1976)『徳川時代出版社 出版物集覽續編』萬葉堂書店

2) 朝倉治彦、大和博幸(1993)『享保以後江戸出版書目新訂版』臨川書店

幕府が中國以外にも朝鮮と数多くの文化的交流があったことがうかがえる。その本とは『南華經註解刻補』・『句解南華眞經』・『南華眞經』などがある。『内各文庫漢籍分類目録』⁴⁾にもいくつかの朝鮮からの『莊子』關係書が輸入された跡がみられるのである。

以上の調べのように、近世に於ける『莊子』の盛況ぶりは『論語』・『孟子』などの『四書』に次ぐ勢いであり、その流行のほどが知られるのである。そしてこれが文学史上畫期的影響を与えたのは俳文学であった。そして芭蕉にとって莊子との出會いは、芭蕉の文学に大きな轉換点となったといえよう。芭蕉が貞門、談林調の俳諧を脱皮して、新しい俳風を作り出すまでには、西行・鴨長明・宗祇のような先人たちと、『万葉集』・『古今和歌集』・『源氏物語』・『方丈記』・『徒然草』といった日本の古典を始めとし、『史記』・『白氏文集』・『唐詩選』・『江湖風月集』・『莊子』のごとき中国の漢詩文などの影響を受けたが、そのなかでも欠く事の出来ない役割の一端を成したのが、『莊子』である。特に『莊子』からの影響の中でもっとも大きかったのは、思想関係であったといえよう。自然を中心とする莊子の思想は、芭蕉に今まで自分を覆っていた虚飾と形式を脱ぎ捨て、芭蕉の自分の本然の姿に戻るようにしたのである。つまり、芭蕉は今までの自分の生活から抜け出すために旅の道を選んで長い道のりを歩み出したのであり、そこから始まった芭蕉の新しい人生は、すべてが新しい経験の連続であったのであり、そのような環境は芭蕉の俳諧にも変化をもたらしたのである。

3. 中國語と日本語に於ける「物」の意味

3.1 中國語に於ける「物」の意味

中國語の「物」の意味を調べるために、いくつかの辭典で「物」の名詞的用法に限って調べた。先ず『中國語大辭典』⁵⁾では、①すべて天地間に生ずるもの②こと③類④相る⑤牲畜の毛色⑥形色を覘ふ⑦識・記號⑧旗の名などであるとしている。そして『熊野中國語大辭典』⁶⁾では、①物、物体②事③内容・實質④物色する。うかがう。うかがい見る⑤記号、しるし⑥（電信略号として）5日などの意味があるなどと説明している。『現代中國語辭典』⁷⁾では、①万物、動物、貨物、商品、具体的な内容②我以外の人あるいは環境、多くの人、衆望を歸するところ、人と交際する。世に處するなどの意味があるとしている。

以上の中國の辭典による「物」は、大抵はその意味が似通っているが、辭典によっては少しずつ意味が異なっているところもみられる。以下では、このような「物」の意味を、莊子の作品を中心

3) 『和漢図書分類目録』(1952)宮内廳書陵部

4) 『内閣文庫漢籍分類目録』(1956)内閣文庫

5) 『中國語大辭典』(1974)國書刊行會

6) 『熊野中國語大辭典』(1985)三省堂印刷株式會社

7) 『現代中國語辭典』(1982)光生館

として調べ、莊子の「物」の使い方と作品での意味、そして特別な意味での「物」の使い方などについて論じる。

3.2 日本に於ける「物」の意味

日本語の「物」の意味をいくつかの辞典で「物」の名詞的用法に限って調べてみると、先ず『廣辭苑』⁸⁾には、「物」が名詞として使われる場合は、形のある物体をはじめとし、廣く人間が感じる対象、また対象を直接指さず漠然と一般的に捉えて表現するのに用いるとしている。その例をみると、①物体、物品②それとあからさまに言わず、対象を漠然と表す。特に、佛、神、鬼、魂など忌んで、避けていう語、妖怪、邪神、物のけ③物事④世間一般の事柄、普通の物⑤言語、言葉⑥飲食物、おももの⑦着物、衣服⑧楽器⑨特に取り立てて言うべきこと、物の數⑩前後の関係で、言わなくてもわかる物事を漠然と表す語などと説明している。『日本國語大辭典』⁹⁾では、1)なんらかの形をそなえた物体一般をいうとしていて、その例としては、①形のある物体、物品を指している。②特定の物体、物品を一般化している。例えば、財物、金錢、衣類、飲食物、楽器など③対象をあからさまにいうことをはばかって抽象化している。例えば、神佛、妖怪、病傷、男女の陰部など④民法上の有物体、2) 個々の具体物から離れて抽象化された事柄、概念をいう。①事物、事柄②漠然と限定した事柄③概念化された場所を表す④ことば、言語⑤考え、3) 抽象化した漠然とした事柄を、ある価値観を伴ってさし示す。①一般的、平均的なもの②大事、大変なこと、問題などの意味があるなどと説明している。『新大字典』¹⁰⁾では、①しな、道具②ものごと、こと、ことから③世間、世事④毛色⑤たぐい、種類⑥ひとがら⑦しるし⑧財⑨鬼神などとしている。

以上の『廣辭苑』と『日本國語大辭典』と『新大字典』の三冊の調べでは、一般的な場合の「物」があらわす意味は、大抵似通っている。以下では、このような「物」の意味を芭蕉の作品を中心として調べ、より具体的に芭蕉の「物」の使い方と作品での意味、そして特別な意味での「物」の使い方について論じる。

4. 莊子に於ける「物」の意味

『莊子』の「物」の意味とその用例を整理してみると次のようである。

①人間を含む、宇宙に存在するすべてのものと万物を意味する用例として用いる場合で、『莊子』の中ではもっとも多い例である。

物固有所然 物固有所可 無物不然 無物不可 - 物は固より然る所有り。物は固より可なる

8) 『廣辭苑』(1955)岩波書店

9) 『日本國語大辭典』(1976)小学館

10) 『新大字典』(1993)講談社

所有り。物として然らざるは無く、物として可ならざるは無し。

(「齊物論」 『莊子』 p163、訓讀文も含める、1966年、明治書院、以下同書)

凡物無成與毀 - 凡そ物は成ると毀ると無く 「齊物論」 p164

子知物之所同是乎 - 子、物の同じく是とする所を知るか、と。 「齊物論」 p175

命物之化 而守其宗也 - 物の化を命として、其の宗を守る、と。 「徳充符」 p227

物視其所一 而不見其所喪 - 物は其の一なる所を視て、其の喪ふ所を見ず。
「徳充符」 p228

順物自然而無容私焉 - 物の自然に順ひて私を容るる無くんば 「應帝王」 p282

逆物之情 - 物の情に逆はば 「在有」 p356

物物者之非物也 - 物を物とする者の物に非ざるや 「在有」 p359

忘乎物 忘乎天 其名爲忘己 忘己之人 是之謂入於天-物を忘れ、天を忘るるは、其の名を己を忘ると爲す。己を忘るる人は、是を之れ天に入ると謂ふ、と。 「天地」 p379

物無貴賤 以物觀之 自貴而相賤 - 物に貴賤無し。物を以て之を觀れば、自ら貴しとして相賤しむ。 「秋水」 p468

以本爲精 以物爲粗 - 本を以て精と爲し、物を以て粗と爲し 「天下」 p815

物方生方死 - 物方に生ずれば方に死す。 「天下」 p820

②形ある物体を始めとして、廣く人間が感知しうる對象を意味する用例である。

自三代以下者 天下莫不以物易其性矣 - 三代より以下なる者、天下は物を以て其の性を易へざる莫し。 「駢拇」 p314

不以物易己也 - 物を以て己に易へざるなり。 「徐無鬼」 p647

③自己の認識から獨立した客觀的世界、すなわち外界に存在する個物を意味する用例である。

與物委蛇 而同其波 - 物と委蛇して、其の波を同じくす。 「庚桑楚」 p611

縱脫無行 而非天下之大聖 椎拍輓斷 與物宛轉 - 縱脫行無くして、而して天下の大聖を非り、椎拍輓斷、物と與に宛轉し。 「天下」 p813

④「物」の特殊な意味で、物我一如の中のもので物と我は同じものであり、それは哲学的な自我、主体性を持ったものを意味する用例である。

有以爲未始有物者 至矣 盡矣 不可以加矣 其次以爲有物矣而未始有封也 - 以て未だ始めより物有らずと爲す者有り。至れり、盡くせり。以て加ふ可からず。其の次は以て物有れども未だ始めより封有らずと爲す。 「齊物論」 p166

ここで注目すべき言葉は、「未始有物」という言葉であるが、簡単に説明すると、「昔から物がなかった」という意味である。つまり、物の存在を全く意識しない立場をいうが、それとともに自己の存在も意識せず、すべて自然の境地に一致した状態を意味している。

匠石歸 櫟社見夢曰 女將惡乎比予哉 若將比予於文木邪 夫相梨橘柚果蓏之屬 實熟則剝 剝則辱 大枝折 小枝泄 此以其能苦其生者也 故不終其天年 而中道夭 自掊擊於世俗者也 物莫不若是 且予求無所可用久矣 幾死 乃今得之爲予大用 使予也而有用 且得有此大也邪 且也若與予皆物也 奈何哉其相物也 而幾死之散人 又惡知散木 - 匠石歸る。櫟社夢に見れて曰く、女將惡にか予を比する。若將予を文木に比するや。夫の相梨橘柚果蓏の屬、實熟せば則ち剝せらる。剝せらるれば則ち辱らる。大枝は折られ、小枝は泄かる。此れ其の能を以て其の生を苦しむ者なり。故に其の天年を終へずして、中道に夭す。自ら世俗に掊擊せらるる者なり。物是の若くならざるは莫し。且つ予用ふ可き所無きを求むること久し。幾んど死せんとせしも、乃ち今之を得て予が大用と爲す。予をして用有らしめば、且つ此の大有るを得んや。且つ若と予と皆物なり。奈何ぞ其れ相物とせん。而うして幾んど死せし散人、又惡んぞ散木を知らん、と。 「人間世」 pp217~218

この上の文は、無用の用といった話である。木が役に立つとか立たぬとかいうのは、人間の方からの言い分で、木にとっては有り難い迷惑な話に違いない。むしろ無用の方が有り難いというかも知れない。無用ならば伐り倒される心配もなく、痛めつけられる恐れもない。自然のままに育ち、長壽を全うすることが出来るのだ。莊子は櫟社と匠石の會話のうちに、この事情を語っていく。あまりにも人間中心的な考え方に對する批判である。莊子のこのような思想は、自然對人間の關係から、人間對人

間の関係に発展する。莊子が楚王の招聘を拒絶した話が「秋水」篇にみえている。濮水で釣を樂しんでいる莊子のところに楚王の使者がやってくる。莊子を宰相として迎えようというのである。莊子は神龜（占いに用いる龜）を例にその話を斷る。神龜はたしかに貴いし、大切にされる。しかし、尾を泥中に引きずる龜と比較したとき、どちらが自由で、どちらが楽しいか。むしろ、位はなくとも、自分の生活を樂しめる方が、有意義だという。莊子は顯官に就くことは、それだけ自由が束縛されると考えたのであろう。有用なことを外に出さず、それを無用として内に留めておくのが莊子の望みであった。それを一步押し進めれば、徹底した無用こそ、かえって外から力を加えられることなく、天壽を全うし、自己の生涯を樂しむことが出来ることになる。匠石と斲社の話はまさにこれであらう。

④の用例の「物」の意味は『莊子』の獨特の「物」である。今井文男氏は、『芭蕉における『莊子』の思想の影響についての論考』で、『莊子』の例文、

有以爲未始有物者 至矣 盡矣 不可以加矣 其次以爲有物矣而未始有封也 - 以て未だ始めより物有らずと爲す者有り。至れり、盡くせり。以て加ふ可からず。其の次は以て物有れども未だ始めより封有らずと爲す。 「齊物論」 p166

は、『老子』第二十五章¹¹⁾、

有物混成 先天地生 寂兮寥兮 獨立而不改 周行而不殆 可以爲天下母 吾不知其名 字之曰道 強爲之名曰大 - 物有り混成し、天地に先だつて生ず。寂たり寥たり、獨立して改まらず、周行して、殆らず、以て天下の母と爲す可し。吾、其の名を知らず。之に字して道と曰ひ、強ひて之が名を爲して大と曰ふ。 「象元」 p52

からの影響であると説明している。この例文の「物」は老莊の獨特の「物」であるといえるであろう。「齊物論」の例文の意味は「昔の人の知恵には相当なところまで行ったものがある。それほど程度の所に行ったのであろう。物など全くないと考へ人がいたが、それなど全くもって十分で、それに付け加えることは出来ない。その次の人は、物があるにしても、區別などないと考へている。」と解釋出来る。ここでの「物」は、前述の「人間世」の例文と同じく人間の精神的世界と人間の意識、心情、魂などを意味しているものである。これは物質、物体などの人間が認識出来る世間一般の物事を指す「物」とは、明確に區別出来る。

5. 芭蕉に於ける「物」の意味

芭蕉と莊子のかかわりについては、序章で言及したように既に先学が御指摘されているところであ

11) 『老子』 「象元」(1977)明治書院

り、堀信夫・仁枝忠・廣田二郎・今榮藏・上野洋三氏らの他、多くの先学により諸説が提示されている。それらによれば、芭蕉にとって莊子との出會いは、芭蕉の文学に大きな轉換点となったといえよう。それに関して今榮藏先生は、「『幻住庵記』の原初期草案とその意義一付・竹冷文庫藏寫本『芭蕉翁手鑑』の資料価値一」¹²⁾で、芭蕉と『莊子』の関係について次のように述べている。「もうひとつこの草案で強く目を引くのは『莊子』の影の濃さである。もちろん既存の初稿以後の『幻住庵記』にも『莊子』齊物論の「影と罔兩」の話が出ていて、よく知られるところだったが、この草案に現れるのはそんな小さな影だけではなかった。ここには草案の座右に「南花眞經一部ヲ置」き、「伏ては夢裏の胡てふとなる事あたはず、遽々然とせめては莊子をよみてかうべをかくのみ」といった、日ごろ『莊子』とまともに向き合って暮らす庵住中の芭蕉の姿が、なまなまい形で現れている。」今先生がここで元祿三、四年においての芭蕉と『莊子』との関係を明らかにするために資料として用いた『幻住庵記』は、芭蕉の俳諧世界を知るにおいて欠かせない大事な資料である。

奥の細道の行脚を終えた芭蕉は、元祿三年四月、近江國石山の奥國分山にある幻住庵に入り、同年八月の中頃まで滞在した。記はその折の記念として書かれたもので、幻住庵の由來、入庵に至る來歴から筆を起し、庵の眺望、日々の生活などを細々と語り、最後に自分の人生觀や處生の態度を述べて結びとしている。中でも芭蕉が迷い苦しんだ半生を回顧して、「終に無能無才にして此一筋につながる」と俳諧の道に執する己の心事を吐露している所は有名で、『笈の小文』の冒頭の文とともに、芭蕉の生き方を最もよくあらわしている。文章は去來宛芭蕉書簡によって窺えるように、『猿蓑』に載せるため、弟子たちの批評をも受け入れて推敲苦心を重ねたもので、芭蕉俳文中の白眉である。

さらに今先生は、芭蕉と『莊子』とのかかわりに関して上述した論文で、「もちろん『莊子』は反俗的人生詩人の道をゆく芭蕉の生きざまを決定した最高の「人生の書」であったから、作品にも、日常の生活次元にかかわる書簡にも、しばしば濃淡の影を落としてきているが、幻住庵時代の芭蕉はいつもより殊に『莊子』を思い沁めることが深かったようである。幻住庵入庵直後に訪ねてくれた怒誰への四月十日付の礼状には「芳情、精神不滯不恥不恐、大道自然之對談、誠に不安事共に御座候。君や蝶我や莊子の夢心」と書き、また庵の所有者曲水宛の六月三十日付書簡には、「爰元、山の閑涼、西南にむしろしかせ、猿の腰かけに月を嘯、椎の木陰に嗒焉吹虚の氣を養ひ、無何有の心の樂」とあって、世俗を超越した環境の中ですっかり『莊子』の境地にひたっていたさまをうかがわせる。(中略)言葉は間接的ながら『莊子』の處世訓がそのままにじみ出ている。この草案の先ほどの文言も『莊子』と向き合って暮らす、そんな自分の姿の一端を事實に即して書いたものと思われ、むき出しの芭蕉を物語る料として興味ぶかいものがある。しかし芭蕉は初稿へと轉ずる過程でわずかに「影と罔兩」の話しを残すにとどめて、そのむき出しの自分の方は削り捨ててしまった。そのことをこの草案ははじめて物語ってくれたのである。」などと、芭蕉の俳諧人

12) 今榮藏(1986、3)「『幻住庵記』の原初期草案とその意義一付・竹冷文庫藏寫本『芭蕉翁手鑑』の資料価値一」(『中央大学紀要』)

生の精神世界に至るまで大きな影響を及ぼした『莊子』に関して述べており、また草案に記されている記事などをもって草庵での芭蕉の日常生活を中心に『莊子』との影響関係などを次のように述べている。「問題は『莊子』である。先にもふれたが、初稿以下在來の諸稿にはただ「影と罔兩」の話が顔をのぞかせるだけである。この程度ならば芭蕉の文によくあることで、さして珍しく注目されるほどのことでもなかった。ところが草案の方にはまず前出の「南北眞經一部ヲ置」くという生々しい記事があった。それはわずか十字にもみたくない文字ながら、庵住中の乏しい所持品の中にも“人生の書”『莊子』を離さず携えていたこの時期の芭蕉の精神生活を如實に浮き彫りする、刮目すべき新事実だったが、「胡蝶の夢」の故事—これは文面には現れない幻住庵を意識してのことであろうが—を借りて無何有の境地に至りえない自分を嘆きながら、又しても「莊子をよみて、かうべをかくのみ」というこの段の一文は、毎日『莊子』と向き合っただけで暮らす芭蕉の心事を伝えて、いっそうリアリティに富んでいる。初稿以後ヴェールに包まれてしまった芭蕉の、そんなナマの姿を再現してみせる草案の出現は、やはり意義深いものとしなくてはならないであろう。（中略）芭蕉はその風雅論で『莊子』の言葉と心とを色濃く打ち出した。いまさらいうまでもないことだが、冒頭「百骸九竅」は『莊子』齊物論の語であり、「無能無芸」はすでに貞享四年の「蓑蟲説跋」に芭蕉自身「其無能不才を感じることはふたたび南花の心を見よとなり」と説いたように、単なる謙辞ではなく、芭蕉にとっては『莊子』の心そのものであった。「是非胸中にたゞかふて」という「是非」の世界にあくせくすることもまた『莊子』の強く戒めるところであり、芭蕉自身現実に乙州宛書簡に用いていた言葉でもある。中でも後段「造化にしたがひて四時を友とす」「造化にしたがひ、造化にかへれ」は莊子思想の眞骨頂をそのまま打ち出したものだった。

芭蕉がこのとき、さまざまな煩悶と屈折の多かったわが前半生をふりかえりつつ、無能無芸にして唯一おのれの業となってしまった俳諧の芸術の理想を述べようとして、これほどまでに『莊子』の影を濃くせざるをえなかったのは、もちろん平生から人生の書としてこれに親しんでいたこともさることながら、殊には幻住庵滞在期間中「南花眞經一部」を座右に置き、毎日『莊子』にどっぷりと漬かって暮らしていた形跡を示すあの精神生活の、直接の反映であったことを、ここで改めて再認識する必要があるのである。なお先に言い洩らしたが、芭蕉は幻住庵退去の翌二十四日、庵の世話人だった怒誰（高橋喜兵衛）宛の書簡に、「老仙南花、此かたまぎれ候間、形見に御所持可（被）置」と書き送っている。この「老仙南花」がすなわち「幻住庵記」草案に見える芭蕉所持の「南花眞經」そのものだったろうことにも留意しておきたい。」などと述べ、今先生は芭蕉の日常の生活をはじめ、俳諧世界に至るまで芭蕉と『莊子』とのかかわりは、決して軽く見過ごせるほどのものではないと明確に主張している。

芭蕉の作品の中では、どのような意味で「物」が用いられているのかを『芭蕉語彙』¹³⁾を資料にして、その用例を意味別に整理してみると、1) 人の五官によって感知し得べき有形、無形の存在の總称、2) 飲食物、3) こと・事がら、4) 世間一般の物事、5) ことば、言語、6) 或る

13) 宇田零雨(1984)『芭蕉語彙』青土社

所、又ものごと、7) わけ、ゆえ、8) その次にある動詞その他の語によって、或る特殊の物と知り得る事物を指す語、9) ある物事をおぼろげにさしていふ語、10) 怨靈・邪鬼、もののけなどで分類出来る。

芭蕉の作品で用いている「物」の中で、本稿で取り扱おうとしている用例は次のふたつの文章である。

百骸九竅の中に物有。かりに名付て風羅坊といふ。誠にうすものゝかぜに破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好こと久し。終に生涯のはかりごとゝなす。ある時は倦で放擲せん事をおもひ、ある時はすゝむで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたゝかふて、是が爲に身安からず。『笈の小文』¹⁴⁾

春立てる霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず、もゝ引の破をつゞり笠の緒付けかえて、三里に灸すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて、住める方は人に譲り杉風が別墅に移るに、『おくのほそ道』¹⁵⁾

先ず「百骸九竅の中に物有かりに名付て風羅坊といふ。」の中の「百骸九竅」は、人間の体にある百の骨節、九つの竅で、要するに人間の体を意味するもので、出典は『莊子』の「齊物論」の次の文章によるものである。

百骸・九竅・六藏 賅而存焉 吾誰與爲親 - 百骸・九竅・六藏 賅はりて存す。吾誰と親しみ爲さん。『齊物論』 p157

廣田二郎氏¹⁶⁾は、この例文は『莊子』とともに禪とも関係していると指摘されている。これは『禪林類聚』第十三「遷化」の部に「清涼欽禪師。僧問、『百骸俱潰散、一物鎖長靈。未審百骸一物、相去多少。』師云、『百骸一物、一物百骸』があり、欽禪師の垂永から『笈の小文』の語句に影響しており、『禪林類聚』での「一物」とは、精神、生命という意味であると主張している。

『笈の小文』の同じ例文の中の「物有」は前述の『莊子』の「齊物論」の、

有以爲未始有物者 至矣 盡矣 不可以加矣 其次以爲有物矣而未始有封也 - 以て未だ始めより物有らずと爲す者有り。至れり、盡くせり。以て加ふ可からず。其の次は以て物有れども未だ始めより封有らずと爲す。『齊物論』 p166

14) 『日本古典文学大系』(1959)「芭蕉文集」岩波書店

15) 注14)と同じ

16) 廣田二郎(1938)『芭蕉の芸術 その展開と背景』有精堂出版株式会社

からの影響である。ここで「物」とは、前述したように、人間の魂、精神などを意味しており、より具体的には、芭蕉の旅に於ける造化随順の實踐への道を求める彼の詩心ともいえるのであり、上野洋三氏¹⁷⁾は「このモノは、別な語でいえば「詩心」「言語表現を求める魂」となるか。後半部では、そのモノが、實は歴史上のすぐれた芸術家の魂にとりついたものと同じではないかといひ、さらに、そのモノのみちびくまにまに、心身ともになげうって、天地自然の根底に参入するところに、眞實の人間らしい生き方がある、と説く。いかにも理想的な、調子の高いものであるが、ひとつの芸術家宣言として畫期的な文章である。」と述べているし、『笈の小文』の中からみられる「物」は、芭蕉の俳諧世界を理解するにあたって、欠くことの出来ない大変重要な意味を有する言葉であるといわざるを得ない。

6. 結論

莊子において「物」は汎神論的に考えられ、造化の作用が、人間の意識にとらえられるように現象化したものが「物」である。「物」は、それ故、單なる物質、物体だけを指すのではなくて、人間の意識、心情を含めた物的精神的なあらゆる存在するものをさし、そしてあらゆる存在するものを存在せしめている宇宙の物的生命の現象的顯現であるとみられる。

芭蕉は、「物」の意味を決して従來の「物」の意味ににとどめ、それに安住して現實のなかでうたを楽しもうとしたのではなく、たとえ新しい挑戦そのものが平坦な將來が保証されていない道であるとしても、造化の道をやまなく求める詩人のうたに對する限りない欲求によって、より明白で具体化した形の詩心のあらわしとしての「物」の意味を一層深めて、造化随順の實踐への道を求める彼の詩心として昇華させ、芭蕉の俳文学の価値を眞の意味での文学としてより高めることに大きく寄与したもう一つの象徴的な言葉として用いたところにあるといわざるを得ない。芭蕉の俳諧世界での「物」は、より美しいうたを求めようとする詩人の魂と新しい詩の境地を求めている詩人の心と意識世界などをあらわしている。芭蕉の作品からうかがえる「物」は、大変特徴ある存在であるといわざるを得ない。これは自然という環境にかこまれながら歩み切った芭蕉の旅の人生こそ彼の新しい俳諧の世界を求める求道者のような心境を現實化する實踐への過程であつたいえるのであろう。またその旅に於ける造化實踐へと彼をうながし續けてやまない「物」は、造化随順の實踐への道を求める彼の詩心の具体化された形だったのであり、また「風羅坊」が俳号として最初にかつ特に目立って用いられたことは、芭蕉の文学における「物」の大事さがどのぐらいであつたのかをうかがわせるとても大事な証拠でもあるといえるのである。

『莊子』の「物」は、人間の精神的世界と意識、心情、魂などをあらわしており、芭蕉の「物」は、人間の内面世界に於ける精神世界、より究極的なうたの世界を求める詩人の魂、詩心などを意味している。このような「物」の意味を芭蕉がはっきり定立するまでには、禪の影響や伝統

17) 芭蕉講座編集部(1985)『芭蕉講座 第五卷 俳文・紀行文・日記の鑑賞』有精堂

的な日本文学からの影響、そして芭蕉が当時かなり心酔していた『莊子』からも甚大な影響があったことは揺るがない事実であつたであろう。

◀ 参考文献 ▶

- 赤羽学(1969)『芭蕉俳諧の精神』清水弘文堂書房
 麻生磯次(1976)『若き芭蕉』新潮社
 井本農一(1968)『芭蕉の世界』小峯書店
 井本農一(1980)『芭蕉の本 漂泊の魂』角川書店
 上野洋三(1985)『芭蕉講座 俳文・紀行文・日記の鑑賞』有精堂
 穎原退蔵(1944)『芭蕉講座 發句篇(上)』三省堂
 穎原退蔵(1944)『芭蕉講座 發句篇(中)』三省堂
 穎原退蔵(1948)『芭蕉講座 發句篇(下)』三省堂
 穎原退蔵(1951)『芭蕉講座 連句篇(上)』三省堂
 尾形功(1980)『芭蕉の本 蕉風山脈』角川書店
 尾形功(1980)『芭蕉の本 風雅のまこと』角川書店
 荻野清(1948)『芭蕉講座 書簡篇』三省堂
 角川源義(1969)『芭蕉の本4 発想と表現』角川書店
 角川源義(1980)『芭蕉の本 発想と表現』角川書店
 栗山理一(1963)『俳諧史』塙書房
 小宮豊隆(1933)『芭蕉講座 解釋と鑑賞篇』創元社
 小宮豊隆(1943)『芭蕉講座 俳論篇』三省堂
 小宮豊隆(1948)『芭蕉講座 紀行文篇』三省堂
 小宮豊隆(1955)『芭蕉講座 本質篇』創元社
 小宮豊隆(1955)『芭蕉講座 伝記篇』創元社
 小宮豊隆(1956)『芭蕉講座 研究篇』創元社
 今榮藏(1953)「談林俳諧覺書一 寓言説の源流と文学史的實態一」『國語國文研究』
 杉浦正一郎(1951)『芭蕉講座 連句篇(下)』三省堂
 杉浦正一郎(1951)『芭蕉講座 俳文篇』三省堂
 『芭蕉研究』岩波書店
 須藤松雄(1982)『芭蕉の自然』明治書院
 田中善信(1998)『芭蕉の二つの顔』講談社
 中村幸彦(1980)『芭蕉の本 作家の基盤』角川書店
 中村正市(1983)『芭蕉の離別の俳句に関する一考察(一)―『おくのほそ道』を中心として―』尚綱大学研究紀要
 永野仁(1983)『芭蕉講座 發句・連句の鑑賞』有精堂
 仁枝忠(1972)『芭蕉に影響した漢詩文』教育出版センター
 廣末保(1967)『芭蕉 その旅と俳諧』日本放送出版協会
 廣末保(1982)『芭蕉講座 生涯と門弟』有精堂
 広田二郎(1968)『芭蕉の芸術 その展開と背景』有精堂
 広田二郎(1980)『芭蕉の本 詩人の生涯』角川書店
 広田二郎(1983)『芭蕉講座 文学の周辺』有精堂
 堀切実(1998)『芭蕉の音風景』べりかん社
 『芭蕉の笑い、一茶の笑い』『国文学 解釈と鑑賞』
 松尾靖秋(1982)『芭蕉講座 表現』有精堂
 松尾靖秋(1985)『近世文学論攷 研究と資料』桜楓社
 村松友次(1977)『芭蕉の作品と伝記の研究』笠間書院
 宮西一積(1973)『芭蕉の文学』桜楓
 山本健吉(1980)『芭蕉の本 歌仙の世界』角川書店

에도후기 메이쇼에(名所繪)에 담긴 종교적 표상의 의미

— 히로시게 명소에도백경 —

김애경*
ssls1223@hanmail.net

<ABSTRACT>

Considering the contents and characteristic of amusement culture reflected in the MeishoEdoHyakkei published in the latter period of Edo, this article analyzed 'Meisho-e', a genre of the Ukiyo-e, in the view of visual medium which had been produced and consumed within certain social context. and the actual meaning and function of the works are interpreted in new way. As a result of consideration, the motif and objective of city commoner's enjoyment in the latter period of Edo are closely related to the religion, and the forms of the enjoyment fall into two large category which are 'Symbol of worship', 'Shouzinake(精進明け) after worship'. From this conclusion, Meisho Edo Hyakkei is construed to have performed the essential role in a person's religious life who couldn't participate in the worship travel, not only by helping them experience 'virtual experiences of worship' and 'the joy and sorrow of the characters in the picture as if they were themselves', but also by being 'Meisho-e' genre.

Key words : Hiroshige, Ukiyo-e, Meisho-e, MeishoEdoHyakkei, Religious culture, worship, Shouzinake

1. 들어가기

일본의 에도시대(1603-1867)는 세계적으로도 'Pax Tokugawana'¹⁾라 평가받을 만큼 보기 드문 장기적 평화와 안정을 구가하며 과거 귀족들에게만 제한되어 있던 지식과 물자, 여가 활동들이 대중화 되었던 시대이다. 특히 에도 후기의 사회문화 현상은 종교와 관련된 독특한 행락문화가 서민층을 중심으로 활발하게 전개 되었는데 에도의 시각매체였던 우키요에(浮世繪)에는 이러한 변화의 특징이 잘 나타나 있다.

초기 우키요에의 주제는 통상적으로 유명한 고급 유녀(遊女), 가부키(歌舞伎) 배우와 연극의 유명한 장면, 도색적인 내용 등이었으나 에도 후기에 이르러 도시민의 '행락풍경'을 주제로 한 「메이쇼에(名所繪)」 장르가 급속히 대두되었다. 특히 막말(幕末)에 출판된 당대의 대표적인 「메이쇼에」 작품집이었던 우타카와 히로시게(歌川広重, 1797-1858)의 『명소에도백경(名所江戸百景)』(이하 『명소백경』)은 에도 서민의 일상생활에 기인한 에도(현 동경)의 행락풍경이 중심축을 이루고 있다. 작품집 제목의 '명소'는 기존의 '명소'²⁾라

* 한양대학교 대학원 일본언어문화학과 박사과정

1) 오다 노부나가(織田信長)에서 시작되어 도요토미 히데요시(豊臣秀吉)로 이어지던 전국 통일 전쟁은 도쿠가와 이에야스(徳川家康: 1543-1616)에 의해 1615년에 완성된다. 이때부터 지속된 도쿠가와 쇼군가(徳川將軍家)가 확립한 바쿠후 통치제도는 1868년 명치유신 전까지 265년간 지속되었으며 이 시기는 일본 역사상 가장 안정적이고 평화로운 시기로 평가된다.

는 단어의 의미와 다른 의미인 ‘유명한 장소’ 또는 ‘참배 장소’로 해석되며, 총 118점 중에서 종교관련 행락 모티브가 전반을 차지하고 있다. 이 사실은 작품의 실질적인 의미 파악에 있어서 간과할 수 없는 중요한 사실인 것이다.

그렇다면 에도 후기 행락과 종교는 서민에게 있어서 도대체 어떠한 의미가 있었던 것일까? 또 행락과 종교를 묘사한 『명소백경』은 사회나 문화 형성에 있어서 어떤 기능을 짊어지고 있었던 것일까?

『명소백경』이 제작된 시기(1856-1858)는 신불습합(神仏習合)과 이세참궁(伊勢參宮)처럼 에도 초기부터 이어져 내려오던 종교적 관례는 물론 이미지와 상상을 통한 새로운 신앙 관례들이 극대화되어 있었다. 그렇지만 최근까지의 연구에서 『명소백경』은 단순히 「메이쇼에」로서 인식되어져 『명소백경』 자체가 지닌 의미나 기능에는 주목하지 않았다. 또한 작품을 당대의 종교 문화와 관련지어 이해하려는 시도가 그다지 없었기 때문에 실질적인 의미와 기능을 파악하는 데에는 어려움이 있다. 본고에서는 당대의 종교문화를 바탕으로 『명소백경』에 담긴 행락의 내용과 특징을 고찰하여 실질적인 작품의 의미와 기능을 새롭게 해석하고자 한다.

본고에서 주목하는 히로시게 『명소백경』은 유럽의 인상파 화가들에게 영향을 끼쳤으며 유럽에서 자포니즘(Japonism)의 진앙지가 된 「우키요에 메이쇼에」 판화집으로 화첩에 수록된 전 작품 120점(1점은 목차, 1점은 2대 히로시게 낙관)이 뉴욕의 부르클린 미술관(Brooklyn Museum)에 소장되어 있다. 이 작품집에 관한 선행 연구는 매우 중층적으로 미술사, 풍속사, 도시사, 매스미디어론을 비롯하여 자연과학 분야인 도시 경관론에 이르기까지 다양하다. 그러므로 『명소백경』을 단순히 예술 작품으로서 인정하기 어려운 부분이 있으나 오히려 이러한 점이 작품집에 대한 다양한 해석을 가능하게 하는 점이라 할 수 있다.

본고는 우키요에 장르 중에서 ‘메이쇼에’ 장르에 속하는 『명소백경』을 일정한 사회적 문맥 안에서 생산 소비되어졌던 대중매체의 관점에서 바라보고 에도후기에 일본을 방문한 외국인들의 기록도 중요한 단서로 활용하여, 실질적인 작품의 의미와 기능을 고찰하고자 한다. 그러나 우키요에 판화가 사회 기능적인 역할을 하였던 대중매체이었음을 입증하는 내용은 구체적으로 다루지 않고, 그러한 내용을 입증한 선행연구³⁾의 전제하에 『명소백경』 중심으로 심층적 고찰을 시도할 것이다. 고찰의 공간적 범위는 우키요에가 주로 흥행하였던 에도지역이고, 시간적 범위는 『명소백경』이 출판된 시점인 명치유신 10년 이전, 즉 급격한 사회상의 변화를 겪게 되는 에도후기이다.

2) 「名所」とは歌に詠まれた景勝や古跡など、名高い場所をいう(浅野秀剛, 『広重 名所江戸百景-秘蔵 岩崎コレクション-』、2007: 195)。

3) 高橋克彦(1992) 『江戸のニューメディア: 浮世絵情報と広告と遊び』、角川書店。

木下直之、吉見俊哉(1999) 『ニュースの誕生: かわら版と新聞錦絵の情報世界』、東京大学総合研究博物館。

加藤光男(2000) 「浮世絵を読み直すー江戸っ子のマスメディア」 『埼玉県立歴史資料館研究記要22号』。

2. 에도후기 행락과 종교

2-1. 행락의 개념

행락이란 용어의 정의는 여가(余暇, leisure), 오락(娛樂, recreation), 놀이(play), 위락(慰樂, entertainment), 관광(觀光, tourism)등 행락과 관련된 용어와 관련지어 그 개념을 이해 할 수 있다. 이 중에서 여가는 숙박에서 벗어나는 자유 시간, 시간 요소가 필수적으로 개제되고, 일이라든가 직장, 고용, 생존의 필수적 활동에서 벗어나서 개인의 자유의사에 의해서 처분가능 한 시간을 의미한다.⁴⁾ 그러므로 여가는 활동을 전개하는 시간적인 개념으로 해석하여 비교적 포괄적인 개념으로 사용될 수 있고, 또 활동 그 자체의 행위에서 오는 심적 태도나 정신 상태를 말하는 의식개념으로도 사용될 수 있다.⁵⁾ 그러나 브라이트빌⁶⁾ 과 슈미겔⁷⁾의 연구를 인용하여 정리하면 여가의 개념은 사회적 경제적 배경과 깊은 관계를 가지면서 변화하고 있는 만큼 항상 일정한 것은 아니며, 특히 민족, 국가, 사회계층, 종교, 문화, 국민성 등에 따라 여가의 개념이 달라질 수 있다.⁸⁾ 반면 놀이(play)는 인간의 심리적 측면에서의 본능적 행위로 여가나 행락의 가장 기본적인 ‘인간적’기준에서의 행위로 이해되고, 위락(慰樂, entertainment)은 상업화된 행락 활동과 시설 및 프로그램을 총칭한다.⁹⁾ 이와 같은 해석에서 행락과 관련된 각각의 용어들은 상호 깊은 연관성을 가지고 있기는 하나 종속적인 포함관계를 가진다고 말하기 어렵다. 그러므로 행락의 개념은 그 형태에 따라 여러 요소로 이루어져 있으나 단독 요소만으로도 개념이 성립되는 경우와 몇 개의 요소가 조합되어 표출되는 형태임을 알 수 있다.

한편 행락(行樂)의 일본 사전적 의미는 ‘郊外などに出て楽しみ遊ぶこと(교외 등에 나가서 즐겁게 노는 것)’(일본, 現代國語例解辭典, 1990), 이고 한국 사전적 의미는 ‘잘 놀고 즐겁게 지냄’(훈 국어사전, 1998)이다. 「行樂」에 대한 일본 용례문의 경우 ‘계절 음식을 맛볼 수 있는 곳에 가서 즐기며 지낸다’는 내용이 있으나 한국의 국어사전 「행락」에는 나타나 있지 않아 우리말에 적합한 어휘를 찾아보기가 어렵다.¹⁰⁾ 그러므로 ‘행락(行樂)’이란 한자 어휘는 한·일 문화적 배경의 차이로 인하여 각각의 언어가 내포하는 의미 영역에서 미묘하게 차이를 보이는 동형 한자 어휘¹¹⁾이나 ‘즐거움’이라는 의미가 공통적으로 내포되어 있

4) 황기원(2009) 『한국행락문화의 변천과정』, 서울대학교 규장각한국학연구원 한국학 연구총서 32, p.9-10.

5) 전계서

6) 서로 문화를 달리하는 데에서는 여가의 뜻도 다르다, 특정의 계급, 민족, 종교단체등의 행위에 대한 가치 규범 문화적 경향에 관련된 문제영역을 벗어나서 생각 하더라도 여기는 이 외에도 많은 뜻이 있기 때문에 정의 내리기 어렵다 (Brightbill, Charles K., 1960:3)

7) 여가가 어떻게 이용되는가는 시대에 따라 계급과 직업에 따라 국민성이나 종교에 따라 달라질 수 있다. 그리고 여가가 어떻게 이용되느냐에 따라 여가의 정의도 달라진다(Smigel, E. O., 1963:11)

8) 김오중(1994) 『여가의 개념에 대하여』, 한국여가 레크레이션학회지, 한국 여가 레크레이션학회, p.4.

9) 황기원(2009) 『한국행락문화의 변천과정』, 전계서, p.10.

10) 정일영(2004) 『日·韓 翻譯時, 誤譯을 초래하는 漢字語彙에 관한 考察 - 日·韓 漢字語彙의 意味·用法을 중심으로-』, 日本文化學報 第 8號, 한국일본문화학회, p.146.

는 ‘형태(行態)’이다.

2-2. 에도후기 행락문화 형성의 배경

2-2-1. 제도적 기반

일반적으로 한 시대에 ‘대표로 삼을 만큼 상징적인 행락문화’가 존재하여 국민들이 그 문화를 향수하려면 ①교통의 발달과 ②화폐문화의 형성이라는 기본 조건이 필요하다.

①은 도요토미 히데요시가 다이묘들의 통제 수단으로 사용한 산킨코타이(參勤交代)¹²⁾제도로 인하여 전국적인 교통망이 확충되었다.¹³⁾ 도쿠가와 이에야스는 에도 막부 설립 전에 5대 도로를 정비하고¹⁴⁾, 전국시대부터 있었던 ‘덴마(伝馬) 제도’¹⁵⁾를 강화하였으므로 사실상 행락과 관련된 교통과 숙박의 기본 조건은 대부분 에도 초기에 충족되었다고 할 수 있다. ②의 화폐문화의 형성은 막부 경제를 유지하는 세금 정책인 고쿠타카(石高)제도의 시행으로 ①과 밀접하게 관련되어 사실상의 형태를 완성하였다. 이 제도는 모든 가치를 쌀로 환산하여 세금을 거두는 세금 정책이지만, 쌀은 부피가 많이 나가서 그 가치를 돈으로 바꾸어 모든 거래를 하게 되었고, 그 결과 일상생활 전반에 화폐의 사용이 본격화되어 대금업자, 환전상인(兩替商) 등 화폐와 관련된 금융기관의 발달과 그에 상응하는 화폐문화가 급속히 형성되었다. 결과적으로 도쿠가와 막부가 정권을 세우고 이에 대한 도전을 원천적으로 봉쇄하는 수단으로 시행한 제도들은 사회 인프라 구축에 긍정적인 효과를 가져와 행락문화 형성을 위한 제도적 기반이 마련되었다.

2-2-2. 개장과 종교참배 붐

이상과 같이 교통의 발달과 화폐문화의 형성이라는 사회 인프라가 구축 되자 에도와 지방을 연결하는 전국적 규모의 인적 교류와 물질 유통이 활발하게 전개 되었다.¹⁶⁾ 결국 이것은 농공상인의 부의 축적을 용이하게 하였고 사농공상(士農工商)의 엄격한 신분제 사회에서 그들은 경제적인 축적을 소비로 전환하여 그들만의 독특한 행락문화에 관심을 갖기 시작하였다. 그러나 ‘행락 문화’란 말이 아직 익숙지 않았던 시대, 대표적인 서민 행락의 관행적 시초는 이세신궁(伊勢神宮) 참배단에 대한 기록과 개장 기록¹⁷⁾에서 찾을 수 있고,

11) 전계서.

12) 도요토미 히데요시가 센고쿠 다이묘의 처자들을 인질로 잡아 오사카 성, 주라쿠 다이, 후시미 성에 살게 한 것을 계승, 보완한 것으로 1635년 법 제정 당시 이미 다이묘들의 통제수단으로 관례화되어 있었다.

13) 豊田 武·兒玉幸多 編(1970), 體系日本史叢書 24, 『交通史』, 山川出版社, p.105-140.

14) 도카이도(東海道), 나카센도(中山道), 고슈가도(甲州街道), 오슈가도(奥州街道), 닛코가도(日光街道) .

15) 일정한 거리를 두고 24시간 운영하는 ‘슈쿠바(宿場: 에도시대의 역참) 을 설치하고, 공문을 전달하는 관리와 군량미를 운반하는 군대가 휴식을 취하거나 밤을 묵고, 또 말을 바꿀 수 있도록 하는 제도.

16) 豊田 武·兒玉幸多 編(1970), 상계서:134-40.

17) 근세 에도에서 개최되었던 개장의 전반을 알 수 있는 자료에는 막부의 공식기록인 『開帳差免帳』 『開帳願差免留』, 齋藤月峯 『武江年表』 가 있다(허남린, 2008:90)

일본에서 ‘명소(名所)’를 찾아가는 순례 행위가 관광의 효시이기도 하였다는 연구¹⁸⁾도 있다. 에도 막부는 종교를 철저히 정부 통제 하에 두었다고 하나 서민의 종교적 행위인 개장(開帳)과 종교 참배에는 비교적 관대하였음을 알 수 있는 대목이다. 이 중에서 개장은 특정일에 주자(廚子)의 문을 열어 그 속의 비불(秘仏)을 일반인에게 공개하여 참배를 허용하는 독특한 종교문화이다. 개장의 이유는 여러 종교적, 정치적 설명이 따르지만 사원의 ‘경제적 연료 공급원의 확보’ 차원에서 개최되는 경우가 많았다. 즉 사원은 개장과 더불어 연극, 춤, 보물, 전시회, 고세키(講席:일종의 만담)등의 오락 기회를 제공하고 찻집 음식점 등의 개점을 허락하는 등 사람들을 끌 수 있는 것이라면 어느 것이던 적극적으로 조치하였다.¹⁹⁾ 개장은 주로 이개장(居開帳), 출개장(出開帳), 순행개장(巡行開帳)으로 나누어 주기적으로 행하여 졌으나, 에도후기에 이르면 개장에 대해 국가의 공권력이 개입하여 특별 개장이라는 명목으로 개장의 허가가 빈번해지고 이로 인해 에도는 개장 행사가 없는 날이 하루도 없을 정도로 개장으로 지고 새는 도시가 되었다.²⁰⁾ 이와같은 개장의 범람은 종교 참배 붐의 열기와 맞물려 새로운 행락문화 형성의 원천이 되었다.

에도시대 외국인으로 네덜란드 상관(商館)의 의사였던 캠펠(1651-1716)은 그의 여행기에 서 종교 참배와 관련된 행락 붐을 다음과 같이 서술하고 있다.

이 나라의 가도에는 매일 믿을 수 없을 정도로 사람들이 모여들어, 두 세 절기 동안은 주민이 많은 유럽 도시들의 거리와 흡사할 정도로 거리에 사람들이 넘쳐난다. 나는 일곱 개의 가도 중 가장 중요한 도카이도(東海道)를 네 번이나 왕래한 체험으로 이것을 입증 할 수 있다. 사람이 넘쳐나는 이유 중 하나는 이 나라의 인구가 많다는 것이고 또 다른 하나는 다른 나라 국민들과 달리 이들은 상당히 자주 여행을 한다는데 있다.²¹⁾ 참배여행은 1년 내내 이루어지고 있으나 특히 봄에 많이 집중되어 있으며 이때 썸 되면 가도는 오로지 참배여행을 하는 사람들로 가득 차게 된다.²²⁾

위와 같은 참배 붐은 외국인의 눈에 기이하게 보여 졌을 것이다. 봉건체제하에서 서민들의 여행은 인정되지 않았고, 여성과 농민의 여행은 더욱 엄격히 통제되었으나 종교참배의 경우는 여행이 공인 되었다. 특히 이세신궁 참배여행은 17세기 이래 약 60년을 주기로 하여 반복적으로 발생하면서²³⁾ 18세기 이후 1705년, 1718년, 1723년, 1771년, 1830년에 걸쳐 수백만 명의 대규모 참배로 이어졌다. ²⁴⁾ 종교참배는 합법적인 수단 외에 비합법적 수단인

18) 김양주(1997), 『일본관광명소와 자원의 변천·변화하는 사회적 욕구와 만들어지는 ‘명소’』, 국제지역연구 Vol.6 No.1, 서울대학교 국제지역원, p.143.

19) 허남린(2008), 『종교와 문화(Religion and Culture)』 「일본불교문화의 특색 ; 비불(秘佛)의 전시와 일본의 종교 문화: 개장(開帳)」 2008, Vol.14 No.1, 서울대학교 종교문제연구소, p.81, p.90.

20) 전계서, p.89-90.

21) 켄벨(1977), 『江戶參府旅行日記』, 齋藤信 訳, 平凡社 (東洋文庫303), p.49.

22) 전계서, p.53

23) 박규태(2005), 『상대와 절대로서의 일본-종교와 사상의 깊이에서 본 일본문화론』, 제이앤씨, p.300.

누케마이리(抜け参り)²⁵⁾를 포함하면 상상하는 것 이상으로 대규모로 이루어졌음을 위의 여행기에서 유추할 수 있다. 또한 당세의 유행풍을 소재로 하고 있는 우키요에인 「메이쇼에」에도 동일한 차림을 한 참배일행인 코쥬(講中)들의 행락 풍경이 표현되어있다 (도판2, 도판3, 도판4). 개장의 범람과 종교 참배 붐은 에도 후기 일본 특유의 독특한 사회현상으로 표출되어 행락 문화형성의 기폭제가 되었다.

2-2-3. 신앙적 코(講)의 유행

행락문화 형성의 색다른 배경으로 ‘신앙적 코(講)²⁶⁾’의 역할을 살펴보겠다.

‘평생에 한번은 이세 참배를...’²⁷⁾이라는 소원에서 알 수 있듯이 종교 참배는 서민들이 평생에 단 한번 꿈꾸는 특별한 일이었다. 그 꿈을 실현시키기 위해서 평범한 서민에게는 무엇보다도 경제적인 여유가 제1의 조건이 되었다. 코(講)란 원래 불교의 불전강설 집회에서 유래한 것인데, 이에 영향 받아 중세 이래 신사에서도 강 조직(崇敬講)이 결성되었고 점차 전국적으로 퍼져나갔다.²⁸⁾ 그것이 민간에 침투하면서 민간 신앙집단에게 코의 명칭을 붙이게 되었다. 코는 크게 ‘경제적인 결속을 위한 코’와 ‘종교 신앙적 코’ 두 가지로 나눌 수가 있다. 종교 신앙적 코는 사원이나 신사와 밀접하게 연결이 되어 코의 구성원을 코쥬(講中)라고 했다. 그 중 코의 임원은 코가 신앙하고 있는 사원이나 신사로부터 위촉되는 것이 일반적이었다. 종파나 사원, 신사측은 자신들의 교단을 확장하기 위하여 코를 조직하여 신자 획득이나 결속을 목적으로 하였고, 코쥬 또한 사원이나 신사와 밀접하게 관련하여 참배를 위한 경제적인 문제 해결의 돌파구를 모색했다.

에도시대는 명치(明治)의 신불분리(神仏分離)정책이 시행되기 이전인 신불습합(神仏習合)의 관례가 이어지던 시대로 종교적 성격을 지닌 코에는 불교신앙을 기초로 한 것들이 역사도 깊고 규모가 큰 것이 많았다. ²⁹⁾ 이에 비해 신사 신앙의 경우 숫자와 규모는 작았으나 전국적으로 퍼져있던 것들로는 이세코(伊勢講), 쿠마노코(熊野講), 후지코(富士講) 등이 있었고, 그 외 각 지역마다 유명한 신사나 영산을 중심으로 하는 코 조직이 발달하였다.³⁰⁾ 그 중에서 에도를 중심으로 유행하기 시작한 후지코는 후지산을 신앙하는 종교로서 에도 후기에 이르면 시내 곳곳에 의사(擬似) 체험과 추체험(追体験)의 장소로 모형 미니츄어인

24) 神崎宣武(1991); 『物見遊山と日本人』, 講談社現代新書, p.127.

25) 에도시대 공식적인 허가증 없이 이세신궁 참배에 나서는 일이나 목인되었다.

26) 지역사회를 주요 모체로 하는 우리나라의 계(契:상부상조의 민간협동체)와 성격이 비슷한 것으로 신앙, 경제, 직업상 공통의 목적을 달성하기위하여 조직된 단체를 뜻하는 말.

27) 「お伊勢いきたや伊勢路がみたいせめて一生に一度でも」라고 불리워지는 伊勢音頭에서 추정 해 볼 수 있다.

28) 박규태(1996), 『일본종교의 현세중심적 에토스』, 宗敎學研究, Vol.15, p.20.

29) 일연종 계통의 身延講, 法華宗의 講, 초닌 들이 치바현 나리타시의 不動明王을 참예하기위하여 조직하였던 成田講, 중부 일본에 널리 퍼져있었던 善光寺講, 四國의 88개 절의 순례를 위한 大師講 등이 있었다(문옥표, 1997:110).

30) 櫻井徳太郎(Sakurai Tokutaro)(1962) 『講集團成立過程の研究』, 東京:吉川弘文館, p.246-7.

후지즈카(富士塚)가 도심 도처에 축조될 정도로 폭발적인 유행을 보였다. 히로시게 『명소백경』에는 후지즈카 그림이 담겨있어(도판1) 당시 후지코의 유행 정도를 보여주고 있는데 그 내용은 다음 장에서 다루기로 한다. 코의 형태는 회원 전원이 참배하러가는 소마이리(總參り)도 있었으나 대부분 코에서 몇 명을 선정하여 대표로 참배하는 다이상코(代參講)가 행하여졌고 그 대표적인 예로는 이세코, 구마노코를 비롯하여 온타케코(御嶽講), 오야마코(大山講)등과 전술한 에도 후기의 후지코가 있다.

이상과 같은 신앙적 코의 열기는 현대인이 보기에 광란적인 사회 현상으로까지 비취질 수 있으나 ‘종교 신앙적 코’와 같은 사회 현상의 동참은 「江戸八百八講」라는 어휘가 상징하듯이 당대 사회의 보편적 이데올로기로 보여진다. 종교참배 붐으로 인하여 신앙적 코가 발달하게 되었던지, 코의 발달로 인하여 종교참배 붐이 일게 되었던지 결과적으로 신앙적 코는 행락에 필요한 경제적인 문제를 해결해주는 수단이 되어 종교 참배 붐 형성의 촉매제 역할을 하였다고 할 수 있다.

2-2-4. 쇼진아케(精進明け)의 풍습

다음으로 행락문화 형성의 특이한 배경으로 일본의 독특한 유락풍습을 살펴보기로 한다. ‘쇼진아케’³¹⁾의 ‘쇼진’이란 속(俗)된 생활을 버리고 선형을 닦아 오로지 불도에만 열중하는 일을 표현한 불교용어이며, ‘아케’란 수행의 기간이 끝나서 보통의 생활로 되돌아간다는 의미이다. 이 불교 풍습은 당시 막부 정책인 ‘유곽의 대중화’와 밀접하게 관련되어 ‘종교 참배 후의 유락풍습’으로 차용되었다. 에도막부는 정책적으로 막부 개설 초기 4-5년간에 공인된 위락시설인 집창 체제를 급속히 정비하였다.³²⁾ 이 정책은 중세로부터 근세에 걸쳐서 일본 유곽사에 정설화 된 공식을 만들었다. 그것은 중세까지 산창이라 불리며 각지에 산재해 있던 유곽이 근세가 되면 일정한 지역에 모인 집창으로 불린다고 하는 공식으로 ‘산창제도가 집창제도로 바뀌었다’라는 설명이 된다.³³⁾ 또는 ‘근세에 들어 유곽제도에 대한 정비 또는 사창제도의 확립’³⁴⁾이라고도 말하여진다. 즉 정부에 의해 합법적으로 인정된 유곽의 대중화는 에도 시대 폭발적인 유행을 보이던 각종 종교 행사와 맞물려 ‘쇼진아케’라는 일본 특유의 문화를 잉태시키는 직접적인 요인이 되었다. 코의 회원 전원이 참배하러가는 소마이리(總參り)든 코에서 대표로 선정된 사람만이 참배여행을 떠나는 다이상코(代參講)든 각각의 참배일행들은 일단 참배여행을 떠나면 그 기간을 수행 기간으로 간주하였던 듯하다. 그러므로 참배를 마친 후 ‘쇼진아케’의 장으로서 이세신궁 문젠마치의 후루이치(古市)와 오사카의 신마치(新町), 교토의 시마바라(島原)등의 위락시설에서의 유흥을 도시 관광

31) 종교 참배 후 수행기간이 종료되어 일상의 생활로 되돌아간다는 불교 용어.

32) 에도의 庄司甚右衛門이 유곽설치를 간원 한 것이 1612년, 원요시와라에 허가 된 것이 元和4년(1618년), 新요시와라로 이전한 것이明曆3년(1657년)이다.

33) 渡辺憲司(1994) 『江戸遊里盛衰記』, 講談社, p.15.

34) 전게서, p.35

과 함께 정례화 된 코스³⁵⁾로 선호하였다. 그 결과 유명한 사원과 신사주변에 참배객을 상대로 상공업자들이 모여 들어 몬젠마치(門前町)라는 집락(集落)이 형성되었고 그곳에서는 대규모 유곽 및 가부키(歌舞伎)나 닌교 조루리(人形淨瑠璃)등 개장을 기대한 미세모노(見世物)등 각종 오락을 주제로 한 행락문화가 흥행하였다. 이와 같은 현상은 사찰이나 신사의 참배가 종교적 목적보다 유락을 위해서 이루어졌음을 살펴 볼 수 있게 해 주는 또 다른 예라는 연구 결과가 있다.³⁶⁾

그렇다면 쇼진아케의 대중화된 정도는 어느 정도였을까? 유곽의 대중화 정도에 대한 파악은 쇼진아케의 대중화 정도를 유추해 볼 수 있게 한다. 에도시대의 대표적인 문예작품과 우키요에에서 그 정도를 확인 해 볼 수 있다. 우키요에에 표현된 내용은 다음 장에서 다루 어지므로(도판5, 도판6) 문예작품의 내용을 살펴보면 다음과 같다. 에도전기에는 『色道大鏡』 이후 『諸國色理案内』 등 유곽 안내를 위한 실용 서적이 출판되었다. 또한 이하라 사이 카쿠(井原西鶴)의 작품을 비롯하여, 우키요소시(浮世草子), 카부키, 조루리(淨瑠璃)의 소재로 많이 사용되었으며, 후기의 『東海道中膝栗毛』 『金草鞋』 등 꼭케이본(滑稽本)이나 지방 샨레본(洒落本)이라 불리는 것도 있다. 그 밖에 여행기, 일기, 견문기 등에도 유곽이 종종 등장하며, 반쓰게류(番附類)에는 한 장짜리 우키요에인 『大日本遊國遊里細見全図』라는 유곽지도, 스고로쿠(双六風)의 안내도 등과 같은 유곽 안내도도 많이 존재하였다.³⁷⁾

위와 같은 문헌들이 애호되고 유통되는 현상은 에도시대 막부의 유곽 정책과 밀접하게 연관되어 ‘쇼진아케’라는 독특한 풍습을 활성화시키는 직접적인 배경이 되었다.

3. 『명소백경』이 담고 있는 종교적 표상

3-1. 종교 참배의 표상

이상에서는 에도 후기 행락과 종교와의 관계를 파악하여 보았다. 특히 당대의 종교문화와 관련지어 행락문화 형성의 배경이 된 사회현상 및 풍습을 살펴보았다. 이하에서는 이와 같은 고찰을 기반으로 『명소백경』에 담긴 종교적 표상의 특징을 파악하여 실질적인 작품의 의미와 기능을 새롭게 해석해 보고자 한다.

도판1은 근세의 코 중에서 가장 이른 시기에 형성된 후지코(富士講)³⁸⁾의 유행과 그 신앙의 유행 정도를 나타내는 모형 후지즈카(富士塚) 그림이다. 이 자료는 에도 후기에 축조된 후지즈카를 확인하는 시



도판1(S24)

35) 神崎宣武(1991), 『物見遊山と日本人』, 講談社現代新書, p.133-134.

36) Ishimori, Shuzo(1989), "Popularization and Commercialization of Tourism in Early Modern Japan", in *Japanese Civilization in the Modern World IV: Comparative Studies of Economic Institutions*. eds. by Umehao Tadao, Mark Fruin, and Nobuyuki Hata. Senri Ethnological Studies, no. 25, p.185.

37) 渡辺憲司(1994), 『江戸遊里盛衰記』, 講談社, p.35.

38) 박규태(1996), 『일본종교의 현세중심적 에토스』, 宗敎學研究, Vol.15, p.20.

각 자료로서 주목되고 있는데 화면의 후지즈카는 安政2년(1819)에 축조되었다. 장소는 북방 탐험가 곤도쥬조(近藤重藏)의 저택으로, 쥬조(重藏)의 발상으로 축조되었다고 전해지고 있으나, 아자부(麻布)에 있었던 후지코가 협력하였다고 한다.³⁹⁾ 후지코는 매년 후지산 개산기에 코쥬가 등산하여 무사함을 기원했다. 단 성인 남에 한정된 점이나, 코에서 몇 명을 선정하여 대표로 참배하는 다이상코 형태로 등산자를 결정하였으므로 전원이 갈 수 없었다. 그러므로 모형 후지즈카의 시작은 ‘후지산에 올라간 것과 같은 이익을 받을 수 있도록 염원 한 것에서 비롯되었다’고 한다.

그림의 내용을 보면, 근경에는 모형 후지즈카가, 원경에는 실물인 후지산이 대조적으로 자리 잡고 있다. 또한 그림에는 후지산 등산이 금지되었던 여성이 표현되어 있어, 당시의 풍습과 종교관을 알 수 있게 한다. 그러나 후지산의 미니쥬어인 후지즈카는 당시 에도(江戸) 시중 도처에 축조되어져 반드시 신기하지 않았다.⁴⁰⁾ 즉 ‘후지즈카가 많을 때는 50개소 이상 있었다’고 하므로 당대의 ‘명소’로 선정될 만큼 특별한 볼거리가 아니었다. 그러므로 도판1과 같은 그림은 후지산 등산을 할 수 없는 여성이나 노인, 어린이, 추천에서 떨어진 코쥬라도 의사적(擬似的)으로 등산 할 수 있는 용도에 의미를 두고 제작되었을 것으로 추정된다. 이 그림의 구매자가 이미 후지산 참배를 경험한 코쥬라면 이전 경험을 다시 체험하는 것처럼 느끼기 위한 추체험(追體驗)의 용도로 사용하였을 것이다.



도판2(S80)

도판2는 에도 코쥬의 복잡한 행렬이 묘사되어 있다. 등장인물들은 샷갓과 우산에 미묘하게 가려져 있어 그 모습과 표정이 구매자의 상상 속에 맡겨져 있다. 이 때문에 행렬과 글자만이 더욱 강조되어 보이는 이 그림의 의미와 기능은 무엇일까? 『명소백경』이 당대의 시사성 대중매체였다는 점을 염두에 두면 동시대 그림의 구매자는 쉽게 그림의 의미를 해독하여 정보를 취하였을 것이고 더 나아가 본 작품의 기능도 함께 공유하였을 것이다.

그림은 종교적 표상으로 가득하다. 근경의 마네키(まねき)라 불리는 테누구이(手拭い)에는 일연종(日蓮宗)에서 일반적으로 사용하는 문쇼(紋章)가 새겨져있고 그 아래에 코쥬라는 글자가 보인다. 일연종은 에도에서 융성하여 매년 에시키(會式)에는 수천 명의 단신도(壇信徒)가 에도에 위치한 일연종 사원인 혼몬지(本門寺)에 몰려들었다고 한다.⁴¹⁾ 중앙에 우산과 같은 만도(万灯)아래로 ‘남무묘법연화경(南無妙法蓮華經)’이라 쓰여진 현제기(玄題旗)가 나부끼고 있다. 이 말은 일연종에서 법화경(法華經)에 귀의하는 뜻으로 외는 말이다. 또한 이 행렬에는 일연종 사람들 뿐 아니라 후지산을 신으로서 신앙하는 후지코 사람들도 함께 가담하고 있다.⁴²⁾ 우측으로는 미노부산(身延

39) 헨리·스미스(1992), 『広重 名所繪江戸百景』, 岩波書店, p.24.

40) 大久保純一 (2007) 『広重と浮世絵風景画』、東京大学出版会, p.196.

41) 헨리·스미스(1992), 상계서, p.80.

42) 原信田 実 (2007) 『謎解き 広重「江戸百」』 pp. 23-44.

山)⁴³⁾이라 쓰여진 마네키가 보이고 그 아래 ‘江戸講中’라는 문자가 작품의 주제인 듯 큰 글씨로 굵직하게 쓰여져 바람에 나부끼고 있다.

본 그림을 보고 있노라면 그림의 독특한 구성과 구도로 인하여 감상자는 마치 긴 행렬의 어딘가에 끼어 걸어가고 있는 듯 느껴진다. 이 그림의 구매자는 실제로 행렬에 참가하고 있는 코쥬처럼 삿갓과 우산으로 얼굴을 미묘하게 가리고 그림 속에서 복채로 부채모양의 장구를 치며 누군가가 외치는 선창소리에 발맞추어 마치 자신이 행렬에 동참하여 목적지를 향하여 걸어가고 있는 듯한 장면을 연상하지는 않았을까?



도판3(S60)

도판3은 오오야마 모우데(大山詣)⁴⁴⁾ 집단의 종교의식을 표현한 그림이다. 제목의 아사쿠사 카와(淺草川), 오오카와 바타(大川端), 미야토 가와(宮戸川)는 모두 스미다 카와(隅田川)를 가르키는 별칭으로 이 장소는 부정을 씻는 고리바(垢離場)였다. 그림의 장면은 오오야마로의 출발에 앞서 마을마다 선발된 코쥬가 본텐(梵天)을 스미다 카와 료코쿠마시(兩國橋)의 다리목까지 배로 운반하여 미즈고리(水垢離)를 하는 장면이다. 미즈고리는 신불(神佛)에 발원(發願)하기 전 부정을 씻는 행위로 이 의식이 끝나면 본텐에 꽂혔던 고헤이(御幣)를 집집마다 나누어주어 악기를 쫓아냈다고 한다.⁴⁵⁾

에도 후기에는 후지코의 폭발적인 유행과 더불어 오오야마(大山: 神奈川縣 중부에 있는 산)를 신으로 신앙하는 오오야마코(大山講)가 서민들 사이에서 대유행하였다. 화면 최 근경에는 오오야마 참배 일행의 배가 료코쿠마시(兩國橋)를 향해 본텐을 세우고 건너는 모습이 확대되어 있다. 그림의 우측에는 배의 방향으로 보아 호라가이(法螺貝)를 불고있는 수험자(修驗者)를 선두에 태우고 커다란 본텐을 세운 배를 스미다 카와로부터 칸다 카와(神田川)로 진행시키는 배가 묘사되어 있다. 그림에서 주목의 대상은 배에 탄 일행들이다. 이 일행은 어떤 사람들일까? 일행은 동일한 옷차림에 동일한 머리 수건을 묶고 있는 코쥬 단체이다. 머리에 맨 수건의 매듭 모양으로 보아 쇼쿠닌(職人)의 모습임에 틀림이 없다. 매듭이 앞이마에 오게 동여매는 무코우 하치마키(向こう鉢巻)는 기운차게 일하는 쇼쿠닌의 모습을 상징하기 때문이다. 그렇다면 이 그림의 주 소비층은 쇼쿠닌이었을까? 어떤 목적으로 구매하였을까? 구매자는 오오야마코에 대한 정보도 얻었을 것이다. 또 ‘히로시게 블루’라 불리던 수입 안료인 베로감(ベロ藍)의 시원한 청색 물줄기에서 이국적인 느낌을 받았을지도 모른다. 그러나 이 그림 역시 무엇보다도 구매자는 배에 탄 일행과 같이 좌우로 흔들리는 배에서 미즈고리 의식에 참여하는 상상 속에 빠졌을 것이다. 배는 조류를 따라 실제 움직임이 있는 듯하다. 이 그림은 움직임의 느낌을 주는 구도로서의 특징이 적극적으로 활용되어 있는 그림이다. 이러한 독특한 구성은 『명소백경』이 「메이쇼에」로서의 기능에서 더 나

43) 일연종 총본산인 구운지(久遠寺)가 있는 야마나시켄(山梨縣) 남서부에 위치하고 있는 산.

44) 大山(神奈川縣 중부에 있는 산)의 아후리(阿夫利) 신사에 흰옷을 입고 참배하는 행위.

45) 菊池貴一郎(1991), 『繪本江戸風俗往来』, 平凡社(東洋文庫50).

아가 이미지들을 공유하는 의사체험 및 추체험과 같은 기능도 하고 있었음을 추정할 수 있게 한다. 이 그림 역시 미즈고리라는 종교 의식 그 자체의 특징에만 집중 할 수 있도록 확대 된 인물의 얼굴 표정을 미묘하게 감추어 종교 의식만을 강조하여 구매자의 동참을 유도하고 있다.

다음으로는 등장인물의 표정이 드러난 도판을 해설해 보기로 한다. 도판4의 종교적 표상은 원경 좌측 상단의 조쵸우지(増上寺)이다. 이 절은 도쿠카와 장군가의 위패가 안치 된



도판4(S79)

보다이지(菩提寺)로서 정토종 관동대본산(淨土宗關東大本山)으로 당시 널리 알려져 있었다. 좌측 승려의 행렬은 이곳이 당시 3천명에 달하는 수행승이 모여들었던 유서있는 곳임을 시사한다. 그러나 주목을 끌고 있는 것은 그림 중심에 그려진 집단이다. 이들 집단에 대한 재미있는 해석이 있다. 이와나미(岩波) 출판 『히로시게 명소에도백경』의 저자 헨리 스미스는 ‘에도 유람 일행은 조쵸우지 참예를 방금 마쳤을 것이다. 경내의 넓이와 장군 영묘의 훌륭한함에 일동은 혀를 내두르며, 감격에 겨워 이야기가 활기를 띠고 있는 듯 보인다’고 해설하며 ‘일행의 다음 방문지는 당연히 시바신메이(芝神明)가 될 것이다’고 기

술하고 있다.⁴⁶⁾ 시바신메이는 화면 우측 상단에 그려진 신사로 헨리 스미스는 상징적으로 쇼진아케(精進明け)의 풍습을 거론하고 있는 것이다. 시바신메이의 경내에는 가부키(歌舞伎)등을 흥행하는 극장(芝居小屋)이나 진품, 기이한 동물, 곡예등을 행하는 미세모노야(見世物小屋)뿐만 아니라 오카바쇼(岡場所)라 불리는 공인되지 않은 유곽이 상설되어 있었다. 구매자는 상기된 일행의 모습과 표정에서 대리만족의 즐거움을 느꼈을 것이다. 헨리 스미스의 해석대로라면 유람 중인 이들, 즉 오노보리(お上り)라 칭하여지는 유람 일행의 동선을 따라 당연히 시바신메이(芝神明)로 걸음을 옮겨보는 상상도 해 보았을 것이다.

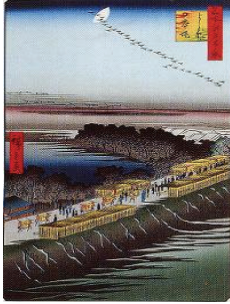
3-2. 참배 후 쇼진아케(精進明け)의 표상

다음은 『명소백경』에 담겨있는 ‘쇼진아케’의 상징물을 살펴보기로 한다. 쇼진아케의 풍습은 일본 특유의 풍습으로 이미 언급하였듯이 종교와 밀접하게 관련되어있다. 코쥬단체는 일단 참배여행을 떠나면 그 기간을 수행 기간으로 간주 하였던 것 같다. 그들은 참배를 마친 후 일상으로의 회귀를 의미하는 장소로서 주로 이세신궁 문젠마치의 후루이치(古市와 오사카의 신마치(新町), 교토의 시마바라(島原) 등과 같은 위락시설을 정례화 된 코스⁴⁷⁾로 선호하였다.

도판5는 해질 녘을 배경으로 니혼즈즈미(日本堤)의 번잡한 풍경이 묘사되어 있다. 당시 니혼즈즈미는 신요시하라(新吉原)즉 에도의 집창의 입구를 상징하였다. 이 그림 속에는 우

46) 헨리·스미스(1992), 상계서, p.79.

47) 神崎宣武(1991), 『物見遊山と日本人』, 講談社現代新書, p.133-134.



도판5(S100)

측 신 요시와라로 향하는 각각의 다양한 인물들의 모습이 묘사되어 있다. 가마를 타고 가는 사람도 있고 또 수건으로 얼굴을 가리고 가는 사람도 있다. 우키요에가 정보성 대중매체인 점을 염두에 둔다면 이 그림은 어떠한 정보를 주고 있는 것일까? 일본 특유의 쇼진아케 풍습에 중점을 둔다면 이곳은 아사쿠사 관음상(淺草觀音)을 참배하고, 이마도바시(今戸橋)로 부터 500미터 정도 올라가면 나오는 곳이었다.⁴⁸⁾

지볼트의 여행 기록에도 쇼진아케를 상징하는 대목이 다음과 같이 신랄하게 기술되어 있다.

가장 눈에 잘 띄는 오락장은 사람들이 많이 들어오는 가부키 외에 아사쿠사 관음사(淺草觀音寺)이며, 그 곳에서 사람들은 신앙이란 명분으로 유희를 즐기는데, 신앙은 세속의 욕구와 결합되어 있다. 료코쿠바시(兩國橋) 근처에는 매일 시장이 서며, 가무음곡의 놀이가 끊이지 않는다. 스미다강에는 특히 더운 여름철이 되면 무수히 많은 유람선이 지나다니며, 배 위에서 여러 가지 유희가 펼쳐진다. 그 뿐 아니다. 에도의 번영으로 전국에서 이름난 유곽거리 신요시와라(新吉原) 에는 전국적으로 이름난 창녀가 한 곳에서만 5,000명이나 등록되어 있을 정도이다.⁴⁹⁾

밑줄의 ‘사람들은 신앙이란 명분으로 유희를 즐기는데, 신앙은 세속의 욕구와 결합되어 있다’ 라는 대목은 에도에서 가장 오래된 사원인 아사쿠사 관음사 참배 후 쇼진아케를 의미하는 것이다. 에도의 요시와라 뿐만 아니라 이세신궁 참배 후 쇼진아케의 장소로 널리 알려진 후루이치 지역의 번영은 쇼진아케의 단면을 적절히 설명 해 주는 또 하나의 사례⁵⁰⁾라 할 수 있다. 이세 참배의 양상을 함축적으로 표현한 다음의 가와야나기(川柳)⁵¹⁾에서도 그 사실을 감지 해 볼 수 있다.

伊勢参り、大神宮にも、ちょっと寄り (이세 참배, 다이진구(大神宮)에도, 잠깐 들리고)

밑줄의 다이진구(大神宮)는 이세의 외궁(外宮)과 내궁(内宮)을 총칭하여 일컫는 말이다. 그러나 이세의 외궁을 지나 내궁에 이르기 전 중간 지점에는 유락의 장소인 후루이치 가도가 위치하여 있다. 즉 참배 후 일행의 다음 방문지는 후루이치라는 것을 상징적으로 표현하고 있는 시(詩)인 것이다.

마지막으로 도판6은 벚꽃이 날리는 평화로운 뱃놀이 풍경이다. 그러나 이 그림 역시 평범

48) 헨리·스미스(1992), 상계서, p.100.

49) 지볼트, P. F. von, 1967(齋藤信 訳), 『江戸参府紀行』, 平凡社(東洋文庫87), p.214-15.

50) 이 지역의 전성기에는 기생집(妓樓)이 70여 곳, 유녀(遊女)가 1,000명에 달했다고 하며, 에도의 요시하라(吉原), 교토의 시마바라(島原)와 나란히 3대 유곽의 하나로 꼽히던 장소이다(권숙인, 1997:125).

51) 에도를 중심으로 유행한 5·7·5조의 정형시로 간결함·해학성·기지·풍자가 특징적이다.



도판6(S39)

한 수변 풍경만을 보여주려는 것이 아니다. 독특한 구도로 강조된 배 위에 쇼진아케를 상징하듯 유녀가 앉아있다. 이러한 구성은 『명소백경』이 단순한 「메이쇼에」로서의 기능에서 더 나아가 이미지들의 가상체험 기능도 공유하게 하였음을 추정할 수 있게 한다. 이점에 착목하여 그림을 해석하면 마치 감상자는 그림 속의 흔들리는 야네부네(屋根舟)안에서 유녀와 마주하고 있는 듯한 이미지를 공유하게 된다. 구매자의 상상에 맡겨진 배안의 모습을 구체적으로 묘사한 헨리 스미스의 해설을 참고해 보자. 그는 ‘유녀는 한명이나 두 명의 객과 합승하고 있을 것이며 또 필시 또 다른 유녀가 동행하여있고, 또 그 유녀와 동반한 한 두명의 객이 더 있을 것이다’고 하였다.⁵²⁾ 또 다른 상상도 얼마든지 가능할 것이다. 반쪽의 모습만 보여주는 유녀의 표정 역시 감상자의 상상에 맡겨진 채이다.

그렇다면 이 그림의 의미는 무엇일까? 그림 속에서 종교적 표상을 찾아보면 다음과 같다. 배가 띄어진 장소는 예의 미즈고리 장소인 스미다가와이고, 강 너머로 아사쿠사 관음사의 가람 본당 지붕과 사원의 상징인 오중탑(五重塔)이 담겨있다. 주목되는 점은 배의 지붕과 기둥의 묘사가 근경과 원경이 부여하는 입체로서의 특징이 적극적으로 활용되어 단절된 지붕과 기둥의 배치는 마치 우키요에 표현의 한 수법인 도리리(鳥居)의 미타테(見立て)⁵³⁾로 상징된 듯 보인다는 점이다. 그 도리이 너머로 후지코의 신앙대상인 후지산이 자리 잡고 있는 것은 우연이 아닌듯하다. 이러한 시각적 장치들은 『명소백경』이 ‘메이쇼에’로서의 특징에 ‘종교 참배 이미지’로서의 특징을 강하게 부각 시킨 독특한 작품집임을 알 수 있게 한다.

4. 나가기

이상과 같이 에도 후기에 출판된 우키요에 판화집인 히로시게 『명소백경』에 나타난 종교적 표상의 의미를 고찰하여 보았다. 고찰 결과 『명소백경』에 표출된 당대 참배 문화의 특징은 도시 서민의 행락과 밀접하게 결부되어 일상으로 부터의 일탈이라는 현세 중심적 의미를 가지고 있고, 그 양식에 있어서 획일성을 띠고 있으나 대체로 남성중심으로 개별화되고, 코(講)등의 유행으로 인하여 동일한 모습으로 꾸민 종교여행이 사회전반으로 확산된 동조적 성향을 보이고 있다. 또한 신앙 여행의 목적이 종교참배로 분명하더라도 공인된 집창의 대중화와 ‘쇼진아케’라는 일본 특유의 풍습으로 인하여 참배여행의 실질적인 내용에 있어서 단순히 개인의 유흥과 관련되어 있는 사항으로 왜곡 될 가능성이 있는 것으로 보여진다. 반면 종교 참배의 명목을 빙자하여 유흥여행을 떠날 수 있는 계기를 제공할 개연성이 높다고 할 수 있다. 이와 같은 해석으로부터 각각의 작품에 시도된 다양한 구성 즉

52) 헨리·스미스(1992), 상계서 p.39.

53) 어떤 형상을 그것과 닮은 또 다른 형상에 비유하여 은유적으로 제시 하는 것.

특이한 구도의 강조, 상상의 장면을 연상시키는 요소, 회화이면서 입체적 표현으로서의 특징이 적극적으로 활용되어있다는 점은 『명소백경』의 기능 파악을 추정 할 수 있게 한다. 『명소백경』은 에도후기 구로부네(黒船)의 등장으로 상징되는 서구 문화와의 충돌과 막부의 동요, 빈번한 재해로 점증되는 불안 속에서 출판 된 우키요에 관화집이다. 관화물인 관계로 대량생산이 가능하여 낱장으로도 팔렸던 문화 상품으로 육필화 보다 상대적으로 저렴하였다. 그러므로 봉건적 이데올로기의 시대에 불안한 사회 분위기 속에서 종교 참배라는 사회현상이 광적일 만큼 열기를 띠었으나 여행을 떠날 수 없었던 조건의 사람들은 상상 속에서 참배의 이미지를 공유할 수 있는 『명소백경』을 손쉽게 구입 하여 향수 하였을 것이다. 또 이미 참배를 경험한 사람이라면 이전 체험을 다시 추체험하는 용도로 사용하였을 것이다. 즉 『명소백경』은 도시 행락을 소재로 한 ‘메이쇼에’ 장르이면서 ‘종교 참배 이미지’로서의 특징을 강하게 부각시킨 작품집으로 신앙 여행을 떠날 수 없었던 사람들에게 종교 참배의 의사체험(擬似體驗) 및 추체험(追體驗)을 돕는 기능을 수행함으로써 도시 서민의 신앙생활에 중요한 역할을 했을 것으로 해석된다. 이와같은 구체화된 상징들은 사회 가치관의 기저에 자리 잡아 근·현대 종교문화의 발전과정과 깊이 관련되어 있음을 시사한다.

◀ 참고문헌 ▶

- 권숙인(1997) 『근세 일본에서 대중관광의 발달과 종교-이세신궁참배를 중심으로-』, 국제지역연구 Vol.6 No.1, 서울대학교 국제지역원, p.125
- 김오중(1994) 『여가의 개념에 대하여』, 한국여가 레크레이션학회지(여가 레크레이션 연구), 한국 여가 레크레이션 학회, p.4
- 김양주(1997) 『일본관광명소와 자원의 변천·변화하는 사회적 욕구와 만들어지는 ‘명소’』, 국제지역연구 Vol.6 No.1, 서울대학교 국제지역원, p.143.
- 문옥표(1997) 『일본관광의 사회조직·단체여행의 역사와 문화』, 국제지역연구6, 서울대학교 지역종합연구소 p.110.
- 박규태(1996) 『일본종교의 현세중심적 에토스-막말기 신종교를 중심으로-』, 宗敎學研究, Vol.15, p.20.
- (1996) 『종교와 문화(Religion and Culture) 「근세일본의 종교와 문화 - 현세중심적 사유의 정착 -」』, 1996, Vol.2, 서울대학교 종교문제연구소(The Institute of Religious Studies), p.154
- (2005) 『상대와 절대로서의 일본-종교와 사상의 깊이에서 본 일본문화론』, 제이엔씨, p.300.
- 정일영(2000) 日·韓 翻譯時, 誤譯을 초래하는 漢字語彙에 관한 考察 - 日·韓 漢字語彙의 意味·用法을 중심으로 -, 日本文化學報 第 8 輯, 한국일본문화학회, p.146
- 황기원(2009) 『한국행락문화의 변천과정』, 서울대학교 규장각한국학연구원 한국학 연구총서 32, p.9-10
- 허남린(2008) 『종교와 문화(Religion and Culture) 「일본불교문화의 특색 ; 비불(秘佛)의 전시와 일본의 종교문화: 개장(開帳)」』 2008, Vol.14 No.-, 서울대학교 종교문제연구소. pp.81-90
- 浅野秀剛(2007), 『広重 名所江戸百景-秘蔵 岩崎コレクション-』, p. 195.
- 大久保 (2007) 『広重と浮世絵風景画』、東京大学出版会、p.155.
- 渡辺憲司(1994) 『江戸遊里盛衰記』, 講談社, p.35.
- 神崎宣武(1991); 『物見遊山と日本人』, 講談社現代新書, p.133-134
- 木下直之、吉見俊哉 (1999) 『ニュースの誕生:かわら版と新聞錦絵の情報世界』、東京大学総合研究博物館.
- ケンベル, E.(Kaempfer, E.), 1977(1779), 『江戸参府旅行日記』, 斎藤信 訳, 平凡社 (東洋文庫303), p.53
- 櫻井徳太郎(Sakurai Tokutaro)(1962) 『講集團成立過程の研究』,東京:吉川弘文館,p.246-7

- ジーボルト, P. F. von, 1967(齋藤信 訳), 『江戸参府紀行』, 平凡社 (東洋文庫87) p.:214-15
高橋克彦 (1992) 『江戸のニューメディア:浮世絵情報と広告と遊び』, 角川書店.
ヘンリー・스ミス(1992), 『広重 名所繪江戸百景』, 岩波書店, pp24-100.
豊田 武・兒玉幸多 編(1970), 體系日本史叢書 24, 『交通史』, 山川出版社, p.105, 134-40.
宮田 登 (1973) 「江戸町人の信仰」, 『西山松之助, 江戸町人の研究 第2巻』, 吉川弘文館, p.229
原信田 実 (2007) 『謎解き 広重「江戸百」』 pp. 23-44.
Brightbill, Charles K.(1960), *The Challenge of Leisure*, Prentice.Hall, Ins., p.3
- Ishimori, Shuzo(1989), “Popularization and Commercialization of Tourism in Early Modern Japan”, in *Japanese Civilization in the Modern World IV:Comparative Studies of Economic Institutions*. eds. by Umesao Tadao, Mark Fruin, and Nobuyuki Hata. *Senri Ethnological Studies*, no. 25.
Smigel, E. O.(1963) *Work & Leisure: A Contemporary Social Problem*, Collage and University Press, p.11

◀ 도판목록 ▶

- 도판 1(S24) 메구로 신후지(目黒新富士), 뉴욕의 부르클린 미술관 소장
도판 2(S80) 가나스키바시 시바우라(金杉橋芝浦), 뉴욕의 부르클린 미술관 소장
도판 3(S60) 아사쿠사카와 오오카와바타 미야코카와 (淺草川大川端宮戸川), 뉴욕의 부르클린 미술관 소장
도판 4(S79) 시바신메이 조조지(芝神明増上寺), 뉴욕의 부르클린 미술관 소장
도판 5(S100) 요시와라 니혼즈쓰미(よし原日本堤), 뉴욕의 부르클린 미술관 소장
도판 6(S39) 아즈마바시 긴류잔 엔보(吾妻橋金龍山遠望), 뉴욕의 부르클린 미술관 소장
* 도판번호, 헨리·스ミス(1992) 의 도판일람 번호, 제목, 소장처 순서로 배열.

- 투 고 : 2010. 5. 31.
- 심 사 : 2010. 6. 12.
- 심사완료 : 2010. 7. 10.

한일문화교류와 「아시아 아이덴티티」

金 弼 東*
kim509@hanmail.net

<要 旨>

現在幅広く進行されている韓日文化交流は、両国の友好関係増進と東北アジアの繁栄と平和に寄与できる土台になると思われる。両国の関係は、今後領土問題や歴史認識のギャップ等によって、一時的な衝撃は予想されるが、交流協力関係の強化によって東アジアの文化共同体構築に貢献したいという価値観は崩さないと思う。従って両国は、今後も交流活性化を図るため多様な制度的な支援とシステムの構築を通じて相互理解の増進と文化融合・生成の土台づくりに努力するはずである。

その道程が、両国の文化交流基盤強化のもつもう一つの歴史的意味であることを踏まえ本稿では、まず韓日文化交流拡大の時代的意味などを検討するとともに、新しい韓日文化交流基盤の拠点として「韓日センター」の設立、そして、同センターが追求すべき時代的課題（制度的側面と価値的側面を含めて）と、それを実践することによって両国が追求すべきアジア・アイデンティティの意味は何であろうか、などを総合的に分析した。

キーワード： 韓流、韓日文化交流、韓日研究センター、アジア・アイデンティティ

1. 서론

한일 양국은 국교정상화 이후 약 40년 만에 하루 1만 명이 왕래하는 시대를 맞이하게 되었고, 연간 양국의 방문객수도 사상 처음으로 5백만 명 돌파를 목전에 두고 있다. 현재 진행되고 있는 한일 간의 교류확대와 우호협력관계의 증진은 동북아의 번영과 평화에 기여하는 토대가 될 전망이다. 양국의 관계는 앞으로도 영토문제 등으로 인해 일시적인 충격은 예상되지만, 기본적으로 민간교류의 활성화를 포함해 교류협력관계의 강화→동북아의 번영, 평화, 안정에 기여→동아시아문화공동체 구축에 공헌, 등으로 이어지는 가치관은 크게 훼손되지 않을 것이다.

향후 양국정부는 그동안의 축적된 교류성과를 바탕으로 다양한 제도적 지원과 시스템의 구축을 통해 동아시아를 통합할 수 있는 이슈의 지속적인 제기에 노력하고, 민간이나 지역 레벨에 있어서는 교류확대를 통한 상호이해의 증진과 문화융합·생성의 토대를 마련하고, 지적교류를 통해서 아시아를 지향하는 가치발신에 주력하는 체제로의 전환을 요구받고 있다. 그 도정(道程)이 한일양국이 구현해야 할 21세기의 역사적 사명임을 양국사회가 인식하는 것이 한일문화교류의 기반강화와 교류확대의 또 다른 의미라고 생각하지만 그런 역할의 거점으로서, 소위 양국의 교류협력의 방향성과 이슈제시, 미래가치발신 등을 총괄할 수 있는 중추적 기관의 설립이 필요하다.

* 世明大学校日本語学科教授

본고는 1) 한일양국이 반목과 국지적 경쟁의 시대로부터 창조적이고 글로벌 협력시대로 전환했다는 시대적 인식과, 2) 한일교류의 성과와 양국사회의 가치관의 변화를 적극적으로 반영할 방향성의 제시가 필요하다는 문제의식 하에, 구체적으로는 전후일본의 국제문화교류정책의 추이와 성과, 그 연장선상에서 한일문화교류의 전개과정과 의의, 한일문화교류의 패러다임변화를 위한 실천적 토대구축으로서 「한일연구센터」의 설립, 동 센터를 통한 「아시아아이덴티티」의 창출노력과 시대사적 의의 등을 거시적 관점에서 분석하여 한일문화교류의 의미를 새롭게 정의해 보고자 한다

2. 일본의 국제문화교류와 한일문화교류의 현재

1) 일본의 문화교류가 시사하는 것

패전이후 일본은 자유와 평등에 의거한 민주주의 이념을 바탕으로 문화국가의 건설을 추구했다. 그 이념은 국제사회에 복귀하는 과정에서 문화교류의 활성화를 통해 단계적으로 실천되어 갔지만, 범국가적 차원에서 국제문화교류의 중요성을 인식하고 본격적인 대응체제를 구축하기 시작한 것은 1970년대부터이다. 이 무렵 일본은 GNP 제 2위의 경제대국의 지위에 걸맞는 공헌을 요구하는 국제사회의 요청에 직면하여 「해외의 여론에 대해 평화국가를 지향하는 우리나라에 대한 바른 이해를 얻기 위한 방책」¹⁾으로서, 또 「이데올로기나 국정의 차이에도 불구하고 모든 나라와 상호이해를 심화시키고 우호관계의 증진을 꾀하는 것이 필요」²⁾하다는 인식을 하기 시작했다. 일본사회의 자기인식은 바로 체제의 구체적 정비로 이어져, 소위 영국의 문화정책의 특징인 「arms length」 법칙에 근거한 국제교류기금이 탄생하게 된다.

일본의 국제문화교류사에 있어 하나의 분기점이 된 「기금」의 창설을 통해 경제선진국으로서 국제사회에 적극적으로 공헌하는 일본의 이미지제고에 박차를 가하면서, 한편으로는 「명예있는 지위를 구축」하고 「호혜와 호양(互讓)의 정신」 등을 강조하는 이른바 「프론티어 외교」 노선이 주창된다. 이러한 방향성은 고도경제성장의 영광에 취해있던 일본·일본인의 행동양식을 돌이켜보고, 새로운 국민의식의 자각하에 문화교류를 추진하겠다는 의지였다. 일본이 아세안을 비롯해 문화교류에 있어 「마음과 마음이 통하는」 관계구축에 진력하기 시작한 것도, 정부의 의지를 받들어 다양한 국제교류단체³⁾가 잇따라 설립된 것도 바로 이 무렵부터이다.

1) 『わが外交の近況』 1971年度版, 外務省, p.86

2) 『わが外交の近況』 1971年度版, 外務省, p.78

3) 예를 들면 「사람을 통한 국제협력」을 표방한 국제협력사업단, 일본국제교류센터, 도요타재단, 국제협력추진협회 등은 정부의 의지를 반영한 대표적인 단체로서 이들 단체는 제국의 국민의 교류와 협력에 중점을 두는 활동을 전개했다.

이후 80년대에 접어들면 무역마찰의 격화를 반영하여 「해외홍보활동을 통해 제 외국에 대해 정확한 정보를 제공하여 우리나라에 대한 바른 인식 및 이해를 심화」⁴⁾시켜간다는 결의하에 「홍보활동 및 문화교류사업」이 일본외교의 「불가결한 요소」로 자리잡게 된다. 이즈음 일본의 문화교류는 서브컬처를 중심으로 한 「트렌스내셔널 저팬」 현상을 배경으로 국제사회로부터 「얼굴이 보이지 않는 나라」라는 부정적인 이미지를 일소하고 일본문화의 「세계화」에 매진하는 정책을 강력히 추진한다. 일본문화연구의 세계적인 발신거점으로서 국제일본문화연구센터가 설립된 것을 비롯해, 유학생 10만 명 유치전략과 국제문화교류행동계획의 발표 등은 소위 「국제국가」로서의 일본의 지위와 역할강화에 포커스를 맞춘 전략적 접근이었다.

각종의 문화정책·사업·교류는 국내외를 불문코 활기를 띠기 시작했고, 생활의 질을 높이는 문화의 창조와 그와 관련한 일본사회의 범사회적인 활동도 활발히 전개되었다⁵⁾. 특히 이 무렵부터 시작된 「문화의 힘으로 일본사회를 활기차게 하자」는 구호는 일본사회의 보이지 않는 시대적구호로서 국민들의 지지를 획득해 갔고, 일본의 문화정책도 각 성층의 유기적인 협력에 의거하여 탄생하는 종합정책으로서의 특징을 띠고 일본사회의 저변에 침투해 갔다. 일본사회의 근본적인 인식변화와 「올 저팬」 체제의 구축을 통해 국제공헌의 방법론을 모색하면서 한편으로는 일본의 입장을 적극적으로 대변하는 문화교류정책을 추진하기 시작한 것이다.

이를 발판으로 90년대에는 일본사회의 제도와 관행을 국제사회에 조화롭게 연착륙시키기 위한 이른바 「국제사회 속에 보편성을 띤」 것으로 각인시키기 위해 각 분야에 걸쳐 「국제화의 일층의 추진」과 「국제문화교류의 강화」가 중요하다는 인식을 일본사회가 폭넓게 공유한다⁶⁾. 아시아와의 「평화우호교류계획」의 추진을 비롯해 미국과의 「일미센터」의 설립, 그리고 유럽과의 교류확대를 강화하는 대외사업들이 국민들의 지지하에 적극적으로 전개되고, 일본외교가 주창한 「글로벌 협력」 「지역협력」 「2국간 협력」 등의 이념이 문화교류정책에 그대로 반영되어 추진되었다. 일본의 「국격」 향상을 도모하는 노력이 범사회적으로 이어지기 시작한 것이다.

4) 『わが外交の近況』1981年度版, 外務省, p.49

5) 70년대 중반부터 고도경제성장이 가져온 정신문화와 지역의 황폐화에 대한 반발 심리로서 경제적 가치보다는 정신적 가치를 중시하는 문화적 욕구가 고조되고 동시에 지역에 있어서도 지역의 개성을 발견하여 「지방시대」를 열어가고자 하는 움직임이 새로운 문화정책과 결합하게 된다. 이 무렵부터 일본사회에서는 정부의 통합적 문화정책뿐만 아니라 각종의 지역문화정책이나 예술문화의 공공정책 등이 활발히 이루어지게 된다. 구체적으로는 根木昭 『日本の文化政策』(勁草書房, 2001), 馬場憲一 『地域文化行政の新視点』(雄山閣出版株式会社, 1998), 後藤和子 『芸術文化の公共政策』(勁草書房, 1998) 등 참조.

6) 국민들의 여론도 이를 뒷받침하기 시작한다. 1989년 10월, 내각부홍보실이 조사한 여론조사에 의하면, 「국제화에 대한 생각」을 묻는 질문에 43.1%가 「국제화를 추진하는 것은 대국이 된 일본의 국제적 책무」라고 답하였고, 40.3%가 「일본의 중장기적 번영을 확보하기 위해서는 필요한 과정」이라고 답하고 있다. 또 「일본은 특히 어느 분야에서 일층의 국제화를 꾀해야 한다고 생각합니까」라는 질문에는 「경제」(24.8%), 「문화」(15.1%), 「의식」(8.9%), 「사회」(8.3%)면의 순으로 답하고 있다. 의식·사회면에서의 국제화가 특히 필요하다는 정부나 외부로부터의 주문을 일본인들은 확실히 인식하고 있지는 않지만 국제화를 강화해야 한다는 사실에는 대체로 동의하고 있었다.

이런 성과에 힘입어 2000년대에는 일본대중문화의 파워에 힘입은 「Japan's Empire of Cool」 「Japan's Gross National Cool」이 국내외의 주목을 받기 시작했고, 일본사회에서도 「일본문화를 보다 적극적으로 해외에 발신하여 세계인에게 다양한 측면을 갖고 있는 일본문화의 내면을 충분히 이해시키는 것이 중요하다」⁷⁾는 인식이 뿌리를 내리게 된다. 소프트파워로서 일본문화의 세계로의 발신을 효율적으로 추진하는 시스템, 이른바 政·官·財·民一体化=「All Japan」체제의 확립, 그리고 「현대문화」의 외교자원화⁸⁾ 등의 발상이 일본의 지배계급에 확산되기 시작했다. 21세기의 국격은 문화력과 직결된다는 인식과 문화력을 보유하지 않으면 「일본주식회사」에 지나지 않으며, 그래서 국제사회로부터 「존경받는 나라」는 요원하다는 교훈이 일본의 지배층으로 하여금 국제사회에서 강한 흡인력을 발휘하고 있는 「현대문화」에까지 주목하게 한 것이다.

이처럼 일본은 국제정세의 변화를 반영한 문화교류의 전략적 대응을 통해 국제사회복귀→평화국가→고도경제성장→경제선진국→경제대국→국제국가→문화대국의 이미지를 구축하는 데 성공했다. 그리고 현재 일본은 재미있고 아름답고 매력적인 일본문화의 세계적인 확산에 고무되어 「세계의 일본화」⁹⁾를 외치는 한편, 21세기의 국격으로서 문화력(전통문화+현대문화)의 중요성을 범국가적으로 재인식하여 그 가치를 극대화시키기 위한 국민적 에너지를 결집해 가고 있다.

그 과정에서 일본은 대내외적으로 문화내셔널리즘과 문화권력을 강화했다는 비판과 폐단은 피할 수 없지만, 시대적 상황을 반영한 문화교류정책의 수립, 장기적 관점에서 일본문화의 매력 전파, 올 저팬체제의 구축, 문화교류를 통한 국제공헌의 명확한 이념 제시와 실천 등의 성과를 올렸다. 여기에 문화산업의 원천으로서 역사적으로 배양해온 「토양」¹⁰⁾을 바탕으로 민간차원에서의 발신능력강화와 치열한 내부경쟁력 확보, 공고한 문화산업기반의 구축, 국민들의 문화수준 제고 등이 시너지효과를 발휘하며 작금에는 팝 컬처에 이어 「생활문화」¹¹⁾의 세계화실현에 박차를 가하고 있다.

2) 한일문화교류의 회고

7) 『外交青書』2001年度版, 外務省, p.129

8) 일본의 전 외무대신 아소타로가 2006년 4월 「문화외교의 신발상」이라는 타이틀로 행한 연설을 보면 문화외교에 필요한 것으로서 1) 현대문화의 판매, 2) 민간부문과 외무성의 호혜관계의 수립, 3) 올 저팬체제의 확립 등을 언급하고 있다. 문화를 일본외교의 핵심으로 파악하는 한편, 문화의 상품화와 발신능력의 강화를 강조하고 있다. 麻生太郎 「文化外交の新発想」2006年4月28日

http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/18/pdfs/easo_0428.pdf

9) 구사카 키민토(日下公人)는 일본문화의 창의력과 도의력이 서구제국에 비해 높다는 인식하에 21세기의 세계는 일본화한다고 주장하고 있다. 『21世紀、世界は日本化する』PHP研究所, 2000 참조

10) 일본은 근세이전부터 내외에 다양한 문화를 순수하고 관용적으로 받아들여 세련시켜온 심미안과 표현력이 성교한 공업제품을 비롯해 다양한 제품 서비스를 낳아, 현재는 팝 컬처로서 개화했다고 한다. 그리고 그 배경에는 생활양식, 풍속, 습관, 전통문화, 예능, 공예 등 역사적으로 양성해온 토양이 존재한다고 한다. 「日本文化産業戦略」アジア・ゲートウェイ戦略会議, 2007.5.16. p.1

11) 그 선두에 일본의 식문화와 패션문화가 자리잡고 있다.

동아시아에서 불기 시작한 「한류열풍」에 대해서는 다양한 분석¹²⁾이 제기되고 있지만, 일본사회에서 「한류」의 출발은 어떠한 형태로 시작되었을까. 최근 이에 대한 의외의 답이 제기된 바 있다. 방문진 SBS보도부장이 일본에서의 한류의 출발을 2002년 월드컵을 전후로 한 한국음식 붐을 통해, 일본사회의 한국음식 붐=일본인의 한국알기 노력과 한국 재발견=한국이라는 국가이미지 개선=마음으로부터의 한국문화수용이라는 등식을 제시했다¹³⁾. 매우 정확한 지적이다.

음식문화를 통한 이문화의 접촉은 일본사회의 이문화 이해의 일반적인 패턴이고, 그들 중의 일부가 매니아층을 형성하면서 확대재생산에 기여하는 구조를 갖고 있다. 국제교류기금 서울센터의 소장을 역임한 고바야시(小林直人)가 한일양국의 상호이해·상호신뢰 관계의 핵심으로서 「회화와 식사」¹⁴⁾를 언급하고 있는 것도 이에 대한 일본인들의 일반적인 사고를 대변하고 있는 것이다. 이런 현상은 70년대 후반부터 일본인들의 소비행동의 변화와 외식(外食)산업을 비롯한 문화적서비스의 융성에 젖어들기 시작한 「부드러운 개인주의」¹⁵⁾가 확산되면서 보다 더 두드러졌다. 일본사회가 한국문화에 관심을 갖기 시작한 시기는 그 연장선상인 80년대 중반부터이다.

86년 아시안게임과 88년 서울올림픽을 전후로 하여 각 방송국이 한국문화소개에 나서면서 주로 한국의 식문화를 집중적으로 소개했고 이를 통해 한국문화의 대중과의 접점을 시도했다. 이 무렵부터 한국의 식문화는 외식산업의 번성을 등에 업고 일본사회에서 비빔밥(ビビンバ), 불고기(焼き肉), 냉면(冷麵) 등을 중심으로 주목받기 시작하고, 조용필을 비롯한 일부 대중가수들의 활약이 이어지고, 한국유학생의 급증과 인적교류가 확대되면서 한국문화가 일본의 대중문화 속에 스며들 수 있는 전기를 마련하게 된다. 한국사회에서 일본과의 문화교류확대에 대한 사회적 합의가 전혀 이루어지지 않은 상태에서 한일문화교류를 일본이 주도하기 시작한 것이다.

한편 90년대 들어 일본사회에서는 일본을 인류사의 중심에 위치지워 새로운 세계사창조의 지도적 이념을 제시해 간다는 명분하에 일본문화를 강자의 보편적 이념으로 확산시켜 가려는 소위 「일본문명론」이 태동하기 시작한다. 그 내용의 핵심은 「일본과 서양사이의 문명진화의 역사적 패턴을 상대화하여 양자 간의 우열을 부정하는 것에서 일보 진전하여 세계에 발신할 수 있는 일본특유의 문명패턴을 제시」¹⁶⁾한다는 것이다. 일본문화의 외향적

12) 한류의 선행연구에 대한 정리는 많은 논문들이 언급하고 있지만, 간략하게나마 이인구의 「중국과 일본에서의 한류현상에 대한 탐험적 연구」(『마케팅관리연구』 제 12권 1호, 2007.1), 홍성태의 「한류가 한국산 제품에 대한 평가 및 구매의도에 미친 영향: 일본사례를 중심으로」(『마케팅관리연구』 제 12권 1호, 2007.1), 박상현 「한류문화산업의 반한류 재발방지에 관한 연구」 『생산성논집』(제 21권 2호, 2007.6), 윤선희 「아시아공동체의 문화정체성」(『한국언론정보학보』 통권 46호, 2009)등을 참고할 수 있다.

13) 방문진 「지속가능한 한류를 위해, 한 단계 품격 높은 한류를 위해」 『한일문화교류증진을 위한 정책보고서』 2009년 12월, p.44

14) 小林直人 「韓日文化交流の現場で」 『KOREANA』 日本語版, summer, 2007, p.1

15) 山崎正和 『柔らかな個人主義の誕生-消費社会の美学』 中公文庫, 1987, p.48~64 참조

16) 岩淵功一 『トランスナショナル・ジャパン』 岩波書店, 2001, p.79

성향의 두각은 문화적 측면서는 아시아를 포함한 세계각지에서 미국문화의 헤게모니 약화와 아시아문화의 글로벌리즘을 선도해온 일본문화의 자신감을 반영한 것이고, 국제관계 학적인 측면에서는 동북아의 급변과 냉전후의 세계질서의 변화에 주도적 역할을 다하겠다는 의지의 발로였다.

이 같은 흐름을 반영하여 일본사회는 금후 지향해야 할 진로로서 「일미관계를 굳건히 유지」 하면서, 「동북아시아와의 결합」을 꾀하고자 하는 방향성¹⁷⁾을 설정하는 한편 「아시아에의 회귀」론이나 문화대국으로의 외교노선 강화 등의 논의를 본격화했다. 특히 80년대에는 일본의 공업생산기지의 동아시아로의 이전 확대에 의한 협력강화, 동남아시아의 급속한 경제성장에 의한 문화교류확대, 그리고 동아시아의 문화향수(享受)층의 증대에 대한 적극적인 대응, 등의 필요성도 제기되어 일본사회의 「문화적 영향력」의 확대와 「아시아」는 불가분의 관계를 띠기 시작했다.

「아세안문화기금」의 창설이나 「일본·아세안종합교류계획」¹⁸⁾의 실천 등을 통해 동남아시아와의 협력관계를 강화하려 한 것은 아시아와의 문화교류를 새롭게 설정해야 한다는 정부의 의지를 표현한 것이었다. 그 연장선상에서 일본정부는 「새로운 시대에의 대응」 전략으로 1) 국제환경의 커다란 변화를 직시할 것, 2) 문화교류를 통해 신시대의 국제질서구축에 한층 더 공헌 할 수 있는 일본이 될 것, 3) 일본인과 일본사회의 국제화를 실현하여 국민 한 사람 한 사람의 참가가 가능한 국제교류를 추진할 것¹⁹⁾ 등을 제창하며 다양한 문화외교 정책들을 쏟아내기 시작했다.

이 과정에서 일본정부는 아시아 태평양지역의 미래를 구축하는 교류추진과 문화교류의 활성화를 통한 국제공헌의 중요성²⁰⁾을 확인하고, 한국과는 미래지향적인 한일관계의 방향성과 역할을 강조한 「일한 신시대 3원칙」²¹⁾을 통해 「성신(誠信)」의 교류협력을 강화하기

17) 和田春樹 「世界体制の変容と日本」 『岩波講座・日本通史 第21巻、現代2』 岩波書店、1995、p.281

18) 日本・ASEAN首脳会議における竹下内閣総理大臣冒頭発言 「日本とASEAN—平和と繁栄へのニュー・パートナーシップ」(1987年12月15日於マニラ)参照 『外交青書』 1988年度版、外務省、「資料編」所収

19) 『新しい時代の国際文化交流』 国際文化交流に関する懇談会、(1994.6)、p.2-16. 89년 5월 일본정부는 「国際文化交流に関する懇談会」의 최종보고를 받아, 9월 「国際文化交流行動計画」을 발표했다. 이 「계획」은 8개 분야로 나누어 기본정책을 확정하여, 지역별, 국가별로 세심한 배려를 하면서 사업을 추진하기로 했고(『外交青書』 外務省、1990年度版 「第2章 第5節 国際社会と日本 第2項 国際文化交流・協力の強化」 참조), 이를 계기로 「懇談会」는 정기적으로 국제문화교류의 방향성과 정책을 제안했다.

20) 90년대 들어 일본정부는 국제정세의 변화에 즈음하여 일본의 외교방향성으로서 「国際協力構想」을 구체화하는데, 그 내용은 「平和를 위한 協力」 「政府開発援助(ODA)의 拡充」 「国際文化交流의 強化」를 3대축으로 하고 있다. 요컨대 「국제문화교류강화」가 일본외교의 핵심과제로 떠오른 것이다.

21) 「日韓新時代の三原則」은 90년 5월 노태우대통령의 방일에 즈음하여 구상되어 91년 1월 가이후(海部)수상의 방한 때 의견의 일치를 보게 된다. 연속적인 수뇌회담을 통해 미래지향적인 한일관계의 방향성을 나타낸 것으로서 구체적으로는 1) 일한양국의 파트너십강화를 위한 교류, 협력, 상호이해를 증진할 것, 2) 아시아·태평양에 있어서 평화와 화해, 번영과 개방을 위해 공헌할 것, 3) 글로벌한 제 문제의 해결을 협력하여 추진할 것 등의 3원칙이다. 이에 따라 양국정부는 청소년교류 강화, 양국민의 이해를 심화시키기 위한 21세기성신(誠信) 교류사업을 추진, 지역 간의 교류강화를 위한 한일자치체교류추진회의 등을 추진했다. 『外交青書』 外務省、1991年度版 「第4章 各地域の情勢と日本との関係 第1節 アジア・太平洋 第2項 朝鮮半島」 참조. <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/bluebook/1991/h03-4-1.htm#a2>

시작했다. 요컨대 「민간이나 지방의 조직이 아시아·태평양지역과의 교류와 협력의 네트워크를 확충」²²⁾하여 이 지역의 열린 공동체의 구축에 공헌하자는 논리가 탄력을 받기 시작한 것이다.

시대적 흐름을 반영한 양국정부의 문화교류확대 의지가 실천적인 형태로 나타나고 여기에 동북아를 둘러싼 국제정세의 급변과 정보통신문화의 발달, 양국사회의 상호인식 개선 등이 어우러지면서 한일문화교류는 90년대 들어 정치분야를 제외한 거의 모든 분야에서 교류확대의 가능성을 확인하게 된다. 그 결과 한국사회의 대일인식도 점차 긍정적인 방향²³⁾으로 흐르고, 일본문화에 대한 기본인식도 「‘일본’문화에서 일본‘문화」²⁴⁾로 보편성을 띠게 된다. 그 연장선에서 발표된 98년 「한일 신시대 선언」은 양국의 변화된 상황을 상징하는 정치적 이벤트였고, 이를 계기로 한국사회의 미디어나 국민여론도 김대중정권의 유효적인 대일정책에 힘입어 전향적인 대일관²⁵⁾을 형성하기 시작했다.

그런데 월드컵을 전후로 하여 일본사회에서는 다시 한국문화 붐이 일어나기 시작한다. 배경은 역시 한국의 식문화 붐이었다. 그러나 이 무렵의 붐은 과거의 소개수준의 단계로부터 진일보하여 식문화의 과학적 분석²⁶⁾을 동반하며 소위 「한국바로알기」=친한정서로 확산되기 시작한다. 그 실체를 확인한 것이 바로 NHK발 「겨울연가」 열풍이었다. 「겨울연가」 열풍에 대해서는 다양한 각도에서의 분석이 이루어졌지만²⁷⁾ 당시 한국의 한 언론에서는 일본사회에서 「겨울연가」를 중심으로 불기 시작한 한국대중문화에 대한 관심의 증폭을 「17세기 조선통신사 이후 최대의 '韓流」로 정의하며 커다란 관심을 표명한 바 있다(조선일보 2004.11.9).

일본사회의 「겨울연가」 열풍의 이면에는 90년대 일본사회의 아시아문화에 대한 관심 증대(아시아적 정체성을 의식한 것이 아니라 ‘상품’으로서 아시아를 소비하기 시작했다는 의미)와 중년여성들의 소비문화 붐²⁸⁾이 원인(遠因)으로 작용하고 있지만, 중요한 것은 한류가 그런 원인을 발판으로 일본사회의 서구일변도의 문화지향성을 아시아로 회귀시키는 결정적인 역할을 다했다는 것이다. 이는 일본의 근현대문화사의 관점에서 보면 최초의 사례라고 할 수 있다. 그 결과 역사인식을 둘러싼 한일양국의 정서가 여전히 평행선임에도 불구하고 한일 문화교류는 시간이 흐를수록 활기를 띠었고, 양국민의 정서변화와 상호이해의 폭을 넓히기 위해서는 「윤사마」 효과가 증명하고 있듯이 문화교류의 활성화 이외에는 대

22) 『新しい時代の国際文化交流』 国際文化交流に関する歓談会, (1994.6), p.8

23) 이 부분에 대해서는 좀더 『리액션의 예술 일본대중문화』 새움, 2001, p.58~60 참조

24) 노재현 「한일문화교류 촉진을 위한 제언」 『한일문화교류증진을 위한 정책보고서』 2009년 12월, p.33

25) 이 과정에 대해서는 板倉聖恵 『한일교류와 커뮤니케이션 양태변화 연구-김대중정부의 대일 문화정책을 중심으로』 성균관대학교언론정보대학원 석사논문, 1999 참조

26) 방문진 「전계논문」 p.44

27) 일본사회의 「겨울연가」 열풍에 대해서는 다양한 각도에서 많은 연구들이 이루어졌지만, 그 중에서 일본문화의 원형질이라고 할 만한 몇 개의 개념을 통해 일본문화론의 관점에서 고찰한 박규태의 「한류담론과 일본문화」 (『일본학연구』 제 24집, 2009.2)가 매우 시사적이다.

28) 양인실 「일본의 ‘윤사마 열풍’을 어떻게 볼 것인가」 『여성과 사회』 No.16, 2005 참조. ()부분 인용은 p.204

안이 없음을 확인시켜 주었다.

필자는 일본사회에서 일고 있는 한류 붐이라고 하는 것을 매크로 관점에서 보면 근대 이후 일본인의 문화적 기억에 남아있는 「조선상」의 잔재나 그간의 부정적인 이미지를 희석시키는데 일조했다는 시각으로, 마이크로 관점에서는 일본사회가 이제야 한국문화의 저력과 다양성을 인식하기 시작한 것으로 이해하고자 한다. 역설적으로 얘기하자면 역사적으로는 약 4세기만에, 그리고 국교정상화이후 약 40년 만에 한국문화의 존재감을 일본사회가 인식하고 한국인·한국문화에 대한 이미지 전환을 「자발적」으로 시도했다는 의미이다²⁹⁾. 요컨대 일본사회의 한류 붐은 일본인들에 의해 일본인들을 위한 새로운 문화수요 창출이라는 형태로 자가발전하면서, 그런 경로가 정서적으로는 일본인들로 하여금 아시아의 정체성을 확인하는 계기가 되었다는 것이다.

이런 가치관의 변화에 힘입어 양국은 청소년교류를 축으로 한 「한일공동 미래프로젝트」의 실시(2002)와 「한일중 영리더즈 교류 프로그램」(2003)의 가동, 월드컵공최의 성공과 민간레벨의 자발적인 교류활성화를 도모하기 위한 「한일국민교류의 해」(2002)제정, 국교정상화 40주년을 기념하기 위한 「한일 우정의 해」(2005) 제정, 관광교류확대와 지방관광의 활성화를 도모하기 위한 「한일 관광교류의 해」(2008)와 「한중일 관광교류 협력」(2008)의 합의, 등을 통해 청소년·민간·지역 차원에서의 교류활성화의 기틀을 다져갔다. 여기에 「한일관광진흥협의회」의 지속적인 활동과 각 지역에서 독자성을 띠고 다양한 테마로 전개되고 있는 「한일문화교류축제」 등과 같은 이벤트 확산이 지어지면서, 관·민 공히 한일 간의 관광·문화·지역의 개념을 「교류협력」이라는 전제하에 새롭게 인식하며 교류의 저변확대를 모색하고 있다.

특히 2005년은 한국의 경우 한일수교 40주년, 해방 60주년, 을사보호조약 100주년에 해당되는 해이기도 하여 양국정부는 미래를 향해 함께 나아가는 한일신시대를 기약하며 의욕적으로 교류확대를 추진했다. 이 과정에서 일본은 한일문화교류를 주도³⁰⁾하는 전략적 대응을 통해 다방면에서 상당한 성과³¹⁾를 거두었고(특히 언론계의 교류강화는 일본의 전략적 대응이 빛을 발한 분야이다), 한국 또한 일본에서의 문화적 존재감을 조금씩 높여가고 있다. 이런 성과에 힘입어 양국의 문화교류확대는 교류의 양적 급증과 질적 변화를 바탕으로 체제의 동질성을 넘어 가치관의 공유를 향해 나아가는, 이른바 「창조적인 한일관계」로

29) 拙稿 「한일문화교류의 의의와 전망」 『日本學報』 제 64집, p.371

30) 일본의 문화력의 확대는 정부의 「지도관리」 하에 지식인과 문화예술인 그룹, 그리고 정부의 적극적 지원 등등에 업은 시민단체 등에 의해 주도되고 있다. 한일 양국의 정부 간 합의에 의해 추진되고 있는 문화교류의 내용만 하더라도 내부를 들여다보면 대부분이 일본측의 주도하에 실행되고 있다.

31) 일본문화의 영향력 확대에 발벗고 나선 일본정부의 움직임이 갈수록 강화되고 있는 가운데 싫든 좋든 한국사회에서 대일인식에 대해 「객관적 시각」을 요구하는 목소리는 높아지고 있다. 이런 현상은 일본문화의 한국에서의 정착률을 가능하게 하는 보이지 않은 「지원군」으로서의 역할을 하고 있다. 이에 비해 한국문화의 대일상륙은 일본인들의 「소박한」 시민정서에 의거하여 다소의 붐을 불러일으키는 데는 성공하였지만(특정 스타에 의거한 신드롬은 예외로 생각해야 한다), 일본사회의 국수주의의 벽을 넘어 한국문화의 강한 영향력 확대 로까지 이어지기는 쉽지 않을 듯하다.

도약할 수 있는 전기를 맞이하고 있다.

3. 한일문화교류의 패러다임변화

1) 「한일연구센터」의 설립

전후일본은 경제성장과 함께 체계적으로 추진한 문화외교³²⁾의 성과와 대중문화의 영향력을 바탕으로 아시아에서 강력한 문화적 지배력을 구축하였고, 그런 흐름을 범국가적 차원에서 세계화시키려는 의도³³⁾를 분명히 드러내고 있다. 그럼에도 불구하고 한류의 확산에 대해서는 어떤 입장을 취할지 아직 그 본색을 드러내지 않았다. 다시 말해 한류가 그다지 파괴력을 갖고 있지 않고 따라서 한국문화에 대한 본격적인 견제가 아직은 필요치 않다는 의미이다³⁴⁾. 이 부분은 향후 한국문화의 대일영향력이 강화되거나, 그에 반해 일본문화의 한국진출이 경위야 어떻든 예상 밖의 형태로 흘러가는 상황이 도래하면 일본사회의 자폐적 근대의 가치를 건드리는 단초를 제공하면서, 일본의 보수주류들로 하여금 반격에 나서게 하는 명분을 제공하게 될지도 모른다.

한일문화교류의 활성화와 이를 바탕으로 한 한일양국민의 우호적인 정서형성을 확고히 하기 위해서는 바로 이런 움직임을 극복하고자 하는 일본사회의 노력(일본정치권의 겸허한 역사인식과 보수매파들에 대한 일본사회내의 양심적 견제세력의 형성 그리고 국민들의 진지한 자기성찰 등)이 동반되어야 한다³⁵⁾. 아시아의 근대문명을 선도해 왔다고 하는 우월적 지위를 스스로 청산하지 못하고, 문화적 다양성을 존중하면서 공존·공영의 가치발신을 게을리 한다면 「매력적인 나라」는 가능할지언정 일본이 그토록 원하는 「존경받는 나라」 「신뢰받는 나라」는 요원할 것이다. 그와 함께 한국사회도 상대의 마음을 움직일 수 있는 여유를 갖고, 이를 통해 품격높은 한류를 발신하는 내적기반을 마련하고, 나아가 「아시아 아이덴티티」의 창출에 기여하는 모범적인 문화발신국으로 거듭나야 한다.

이런 흐름을 발전적으로 승화시키기 위해서는 일차적으로 양국의 위정자를 비롯해 지식인과 시민단체, 그리고 경제계의 고뇌가 필요하다. 무엇보다도 「공동의 가치」를 추구할 수 있는 협력관계의 구축과 다방면에서의 상생모델의 개발에 최선을 다한다는 공감대가 양국의 리딩그룹에서 형성되어야 한다. 특히 현재 한일문화교류에 있어서 사각지대라고 해도 과언이 아닌 양국지식인들에 의한 지적교류가 활성화되고, 그 과정에서 형성된 지적자산을 양국사회가 공유해 가는 노력을 끊임없이 기울일 필요가 있다. 금기영역 없이 모든

32) 일본의 문화외교에 대해서는 종론 「戰後日本の国際社会への復帰と文化外交」 『日本語文学』(제46집, 2009.8.31), 「戰後日本の対外経済協力構想に関する少考」 『일본학보』(제79집, 2009.5.31), 「戰後日本外交史における「文化外交」の推移と意味」 『일본학보』(제75집, 2008.5.31) 등 참조바람

33) 이 부분에 대해서는 줄져 『일본적 가치로 본 현대일본』(제 5장 14절, 2004.J&C) 참조바람.

34) 일부 뉴커머한국인들이나 극우세력들에 의한 「협한론」을 한국사회가 확대해석할 필요는 없다고 본다.

35) 이에 대해서는 줄고 「한일문화교류의 의의와 전망」(전계논문) 참조 바람.

분야에서 이 과정을 제대로 거쳐야만 한일문화교류의 진정한 의미를 확인할 수 있다는 것이 필자의 생각이다.

그동안 일본과의 지적교류를 강화하기에는 보이지 않는 장벽이 높았다. 그러나 이제는 상황이 달라졌다. 한국사회의 대일관의 성숙, 한국학계의 일본연구의 저변확충, 한국의 국제적 지위향상, 동북아공동체구상의 논의확대, 여기에 일본사회의 대한인식의 개선, 경제·민간 분야의 협력 필요성, 국제사회에 있어서 공동대응을 필요로 하는 이슈의 증대 등, 대내외적으로 한일양국이 적극적으로 협력할 수 있는(해야만 하는) 여건이 갖추어졌고 상황이 도래했다. 이 같은 상황을 양국의 미래를 위해 투자할 수 있는 발전적인 방향으로 승화시킬 필요가 있다. 이에 필자는 종합적이고 획기적인 토대 구축으로서 「한일연구센터」를 설립할 것을 제안한다.

일본은 이미 90년대부터 「일미센터」를 운영하여 「일미관계의 긴밀화」와 「일미양국의 공동에 의한 세계에의 공헌」이라는 목적하에 「글로벌 파트너십 추진을 위한 지적교류」 「지역레벨·민초레벨에서의 상호이해의 추진」을 정부차원에서 추진해 왔다. 새로운 국제교류기관으로서 일미의 협력과 국제적 책임의 공유를 바탕으로 확고한 협력 관계를 구축하겠다는 의도였다. 일미센터의 설립은 정부의 PR이 될 수 있다는 일부의 비판적 시각이 미국측에서 제기되기도 했지만, 센터설립이후 양국은 각종현안을 「세계적 시야」에 입각하여 협력하는 성과를 올렸다. 동시에 인재의 육성과 일미를 중심으로 한 각종 네트워크 확충 등이 자연스럽게 이루어졌다.

이로 인해 양국의 관계는 기존의 「가장 중요한 2국 관계」에서 「가장 중요한 글로벌 관계」로 격상됨과 동시에 지역레벨에서의 국제화, 미국의 일본어교육의 강화, 일미 정치교류의 확대 등, 동 센터는 양국의 교류활성화를 범사회적으로 확산시켜가는 토대가 되었다. 특히 글로벌 과제에 대한 공동연구를 통해 경제·무역분야, 안전보장분야, 의료·고령화분야에서 학술적 성과도 축적했다. 결국 일미센터는 「일본에 있어서 새로운 지적교류, 민초교류의 촉진기관으로서의 역할을 다했다」³⁶⁾는 자평처럼 당초의 우려를 불식하고 양국의 가치관의 공유와 인적·조직적 네트워크의 확충에 성공함으로써 일미 간의 지적교류를 새로운 차원에서 활성화시켜 갔다.

일미센터가 추진한 각종현안과 결과의 축적은 한일연구센터의 성공적 모델이 될 수 있을 것이다. 센터의 설립을 통해 우선 제도적 측면에 있어서는 양국의 지적재산권을 보호하기 위한 공동협력방안의 노력, 양국 간 혹은 지역 간 문화교류활성화를 위한 제도적 방안 제시와 문화산업을 활성화시키기 위한 협력시스템의 구축, 나비효과를 극대화 할 수 있는 산업 간의 연계방안 강구, 시민레벨에 있어서의 문화적 네트워크 확충, 지역 간의 문화교류활성화와 이를 공유할 수 있는 장(場)의 지속적인 확보 방안 등을 강구해야 한다. 또 가치발신의 측면에 있어서는, 자폐적 민족주의를 극복할 수 있는 문화교류의 효과적인 방향

36) 『國際交流基金日米センター2000年度年報』國際交流基金, 2002, p. 3

성 제시, 공동대응을 필요로 하는 글로벌과제의 발굴, 창의적이고 우수한 아시아문화의 서구사회에의 발신노력 강화, 동서양의 문화공존과 문화적 다양성을 존중하는 가치 확립 등의 방안을 제시하여 그 결과를 아시아제국과 공유해 가는 역할을 다해야 한다. 이른바 실천적 협력 토대구축→공유할 수 있는 가치발신→아시아의 문화적 정체성 확립에 기여하는 구도의 확립이다.

일국주의의 입장에서는 실현 불가능한 이 같은 과제들이 한일연구센터를 통해 단계적으로 추진된다면 일미센터가 기존의 일미관계를 재정립하는 계기로 작용했듯이 한일 양국의 관계를 동아시아, 나아가 태평양시대를 선도함에 있어 가장 중요한 동반자관계로 격상시킬 수 있는 전기를 마련할 것이다. 한일교류의 패러다임의 전환을 통해 구호가 아닌 실천적 동반자 관계를 확립함으로써 양국의 지식인들은 대내외적으로 아시아의 평화와 안정 그리고 공영과 공생에 기여 할 수 있는 미래 가치를 발신하는 환경을 만들어가고, 이를 바탕으로 민간레벨에서는 정서와 가치를 공유할 수 있는 개방화된 사회시스템과 네트워크의 조성에 진력하는 토대를 마련해 간다는 것이다.

한일교류·협력을 바탕으로 한 동아시아의 문화적 상생(cultural conviviality)과 정체성을 확립해 가는 노력은 일본의 동아시아의 정서적 접근을 용이하게 하는 상생모델(win-win model)이 될 것이다. 근대이후 일본은 탈아입구(脫亞入歐)와 열서제아(劣西制亞)의 모습으로 탈 아시아를 일관되게 추구하며 아시아인들의 심기를 불편하게 했던 전력이 있어, 작금의 동아시아 공동체구상의 실현을 어렵게 하는 측면이 있다. 특히 1977년의 후쿠다 다케오 수상이 아세안을 상대로 천명한 「외교 3원칙」이나, 95년 「무야야마 담화」 등이 아시아의 마음을 움직이는데 실패함으로써 일본이 주도하는 「동아시아론」이 환영받지 못하고 있다. 이로 인해 일본은 경제협력과 문화교류확대를 축으로 하는 EPA전략을 통해 보다 더 진전된 형태의 동아시아공동체구상³⁷⁾을 하고 있지만, 이 또한 그 진정성에 대해서는 논란의 여지가 많은 것이 사실이다.

일본에 대한 아시아의 냉소적 기억의 축적은 일본이 아시아인들의 마음을 움직이기가 그만큼 어려워졌다는 것을 의미한다. 아시아에서 가장 먼저 「근대화」된 일본은 「문맹사회」에 불과했던 아시아제국에 대해 끊임없이 「맹주」로서의 패권의식과 역할론(지도·계몽)의 환상에 사로잡혀 폐쇄적인 우월의식을 버리지 못하고, 결국은 아시아제국에 엄청난 고통을 안겨주었다. 서구제국에 대해 품고 있던 일본적 마조히즘의 열등감이 상대적으로 아시아 제국에 대한 우월감과 공격성으로 나타난 것이다. 이런 일본인들의 의식구조를 미나미 히로시(南博)는 「일본적 새디즘」³⁸⁾으로 명명한 바 있지만, 이 과정에서 일본인들의 행동양식으로 표출된 열서우아(劣西優亞) 의식과 전후의 열미우아(劣米優亞)의식이 일본사회를 지배하고 있었음을 아시아는 기억하고 있다.

37) 일본의 EPA전략에 대해서는 줄고 「일본의 ‘동아시아 경제권’구상에 관한 소고」 (『일본학보』 제 69집, 2006.11)참조.

38) 南博 『日本の自我』岩波新書, 1983

따라서 일본은 한일연구센터와 같은 새로운 형태의 교류협력기관을 통해 경제실익을 위해서가 아닌 정서적인 측면에서 「아시아에의 회귀」를 실현하겠다는 확고한 의지를 표명해야 한다. 목적지향적 일본문화의 전파나 국가의 품격향상노력도 중요하지만 아시아의 구원(舊怨)을 해소하고 미래의 문명사회를 건설하기 위한 실질적 「역할」을 새롭게 설정하는 것도 중요하다. 한국 또한 성숙한 자세로 일본의 「역할」이 아시아인의 마음을 움직일 수 있는 방향으로 나아갈 수 있도록 유도하고 협력하는 동반자 「역할」을 다해야 한다. 양국의 충실한 상호보완적 「역할」수행은 중국을 움직이게 하면서 궁극적으로는 동아시아의 문화적 정체성(cultural identity)을 확립해 가는 과정이 될 것이다.

2) 한일양국의 지적교류확대가 지향해야 할 가치

동아시아에 있어서의 한류열풍의 배경을 국제관계학적 관점에서 고려하면 동아시아 지역의 문화적 정체성의 혼돈상태에서 발생³⁹⁾것이라는 견해가 있다. 경제성장에 따른 문화욕구를 충족시키지 못하는 중국의 사회주의 이데올로기의 한계와 홍콩발 문화적 모델의 쇠퇴, 여기에 일본문화의 추종에 대한 저항심리⁴⁰⁾ 등이 복합적으로 작용하면서 생긴 문화적 공백을 한류가 메차기 시작했다는 것이다. 논란의 여지가 많으면서도 부정하기 어려운 논점이지만, 동아시아에 있어서 정치·경제·문화적 역학관계의 변화와 일류에 의한 초국적 가치가 이미 동아시아 문화계를 지배했던 경험을 상기하면 한류의 부각은 그리 놀라운 일은 아닐 듯하다.

동아시아에 있어서의 한류 「열풍」론에 대한 한국사회의 과도한 자기중심적 반응은 비판받아 마땅하다. 그러나 한 가지 분명한 것은 한류가 「서구와 일본의 지배적 영향력 아래 재편되어온 아시아 대중문화의 지형을 보다 다층적이고 복합적으로 작용하는 권력구조로 전환」⁴¹⁾시키고 있다는 점이다. 한류의 등장으로 초래된 동아시아 문화지형의 복합·중층(重層)적 구도는 글로벌라이제이션의 의미를 새롭게 정의해야 할 필요성을 제기하면서, 한편으로는 한류가 동아시아의 문화적 정체성의 혼미를 극복하고 이를 통합할 수 있는 하나의 대안적 역할 내지는 동아시아의 문화적 정체성의 확립에 기여할 수 있는 가능성을 제시했다고 볼 수 있다.

다시 말해 한류가 새롭게 부여받은 시대적 역할에 주목하고 그 잠재적 가능성을 극대화하기 위한 방법론, 예를 들면 각국과의 지적교류의 전략적 확대와 문화수용의 실제적 주체인 민초레벨에서의 문화융합 등과 같은 노력들이 체계적이고 유기적인 형태로 한류에 실려 확산될 수 있다면 상황은 달라질 수 있다는 것이다. 이를 실현하기 위해서라도 향후의

39) 김윤호의 「IT혁신과 한류열풍」 『한국해양정보통신학회논문지』 제 9권 4호, 2005 p.700

40) 이와부치(岩淵功一)는 과거의 식민지 한국 대만이 일본의 포퓰러문화수입에 관해 규제를 완화했다고 하더라도 그것이 일본의 과거의 침략행위를 망각하거나 역사적으로 구축되어 온 문화적인 권력관계가 문제시되지 않는 것은 아니라는 지적을 하고 있다. 『トランスナショナル・ジャパン』 岩波書店, 2001, p.55

41) 양은경 「동아시아문화정체성의 형성과 텔레비전의 소비」 『한국방송학보』 제 20권 3호, p.201

문화연구는 「아시아라는 경계성에서 초국적 단위로 접근하여 밑으로부터의 역동성을 설명하기 위한」⁴²⁾노력을 기울일 필요가 있지만, 이와 관련된 일련의 제언들이 최근 한일양국에서 잇따라 제기되고 있다⁴³⁾.

김영덕은 문화교류의 확대에 의한 트랜스 내셔널 현상을 감안하여 한일양국의 문화교류 확대가 「국가성」을 넘어 「하이브리드형 문화」나 「아시아 지향문화」 또는 양자의 문화 융화로 촉발되는 새로운 문화등장 등, 다양한 문화의 생성을 초래할 수 있을 것으로 전망했다⁴⁴⁾. 문화교류를 문화생산자나 문화내용이 아닌 최종적인 목적지인 시민이나 수용자 입장에서 접점을 모색, 풀뿌리 차원에서 네트워크를 강화하여 아시아가 공유할 수 있는 문화를 발신하자는 주장이다. 이와 관련하여 윤선희는 공동체성이 가장 희박한 아시아의 정체성을 희미하게나마 밑으로부터 표상하는 것으로서 한류를 위시한 미디어교류와 수용을 강조하면서 국제적 단위에서 정체성의 문제⁴⁵⁾를 제기하고 있다.

한일문화교류의 확대를 통해 아시아의 문화를 주목하고 그 정체성을 추구하고자 하는 움직임은 동아시아의 새로운 지역주의를 예고하는 전조라고 할 수 있지만 이점에서 기시모토(岸本健夫)의 논점은 실천적이다. 그는 동아시아에 공통하는 적극적인 아이덴티티가 부족하다는 전제하에, 아이덴티티를 긍정적인 가치를 지닌 것으로 해석하여 이를 인간관계의 시스템, 즉 사회시스템의 확립에서 구할 필요가 있다고 했다⁴⁶⁾. 그 중심은 EU공동체에 있어서 독일과 프랑스가 핵심인 것처럼 한국과 일본이어야 하고 실제 그런 가능성을 확인한 것이 월드컵공취였다고 한다. 따라서 체제의 동질성을 확보하고 있는 한일(+대만)이 동아시아지역에 있어서 이러한 시스템의 확립을 선도한 뒤 중국을 비롯한 아세안의 성장을 촉진시키는 3단계의 방향성이 동아시아의 이질성을 극복하고 새로운 질서를 구축할 수 있는 지름길이라는 주장이다.

필자는 김·윤의 방향성과 기시모토의 방법론에 동의할 표하고 있다. 현재 한일양국은 사회문화적 관점에서 보면 생활수준의 격차가 거의 없고 문화의 우열(優劣)적 사고로부터도 비교적 자유로우며 미래가치를 공유할 수 있는 정서적 유대감도 조금씩 두터워지고 있다. 경제문화라는 측면에서는 기업문화가 유사하고 제조업의 융성을 뒷받침하는 노동윤리가 근접해 있으며, 미래산업에서 시너지효과를 발휘할 수 있는 기술력도 축적하고 있다. 역사인식과 영토문제를 둘러싼 반목이 거듭되고 있지만 문화교류확대는 시간이 흐를수록 가치 공유의 기반 구성에 기여하고 있고, 수출과 성장이라는 동일한 경제구조하에서 표면

42) 윤선희 「아시아공동체의 문화정체성」(전계논문), p.43

43) 한일양국에서 다양한 제언들이 쏟아지고 있지만 이 가운데 큐슈대학의 아시아종합정책센터, 동국대학교 일본학연구소, 중국사회과학원 일본연구소 등이 협력하여 동아시아의 새로운 지역공동 아이덴티티를 형성하기 위한 실증적 검토를 추진한 것 등은 주목할 만하다. 坪田邦夫 「동아시아(일중한)의 새로운 지역공동 아이덴티티의 형성에 관한 실증적 종합연구 구상」 『日本學』 제 25집, 2006, 참조

44) 김영덕 「한일문화교류 신시대, 과제와 전망」 『한일문화교류증진을 위한 정책보고서』 2009년 12월, p.12

45) 윤선희 「아시아공동체의 문화정체성」(전계논문) 참조

46) 岸本健夫 「“東アジアのRegionalism”への新しい視覚」 『政策科学』 10-2, 2003.1. p.2

적으로는 치열한 경쟁구도가 전개되고 있지만 내부적으로는 협력하지 않으면 안 된다는 공감대 또한 강하게 형성되어 있다.

수세기 동안 이어져온 상대적 문화우월주의는 불과 20여년 사이에 붕괴의 조짐을 보이고 있고, 서로가 상대를 이해하고 배우려는 자세가 지금처럼 강하게 표출된 적이 일찍이 없었을 정도로 양국의 관계는 미래를 향하고 있다. 양국지식인들에 의한 「한일병합조약무효」라는 공동성명의 발표는 그런 흐름을 상징하는 일례이다. 전후사를 되돌아보면 한일양국의 고도경제성장 이후 형성된 경쟁과 협력구도는 양국뿐만 아니라 동아시아의 경제성장과 사회발전, 그리고 동아시아의 문화와 생활수준의 제고에 크게 기여하는 형태로 발전해 왔다. 80년대 초 동남아시아의 「Look East」 정책은 대표적인 사례이고 그런 역사는 앞으로도 상당기간 지속될 가능성이 높다. 여기에 중국이 문화·제도적인 측면에서 미래의 동질성을 확보하기 시작한다면 아시아의 문화적 정체성=아시아 아이덴티티의 확립은 그 시기를 앞당기게 될 것이다.

전후 동아시아는 일본을 필두로 한 경제 「기적」에도 불구하고 역사·문화·지리·종교·인종 등이 다양하여 동일한 가치관을 공유하기가 쉽지 않은 지역이다. 게다가 동아시아의 각 지역에서는 문화적 다양성과 정체성을 인정받으려는 움직임도 확산되고 있다. 이를 Richard Englehardt는 세계화의 물결 속에 자칫 잃어버릴 수도 있는 자신들의 고유한 문화를 지키려는 「정체성의 정치(identity politics)」⁴⁷⁾로 표현하고 있다. 그러나 이러한 움직임은 동아시아의 교류활성화를 촉진시키는 요인이 될 수 있다. 문화 간의 대화를 통한 상호이해 없이 문화적 다양성을 인정받기는 어렵기 때문이다. 그 만큼 교류기반이 확대되고 있다는 의미이다. 실제 빔스텝(BIMSTEC)⁴⁸⁾의 문화산업협력체제의 구축은 그 가능성을 확인하고 있는 사례로서, 향후 이 지역의 문화산업 발전을 위한 협력적사고 형성에 크게 기여 할 것으로 보인다.

유네스코도 2005년에 채택한 「문화표현의 다양성」을 통해, 문화 활동, 상품 및 서비스 등은 경제적 속성과 문화적 속성을 공유하고 있으며, 정체성, 가치, 의미를 전달하고 있기에 상업적 가치로만 단순히 취급해서는 안 된다는 정의하에 국제적 차원에서의 협력과 대화를 촉진하고 있다. 이러한 움직임은 문화가 「단순한 소비자 상품이 아니라 개인과 공동체가 가지는 정체성의 표현」⁴⁹⁾이라는 사실을 뒷받침 하는 것이다. 따라서 한일양국의 지적교류는 실질적인 협력과 대화를 통해 정체성의 문제들을 적극적으로 제기하고 이를 다시 지역 협력체와 공유할 수 있는 환경을 조성하는 형태로 아시아 아이덴티티의 창출을

47) Richard Englehardt 「Cultural Liberty and Freedom of Expression:Lessons from Asian Experience」 『International Forum on Cultural Rights and Diversity』 한국문화관광연구원, 2007, p.55

48) BIMSTEC=Bay of Bengal Initiative for Multi-Sectoral, Technical and Economic Cooperation, comprising Bangladesh, Bhutan, India, Myanmar, Nepal, Sri Lanka and Thailand. Richard Englehardt 「전계논문」 p.63. 각국의 문화부장관들은 2006년 5월에 'Paro Initiative'라는 문화산업증진 협력을 위한 선언을 채택했다.

49) Yvonne Donders 「Cultural Diversity and Human Rights:Towards a Right to Cultral Identity?」 『International Forum on Cultural Rights and Diversity』 (전계서,) p.124

위한 기반다지기에 진력해야 한다.

그동안 한국사회는 동아시아공동체론을 주도해 오면서 일본의 경제협력을 축으로 한 기능적 접근법과는 달리 문화적 동질성을 강조하는 담론이 주류를 이루었다. 이어령과 정재서가 제기한 한중일 문화유전자지도의 제작과 이를 통한 동아시아문화의 공유기반 확인 작업⁵⁰⁾ 등은 마치 한국의 동아시아담론의 귀착지인 것처럼 보인다. 전통문화의 토대발굴과 창조적 활용을 통해 동아시아문화의 정체성과 세계문화의 다양성을 확보하고자 하는 의도는 일견 설득력이 있어 보인다. 하지만 한 걸음 더 나아가기 위해서는 「문화의 근대성(cultural modernity)」⁵¹⁾속에서 미래의 가치를 발굴해 내는 문제의식, 요컨대 동아시아문화 전반의 근대성 확보를 위한 거시적 관점에서의 논의와 이를 구체화할 수 있는 협력체제의 구축이 필요하다.

농경문화의 전통을 살려 자연친화적인 문화경관을 조성하는 가치라든가, 지역과 계층에 구애받지 않고 모두가 함께 향유할 수 있는 문화민주화(cultural democracy)의 실현, 상호이해와 상호존중의 문화의식이 지역과 이념을 극복하며 화해와 평화에 기여하는 글로컬문화의 창출을 초래할 수 있다는 것, 등과 같은 과제를 제시하고 함께 실천해 가야 한다는 것이다. 그런 노력이 바로 아시아인의 삶의 가치를 제고하는 실질적인 방안이자 도달해야 할 공동체상임을 공히 인식해야만, 초국가적인 관점에서 공통의 「위협」에 대처하고, 일국주의를 초월한 공동의 「이익」과 「목적」을 추구하고, 문화시민으로서 공유할 수 있는 「가치」를 만들어 실천하고, 궁극적으로는 세계의 문명사에 공헌할 수 있는 아시아 아이덴티티를 확립해 갈 수 있다.

4. 결론

90년대 들어 일본은 동아시아의 경제성장과 문화수준의 향상을 배경으로 동아시아로의 회귀를 주창하고 있다. 그 과정에서 일본은 기능적인 경제공동체를 전제로 한 다양한 동아시아론을 제창한바 있지만, 그 진의에 대한 아시아제국의 우려감은 쉽게 사라지지 않았다. 그 와중에 동아시아의 새로운 문화현상으로 주목받기 시작한 한류는 동아시아의 문화지형을 변화시킬 만큼 저력을 발휘했고, 향후의 노력여하에 따라서는 독자적인 문화력을 구축

50) 이어령 『한·중·일 문화읽기 코드를 퍼내며』(종이나라, 2006) 및 정재서 「동아시아로 가는 길-한중일 문화유전자 지도 제작의 의미와 방안」 『중국어문화지』(제 31집, 2009) 참조. 또 김형국·김석근 「동북아문화공동체 형성을 위한 여건과 전망:문화적 동질성과 다양성 그리고 정체성」 『세계지역연구논총』(제 23집 1호)등도 문화적 동질성을 바탕으로 동북아문화공동체논의를 발전시키자는 제안을 하고 있다. 그런데 이들 논문의 특징은 간단히 언급하자면 문화나 사상의 동질성이 과거에 존재했기에 이를 토대로 향후의 문화적 정체성을 만들어 가자는 것인데, 아쉬운 것은 향후 구체적으로 실현가능한 방향성과 방법론을 제시하고 있지 않다는 것이다.

51) Iris Jana Magdowski 「Culture Diversity: Tradition and the Challenge Facing Political Europe -Germany for Example」 『International Forum on Cultural Rights and Diversity』(전제서), p.179에서 재인용.

할 가능성마저 대두되었다. 하지만 그 영향력의 극대화를 위해서는 문화·사상적으로 일본·중국과의 협력관계를 구축해야 하고, 이를 통해 아시아의 미래가치를 발신해 가는 전략적 접근이 필요하다. 한일문화교류의 진전을 바탕으로 「한일연구센터」의 설치를 주창한 배경이 여기에 있다.

향후 센터는 적극적인 지적교류·협력을 통해 아시아를 지향하는 가치발신에 주력하면서, 동아시아의 문화융합·생성의 토대를 마련하는데 초점을 맞추어야 한다. 향후 동아시아에서는 문화다양성에 대한 인식을 바탕으로 자국의 문화적 긍지와 정체성을 확보하려는 노력이 확산될 것이다. 한일양국은 이러한 움직임에 존중해야 한다. 그런 노력을 경시한 채 자국의 가치전파나 상업적 이익만을 추구하게 된다면 동아시아에 존재하는 문화적 다양성을 훼손시킬 뿐만 아니라 자칫하면 90년대 일본의 국민감정으로서 「내셔널리즘」⁵²⁾의 분출과 같은 현상을 각국에서 유발할 수도 있다. 이를 사전에 방지하기 위해서라도 문화간 대화를 강화하고 실천할 수 있는 협력시스템을 구축하여 동아시아의 문화공동체를 구현하는데 앞장서야 한다. 그 책무를 소홀히 하면 동북아의 평화와 번영은 물론이고, 동아시아의 번영 또한 순탄하지 않을 것임을, 양국의 지정학적, 정치적, 경제적, 문화적 측면과 영향력이 증명하고 있다.

◀ 参考文献 ▶

- 김영덕(2009) 「한일문화교류 신시대, 과제와 전망」 『한일문화교류증진을 위한 정책보고서』 2009년 12월
 김윤호외(2005) 「IT혁신과 한류열풍」 『한국해양정보통신학회논문지』 제 9권 4호
 김필동(2001) 『리액션의 예술 일본대중문화』 새움
 _____(2004) 『일본적 가치로 본 현대일본』 J&C
 _____(2005) 「한일문화교류의 의의와 전망」 『日本學報』 제 64집
 _____(2009) 「戦後日本の国際社会への復帰と文化外交」 『日本語文学』 제46집
 _____(2009) 「戦後日本の対外経済協力構想に関する少考」 『일본학보』 제79집
 _____(2008) 「戦後日本外交史における「文化外交」の推移と意味」 『일본학보』 제75집
 _____(2006) 「일본의 ‘동아시아 경제권’구상에 관한 소고」 『일본학보』 제 69집
 김형국·김석근 「동북아문화공동체 형성을 위한 여건과 전망:문화적 동질성과 다양성 그리고 정체성」 『세계지역연구논총』 제 23집 1호
 노재현(2009) 「한일문화교류 촉진을 위한 제언」 『한일문화교류증진을 위한 정책보고서』 2009년 12월
 박규태외(2009) 「한류담론과 일본문화」 『일본학연구』 제 24집
 박상현(2007) 「한류문화산업의 반환류 제발방지에 관한 연구」 『생산성논집』 제 21권 2호

52) 90년대 일본의 내셔널리즘의 특징은 국가이데올로기로서의 내셔널리즘의 급격한 후퇴와 이를 대신하여 사회현상으로서 혹은 국민감정의 분출로서의 내셔널리즘이라는 특징을 나타냈다고 한다. 이 경우 사회현상 국민감정의 키워드는 「불안화」 「보수화」이다. 경제성장과 사회안정이 어느 정도 실현된 이후에 나타나는 질서붕괴에 직면하여 강자의 논리가 사회전체를 지배해가는 현상이라는 것이다. 天児慧 「ナショナリズム、リージョナリズム、グローバリズム」 『東洋政治思想史』 제 5권 1호, p.216. 이러한 현상은 앞으로 동아시아에서 얼마든지 발생할 수 있다. 요컨대 동아시아 각국이 경제성장을 이룩한 사회적 가치나 시스템이 붕괴되고 그 과정에서 이 문화에 의한 억압상태가 지속된다면, 이를 거부하면서 자신들의 문화적 정체성을 확보하려는 움직임이 분출할 수 있고, 이러한 흐름이 대세를 이루게 되면 바로 저변으로부터 내셔널리즘을 자극하는 현상이 된다는 것이다.

- 방문진(2009) 「지속가능한 한류를 위해, 한 단계 품격 높은 한류를 위해」 『한일문화교류증진을 위한 정책보고서』 2009년 12월
- 양은경(2006) 「동아시아문화정체성의 형성과 텔레비전의 소비」 『한국방송학보』 제 20권 3호
- 양인실(2005) 「일본의 ‘욘사마 열풍’을 어떻게 볼 것인가」 『여성과 사회』 No.16
- 윤선희(2009) 「아시아공동체의 문화정체성」 『한국언론정보학보』 통권 46호
- 이어령(2006) 『한·중·일 문화읽기 코드를 펴내며』 종이나라
- 이인구외(2007) 「중국과 일본에서의 한류현상에 대한 탐험적 연구」 『마케팅관리연구』 제 12권 1호, 2007.1
- 정재서(2009) 「동아시아로 가는 길-한중일 문화유전자 지도 제작의 의미와 방안」 『중국어문학지』 제 31집
- 홍성태외(2007) 「한류가 한국산 제품에 대한 평가 및 구매의도에 미친 영향 : 일본사례를 중심으로」 『마케팅관리연구』 제 12권 1호, 2007.1
- 『わが外交の近況』 1971年度版, 外務省
- 『わが外交の近況』 1981年度版, 外務省
- 『外交青書』 1988年度版, 外務省
- 『外交青書』 外務省, 1990年度版
- 『外交青書』 外務省, 1991年度版
- 『外交青書』 2001年度版, 外務省
- 『国際交流基金日米センター2000年度年報』 国際交流基金, 2002,
- 『新しい時代の国際文化交流』 国際文化交流に関する歓談会, 1994.6
- 「日本文化産業戦略」アジア・ゲートウェイ戦略会議, 2007.5.16.
- 麻生太郎(2006) 「文化外交の新発想」 2006年4月28日
- 板倉聖恵(1999) 『한일교류와 커뮤니케이션 양태변화 연구-김대중정부의 대일 문화정책을 중심으로』 성균관대학교 언론정보대학원 석사논문, 1999
- 岩淵功一(2001) 『トランスナショナル・ジャパン』 岩波書店
- 岸本健夫(2003) 「“東アジアのRegionalism”への新しい視覚」 『政策科学』 10-2
- 日下公人(2000) 『21世紀、世界は日本化する』 PHP研究所
- 後藤和子(1998) 『芸術文化の公共政策』 勁草書房
- 小林直人(2007) 「韓日文化交流の現場で」 『KOREANA』 日本語版, summer
- 坪田邦夫(2006) 「동아시아(일중한)의 새로운 지역공동 아이덴티티의 형성에 관한 실증적 종합연구 구상」 『日本學』 제 25집
- 天兒慧 「ナショナルリズム、リージョナルリズム、グローバルリズム」 『東洋政治思想史』 제 5권 1호
- 根木昭(2001) 『日本の文化政策』 勁草書房
- 馬場憲一(1998) 『地域文化行政の新視点』 雄山閣出版株式会社
- 南博(1983) 『日本的自我』 岩波新書
- 山崎正和(1987) 『柔らかな個人主義の誕生-消費社会の美学』 中公文庫
- 和田春樹(1995) 「世界体制の変容と日本」 『岩波講座・日本通史 第21巻, 現代2』 岩波書店
- Iris Jana Magdowski(2007) 「Culture Diversity:Tradition and the Challenge Facing Political Europe -Germany for Example」 『International Forum on Cultural Rights and Diversity』 한국문화관광연구원
- Richard Englehardt(2007) 「Cultural Liberty and Freedom of Expression:Lessons from Asian Experience」 『International Forum on Cultural Rights and Diversity』 한국문화관광연구원
- Yvonne Donders(2007) 「Cultural Diversity and Human Rights:Towards a Right to Cultral Identity?」 『International Forum on Cultural Rights and Diversity』 한국문화관광연구원

■ 투 고 : 2010. 5. 31.

■ 심 사 : 2010. 6. 12.

■ 심사완료 : 2010. 7. 10.

日本學報 편집 및 심사에 관한 규정

1. 편집위원회의 구성과 임무

제1조 본 위원회는 韓國日本學會 편집위원회(이하 본 위원회로 함)라 부른다.

제2조 본 위원회는 韓國日本學會 안에 둔다.

제3조 본 위원회는 韓國日本學會 정관에(제3장 제8조)에 의거하여 20명 내외의 국내 편집위원과 약간 명의 해외 편집위원으로 구성하며, 편집위원장과 편집간사를 둔다.

제4조 본 위원회는 학회지에 게재될 논문의 심사위원의 선정을 비롯하여 학회지 편집에 관한 모든 업무를 주관한다.

제5조(편집위원장) 편집위원장은 韓國日本學會 회장(이하 본회 회장으로 함)이 추천하여 이사회의 인준을 얻어 위촉하며 학회지의 편집회의를 주재하고 위원회의 諸般 업무를 총괄한다. 편집위원장의 임기는 2년 단임으로 한다.

제6조(편집위원) 편집위원은 연구업적이 뛰어난 회원 가운데 편집위원장의 추천을 받아 본회 회장이 위촉한다. 편집위원은 편집회의에 참석하여 전공 영역별로 학회지 편집에 관한 업무를 담당하며 임기는 2년으로 한다.

제7조(편집간사) 편집간사는 학회의 편집이사가 겸임하며 편집위원회에서 결정된 심사 논문의 송부 및 심사 결과를 취합·보고하고, 학회지의 출판에 관련된 제반 연락 업무를 담당한다. 편집간사의 임기는 2년으로 한다.

2. 회의

제8조(정기편집회의) 제1차 정기편집회의는 학회지 투고논문의 마감일로부터 15일 이내에, 제2차 정기편집회의는 심사 종료일로부터 10일 이내에 소집하는 것을 원칙으로 한다.

제9조(임시편집회의) 임시편집회의는 필요에 따라 편집위원장이나 5인 이상의 편집위원의 동의에 의해 위원장이 소집한다.

제10조(상임심사위원의 활용) 편집위원회는 논문심사의 형평성과 효율성을 고려하여 전공별 상임심사위원을 구성하여 심사위원 선정에 활용할 수 있다.

3. 심사 규정 및 절차

제11조(심사의 주관) 논문집의 심사 과정은 본 위원회에서 주관한다.

제12조(심사위원의 위촉) 투고 논문의 심사위원은 제1차 정기편집회의에서 전공 영역에 따라 심사 대상 논문의 담당 편집위원이 3인 이상의 복수로 선정하고 본 위원회의 승인을 받아 위촉한다.

제13조(심사위원) 심사위원은 韓國日本學會 심사서 양식에 의거하여 공정한 심사를 수행하며, 심사위원은 투고자에게 비공개로 한다.

제14조(논문심사비) 韓國日本學會 소정의 논문 심사비를 심사위원에게 지급하며 논문심사비 영수증은 논문 심사서로 대신한다.

제15조(심사의 기준) 심사는 ‘논문의 목적과 동기의 명확성’ ‘논문의 창의성’ ‘논지 전개 의 정합성 및 내용의 충실도’ ‘참고문헌의 인용도 및 결과의 학계 기여도’ ‘용어의 통일성 및 제반 형식의 논문투고규정에 대한 부합도’의 다섯 항목에 대해 각 20점 배점으로 총점 100점으로 한다.

제16조(심사 결과) 본 위원회는 심사위원의 심사 결과를 바탕으로 제2차 정기편집회의에서 ‘게재가’ 또는 ‘재투고’로 결정한다.

제17조(심사 결과의 통보) 해당 편집간사는 제2차 정기편집회의 결과를 신속하게 논문 투고자에게 통지하며, 심사위원 인적사항 및 점수를 제외한 심사서를 함께 송부한다.

제18조(게재가 논문) 제2차 정기편집회의에서 ‘게재가’ 판정을 받은 논문에 대해서는, 심사서의 수정 요구 등을 반영한 최종 논문을, 결과 통보 10일 이내에 해당 편집간사에게 송부한다.

제19조(재투고 논문) 제2차 정기편집회의에서 ‘재투고’ 판정을 받은 논문은, 주제나 방법·결과에 있어서 수정 없이 재투고할 수 없다.

제20조(투고 제한) 게재가로 결정되거나 게재된 후에도 표절 및 중복 게재가 밝혀질 경우에는 연구윤리위원회의 의결에 따라 게재를 취소하고 이후 최소 3년간 논문 제출을 제한한다.

제21조(논문게재예정증명서) 논문게재예정증명서는 게재가로 결정된 논문에 대해 편집위원장의 확인을 거쳐 본회 회장의 명의로 발행한다.

日本學報 투고규정

A. 접수 및 심사

<접수분야> 일본어학, 일본문학, 일어교육학, 일본역사문화학, 일본교육학, 일본민속학, 일본정치경제학, 기타 일본학 관련 분야

<접수마감> 논문의 접수는 수시로 하되 마감일은 다음과 같다.

2월 28일, 5월 31일, 8월 31일, 11월 30일

<투고자격> 본 학회 회원으로서 학회의 정기학술발표회나 분회 또는 연구회에서 구두 발표를 마친 경우에 투고 자격을 부여한다.

<심사> 논문은 日本學報의 투고규정과 <논문 작성요령>에 맞게 작성된 것만을 심사 대상으로 하며, 제출된 논문은 해당 분야 전문가의 복수 심사를 거쳐 편집위원회에서 게재 여부를 결정한다. 합격 논문이 많을 경우에는 게재를 다음 호로 미룰 논문을 편집위원회에서 결정한다.

<학회지 발간> 연간 4회 발간(2월 28일, 5월 31일, 8월 31일, 11월30일)

B. 투고 규정

1. **내 용:** 독창적인 내용으로 기존 국내의 학술지에 게재되지 않은 것으로 한다.
2. **사용언어:** 일본어 또는 한국어로 작성하는 것을 원칙으로 한다.
3. **외 래 어:** 일본어를 한글로 표기할 때는 한글맞춤법의 외래어표기법에 따른다.
4. **분 량:**<日本學報 논문작성 요령> 대로 작성했을 때, 요지, 본문, 참고문헌을 포함하여 10쪽~12쪽으로 한다. 12쪽 초과분에 대한 인쇄료(1장당 2만원)는 필자가 부담한다.
5. **원고제출:** 원고는 E-mail로 제출한다. 원고에는 투고자의 인적사항(성명(한자), 소속, 직위, 전공분야, 주민번호(학진등재시 필요)), 연락처(우편번호, 주소, 전화, E-mail) 및 구두발표일과 발표장소, 영문제목과 영문 필자명을 기입한다.
6. **논문양식**(<논문작성예시>를 참조)

편집용지 B5 : 위15, 머리말13, 왼쪽17, 오른쪽 15, 아래 20, 꼬리말 0, 제본 7

원고작성 반드시 「한글」로 작성한다. 사진이나 그림 등은 스캔하여 그림파일로 첨부하거나 완전한 형태의 원판을 첨부한다.

글자크기 신명조, 또는 신명조 약자로 한다(줄간격 170)

논문 제목 17(진하게), 부제목 12, 필자명 12(줄 100), 메일 주소 8(줄 100), 요지 8(줄140), 주제어 8, 본문 10(각주와 참고문헌은 8, 줄140), 본문 큰제목

12(진하계)

요지/주제어 논문 1/2쪽 이내의 요지를 영어(권장) 또는 일본어로 작성하고, 해당 논문의 주제어(key words, キーワード) 3-5단어를 요지와 동일한 언어로 요지 끝부분에 명기한다(요지는 첫 장의 필자명 아래에 배치).

각 주 인용 문헌의 경우에는 본문에서 내용주로 처리하고, 내용의 설명은 각주로 제시한다.

참고문헌 필자명을 기준으로 한국어자료, 일본어 자료, 영어 자료의 순으로 배열한다. 한국어는 가나다 순, 일본어는 오십음 순, 영어는 알파벳순으로 한다. 필자명 뒤의 ()안에 연도를 기입하고, 논문 또는 단행본의 제목, 게재지 또는 출판사 순으로 배열한다.

- 7. **수정/교정:** 편집위원회는 심사소견을 바탕으로 투고자에게 원고의 수정을 권유할 수 있으며, 게재가 결정된 원고의 교정은 필자가 행한다.
- 8. **게재료:** 편집위원회의 게재 결정 통보를 받는 즉시 게재료를 온라인 입금한다.
- 9. **사이버출판:** 학회지에 게재된 모든 논문을 사이버 출판한다.
- 10. **별쇄본:** 논문이 게재된 필자에게 학술지 1부를 증정한다. 별쇄본은 필자의 신청을 받아 제작하며 비용은 필자가 부담한다.
- 11. **기타:** 1) 일련 번호(1·2, I·II, 상·중·하 등의 연속 번호)형식의 논문은 게재하지 않는다.
2) 게재(예정)증명서는 편집위원회에서 게재가 결정된 이후에만 발급이 가능하다.

<학회비 입금> 국민은행(백마점) 281901-04-150350 안평호(한국일본학회)

<게재료·심사비입금> 국민은행 933901-01-127726 이병만(한국일본학회)

<원고 보낼 곳>

- | | |
|--------------------------------|----------|
| 일본어학: minbc@inha.ac.kr | 민병찬 편집이사 |
| 일본문학(고전): heokon@kangwon.ac.kr | 허곤 편집이사 |
| 일본문학(근현대): kimhk@dgu.ac.kr | 김환기 편집이사 |
| 일본학: tohokugo@nec.go.kr | 고선규 편집이사 |

日本學報 논문 작성 요령

【편집용지】 <B5용지> 위15, 머리말13, 왼쪽17, 오른쪽 15, 아래 20, 꼬리말 0, 제본 7

【논문제목】 상대 일본어의 음절 구조 (신명조17, 진하게, 가운데)

** 1줄 ** (글자크기 10, 줄간격 170)

【학회비 납부여부】 (글자크기 10, 줄간격 170)

【필자명】 金基童(신명조 12, 줄간격 100)

【e-mail address】 e-mail address(신명조 8, 줄간격 100)

< 요 지 >

작성언어 : 영어(권장) 또는 일본어
분 량 : 논문 1면의 1/2쪽 이내
글자크기 : 신명조 또는 신명조약자 8, 줄간격 140

주제어: 검색의 편의를 위해 주제어(key word)를 명시(요지와 동일 언어로 3-5단어) (신명조 8, 진하게)

** 2줄 **

【큰제목】 1. 연구 목적 및 방법 (신명조 12, 진하게, 줄간격 170%, 문단아래 10pt)

【본 문】 이 논문은 상대 일본어의..... (신명조 10, 줄간격 170%)

** 2줄 **

2. 상대 일본어의 특징

- (작은 제목과 본문사이는 떼지 않음)
-
-

【인 용 문】 아날로그적인 것과..... (글자모양 : 신명조 9, 줄간격 170%)

(문단모양 : 왼쪽 30pt, 들여쓰기 안함)

【각 주】 _____

1) 이에 대해 有坂秀世(1957)은 다음과 같이 논하고 있다.(신명조 8, 줄간격 140%)

(문단모양 : 왼쪽 10pt, 내어쓰기 10pt)

※ 각주와 인용문 작성시 스페이스바로 밀어서 열을 맞추지 마시고 반드시 문단모양의 왼쪽 여백과 내어쓰기를 이용해서 맞추기 바랍니다.

5. 맺음말

이 논문에서는.....

**** 2줄 ****

【참고문헌】 ◀ 참고문헌 ▶ (신명조 12, 줄간격 170%, 문단아래 10pt, 들여쓰기 20pt)

허웅(1985) 『국어음운학』, 샘문화사. p.131-133 (신명조 8, 줄간격 140%, 내어쓰기 50pt)

井上和子(1976) 『変形文法と日本語』, 大修館書店. p.23-26

J. Milroy(1992) *Linguistic variation and change*, Basil Blackwell Ltd. p.45-49

- * <필자명(연도) 논문명(또는 저서명), 게재지 권 호, 발행처>의 순서로 배열
- * 문헌 배열: 국문, 일문, 영문 순으로 하며 필자명을 기준으로 각각 가나다, 오십음, 알파벳 순.
- * 인용 또는 참고한 쪽수를 명기

【필자인적사항】

근 무 처 :	직 위:
주민등록번호 :	
주 소 : <우편번호> (※교정지 받으실 주소를 명기해 주십시오)	
전화번호 :	H.P :
E-mail :	한자 필자명:
영문 제목:	영문 필자명:
발 표 일 :	발표장소 :
투 고 일 :	

- * 논문심사, 필자와의 연락 등은 E-mail과 우편을 통해 이루어집니다. E-mail과 주소를 명기해 주시기 바랍니다.
- * 학술진흥재단에 파일 업로드로 필자의 주민번호가 필요하니, 반드시 **주민등록번호**를 명기해 주시기 바랍니다.

한국일본학회 연구윤리규정

제1장 총 칙

제1조(목적) 본 규정은 한국일본학회(이하 “학회”라 한다)의 연구윤리 및 진실성을 확립하여 연구부정행위를 사전에 예방하며, 연구부정행위 발생 시 공정하고 체계적인 진실성 검증을 위한 연구윤리위원회(이하 “위원회”라 한다)의 설치 및 운영에 관한 사항을 규정함을 목적으로 한다.

제2조(적용대상) 본 규정은 본 학회의 회원으로서 연구 활동과 직·간접적으로 관련 있는 모든 연구자에 적용하는 것을 원칙으로 한다.

제3조(적용범위) 본 규정의 적용범위는 인문사회분야의 연구윤리 확립 및 연구진실성 검증과 관련된 제반 사항으로 한다.

제4조(용어의 정의)

① 연구부정행위(이하 “부정행위”라 한다)라 함은 연구의 제안, 연구의 수행, 연구결과 의 보고 및 발표 등에서 행하여진 위조·변조·표절·부당한 논문저자 표시 행위 등을 말하며 다음 각 호와 같다.

1. “위조”는 존재하지 않는 데이터 또는 연구결과 등을 허위로 만들어 내는 행위를 말한다.
 2. “변조”는 연구 재료·장비·과정 등을 인위적으로 조작하거나 데이터를 임의로 변형·삭제함으로써 연구 내용 또는 결과를 왜곡하는 행위를 말한다.
 3. “표절”이라 함은 타인의 아이디어, 연구내용·결과 등을 정당한 승인 또는 인용 없이 도용하는 행위를 말한다.
 4. 본인 또는 타인의 부정행위의 의혹에 대한 조사를 고의로 방해하거나 제보자에게 위해를 가하는 행위.
 5. 타인에게 상기의 부정행위를 행할 것을 제안·강요하거나 협박하는 행위.
 6. 인문사회분야에서 통상적으로 용인되는 범위를 심각하게 벗어난 행위 등.
- ② “제보자”라 함은 부정행위를 인지한 사실 또는 관련 증거를 한국일본학회 또는 연구 지원기관에 알린 자를 말한다.
- ③ “피조사자”라 함은 제보 또는 한국일본학회의 인지에 의하여 부정행위의 조사 대상

이 된 자, 조사 수행과정에서 부정행위에 가담한 것으로 추정되어 조사의 대상이 된 자를 말하며 조사과정에서의 참고인이나 증인은 이에 포함 되지 아니한다.

④ “예비조사”라 함은 부정행위의 혐의에 대하여 공식적으로 조사할 필요가 있는지 여부를 결정하기 위한 절차를 말한다.

⑤ “본조사”라 함은 부정행위의 혐의에 대한 사실 여부를 입증하기 위한 절차를 말한다.

⑥ “판정”이라 함은 조사결과를 확정하고 이를 제보자와 피조사자에게 문서로서 통보하는 절차를 말한다.

제2장 위원회의 설치 및 운영

제5조(구성)

① 위원회는 편집위원장, 부회장, 총무이사, 학술이사, 편집이사 및 3인 이상의 관련분야 편집위원을 포함하여 15인 이내로 구성하며, 위원장 및 위원은 학회장이 위촉한다.

② 위원장 및 위원의 임기는 2년으로 하되 연임할 수 있다.

제6조(위원장) 위원장은 위원회를 대표하며, 회의를 주재한다.

제7조(간사) 위원회에는 간사 1인을 두어 제반 행정사항을 처리할 수 있다.

제8조(기능) 위원회는 다음 각 호의 사항을 심의·의결한다.

1. 연구윤리·진실성 관련 제도의 수립 및 운영에 관한 사항
2. 연구윤리규정의 제·개정에 관한 사항
3. 부정행위 제보 접수 및 조사에 관한 사항
4. 본조사 착수여부 및 조사결과에의 판정, 승인 및 재심의를 관한 사항
5. 제보자 및 피조사자 보호에 관한 사항
6. 연구진실성 검증결과의 처리 및 후속조치에 관한 사항
7. 기타 위원장이 부의하는 사항

제9조(회의) ① 위원장은 위원회의 회의를 소집하고 그 의장이 된다.

② 회의는 재적위원 과반수 출석과 출석위원 3분의 2이상의 찬성으로 의결한다. 단 위임장은 위원회의 성립요건인 출석으로는 인정하되 의결권은 부여하지 않는다.

③ 회의는 비공개를 원칙으로 하되, 필요한 경우 위원이 아닌 자를 참석시켜 의견을 청취할 수 있다.

제3장 제보 및 접수

제10조(부정행위 제보 및 접수) ① 제보자는 학회에 구술·서면·전화·전자우편 등 가능한 모든 방법을 통하여 실명으로 제보하는 것을 원칙으로 한다.

② 증거자료는 반드시 서면으로 제출하여야 하며, 익명으로 제보하고자 할 경우 서면 또는 전자우편으로 연구과제명, 논문명 및 구체적인 부정행위의 자료를 제출하여야 한다.

③ 제보내용이 허위인 줄 알았거나 알 수 있었음에도 불구하고, 이를 신고한 제보자는 보호대상에 포함되지 않는다.

④ 제보의 접수일로부터 만7년 이전의 부정행위에 대해서는 이를 접수하였더라도 처리하지 않음을 원칙으로 한다.

제11조(제보자와 피조사자의 권리보호·비밀엄수) ① 어떠한 경우에도 제보자의 신원을 직·간접적으로 노출시켜서는 안 되며, 제보자의 성명은 반드시 필요한 경우가 아니면 제보자 보호차원에서 조사결과 보고서에 포함하지 아니한다.

② 제보자가 부정행위 제보를 이유로 신분상 불이익, 근로조건상의 차별, 부당한 압력 또는 위해 등을 받을 경우에는 그 피해를 원상회복하거나 제보자가 필요로 하는 조치를 취하여야 한다.

③ 부정행위 여부에 대한 검증이 완료될 때까지 피조사자의 명예나 권리가 침해되지 않도록 주의하여야 하며, 부정행위와 무관한 것으로 판명된 피조사자의 명예회복을 위해 노력하여야 한다.

④ 제보·조사·심의·의결 및 건의조치 등 조사와 관련된 일체의 사항은 비밀로 하며, 조사에 직·간접적으로 참여한 자는 직무수행과정에서 취득한 모든 정보에 대하여 누설하여서는 안 된다. 다만, 합당한 공개의 필요성이 있는 경우 위원회의 의결을 거쳐 공개할 수 있다.

제12조(이의제기 및 변론의 권리 보장) 조사위원회는 제보자와 피조사자에게 의견진술, 이의제기 및 변론의 권리와 기회를 동등하게 보장하여야 하며 관련절차를 사전에 알려주어야 한다.

제4장 예비조사

제13조(예비조사의 기간 및 방법) ① 예비조사는 제보접수일로부터 10일 이내에 착수하고, 조사시작일로부터 30일 이내에 완료한다.

② 예비조사에서는 다음 각 호의 사항을 검토한다.

1. 제보내용이 제4조 제1항의 부정행위에 해당하는지 여부
2. 제보내용이 구체성과 명확성을 갖추어 본조사를 실시할 필요성과 실익이 있는지 여부
3. 제보일이 시효기산일로부터 7년을 경과하였는지의 여부

제14조(예비조사 결과의 보고) ① 예비조사 결과는 위원회의 의결을 거친 후 10일 이내에 제보자에게 문서로 통보하여야 한다. 다만, 제보자가 익명인 경우에는 예외로 한다.

② 예비조사 결과보고서에는 다음 각 호의 내용이 포함되어야 한다.

1. 제보내용
2. 조사의 대상이 된 부정행위 의혹 및 관련 연구과제
3. 본조사 실시 여부 및 판단의 근거
4. 기타 관련 증거자료

제5장 본 조사

제15조(본조사의 기간) ① 본조사는 위원회의 본조사 실시 결정 후 20일 이내에 착수하여야 한다.

② 본조사는 시작일로부터 60일 이내에 완료한다.

③ 제2항의 기간 내에 조사를 완료할 수 없다고 판단할 경우 1회에 한하여 기간연장요청을 할 수 있다.

제16조(출석·자료제출 요구) ① 위원회는 제보자·피조사자·증인 및 참고인에 대하여 진술을 위한 출석을 요구할 수 있으며, 이 경우 해당자는 성실히 조사에 응하여야 한다.

② 위원회는 피조사자에게 관련자료 제출을 요구할 수 있으며, 피조사자는 위원회가 요구하는 자료제출에 대해서는 무한책임을 갖고 임해야 한다. 조사에 성실하게 협조하지 않으면 학회 차원에서의 징계는 물론 해당기관(대학)에도 관련 자료의 일체를 이양하여 강력한 징계를 요청할 수 있다.

제17조(본조사 결과보고서의 제출) ① 위원회는 이의제기 및 변론내용을 토대로 본조사 결과보고서(이하 “최종보고서”라 한다)를 작성한다.

② 최종보고서에는 다음 각 호의 사항이 포함되어야 한다.

1. 제보내용
2. 조사의 대상이 된 부정행위 혐의 및 관련 연구과제
3. 해당 연구과제에서의 피조사자의 역할과 혐의의 사실 여부
4. 관련 증거 및 증인
5. 조사결과
6. 위원 명단
7. 기타 보고서 작성에 필요한 사항

제18조(판정) ① 위원회는 이의제기 또는 변론의 내용을 토대로 조사내용 및 결과를 확정한다.

② 위원회는 조사결과를 제보자와 피조사자에게 통보함과 동시에 그 제재 및 징계내용에 대해서도 결정한다.

제19조(이의신청·재심의) 제보자 또는 피조사자가 판정에 불복할 경우에는 통보를 받은 날로부터 30일 이내에 위원회에 그 이유를 서면으로 재심의를 요청할 수 있다. 단 재심이의 결정은 위원회의 전원합의와 학회장의 추인이 있을 경우에 한한다.

제6장 검증 이후의 조치

제20조(소속대학등에 대한 보고) 최종보고서는 소속대학기관 등의 요청이 있을 경우 학회장의 승인 하에 조사와 관련된 자료를 제출할 수 있다.

제21조(부정행위에 대한 징계) ① 징계 및 제재조치가 결정되면 위원장은 그 사실을 해당 연구자에게 서면으로 통지하여야 한다.

② 위원회는 부정행위 관련자에 대해 다음 각 호의 징계를 할 수 있다.

1. 학회 견책 서한 발송
2. 해당 연구결과물의 학회지 게재에 대한 취소
3. 3년간 투고자격 제한
4. 제명
5. 소속기관에의 통보
6. 법률기관에의 고발 등

③ 위원회는 조사결과를 학회의 기관지를 통해 전 회원에게 공지한다.

제22조(기록의 보관·공개) ① 예비조사 및 본조사와 관련된 기록은 위원회에서 3년

간 보관한다.

② 본조사의 최종보고서는 판정이 끝난 이후에 공개할 수 있다. 다만, 제보자·조사위원·증인·참고인·자문에 참여한 자의 명단 등 신원과 관련된 정보가 당사자에게 불이익을 줄 가능성이 있을 경우에는 공개하지 않을 수 있다.

제7장 보 칙

제23조(경비) 위원회 운영 및 조사에 필요한 예산은 별도로 책정하여 지급할 수 있다.

제24조(준용) 연구진실성 검증과 관련하여 이 규정에서 정하지 않은 사항은 관련법규를 준용한다.

부 칙

이 규정은 2009년 6월 1일부터 시행한다.

編輯委員會

委員長: 李成圭(仁荷大)

編輯理事: 高選圭(中央選舉管理委員會) 金煥基(東國大)

閔丙燦(仁荷大) 許坤(江原大)

編輯委員

具見書(平澤大)	權赫建(東義大)	金忠永(高麗大)	金弼東(世明大)
金漢植(韓國外大)	金煥基(東國大)	南相虎(京畿大)	閔丙燦(仁荷大)
朴裕河(世宗大)	宋永彬(梨花女大)	安平鎬(誠信女大)	李康民(漢陽大)
李德培(全南大)	李在聖(中央大)	李鎮遠(서울市立大)	任苔均(聖潔大)
鄭炳浩(高麗大)	崔官(高麗大)	湯澤質幸(京都女大)	

日本學報 第84輯

ISSN 1225-1453

2010年 8月 25日 印刷

2010年 8月 31日 發行

發行 韓國日本學會

135-943 서울市 江南區 驛三洞 828-28 범추빌딩 11층 韓國日本學會事務室

TEL(02)568-4662

FAX (02)568-4723

<http://www.kaja.or.kr>

E-mail: jimu@kaja.or.kr

印刷 第一文化社

130-860 서울特別市 東大門區 제기 2洞 137-423

TEL(02)921-7221

FAX (02)924-2395

※ 이 학회지의 출판비 일부는 2010년도 한국학술진흥재단의 지원을 받았음.